書籍は永遠の記念です
から、どうぞ丁寧に取
扱つて下さい

著者より

アマゾン邦人発展史

◎謹んで**アマゾン**開拓犠牲者の靈に捧ぐ

自序

アマゾンに邦人が進出したのは何時頃からか？　そしてどんな經路を辿つて移動したか？　非常に興味ある問題であつた。戰後渡伯の日本移民は、約一千家族に及んだが、その戰後入植した邦人の定着、分散、移動經路、産業發達というようなものが、まとまつて出版されるべきであつだが、ことアマゾン日本移民に關しては十年を經た今日に至るまで、何等資料となるべき出版物がなかつた。外務省・農林省・海外移住事業團などで、十年間の調書を印刷して發行すると、非常に便宜だと思つた。つまらん者が視察する補助金で、結構調査費や、出版費は賄えるのである。著者は文筆家の末席をけがしている野人で、最も微力な者であるが、六十余年前からのアマゾン日本移民の足跡を尋ねて、資料をまとめておくことは有意義だと思つて著書の出版に手を染めた。またついでに、戰後派の入植模樣、或いは變遷極りなき入植地の盛衰を記錄に殘しておくことも必要と思つた。全アマゾン地域を踏査して、一年近くの旅行は困難であつた。食事の不規則、旅行日程がくめず、無理して晝夜兼行の努力をつづけ、全く疲勞の極に達した。それでも到頭全旅程を終えて歸聖出來た。アカラ河で船から落ちて、肋骨・腰骨などを折つて、二ヵ月も寢た事があつたりその打撲傷の內出血が六ヵ月後にオ血となり、かたまつて大腦をおかし、死の宣告をうけたが、大手術をして漸く一命を拾づたこともあつた。六十路になつて、なかなか死ななかつたのは、責任を全うしたいという一念が、全身に充滿てしいたからで、總ゆる災難を撥返し、到頭出版の運びに至つた。なんといつても「全アマゾン邦人開拓史」などと云うような著書は、それ自体實地に踏査しければならぬ困難な仕事であつた。誰れでも出版しようと思つてもなかなか困難だから、他人は出版出來ないだろうと思つたそこで着手した以上その困難を覺悟で最後まで頑張つた。

あれも書きたい、これも書きたいと多くの資料があつたが、色々な事情で採錄出來なかつた。今後またの機會をみて、アマゾンに關する著書を次から次えと世に贈りたいと思つている。印刷・校正・製本を終えて出版するまで約一ヵ年かかつたが、アマゾン在住邦人がこぞつて激勵してくれた事は、感謝に堪えなかつた。このつたない著書が、なにかの參考になれば、著者の微衷は酬いられる譯で、幸甚の至りである。

一九六五年五月

サンパウロ市にて　著　者　識す

アマゾン河流域全図
0 200 400km
日本人入植地
大西洋
ヴェネズエラ
コロンビア
英領ギアナ
スリナム
仏領ギアナ
アマパー直轄領
パカライマ山脈
アカライ山脈
ツムクマケ山脈
リオブランコ直轄領
ジョージタウン
ロックストン
パラマリボ
カイエンヌ
アマパー
マタピー
アマゾン河口
赤道
マカパー
マラジョー島
ベレン
パラ河
サンルイス
ロザリオ
ボアヴィスタ
タイマー
ウアウペース
ネグロ河
トマール
モウラ
ジャプラ河
ソロモンエス河
マナウス
イタコアチアーラ
ウルカラ
パリンチンス
サンタレン
フォードランジア
モンテアレグレ
ムラタ
マウエース
ボルバ
マデイラ河
タパジョス河
シングー河
パラ州
ブラジル
アラガイヤ河
トカンチンス河
マラニヨーン州
ピアウイ州
ゴヤー
バナナル島
マット・グローン州
ロンドーニア直轄領
グワジャラー
アブニアン
ポルトベーリョ
アマゾナス州
プルア河
プルス河
アクレ直轄領
リオブランコ
ペルー
ベンジャミンコンスタント
マナカプルー
ベーラヴィスター
トメアス河
カピン河
グアマ河
ブラガンサ
マラバ

第四章　戰後邦人の産業飛躍とアマゾン定着時代

戰後のアマゾン移民變遷……………六八

第五章　アマゾン流域在住邦人名簿……………八三

目次

第六章　大アマゾン產業開發に健斗する人々

黄麻栽培の功勞者

アマゾーナス産業研究所の先覺者

元アマゾナス産業研究所長
上塚 司 氏

元アマゾナス産業研究所支配人
辻 小太郎 氏

ジュート尾山種發見の尾山良太氏

現存せるアマゾン通二人

伯日辭典の著者
野田 良治氏

ベレーン總領事館勤務 生島 重一氏

胡椒栽培の恩人

鐘紡ＫＫ社長　故武藤山治氏

トメアスー植民地の。先覺者

南米拓殖ＫＫ社長　故福原八郎氏

マレー半島から苗木を移植した臼井牧之助氏

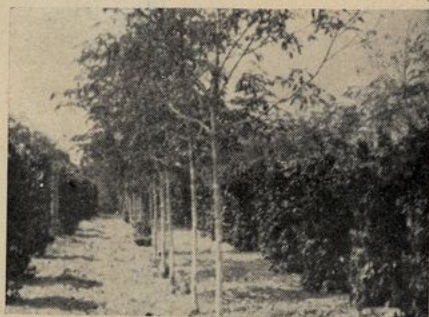
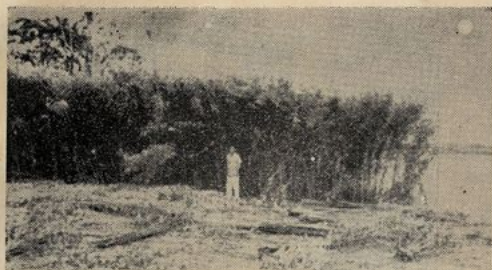
故加藤友治氏

アマゾンで初めて**ピメンタ**を商品化した先達

故齋藤円治氏

黄麻（ジュータ）

伸びのよいジュータ
パレンチンス木村一則農場

ゴム樹とピメンタ樹

ピメンタの間にゴム樹を植えた理想園
ロンドニア直轄州田邊農場

パラー栗

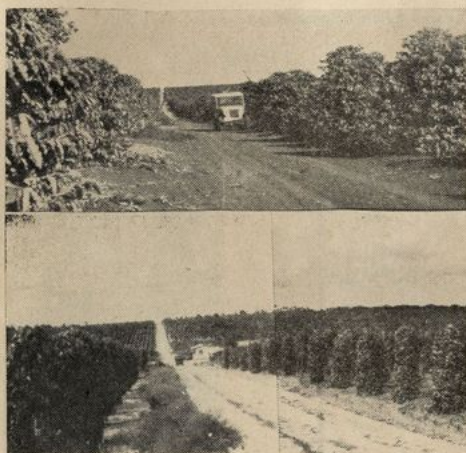
（下）カスタニヤの大木とカスタニヤの實（栗）を撰別する女性

カカオ樹

↑上はアマゾンの特産物カカオ（チヨコレート）の原料

アマゾンの新農産物・胡椒

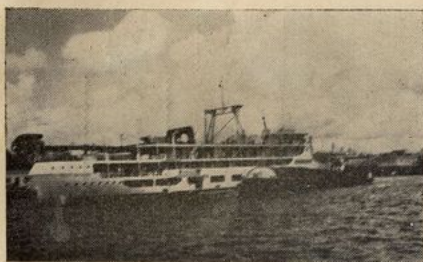
上は北パラナ・生田農場の珈琲園……下はベレーン郊外辻農場の胡椒園

よく似た珈琲園とピメンタ園

→右はトメアスー植民地の模範ピメンタ園（山田義一農場）

下は美人揃いの北伯女性が胡椒の採集（滝田余慶農場）↓

←左は一株で九キロ採集された胡椒樹

アマゾン大流の交通機關

一番便利なガイオーラ船（五百トン〜三千トン）

原始的な貨物運送船

ハンモックが船上寢室（アウローラ號）

アウローラ號（佐藤行夫氏所有）

右は空のタクシーと著者

アマゾンの珈琲樹

太陽の直射がひどいので大樹の下に栽培するコーヒー樹
アクレ州キナリ植民地
菊地農場

↓図アマゾンの人々が好む
アサイ樹

下は入植當初の堀立小屋
ロンドニヤ直轄州服部農場

ゴム園

上は十年生のゴム樹
アマツパ直轄州窪田農場

ベレーン市海岸大通り（ベレーン港前廣場）

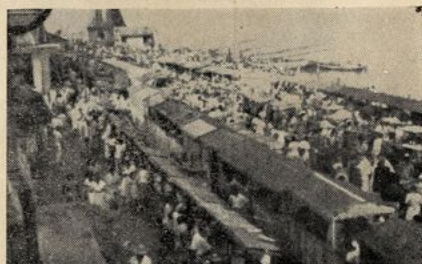
ベレーン市郊外グアマ河を望む

ベレーン郊外のジャングル

ベレーン港の遠望

ベレーン郊外グアマ河船着場

赤道直下の都　ベレーン市

左の角が公設市場、その前が魚市場、次が野菜市場

→ ベレーン市の朝市場

← 世界一のマンガの並樹　レプブリツカ廣場

→ ベレーン市の中心街　ヴアルガス大通り

第一章　おや？アマゾンはこんな処か

アマゾン河發見と著者の感想

本著出版のため今回アマゾン全地域を八カ月も渉猟した。奥地に進んで行く度に「もう少し奥まで」と慾を出して往くので到々、旅程は八カ月になつたが、サンパウロ市の友人は勿論、大マゾン大江の玄關都市ベレーン市の友人も「池田さんは何處かで災難に遭つて死んだだろう」と噂が飛んでいた。實際長い旅であつたが、本當にアマゾンを識るには、少くとも四・五年間の旅をしなくでは本當でなない事を、つくづく感じた。半年や一年の旅では素通りで、吉原のオイランをかうのに、座敷に上らないで玄關先で女達をヒヤカシて歩るいたようなもので、なんとなくすつきりしないものがあり、心残りがした。まだ調査したい事が山々あつたが、出版が遅れるので、止むなく旅行を打ちきつた。それでも奥アマゾンでは、ボリビア・ペルー・ベネズエラ・英佛蘭ギアナ等の、國境附近まで踏査したから、概略は掴めた譯である。それにアマゾンは三十余年前から諸々の書籍の上で研究しているし、十年前に約四カ月間も旅行した經驗があつたので、今回はその豫備知識をフルに利用發揮して幸だつた。

アマゾンの原住民

アマゾンの原住民インジオは八民族に區別すべしとロケツト・ピント教授（元リオ國立博物館長でアマゾン研究の第一人者）は主張している。南米蠻界通の權威フオン・ハツセルはその八民族をまた百十四種族に細別している。邦人アマゾン通の權威野田良治翁もその著書「アマゾニア」一九二九年版、で同樣に分類し、ベレーン日本總領事館に勤務している邦人アマゾン通の生島重一も、その著書「アマゾンのインジオ」＝一九六四年版に＝大約百余種族に別けて、風習・言語などを紹介している。これ等多くのインジオ達が、どれもこれも我々日本人のようで蒙古族に似ているのは、面白い限りである。ボリビアの國境では、ブラジル人は僕のことを「ボリビア人」かと問いかけた。「そうだ俺はボリビア人だ」と答えると懐かしげにボリビア土人語で話しかけられた。なるほど僕の顔はアマゾン原住民インジオによく似ているのだなーと自分ながら、おかしくなつた。ベネズエラの國境でもやはりそうであつた。これで僕はラテン・アメリカを旅行するにはインジアンで押しまくつても、通ることの自信を得たが、それ程アマゾン・インジオは東洋民族に似ている。

人類学とか考古学上よりみれば、氷河時代前に、ベーリン海峡が陸續づきであつた頃、蒙古のチベツト高原やヒマラヤ山脈からコーカシア人種が、遊牧の旅を續け、集團流浪して來たも

ゴムで開けた都マナウス市

河口から一千八百粁、一万トンの船舶が横着けになり、リバーブル港との定期航路がある

筏の上に家をたてどん〱増えていく水の都

一九〇二年、巨費一千万ドルを投資、ゴム景氣で色どつたアマゾナス劇場

前進不可能となつた。そこでゴンサロはオレヤに六十名の部下を引率せしめ、食糧獲得のため、前進地域を偵察せしめた。このオレヤナは十二日間で歸隊する約束を破つて、遂にゴンサロの本隊を棄てて、オボ河を下り、アマゾン本流に出た。殘された本隊はオレヤナが歸らぬので不安がつのつたが、オレヤナに反抗して歸還した**フエルナン・ヴルガス**の言葉で一切が解り、遂に本隊は命からがらキトに引揚げた。この遠征隊の引揚は全滅にひんし悲惨であつた。

オレヤナのアマゾン縦断は言語に絶する大困難と斗いつつ、翌年**一五四二**年八月二十六日（天文十一年）に東海岸の河口に達した。實に一年六ヵ月振りである。カノア（丸木舟）を造つたり、木の實を集めたり、大江に出てはガイオーラ（イカダ船）を造つたり、總ゆる困難に打克つた譯である。そしてアマゾン河口から太平洋を横ぎり、翌**一九四三**年五月スペイン王カルロス第五世に拜謁し、その功績によつて「アデランタ」の名譽稱號を賜つた。アメリカ發見のコロンブス程の冒險ではなくても、何年かかつて大西洋に出られるか、解らない不安な旅を、人跡未踏の密林で過ごしたと云うから、當時のスペイン人は一般に獰猛であつたと云える。時には沿岸のジャングルに迷つたり、糧食獲捕に十五日も二十日も、かゝつたこともあろうし、マラリヤ病や黄熱病で水葬した者も續出しただろう。然しこのオレヤナだけば征服慾旺盛なだけでなく、頑健無双の体格の持主でもあつた譯である。そしてオレヤナは、成功の曉にもう一度アマゾンを下流から溯航し、征服した領土からの收入を自分のものにしようと野心を起し、兵士二百人、土人教化の宣教師八名、馬百頭を四隻の船にのせ、「サン・ルーカル港」を**一五四五**年五月十一日出帆した。然し今度の旅は大西洋上で暴風雨に遭い、カナリヤ列島で三ヵ月、カーボ・ベルデに二ヵ月を碇泊し、船舶の修理などで遂にアマゾン河口についたのは、十二月二十日であつた。大西洋横斷に七ヵ月と九日もかつた。そして二隻は海の藻屑となつた。アマゾン河口から溯航して間もなく、他の一隻も破損して水が浸入したので、それも棄てて旗艦である帆船「グワダルーペ」號一隻で進んだ。處が間もなく糧食が缺乏し、五十七名は飢饑のため絶命した。筆者が思うに糧食缺乏だけでなく、マラリヤ病猛毒のため軀が弱していたのも死因だつただろう。四百粁進んで絶對絶命の後に、オレヤナもモンテ・アレグレ河畔で。**一五四六**年十一月初旬歿した。モンテ・アレグレはそれから三百年後にスペイン人が、集團移住地を計画したが、殆んどがマラリヤで全滅し、それの子孫は皆土人化して現在に及んでいる。また戰前一九三〇年には南米拓植株式會社が、邦人移住地を計画し、四十万ヘクタールを日本人植民地に造成したが、計画途中第二次大戰勃發で放棄した。戰後も昭和二十九年から五回も續いて百四十家族の邦人が入植したが、色々の事情で（詳しくは戰後移住者の項をみよ）百家族も脱植した處であり、どうもアマゾン發見者オレヤナの靈が、ムク〳〵と災しているようだ。然しオレヤナの最後は悲惨であつたが、これによつてアマゾン河を奥へ進むと、必ず大西洋から太平洋に近路がある事が解つて、世の多くの探險家を奮起させる原因にもなつた。著者はオレヤナから四百二十年も後に、アマゾンを八ヵ月間も跋渉したが、その旅行の困難に驚き、實際にオレヤナの初探險の偉犬なのに敬服せざるを得なかつた。

そしてオレヤナはこの旅行の途中、**一九四二**年七月下旬、大

日本人にそつくりの土人娘達

のがアマゾンのインジオと見るべきであろう。「頭蓋骨や幼兒のでん部に紫斑のある點」などから推理して、モンゴロイド系統である。

一説には西暦紀元前**九六〇**年頃前に、ソロモン王が送り出したフェキニア人が分散して今日に至つたと傳えられるアマゾン大江の中流ソリモンエス河は**ソロモン**王の名に因んでいるしイタコチアラ市の後方の巨岩に、フェキニア語で書かれている文字などが參考にあげられているが、これなどは俗説であると考える。

グワテマラとユカタンに起つた「**ヤマ**文化」メキシコに起つた「**アジテカス**文化」コロンビアに起きた「**チヅチヤ**文化」そして世界的に有名なペルー・ボリビア・エクアドルに輝やいた「**インガ**帝國文化」の遺跡に發掘される土器類をみても、確に東洋民族であると思う。まあこんな高尚な学説は興味がないので人類学者におまかせすることだ。

アマゾンの發見者**オレヤナ**の苦心

ここでこの大アマゾンを旅行して驚ろいたことは、大アマゾンを最初に發見し、一年六カ月かゝつて上流から下流に縦斷した**フランシスコ・オレヤナ**の冒險心である。そしてこのオレヤナに續いた數百人の著名な探險家の努力も併行に賞讃したい。それから黄金や肉桂樹などを欲しさに奥地に潜入し、幾十万人のインジオを惨殺したスペイン・ポルトガル人の暴擧は啞然たるものがあるが、この惨虐行爲に對し、俄然と起上り、インジオ教化保護に盡したジェズイット派の神父・宣教師の崇高な行動には、自然と頭が下つた。

アマゾン河を識る上からも、發見者オレヤナの旅行を一寸述べてみよう。僅か五十人足らずの手兵を率いてインカ帝國を滅した**フランシスコ・ピサルロ**は、それだけで滿足せず、貪欲な眼を光らかし、南米全体に觸手をのばしていた。その頃に彼の弟**ゴンサロ・ピサルロ**はキトの守護職であつたが、アマゾン奥に「エルドラド」の他に肉桂までもあると土人に噂をきき、遂にスペイン人二百余名、それに牢獄につながれたインジオ四千人を連れ出し、乗馬用二百頭、食料擔荷用のヤマ獣二千頭、猟犬二千匹、それに武器數千と云う一大遠征隊を組織し、前進司令官にオレヤナを任命して**一五四一**年二月下旬（今から四二四年前で天文十年）キトを出發した。文化の開けた今日でも、奥アマゾンの旅行はカラパナ（毒蚊）ムイイン（吸血ダニ）などが猛襲して困難であるが、四百二十年昔しのことであるから、黄熱病やマリリヤ病は猖獗を極め醒惨だつただろう。

私はいまでもオレヤナの當時の旅行の困難を想像するが、このピサルロの遠征隊は七十日目に、肉柱も多く見當らず、先住土人が各地で敵對し、中には糧食物品を掠奪、そして進むほど人煙は稀で、前途に不安がつのつた。そしてナホ河の沿岸オマグア土人國に達した後、約三百五十粁進んだ處で、糧食缺乏、

惨虐極まる男で、グァマ地方やカメタ地方で數千人のインジオを惨殺したが、この暴行に神父や宣教師は猛烈に反對し、葡國王にまでインジオ教化を嘆願している。解りやすく云えば、アマゾン發見から、今日まで四百年間の歴史は、アマゾンを征服した軍人のインジオ惨殺と、カトリツク教神父・宣教師のインジオ教化の對立の戰であるとも云える。

　アマゾンを最初遡航したテッシエイラに、道案内人として随行した神父アルディエダは、もとをただせば一六三四年頃ペルーに進入したファン・パラシオの指揮せる一小軍隊に伴いエンカベヤ地域のインジオ族教化に盡していたが、インジオの激昂反乱で本隊は全滅、宣教師アルディエタとフェリダはこの危難をのがれて、教化されたインジオ六名を道案内に連れ、大江を下り千辛万苦を經て河口のクルパー島の葡人守備隊まで辿つたこんな宣教師の命がけの記録は「アマゾン・インジオ教化四百年史」を繙くと、ざらにある事で、怖らく數千名の神父・宣教師が尊い命を、インジオ教化に捧げていることと思う。今日に想うことは我々日本移民が命がけで建設した邦人移住地に「死後の靈を慰めてあげましょう」と、レイ／＼しく乗込み物欲しさにオサイセンを乞う生グサ坊主の浅ましい心情である。邦人僧侶も少しはカトリック教神父を見習い、邦人植民地建設當初から入植して艱難辛苦を植民者と共にするだけの眞面目さを持つてもらいたいものである。

アマゾンは水の國、動・物植物の國

　それからアマゾン河の旅をして、再度驚吃したのは、水の都であり、密林の神秘境であり、蝶、猿、鸚鵡（オウム）蘭、材木などの豊富な國であると思つた。アマゾン河は、ペルー國アンデス山脈中の**ラウリ・コチア**湖に源を發し、**ウカリヤ**河を併せ、河口まで實に六・二〇〇粁（三、八五二哩）で、北海道の北端稚内市からシンガポールまでの距離以上である。しかも、その支流には

1 マディラ河　三、二四〇粁
2 ネグロ河　三、〇〇〇粁
3 トツカンチン河　三、〇〇〇粁
4 ジュルア河　二、八四〇粁
5 ジャプラー河　二、八〇〇粁
6 プルスー河　二、七八〇粁
7 タバショス河　一、九九五粁
8 イサー河　一、九七〇粁
9 シングー河　一、八八〇粁
10 ジャワリ河　一、四二〇粁
11 ジュタイ河　一、二〇〇粁
12 テツフエ河　一、二〇〇粁
13 ブランコ河　一、二〇〇粁
14 アリノス河　一、二〇〇粁

（参考鹿兒島～東京間一、二〇〇粁）

があり、その支流の支流で信濃川や利根川位のものは、百に余り、二、三百粁の曾孫支流は河と云うには余りに短か過ぎて數きれない。アマゾンの奥アクレ直轄州に、一九五八年に入植した邦人移住者が、ベレーン市から入植地のリオ・ブランコ港まで六十日かゝつたと云う笑えぬ話しもあるが、横濱からベレーン港まで三十日かゝるのに、アマゾン地域内にかかわらず、そ

江左岸のニヤムンダー河口で、長髪屈强な女武者（アマゾン）が矢を雨の如く射つて猛襲し、漸く命拾いした經驗から、この大河をアマゾン河と呼んだ。アマゾン河の名は發見者オレヤナの名と共に、永遠に消えない。アマゾンとは女武者のイベリヤ語である。

アマゾン探險と神父の土人敎化

オレヤナのアマゾン發見が、當時のヨウロツパに傳わるや、**ペドロ・デ・ウルスーア**將軍は**一五五八**年に探險に出かけたが部下**グスマン**及び**アギルレ**に大江マチブアロで暗殺され、續てグスマンはアギルレに謀殺され、アギルレも、後年ベネズエラで部下に銃殺された。これをきつかけに、今日まで數百人の著名な探險家がアマゾンを踏査したが、**一五九五**年に「ギヤナ帝國發見記」を英國で著述した英國人**ウオータ・ラレー**は有名である。それから四十二年後の一六三七年十月に葡人**ペードロ・テツシエーラ**は、宣教師**ドミンゴス、デ、フリエバ**と**クリストパールデアクニヤ**の兩人を道案内に探險、ベレーンからペルーに向つてアマゾンを溯航した最初の榮冠を得て「アマゾン大河の新發見及びペトロ・テイシエーラの上流旅行記」を僧アクニヤに口述させ、**一六四一**年スペイン王に贈つた。この探險も大がかりで葡人六十名、インジオ千二百人、小船四十七隻で、河ロクルパー島を十月十七日出帆して、一カ年後の十月二十日ペルーのキトに着いた。これより先き**一九一六**年（元和二年）には**カストロ・ブランコ**に依つて現在の**ベレーン**市が創設された奥アマゾンの**マナオス**市が創設されたのは**一六六九**年で、オレアナのアマゾン發見から百二十七年目である。だからこの百年間にもう探險隊の派遣時代でなくなり、領土占征の武力時代に移つた事になる。

アマゾン探險の詳しい事は考古学者や歷史学者に讓るとして、ここに一言しておきたい事は日本の佛教と違つて、カトリツク教の神父や宣教師が、生命の危險にさらされながら、土人の敎化に盡したことだ。我々俗人は財產慾とか名譽慾にかられて働くが、彼等神父達は、そんな物欲は皆無で、未開の蠻人に神の道を說き、文化のありがたさを教えこんだ譯である。アマゾンの發見者オレヤナは、**一五四五**年再度のアマゾン溯航を決行した時に、既にカトリツク宣教師を八名も連れていつている。勿論八名は絕命したが前に述べた二回目の探險隊長**テツシエイラ**のアマゾン溯航最初の時も**アルデイエダ**と**アクニヤ**の兩神父を同行せしめている。隊長テツシエイラは

アマゾン發見直後の見取圖

第二章　行商と流浪農の黎明期（明治四十二年から大正十五年まで）

歡樂・遊蕩の魔都**マナウス**は招く

邦人先驅者・酒池・肉林・賭博の末路は悲し

ゴム景氣に湧く（１９００年前後）

一八九五年（明治二十八年）**アマゾン**に邦人三千名移民計画

ブラジルを初めて日本に紹介したのは一八九四年（明治二十七年）ブラジルを視察した衆議院議員根本正である。この頃は日伯修好通商條約はなくその翌一八九五年に漸く兩國公使がパリーで外交々渉した。そしてその條約が批准交換締結されて効力を發揮したのは二年後の一八九七年（明治三十年）であつた。

處が面白いことに、この日伯修好條約の締結されない二年前に、伯國の一移民會社が日本人を三千名アマゾンに移住させようかとの計画があつた。一八九五年頃と云えば、パラー州は名州統領**ラウロ・ソードレ**時代であつた。ソードレはブラガンサ鉄道沿線や、中部アマゾン大江沿岸開拓のため、葡・西人等の移民を誘致していた頃でそんな計画があつたかも知れない。ブラジルの會社は「東洋移民貿易ＫＫ」で代表者**ジュリオ・ウエナビイス**は、パラー州土地局に書類を提出、同州土地局と日本移民三千名誘入の契約を結んだ。この契約書は一八九五年八月二十一日のラウロ・ソードレ州統領の署名入りのもので、ラウロ州統領誕生百年祭に記錄書類として公表展示された。この書類は確かにパラー州土地局にはあるが、ブラジル人經營の移民會社が正式に日本に交渉しなかつたのだろうか、日本外務省の記錄にはないことを、野田良治翁も、「ブラジルに於ける日本人發展史」の著書にかいている。多分明治二十八年根本正がニューヨークから、リオ市に行くとき、パラー州ベレーン市から州統領ラウロが同船し、船中の雜談の間に移民問題が湧いて話は擴がつたのかも知れない。根本正とラウロ州統領がベレーン市から同船した事は、リオ市の各葡字新聞で當時發表されているからである。

日本の移民會社も移民計画

ブラジルの「東洋移民貿易ＫＫ」が日本移民アマゾン移住を計画して四年後の、一八九九年（明治三十二年）七月に今度は

著者（右）と熱帯養魚王・高瀬茂一氏（左）

の倍の日數がかゝつたのも、アマゾンなればこそである。

　アマゾン河は、八〇〇粁奥のオービトス附近で海抜十七米、三、八〇〇粁奥のイキトス市で海抜僅かに百五米に過ぎないので、傾斜少なく流れは緩かに見れるが、案外水量は多く河口から大西洋へ奥に五十浬が淡水であり、それが南から押寄せる海流で岸傳いに押流され、ギヤナ沿岸二百浬まで淡水である。河の深さはオービドス附近で八十三米もあり、河と言うより、渓谷の間をアンデス山脈の雪崩れが、流れとなつて流れていると云つた感じである。

　河口の巾が三三五粁で、飛行機で横断すると一時間もかゝるその河口にマラジョー島が横たわつている。

マラジョー島　四、七九六四平方粁（巾は三十粁 長さ二百粁）
（ベルギー・オランダ・スイス・九州よりも大）
ツウビナンバラナス島　二四、五三〇平方粁（四國より大）
カギヤナ島　四、九六八平方粁
クルパー島　四、八六四平方粁
メシヤナ島　一、五三四平方粁

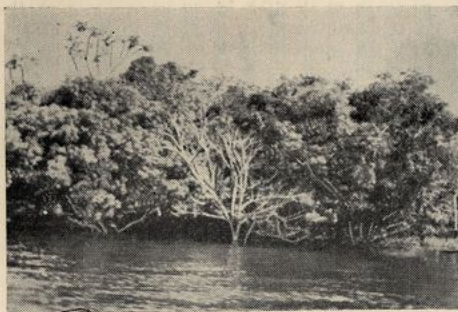
等の巨島があり、その他淡路島や伊豆大島程度の島は數千に及び、その間を流れる水量は一秒間に八万立方米で、北米ミシシツピ河の二倍、しかもアマゾン河の支流においかぶさつた陸地總面積は、地理学者オーメン・デ・メーロに從えば、東西四千粁、南北二千粁で、七五八平方粁、その面積は日本の二十倍である。著者などが僅々八カ月をもつて驅足で旅行するのが大体間違つていると云いたい。

　その廣汎な地域は蝶の棲息として世界一である。昆虫学者英人ベーツに從えば、英國では六六種、歐州全体では三二一種なのがアマゾンでは七百種に及んでいる。一九五五年著者はアマゾン産蝶三百種を母校に贈つたが、教師連中はその美麗なのに驚嘆していた。また猿類も世界一で三十八種からなり、實に可愛いオウムも世界一で數百羽も列をなしている姿は壯觀である蘭とシユロも世界的である。また熱帯魚の如きは無盡藏で、終戰後サンパウロ市からベレーン市に移つてきて、十年にしかならない熱帯魚研究の權威高瀬成一は著者の舊友であるが、この十年間に百二十種を養殖し、六百万匹の熱帯魚を飼い、二百万匹のエンゼル・フイシユを北米に売つて百万ドル儲け、自家用飛行機で商売に飛び廻つている。それ程熱帯魚が豊富だが、未開の蠻地のこととて、誰れも手を染めない。高瀬と某獨逸人の二人が、この廣汎な地域を獨占し、ボロ儲けしている。

　大体アマゾン地域の概略はこれで摑めたと思う。詳しい事は巻末に紹介してあるアマゾン地理学の專門書によつて勉强してもらいたい。

いく年の年は替れど着る日なく　當時を偲ぶ晴れの衣裳

マナウス郊外E・S植民地　宮崎泰美子

を十年開業した。五百子夫人は東京青山学院英文科第一回卒業生で、熊本英塾学教授でもあつた。一家族の渡伯は淋しいので縣下から獨身青年を公募し、千頭清臣知事（後に貴族院議員）の推薦で、有川新吉・九玉友造・安田良一・松下正彦等の青年が同行した。そのうち松下は後にアマゾン移民の草分として有名、安田良一青年は古關富彌（總領事）原口七郎（領事）渡邊孝（モジ産組理事長）齋藤武雄（領事）等後世の大物四・五十人をカマラーダに使つて米作王となつた。彼の長男ファビオは現在コチア産組専務理事である。有川は歸國、九玉は病死した最後に同年渡伯した鳥取縣人明穂梅吉は麥藁眞田帽子（バッカンサナダ）製造が目的であつた。總ゆる辛酸をなめたが、大正六年各移民會社が統一した時に、迎えられて海外興業KK移民部長の要職に就き、戦前のブラジル日本移民の配耕地先は彼の指一本で左右される程の權力者になつた。ブラジルの大農場主は彼を總領事（コンスル）と呼んでいた。余り傲慢だつたので、多くの敵をつくり新聞記者連盟の總攻撃に遭い地位を失格し、晩年は淋しく散つた。既に故人である。

アマゾンのジャングル

　聖州に續いて邦人進出の早かつたのは「マット・グロッソ州」で、アルゼンチン視察から歸國の途中にあつた藤田克己・鹽川伊三郎等が、一寸ブラジルを見ようと明治四十年下船した時に、麻州横斷鉄道布敷工事の工夫募集があつたので、これ幸と第一回移民の珈琲園逃亡組をつれて麻州に往つた。主に沖繩縣人組が多かつだので、鉄道工事が終つても移民は麻州に殘つた現在麻州カンポ・グランデ市邦人の九割までが沖繩人なのは、そのためである。引率者藤田克己は、旧制盛岡高等農林学校の出身で、学校時代の教授伊藤清藏を賴つて亞國にいつたが、伊藤教授の事業はまだ目鼻がついていなかつたので、歸國の途について伯國に上陸した。藤田の恩師伊藤清藏は東大出身、盛岡高農助教授、獨逸留学三年、歸朝して教授、農学博士となつたが、公職を棄て僅少の金で獨逸留学中の戀人と結婚して渡亞、空拳徒手から後年數千ヘクタールの牧場王となつだ名士で、その名著南米に「農牧三十年」は洛陽の市價を高からしめた名文である。その教え兒の藤田は亞國で志を得なかつたが、ブラジルでは遂に永住ときめ、移民の草分隈部三郎弁護士の長女光子と結婚、バナナ栽培で頭角を現わし、後年元亞國公使古谷重綱と共に、ブラジル邦人バナナ栽培の兩巨星と讃えられるほど成功した。

　次にはリオ州である。リオ市には一九〇七年（明治四十年）に藤崎商會が日本商店を開き、野間貞次郎・田中良作・佐久間重吉・後藤武夫等二十代の青年店員が活躍したが、これは移民

日本の東洋移民會社が、パラー州行きの移民を送り出すべく計画した。この東洋移民會社は、明治三十年に吉佐移民會社が、日本移民をブラジルに送りたいと、その交渉に社員青木忠橋を渡伯せしめたが、日伯修好通商協定前だつたので、成立しなかつた。そこで日本郵船の近藤廉平、加藤正義等が東洋移民會社を創立して、再び青木に交渉せしめ、許可をとつたので、上陸禁になつたハワイ行の移民二千人をサンパウロに轉送せんとしたが、これまた外務省の指金で中止になつた。こうした事から東洋移民會社は今度はパラー行移民を送り出すべく、警視庁に書類を提出した。然し警視庁は書類を外務省に廻した處、外務省は許可を與えなかつた。アマゾンについては、明治三十一年二月駐伯珍田公使から、「アマゾン移住は時期尚早だ」と報告があり、次代の大越公使も珍田公使と同調だつたので、遂に立消えとなつた。昭和五、六年でさえ、トメアスー移住地や、マウエスのアマゾン興業が悲惨な結果に終つたのだから、明治三十二年頃に言語の通ぜない無一文の日本移民を入れたら、どうなつていただろう考えても身震いがする無謀な話である。

ブラジル各州とアマゾンの邦人草分

著者がブラジル各州邦人草分の研究を始めてから、既に三十有余年になるが、この草分という事を後世になつて調べることは、なか〱至難である。幸に南伯各州は草分組か、七・八十才までも數名生存しているから、どうにか史實の確証を得られるが、アマゾンの如く、ペルー移民の流れが、ボリビアから來たり、ペルー國イキトスから流れたりした者は、既にその跡かたもなく、實証を掴むのに困難である。アマゾン邦人草分の事を詳しく調べるなれば、ペルー移民の歴史と、ゴム採集に流れたボリビアの「タンボパツタ」地方の邦人生活狀態から、もう一歩奥の「リベラルタ」地方まで足を進めなくてはいけない。

ペルーの日本移民進出は、明治三十二年で、ブラジル集團移民が明治四十一年笠戸丸組だつたのと、約九年の開きがある。然しブラジルでは明治三十九年山形縣人鈴木貞次郎、そして鹿兒島縣組の隈部三郎弁護士・安田良一・有川新吉・松下正彦・九王友造等と鳥取縣人明穂梅吉が單獨自由移民として渡伯しているから、ペルー移民との差は七年になる譯だ。

ブラジル各州の草分を一寸窺いてみると前に述べたように、聖州では一九〇九年（明治三十九年）四月に早大佛文科出身の山形縣人鈴木貞次郎（南樹と號す）が、チリーに往くのを、同船でブラジルに渡航する水野龍のすゝめでブラジルに渡つた。水野は皇國移民會社の社長で、北米の日本移民排斥にいや氣がさし、南米に日本移民を送る目的で、ブラジル視察に出かける處であつた。多情多感な二十九才の青年鈴木は邦人未踏のブラジルに同行を奬められ、共鳴新たなものがあつた。この鈴木貞次郎は、移民の草分となり、彼の報告によつて明治四十一年笠戸丸がくることになつた。彼はその後に「日本移民の草分」「埋もれゆく拓人の足跡」などの流麗な文章で綴つた著書を多く出版、一九六五年の現在も文筆家（八十八才）で暮らしている。

續いて鹿兒島縣組の隈部三郎一行は七月到着した。隈部組は移民でなく、最初から永住の目的で植民であつた。駐伯杉村公使が明治三十八年朝日新聞に掲げた伯國珈琲園報告書に魅力を感じ、弁護士の公職を棄てて渡伯した。隈部は中大卒業後判事となり、鹿兒島地方裁判所に勤務十年、後ち野に下つて弁護士

鹿児島縣人松下正彦がブラジル日本移民草分であることは、既に前に述べたが、何故に彼がアマゾンに進出したか、その原因をつきとめてみたい。松下は鹿児島市鷹師町の出身であり、著者は同市加治屋町の出身で、極く近所であつた關係で、三十余年前から松下と親しくなり、アマゾンに興味をもつた筆者はくどい程に當時の模様をきいたことがある。

移民の草分隈部三郎辯護士は、同行者として縣下の青年を募集したが、松下だけは三十五才の既婚者で當時長男正治（九才）二男正房（四才）長女静子（二才）の三人の親で失格した。處がその位で失格を歎く松下ではなかつた。十八・九才の獨身青年の間に既婚者のおることは、輕佻浮薄の青年を安定させる上からも有利であると執拗に說き、到々同行を許され妻子を日本に置き隈部等と同行した。

明治三十九年七月サンパウロ市に着いてみると、邦人は一人もいないし、葡語は全然解らず、當時の聖市には勞働仕事はなし、隈部一行は遂に繩煙草捲の仕事にありついて、露命をつないだ。九王友造・安田良一は當時二十才であつたが師範学校出身で、既に小学校の訓導の經驗者であつた。二人は繩煙草捲きではお米もなか／＼喰えない悲惨な生活だつたので、サン・フランシスコ廣場で八百屋を始めた。家賃は一カ月二ミルだつたが、何カ月經つても家主が取りにこなかつた。現在この邊りは少さな店でも家賃は月四・五百コントス（十万円）もする。九王・安田兩青年か八百屋を開いたので、松下はそれに負けず日本の「おしるこ」を思いだち、フエイジョンと砂糖を煮て、これをバケツに入れ、兩天秤につるし、肩に擔いで聖市第一の繁華街キンゼー・デ・ノベンブロ大通りを「チョコラツテ・ジヤボネース」と叫んで歩るいた。處が伯人は物珍しげに松下を呼止め試食したが、なんと砂糖の甘味で伯人には喰えそうもなかつた。來る人の總べてが口に入れると同時に道路に吐き出した到々松下の「おしるこ」屋もこれで駄目になつた。松下は間もなくホテル・ロツセリの皿洗になり、軈て馬鈴薯の皮むきになつた。月給は食事附（殘りもの）五百レース、食事がつかなかつたら二ミルであつた。二ミルでは地下室の部屋代も拂えなかつた。そんな生活二年の後に、第一回笠戸丸組が悠々濶歩し渡伯したが、この移民七八〇名の多くが間もなく珈琲園を逃亡、聖市へ流れてきた。そしてこれ等移民はサントス港の荷役人夫や麻州鉄道工夫となつて四散した。皇國移民會社はこのため第一回の移民輸送で失敗し破產した。當時の支配人上塚周平を始め、事務員などは生活に困窮して、遂に隈部三郎同様繩煙草捲になり下つた。

然しお米もロクスツポ食へん繩煙草捲きでは將來に不安を感じ、ここで三人よれば文珠の知慧とか、寄り合つて研究の結果日本式玩具を造つて賣ろうと云う事になつた。資本金がないので手製の玩具がいいと、材料の竹は郊外から無料でもらい、部分品の木は製材所からキレハシをもらい、辯護士の隈部も、東大法科出身の法学士上塚周平も、八百屋をやめた訓導安田・九王などが晝夜兼行で玩具をつくつた。これを行商するのが心臟百パーセントの松下の役であつた。値が安くて一番売れたのは「竹トンボ」であつた。特にブラジル人の好く赤・青・黄の原色を塗てからは、飛ぶように売れた。資金が少したまると、軍艦、汽車なども造つて売つた。この玩具の売行で松下は「アマゾンのゴム景氣」を噂にきゝ、これならボロ儲けがあると、急

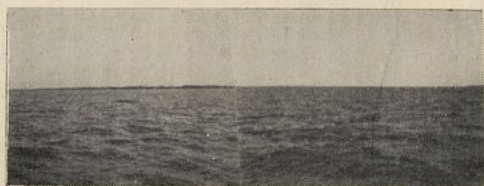
でなく商人であつた。藤崎商會閉鎖後に皆歸國し、後藤武夫青年のみ殘つた。後藤武夫は後に東山商事ＫＫの顧問となり、初代社長君塚愼（後の駐伯大使故人）二代社長山本喜譽司（農学博士サンパウロ文化協會長故人）等のよき相談役となり現存している。移民としてはブラジル草分移民の隈部三郎組が、一九〇年（明治四十年十月十八日）リオ州マカエ郡サント・アントニオ耕地に入植、日本人植民地を建設したのが始まりで、第一回笠戸丸移民の渡伯する前であつた。隈部三郎・有川新吉・安田良一・九玉友造・西澤為造の五人であつた。この植民地は資金不足で、二ヵ月も白米を喰べない悲境に陥り、遂に解散したそれから三年後の一九一一年（明治四十三年）に長崎縣平戸の山縣勇三郎が、北海道の事業を棄てて渡伯した。山縣は二十二才のとき無一文で根室に渡り、海産物で儲け、瞬く間に船舶業鉱山業（釧路銅山、吉武井硫黄山、時登銅山）牧畜業（牛四百頭、駿馬一頭三千円）等と有數な事業家になつたが、日露戰爭後の財界パクニックで破産、當時の債務四百六十万円（現在の四百六十億円）もあつた。渡伯して有るとき彿の契約でリオ州マカエ郡カショエイラ耕地一千町歩を購入した。山縣の勇名を慕つて星名謙一郎、石橋恒四郎、坂元靖、阪東喜内、今村廣、迫田三代治、福島貞次郎等が集まつた。これ等の青年は後年伯國邦人產業界の大物になつた人々ばかりであつた。山縣の死後現在は二世等が山縣工業ＫＫを創立し、建築土木界の巨星としてリオ府で著名である。

リオ州に次いではパラナ州で、リオ市の竹細工商人杉原繁太郎が鹿兒島縣人當房立二を連れてクリチーバ市に住んだのが最初であり、ゴヤス州は一九一三年（大正二年）リオ州の山縣農場を飛出した石橋恒四郎が、ブラジル畜產技師の免狀をとつて南ゴヤス州カタロン市に住みついたのが草分である。石橋は東京曉星中学で佛語を学び、駒場農大獸醫科出身だつたので葡語に精通し伯國農業技師の免許をすら〳〵と取つた。

以上のように聖州、麻州、リオ州パラナ州、ゴヤス州と南伯各州の草分のエピソートは色々と面白いが、ではアマゾンの草分はどうであつたかと云うと、これまた南伯各州の移民草分以上に興味津々浦々たるものがある。それはアマゾンに潜入した初期邦人移民の總べてが、當時全盛を誇つたゴム景氣に魅惑され、東方からはサンパウロ州の玩具行商の松下、西方からはペルー邦人移民がゴム地帶浸入と云う奇觀を呈したことである。しかも莫大に儲かつた玩具行商人松下正彥も、西方から潜入したペルー移民達も、十年後には一攫千金の夢は儚なく消えて裸になり、四散してしまつたことだ。悲しい末路に終つたアマゾン草分流浪移民のエピソードに筆を染めてみよう。

サンタレン沖の本流

一九一〇年（明治四十二年）

玩具行商人松下正彥の猛勇ぶり

ンとシンガポールに移植してから、科学的栽培法によつて、南洋ゴムの全盛期に入り、アマゾン自然ゴムは壓倒され、今日の悲運に陥つた。松下がマナウス市で玩具を売つている頃は、また全世界のゴム生産の八八パーセントの天然ゴムを市場に売却していたのであつた。

ブラジルゴムの衰退は次の表を見ると解る。

一八七六年（明治　九年）　英國ゴム移植成功
一八八〇年（明治十三年）世界生産の一〇〇パーセント
一九一〇年（明治四三年）　八〇パーセント
一九一三年（大正　二年）　四二パーセント
一九二三年（大正十二年）　八パーセント
一九六〇年（昭和三五年）　一パーセント

	アマゾン自然ゴム生産	英領栽培ゴム生産
一八二七年	三一	×
一八五〇年	一、四六七	×
一八七〇年	六、五九一	×
一八九〇年	一六、九三四	×
一九〇〇年	二六、七五〇	四
一九〇二年	二八、〇〇〇	八
一九〇四年	三〇、〇〇〇	四三
一九〇六年	三八、〇〇〇	五一〇
一九一〇年	四二、四一〇	二、八五一
（松下が玩具を行商した年）		
一九一六年	三六、五〇〇	一五二、六五〇
一九二〇年	三〇、七九〇	三〇四、八一六
一九二八年	二七、八七六	六三一、五六三
一九三二年	六、〇〇〇	六、〇〇〇、〇〇〇
一九六〇年	六〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇、〇〇〇

到々一九三二年度はアマゾン・ゴムは凋落したので、これを憂い終戰の年に大統領**ゼツリオ・ヴアルガス**は一九四七年にゴム對策法令を發布した。そこでいくらか増収し、一九六〇年には六万トンに達したが、もう世界の生産は七〇〇万トンに達しその比率は一分にも追いつかなかつた。これはゴムの歴史の一端を述べたが、ここにこれを記述しておかないと、後述する邦人ゴム採集者の好景氣と、竹内某の如きが賭博で二百コントス（今日の四十万コントス・邦貨四千万円）を儲けたなどと云うことが、噓みたいなようになるからである。念のためアマゾン自然ゴム黄金時の模様を記述してみた。

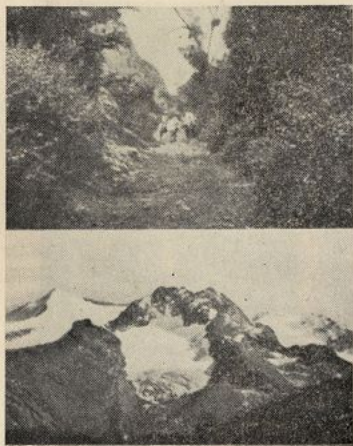
松下正彦氏　大正三年再度
アマゾンへ向う記念寫眞

松下正彦が一文の價値もない竹トンボや紙風船の玩具を、高價に売りつけ、ペルー領イキトス市まで渡歩き、しかも彼は巨額の金を懐中にして明治四十四年に歸國した。歸國の目的は日本の玩具を仕入れるためであつた。マナウスを出帆し英國リバープルまで着き、そこからマルセイユを經て懐かしい故郷に還つた。故郷には五年振りに歸つた妻

に玩具製造に拍車をかけさせた。そして不足の分は他の玩具で間に合せ、到々念願がかなつて明治四十二年にアマゾンに向つた。明治四十二年と云えば一九〇九年で、アマゾン・ゴムの全盛期であつたー（ゴム景氣の詳細は後述にある）同行者は南洋から變名で轉移した同縣人木藤磯右ェ門と、第一回笠戸丸の脱耕者沖縄縣人四家族であつた。玩具はなるべく荷物がかさまらないよう竹トンボが主で、それに紙風船、團扇、色紙の扇などであつた。

葡語は上手でなかつたが、例の心臓無手勝流で押まくり、ベレーン市に着くや、玩具は好成績で飛ぶように売れた。これでは荷物がすぐ無くなると思つて、値を十倍にして殘りの玩具をマナウスまで輸んだ。成程來てみるとマナウスは英ポンドの金貨で店先で買物をしているので吃驚した。一ポンドはその頃日本金二十円であつた。日本では小学校の先生が月給五円の頃だつたので、松下はその景氣にたまげたが、ふと我に反ると玩具をベレーン市價の十倍に値上げしたのをよろこんだ。特に竹トンボは高價で売れ金持の坊やが欲がつた。その頃一キロの生ゴムが十五ミルしていた。現在は一キロ當り一コントスで、五十年昔の金に替算すると五百ミル・レースにも當らない。世界ゴム採培史を繙くと、當時一本のゴム樹から一年五ポントの收穫があつた。樹液の多いゴム樹は十五ポントにもなつた。土人が輸ぶカヌー（丸木舟）一ぱいに滿むと、驚くなかれ二・五〇〇ドルもした。現在でも二・五〇〇ドルと云うと伯貨五千コントスの價値だが、當時の價値で云えば我々貧乏者には想像もつかない金であつた。

一九〇二年（明治三十五年）アマゾナス劇場が竣成された時に、全世界の人々は驚ろいた。その建築資材はイタリヤの大理石をつかい、それをイギリスに輸んで、ロンドンで仮組立てをして、マナウスまで輸んで建てた。建築費は總額約二〇〇〇万ドルと云われていた。パリーのオペラ劇場に出演していた**アンナ・ヴロハ**一座や**スカラ**座一行その他興行團が、渡伯して毎夜興行をした。一九一一年（明治四四年）當時は全市の六四パーセントが売春婦に關係のある家屋であつたと記録が殘つているマナウス市の電車はイギリスの名都リバープル市より早く敷かれた。どうしてこんなにゴム景氣が出たのだろうか。

参考までにゴムの歴史をみると一七三六年に科学者**ラ・コンダミン**（charles marie de La condamine）がアマゾン原生林中でゴム樹を發見し、文明國に紹介した。それから三十四年後の一七七〇年頃までは、生ゴムを鉛筆の消ゴムに使う位のものであつた。英語の「Rubber」はこの語源から發している。一八三〇年頃から北米で grafe Borracha として一般に売渡り、また三十年後の一八三〇年にボストン市で始めて一足の靴が製造され、二十セントで売却された。これから漸次五千足、一万足、三万足と売れ、六年後の一八三六年には四、七四一、二七五足も工場で製造され、ブラジルの原料地に落ちた金も二七、三一二、〇二七リーブラと稱されている。そして一八八三年に**グツトイヤ**が（タイヤの名稱あり）硬化法を發明して用途は益々大衆的に及び、フォードの自動車發明、そして車にタイヤを使用仕始め、未曾有のゴム黄金時代が出現した。アマゾナス劇場一千万ドルの建築費など、ゴム景氣から全般的にみると安價なものであつた。一八七六年英國人**ウイツクム**がアマゾン・ゴムを盗み出し、英京ロンドンのキユガーデに移植し、これをセイロ

とであつた。メキシコより轉任した外務省書記官野田良治は、明治三十九年タンボバタ河流域の邦人ゴム採集人夫の生活狀態を調査し、その報告書を明治四十一年六月農商務省から（外務省にあらず）「ボリビア國視察報告書」として發表した。野田良治は當時三十一才で、既に外務省に入り十年の經歷があつたこの頃のペルー移民は既にタンボバタ河畔から、そろ〳〵**リベラルタ**町（ロンドニャ直轄州國境近く）に移つていた。明治四十年前後には既にリベラルタ町を中心に、百五十人程の邦人ゴム採集者がおり、その五分の一ほどが土人と同棲していた。これは後年のことだが、野田良治が昭和四年から一ヵ年に亘つて外務省の命で現在のロライマ州やロンドニャ州の調査に上つた時も、ワザ〳〵ボリビア國境を越えてリベラルタ町に往き、生殘りのペルー移民を慰めたことが、その名著「南米の核心に奮鬪する同胞を訪ねて」に記述されている。この時に野田は單身マデイラ河を船でのぼつているし、ロライマ州は**タクツ**河を遡つて英領ギヤナ國境や、**ウラリコエラ**河を遡つてヴエズエイラ國境を探險しているし、これで四回目のアマゾン視察であつた

（上）アンデス山道（下）アンデス山の積雪

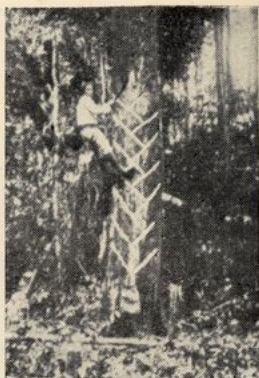
　これは野田良治の話であるが、明治三十年代の末頃からこの**リベラルタ**と**トリニダツト**附近が邦人集團地になつた。前記のように莫迦景氣だつたので女と博奕が盛んであつた。當時は國境を越えるのも旅券はいらなかつた。現在のアクレ領は一九〇三年（明治三十六年）ブラジル・ボリビア兩國間の外交々渉でブラジル領になつたが、當時の住民はまだボリビア領と思つていた。だから邦人は明治三十八年頃から、このボリビア領からアクレ州に移つたり、またボリビア領に戻つたりして、邦人の移動は定まらなかつた。然し大体ゴム採集者が流浪生活をやめボリビア領**ゴヒハ**町や、對岸アクレ州**ブラジレア**町や、**シヤブリ**町、そして**インプレーザ**町（現在**リオ・アランコ**市）に定着したのは、その頃からであろう。當時のリオ・ブランコ町が三百戸位、シヤプリ町が百五十戸、ブラジレアが百戸位であつた

　ボリビア領ゴビア町（この邊りはアルト・アレグレと云つていた。以下この名稱を使用）アクレ州にかけて、一番活躍したのは滋賀縣彦根市青柳區出身『筧嬰太郎』であろう。笠戸丸の二航海組で、カリオカに上陸、耕地を飛出し各地を流れ、明治四十年早くもリベラルタに移り、七年の後に、大金を握つて母國を訪問した。日本滯在一ヵ年半の後、大正六年安洋丸で再渡航するときは同縣人『古野功』（青柳村）『田中秀四郎』（青柳村）『北川廣義』（青柳村）『西村金六』（犬上郡青波村）

子が待つていた。
夢心地の松下は約一年位日本にいて、悠々と遊び、二女美代子をもうけた。そして再度一獲千金の夢をみて、玩具を仕入、今度は最初から本格的に計画して、玩具の種類を厳選した。再度の渡伯は一九一三年（大正二年）であつた。勇躍ベレーンに着き、今度はベレーンで商売をせず、マナウスまで直行し、そしてペルー領イキトスまでも往つた。當時ブラジル・ペルー間の旅行は旅券の査証はいらなかつた。思う存ぶん飛廻り、玩具を完盡した。大正三年第一次世界大戰が始まり、ゴムの需要が増大し、價格は暴騰し、そのためアマゾンの景氣は素晴しかつた。巨利を博して歸國し、松下は三度またアマゾンを訪づれた然し柳の下にはドジョウはいなかつた。世界大戰が終了し、一方栽培ゴムの生産が増大し、アマゾンの自然ゴムは売れなかつた。一九二〇年（大正九年）の頃で、自然ゴムは栽培ゴムの一割にも需要は滿たなかつた。マナオスは火の消えたように淋しくなつた。市内住宅の大半は空家となり、道路は草が生え、港には人が少なかつた。誰も玩具を買う人もなく、松下はここで日本で仕入れた値段の十分の一で投売し、聖市までの旅費をかせぐと、孤獨消然として、聖市へ歸つた。松下のアマゾン行商十カ年の活躍は槿花一朝の夢に終つた。無一文になつた彼は、明穂梅吉移民部長の世話で海外興業KKに入社、移民の出迎えを世話した。そして傍ら移民が持參する日本紙幣を伯貨に替えてやり、十年後に小金をためると、聖市ピニエイロス區で松屋商店を開業した。そして昭和四年妻と長男・二男・長女・二女を呼寄せ地道に商売をしたが、長男正治が商才がないので閉店し、後年サント・アマーロ區の農場で七十余年の生涯を淋しく閉じた。晩年彼は著者に「池田さん、私は三十代の若さで誰れも味えない豪壮な生活をしましたよ。歡樂郷マナウスの華やかさはとてもあなた方には想像もつきますまい」と當時の模様を長々しく語つたが、今この文章を書くに際し、七十余才で逝去した豪膽無類な偉丈夫松下正彦の姿が眼に浮かんでくるようである。なお松下と同行の市藤磯右エ門は、松下と別れ、昭和六年頃リオ・ネグロを遡り、リオ・ブランコ町附近で小村某と野菜作りをしていたが、その後にリオ・ソリモンエスに轉じ邦人社會から消息をたつた。沖縄の四家族は、マナウスから北米へ密航したが、その後消息をきかない。

アンデス山を越えアマゾン進入

松下はアマゾン河口ベレーン市から、邦人草分として西方に向つて突入したが、これと反對に奥アマゾン上流の水源地帯から、ベレーン市に向つて降つてきた連中がいた。これが例のペルー日本移民の流れで、その九割までがボリビアのゴム自然林に働らいた者であつた。
明治三十二年ペルー移民が開始されたが、ブラジル移民と違つて、家族移民でなかつたので、十七・八才の單獨青年の身輕さで、九割九分までが耕地の契約を破棄してリマ市に出た。然しリマ市と云つても仕事がないので、結局奥地の棉花耕地か、或いは奥ボリビアのゴム液採集人夫として應募しなければならなかつた。この頃ペルー移民の脱耕者は**タンボバツタ**河の水源地帯耕地に集まつて農業にはげんだ。ここには**インカルペルー**移民會社に勤務した河村などが古參株で、邦人にボリビア行の周旋をしていた。一九〇三・四年（明治三十六・七年）頃のこ

ゴム液採集人夫

などに南米行をすゝめて同行した。筧は再渡航のとき日本で使いまくつた小使の残りをまだ英國金貨で十五匁を持つていた。筧は日本に歸つたとき、相當散財したと云われているが、このぼろ儲けに驚ろいて同行者はボリビア行を志願したと後年古野功は語つた。余談だが筧の出身はアマゾン黄麻栽培の推進力者辻小太郎と同村である。

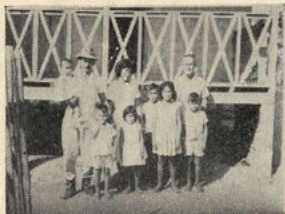
當時百五十家族位在住していたが、殆んどがゴム景氣の波で身を持くづした。なんと云つても獨身であつたのがいけなかつた。それにその九割九分までが教養がなく、酒と女に强かつたボリビア土人と結婚したが、これは結婚でなくて同棲と云う方が近かつた。筧と同行した古野功は（現在リオ・ブランコ在住三度結婚したが二度まで女は子供を連れて逃げたとの事だつたゴム景氣が下つた一九一八年頃、古野は同航海の同村人四人『前田某』『立川某』を交えて滋賀縣人共同野菜組合をつくつたが、これなども男世帶で無味乾燥、野菜では儲からず、『北川廣義』が伯婦人と結婚してマナウスに下つたのを最初に『田中秀四郎』も何處からともなく伯人女を連れてきて同棲、ボリビアの**リオ・タツマン**に移つた。『西村金六』もシヤブリーに、そして立川・前田に至つては雲がくれした。それでも殺伐なリベラルタ地方のゴム採集生活より、金は儲からなかつたがアクレ地方が落つきがあつて、よかつたと古野は懐古している。

マナウスの上流淡**ソリモンエス**大江に住んでいる『飯野太吉（鹿兒島縣知覧町）』明治四十二年十七才でペルーに上陸、二年後にアンデス山を十四日で突破、リベラルタからアクレ地帶をさまよつた。居ること八年にして、ゴム景氣が消滅したので一九一八年（大正七年）マナウスに下つた。七十三才の飯野はマナオス在住四十五年の最古參者だが、著者に「日本に歸りたい〳〵と思つて獨身で暮している内、ゴム地帶で無一文になつた。あの景氣がなくなつて裸でマナウスに下つた。日本を出發する時の氣持を考えると淋しいし、時には健在でいる兄（八十才）を想うと悲しくなる」と寂しく語つた。この飯野の隣地に二十五年前、アマゾン一の金持中島敏三が住んでいて、共に野菜作りして貧乏していた事があつた。人間の運命は解らないものだ。飯野もかつてゴム地帶で儲けた事があつた。五十過ぎて伯人女と晩婚し、一人娘が生れ婿をとつて、余生を送つている實兄とも戰後文通が絶えている。

飯野と故郷が一緒で同行だつた『西滴水健次郎』は飯野と同じ道を辿り、大正十年頃マナウスにおつたが、野菜作りをしている内に戰前空しく逝つた。同じく茨城縣人『飯田泰次郎』もゴム地帶で活躍したが、彼も飯野と同じ道を辿り、マナウスに下り、大正末頃から昭和五・六年頃までキヤンデ・アイスクリームなど賣つていたが、これまた病歿し、マナウス在住邦人の噂にものぼらなくなつた。山口縣人『山口乙一』、静岡縣人『松永卯作』、沖繩縣人『比嘉加那』等もゴム地帶の流浪人で松

永はマナウスで別莊をしていたが病歿した。山口や比嘉、それにマナウスで電燈會社の職工をしていた鹿児島縣人『河野』もボリビア流れのペルー移民だが、何時のまにかみんな病歿した。ゴビア町やリオ・ブランコ町で儲けていた『與田』福井縣人『福田』（山口縣人）『堺夫妻』（鹿児島縣人）『永井幸平』『葛原作五郎』（岡山縣人）等は昔し一緒に働らいていた友人達の噂にものぼらなくなつた。「何處かでノタレ死にしたのであろう」位のものであつた。いまあの邊りに殘つているのはシヤプリ町に鹿児島縣人中吉誠壽（雜貨商）一人になつた。

ついこの間、マナウスで死亡した宮城縣人『高橋數馬』は大正六年三月二十二才の時に喜洋丸でペルーに上陸、一年甘蔗園で働き同志三十五人と共にリマ市に出て、それから南下、チチカカ湖を經て四日目にアンデス分水嶺を踏破した。**マドレ・デ・オス**河の支流**タンボバタ**河から、密林を拔け、到頭アクレに達した。流轉七ヵ年、ゴビバ町で野菜作りしたが半身が不自由となり、遂にマナウスに下つだ。一九二五年（大正十四年）町でアイスキヤンーデやアイスクリームを賣つたが、思わしくなく、遂に一九三九年對岸カルデロンで野菜作りした。三回目の婦人アデライテと結婚し十六人の子供がいる。前年逝去したが子供に充分教育を授けなかつたので、その内二人の子供はマナウスの井上正五が引取つて面倒みている。上の混血兒は二十才近くになるが、最近ブラジル字が讀めるようになつてうれしいと云つていた。山口縣人『廣繁利吉』は大正六年二十三才の獨身で前記高橋と一緒に喜洋丸でペルーに渡つた。高橋と同樣數奇な運命を辿り、一九二三年（大正十二年）マナウスに下つた然し、マナウスの野菜作りが儲からないので、三年後に再びリオ・ブランコ市に戻りゴム採集した。昭和二年病氣したのでマナウスに下り、昭和十一年三十八才で伯婦人リユダと結婚し九人の子供を生み、野菜作りしたが、現在眼病を患うて余生を送つている。

一九一六年（大正五年）ベレーン市に下つて野菜作りの元祖となつた宮城縣人『高橋庄助』につついてベレーン市郊外タバナンで余生を送つている山口縣人『故川本清八の夫人』は、やはりゴム全盛期にアクレ州シヤプリーで働らいたことがあり一九二〇年（大正九年）山口縣人『岩永只次』福岡縣人『西原吉助』福岡縣人『本郷勇』福岡縣人『江口保治』と一緒にベレーン市に下り、ベレーン市邦人野菜作りの先驅者となつた。一九一八年（昭和三年）グワラナ栽培が目的で創設されたマウエス郡のアマゾン興業ＫＫに、當時マナウス市で野菜を作つていた廣島縣人『山根武一』は、會社から招かれて入植した。山根は

（上）古野功氏家族
（下）ボリビア下りの二世嬢

一九一〇年（明治四三年）頃ロンドニヤ直轄首都**ポルト・ベーリヨ**市で、野菜作りをしていたことがあつた。山根はペルー移民でボリビア下りの古い拓人である。ついこの間、逝去したベレーン市在住（岡山縣人）『玄場町一』も一九一七年「大正六年」喜洋丸でペルーに上陸した。當時十七才であつた。例の通りリベラルタに進出、辛酸苦勞したが、ゴムの暴落で不況、止むなくブラジル領**グワラヂヤ・ミリン**市で野菜作りをした。前記山根武一の後輩である。野菜作りが余り儲からんので、アマゾンを下りレシーフエ市に移り、スミ夫人と弟を呼んで野菜作りをして小金をため、コツ〳〵主義が當り、一九四一年ベレーン市に戻つて、今日に及んだ。數奇の運命を辿つたが、財産をつくつた。弟もレシーフエ市でアイスクリーム店で成功した。

前に書いた古野功、川本清八、山根武一、玄場町一などは生活が安定して晩年を飾つたが、何處へ消えたか解らない者や、土人の妻を娶つて生きているのか死んでいるのか、消息の解らないような生活をしている邦人先驅者には、一掬の涙をそそぐ櫻花のように一花咲かして奇麗に散つたとか、梅花のように華やかでなくても澁ぶい結實を全うしたとか、よしんばそれが財産を貯めなくても、南米下だりまできた以上は、男一匹であれば生き甲斐のある人生を辿りたいものである。

アマゾンを下り聖州に流れた人々

アクレやアルト・アレグレ地方で働いた後、マナウスを經てアマゾンを下り、聖州方面で活躍している數多くの人から七・八人を紹介しよう。『小川健六』（廣島縣高田郡秋越村）は一九〇六年（明治三十九年）獨身十九才でペルーに渡り、カンナ園を飛出し、徒歩で十四日もかゝつてアンデス山脈を突破、ボリビアに入り道路工夫一年、店員一年の後に、明治四四年リベラルタに移つた。賭博もせず、女色におぼれず、ゴビア町・シヤプリー町で大工・山伐りなどをやり、一九一五年（大正四年）マナウスを經て歸國した。二年後の大正六年に若狹丸で渡伯數奇な運命を辿り、後年マリリア市で小川健六商會として名聲をあげた。現在カンジノ・モツタで健在である。『前園六郎』（鹿児島縣串木野市島平）は明治四十二年二十一才で嚴島丸でペルーに上陸した。ペルーからボリビアに入り、アンデス山脈を縦斷、**オルコ**市英貨大牧三百円の月給でコツクをやつた。折角チリー國ウエニ金山が儲かると移轉したがよくなく、ボリビアの**サンタク・ルース**に轉じ、マデイラ河を下り、リベラルタ町に向つて同僚岩木と猛進した。ホテルのコツクをして地味に稼ぎ、チツプをためて六千ボントまでになつた。一夜賭博場に

（右側）山下唯一、翁長助成
（左側）前園次郎、小川健六、田實誠治

誘われ瞬く間に一万ポンドまで儲かつたが、止めればいいのにもう少し〱と云ううち裸になつた。このインチキの都には永住は無用と一千六百キロのマデイラ河を下り、マナオス町に下り、途中重労働をしながらアマゾンを下り、遂に聖市に辿りついた。命がけの旅行であつたが、後年ブ・プルデンテ市で東洋旅館を開業、巨億の金を残し名聲をあげた。既に故人になつたが生前「池田さん、私は若い頃に賭博で一万ポンド（當時邦貨二十万円、今日の四千万円位の價値）儲けたことがあつてなー」と當時の流轉盛衰の姿を如實に語つた。『山下唯一』（香川縣善通寺町）明治四十四年二十一才の獨身でペルーに渡つた。五十日で耕地を出て、リマ市で食堂のコックをし、五年後にタツ子夫人と結婚、軈て九年のペルー生活を打きり、ボリビアに轉じ、ここで飲食店を開いた。當時ボリビア國獨立記念祭は、五日間男女を問わず賭博をする公認賭博祭を兼ねていたので、飲食店は繁昌、一夜で日本金五千円（今日の百万円の價値）も儲つた。然し儲かつても永住は無用と、三年で見切をつけ、マデイラ河を下り、マナウスに出て、遂に聖州に辿りついた。後年マリリア市でアマゾナス商店を開き、金物商として名聲をあげた。『翁長助成』沖縄縣ー明治十八年生ー東京高等商船学校在学中、遠洋航海でペルー、チリーに渡航したので、明治四十五年卒業後すぐ香港丸で單獨ペルーに上陸した。リベラルタ町の好景氣を聞き、十日がかりでアンデスを突破、遂にリベラルタ町で獨逸領事の持船や、ベルギー系會社の船舶の機關士をやつた。月給は英貨二十五ポンドで、日本の大會社長並みであつたが、日本の雜誌や新聞が半年もしなくては讀めん山奥では頭が莫迦になるとて、金が儲かるのを棄てて、遂に橋場や我郡覇の友人三人とマデイラ河を下り、マナウスに出て南下、聖市に辿りついた。後年聖市總領事勤務、日本病院建設委員、ブラジル時報記者・日伯新聞記者を經て、自から日本新聞社を創刊して名をなした。既に故人、その長男英夫は聖市フオリヤ・ダ・マニヤン紙名編集長、女婿山城ジエゼーは雜誌ビイゾン（北米のタイムス・日本の中央公論に比適）編集長で一族は文筆家揃いである。『田實誠實』（鹿児島縣頴娃町御領）二十才のとき大正七年安洋丸でペルーに渡り、流轉放浪五ヵ年、不景氣になつたリベラルタ町の生活に愛想がつき、マデイラ河を下つて大正十三年にマナウスに着いた。マナオスで野菜作り七ヵ年、この時に天秤棒で野菜を売つて歩いた。ゴム景氣が去つたマナウスは不況のどん底で七ヵ年かかつて漸く零細な金をため、聖市までの旅費をため昭和六年聖州に移り、ブ・ベルナンデス市で商人として名をなし、現在聖市に移り工業に轉じた。

アマゾン下りの奇人變人

リベラルタやアクレー地方で一花咲かせ、アマゾンを下り、聖州方面で悲惨な運命を辿つた人物を二、三人紹介しよう『大庵喜八』（鹿児島縣人）は明治三十九年ペルーに上陸、軈てリベラルタで無免許の醫者を開業、儲けてマナウスに下り、ここでブラジルの醫師開業のインチキ免許を金で買い、到々アマゾンを下り聖州へ移轉、大正五年綿の都アバレー市で醫師を開業した。伯國棉花栽培の黎明期で邦人が棉を栽えたので、本職の醫師をやめて棉花仲買商人となり、當時一流の棉花會社サンブラなどに賣込み一時は儲けたが、軈て一敗地にまみれ、アラサツーバ市に轉じて再び醫師を開業した。昭和六年リベラルタ時

代に金を貸した同縣人竹下愛二が、二十余年振りで面會し、貸した金を請求したのが原因で口論、竹下の持つていた短銃一發で街路で即死し數奇な運命を終つた。殺した犯人『竹下愛二』（鹿児島縣大根占町）は明治四十年二十七才のときペルーに渡り、リベラルタやアクレ州を流轉し、賭博で儲けた頃は羽振りをきかせ、當時大庵に金を貸した譯である。晩年奥アマゾンが不況になつたので聖州に流れ、遂に大庵が儲けていることをきき、アラサツーバで面會、一寸の經緯で口論、殺意を起したものであつた。獄窓數年で出獄、昭和十五年著者がミナス州ウベランジヤ市に旅行した時に、郊外で一人淋しく堀立小屋に住い野菜作りをしていたので訪づれた。既に滿六十才中風の身をなげいていたが、戰後昭和三十三年再度用件があつて訪づれた時は既に死んでいた。在住同縣人もその死を知らず、多分市役所で葬むつたものであろう。大奄・竹下共に著者の知人であるがアマゾン下りの不幸な人であつた。『本間老人』は新潟縣人、ソロカバナ線の終點、聖州と麻州との境パラナ大河中の一孤島に居住し、バナナを植え堀立小屋をたて、僅かばかりの野菜を栽え、孤獨を愛し、一人悠々自適の生活を続けていた。ペルーからボリビアに入り、アマゾン下りの奇人であつた。小使錢がなくなると魚を釣り、ゾロカバナ線終着驛エピタシオ市で賣り火酒を下げて歸つた。常に訪問客が多く、訪ねると「一寸待つておれ」と五分もしない間に五・六キロの魚を釣つて刺身にし一ぱい差出す老人であつた。ソロ線の名物男だつたが、年にはかてず、遂に七十余才で逝去した。自叙傳を語らない尊敬すべき人物であつた。若い時にボリビアで口論喧嘩をして殺人したとの噂もきいたが、眞疑の程は解らない。著者も三度程ピンガ（火酒）をぶらさげてカノア（丸木舟）で孤島を訪づれた事があつた。豚や鶏が放飼いしてあつて、小屋の前に草花が奇麗に咲き、古淡優雅な景色を眺め、白色長髪の顎髭アゴヒゲをなで下している姿は、今でも瞼にうかぶ。以上の外にアマゾン下りでは『内田與左ェ門』『柳宗吉』以下數十人いるが割愛するとして、ここに紹介する鹿児島縣人『竹内』はボリビア下りの邦人として珍らしい存在であつた。一般の者と同じようにペルーに上陸、軈てボリビアに流れ、リベルトルタで流轉生活十余年相當儲けて商売もし、野菜農場も經營し羽振をきかせ、アクレ州地方で名をなしていた。なか／＼賭博の名人でもあつた。ブラジルで往年賭博で名をなした一八氏に似ていた。一九二五年（大正十四）年到々賭博場で三十余回勝づて勝ちつづけ、相手がなくなり、町中の名士數十人の金を總ざらいして、總額二百コントス（當時邦貨二十万円、今日の四千万円）を儲けた。利巧な竹内は、住宅も農場もその夜の内に同縣人の下川に無償で贈呈し殺害されるのをおそれて、その夜の内に雲がくれして、日本に歸つた。「竹内はアルト・アレグレ地方や、アクレ州地方の邦人中、金儲けのナンバーワンだ」と現存している七十三翁古野功は、ことこまかに當時の模様を著者に語つた。成程往年のボリビヤやアクレのゴム地帯は賭博が盛んで金廻りがよかつただろう。前に述べた山下唯一は賭博祭で飲物を売つて一夜で五千円儲けたり、前園次郎も賭博で一万ボンド儲けたり、翁長助成は月給二十五ボンドであつたりした。當時のサンパウロ市の一般の日給が二ミルであつた事を思えば物凄い大金であつた。

尚移民ではないが、大正七年頃柔道の『佐竹四段』がマナウ

ス市で、イタリー人プロレスラーと賭勝負した秘められたエピソートがある。佐竹四段はコンゴ・コマこと前田六段に随行して、世界柔道行脚でベレーン市に到着した。前田六段はメキシコで、三千ドルの賭勝負をして、猛牛のようなメキシコ人を片輪にさせた記録の怪人であるが、佐竹四段もこれに劣らぬ怪人であつた。背丈は一・七〇米の小柄であつたが、肩巾が張り体重は九十キロ程あり、物凄く強く外人プロレスラーは殆んど負けていた。マナウス市で軍人・警察官・学生の柔道教師をしていたが、マナウス市を訪づれるプロレス達はみな、佐竹四段の勇名をきいて挑戦したが一人も勝てなかつた。

處が大正七年にメキシコやキューバなどで優勝したイタリー人のプロレスが、マナウスにきて佐竹四段に挑戦した。佐竹も今度はあぶないと予感した。當時マナウスに流れてきていた飯野太吉に「今度はあぶないかも解らないが死力を盡してやる。まあ見にきて下さい」と云つた。佐竹の應援者は軍隊・警察・学生全部、一般民衆はヒイキなして血なまぐざい凄壯な試合を興味をもつてみた。懸賞金は八〇〇ミル・レース。試合は約二十五分もかゝつた。佐竹は十何回立技で投げ、首締に行つたが牛のような相手の首は締められなかつた。その内に佐竹は何度も危機に陥つたが、よくのがれ最後に立技から投げてころぶ處を腕の逆で遂に相手をまかした。眞剣勝負だつたのでイタリー人の腕は、なかなか治らず軈てマナウスを去つた。佐竹四段も軈て相手の少ないマナウスを去つて、キューバに渡つた。今日の柔道と違つて、あの當時の柔道は眞劍で、前田六段でも佐竹四段でも本當に實力があつた。

明治時代マナウス市を訪れた人々

松下正彦が明治四十二年にマナウスを訪づれたのは前述したが、ベレーン市から訪づれた邦人がまだ二・三人いた。一九一〇年（明治四十四年に、ブラジル移民の草分け鈴木貞次郎（山形縣人（現存）は、ブラジル連邦政府のゴム政策の仕事に從つていた。處がこのゴム政策のため、首脳部がアマゾン奥地に旅行、天然ゴムの調査に向つた。この調査團に參加し、六カ月も奥アマゾンに滞在した。鈴木は南樹と號し、正岡子規系統の歌人で、名文家である處から、アマゾン旅行記「アマゾン河畔より」と「アマゾンを下航しつつ」の紀行文を、大阪朝日新聞に寄稿した。アマゾンを紹介した日本文の最初である。次に明治四十五年に岡本專太郎が訪づれている。岡本は青森縣南津輕郡黒石町出身で、明治四十二年十七才で船乗りとなり英國に渡つた。そして明治四十五年百二十トンの帆船の水夫となり、リバープル港を出帆、八十余日でマナウス市に着いて下船した。軈て南伯に行きたく、ベレーン市に下り、船大工やペンキ塗りなどをして、旅費を稼ぎ、遂にサンパウロに着いた。軈て測量師となり、大成功した。岡本の四男哲夫は、オリンピックで千五百米水泳決勝で三等に入選した事があつた。次が澁谷駒平である。澁谷は長崎縣北松浦郡神之村出身、明治三十八年二十一才で朝鮮・大連を經てヨウロツパ行を決行、英船にのり、上海・シンガポール・印度・スペイン・フランスを廻り、最後に北米密行を計画したが、目的を達せず、恰度マナウスから來た邦人青年が、南米行をすゝめ、ここで明治四十五年二十八才でマナウスに着いた。英語が得意で、前記の岡本專太郎と共に、英系倉庫會社に働らいた。二年間働いてベレーンに下り、それから聖州に行つた。その後は聖州ソロカバナ線サント・アナスタシオ驛梅辨植民地の草分開拓者となり、大農場主になつた。

第三章　集團移住地建設の暗黒時代（大正十五年から昭和二十年まで）

尨大百万ヘクタール・南米拓殖株式會社の創立

移住地發案者　武藤山治とアマゾン關係

現鐘紡武藤絲治の嚴父故武藤山治は、台灣製糖初代社長故藤山雷太（藤山愛一郎嚴父）や、王子製紙ＫＫ初代社長藤原銀次郎、阪急電鉄社長故小林一三などと共に明治・大正の實業界の巨星で、忘れられがたい人物であつた。その武藤山治が何故アマゾンと緣故があるか、そして何故鐘紡がアマゾンに進出せなければならなかつたのか？　やはりこれには譯があろう。

ブラジル日本移民第一回笠戸丸組は明治四十一年に渡伯したそれより一年前の明治四十年六月に中島鉄哉が「今日のブラジル」という著書を出版した。私が知つている範園では、伯國紹介の邦文書は、明治廿九年に根本正の「ブラジル視察報告書」がトップをきり、駐伯杉村公使が明治三十八年十月外務省通省局から出版した「ブラジル移民事情・附貿易事項」と、翌年同公使の筆になる「南米ブラジル國サンパウロ州移民情況視察復命書」「南米ブラジル・ミナス・ジエラエス州視察復命書」の出版に續いて、中島の書は四番目のブラジル紹介書と思う。明治時代に出版された著書はその四冊に續いて

明治四十一年六月　土井權太郎著「南米ブラジルの資源」　南米社出版
明治四十二年一月　内田定槌著「ブラジル國内地情況報告」　移民調査會出版
明治四十五年三月　藤田敏郎著「伯國サンパウロ州巡回報告」　移民調査會出版

位で、大正時代になつて四十余冊、昭和になると二百冊以上もあろう。この明治時代にブラジル關係の書籍を著した内田定槌は公使であり、藤田敏郎はサンパウロ總領事で有名人であつた處がこの中島鉄哉は如何なる人物か？　明治四十年と云えば、移民の草分鈴木貞次郎以下六・七人が渡伯した位のもので、伯國を知つた人物はいないから不思議である。實はこの中島鉄哉はその頃は大学卒業の二十代のホヤ／＼新聞記者であつた。處が杉村公使の伯國視察記事が明治三十九年に大阪朝日新聞に載ると、これを讀んだ中島は自分も珈琲の國を視察したくなつたその記事を讀んで、隈部三郎弁護士でも公職を棄てて渡伯した位だから、血の氣の多い中島が、昂奮してそう考えたのは無理もない。と云つて大学卒業のホヤ／＼の中島には、そんな旅費はない。思いつまつた彼は、心臓を百パーセント大きくし、こ

ともあろうに鐘紡社長武藤山治を訪問し、その計画を滔々と打明けた。度量雄大な社長は「それだけ念願するなら」とポンと莫大な旅費を投出した。中島は大いに喜び、すぐ渡伯の準備にかゝつた。處が出發前に親しい友人が來て「是非必要な金だから貸してくれ。二・三日の内に返濟する。大金だから誰れにも相談出來ない。君を最後の頼みとしてきた」と伏し拜まれ、義俠心の強い昔しの学生上りの中島は、僅か二・三日で友人の苦境が救われるならと思つて「よしきた」と云つて貸した。處が友人は卒業に失敗し、到頭金は返つてこなかつた。中島は武藤社長に會わす顔がない。そこで中島はブラジルを知つている人を訪ねたり、また南米關係の英文書を獵つて飜譯したり、それに想像を加えて出版した。これで中島は武藤社長に對して申譯がたつた。

然しこの書籍を讀んだリオ大使館二等書記官の野田良治は驚ろいた。野田は當時三十四才で、既にメキシコ・ペルー・チリ・ボリビアと廻つてラテン・アメリカは、十年の知識を經ている。リオ大使館赴任以來この中島なる文章家が誰れであるか、疑問をいだいていたが、大正十年に賜暇歸朝の時にこの人物をさがしたら、その中島鉄哉は當時東京毎夕新聞社長に出世していた。そこで野田良治は一夕中島鉄哉と會合し、始めて事の次第が解つた。そう云うことで、武藤山治は既にブラジルに日本移民が渡る前からブラジルに緣故があつた譯だ。だから一九二三年（大正十二年）には、早くもブラジル棉花に着眼し、仲野英夫（後の南拓支配人）友田金三、（天理大教授・葡和辭典著者）青柳某（自動車事故で死亡）等を、留学生として送り、續いて、若杉駒次郎、杉彥熊（ブラジルで死亡、實兄道助は大阪商業會議所副會頭で日韓會談日本代表）などを派遣し、伯綿買付の將來に備えさせた。だから後述するアマゾンに日本人移住地問題が起きたとき、自から卒先してその大株主となり、移住候補地の調査團派遣費も全額負擔したのであつた

パラー州知事日本人を歡迎

一九二三年（大正十二年）パラー州知事**ジオニジオ・ベンデス**が、リオ首府からパラー州に赴任する時に、日本大使館を訪づれ、田付七太駐伯大使に

「パラー州は土地が廣く、人間が少ない。是非勤勉な日本人を入れて、開拓させたいものだ。出來るだけの便宜ははかるから万事たのむ」

と云つた。ベンテスは日本人が農業上優秀な技術を發揮している事を知つていた。當時伯國ではミナス州出身連邦議員**フイデス・レイス**の黄色入國制限案や、有名な排日家**ミゲール・コート**の日本移民制限案などが、堂々と國會に提出されていたので、田付大使はどうしても日本移民を、聖州だけに止めず、全伯各州に移住分散させ、各州知事や國會議員に、日本移民の眞價を諒解してもらわなくては、いけないと考えていた際でもありベンデス知事の提案を本省に通じた。そこで移民課長赤松祐之（後の聖市總領事）は、農学士芦澤安平を實地視察に派遣することになつた。

野田良治書記官・森本海軍武官のアマゾン視察

そこで一九二四年（大正十三年）に田付大使は、野田良治書

記官と、森本海軍武官の兩名にアマゾンの視察を命じた。この兩人は折角視察するなら、アマゾンの奥まで行こうと、ベレーン港に着くや、それから引返さず、大江を溯江し、マナオス市を經て、遠くペルー國イキトス市までいつた。野田良治がアマゾンに着眼した最初で、そして森本海軍中佐も、この旅でアマゾン禮讃黨になつた。

柔道六段・コンデ・コマ（前田光世）のベレーン定着

アマゾン邦人開拓を語るときに、前田光世六段の功績は忘却できない。前田は明治十三年青森縣に生れ、明治三十年上京して、十七才で講道館に入門、間もなく四段になり、二十二・三才の頃三羽烏として全國に謳われた。明治三十七年講道館四天王の一人富田常次郎六段に随行して北米に渡り、英・獨・佛・伊・白などを巡廻、後に北米コロンビア・シカゴ・エールの各大学の柔道教師となつた。明治四十三年キューバを經て、メキシコで三千弗の賭勝負をやつて、コンデ・コマ（高麗伯爵）の名をもらい、中南米に渡り、ブラジルに着いたのは大正四年であつた。ベレーン市に着いたのは大正七年で、一度歸國し、一九二四年（大正十三年）再びベレーン市に戻つて定着した。州警察や兵營、スポーツ倶樂部の柔道教師だつたので、州の高官と面識があり、一九二五年に芦澤安平農学士のアマゾン視察に大いに協力した。

田付七太大使

芦澤安平のアマゾン實地調査

外務省派遣の芦澤安平農学士は、一まず予備知識が必要なため、鐘紡留学生仲野英夫を伴い聖州方面を旅行、そして北上した。芦澤は田付大使の紹介狀を知事に手渡し、同知事の協力でカツピン河流域を調査した。また前田六段と親しい大耕主サムエル・フオンセツカを紹介されモジユー河流域から、遠くアマゾン河口四百粁を横斷してアマツパ州の視察にも出かけた。アマツパ州まで視察する熱心さにほれ、ベンデス知事は自からベレーン市郊外ブラガンサ沿線までも案内した。「是非移住地の建設を實現してもらいたい」と一九二五年五月二十八日附で「植民一家族につき二十五ヘクタール、二万家族で五十万ヘクタール」の土地を撰定する權利を、向う一カ年保留しておく事を申込んだ。この條件は田付大使に交附した。日本移民排斥問題が起きて、北米みたいようにならねばいいがと憂愁していた田付大使は、北伯アマゾン開拓に耳を傾け、そこへ森本海軍中佐とアマゾン大江を視察した野田良治も共鳴した。野田は外交官として當時既にラテン・アメリカの生字引で、明治三十九年ペルー移民のゴム採集地まで視察した人物だから、この問題を大いに推進した。早速幣原喜重郎外相に、メンデス知事の意向を起草して送つた。

調査團派遣に武藤山治の義侠

田付大使の公信が幣原外相に手交されるや、政府は愼重なる態度をとつた。幣原外相は北米上院議員ハイラル・ジヨンソン

が日本移民排日案を上提した頃の駐米大使で、移民問題には、通商貿易と同様に關心をもつていたので、省内の局長級を呼んで鳩首協議した。その結果調査團を派遣することにしたが、その費用全額を支出することが、當時の政府には不可能であつた政府は東京大震災後で出費多く、内外多端であつた。そこで政府は鐘紡にその調査費用の捻出を計つた處、鐘紡は株主總會を開き、調査費用不足額八万円の捻出を可決した。勿論この可決には、社長武藤山治の英斷があつたのは書くまでもない。調査團員の選考は愼重になされ、左記一行が組織された。

團長、鐘紡取締役　緬原八郎
東大教授醫学博士　石原喜久太郎
内務省防疫官　飯村保三
内務省土木技師　谷口八郎
内務省土木技師　田村義正
内務省土木技手　小村松榮
山林技師　石原清逸
農学士　芦澤安平
團長秘書留学生　太田庄之助
通譯　大石小作

田付七太大使の北伯公式訪問と移住地設定の急速化

緬原調査團の派遣は劃期的な行動であつて、アマゾンに日本人移住地選定に大きな役割をもたらしたが、やはりそれを推進させたのは、名外交官田付七太が、自から陣頭にたつて、交通不便なパラー州とアマゾナス州を訪づれ、各州要人と面接、移住地選定につき、忌憚ない意見を交換したからである。田付大使は前年人煙稀な北パラナの玄關**カンバラ**市や、未開發の密林奥ソロの**ブルデンテ**市を訪づれ邦人移住問題に盡す處が多かつた。そこでアマゾン調査團派遣が決定するや、大使は一九二六年（大正十五年）四月十七日大使館囑託粟津金六、聖市總領事館農事部技師江越信胤を隨ゑてベレーンに出發した。そこへ大使館武官海軍中佐關根郡平夫妻も同件した。前任の森本中佐にしろ今回の關根中佐にしろ、軍人でありながら、移民問題には側面から協力助言していた。

パラー州知事ベンデスは、調査團の派遣と大使公米訪問で歡こんだが、一方隣州アマゾナス州知事**エフゼニオ・サーレス**もこの話をきゝ、マナオス市に駐在する名譽領事**レオポルド・マツト**を通じ「是非マナオス市まで足をのばしてもらいたい。アマゾナス州は日本人を歡迎し、

(右)パラー州元知事ベンデス(中)パラー州元知事エウリコ・ダレ氏(左)アマゾナス州知事エフジエニオ・サーレス氏

るに至つた。

南米拓殖株式會社の創立

福原團長はアカラ地帯無償提供の條件を土産に歸國し、その經營案を外務省に提出した。恰度政變があつたので延び〳〵となり、翌年首相兼外相田中義一は、一九二八年（昭和三年）日本實業界のオーソリーチー六十余名を官邸に招待し、その席上財界の長老澁澤榮一子爵の音頭で十二人の進行委員を任命した進行委員會決議の結果、發起人會が設立、發起人の武藤山治、有馬賴寧、村井保固、野村德七、平賀敏、橋爪捨三郎、福原八郎、室田義文の間で會社創立案が檢討された。そこで鐘紡が主体になる事にきまり

アカラ植民地の山焼

（一）一九一八年四月十九日
新會社定款發表
（二）資本金總額二千万円
（三）一株五十円
（四）株式總數二十万株
（五）發起人側二万株、緣故關係募集十七万株、公募株一万株

の定條が成立された。新會社の株募集の發表は意外に好調に進み、六月十二日募集公告、二日後に一般公募は二十八倍の申込みがあり、數日後募集を締切り六月二十九日發起人會を開き、二十万株に對し應募株券五十五万四百九十株の割合を決定、一瀉千里で七月五日第一回の株金拂込み、八月十一日創立總會を開いて、重役陣の選出となつた物凄い超スピード振りであつた。一般公募株の應募が多かつたのは、なんと云つても百万町歩の土地無償獲得で、これの土地を賣却しても、數億円儲かり、株券の配當は莫大なものだろうと、踏んだのがこの前景氣だつたろうと、今日推定される。重役陣は左記の通りに選出された。

社長　福原八郎　　取締役　千葉三郎
取締役　前山久吉　　同　神崎昌太
同　堀朋近　　監査役　染谷寛治
同　橋爪捨三郎　　同　八木幸吉

日本で南米拓殖株式會社が成立したので、今度はパラー州政府との、土地割譲の正式締結をしなければならないので、福原八郎は昭和三年八月二十三日（創立總會開催後十二日目）五反田貴已、新井高次、友田金三の三人を同行、十一月七日ベレーン着、迂余曲折を經て十二月三十日に福原個人名義として、州政府と仮調印した。入植第二隊はやはり八月河内丸で出帆、トメアスー事務所長奧正助、現地事務員星野修、阿部留次郎、服部連太郎等で、十一月十五日ベレーン着、第三隊はベレーン支店長植木壽夫妻、農事試驗場長内藤克俊、精米所主任大和田利雄、關弘夫妻、小川高一、木村建築棟梁と大石秀雄、田中久雄等で、八月橫濱出帆、十二月にベレーンに到着した。そうして僅々半年もならない内に植民地建設の第一歩を踏出した。

翌一九二九年二月八日にはアカラ町に仮事務所を建て、四月十二日には新井高次を隊長に星野修、阿部留次郎、上流より來

コンデ・コマ前田光世六段

如何なる提案にも應ずるつもりである」と、實に鄭重な長文の電報を送つた。恰度福原調査團の到着が遅れたので、この機會にアマゾナス州も公式訪問したいと考え、ベレーン市到着後アマゾン大江を遡航、五月五日から十日まで五日間マナオス市に滞在した。この訪問で「パラー州と同様な條件に應ずるから」とて、百万ヘクタールのコンゼツションを無償で提供することになり、これは後述するアマゾニヤ州の邦人發展史の項に詳細に記述する。兎に角に大使の兩州訪問は有意義であつた。アマゾナス州から歸途ベレーン市に歸り、福原調査團を十七日待合せ、これをパラー州要人に紹介して六月四日歸途につき、六月十七日リオ府に着いた。田付大使は既に歸朝を命令されていたので、七月三十一日歸國の途に就いた。當時の模様を研究すると、田付大使の北伯訪問は移住問題を促進させる上に、重大なる役割をとげたと云える。

移住地の撰定

前述したように調査團は、一九二六年（大正十五年）四月一日にニューヨークに着き、約一ヵ月かゝつてアマゾン行の準備をした。今日でもそうだが、アマゾンの事を調査するなら、ニューヨークでしろと云われている。アマゾンに關する地質、氣候、水利、林相、鉱物、熱帯病、等總ゆる学術書は英文で書かれているし、その研究藏書の豊富さもニューヨーク市の圖書館にあつた。約一ヵ月の後ち、ベレーン市に五月十三日（日曜日）に到着し、六月十四日州政府提供のカツピン河流域五十万町歩の本調査に着手した。福原調査團一行と江越信胤、前田光世、仲野英夫のブラジル側の三名を加えた十二名で「**アンジラ**號」に乗船、六月十六日グアマ河からカピン河に流れる河口**サンターナ・ド・カピン**郡役所に調査本部をおき、そしてカピン河の上流を三週間も調査した。その調査報告は昭和二年九月外務省通商局發行の「伯國アマゾン流域植民地計画に關する調査報告」と、石原喜久太郎博士の「南米衛生視寛記行」に書かれているが、カピン河を撰定しなかつたのは

（一）土地の起伏多く、まとまつた平野が少ない。
（二）濕地多くマラリヤ病多し。
（三）河川に浅瀬多く航行に危險。
（四）農耕に適する肥沃土の部分が少ない。

等であつた。このカピン調査には隨分難儀したらしく、戰後のグアマ米作移住地撰定などのようなデタラメと比較すると、雲泥の差であつた。七月四日調査團は、知事に面會、その結果を報告した處、知事は別の官有地を調査してほしいと、モジユー河流域とアカラ河流域を提供した。その結果アカラ河を調査しここで**アカラ**河下流百五十粁の地點**トメアスー**に四十万町歩、**モンテ・アレグレ**に四十万町歩、軈て後日に**カスタニヤール**一万町歩、**アラゴアス**一万町歩、**シングー**河流域三十万町歩のコンゼツションを撰定し、いよ／＼移住地開拓にまで事業は發展す

び全員退植したこともあつた。實に悲慘な話しで、アマゾンの熱帶地方に、植民地を建設する經驗者が會社主脳部にいなかつたのが、失敗の第一原因であつた。**ポルトガル**人（オーレン植民地）**スペイン**人（モンテ・アレグレ）**アメリカ**人（タンターレン）**オランダ**人（ギヤナ）**イギリス**（ギヤナ）の移住地建設の先進國民さえ、アマゾン河口の植民事業は全部が失敗に終つているのに、未經驗者の集りである日本人ばかりが、成功するはずがなかつた。

第五回までの入植者は一九三〇年まで入植したものの、食料缺乏と犠牲者の墓標をみて、會社に對する不滿は爆發し、一九三一年四月、南拓の契約條項に含まれた小作料三割納入の問題は黃金の垂穗を見ながら、遂に鎌を入れず大爭議となつた。入植者の提案が入れざる場合は稻穗の收穫も辭せずとの必死なものであつた。奥現場支配人ではまとまらず、代表者はベレーン市で福原社長と植木總支配人を相手に交渉した。時も折り會社勤務中の獨身青年も、入植者側の悲慘目も當てられぬ現實に同情共鳴したので、遂に會社側は折れて円滿な解決をみた。一時はどうなることか險惡な雲行が全植民地に漂つていた。

この爭議の結果は

（一）分益制度の廢止（土地愛護の念乏しく、會社と小作人の感情が對立する）

（二）生活資金の貸出、藥價並に運搬費の無料制度の全廢（植民者は依賴心が多く、自主的精神の向上のため）

（三）土地分讓の實行（從來植民者の地區分讓擴張を許可しなかつた）

A地區代金（住宅井戸付）

（イ）第一回植民に對する分（二、一二五〜二、六二六ミル）

（ロ）第二回植民に對する分（二、五〇〇〜三、五〇〇ミル）

（ハ）第三回から第七回までの分（二、五〇〇〜三、〇〇〇ミル）

B支拂方法

（イ）第一回拂込金―第一回植民は一五五ミル。

（ロ）第二回植民―第五回植民は二カ年据置き。

（ハ）第六回植民―第七回植民は三カ年据置き。

（ニ）以後はそれ〲四年賦分納

（ホ）代金支拂殘額に對しては六分の利子を徴收する。

（四）第八回以後の入植者は、獨立植民と、會社直營農場のコロノとに分類す。但しコロノと云えど、日本出發前に一

（上）州知事歡迎の第一回入植兒童（中）アサヒザール橋
（下）アサヒザール區道路

（上）第一回移民上陸（中）移民宿泊所（下）當時のアカラ港

た本郷勇の先發隊が、トメアスーに進み、測量と伐採を始め、五月六日には早くも中央病院を建てた。内藤克俊と生島重一は種苗園を造り、入植者を受入れるため機械鉄工所主任小川高一物品販賣店主任井上良太郎、星野修が任命された。

そしてブラジル現地では、アカラ植民地經營の日系會社が設立され、資本金四千コントス全額拂込み（Companhia Niponica de Plantação do Brasil S/A）ニッポニカ株式會社で、現地役員の陣容は左記の通りであつた。

社長　福原八郎
副社長　千葉三郎
相談役　前田光世
總支配人　平井國三郎
ベレン支店長　植木等
トメアスー支配人　奥正助
植民部長　春日亨
移民主任　臼井牧之助
農事部長　新井高次
試驗場長　内藤克俊
販賣所主任　井上良太郎
教育指導員　丸弘毅
病院長　松岡冬樹
一等軍醫　加藤順二
醫員　戸田善雄

植民者入植開始

一九二八年八月五日會社創立から半年を經ずして、既にアマゾン・アカラ植民地の入植者を募集、そして第一回入植者四十三家族（單獨八名を含む百八十九人）が七月二十四日大阪商船モンテビデオ丸で神戸港を出帆、九月七日リオ港を經て、九月十七日ベレーン入港、二十二日には原始林燒野原のトメアス港に着いた。これをきつかけに、第二、第三と昭和十二年九月までに二十一回三百五十二家族のものが入植した。

入植地は未開の原始林で、移民は一切の食料をベレーン市で購入して入植した。處が白米一俵（六十キロ）を八・九十ミルの高價で買い、これを食つて栽培した籾が、收穫すると、なんと一俵六・七ミル、豆が十ミルでは、第一年目にして早くも將來に對する營農がなりたたなかつた。初年度から不安がつのり、營利主義の會社と裸一貫の入植者の間に、意見の衝突が芽ばえ出した。しかも入植當初から、早くもマラリヤの風土病が蔓延しはじめた。第二回、第三回と入植者は後を斷たなかつたが、經濟的苦境と、風土病の猛襲で全入植者はおののき、特に第四回入植者は「永住の地にあらず」と激昂して、會社の不信を叫

と意氣軒昂にのべた處、武藤山治は「普通の商事會社と違つて植民と云う大事業である。五年や十年でこの仕事が成功するとは思えない。自分は少なくとも二十年先を期待している。そんな甘い考えで仕事をやつてはいけない」と忠告したが、正にこれは植民事業をやる者への「金言」である。破産一歩手前のボロ會社鐘紡を日本一の大會社にするのに、二十年もかゝつた武藤山治にして始めて云える言葉で、福原社長は少し焦り氣味であつたろう。

一九三三年（昭和八年）になつて、カカオは成樹になつたが實が成らず、成長した樹は、次ぎ〳〵と葉が枯れていつた。それが特に目立ちだし、カカオ栽培に不適當である事が解つた時はもう遅かつた。福原社長は責任重大を感じ、この挽回策を研究中の鑛物資源の採掘で、取返そうと思つた。福原社長はモンテ・アレグレ地方四十万町歩の鑛物資源調査に日本から呼んだ松本彬・石川清彦それに生島重一等を派遣し、また各地方を調査させた。また一方**シングー**河上流の鑛區三十万町歩のコンセツションを獲得、二年間の期限つきで事業を開始する契約をまとめた。その内容詳規は、二十年間の州税・郡税の免除以下相當有利なのであつた。この三十万町歩は**アルタミーナ**附近二十五万町歩、**サン・フエリス**附近五万町歩で、この草案を土産に昭和八年歸朝し、翌九年四月第二回拂込金百二十五万円を調達して、その鑛區採掘を日本技師等と調査したが、採算が合わぬとの結論が出た。生島重一の話によれば**アマツバー**州の米國資本KKマンガン鑛山三十万町歩も、その頃に調査済みであつたそうだ。寧ろマンガンに手を出した方がよかつただろう。かくする内にカカオは殆んど枯れかゝり、鑛物採掘は駄目、第二回拂込金も殘り少なくなり、日本の重役間で重大問題となつた。農場經營の大改革とばかり、熱帶作物の權威高木三郎が、新任したが、時既に遅かつた。そして昭和十年四月、井口茂壽郎、神崎昌大兩人が派遣せられ、アカラ植民地の經營に大英斷が下された。

（一）カカオ直營農場の閉鎖（一千町歩三十万本）
（二）コロノ制度の解消
（三）農事試驗場の廢止
（四）社員從業員の整理
（五）モンテ・アレグレ植民地、カスタニヤ農場の閉鎖

この一大旋風が四月三日發表されると全植民者は、突然の事であり明日の生活に困り、橋爪會館に集合し、會社側の不當を鳴らし、責任を彈劾し、福原社長は私財を擲つて、この難局を救うべしと主張した。入植者は暴動化し、あわや重大化しそうになつたので、新任の井口茂壽郎の仲介斡旋で、福原社長は不明を陳謝し、植民者へ慰謝金一万円を出し、その場で責任辭職した。また暴動主謀者の對木、大河原、野口、宮坂、中村の五人は退耕處分となつた。この直營農場の疾風的閉鎖は二百二家族の植民に大きな不安と動搖をもたらせた。井口新支配人は、植民地の自治性を說き、産業組合の强化を計つた。會社としては經費の節減をなし、營利主義を目標に貿易方面に主力を注ぎ、ブラジル産物の輸出、日本製品の輸入などを强化したが、一九三八年（昭和十三年）日支事變の勃發、続いて歐州大戰となり貿易も自然消滅のかたちとなつた。この大事業の完成をみず、植民者の罵聲を背にして、淋しく日本に歸つた福原社長の胸中は感慨無量で、同情を禁じ得ない。著者は今當時を追憶し、福

定の値で地域を買入した者に限り入植を許す。

以上

で円満解決をみた事は植民地のため幸であつた。

野菜栽培組合の創立

これよりさき、入植者は從來の米作一方では、市價が安値で生活必需品も買えないので、各々野菜栽培を始めた。これはベレーン市場に野菜が少ない處から、野菜栽培に特種な才能を有する邦人が着眼したのは當然である。そうこうする内に野菜の売行もよくなり。各入植者の家庭雜費が野菜販売金で出るので野菜を栽える者が多くなつた。ここで會社と爭議のあつた四月に、野菜栽培組合が組織され呱々の聲を揚げた。無一文の貧者ばかりだつたので、南拓と交渉した結果、ベレーン販売所の家賃、ベレーンまでの運送賃、ベレーン市到着の際の自動車賃を會社が負擔することになつた。組合加入費は僅かに一ミルであつた。（當時の勞働者の日給が二ミルであつたから、植民者は本當に貧乏だつた譯だ）

組合長　高田幸之助　　會計　菅井俊雄
副組合長　前田徳藏　　販売主任　村上辰之助

販売主任村上辰之助などは、實に犠牲的に奉仕、店売りだけでは生産物が捌けないので、二十余人の伯人勞働者を傭つて売さばいた。販売所が手が足らないときは、弘・修の二兒の他、学生の高橋勝正少年までも手傳わさせた。売上高が五百クルゼイロを超すと「五百ミル祝」をやり、年間売上高三コントスに達する人には組合表彰狀を贈つた。（現在勞働者の日給一・五コントス也と比較せよ）

遂に大會社の崩解

會社は最初の植民地經營方針と大いに變つてきた。米さえつくつておれば、植民者の懐はよくなり、軈て熱帶植物のカカオ、クアシマ（規那樹）パラー栗、油椰子、ピーメンタ（胡椒）などを植えていけば植民會社は繁榮すると思つていた。處が五年目に早くも凋落の色がみえだした。福原社長はかねて試驗場で試作中のカカオによつて、植民地の更生策を一期に解決しようと、カカオ栽培のため**サンタ・マリア**、**ボア・ビスタ**、**イビチンガ**、**マルキタ**各區に直營農場を設け、春日亭農学士を農場長に据え、第八回以降の植民者は、凡てこの農場のコロノとして使用した。カカオは南北二十度の緯度に適し、世界的に消費量が多いと云うのが見込みであつた。日本で云う**チヨコレート**の原料である。だからカカオ栽培を第一目標にしたのであつた。ピメンタ（胡椒）は蘭領東印度の原産で、南北八度の範圍を適當としているが、嗜好品であるため、世界の需要少なく、これは第二目標にしていた。確に福原社長の考は正當であつたが、一つの缺陷があつた。それはアカラ植民地の如く、ブラジルでも最も瘦地で、米作にしても大原始林を伐採した年だけ收穫し翌年は實らず、他の作物は肥料なしには出來ない處では、カカオが成樹になつて結實しない憂があつた。この事を忘却し、莫大な資金を投じ、會社の全機能を全部カカオ栽培に注ぎこんだのは千慮の一失とも云えよう。

一九二八年（昭和二年）八月二三日福原社長は横濱を出發する前日、東京帝國ホテルで武藤山治招待の壯行會が催された。その席上福原八郎は「五ケ年以内にこの仕事を成功させます」

ミーバ赤痢患者と、続出して、この少人數の植民地に、一時は二百人以上の患者があつて、病院に収容しきれず、橋爪會館に仮療養所を備けたぐらいであつた。この黒水病蔓延のとき失費を度外視して醫療に盡した吉田耕支配人と、看護に當つた菊地文雄、西尾勝利、茂泉政代、西尾花子、篠田冬子の功績は永久に消えない。この猛毒病のため、遂に植民地を見かぎつて、退耕する者多く、毎日トメアスー港からの移轉者は斷えなかつた

マラリヤ病流行當時の羅病者記録をみると

一九三三年一月　**一五八名**
同　五月　**一、三六八名**
同　十二月　**三、〇六五名**（在住者**二、〇四三名**）
一九三四年十月　**二、六三九名**（在住者**二、二二八名**）
一九三五年六月　**三、〇三五名**（在住者**二、三四〇名**）
一九三七年二月　**二、六〇七名**（在住者**二、五五三名**）
同　年三月　**二、六九七名**（在住者**二、五九六名**）
同　年十二月　**一、七四六名**（在住者**二、六二四名**）

在住者より羅病者の多いのは、一人で春秋と二回も羅病したのが多いからで、これでは全植民者枕をならべて床に臥しているようなものであつた。退耕者の統計をみると

一九三七年　**二五**家族（**一一九**名）
一九三八年　**一九**家族（**一一九**名）
一九三九年　**七〇**家族（**四六五**名）
一九四〇年　**六九**家族（**四一五**名）
一九四一年　**一八**家族（**九七**名）
一九四二年　**三八**家族（**二二七**名）
總　計　**二七六**家族（**一、六〇二**名）

これは入植者**三五二**家族の**七八パーセント**で、最後には、僅かに**三八**家族だけが殘つた事もあつた。殘つた人々は經濟的に弱体だつたり、また家族に婦女子が多くてベレーン市方面に移轉しても、自活の出來ない家族ばかりで、やむなく植民地に踏とどまつた。「**惨酷・悲壯**」という言葉がこのマラリヤ病植民地によくあてはまるようだ。

尚ここにマラリヤ病發生時代に死んだ人々の姓名をかけてみる。こんな僅かな入植者で、こんなに死人か出たのだから、ひどかつた譯である。

南伯サンパウロ州の邦人が、アカラ植民地を「いき地獄植民地」とか「猛毒マラリヤ植民地」と呼んで、恐怖の的にしていたのはこの頃であつた。

入植後・間もなく病死した人々

一九二九年二、一九　石井　島市　20才
同　九、二〇　新垣　武　1才
同　一〇、二六　石毛　澄子　2才
同　一一、一九　神永　昭男　2才
同　一二、一五　吉原トメ子　1才
同　一二、二四　大橋　ゆき　29才
一九三〇年一、二九　遠藤　治八　2才
同　二、二五　尾松　伯隆　1才
同　五、三一　土井小太郎　38才
同　八、二二　山口　與人　3才
同　九、四　渡邊キサノ　30才
一九三一年一、一九　日高　逸雄　15才
同　一、二四　前田　トキ　22才
同　一、二六　久保田ウメ　50才
同　三、九　德田　實　2才

同　四、二五　鹽崎市太郎　38才
同　四、二四　須藤　靜子　1才
同　四、二八　梶原　稔　2才
同　五、二三　平間　筆夫　21才
同　五、二三　山口　興重　2才
同　五、二四　永井万里雄　1才
同　七、八　福島　ミネ　27才
同　九、二三　仲山　桂　10才
同　一二、一九　多田　昭之　3才
同　一二、六　林　勝藏　63才
一九三三年一、一　福地ユキコ　1才
同　一、二六　寺崎　昭子　2才
同　一、二三　笠原　イシ　67才
同　一、二八　片木　幸春　1才
同　二、三　田中　福壽　1才

原社長は植民事業の人でなく、寧ろ貿易方面で活躍すべき人であつたと思う。適材適所を誤まつたのかも解らない。

アカラ野菜組合から産業組合へ發展

アカラ野菜組合は一九三一年創立以來順調にはこび、貧しい植民者の生活を潤おい、年々發展した。恰度南拓KKの直營農場閉鎖に依る、植民者の自治制度が強化され、十一月十九日に從來の野菜組合を「アカラ産業組合」に改組した。

理事長　高田幸之助
理　事　土屋　一　　鈴別登良一
　　　　丸　弘毅　　加藤友治
　　　　斉藤円治　　佐藤健吾
　　　　菅江俊雄　　山田義一
　　　　澤田彌太郎

この産業組合の誕生は、井口政策の最も長所を採つたもので海外にある、邦人植民地は何處までも自主的でゆかなければ發展はしないと云う理論に基づいたものである。直營農場閉鎖のため、植民者は一時生活に困つたが、二・三年經つと、自から生活も向上してきた。從來は生産される穀物の販売を、會社が購入販売して獨占していたが、産業組合が結成されてから、生産者が自己の作物を自由に販売する權利を取戻しただけでも、大きな収穫であつた。今から考える笑事である。

一九三七年度には、野菜組合以來第三回目の組合理事の改選が行なわれ

理事長　丸　弘毅　　理　事　佐藤健吾
會　計　加藤友治　　監　事　千葉大平
理　事　土屋　一　　同　　紺野宗吉
同　　山田義一　　同　　山田壽三郎
同　　菅江俊雄　　會計專務　政木正人
ベレン販売所　鈴木一郎

これが一九三九年に

理事長　加藤友治　　會計理事　木村總一郎
専務理事　斉藤円治

と代り、このメンバー時代に、組合は益々充實發展した。當時植民者の生産物は四五万六千百五十四ミルで、組合取扱高は二十万三千十ミルで、約四五パーセントを占めた。同年の収支出計算をみると

剰余金　八、〇一〇ミル　　借入金　一四、〇五三ミル
積立金　八八七ミル　　貸付金　一二、二五六ミル

となつている。

悲惨凄壮のアカラ植民地

マラリヤ病と黒水病の蔓延

一九三五年四月直營農場の閉鎖から、一時は植民者に、前途の不安をいだかせたが、それよりも一番不幸をまねいたのは、マラリヤ病であつた。特に猛毒性と云われるべき黒水病の發生があつた。一九三六年十月二日竹下弘が罹病者で、その罹病者は一週間も經たない間に、その八割までが死亡するという、極悪な病氣である。罹病して三・四日目が最も危險で、それを征服すれば死はまぬかれる事もある。この猛威で植民地は恐怖のルツボと化した。黒水病でなくても、輕いマラリヤ病患者、ア

同　六、二五	江口　保治	52才
同　七、一四	村上　種作	56才
同　七、二五	徳橋　巌	30才
同　七、三〇	土山　秀夫	22才
同　一〇、二六	澤田彌太郎	48才
同　一一、二	徳橋　イワ	57才
同　一一、八	佐藤フシノ	1才
同　一一、三〇	沼澤　末藏	19才
同　一一、三〇	谷川　昭子	4才
同　一二、六	安達　正男	40才
同　一二、一五	關　ケサヨ	53才
一九三六年一、一七	安達マスヨ	1才
同　二、一八	永野　末記	7才
同　四、一八	田中美佐雄	29才
同　四、二九	徳田　セン	38才
同　七、一七	徳橋　芳男	38才
同　七、二七	池田欽一郎	20才
同　八、一四	栗山ミツノリ	1才
同　九、一〇	野口　圭子	4才
同　九、二一	日高マツノ	43才
同　九、二四	山田　昭	2才
同　九、二七	原　久子	7才
同　一〇、三	關　久三郎	55才
同　一一、一	五十嵐久男	2才
同　一二、二七	淵上ケイ子	1才
一九三九年一、一四	永井こゆう	61才
同　二、三	林　トシ	1才
同　二、一九	千葉　猛	1才
同　三、一〇	月候　豊	30才
同　五、二四	土山　政秋	14才
同　七、二三	江畑　ミキ	34才
同　一二、一五	田中　孝	1才
一九四〇年四、二三	村上　あや	42才
同　一〇、一六	岡部　花代	21才
一九四一年一、一	木崎　登	20才
同　一、二八	柳橋ヨソノ	41才
同　三、三一	谷川コスイ	32才
同　五、八	山田　正敏	25才
同　八、一七	木田　キク	33才
同　八、一八	濱口　一男	3才
同　八、二〇	今村　タケ	35才
同　一二、二	今村　靖一	44才
同　一二、七	關　今朝雄	1才

（以上）

◎戰前のトメアスー入植者名簿

第一回　昭和四年九月九日　もんてびでお丸

北海道	野口金四郎	死亡
同	野口惣兵衛	聖州
岩手	佐藤　寿直	死亡
同	及川　信雄	聖州
山形	柳橋権四郎	死亡
同	野口　豊治	スザーノ
宮城	茂原　一男	死亡
静岡	大橋伊太郎	ベレーン
福井	田中光五郎	パラナ
熊本	佐藤　義雄	トメアスー
同	深水　静雄	帰国
北海道	一色喜一郎	ベレーン
北海道	佐藤啓次郎	死亡
同	伊藤　勇	トメアスー
秋田	木村総一郎	死亡
山形	加藤　友治	死亡
同	野口留之助	死亡
福島	神永　勝美	聖州
同	渡辺　源吾	死亡
広島	土居小太郎	死亡
同	清水　義士	スザーノ
同	土居勘三郎	スザーノ
同	日高友四郎	スザーノ
香川	吉原佐次郎	聖州
同	尾松　徳一	スザーノ
同	久保田又一	聖州
福岡	田中　光蔵	麻州
沖縄	普天間朝二	聖州
熊本	村上　種作	死亡
千葉	市原津南三	カパネーマ
同	石毛菊太郎	聖州
同	長谷川貞雄	ベレーン
同	平川　平次	ペルナンブコ
東京	平野　節蔵	マナウス
神奈川	大木　愛吉	聖州
岐阜	辻　頼二	聖州
広島	山田　義一	トメアスー
福岡	小西　茂	聖州
福岡	林　博	聖州
沖縄	与那城忠三	聖州
沖縄	新垣　武喜	聖州
同	国吉　真恒	パラナ

—単独青年9人

北海道	帯川　明	アサイ
同	西田栄太郎	ツパン
高知	南　吾市	死亡
新潟	星　清治	聖州
長崎	佐藤今朝雄	スザーノ
千葉	森　隆	死亡
同	田中　良介	ベレーン
香川	串田小太郎	リオ府
熊本	青木　弘記	帰国

—昭和四年十一月十三日　らぷらた丸

北海道	窪田　萬	聖州
福岡	林　熊男	トメアスー
沖縄	平良　良松	聖州

第二回　昭和四年十二月十一日　さんとす丸

宮城	我妻亀四郎	聖州
同	関　久三郎	死亡
同	庄司　芳吉	聖州
同	桝沢　栄吉	スザーノ
同	菊田　常雄	聖州
同	渡辺　勘七	死亡
同	小原　孫吉	トメアスー
同	相沢　末吉	パラナ
山形	猪股　清七	死亡
同	猪股　武美	死亡
同	寺崎　徳蔵	スザーノ
群馬	中村国太郎	死亡

同　二、一五　坂木惠志　2才
同　二、一七　茂泉澄子　4才
同　二、二三　小笠原勝啓　2才
同　三、一八　桐野直　24才
同　三、三一　前田雪子　1才
同　四、四　佐藤キトシ　33才
同　四、一五　渡邊美　64才
同　五、三〇　小川鶴吉　74才
同　六、二四　小河原信子　1才
同　九、六　成澤ヒデ子　1才
同　九、八　城尾光治　60才
同　一〇、八　片平光子　1才
同　一〇、一五　小出竹藏　81才
同　一〇、二〇　八巻哲　1才
同　一一、一四　代田かね　37才
同　一一、二三　代田好男　10才
同　一一、二八　土山愼一郎　15才
同　一二、二五　助川藤吉　23才
同　一二、二五　助川勇　21才
一九三三年一、一　長野一行　3才
同　一、一三　渡邊ソデ　35才
同　三、一　福地ヨシ子　1才
同　三、九　柳橋アグリ　4才
同　三、一九　藤江金平　27才
同　三、二三　比嘉清政　1才
同　四、二三　千葉こと　26才
同　五、五　川西リリ　1才
同　五、二三　淵上マシュ　2才
同　六、一　中川多利三郎　69才
同　六、六　渡邊國司　2才
同　六、四　野林梅香　1才

同　七、五　庄司キクエ　34才
同　七、七　淵上二三　36才
同　七、一六　小野哲夫　5才
同　七、三一　土山笑子　9才
同　八、一〇　梅木晋二　8才
同　八、一四　梅木ミヨ子　1才
同　八、三〇　山内利藏　44才
同　九、四　川野キヨ　16才
同　九、六　佐藤昌右ェ門　48才
同　九、七　横田昭彦　4才
同　九、一三　竹田サキ　87才
同　九、一七　大河原友子　1才
同　九、一八　阿部みえ　76才
同　九、二三　橋本吉光　1才
同　九、三〇　阿部キエ子　22才
同　一〇、四　渡邊歌子　2才
同　一〇、九　吉居勝　6才
同　一〇、一四　笹井直義　35才
同　一〇、一九　秋吉實美　11才
一九三四年一、一七　多田キクノ　24才
同　一、二七　八巻日和　4才
同　一、三一　岩田民雄　4才
同　三、一四　村瀬勇　1才
同　三、二三　小田政義　22才
同　四、二　小野利雄　21才
同　四、二一　遠藤倉吉　70才
同　五、一〇　上野節枝　1才
同　五、一四　上芝千代子　24才
同　六、二五　佐藤久二郎　1才
同　七、六　中の目忠　19才
同　七、二　黒川ササ子　5才

同　七、三　今村イツ子　3才
同　七、一九　八巻丈夫　1才
同　七、二五　森重平　11才
同　八、七　玉寄和子　2才
同　八、一三　菅野正明　6才
同　八、二〇　菅原小九郎　36才
同　八、三一　高山ハルエ　27才
同　九、一五　城野重記　35才
同　一〇、五　關アミ子　1才
同　一〇、一六　山田スミレ　4才
同　一一、二　代田勘一　52才
同　一一、六　矢野定　47才
同　一一、八　栗山光雄　1才
同　一二、二　小野コフ　16才
同　一二、八　日高文子　1才
一九三五年一、四　錦織良子　10才
同　一、五　松井晋松　62才
同　一、七　池谷藤松　44才
同　一、一四　西尾留吉　64才
同　一、一六　庄司芳雄　4才
同　一、三一　吉田ペドロ　1才
同　二、二〇　竹田㐂子　1才
同　二、二三　高山義秉　15才
同　二、二四　奥江勝江　1才
同　三、八　尾松數義　21才
同　三、二三　梅木タマエ　18才
同　四、三〇　古川クニ　27才
同　九、一三　永野圭一　16才
同　九、一八　古川ヨシ子　1才
同　一一、一六　栗山芳太郎　53才
同　一一、二七　高田幸政　3才

一九三六年一、一一　成澤キミエ　27才
同　一、一三　菅野ハツ　37才
同　二、六　日高孫四郎　22才
同　二、一〇　佐藤德末　62才
同　二、一〇　脇本清　41才
同　三、一六　深水一人　20才
同　三、二六　野口正美　5才
同　四、一〇　小原ミヨシ　15才
同　五、一〇　守田八千代　8才
同　五、一三　横山チヨ　38才
同　五、一九　德田米子　3才
同　五、三一　葉内こはる　54才
同　六、一四　野口喜代子　3才
同　七、五　岡部サク　44才
同　七、九　高橋進　1才
同　八、六　佐藤ハツエ　37才
同　八、一九　柴田八重　32才
同　九、三〇　清田サダ　24才
同　一〇、二　竹下弘　28才
同　一〇、四　田中新左ェ門　21才
同　一一、二六　星野友太郎　47才
同　一二、八　鈴木かずい　45才
同　一二、一一　田中ソノ　51才
同　一二、二三　串田きく　24才
一九三七年一、二一　宇都宮たか　28才
同　一、一七　武田恒子　6才
同　一、二九　前田譲　4才
同　二、一五　竹下トキエ　12才
同　三、七　山下ナル　41才
同　五、九　澤田トネ　42才
同　六、三　小山シズ　57才

北海道　福島清次郎　トメアスー

——昭和六年五月八日　ぶえのすあいれす丸

福島　田中忠吉　死亡

第七回　昭和六年八月五日　もんてびでお丸

北海道　柴田　忠　　山形　木田周次郎　ベレーン
同　林　勝蔵　?　　山口　河野四郎　?
同　松尾　徳吉　?　　福岡　岩村滝三郎　?
同　森谷　常助　?　　同　内山　藤吉　?
同　瀬口　広次　?　　愛媛　小笠原右馬　?
同　林　耕作　バストス　　宮崎　吉留　清　?
同　前田　徳蔵　聖市　　沖縄　太田　政雄　?
兵庫　中山善五郎　?

——単身青年三人

静岡　大獄　一　ベレーン　　愛知　山本　栄二　ベレーン
長野　嚢輪　操　ベレーン

第八回　昭和六年十一月十一日　さんとす丸

北海道　中川　初雄　リオ　　宮崎　桐野　重雄　?
山形　渡辺　兼吉　聖州　　同　吉川　矩寛　マラニオン
同　山口鷹之助　リオ　　福岡　木下　又一　トメアス
同　高橋惣十郎　死亡　　同　野上勇次郎　死亡
同　佐藤　学　聖州　　同　野林仁三郎　死亡
長野　村上辰之助　死亡　　広島　長野　実　ベレーン
広島　谷川　喜一　聖州　　熊本　荒牧　近宗　マラニオン
同　槍別登良一　トメアス　　愛知　竹村　一雄　ベレーン
同　槍別田一　聖州　　千葉　山本善三郎　聖州
同　今村　靖一　死亡　　大分　黒川　夏次　聖州
山形　秋葉倉之助　アサイ　　沖縄　島袋　仁和　聖州
同　秋葉　朝次　聖州　　同　多和田真蒲　聖州
北海道　能登　伊作　?　　同　福地　清睦　聖州
福島　小椋　良助　?　　同　比嘉　山吉　聖州
新潟　笠原　三雄　ベレーン　　同　玉寿　有徳　聖州

——単独青年四人

静岡　立岩　助信　ベレーン　　滋賀　村井　宗祐　?
長野　松村浩一郎　マラニオン　　兵庫　藤原　精一　死亡

——昭和七年一月十四日　もんてびでお丸

熊本　永野　豊喜　トメアス　　静岡　鈴木　清吾　死亡

——昭和七年二月八日　らぷらた丸

福岡　池田　忠蔵　トメアス　　新潟　細田　徳平　マナウス
宮城　小島文四郎　帰国　　香川　関　国久　?

第九回　昭和七年七月二日　もんてびでお丸

北海道　阿部　清雄　?　　福岡　菅原小次郎　?
宮城　斉藤　円治　死亡　　宮城　千葉　太平　死亡
北海道　山内　善一　?　　同　佐藤　聡治　帰国
同　野口　虎蔵　　同　千葉　茂　帰国
同　堀口　清次　帰国　　埼玉　柏浦　正明　スザーノ
同　木下庄五郎　　同　村田初五郎　スザーノ
同　江畑　家俊　トメアスー　　同　星野久太郎　スザーノ
同　平坂　豊七　聖州　　熊本　中川　佐平　聖州
山形　設楽　定吉　聖州　　同　古家　勇　聖州
同　奥山　賢治　聖州　　同　淵上　仁三　聖州
同　奥山　正　聖州　　同　城尾　末吉　死亡
同　加藤　新蔵　聖州　　同　城野　重記　死亡
広島　赤木　勝三　?　　岡山　玄場　郁　レジユプ

第十回　昭和七年八月廿四日　ぶえのすあいれす丸

北海道　今　米太郎　リオ　　福島　片平　七郎　死亡
同　藤橋　銅三　トメアスー　　同　佐藤　健吾　スザーノ
同　助川　藤松　聖州　　東京　崎山　茂　マウエス
同　小出　孝　帰国　　同　岩間　敬造　トメアスー
同　成沢　誠志　聖州　　新潟　横山　健一　トメアスー
同　対木　佐珂　北巴ウライ　　熊本　山口　則義　?
同　土山　五郎　死亡　　広島　小田　政義　?
宮城　佐藤久三郎　モジ　　熊本　古家　真澄　聖州

高知 高橋太郎 聖州　兵庫 田中健太郎 スザーノ
同 横川勝旗 聖州　同 内橋太郎吉 死亡
同 山脇政清 スザーノ　茨城 田村茂 帰国
香川 片木彦三郎 聖州　熊本 尾花喜代太 聖州
大分 佐藤肇 聖州　同 合志充穂 リオ府
福島 菅野総治郎 死亡　同 坂本恵 ベレーン
同 高田幸之助 ベレーン　宮崎 細江嘉一郎 マラニオン
同 八巻七郎 聖州　同 栗山芳太郎 リオ府
同 斉藤亀三郎 聖州　沖縄 宮里三郎 聖州
同 遠藤滝三 トメアスー　福岡 秋田留吉 聖州
同 斎藤長七 スザーノ　同 野口好之助 リオ府
静岡 加藤忠彦 ベレーン　同 伊藤一三 聖州

――単独青年一〇人

北海道 坂本文蔵 ベネズエラ　福島 佐藤義彦 帰国
同 林義光 聖州　長野 宮崎一郎 死亡
同 坂下市蔵 死亡　香川 矢野権治 ベレーン
山形 大沼春雄 トメアスー　同 西浦国明 帰国
同 押切他男 トメアスー　大分 後藤朝一 聖州

第**三**回 昭和三年一月七日 **まにら**丸

宮城 古山善右門 スザーノ　北海道 永井文雄 死亡
同 高野政雄 ?　山形 山口末蔵 南パラナ
同 平間肇夫 死亡　同 会田与助 聖州
静岡 小川鎌一 ベレーン　熊本 沢田弥太郎 死亡

第**四**回 昭和五年六月廿九日 **さんとす**丸

山形 山口清松 帰国　千葉 丸熊男 スザーノ
同 山口好衛 死亡　同 久我哲夫 聖州
北海道 野口清繁 ?　同 菊地文雄 トメアスー
岩手 多田辨三 聖州モジ　福島 大河原寅一 聖州
同 多田礼三郎 聖州モジ　岐阜 村瀬周一 聖州
宮城 佐藤昌右門 帰国　京都 梅田喜代治 聖州
同 高橋覚之進 リオ府　同 安達正男 聖州

島根 渡辺仙吉 マラニオン　新潟 仲丸佐市 死亡
愛媛 塩崎市太郎 死亡　同 片倉留治 ?
長崎 古川勝海 帰国　島根 田中秀夫 ?

第**五**回 昭和五年七月廿三日 **りおでじやねいろ**丸

北海道 立花鱗太郎 ?　宮城 佐藤慶男 リオ府
同 笹野福治 リオ市　同 遠藤良治 ?
同 山田一介 ?　千葉 安達光治 ?
同 長田正平 ?　岐阜 大橋合松 ?

――昭和五年八月廿七日 **もんてびでお**丸

島根 徳田数恵 トメアスー　栃木 福田四郎 ?

第**六**回 昭和五年十二月一日 **さんとす**丸

北海道 渡辺慎吾 リオ府　山形 設楽猶次 死亡
山形 阿部正 ベレーン　同 佐藤己三松 帰国
北海道 江口精三 ベレーン　同 岸善助 死亡
同 藤江主馬助 死亡　同 阿部佐吉 帰国
同 前田勇 聖州　同 菅江俊雄 死亡
同 今井吉蔵 聖州　同 鈴木一郎 ベレーン
同 田中忠吉 死亡　同 渡辺修徳 聖州
同 小黒盛治 ?　同 梶原七郎 ?
同 脇本清 死亡　同 紺野宗吉 ベレーン
青森 杉山義見 マナウス　香川 久保田藤太 聖州
宮城 小野利助 聖州　愛媛 森政市 聖州
同 小林精一郎 聖州　福岡 上村唯一 聖州
福島 草野清政 聖州　同 手島清 北巴・ウライ
長野 武田勘一 聖州　同 林貞助 聖州
兵庫 川越邦夫 トメアスー　同 田中重雄 聖州
東京 山口菊弥 ?　同 月候豊 死亡
神奈川 赤塚仁三 ?　沖縄 照屋喜志三 聖州
鹿児島 川野千里 リオ　同 高良加目 聖州
同 土屋一 死亡

――昭和六年一月七日 **りおでじやねいろ**丸

北海道　根本美之吉　聖州　広島　川竹友太郎　？
同　中之目源吾　聖州コチア　同　和田茂二　トメアス
同　葉内善四郎　聖州　同　渡辺一　聖州
同　横山好見　死亡　山形　内谷忠雄　スザーノ
同　沢口清喜　聖州　熊本　小山享　？
同　瀬戸栄雄　聖州　北海道　吉田甚次郎　北巴マリンガ
愛知　山口庄次郎　北巴アサイ　同　西崎賢治　ベレーン

—単身青年三人

静岡　渡辺貞治　？　静岡　小沢時雄　？
同　山田準次　？

第**十七**回　昭和九年八月廿四日　**あふりか**丸

北海道　明石清松　聖州　奈良　中上恒太　聖州
同　鎌田嘉吉　聖州　徳島　森西藤一　聖州
同　蒲野梅松　聖州　北海道　西尾勝利　トメアスー
同　明石健太郎　聖州　同　津田新八　聖州
同　清水富三郎　聖州　同　岡部重良　死亡
同　久保田長次　聖州　熊本　村田末男　死亡
山形　結城涔経　聖州　同　木崎街　北巴パラナ
同　沼沢谷蔵　トメアスー　同　木下茂　死亡
福島　野崎経蔵　聖州

昭和十年四月廿九日　**さんとす**丸
姓名不明（以後直農営場閉鎖）

第**十八**回　昭和十年六月廿三日　**あふりか**丸

北海道　林鹿太郎　聖州　福島　斉藤林蔵　死亡
同　永井橋　死亡　広島　野原啓太郎　トメアスー
山形　阿部与之助　死亡　福岡　本木はつ　ベレーン
同　阿部繁雄　聖州

第**十九**回　昭和十年四月廿三日　**ありぞな**丸

山形　高橋金太郎　死亡　福岡　今里甚一　聖州
熊本　梅井一男　？

第**二十**回　昭和十一年四月廿三日　**あふりか**丸

広島　日高薫実　ベレーン　熊本　大村義一　聖州
同　山崎貞美　死亡　同　渡辺含　聖州

第**廿一**回　昭和十一年七月廿四日　**あらびあ**丸

広島　原常雄　聖州　広島　住吉広蔵　聖州
同　武田竜　聖州　同　谷末繁美　トメアスー
同　市原善市　聖州　長崎　中村善作　聖州

—単独三人

広島　住川行人　聖州　広島　正木正人　ベレーン
宮城　千葉ふみ　トメアスー

—昭和十一年九月二十日　**ありぞな**丸

広島　上岡四方三　聖州　長崎　宮崎善三郎　聖州

—昭和十二年九月　**ぶえのすあいれす**丸

福島　真根井孝門　トメアスー

以上の人名簿をみても在植者が、如何にサンパウロ州方面に移動したかが解る。実際は血の小便をする黒水病に罹るのが、恐ろしさに退散した者が多かつた。

トメアスー植民地句集「樹海」より

稲妻や隙間ばかりの移民小屋　江畑杜志
來賓はおほむね伯人移民祭　田邊龍川
ポ語和語の新墓碑ふえて墓地の秋　山本清歩
アマゾンの跳に馴れて移民呆け　横倉牧民

アカラ以外にも集團地

モンテ・アレグレ農場

アカラ植民地を南拓第一農場とすれば、モンテ・アレグレ農場四十万町歩は第二農場と云われるべきで、この地帯には一八〇〇年頃パラ州知事ラウロ・ソードレが、**マノエル・バラータ**

岐阜　戸田子郎　トメアスー　｜　兵庫　豊永艶雄　リオ

——単身青年二人

第十一回　昭和七年十一月　りおでじやねいろ丸

北海道　田中正実　｜　同　尾形与一　聖　州
同　高松丑松　ベレーン　｜　埼玉　米沢重男　聖・イザベル
同　江刺家信　死　亡　｜　同　稲垣五三　カパネーマ
山形　渡辺八郎　トメアスー　｜　同　長沢賢三　カパネーマ
同　竹田三三男　聖　州　｜　熊本　山口木治　聖　州
福島　中塚初太郎　聖　州　｜　同　野中与作　帰国
同　渡辺俊夫　聖　市　｜　同　平木俊行　聖　州
広島　長野義明　死　亡

第十二回　昭和八年四月十六日　りおでじやねいろ丸

北海道　渡部藤五郎　聖　州　｜　同　酒井忠次郎　聖　州
同　渡部惣五郎　聖　州　｜　同　伊藤繁雄　聖　州
同　諸岡一郎　？　｜　同　吉沢弥作　聖　州
同　伊藤弥七　？　｜　秋田　加藤三三郎　トメアスー
同　風間伊五郎　ツウパン　｜　同　木村正三郎　トメアスー
同　風間貞　聖　州　｜　広島　松井礼次　？
同　笹井徳一郎　聖　州　｜　北海道　白島信夫　聖　州
同　笹井直義　聖　州　｜　熊本　若杉利治　パラナ
山形　阿部金作　聖　州　｜　広島　錦織常一　聖　州
同　伊藤亀之助　死　亡　｜　同　上野盛夫　聖　州

第十三回　昭和八年四月十六日　はわい丸

北海道　岩田助五郎　？　｜　福島　佐藤正男　聖　州
同　河内卓三　ベレーン　｜　長野　柴田照司　トメアスー
同　河内東一　カパネーマ　｜　埼玉　池田広近　？
同　黒沼藤丸　聖　市　｜　同　白石万次郎　？
同　橋本政助　？　｜　広島　細川悦次郎　トメアスー
同　河内作右門　？　｜　島根　諸富八治　トメアスー
山形　高山鉄蔵　ベレーン　｜　広島　梅木栄一　スザーノ
同　四釜信造　ベレーン　｜　同　岩永恵之助　？
広島　迫田政次郎　聖　州　｜　熊本　坂口広　？
同　小出義雄　聖　州　｜　同　田尻政作　聖　州
愛媛　渡辺友逸　カパネーマ　｜　同　矢野定　聖　州
熊本　福山正利　？　｜　奈良　上芝新次郎　北巴　アサイ

第十四回　昭和八月八月廿八日　あらびあ丸

北海道　山口寿五郎　リオ　｜　同　岩田栄吉　聖　州
同　中野誠信　モジ　｜　広島　松岡倉多　リオ
同　浅川勝二郎　モジ　｜　静岡　中島繁太郎　聖　州
同　大串駒雄　トメアスー　｜　同　池谷福松　死　亡
山形　武田清志　トメアスー　｜　山形　阿部清松　聖　州
同　松田良昌　聖　州　｜　熊本　前田寅雄　聖　州
同　渡辺福蔵　聖　州　｜　同　竹下勝二　死　亡
同　松岡清松　聖　州　｜　同　横田憲五郎　死　亡
北海道　鈴木与惣吉　死　亡　｜　同　守田末熊　聖　州
同　菊地藤吉　死　亡　｜　同　御法円竜　ベネビデス
同　清田卯一　死　亡　｜　同　渡辺兼吉　聖　州
同　岡部正敏　死　亡　｜　福岡　秋吉実蔵　聖　州
同　湯浅泉　聖　州　｜　同　山下雅太　聖　州

——単身青年二人

宮城　藤堂勝次　スザーノ　｜　宮城　千葉力　帰国

第十五回　昭和九年三月廿七日　あふりか丸

北海道　風間信一　聖　州　｜　山形　五十嵐明　ベレーン
秋田　高橋弥一郎　｜　同　梅津義雄　聖　州
同　高橋猪代治　聖　州　｜　同　東海林亭　ロンドリーナ
宮城　村山勝右門　聖　州　｜　同　結城善吉　リオ
熊本　福岡末七　アマツパー

——単身青年四人

秋田　佐藤司　スザーノ　｜　福島　佐藤新　スザーノ
広島　蒐原幸三　？　｜　兵庫　遠藤晴美　？

第十六回　昭和九年五月廿二日　ありぞな丸

北海道　三輪金太郎　聖　州　｜　同　高沢増栄　聖　州

ツト島）上野浩爾（モンテ・アレクレ）の五人のみで、田路龍哉（北パラナ）西出外吉（マリンガ）林俊（聖州）林（聖州）の四人と、德本（桐生高等工業出身、一九三三年黒水病で死亡）稲餅（四國出身で農学校卒、一九三三年マラリヤ病で死亡）眞鍋（伯人と結婚後一九三四年胃潰瘍で死亡）の三人が病氣死亡で判明している他は、その生死さえも判らない。然しアマゾン邦人を語るとき、この大阪ＹＭＣＡ青年開拓團が、モンテ・アレグレに入植した事を忘れることはできない。

カスタニヤール南米企業組合農場

現在ブラガンサ鉄道沿線で、最も繁榮しているカスタニヤール市に一九二九年頃「邦人企業組合農場」があつた。一九二六年（大正十五年）に福原八郎が南米調査の旅にのぼる途中、ニューヨーク市で北米在留中の森村組の村井保固を始め、數名の有志が「將來アマゾンに進出したいから、その基地として有望な土地を購入してほしい」と申込んだ。福原もその主旨を諾し自からその組合の株に出資し「南米企業組合」を組織した。福原は同年ベレーンを去る七十二粁の地點カスタニヤール地域にある二・七七〇町歩の農場を伯貨一六五コントスで購入した。この農場は甘蔗農場で、豪壮な住宅のある他に、驛から六粁も輕便鉄道馬車も通つておつた。總支配人に仲野英夫が駐在していたが、仲野の死後、北米から不島八郎が赴任、間もなく不島も北米に歸朝した。

この農場を遊ばしておくのも惜しいものだと、一九二九年に南拓農場試験場として使用することに決定、内藤克俊や生島重一等が、總ゆる熱帯植物を栽培した。生島重一技師によれば、規那樹＝八、四三九本、カカオ＝二五六、アンヂローバ＝四、七七五本、セードロ＝二、四六六、カフエー＝二、一一〇本、ランジア＝一、五八五本、カカオ・ペルー＝一、三三六本、タプアス＝八、四六本、アバカテ＝五五六本、グワラナ＝三六〇本、ココヤシ＝二五六本、油＝ヤシ一四〇本、パラ栗＝八五本、胡椒＝一、二五〇本、サプカーヤ＝五四本、肉桂＝五二本プシュリー＝三〇本、コラ＝一九本、丁字木＝一五本、などが植えてあり、全く北伯隨一の農事試験場の觀があつたと云われていた。

昭和五年北米から管理人西村龜太郎が渡伯して、その隣接地の土地數百町歩を購入し、サンパウロ州から西原清東を招き一大米作地を經營した。西原は高知縣出身の代議士で、北米テキサス州で米作王たりし人物、そして同行した片岡治義は高知縣人でブラジル第一回移民笠戸丸組の指導者でもあり、高橋勝叡や星井友一も米作研究者であつた。然し當時は機械農が開けていないアマゾン地域のこととて、西原は才能を現わしきれず、しかも六十を越していたので日本に歸つた。その後に片岡が一人踏み止まつた。昭和九年七月から木本七郎（福原八郎實弟）が入植したが、南拓事業縮少で農場閉鎖、片岡・木本の二人のみが自作農として踏みとどまり淋しく暮らしていた。この土地は第二次大戰で州政府管理となり接收され、軈て州民に分讓された。

山田義雄と「オーレン」開拓

いまベレーン市で活躍している山田義雄は、やはりアマゾン邦人先驅者の一人である。若くして世界漫遊の旅に出た快男子

植民地を創設、スペイン人を入植せしめた處であつた。入植後マラリヤ病の蔓延とゴム景氣のため移民は分散した。またその後にセアラー州、ペルナンブツコ州の難民が入植したり、その近隣に**イングレース・ソーザ**植民地が開設されたりしたが、發展はしなかつた。一九二九年（昭和四年）十一月南拓會社の農事部長新井高次農学士が、關弘・阿部留次郎等を引連れて、河岸から三十粁奥の地點に本部を設け、百三十五町歩を伐採、會社直營農場を建設した。農場と云うより最初の事ではあり、試驗場と云つた方がよかつた。農場支配人は仲野英夫であつた。土地肥沃で原住民が煙草を栽培していたので適地と解り、大和田利雄（日本煙草專賣局棒野農場勤務）が煙草栽培に全力を注いだ。將來棉花栽培の一大植民地を設けるべく、大江沿岸の**ブラシニヤ**港まで、鉄道を敷き、ブラシンニヤ港には日本貨物船一万噸級が横づけになるような港灣計画などがあつた。農場には押切他男・長谷川保二・佐藤忠雄・近藤秀夫の各青年、植民地には杉山養見なども住んで、着々事業を進めていたが、昭和十年四月の事業縮少方針で閉鎖し、第二次大戰で權利は自然消滅した。

大橋忠一アマゾンに土地購入

大橋忠一は外交官で後に、滿州國外交部長にまでなつた硬骨漢だが、一九二七年（昭和二年）四月頃ロス・アンゼルスの領事をしていた。同年本省通商局第三課長に榮轉する歸途、アマゾンを視察、約四ヵ月も滯在しパラー、アマゾナス兩州を視察アマゾン邦人進出にさきがけ、自から範を示す意味でブラガンサ沿線**カスタニヤール**町郊外に五十町歩、マラジョー島**タラリーニヨ**町郊外に二百町歩の土地を購入した。特に大橋忠一は日本に歸つてからも、福原調査團の實現、そして南米拓殖會社創立にも、側面的に一役をかつた。

ＹＣＭＡアマゾン開拓團

女性のいない處に、植民地は發展しないと云うが、その實例がこの開拓地である。現在にしてもパラナ州ドラードスの產業開發青年隊の事業が、うまくいつていないのはよい例である。元聖市總領館書記生五反田貴已は、一九二八年八月、南拓福原社長に隨行して、アマゾン調査團に隨行し、翌年一月再び日本に歸朝した。この五反田が、大阪にＹＭＣＡ海外協會を設立、その常務理事となり、同協會で「アマゾン開拓」を目的とする第一回の開拓練習生を募集した。アマゾン移民はレベルの低い農民が多いから、將來それ等を指導する役目をはたす意味で、農学校、中学校以上の学歴ある者を條件として選衡した。しかも心身鍛練のため、一ヵ年共同猛訓練をなした。出發前淀川の三角洲で野菜作り（午後）一年間大阪市内で野菜賣り（午前）ＭＣＹＩで葡語勉强（夜間）、そしてベレーン到着後も郊外で炭燒き、野菜作りをやつた。その操志堅固な青年四十七名が、一九三一年五月十九日りお丸で神戸を勇躍出帆、七月ベレーン到着、モンテ・ブレグレの**サンタ・ローザ**農場に入植するや、半年を經ないうちに、團長排斥に端を發し、意見の衝突、空漠無味乾燥に對する逃避感などで、一人去り、二人去りして、遂に解散となつた。現在團員のうち、アマゾンに住む者は副團長平賀練吉農学士（トメアスー）成瀨義治（トメアスー）森川春一（ベレーン）近藤秀夫（トメアスー）石田勝之助（トロンベ

かつた。州政府はことの成行を重大化し、ベレーン市附近の邦人五十余家族をアカラ植民地に軟禁した。アカラ植民地はベレーン市に出るに船舶で河を出る以外は交通機關なく、戰時中の捕虜收容所としてもつてこいであつた。この焼打事件を最後に南米拓殖會社の機能は全部州政府の手に移り、井口茂壽郎支配人以下高級社員は交換船で歸國し、支店長代理星野修以下、トメアスー總務戸田子郎、眞根井孝門、庄野嚴美等の事務員も皆植民地にたてこもり、第二次戰時中の暗黒軟禁時代が始まつた

百万ヘクタルアマゾナス産業研究所の創設

アマゾナス州にも

パラー州邦人進出に刺激されて

一足先にアマゾン興業株式會社

「マウエス植民地を創設」

ヴイラ・アマゾナスから、**パラナ・ド・ラモス**を遡航すること六十三粁の奥に**マウエス**市がある。インヂオのマウエス族が住んでいたし、長生の妙薬グワラナーの唯一の産地であつた。このグワラナの栽培に着眼したのが藏前高等工業出身の大石小作であつた。大石は一九二三年（大正十二年）自費をもつて歐米諸國視察にのぼり、歸途南米に入り、農業・工業諸般の研究中、たま／＼大正十五年福原調査團がきたので一行に加わり、アマゾン視察をなした。同調査團終了後に、單獨行動をとり、マウエス郡に入り、グワラナーの特産物を發見、ここで邦人植民地の計画を立て、州政府土地拂下げの諒解を得て昭和二年歸國した。幸い同志澤柳猛雄（元文相澤柳政太郎實弟）小川龜重などの賛同を得たので、一九二八年（昭和三年）九月六日、資本金廿五万円、株式引受人員百八十人、引受株數七・六八二株植民地面積二万五千ヘクタール、株主は一株二十五円とし、二十株以上出資者は植民地内の土地十五ヘクタールを無償で獲得條件で「アマゾン興業株式會社」の創立總會が設立した。

社長　澤柳猛雄　監査役　塚原嘉藏
取締役　大石小作　同　柏田忠一
同　小川龜重

この會社は後述のアマゾニア産業研究所より一足先きにアマゾンに乘込んだ會社であつた。發起人大石小作は九月六日の株式創立總會を待たずして、同年五月十七日さんとす丸で神戸を出帆し、社員三石久、久保田喜久郎、増田太郎、唐木道雄、羽野鶴雄、尾崎貞吉、石田喜由の七名を同行、マウエス市に到着した。九月五日から豫定地一〇五町歩を伐採し、そこを焼拂いグワラナー四万五千本を新植した。いま考えてみると、州との正式契約のないうちに原始林を伐採したり、グワラナーを植付けたりしているのだから、無手勝流でもあつた。しかもそれが株主創立總會前ときているから、無茶にも程があり、大石小作ワンマスの計画があり過ぎるし、後に破産するのは當然であつ

だが、この山田がアマゾン進出を考えた。伯人**アグスト・カブヴアレイロ**が一九二四年（大正十三年）二月二十一日パラー州政府と、官有地十万町歩の無償拂下げを締結した。彼はコンゼツションを南拓に譲渡するか、或いは南拓に共同出資させ、開拓する案をもつていたが、南拓は拒絶した。そこでこの土地の利用化をベレーン市の前田光世六段に計り、前田は柔道關係で知人である在日本の山田を紹介した。山田はここで同志村松聰吉と共に一九二八年（昭和三年）渡伯し、リオ市でカヴアレイロと事業經營に關する契約を結んで。途中村松聰吉は脱退したが、山田はその會社組織のため直ちに歸朝した。然しその「コンセッション」の有効期限一九三〇年六月末日までに、會社が結成なされず、遂に一九三一年二月十二日の州令で無効を宣せられた。日本に於ける山田義雄のアマゾン進出は、これで立消えになつたかの感があつた。

處がこの時に、親友であつた前田柔道六段所有のオーレン郡内二、六〇三六町歩の「前田コンセッション」が浮び上つた前田は南拓アマゾン進出前後の功績をかわれて、ペンデス知事から前記の州有地開拓の「オプション」をもらつていた。この選擇權は期間二カ年であつたが、これが一九三〇年ゼツリオの革命政權で全部無効となつた。然し當時の州知事バラタ大尉（後の州知事・上院議員故人）は、特に「前田六段コンセッソン」のみ契約有効期限を許した。そこで前田六段は「カヴアレイロ土地問題」で空しく日本で待期した山田義雄にこの趣を傳達し、その開拓をうながした。山田はすぐ渡伯、一九三一年その土地の測量を行ない、拓務省から五万円の補助金をうけ、同年十月ぶえのす丸で再渡航し、開拓に着手した。そして靜岡縣人大獄一、茂木勇、竹村一雄、山本榮二、立岩助信、袋輪操、土山五郎などの青年が渡伯し、大いに開拓に健斗した。然し資金欠乏とマラリヤ病蔓延で開拓は困難、遂に事業を放棄し、山田はオーレン町で小さい雜貨店を開いて窮狀の打開に邁進、他の青年は命からがら四散した。三十年後の現在山田はベレーン市邦人第一の豪商となり、大嶽一は三井物産ベレーン支店勤務、竹村一雄はベレーンで自動車部分品販賣店、山本榮二は海協連アマパ駐在員、立岩助信はコッケイロ植民地で獨立、土山五郎袋輪操もベレーン郊外で獨立、今日を有終美に飾つている。茂木勇のみが昨年輪禍で死亡したのは惜しかつた。

塗炭の苦境に大東亞戰爭勃發

一九四一年十二月の日本軍眞珠灣攻擊は、在伯同胞の生活を暗黒のルツボに追いこんだ。しかも南伯の如く邦人の多い處ならいいが、アマゾンの如く邦人の少ない處では特に壓迫は酷どかつた。アカラ植民地は州警兵によつて、全部家宅搜査をうけた。邦語會話の禁止、三人以上の集合は嚴禁、植民地の生產物販賣權は州任命の管理人によつて左右され、一切の機能を失なつた。このため多くの邦人產業組合は經濟的になりたたず崩壞した。その上に組合員は「敵國人」というレッテルを貼られ身のせまい思いをしなくてはならなくなつた。

處が一九四三年八月ロイド・ブラジレイロの所有船**パエペンデー**號がベレーン沖で獨潜水艦から擊沈されるや、この悲報のためベレーン市近郊の暴民は激昂、樞軸國民の住宅、商店、事務所、倉庫などが襲攻された。この燒打事件のため、家財道具を失なつた邦人も多く、着のみ着のままで姿をかくした者も多

単独青年

県	氏名	消息
北海道	佐藤武雄	？
宮城	庄司忠三	？
東京	宮内多賀夫	？
千葉	山中新之助	？
群馬	勅使河原要	海協連本社
同	宇野邦夫	死亡
静岡	野澤曉	マウエス
同	白柳敏男	マナウス
新潟	長井次郎松	死亡
石川	廣瀬友二	
愛知	小島五三	帰國
同	杉浦初二	北巴マリンガ
同	眞木勝雄	？
大阪	奥村久右門	？
鳥取	山根良忠	イタコチアラ
廣島	竹下弘	
高知	長尾誠四郎	オビドス
鹿児島	種子田秀雄	マウエス
同	種子田光二	？

◉第二回入植者（昭和五年六月廿九日さんとす丸）

県	氏名	消息
北海道	鈴木信次郎	トメアスー
同	鈴木正一	帰國
同	島田幸之助	バイア
青森	泉仁一郎	帰國
静岡	楠薫	聖州
廣島	河野與平次	死亡
岡山	淺野輝藏	死亡
広島	弓場井末松	聖市
島根	岩田清	マナウス
山口	岡田秀臣	パレンチンス
神奈川	五味國武	死亡
熊本	東春夫	死亡
同	本田光衛	マナウス

単独青年

県	氏名	消息
宮城	小出秀雄	自殺
同	同一郎	ウリクリツバ
同	齋藤良雄	？
同	大野左門	？
同	大野文吉	死亡
同	大野一悦	マウエス
千葉	藤平亨	？
栃木	増田茂七	？
群馬	富岡四郎次	養老院
長野	市川清正	？
大阪	赤石幸男	？
東京	蛭田勝雄	死亡
同	武藤圭次	？
同	鹿倉幸作	死亡
同	大久保繁次	？
静岡	山本修三	？
同	相川卓彌	イタコチアラ
同	栗山彌一	マウエス
岐阜	樋口敏一	？
同	野原武夫	？
大分	中尾文司	？
同	立川倘一	イタコチアラ

県	氏名	消息
大分	手島道男	？

◉昭和五年七月廿三日　りお丸

県	氏名	消息
北海道	田中喜代治	マナウス

◉昭和七年七月二日（もんてびでお丸）

県	氏名	消息
岩手	西野生一郎	？
熊本	小代平次郎	？

単独青年

県	氏名	消息
富山	村井賢三	？
同	皆川徹二	？
同	皆川武治	？
広島	橘道信	？
同	岡田道雄	？
同	相澤知明	？

◉昭和七年八月廿四日（ぶえのす丸）

県	氏名	消息
佐賀	衣川滋雄	聖市で死亡

海外殖民學校と
再建のマウエス植民地

前記のアマゾン興業KKのグワラナ植民地の悲境に際し、一九三二年（昭和七年）に東京にある海外殖民学校長崎山比佐衛が、学校經營を主事今井修一に讓り、マウエスに分校設置を兼ね、永住の目的で渡伯した。ここでアマゾン興業KKの入植残留組も少なからず意を強うし、荒癈になつていた舊會社直營農場四万五千本のグワラナの手入れをし、その収益で植民者相互の扶助をした。そして昭和八年二月林久治郎大使のマウエス訪問にも、その費用をまかなへたし、同年六月在住者五十二名をもつて「マウエス日本人會」も結成された。

役職	氏名	役職	氏名
會長	石田喜由	幹事	武富儀一
副會長	内山健吉	同	蛭田勝雄
同	古川正清	同	五味國雄
會計	岡田秀臣	同	吉岡榮
同	久保田喜太郎		

た。州政府との契約は一九二八年十一月十七日であつた。

會社の事業本部百〇五町歩には事務所、植民者仮宿泊所、診療所、倉庫、マンジョカ製粉工場などが建設されたが、不便なことにこの本部と、二万五千ヘクタールの植民地とは、陸續きでなく、交通は船舶によるより他になかつた。この交通不便も會社崩解の原因の一つであつた。

第一回植民七家族(五〇人)は昭和四年十月二十七日神戸出帆の豫定であつたが、それに先だつて澤柳專務取締役は鈴木茂松本武彦、大石小作夫人と、永井よしえを同伴、昭和三年十一月出帆、昭和四年二月現地に着いた。尙澤柳專務はアマゾン大江をイキトスまで遡り、歸途全伯を視察して歸朝した。

この會社は資本が僅少であつた。また入植者も、株券拂込金だけで開拓資金は僅少であつた。昭和五年一月五日第一回入植者が現地に安着したが、雨期に入り伐採した森林の燒拂もすまされていず、入植することが不可能であつた。止むなく會社直營農場に植付けられたグワラナーの中間に、米その他の間作を行ない、隣接地にマンジョーカを植え、食料を收穫する方針をとつた。

最初から經營に計画性がないのだから、間もなく開拓資金は缺乏した、大石は「開拓資金送れ」の電信を再三・再四本社に送つたが、本社では大石の經費支出につき、何等會計報告がこないので疑つて送金しなかつた。ここで大石は怒つて、第一回植民者到着の翌月、電信で會社を辭職した。會社創立の責任者たる大石が、責任の職から逃げて、マウエス市の對岸に前もつて購入した大石農場に移轉したので、入植者は主柱を失つて、唖然とした。指導者を失つた入植者は不平を鳴らしても大石の後任支配人三石久ではどうにもならなくなつた。第二回植民十二家族(六六名)を引率した澤柳專務取締役は、到着と同時に大石小作を再三訪ねて交渉、懇談の結果、大石個人名儀になつていた二万五千ヘクタールの「コンセッション」を澤柳個人名儀に變更することになつた。然し最初から出發を誤まつたアマゾン興業KKは、これで崩解の一路を辿り、ここを逃出して他處に移轉するか、ここに永住し土人間に交わつて退化するかの他に路がなかつた。アマゾン先驅者の『山根武一』をマナウス市から招いたり、南拓KKから『樫村正之』を招いて醫療の事に當らしめたが、これはなんにもならなかつた。このまま進めば軈て二世の日系土人部落が生れたであろう。

⊙アマゾン興業KK土地入植者

⊙第一回社員先伐隊(昭和三年五月十七日 さんとす丸)

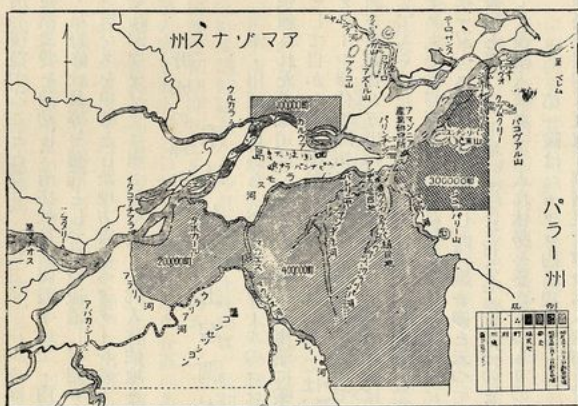
姓名	現在	姓名	現在
大石小作	マウエス	唐木道雄	死亡
尾崎貞吉	イタコチアラ	増田太郎	歸國
石田喜由	死亡	三石久	歸國
久保田喜久郎	死亡		

⊙第二回社員先伐隊(昭和三年十一月十五日)

姓名	現在	姓名	現在
澤柳猛雄	歸國	大石たけ	死亡
鈴木茂	?	永井よしえ	?
松本武彦	?		

⊙第一回植民者(昭和四年十二月十一日 さんとす丸)

出身	姓名	現在	出身	姓名	現在
東京	北林梅吉	聖州	三重	福島傳	死亡
鳥取	山根コト	尾崎氏妻	同	岩瀬紀	死亡
同	山根益明	歸國	同	岩瀬禮次郎	死亡
富山	根尾哲郎	イタコチアラ	神奈川	武富健一	死亡
山口	福永秀雄	?	同	平川峯雄	マナウス
神奈川	内山健吉	マウエス	同	古川正清	マナウス

「開拓植民のため必要ある場合、州統領又は州知事は、州有地百万ヘクタールまでを内國人又は外國人に讓渡することを得」のアマゾナス州法規によるものである。この州植民法は一九二六年十二月二十二日法令一三〇九號で發布されたもので、それまで州植民法規がなく州政府は、日本大使館囑託粟津金六に法規下書を依頼した。粟津はここで植民開拓に便宜のような州植民法規を下書し、その草案をサーレス州統領に送附、州議會の許可を得て正式の發布となつたので、日本人はそれを利用した譯であつた。アマゾナス州はそれ程日本人に好意

尨大百万ヘクタールのアマゾナス邦人移住地

をもつていた譯であつた。處が折角獲得した權利も、同年田付大使が帰朝命令が出てブラジルを去り、粟津金六囑託も大使館を去つたので、このアマゾナス州邦人進出も立消えとならんとした處へ、この時に少壯青年實業家山西源三郎が南米、視察の途にのぼり、リオ大使館に立寄り

「日本人のいない地方を視察してみたい」

と申出でたので、海軍武官關根群平海軍中佐はすぐ「アマゾンに行け。アマゾンは必す貴君を歡迎する」と激勵した。幸い山西は東京で上塚司代議士（當時大藏參與官）から神戸商大の同窓生粟津金六を紹介されていたので「是非粟津さん同行を」と賴みこみ、アマゾナス州へと旅立つた。

　幸いなことに一九二七年に田付大使の後任になつた有吉明大使に、サーレス州統領から一月二十二日付で、是非学術視察團派遣の斡旋方を依賴してきており、またアマゾン視察に出かけた野田良治書記官も「アマゾナス州の邦人歡迎は官民共に大したものであつた」との報告もあつたので、有吉大使はサーレス州統領に「学術調査團や植民事業團派遣のときは出來るだけ盡力してくれるよう」との返電をしておいた。

　粟津・山西の百万ヘクタールのコンセツソンは、この好機會を摑んで、一九三七年（昭和二年）三月十一日契約されたのであつた。この契約は四カ所で四百万ヘクタール、その内一カ所の百万ヘクタールを撰ぶべきもので、この好條件を締結して山西は帰朝して各方面に運動したが、植民地建設のメドがつかなかつた。處がコンセツソンの契約期限が、一九二九年早くもきたので、外務省はもう二カ年延期を申込み、翌年拓務省の新設と共にこのコンセツソンの締結を依管した。拓務省はアマゾナ

アマゾンの父・崎山比佐衛の逝去

相談役　大石小作

相談役　崎山比佐衛

大正初期から、昭和初期にかけて、海外植民学校の存在は、日本力行會と共に、海外に青年を送り出す訓練所として光彩を放ち、既に三百名の生徒と、一千余名の關係者を海外に送つたしかも学校顧問は澁澤榮一（財界元老）鎌田榮吉（文相）濱口雄幸（後の首相）天野爲之（後の文相）島田三郎（代議士）森村市左衛門（財界巨頭）以下六十余人であつた。特に崎山は力行會創立の島貫に劣らない、熱心なクリスチャンで人格高潔、全生徒から德を慕われた。一九一四（年大正三年）から大正五年まで（四十二才）南北米を視察した。そして一九二八年（昭和三年）再度南米大陸のアンデス山脈縦織をやり、そしてついでにアマゾン河をアンデスから下つた。勿論單身だが、一九二八年七月マウエスを訪づれ、入植せんとするアマゾン興業KKのマウエス植民地のグワラナー栽培と、その附近の雄大な景色に恍惚となり、分校を建てる事を決心した。そして伊藤松之助を派遣、次いで卒業生山内登（現在ベレーン市）を聖州から移轉入植せしめ、附近に分校豫定地を選定、昭和四年九月アマゾン興業KKの植民地より、一足先に開拓事業についた。軈て昭和五年同校主事今井修一は卒業生宇野円治（サンタレン在住）を伴い、同年七月十九日正式賣買登記をすませた。その土地はその後三カ年間伊藤松之助一人踏みとどまつて、健斗していたが、前項の通り昭和七年九月五十八才になつた崎山比佐衛が自から先頭にたち、親戚十名を引連れて入植した。然し昭和十年頃から始まつた悪性マラリヤのため、入植者は罹病し、そのあと後續部隊も續かず、一時活氣を呈したアマゾス興業の入植者も各々退散し、十五・六家族の殘留組の孤立的集團地となつた崎山校長も一九四一年（昭和十六年）七月二十四日に六十八年の生涯を閉じた。彼こそは海外發展を身をもつて範を示した人物で、アマゾン開拓の父として後輩拓人に尊敬されている。この崎山の死後マウエス植民地は衰退し、アマゾン興業KKと共に、軈てアマゾナス産業株式會社に合併せられたが、一九四一年十二月七日の大平洋戰爭で、開發の道を絶たれ、そして終戰後二十年の今日に至つては、アマ興移民の殘留組と共に數家族が孤立化して生活を營なんでいる。マウエス植民地邦人の末路は悲しい移民哀話となりつつある。

アマゾナス産業研究所の
百万ヘクタール獲得の經緯

アマゾン河の玄關であるパラー州に、百万ヘクタールの邦人植民地が創設されたのは前に記述したが、これに劣らない尨大な移住地が、これまたアマゾン河中流に建設された。これがアマゾナス州に於ける邦人一大植民地である。アカラ移住地は家族移住者で開拓されたが、このパレンチンス移住地は、二十才前後の独身青年によつて開拓されたという、面白い對照である百万ヘクタールの尨大な土地獲得の經緯は、一九二六年（大正十五年）五月五日から十日まで約五日間、アマゾナス州首都マナウスに田付七太大使が滯在し、エフジエニオ・サーレス州統領から、大歡迎されたことは、パラー州邦人進出の項で詳しく述べたが、サーレス州統領は「パラー州と同様百万ヘクタールまで州有地を讓渡してもいい」と言明した。これは、

にした。地圖をみてもそうと解るが、カルブアリョ地區とラモス河流域との間には、我が日本の四國より大きい、ツウビナンバラナ島が横たわつているという、實にアマゾン大流の雄大さを物語つた地域であつた。本部選定によつて驪て、待期していた第二調査隊も着いた。

村井道夫、小佐々良衛、田中三作、平山慶三郎、田端長之助岸田義男、長谷川篤三、佐藤快士、鎌田讓の九名。

本部附近は伯人バチスタの私有地だつたので、同氏から私有地を購入した。このバチスタの土地は大江に面した平坦で、沿岸二キロ半、奥行五キロ、四百ヘクタールでアマゾニヤ産業研究所の本部を設置するには好適であつた。こうして千古斧鉞を入れぬアマゾニヤの大密林は、邦人の手で拓かれていつた。

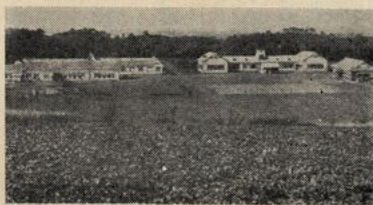
情熱に燃え大アマゾンで活躍

（日本高等拓殖学校生徒—通稱高拓生）

この百万ヘクタールの大密林を、それではどうして開拓するのか？南米拓殖會社みたように、日本一の鐘紡の背景もなし、當時衆議院議員たる少壯政治家上塚司は、最初青年をもつて、困難な初期開拓をやりとげようと考え、アマゾン開拓指導的中堅人物を養成する目的で、東京世田ケ谷區にある國士館学園内に國士館高等拓殖学校を、一九三〇年四月に創立した。上塚は昭和五年五月十四日サントス丸で神戸を出帆しているから、既にアマゾン調査の途にのぼる前に創立した譯で實に用意周到であつた。生徒もなか／＼意氣軒昂で、第一回生は百名應募した昭和五年頃で滿州建國前であつたから

「俺も往くから君も行け、狭い日本には住みあきた」

と豪語し、学内では點取り勉强より柔道・劍道が盛んで身心を鍛練し、アマゾン土人を支配するのだと伯語の学習につとめたその内に第一回生四十八名、第二回生五十四名を送つたが、國士館拓殖高校内に、折から建國された滿州國に移住するのが、日本人の使命なりとする北進論が擡頭、世界に覇をとなへるのが日本民族なりとするアマゾン論者と、大いに意見を異にしたので、ここにアマゾン開拓南進論者は、昭和七年四月神奈川縣橘樹郡生田村（小田急沿線稻田登戸驛）に新校舍を建てて移轉し、名稱も「日本高等拓殖学校」と改め、第三回生からここに入所した。

この卒業生をブラジルでは通稱高拓生と呼んでいるが、今日五十才以上になるのに、皆十八・九才の往年の学生氣分を失わず、各自が扶け合い、今もつてなごやかな氣風を残している。アマゾンに「高拓生氣風」と云うのが残つているが、この学生は皆良家の子弟で苦勞を知らず、天眞爛漫であつた。しかも皆舊制中学出身（現在の高校卒）であつたから、ブライドもあつた。三十年前の舊制中学卒は今日の大学卒どころのブライドと比較のならない高尚なものであつた。それに當時の学生は物欲にこだわらず、どうすればアマゾンを立派な移住地にするかとい

懐かしき日本高等拓殖学校（今はなし）

ス州政府の折角の好意もあるので、パラー州同様同州の邦人進出を後援することとなり、昭和三年粟津調査團に二万五千円の視察旅費を補助し、南拓社員松岡醫学博士・内藤克俊農事部長・星野修社員等を囑託として隨行派遣し、昭和三年十二月パレンチンスを中心とした地方百万ヘクタールの土地を選定した。
これがアマゾナス州で最も大きい邦人移住地となつた。

背水の陣を布いて
乗込んだ上塚調査團

粟津・山西兩氏から、百万ヘクタールのコンセツソン開拓を依頼された上塚司は、いよいよ自分が事業に乗出す腹をすえた。そして自から調査團長となり、都合によつては、そのまま百万ヘクタール移住地開拓の第一歩を踏み出す覺悟で、拓務省に第二調査團經費五万円の補助を申請、その不足分は民間人から醵金してもらつた。上塚一行は一九三〇年（昭和五年）六月七日サントス丸で神戸を出帆、七月二十日リオ着、八月にはサンパウロでアマゾナス調査團を組織した。調査團と云つても、今までの調査團と違つて、土地の選定を行なつたら、そのまま土地に定着して、後續入植者の受入れ体勢を整えるつもりの調査團であつた。

第一隊は（カツコ内は現在）
團長上塚司（東京）副團長粟津金六（聖市）笹田正數（醫師死亡）龜井滿（ベロ・オリゾンテ市）増永榮次郎（？）河崎信次（？）高岡宗一（帰國後死亡）増永榮正（？）三輪勇（マナウスで商業）寺田克己（マナウスで死亡）篠田六郎（ベレーンで死亡）岡田四郎（北パラナ・アサイ）であつた粟津は契約責任者、笹田正數は醫者、龜井滿は聖州上塚周平植民地創設者のベテラン、高岡宗一は葡語学者三輪勇、寺田克己、岡田四郎は一騎當千の荒武者であつたそしてこれに拓務省派遣の稲垣エイ策と、自費參加の石橋憤吉を加え勇然と北伯へ進軍した。一行の日程は昭和五年

九月一日　リオ出帆
九月十一日　ベレーン市着
九月十九日　マナウス着
九月二十六日　ゼルツルード號でマナウス出帆
九月二十七日　イタコチアラ着（製材所で建築材料購入）
九月二十八日　マナウス着

パラナ・デ・ラモス河、アンヂラ河、ウアイクラツパ河、マムルー、マウエス河、ウラリヤ河、アバカシー河の七大支流が流れる下流、アマゾン大江河畔のパレンチンス附近に本部を選定した。

百万ヘクタールの選定は最初のものを左記の通りに變更した。
三〇万ヘクタール、パレンチン山脈附近（昭和五年十一月二日制定）
四〇万ヘクタール、アンヂラ河奥（昭和九年二月十二日制定）
一〇万ヘクタール、タボカール區（同　）
一〇万ヘクタール、カルブアリョ（同　）

高拓第一回生のワニ狩（當時はこんなに多かつた）

を與えた。しかも一九三〇年（昭和五年）十月二十四日突發したゼツリオ・ヴアルガスの革命政權獲得で、從來のコンセツソンは皆無効となつたにかかわらず、十一月二十日任命されたアルバロ・マイア執政官は特にアマゾン開發に必要な點から、百万町歩のコンセツソンを承認、ついでに新會社設立條約期限の項も一九三四年（昭和九年）三月十日まで延期するという、好意をもつて十月二十三日官報に發表された。

研究所の方は昭和六年高拓一回生が入植し、最初ワアイクラツパ河畔を開拓していたが、改めてアンジラ模範植民地を開拓し、從來のカカオ、グワラナー、米作、野菜栽培の他に主力をジユート栽培に注いだ。昭和九年十月には幸にインド黄麻に劣らない新種が成育し、この新種で（詳細は後述）アンジラ植民地は、多年苦心の結果が結ばれて、各入植者は隨喜の涙を流し、一路新種黄麻の増産に邁進した。昭和九年十月に渡伯した上塚司は、この黄麻栽培の成功を見て勇躍歸朝、翌昭和十年九月二十三日遂に待望の「アマゾニア産業株式會社」の創立に成功した。昭和三年粟津・山西が州政府とコンセツソンを結んでから七年目、昭和五年上塚司がパレンチンスに入植式を催してから五年目であつた。

會社創立の經緯は、折角獲得した百万ヘクタールの既得權が無効になるので、拓務省も憂慮その斡旋に乘出した。そこで財界の鄕男爵の斡旋で昭和十年九月十七日總理官邸で左記の人々が出席して協議して實行案を作成した。

府側　高橋大藏大臣、兒玉拓務大臣、広田外務大臣、高山拓務局長

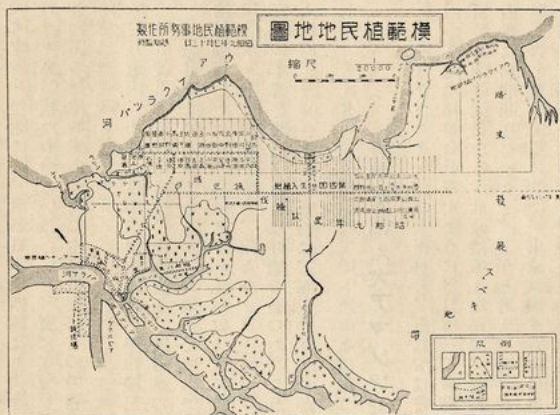
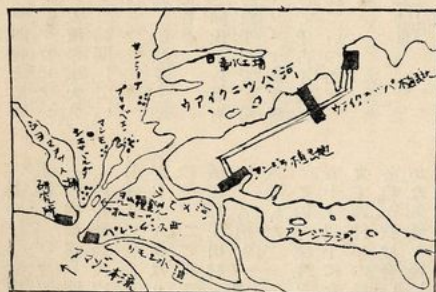
財界側　鄕男爵（産婆役）池田成彬（三井銀行）串田万藏（三菱銀行）小倉正恒（住友銀行）森広藏（安田銀行）高山長幸（東拓代表）

資本金百万円　總株數二万株

そして二十三日の創立總會はすら〳〵とはこび定款作成、發起人株數引受、役員選擧、社長選出など一瀉千里で進んだ。そして東京本社の創立と共に、その事業を代表する伯國法規にてらした伯國會社が、昭和十一年一月五日パレンチンスに創立せられ　名稱は　COMPANHIA INDUSTRIAL AMAZONENSE S/A　となし、資本金四千コントス、取締役社長上塚司、取締役支配人辻小太郎の名コンビで發足された。そこで上塚社長は本腰になつて、新産業「黄麻」栽培に邁進することになつて、昭和十一年四月ラプラタ丸で、高拓第六回卒業生ならびに、一般家族入植者や、呼寄花嫁新夫人などを引率して、パレンチンスに着いた。印度黄麻に劣らない黄麻が、アマゾンの我がパレンチンスで發見されたので、上塚司の得意は思うべし、その姿は意氣揚々たるものがあつた。當時上塚は代議士で大藏大臣高橋是清（首相もやり有名な財政通、二・二六事件で暗殺）の祕書官から大藏參與官となり、將來大臣にもなれる地位だつたがそれ等の顯職を棄て、高拓青年や土人等と一緒に開拓事業に挺身したことは、立身出世主義の狡猾な政治家の多いなかで、確かに一異彩を放つていた。上塚は肥後人だけあつて、何處か國士的風貌があり、加藤清正的節操恬淡な處があつたのだろう。

E・S植民地　渡邊マチ

なつかしき故里よりの便り來てかわるがわるに聲出して讀む

開拓にいそしむ人の數多ありて奥地開發日々に進みぬ

う精神的な方面のみにとらわれて生活していた。
そしてこの高拓生が、いよ／＼黄麻栽培に成功すると、全長約一千キロのアマゾン大流沿岸に分散し（地圖參照）土人を使傭して、アマゾン産業開發に盡したのであるから偉い。アマゾンではなんと云つても、黒胡椒と黄麻は日本人が發見した産業で、この點誇りとしていい。高拓生も、後頁の人名簿を見られると、解るように、開拓半ばで死んだ者や、憂鬱になり自殺した者、或いは勇途空しく歸國した者、聖州方面に轉住した者と變化が多いが、その中で初志貫徹に邁進、娯樂のない空漠無味なアマゾン大流沿岸で、努力している人々には敬服の他はない確かにアマゾンで活躍している拓人は、埋もれた眞の拓人だと云える。その點著者は絶讃を贈るのにやぶさかでない。

高拓生青年の入植地圖

入植地と研究本部の見取圖 ←

アマゾニヤ産業KKの創立

パレンチンスに百万ヘクタールの邦人植民地を設け開拓者も當初高拓生の努力でなされることになつたが、この移住地をもつと組織的に擴大しなくては、經費の出る處なく、ここで上塚司が東奔西走の結果、昭和八年二月財團法人「アマゾナス産業研究所」が誕生した。この研究所は當時財界の大御所郷誠之助男爵が産婆役となり
三井系＝團琢磨・宮賀長文、住友系＝小倉正恒、三菱系＝木村久壽彌太、安田系＝森広藏、東拓系＝高山長幸、其の他森村市左衛門、川西清兵衛、石橋正二郎等數十名の財界人を網羅した。
幸いこの産業研究所は、高拓生各自の熱意で漸次開拓の見通しがついたし、毎月「研究所月報」を東京で發行して、各後援者に安心感

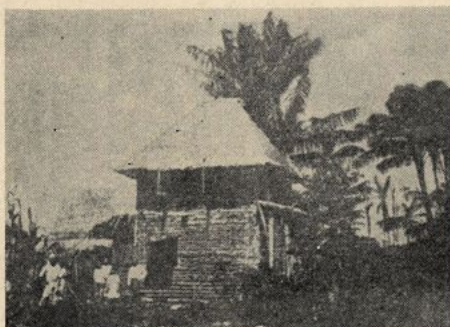
植し、アマゾン天然ゴムを壊滅さしたから、印度黄麻をアマゾンに移植が成功すれば、伯國は随喜の涙を流して喜び、日本移民の功績を永遠に讃えるであろうと思うと、黄麻移植栽培は、使命の重大を痛感した。

一九三〇年一月國士舘学園に、アマゾン開拓青年学校を設けた時、上塚司は神戸高商（現在の商大）の後輩辻小太郎を教授兼主事に招聘した。辻は神戸高商時代からブラジルに關心をもち、一九二八年（昭和三年）七月から約一年二ヵ月も、ブラジルの南北地方を視察し、歸朝して「ブラジルの同胞を訪ねて」の名著を世に贈つた。そうした處から、辻は歸朝後神戸高商講師となり、ついで海外拓殖学校創立の準備をしていたのを、先輩上塚司が招聘したのであつた。

辻は学生時代に或る縁故で小泉製麻會社長小泉庄助と知り合い、黄麻の話をきいた。そのときアマゾン流域にジュータを栽培する話をしたら、世界を征覇する英國のダンピングに遭つて事業は失敗と言われた記憶があつた。然し青年学徒辻は夢を棄てなかつた。ブラジルに旅行したときにサンパウロ農務局を訪ね、黄麻の種子二キロをわけてもらい、アマゾンのマウエス植民地にいる海外殖民学校生徒山内登に、一キロ送つて植えさした。これは失敗に終り、一九三〇年（昭和五年）五月に日本に還つた辻に山内登は「黄麻栽培法を知らないので失敗した」と手紙を送り、五十二枚の原稿を書いてその結果報告をした。そうした經驗から辻は、黄麻栽培に情熱を傾け、上塚司も一九三〇年（昭和五年）六月第一回アマゾン調査團のとき、日本で黄麻種子を蒐集し、また聖市總領事館江越信胤技師の斡旋で、パウリスタ黄麻種子を購入している。（その頃聖州ではカツサパーバ驛で小規模な黄麻試作がなされ、邦人佐藤初太郎も指導者の一人として働らいたが、二米も伸びず試作は失敗した）

一九三一年八月（昭和五年）第一回高拓生の渡伯に際し、鹿兒島高等農林学校出身の荒木衛門（熊本縣人現在南米銀行勤務）が黄麻栽培を目的に渡伯、リオ大使館野田良治の盡力で、四種類の種子とインド種子四十キロを試植してみた。このインド種子はカルカッタ總領事館や三井物産カルカッタ支店の盡力によるものであつた。この種子の試験の結果は毎年々々總ゆる苦心をして育成したが

幹丈け一七〇糎～一九〇糎、莖直径一糎～二・五糎

までしか伸びず、製品にならず、余りに貧弱なので、皆落膽して匙を投げていた。然し反面黄麻に生命をかけている有志もいた。處が一九三二年（昭和七年）に、辻は再渡伯のときセイロン島のコロンボで、黄麻視察中の本野逸作をしてインド種六十キロを受取つて、

黄麻の恩人尾山良太の家屋

高拓生の粒々辛苦實る

インド産に劣らぬ　黄麻栽培に凱歌あがる

日本民族の誇り

アマゾンに新産業發見

パレンチンスを中心に大アマゾンに百万ヘクタールの日本人植民地を創設したのは、最初から印度の黄麻（英語でジュート　伯國でジユータ）栽培が目的で、アマゾン特産物カカオ　グアラナー・カスタニヤなどの永年作物は副産物であつた。社長上塚司も總支配人辻小太郎も、なんとかして印度の黄麻をアマゾンに移植栽培したいのが熱意であつた。

印度の黄麻の歴史を繙くと、世界市場を征服するのに百余年しか經過していない。

一八二四年　原産地カルカツタより少量英國に輸出したが、荷主商人は亞麻の代用として機械にかけて使用したが、遂に失敗。
一八二八年　十八噸英國に輸出して試驗中未だ製品化せず。
一八三二年　粗麻布の製織に成功、農作物包裝袋となる。
一八三四年　需要大いに増大、一八二噸製品。
一八五一年　二九・一二〇噸を算し、獨・米・佛・墺・伊・西等に輸出。

一九四〇年　九〇万噸（四百五十万梱）全世界に亘り、滿州大豆、伯國珈琲、米國棉花、カナダ小麥、チリー硝石、キューバ糖等世界はみな麻袋を使用し印度カンジス河下流の黄麻耕地は百万ヘクタール（アマゾニヤ産業KKの面積と同じ）である

こんな歴史を繙くと、少壯政治家上塚司にしろ、二十代の若き学徒支配人辻小太郎にしても、黄麻栽培に情熱が湧かざるを得ない。しかも當時ブラジルは國内生産の黄麻は一キロもなく印度から取寄せていた。世界の九〇パーセントの珈琲を生産するブラジルは、袋のため印度黄麻に高額を支拂つていた。

一九二七年　**二〇・六一二トン**　**三二・八〇四コント**
一九二八年　**一三・一四二トン**　**二〇・五六八コント**
一九二九年　**一九・一一九トン**　**二九・八三一コント**
一九三〇年　**一二・四九八トン**　**一九・一六一コント**
一九三一年　**一六・一三九トン**　**二五・七五八コント**

現在の金額にすると莫大なものである。だからアマゾンに黄麻栽培が成功すれば、ブラジル産業に貢献するばかりでなく、日本人の技術頭腦の誇りである。しかも英國はブラジルから天然ゴムの種子を盗みだし、印度植民地マライ（現在獨立）に移

ゾン黄麻が商品化された嚆矢である。

これから同年の昭和十二年六月には、高拓生でジュート轉向者二十九家族　昭和十三年度には三十一家族に及び、同年六十噸を生産した。ブラジルの國伯人間輿論は擧げて日本人の眞價を賞讃した。リオ・デ・ジャネイロの各新聞は「アマゾン日本人植民地の福音」として論説を掲げた。

「去る二十四日の通商審議會で、技術顧問ミサエル・ペンナ氏はアマゾナス州パリンチンスの日本人植民地に於ける黄麻栽培成功の實情を紹介し、ブラジルはこの際、勤勉有能の日本移民に依り、黄麻の栽培増加を計り、年額二万五千コントス（邦貨一千万円の輸入を防止するにしかず」

研究所本部、（こゝに黄麻工場を建設する計画であつた）

と提案、日本移民入國二分制限案までも參考に引例し、日本移民誘入の件を發表した。コレイオ・ダマニヤン紙、ブラジル紙、コンメルシオ紙の有力紙（東朝・東日に比適）まで筆を揃えて日本移民の功績を絶讃した。しかもジュート袋の需要は、ブラジル珈琲の増産と農産物（米・棉・豆・玉蜀黍・落花生等の急）増産で一九三五年（昭和十年）から拍車をかけた。

一九三一年　一六、一三九トン
一九三五年　二四、〇〇〇トン　三八二・〇〇〇ポンド貨
一九三六年　二七、〇〇〇トン　四五七・〇〇〇ポンド貨
一九三七年　三四、〇〇〇トン　五六五・〇〇〇ポンド貨

ここで連邦政府農務大臣フェルナンド・コスタは

「日本人は有望勤勉にして堅忍不抜の精神をもつている。如何なる事業に從事する時でも、常に前進し、如何なる困難に遭うも失望せず、一度發足したらば、決して中道にして退かぬ國民である」

と激賞した。こうして遂に高拓生全部がジュート栽培者となり各農場を創立、資金をアマゾニヤ産業ＫＫから融資し、土人數十人或いは數百名雇傭、小は十ヘクタールから、大は三千ヘクタール位まで經營するに至つた。而してその黄麻栽培適地もサンタレンから、奥地はマナオス市の奥ソリモンエスまで伸び、その距離實に一千キロ（鹿児島～東京間一千二百キロ）に及んだ。そして生産量は年々増大した。

一九三四年（昭和 九 年）　五百瓦
一九三五年（昭和 十 年）　三キロ
一九三六年（昭和十一年）　三〇キロ
一九三七年（昭和十二年）　六・六トン
一九三八年（昭和十三年）　六〇トン
一九三九年（昭和十四年）　一八〇トン
一九四〇年（昭和十五年）　三二〇トン
一九四一年（昭和十六年）　一・一〇〇トン

（右圖）昭和七年頃植えたインド產
（左圖）尾山種の成績＝木村一則（左）内藤菊三郎（右）

アマゾンに植えた處、幹はのびなかつたが繊維を東京に送つた。郷男爵が帝國製麻や大正製麻の手を經て、東洋製麻紡績で試驗した處、良質とみなされ、折からカルカッタから歸朝した黃麻貿易の千田牟婁大郎も、繊維だけは印度の中等品に比敵するものと折紙をつけた。これに勢いを得て、遂に昭和八年九月には、日本高等拓殖学校講師本野逸作が渡伯することになり、一方第一回生から三回生まで百四十人の高拓生も、アンジラ模範植民地を伐採し濕地に、カルカッタから取寄せた種子を植えた。然しこれがまた伸びが悪るく失敗に終つた。幹丈が二米以上伸びず、（左の寫眞參照）脇枝が出て莖が細小で製品にならず、失望落膽、百四十人の高拓生は黃麻を放擲し、グワラナー・カフエー・マンジヨカ・米を植えて餓をしのぐことを考えた。

「尾山種」發見に入植者欣喜雀躍

處が天の助けかアンヂラ模範植民地と反對に、ワマイクラッパ河中にあるフォルモーザ島で黃麻試作をしていた岡山縣人尾山良太の農場に、三カ月のうちに幹か二米にのびその内五本は四米にのびた。然し島とは言うものの增水期になれば水浸しとなる濕地帶であつたから、うち三本は倒れて腐つた。殘り二本を大切にして育てたが、内一本も風雨と流水で枯死した。殘る一本が生命で、尾山は自分の子供を犧牲にしても（一男死亡）この一本だけはと、フォルモーザ孤島に立籠つた。軈て幹丈四米半（一丈三尺）以上も伸びた。そしてこの一本の幹から、十粒ばかりの種子を採つた。この十粒の種子が、今日のアマゾン生產の黃麻になつた譯である。尾山は翌十年二十キロの種子をとりこの種子を翌十一年に中内義正と共に、フォルモーザ島に植え一九三七年（昭和十二年）九千六百キロの收穫を得た。

尾山良太は「アマゾンに於いて黃麻の右にいづる作物なし。價格一キロ一ミルならば、一町歩二コントス、卽ち十町歩植付ければ二十コントスの純益を半年にて收穫することとなり、若し十万の日本人が各十町歩を植付けるに至れば、二百万人の農民（印度人）に依て世界に供給しつつある印度の主產地は、アマゾンに奪取されることは、灯を見るより明である」と東京の上塚司に昭和十年一月二日附で書信を送つている。こうして新種は「尾山種」と名づけられ、研究所試驗場主任高島義雄（第三回生舊制宇都宮高等農林学校出身）に栽培並に採種を行わしめた。そして第一次製品は

尾山良太～六噸、中内義正～四噸

の繊維を收穫し、うち十俵二噸七七〇瓩は昭和十二年四月十四日ピラ・アマゾナス港に寄港のテネンテポルディラ號に積轉みベレーン市マルチン・ジオルチ商會宛發送された。これがアマ

一九四二年（昭和十七年）　三・〇〇〇トン
（参考まで）
一九五五年（昭和三十年）　三五・〇〇〇トン
一九六一年（昭和卅六年）　八〇・〇〇〇トン

ブレーメンにはパラー州政府の招聘で黄麻試験場を設け、支配人越知榮（現在ベレーン）池上欣二（現在アレンケル）石原義人（死亡）石原義雄（死亡）が、その衝に當り、一番奥のソリモンエス大流で、ブルース河口では鈴木五郎・小野七郎（共にソリモンエス）藤田猛（ベラ・ビスタ）石黒粂吉（モンテ・アレグレ）本間武四郎（サン・ルイス）他數人が健斗し、アマゾン大流は大和民族が經濟支配する如き觀があつた。どの拓人もまだ二十五・六才の青年で、意氣天を衝くものがあつた。

各新聞を始め、連邦政府の聲もあり、遂にアマゾナス州政府は、アマゾン產業株式會社に全文十二カ條の恩惠を與える契約をした。その主なるものは。

一、ジュートの輸出、及び加工・賣買に對し、州稅・郡稅を三十年間免除する。

一、ジュート並にこれに類する纖維作物栽培地に必要なる州有地一万ヘクタール以內は無償で附與、しかも三十年間の占有効力を保證す。

など他十カ條であつた。そうしてジュート格付法の制定によつて、アマゾナス產業株式會社が、それを監督し、黄麻生產品はアマゾナス產業ＫＫが獨占するような形式となつた。

昭和十五年十月九日には、獨裁政治家ゼツリオ・ヴアルガス（昭和五年革命以來の大統領）が、軍用機でアマゾナス州マナウス首府を訪づれ、その途中ビラ・アマゾナスにも着陸、上塚司社長、辻小太郎支配人以下職員と面接、アマゾン黄麻について問う處があつた。このゼツリオの訪問は日本人に對し近親感をいだかせ、戰後アマゾン移民の再開に大いに力となつた。

それから會社は格付梱包所設置と共に、製麻工場設置を研究した。即ち會社の予定は

一九四一年　一、二〇〇トン　一九四五年　一一、〇〇〇トン
一九四二年　三、〇〇〇トン　一九四六年　一四、〇〇〇トン
一九四三年　五、五〇〇トン　一九四七年　一七、〇〇〇トン
一九四四年　八、〇〇〇トン　一九四八年　二〇、〇〇〇トン

となつていた。そして製麻工場（年產二五〇〇噸）建設費見積書が日本から到着した。總坪數五千平方米、その機械の內譯を著者が今日みると、實に詳細微に入りかつ計画は尨大なもので工事費約一万コントス（邦貨二百二十一万円）で、二五〇〇トンの黄麻より、五百瓦の袋五百万枚を製造するものである。だから會社の予定表たる一九四八年（昭和二十年度）には二万トンとすると、四千万枚の麻袋が出る譯である。しかも製造費と生產黄麻購入費の差額予算表をみると、純益の莫大なことが解る。當時の金額で、袋の市價三ミル五〇〇レイス、全伯の販賣店に渡す値が三ミルとすると五〇〇レイスの儲けで一五〇〇コントスになり、經營費一〇・七一四、〇〇〇ミルを差引いて、四・二八六コントスの純益となる。こうした計画がたつていたのに、遂に一九四一年十二月七日大平洋戰爭勃發で、敵國人となり、折角築きあげたビラ・アマゾニヤの本部も、州政府の管理となつた。

一九四二年二月伯國對日宣戰布告によつて、日本人の特權資產は事業上無價値となつた。支配人辻小太郎は事情止むなく、

アマゾ

この距離サンタレンから｛マナ／ソリ｝の高拓生農場を訪問すること
地図を見て、パレンスンスの本部

アマ

大西洋

ブラジル國

マナオス
パリンチンス
サンタレン
ヴィラアマゾニア
イタコアチアラ
ベレン
リオデジャネイロ
サントス

取引商 佐藤䕃夫
移住事業團 高橋正寿
東 久一

マナオス
マナカプール
満田六郎
小野七郎
鈴木五郎

サンタ マリヤ
イタコアチアラ

三見 鍬義 島山 中杉

地根猛石 宮畑加平
茂木勝吉 清定

第六回生（昭和十一年）中央は児玉拓相と上塚所長、生徒四十四人のうち十一人が渡航、全部新婚夫人同伴で、呼寄花嫁と共に渡航した。

←第七回生（昭和十二年）中央が上塚所長、四夫婦に花嫁。

ゾニア産業株式會社ジュート栽培地分布

サナプルル／モンエス まで 1,000キロ（東海道新幹線513キロ）全部
は至難である。この他に百余家族ばかり点在している。この
から分散し、各地で農場を経営している高拓生の苦心が

アマゾナス州

ウルカラ
青木正司
国宗恒慎
御園良子
田辺博
木村一則
岡村織
黄麻工場（川上顕三）
パリンチンス
ヴィラ・アマゾニア
在伯支社
泉桂治
山口敏子
南政
ウルクリツーバ
内藤菊次郎
高橋幸生
内海亭造
佐藤正次
小野八郎
小野三郎
東海林善之助
半田二郎
伊東只郎
バレリニア
マウエス
古森
賀森
邦一
進一
次郎
尾原琢吾
山荘太
多門名
戸口
口恒
大治
一九四〇年
中井憲明
定期船航路
州境

紋子、橋本みさお、岸田艶子、木村千代子、平田優子、鈴木園子、越知恒子）で獨身組三十人は船中顔まけの航海。（左上）

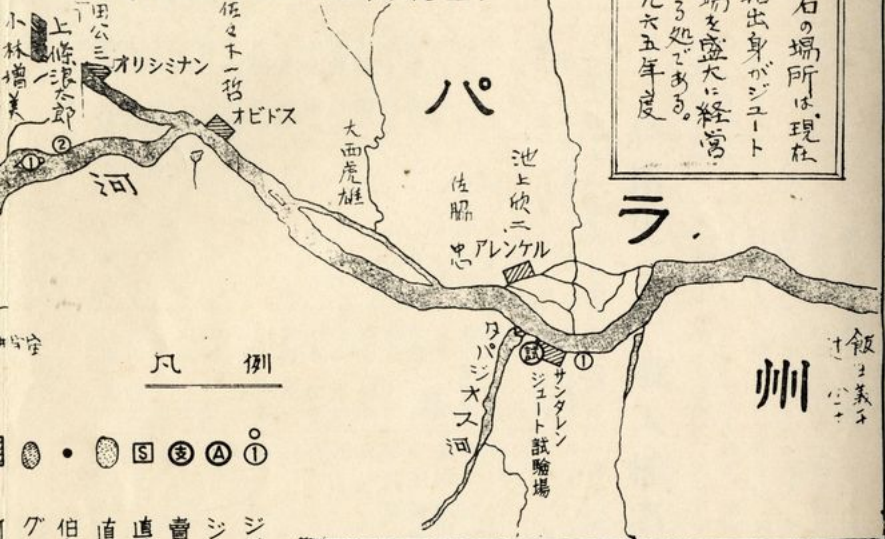
第五回生（昭和十年）呼寄花嫁や一般入植者で、七十九人で大賑いの渡航だつた。←

地圖（昭和十六年四月現在）

東田公三
上條浪太郎
小林增美
佐々木一哲
オリシミナン
オビドス
大西虎雄
佐脇忠
池上欣二
アレンケル
パ
ラ
州
河
タパジオス河
サンタレン
ジュート試驗場
飯生義千代
①
②

人名の場所は、現在高拓出身がジュート農場を盛大に經營している処である。一九六五年度

例凡

① ジュート耕地及家族数
Ⓐ ジュート代理店
㊡ 賣店 支店
Ⓢ 直營ジュート採種場
直營牧場
伯人ジュート栽培地
グワラナ栽培地

日本高等拓殖學校卒業生
記念寫眞

どつこい・アマゾン大流は俺等の天下だよ

第一回生（昭和六年）豪傑揃いが多かつた

第二回生（昭和七年）この寫眞はリオ市ア・ノイテ紙が、フローレス移民收容所で撮つたもの。前側の四夫人は歸國した。

第三回生（昭和八年）十八・九才の新婚ホヤホヤの小谷靜江夫人を始め

小海しげる
谷ゆり
長内チエ
藤田キクノ

第四回生（昭和九年）二十一人新夫人同伴組と、九人の花嫁（御園良子 佐藤マス子・山口

本部の解散を宣告、自からはサンタレン郊外で、ジュート栽培に専心した。残つた一部社員は最後まで頑張つたが、一九四二年八月十八日ベレーン港沖合で、伯國商船が獨逸潜水艦に撃沈されたので、伯國官民は激昂、各地に焼打事件が起き、その内にピラ・アマゾニヤの殘留組も、危險人物と見なされ、パラー州アカラ植民地に追放軟禁された。そしてその後に、植民地本部は今日でも判明しないようなウヤムヤの内に、アマゾナス州第一の財閥J・Gアラウジョ商會に、僅か七百コントスで賣却された。昭和五年から十二カ年かゝつて建設したアマゾニヤ產業株式會社は、淡わい煙となつて消えてしまつた。入植當時から辛酸苦勞をなめた高拓生は、どの人も感慨無量であつた。然しこれも時の流れで致し方がなかつた。ただ運命の流れるがままに時を過ごすより他に方法がなかつた。

高拓生と一般入植者渡航名簿

第一回・さんとす丸（昭和六年四月三十日）四十六名

姓名	現在
越知　栄	ベレーン
大石　隆人	ベレーン
木村　一則	パレンチンス
国宗　一慎	パレンチンス
泉　桂治	パレンチンス
飯田　義平	サンタレン
金子　亥三生	パレンチンス
工藤　講一	ベレーン
佐藤　行夫	マナウス
中島　敏三	イタコチアラ
千葉　彦祥	ベレーン
佐藤　信市	カスタニヤル
庄司　二郎	ウリクリツーバ
田中　正夫	パレンチンス
吉岡　栄	イコアラシ
矢野　武雄	レシユフエ
岸田　好明	サンパウロ
橋本　俊次	サンパウロ
有田　忠夫	サンパウロ
小山　松寿	サンパウロ
熊谷　忠	サンパウロ
荒木　衛門	サンパウロ
溝内　利太郎	サンパウロ
久我　哲夫	聖市秋山桃水
栗崎　一正	帰国後戦死
椎名　勤	帰国後死亡
御園　福衛	死亡
日高　正治	死亡
山本　紀雄	自殺
岩村　茂夫	帰国
山本　一郎	帰国
木内　謙一	帰国
木村　光	帰国
馬場　三郎	帰国
吉村　明	帰国
吉村　利夫	？
渡辺　祐郎	？
杉本　哲茂	？
佐竹　基	帰国
鹿野　広美	？
林　健一	リオ
大森　克美	帰国
宮下　弥門	サンパウロ

第二回・りおでじやねいろ丸（昭和七年四月十八日）五十二名

姓名	原籍	現在
小林　増美	福島	ウルシミナ
東　久一	広島	マナウス
南　政	熊本	ウルカラ
西栄　健二郎	石川	モ・アレグレ
加藤　清勝	宮城	イタコチアラ
滝田　吉一	福島	ノ・オリンダ
田辺　博	東京	死亡
平田　三二	三重	サンパウロ
富永　義男	福岡	サンパウロ
宮島　靖男	熊本	サンパウロ
小野田　正次	鹿児島	サンパウロ
橋本　四郎	取鳥	サンパウロ
江口　祥夫	長崎	サンパウロ
上田　正見	大分	サンパウロ
野々山　政人	東京	サンパウロ
辻川　栄太郎	滋賀	サンパウロ
栗田　吉行	神奈川	サンパウロ
高世　虎雄	東京	サンパウロ
小川　正夫	長野	サンパウロ
吉田　泰正	愛知	サンパウロ
有田　豊次郎	広島	サンパウロ
山口　紀元	熊本	死亡
斉藤　倹太郎	東京	死亡
鈴木　憲司	山形	死亡
吉沢　利八	山形	死亡
城戸　紀	福岡	死亡
三浦　虎彦	熊本	死亡
妻　すみ	熊本	サンパウロ
山口　論	福井	死亡
野村　弘	東京	死亡
星原　貞治	鹿児島	小舟転覆溺死

妻ヒメノ　同　帰国
井上武彦　広島　帰国
妻トドメ　同　帰国
神保呆三　滋賀　死亡
妻清子　同　？
長内チエ　東京　山口昌夫人
岡田ちよ　兵庫　サンパウロ
吉永精　東京　？
日浦弥吉　和歌山　？
板倉博　秋田　？
岡山則政　京都　死仁
河野宗輔　山口　帰国
横田与一郎　高知　サンパウロ
斎藤従之　東京　パラナ

りおでじやねいろ丸（昭和八年八月十四日）四名

菱田喜七　名古屋　？
菱田増吉　同　？
妻みつえ　名古屋　？
長男重雄　同　？

第一回家族移住もんてびでお丸（昭和八年九月十三日）五十名

尾山良太　岡山　カスタニヤル
妻京　同　カスタニヤル
長男万馬　同　カスタニヤル
三男多門　同　パレンチンス
長女芳芽　同　本間武三郎妻
二女可能　同　芹沢正男夫人
中内義正　北海道　パレンチンス
妻とえ　同　パレンチンス
二女ひで子　同　ペレーン
長男豊重　同　パレンチンス
畑原なお　北海道　？
川村蔵吉　青森　ウリクリツバ
斎藤喜美夫　徳島　？
吉井留吉　北海道　帰国後死亡
妻かね　同　帰国
長男円　同　帰国
母たか　同　死亡
吉井吉　北海道　死亡
妻かね　同　死亡
長男吉松　同　パレンチンス
二男石松　同　パレンチンス
長女茂子　同　パレンチンス
三男薫　同　パレンチンス
金野治三郎　兵庫　サンパウロ
妻リラ　同　サンパウロ
長男至　同　サンパウロ
嫁政子　同　サンパウロ
二女しげ子　同　成田俊興夫人
三女やす子　同　サンパウロ
四女あさ子　同　サンパウロ
五女さつき　同　サンパウロ
笹根正一　岡山　死亡
妻ヒナ　同　サンパウロ
長女きよ子　同　サンパウロ
妹きよ子　同　原田公三夫人
大戸亀太郎　東京　サンパウロ
妻あき　同　サンパウロ
長男張吉　同　サンパウロ
二男好治　同　サンパウロ
長女トキ子　同　サンパウロ
三男和三郎　同　サンパウロ
四男幸次　同　サンパウロ
木野逸作　東京　高拓講師帰国
妻しも　同　同
本田一喜　熊本　？
妻カメヲ　同　？
二女秀子　同　？
三女康子　同　？
二女敏和　同　？
養女コサエ　同　？
婿養子重二　同　？

第四回・ぶえのすあいれす丸（昭和九年四月十四日）八十二名

戸口恒治　埼玉　聖ジョアキン
山崎太郎　高知　聖ジアヨキン
半田二郎　愛知　ラモスパラナ
石黒条吉　富山　モンテアレグ
中川憲明　香川　パレンチンス
馬場康二　和歌山　ラモスパラナ
平石定吉　新潟　イタコチアラ
安井宇宙　東京　ペレーン
宮地茂　愛知　イタコチアラ
薬師寺光雄　愛知　ウルカラ
森進一郎　福岡　ワイクラツパ
藤島正徳　熊本　マカツパ
若林政雄　栃木　サンパウロ
萩野正美　宮城　リオ柔道師範
秋山三雄　東京　リオ移住公団
長谷信次郎　熊本　サンパウロ
武井信元　熊本　サンパウロ
神山卓三　栃木　サンパウロ
村尾宗義　東京　サンパウロ
有井繁邇　山口　サンパウロ
坂本太郎　鹿児島　死仁
茂木弥五郎　栃木　帰国
松沢正行　東京　帰国
横山光男　宮崎　サンパウロ
安部支　大分　ブラジリア
斉藤四郎　山形　？
今村泰三　大阪　死仁
沖沢初男　青森　？
松井忠正　熊本　サンパウロ
清水耕治　石川　サンパウロ
立松幹雄　東京　帰国
◎以下二十名夫人同伴
岡村徹　山形　パレンチンス
妻藤子　同　同
伊原只郎　長野　マナウス
妻清子　同　同
原荘太呂　山形　パレンチンス
妻キエ　同　同
丸岡京　宮崎　ジュルチー
妻千代子　同　同
木村宗一　愛知　パレンチンス
妻しきの　同　死亡
内藤茂三郎　長野　コツケイロ
妻温子　同　死亡
玉井豊幸　大阪　ペルナンブコ
妻トシ子　同　同
大久保嶷　大阪　サンパウロ
妻きみ子　同　帰国

姓名	原籍	現在
夏秋 季晴	佐賀	アサイで自殺
田山 泉	熊本	自殺
大河原 宣夫	東京	サンパウロ
藤沢 英彦	熊本	帰国
加藤 季光	三重	帰国
杉浦 倫	三重	帰国
渡辺 藤二	熊本	帰国
藤島 利親	東京	帰国
尾崎 竜夫	静岡	帰国
出水 不可止	宮崎	帰国
岡本 博	熊本	帰国
高橋 健二	東京	帰国
光岡 陸雄	熊本	帰国
西川 利夫	兵庫	帰国
妻 すみ	兵庫	帰国
竹添 長生	鹿児島	帰国
妻 アツ	同	帰国
根本 七郎	福島	帰国
妻 たかし	同	帰国
大野 綾夫	東京	帰国
妻 ナミ子	同	洋上水葬
母 なみ	同	帰国
戸山、保一	熊本	帰国
権田 倉吉	新潟	死亡
妻 あよの	同	死亡
長女 芳子	同	パレンチンス
田中 秀穂	群馬	パラグワイ
妻 とし子	同	パラグワイ
有吉 一義	福岡	?
黒田 隆	熊本	?
滝沢 正人	新潟	?
数島 数平	石川	?
副島 利彦	佐賀	?
内田 照彦	大分	?
堤 順次	佐賀	?
渡辺 茂男	熊本	?
妻 みせ	同	?
長男 茂利	同	?
二男 不明	同	?
長女 律子	同	?

呼寄・りおでじやねいろ丸（昭和七年九月二十日）四名

姓名	原籍	現在
飯田 世枝	埼玉	飯田義平夫人
大石 秋子	島根	大石隆人夫人
長女 房子	島根	御法円竜夫人
積山 カズ子	島根	大石秋子実母

社員赴任・さんとす丸（昭和八年三月二十日）三名

姓名	原籍	現在
辻 小太郎	滋賀	ベレーン
妻 久代	滋賀	死亡
弟 小平	滋賀	サンタレン

第三回・もんてびでお丸（昭和八年四月十五日）八十四名

姓名	原籍	現在
徳田 源弥	山口	パレンチンス
八田 公重	福岡	パレンチンス
小野 三郎	福岡	パレリンニヤ
池上 欣二	熊本	アレンケール
小野 七郎	新潟	マナカプル
古賀 邦次	佐賀	パレンチンス
溝田 六郎	福島	ソリモンエス
畑原 積	長崎	イタコチアラ
鈴木 五郎	栃木	ソリモンエス
青木 正司	新潟	ウルカラ
上森 六園	富山	第二トメアス
佐々木 一哲	広島	ウルシミナ
土師 郁郎	東京	イタコチアラ
佐藤 正文	広島	ラモスパラナ
本間 武三郎	新潟	マラニオン
芹沢 正男	静岡	マナウス
五人は夫人同伴		
小谷 祐次	京都	ベレーン
妻 静江	同	同
小海 半次	新潟	ベレーン
妻 茂	同	同
谷 正一	富山	マラニオン
妻 ゆき	同	同
藤田 進	富山	マナカプル
妻 キクノ	同	死亡
高村 正寿	熊本	マナウス
妻 シク	同	同
長内 保	東京	P・アレグレ
高野 文雄	熊本	サンパウロ
山口 昌	長崎	サンパウロ
田中 一彦	山口	サンパウロ
田中 誠一	東京	サンパウロ
成田 俊与	鳥取	サンパウロ
笹倉 武夫	福井	サンパウロ
井上 末雄	福岡	サンパウロ
前原 三郎	鳥取	帰国
竹内 暁	鳥取	サンパウロ
井川 誠	長崎	サンパウロ
木島 茂	新潟	サンパウロ
綱島 茂男	新潟	サンパウロ
中村 健男	東京	サンパウロ
前山 巍	佐賀	サンパウロ
佐藤 四郎	群馬	カッサパーバ
西村 武蔵	佐賀	ピラシカーバ
井口 太	福岡	サンパウロ
林田 又男	熊本	サンパウロ
城間 憲恵	沖縄	死亡
妻 フミ	同	帰国
石原 義雄	熊本	死亡
石原 義人	熊本	死亡
高橋 金策	新潟	死亡
新保 宗雄	新潟	死亡
畑原 優	長崎	死亡
原田 行郎	愛知	死亡
尾崎 章	群馬	死亡
黒川 均	大分	死亡
三東 清人	鳥取	死亡
黒見 義夫	京都	死亡
石本 光彦	北海道	死亡
上原 章	神奈川	帰国
大竹 昇	愛知	帰国
高島 義雄	兵庫	帰国
宮川 哲二	富山	帰国
金田 与吉	福島	帰国
妻 富美子	同	帰国
吉田 正三郎	千葉	帰国
妻 ひろ子	同	帰国
三重野 正一	大分	帰国

福井　義寛　和歌山　死　亡　佐久間周策　福　島？
——以下呼寄夫人六人　日高正治亡後
佐々木雪枝　在大江　佐々木一哲妻　日高　照代　死　亡　木村宗一再婚
池上テルオ　在大江　池上欣二夫人　石原　幸代　在大江　故石原義人妻
石原タツミ　リオ市　故石原義雄妻　田辺　夏子　死　亡　田辺　博夫人

第六回・**らぷらた**丸（昭和十一年四月）一般五十七名

高拓生全部妻帯したが妻の名簿と、呼寄夫人も判明せず一般渡伯者も五十七名だが名簿なし。引卒者は上塚司である

川上　顕二　東　京　パレンチンス　清水　博　千　葉　死　亡
高島　将元　高　知　ベレーン　中島　忠之　熊　本　死　亡
荻野源太郎　埼　玉　イタコチアラ　鈴木　四郎　群　馬　帰　国
佐脇　忠　東　京　アレンケール　九十九利雄夫　人　サン　パウロ
小松　政夫　島　根　サン　パウロ　南　政夫　人　ウル　カラー
成田　大助　秋　田　死　亡　小野　七郎夫　人　ソリモンエス
諸富　次男　東　京　パ　ラ　ナ　上条浪太郎夫　人　ジュル　チー
高橋　忠次　神奈川　モジ・ダス　神園　万輔家族伴　マ　ウ　エ　ス

第七回**もんてびでお**丸（昭和十二年五月三十日）八名

村上　一郎　和歌山　死　亡　今井　正彦　新　潟　死　亡
妻ことめ　同　石黒条吉再婚　妻　とみ　同　死　亡
東海林善之助　宮城　パレンチンス　丸岡　東　宮　城　ジュ　ルチー
妻ともよ　同　同　妻なお子　同　死　亡

第八回・**らぷらた**丸（昭和十四年一月）

全渡航者の名簿なく姓名が判明せず、解っているのみ記録す。

辻　小太郎　滋　賀　再渡航引卒者　土師　郁朗夫　人　イタコチアラ
小野　八郎　福　岡　ウリクリツバ　立川　尚一夫　人　マウエス
森　源吾　福　岡　ワイクラツバ　相川　卓両夫　人　タボコアル
井口　太夫　人　サンパウロ　小野　三郎夫　人　ベレーン
泉　佳治夫　人　パレンチンス　佐脇　忠　母　堂　帰　国
畑原　懐夫　人　イタコチアラ　飯田義平夫人　弟　死　亡
森　進一郎夫　人　ワイクラツパ　野間　和子アマ興　故広瀬　友二
野村　弘夫　人　パレンチンス　夫人

アマゾニア産業研究所の歌

上塚　司作詞

第一節　希　望

碧り綾なす大空に
金色の色照り映えて
霞に咽ぶアマゾンの
流れゆたけき朝ぼらけ
草踏み分けて岸に立つ
健児の胸に希望あり

第二節　学　舎

溶漾としてたゆみなく
水は揺ぎて四千企里
北ブラジルの中枢に
七大河川の合しては
大江に入る要地こそ
我が学舎のある所

第三節　植　民

廣茫八百余万町
綠の森は天を覆い
清き流れは地を洗う
南十字の星かげに
カカオ花咲き風薫る
新日本の植民地

第四節　土　民

アンジラ河の高台に
針にかかる三日月は
世のうつろいを外にして
椰子の葉蔭に白銀の
砂を蹴りつつ舞い狂う
太古の民を照らすかな

第五節　創　造

白鷺の群嬉々として
渚に遊ぶジョゼアッスー
テーラフイルメの木の間より
播種機の冴ゆる音は
天地万有創造の
歓びに満つ楽の音か

第六節　努　力

神の御倉に秘められし
富源の扉ひらかんと
重き使命を擔いつつ
大和男子がふりかざす
フオイセの先に世を洗う
新文明の光あり

第七節　建　設

高き理想に燃え立ちて
朝な夕なに若人が
原生林に打ち揮う
斧の響きに建國の
尊き歴史は刻まれん
我ちの歴史を作らばや

短詩「雨」

ベンフイカ　成田洋子

しんしんと雨が降っている
人家のすくない、この山奥に
遠く犬の鳴き聲が
かなしい雨
人家の少ないこの山奥に
ふしぎなくらい、静かな雨
冷たく雨が降っている
夜空にひびく、さびしい雨
悩みの雨
さびしい雨が降りそそいでいる

氏名	出身	現況
畠中 実	東京	サンパウロ
妻 紀子	同	同
横田 信男	山口	サンパウロ
妻 満喜子	同	同
大川 博	静岡	サンパウロ
妻 よし	同	同
林 博之	島根	サンパウロ
妻 香	同	同
長女 純子	同	同
渡辺 正治	山口	スザーノ
妻 幸枝	同	同
大越 亀蔵	福島	パラグワイ
妻 ナミ	同	同
二条 豊基	東京	ニユギニ玉砕
妻 楼子	同	？
大友 達眼	福岡	帰国
妻 リツ	同	同
小坂井 浄治	新潟	帰国
妻 利子	同	同
中根 敬造	東京	リオ
妻 しげ子	同	宮島靖彦夫人
加藤 楽	神奈川	サンパウロ
妻 正子	同	同
松原 和子	山口	？
妻 ヨシ子	同	？
清水 義弘		サンパウロ

——以下夫人呼寄九名

氏名	在住	備考
御園 良子	在大江	御園福衛夫人
佐藤 マス子	在大江	佐藤行夫夫人
山口 敏子	在大江	山口 論夫人
越知 恒子	ベレン	越知栄夫人
橋本 みさお	聖市	橋本四郎夫人
岸田 艶子	聖市	岸田好明夫人
木村 千代子	帰国	
平田 綾子	死亡	平田三二夫人
鈴子 園子	帰国	鈴木憲司夫人
長男 博		

第二回家族移住・もんてびでお丸（昭和九年七月十七日）二二名

氏名	出身	現況
九十九 利雄	石川	サンパウロ
牧野 松太郎	北海道	サンパウロ
妻 ヤヱ	同	同
長男 弘義	同	同
長女 ヨル	同	同
三男 茂一	同	同
猪ゞ 養次郎	宮城	タバジョウス
妻 ヨシ	同	同
長男 正	同	アレンケール
二男 実	同	タバジョウス
三男 国夫	同	アレンケール
四男 保	同	タバジョウス
松本 ふさ	兵庫	小林増美夫人
同 睦	同	の母堂で二女
同 眸	同	も同行帰国
松井 三郎	福島	？
妻 松野	同	？
長男 正一	同	？
二男 師一	同	？
中島 泰子	死亡	中島敏三夫人
高島 朝江	帰国	
妹 淳子	兵庫	小林増美夫人

第五回・りおでじやねいろ丸（昭和十年四月十六日）七十八名

氏名	出身	現況
原田 公三	岐阜	ウルシミナ
妻 みづえ	同	死亡
高橋 亥年生	千葉	ウリクリツバ
妻 ふじ	同	同
内藤 菊次郎	新潟	ウリクリツバ
妻 きよ	同	同
内海 要造	神奈川	ウリクリツバ
妻 ヒデ	同	同
佐藤 時男	新潟	サンパウロ
妻 ヤイ	同	同
安藤 美代次	熊本	サンパウロ
妻 かちよ	同	同
小田 弘紀	熊本	死亡
妻 もりか	同	ウリクリツバ
沢 高志	神奈川	北巴マリンガ
妻 智	同	帰国
笠松 信吉	福井	帰国
妻 俊子	同	同
古閑 達雄	熊本	サンパウロ
妻 フデ	同	同
広瀬 正男	福井	？
妻 なつ	同	？
玉川 文夫	福井	サンパウロ
妻 なつ子	同	同
長女 優子	同	同
三女 文江	同	同
母 つね	同	死亡
田中 長次	滋賀	サンパウロ
妻 こと	同	同
弟 長平	同	同
妹 マツ	同	辻 小平夫人
井上 進	東京	聖市後帰国？
妻 操	同	同
母 ハツ	同	同
弟 時任	同	同
大久保 久平	千葉	聖州・モジ
妻 ハナ	同	同
長男 常房	同	同
二男 安隆	同	同
三男 淡海	同	同
四男 正士	同	同
長女 歌江	同	同
五男 五郎	同	同
六男 険也	同	同
斉木 熊吉	新潟	死亡
妻 マキ	同	サン・ルイス
二男 千代吉	同	サン・ルイス
三男 好春	同	トメアスー
四男 勝三	同	サン・ルイス
二女 セツ	同	大西虎雄夫人
三女 エリ	同	上森六園夫人
四女 利子	同	死亡
養女 モト	同	死亡
今井 英三	神奈川	サンパウロ
清原 堅一	熊本	帰国
柳井 正至	島根	死亡
金沢 七郎	東京	サンパウロ
高橋 房男	埼玉	帰国
尾山 悦彦	岡山	死亡
真沢 敬美	静岡	死亡

自からに勝てと發奮した。

權利よう護のため毅然と蹶つ

アカラ農民青年同志會

在伯邦人五十余年間の歴史のうち、當然の權利擁護のため、團体で政府に眞正面から体當りでぶつかり、そしてその權利を獲得したという記録の最高は、このアカラ農民青年同志會であろう。しかもまだ南伯サンパウロ州の如く、日本移民が廿五万人（終戰時）もいて、全サンパウロ州、北パラナの農業生産物の六・七十パーセント生産する功績を伯人に認められている處なれば、終戰に起きた特攻隊殺人鬼暴動、勝組の臣道連盟、櫻組挺身隊などが頻繁に起き、社會安寧秩序をみだしてもまあ一般の民衆はもとより、邦人は勤勉な農民だからと警察も思うがアマゾンの如く、トメアスー植民地に軟禁された者でも僅かに百余家族に過ぎない地方では、邦人の主張など煙が立つて消えていくようにあわものである、こんな邦人權力の少ない地帶で終戰直後まだ日伯外交關係が正常化しないうちから、この少人數が、權利をどうのこうのと主張してみた處で、始まらないのである。その無理を承知で行動に移した處に、アカラ農民青年達の情熱と行動の意氣があつた譯で、恰度明治維新に徳川幕府を倒した長州の高杉晋作・久坂玄瑞・薩摩の西郷南州・大久保甲東・土佐の坂本龍馬的「千人征かんば我一人」と言う信念があつた。

事の起りは、植民者の生産物の販売、購買が・セッタ（CFTA政府管理局）の手に握られ、そのセッタのため、胡椒の如きもキロ十五ミルの差（値段はキロ三十ミル）の大きな開きがあり、そのセッタを取除くにも、戰前のように總領事館はもとより、親會社の南米拓殖會社があるでなし、如何ともしがたかつた。と云つてこれを供手傍觀していては、何年たつても奴隷みたように純利益は中間で吸われてしまうのであつた。この正當の權利を産業組合の手にもどすべく、政府と交渉するため蹶起したのが、アカラ農民同志會で、會の名に「青年」を入れたのは、皆二、三十代の青年であつたから著者が加えたのである

一九四六年（昭和二十一年）八月まずアカラ農民同志會が結成された。

會長＝關勝四郎、委員長＝戸田子郎、委員＝佐藤忠雄、高橋勝正、藤橋銅三、澤田毅、澤田哲、澤田脩、澤田照夫、永野敬士、永野吉春、柴田英夫、日高寅男、池田亨、村上廣等であつた。まず最初にベレーンまで出る船を造らなければならなかつた。政府の船は貸してくれず、管理されている南拓會社の船は 勿論 使用出來なかつた。そこで素人等の計画で造船は無謀と考えたが、棟梁格に永野敬士を推し、造船製圖計に高橋勝正（伯國高校中退）をしてエンジンは中古の自動車を解体してそれを佐藤忠雄が苦心してとりつけた。研究に研究を重ね

八カ月かかつて建造したウニベルサル號

第四章　戰後邦人產業の飛躍時代（昭和二十年から昭和四十年まで）

パラー州にも新產業發見
胡椒が世に出るまで

マラリヤ病の巣窟が今は理想郷の樂園
アマゾン随一誇る　トメアスー植民地の繁榮

パラー州に南米拓植會社が、百万ヘクタールのアカラ植民地を創設し、カカオ栽培で倒產に瀕し、福原社長の退陣、事業縮少で、貿易に更生策を變え、入植者はアカラ產業組合を組織して、自給自足の体勢を整え、野菜や稲を栽培していたが、悪性マラリヤ＝黒水病（赤い血の小便が出て罹病三、四日で死亡）發生で、入植者は恐怖の余り、稲や野菜で旅費だけ稼げたら、どし／＼サンパウロ州方面に移轉した、殘された家族は旅費のない者や、また女子が多くて勞働力のない者や、病人が多くて動きのとれない家族のみであつた。そうした悲惨極まる處へ昭和十六年十二月七日太平洋戰爭が勃發した。そして翌昭和十七年二月南北アメリカ各國の外相會議で、ブラジルも日本に宣戰布告をし、在伯邦人は敵性國民となつた。これだけならまだよかつたが、同年八月十八日ベレーン沖でドイツ潜水艦が伯國商船隊を撃沈したので、全ブラジル人は激昂した。アマゾン地域は特にベレーン沖に近いのでひどく、ベレーン市は樞軸國民の家屋の燒打が始まり、邦人は身をもつてのがれた。そしてパラー州各地に點在する邦人は、州政府の保護で一まず陸の孤島アカラ植民地に送りこまれ軟禁された。アカラ植民地は周囲が大原始林に圍まれ、交通はアカラ河から、ベレーン市に出るより他に交通路がなかつたから、軟禁するには最も便宜な場所であつた。

州政府から監督官がきて、アカラ產業組合出荷の野菜や穀物などを管理し、邦人入植者はベレーン市で何程に賣却したが、それも解らず、購買する日用品も云われる通りの値で買つていた。總べて實權は伯國監督官の手にゆだねられていた。そうするうちに四ヵ年は瞬く間に過ぎ、日本は未曾有の激戰抵抗のあげく、無條件降服に終つた。終戰をまつていたトメアスー植民地在留邦人も落膽したが、人事を盡して天命を待つたのだから致し方がなかつた。これから先は祖國日本政府を頼れもせず、自分自身の力で更生の道を辿るより方法はなかつた。「克己」

國內消費一千屯を滿し、この上海外（北米の消費量四万五千屯）にまで輸出し、ドルを稼ぐようになつた。伯國政府はこの胡椒（ピメンタ・ド・レイノ）を日本人が始めて栽培したので、黄麻同樣絶讃をおしまなかつた。

年度	トメアスー生産量	年度の相場 相場クルゼイロ
一九三三年	二本	
一九三八年	七〇キロ	一〇
一九四五年	一〇、〇五〇キロ	五〇〜六〇
一九四六年	一二、九五〇キロ	八〇〜八五
一九四七年	三〇、五五〇キロ	一三
一九四八年	四八、四九〇キロ	一八
一九四九年	六五、四九〇キロ	四〇
一九五〇年	一〇四、九九〇キロ	四五〜一〇〇
一九五一年	一七二、三九〇キロ	六〇〜一〇〇
一九五二年	二五三、八七〇キロ	六五〜一〇〇
一九五三年	三三二、八五五キロ	一二〇〜一五〇
一九五四年	四四二、六五五キロ	一八〇
一九六四年	四五〇、〇〇〇キロ	

著者が、一九五四年（昭和二十九年）トメアスー植民地を訪づれたときは、恰度百八十クルゼイロスの時で、一クルは邦貨百二十円に相當していた。たから三十屯位とつた人がいたが、邦貨三千六百万円の粗收入で、當時經營費は五分の一もかからなかつた。物凄く儲かるので、北パラナの珈琲全盛期（一九五一・二年）か、薄荷の全盛期（一九四一・二年）などよりボロイと思つた。そしてトメアスー植民地では、從來每年一家族について五十本とか百本とか增植したが、一九四七・八年頃から一千本、三千本と急激に增植するものが增えた。しかもかつてのマラリヤ病巣窟の植民地は胡椒景氣で數万ヘクタールも拓けまるで自然林の公園をみるように美しくなつた。そこでマラリヤ蚊もなくなり、またブラジル更生省も、風土病撲滅に力を入れ、實に模範植民地となつた。

公共施設・文化機關・產業施設

一九五三年（昭和二十八年）以後アマゾン邦人移民のことについては、後章にまとめるが、ここではアマゾンで一番模範植民地と稱される、トメアスー植民地の文化機關とその他をのぞいてみよう。

邦人植民地の飛行場

一九五二年にアカラ郡から獨立しトメアスー郡になつたので、同郡はパラー州で、ベレーン市、サンタレーン市、カスタニヤール市についで第三番の州税の多い郡になり、軈てカスタニヤール市を追越すのも遠くあるまい。そして去る一九六三年の地方選擧で、日系伯人澤田脩（往年アカラ農民同志會員）が郡長に當選した。州税割當金額、郡税の增大で公共施設は急速に完備されるだろう中学校も新設され、從來ベレーン市まで下宿させていた不便もなくなつた

やつと完成したが七ヵ月もかゝた。山から木を伐してそれを鋸で引くのであるから當然だろう。しかも船型にするのである漸く十八屯の船ができ、ウニベルサル號と命名（世界號）同年十一月十八日處女航海についた。アカラ港（現在のトメアスー港）ベレーン間は現在でも十時間位かゞる。それをなんと故障十七回、途中で止まては修理しながら、根氣よく進み、遂にベレーンに到着した。

造船起工と同時に、生産物販売、日用品購買を産業組合の手にもどすべく、この方は伯國公認小学校出身で伯語に精通せる高橋勝正、澤田哲の兩君が衝つた。迂余曲折を經て、遂にこの交渉も政府の溫情で解決された。こうして青年達の八ヵ月の努力は實つた。やがて運輸、航行は同志會でやり、生産物の販売生活日用品の購買は産業組合と、二本立で經營していたが、一九四九年に同志會はその航行権を産組に移管し、ここにアカラ植民地は統一した産業組合が組織された。この機會にアカラ産業組合は、植民地の港トメアスーに因んで、トメアスー産業組合とつけて公認登録した。この産業組合が、北ブラジル一の産業組合となり、南のコチア産業組合と對照されるべき組合にまで今日飛躍していつた。その飛躍の原因はどこにあつたか、それはピメンタ・ド・レイノ（胡椒）栽培の出現であつた。

ピメンタ・ド・レイノの新栽培
(PIMENTA DO REINO)

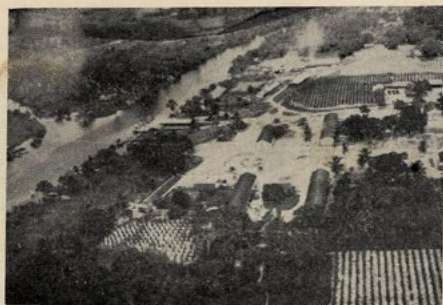
ピメンタ・ド・レイノは邦語で胡椒唐辛子と呼びビフテキや其の他の食料に添える調味料で、「唐カラシ」の類である。アマゾンでは原始人が在來種を自家用に栽えていた。また南拓も昭和五年以來カスタニヤ農場で、内藤克俊や生島重一等農業專門家が、改良種をあみだそうと栽培研究していた。

一九三三年（昭和八年）南米拓植會社員臼井牧之助（山口縣人・東京帝大卒、映画監督大島キヨシ夫人中川明子の父）が、ハワイ丸で渡伯の途中、シンガポール港で六十三才の老婆が病死した。當時シンガポールは上陸禁止（滿州國獨立で支那人の排日激化のため）だつたので、輸送監督の臼井と、老婆の身内とボーイ三人だけが上陸して埋葬した。その歸り臼井は胡椒の苗二十本を百円で買い（當時の百円は高價ー今日の十万円）船中で水をやりながら育てた。恰度セイロン茶を岡本が南伯レジストロに移植したのと同じであつた。

臼井が持參した胡椒苗で、福原社長も大いに喜こんだ。カカオ栽培が思わしくない處から、すぐこの苗はアサヒザール試験場に移植されたが、芽をふいたのはたつた三本であつた。この苗が二年後の一九三五年に二十本になつた。處が一九三五年は運悪く、會社營業不振で直營農場は閉鎖された。この閉鎖の折に農場雇員尾花福太郎から苗三十本を、加藤友治、斉藤円治の兩氏が譲受けて、丹念に育てあげた。在來種より成績がいいと聞いていたので兩人も眞劍であつた。恰度アマゾン・ジュートの種一本を育てた尾山良太の苦心と同じであつた。處がこれが一九四〇年戦時中、インドネンヤ・マライから胡椒が輸入しなくなつたので、ブラジル國内の値段が騰つた。他の植民者も、採苗し、二、三十本づつ植えていたのであつた。一九三三年たつた二本の苗から一九三八年は七十キロ、そして一九五〇年には八十トン、一九五三年には六百五十トンと生産は増加し、遂に

ていくから、將來の不安がない。これによつて現在の胡椒面積二千五百五十五ヘクタール（二、八六二ヘクタールから道路・建物敷三〇七ヘクタールを差引）から、もつと栽培面積は増えていくだろう。

トメアスー植民地戰後移民の驚異的發展

戰後移民のことは次項に總括して論ずるとして、トメアスー植民地が、北伯で第一を誇る模範集團地になつた原因は、戰前移民の努力とピーメンタ景氣にもよるが、そればかりでは繁榮しない。戰後港伯の移民が四百家族ばかり入植したからである。そしてアマゾン全体を通じて、戰後移民が一番獨立仕易かつた處は、なんと云つてもトメアスー植民地である。その戰後移民が獨立して、産業組合を中心に、植民地の發展に協力したからこそ今日のトメアスー植民地の繁榮があつた譯だ。戰後移民が他の植民地と違つて獨立仕易かつた原因を檢討してみると

トメアスー港

一、舊耕主の處で就労すると二年目から獨立をさせ、近隣の山を切倒し、新移民家族の內から一人か二人か、その荒山開拓に從事させることを許した。こんな特點は南伯サンパウロ州や、パラナ州では皆無である。そしてピメンタは二年目から結實するから、獨立が早かつた。

一、耕主に忠實であつた戰後移民は、獨立する場合、伐採地の燒跡整理に、燒殘りの根や大木を曳く時に、耕主から無償でトラクターを貸してもらつた。

一、日本から資本を持つてきた家族は、一年目から雇傭をやめて近隣の山を切つて入植した。南伯サンパウロ州と違つて、土地代は當時五ヘクタールや十ヘクタールは無償（今は高價だが）であつた。南伯では土地代を稼ぐのに四・五年は働かねばならなかつた。

一、苗木その他總ゆる物も原價で分讓してもらつた。

一、精神的な無形な援助が大きかつた。南伯の舊移民は、珈琲園コロノ時代伯人耕主に苦しめられたから、初期の戰後移民にもそのような苦しみを味あわさせたが、トメアスー植民地の舊耕主は南伯と違つて、最初入植した時から地主であつたから、南伯の邦人みたようなコロノの經驗がなく、酷使はしなかつた。これは著者が一九五五年に植民地に行つたときの實感で、著者も南伯珈琲園で二カ年コロノ生活の辛酸苦勞を味つたから、その點よく比較ができる。

一、南伯の作物と違つて、ピメンタには相場の變動が少なくそして天候による作物の被害が少なかつた。南伯は珈琲に霜の全滅があり三年間收穫皆無、稻は旱魃で皆無、野

毎年入植祭には盛大な運動會が催される。小学校は第二トメアスーを入れて四校ある。青年のスポーツも盛んで、野球團は毎年北伯で優勝し、柔道は堤春雄四段、古元修治・戸澤修治・高尾早三郎二段等の指導で七・八十人の青年・少年門下生がいる。劍道も盛大であり、卓球は各區の處女會で催し、實になごやかである。向学狀態は、十年前と違つて七・八割方が大学志望者であり、戰後派移民の子弟でさえ既にベレーンの各大学に就学している者さえいる。

從來は隣組的自治問題は、一切産業組合の手を經ていたが、トメアスー植民地區連合會が、元老大沼春雄以下有志達の骨折の産婆役でまとまり、イビチンガ區、マリキタ區、アグア・ブランカ區、アライア區、ボア・ビスタ區、トメアス區、ブレウ一・二・三・四區の九區に分かれ、他の邦人集團地にみられない統制のとれた自治振りを示している。十年以前に戰後派移民は雇傭人として舊移民耕主と、區別されていたような感があつたが、今はそんな差別もなく、自由平等眞の民主主義に生きている。

産業組合も一九五七年四月一日、第二十七期定期總會で、約十年續いた平賀理事長、戸田専務、木村常務の三人が勇退 三十代の若手のみが就任し、理事長押切他男、専務阿部昇、渉外澤田哲、常務武田武志、理事池田亨、成瀬義治、眞根井孝門、加藤邦藏、岡部孝、村上弘、アントニオ・バルボーザの十一氏が就任した。そしてこれが一九六四年に改選されたが、理事長専務、渉外、常務の各理事は變動がなかつた。

從來ベレーン市まで、交通はアカラ河が唯一であつたが、一九五四年から空路がひけて、ベレーン市から、毎日午前八時發午前九時着、そして歸路も便宜がよくなり、乗客の多い時は、空のタクシーだから、二機でも三機でも増發してくれる。

また邦人住宅も從來は見すぼらしい茅葺家屋で、暴風雨の時は雨がもつたが、今日の煉瓦家屋の立派なものばかりで、澤田毅、澤田照夫、大沼春雄、川越邦夫、押切他男、阿部昇、阿部浩、阿部雪雄、千葉文子、大橋啓助、池田亨、岩間敬造、沼澤谷藏、武田虎男、加藤邦藏、西尾勝利、日高寅男、横山利得右門戸田子郎、星野修、永野一水、木村陽一郎、山田義一等は、邦貨五・六百万円から、二千万円も建築費がかかるような、豪荘優美な住宅を建てている。皆自家發電機を備え、水道、電燈を設け、冷藏庫、ラジオ等を備えつけ、文化生活を營んでいる。しかもどの家庭も貨物運搬自動車はもとより、輕便自動車、バイヤ用自動車を持ち、實にその經濟力の急激な發展は驚嘆すべきものがある。

産組の飛躍・外國貿易と加工業え

南伯、特にコチア産組の如く一万三千家族も組合員がおると取扱う農産物も夥い、バナナ（亞國で輸出）紅茶（南米各國）珈琲（北米、歐州、日本）の如く産組自体が外國輸出の貿易をやらねばならず、販賣に行詰がくる。北伯トメアスー産組も、この點理事が改組されてから、若手の人々が活氣に滿ち、貿易に着眼、南米全体はもとより、四万五千屯も消費する北米えどし／＼輸出するようになつた。一方一九五三年度から、日本の高砂香料工業と組み、胡椒加工（スパイス・ミクロン）を具休化、既にトメアスー港外に工場を設立した。生産は産組、加工は高砂、販賣は三井物産と、三者各々事業を分擔して經營し

同年	同	同	JGアラウジョ	一次	八	五〇
同年	同	同	フオトランジヤ	一次	六	三七
一九五五年一月	ブラジル丸	トメアス植民地	五次	二二	一四九	
同年	同	同	ベルテラゴム園	一次	六一	三二九
同年四月	アメリカ丸	ベルテラゴム園	一次	三九	二九三	
同年	同	同	フオトランジヤ	二次	一六	一〇五
同年五月	アフリカ丸	トメアス植民地	六次	二五	一五六	
同年十月	ブラジル丸	トメアス植民地	七次	二六	九三	
同年十二月	アフリカ丸	トメアス植民地	八次	一二	三二	
一九五六年五月	アフリカ丸	トメアス植民地	九次	一六	一二八	
同年十二月	アメリカ丸	グアマ植民地	二次	六〇		
一九五七年一月	ブラジル丸	グアマ植民地	三次	三六	一八〇	
同年六月	ブラジル丸	グアマ植民地	四次	四七	二八四	
同年十月	ブラジル丸	マサゴン植民地	一次	七	四三	
同年十二月	ブラジル丸	グアマ植民地	五次	二一	一一八	
一九五八年十一月	アルゼンチン丸	エ・サーレス	一次	七		
一九五九年四月	アフリカ丸	キナリー植民地	一次	六		
同年六月		キナリー植民地	二次	七		
同年六月	アメリカ丸	エ・サーレス	二次	六		
一九六〇年九月	ブラジル丸	エ・サーレス	三次	一五		
一九六一年七月		タイアーノ	二次	九		
同年八月	ブラジル丸	エ・サーレス	四次	一六		
一九六二年十一月	ブラジル丸	マナカプル	六次	二七		

（参考）一九五四年十二月アフリカ丸移民フオツトランジヤ行六家族と、翌一九五五年一月ブラジル丸移民ベルテーラ行六一家族はモンテ・アレグレ植民地へ五五家族、タイヤーノ植民地へ十三家族移動配耕、一九五五年四月アメリカ丸ベルテーラ行三九家族と、同船フオツトランジヤ行一六家族は、各々トメアス植民地モンテ・アレグレ植民地トレス・ガーリョ區及びマサゴゴン植民地を經てグアマ植民地に移動配耕された。

大体以上のようで、一九五三年（昭和廿八年）から一九六二年度（昭和卅七年）まで、九年間に、八七四家族に及んでいるこの家族のうち、百十數家族が南伯に移動しても、殘在の家族も、五々長男・二男と分家しているから、アマゾン在住の戰後移住者は、渡伯當時と大同小異なものであろう。

南伯**サンパウロ**州より先に

どうして**アマゾン**に移民を入れたか？

話は戰前に戻るが、一九四〇年（昭和十五年）獨裁大統領ヴアルガスが、アマゾンのビラア・マゾナスを訪れ、上塚司や辻小太郎等と親しく黄麻栽培について懇談した事は、アマゾニヤ産業研究所の項で、詳しく述べたが、ヴアルガス大統領には、その記憶がまざ〳〵と殘つていた。時代は變り、ヴアルガス獨裁大統領も、軍部に押されて大統領を去つた。然し一九五〇年には伯國勞働黨を組織して自から總裁となり、再び大統領選擧戰に出馬した。勿論當選のメドがつかなかつたが、全伯遊說のときアマゾンを訪問し「もし自分が當選すれば、アマゾン黄麻栽培に對し絶大な援助を惜まない」と叫び、續いて「サンターレン市に國產黄麻保護のため製麻工場を設立する」と公約した幸いヴアルガスは當選し，到々三度カテテ宮の主人公になつたかつてヴアルガス は一九三〇年 革命 政權を 握つた 時から（marcha para oeste）「西方奥地開拓に進め」と奬勵し、一方北伯アマゾン流域にも力を入れていた。

この大統領當選の直後であつた。アマゾン黄麻に全生命をか

菜も不時の霜害で全滅、葡萄・苺・桃等果樹も眞夏の雹（南伯の雹は眞夏）で全滅等の物凄い被害が多かつた。胡椒は雨に弱く五・六月の長期に、根がいたむが、全滅することはなかつた。

一、アマゾンの土人は一般に従順であつた。なまけ者が多いがボツ〳〵仕事をやると亀と同じでいつかは仕事が終え る。この點、南伯の日傭伯人は歐州系混血兒が多く獰猛狡猾で、伯語の解らない邦人新移民には使いにくく、その點アマゾンは非常に有利であつた。

こんな點からでも、トメアスー植民地は、戰後移民の成功が早かつた。アライア區の石川道喜、八巻一男、ブレウ區の高木清人、宮川茂七、下前原光次、マルキタ區の清水六左ェ門などは早くも五十トン以上収穫し、戰前の入植者を凌駕するような金満家も輩出、これに続く二、三十トン級収穫者は三、四十家族に余る盛況である。しかもこれ等篤農家はこれに満足せず、第二農場を建設したり、商業に進出したり、八面六ピの活躍振りである。しかも産業組合の幹部にも、理事に細川伍一、松永年四雄（勇退）監事に山本峰雄（勇退）評議員に石川道喜、中田吟十郎、松崎喜代司、下前原光次（勇退）清水隆（勇退）エイ川龍夫（勇退）などが進出し、戰後移民二世も葡語に精通すれば幹部に進出するのも遠くはないと思う。

混亂・動搖・辛酸の十カ年
戰後のアマゾン移民盛衰

アマゾン戰後移民渡航表

渡伯年次	船名	配耕地々区	年次	家族数	人数
一九五三年二月	サントス丸	ジユート移民		一八	五四
同年八月	アメリカ丸	トメアス植民地	一次	二九	一八三
同年九月	アフリカ丸	マタピー植民地	一次	二四	一四三
同年同	同	フアゼンジンヨ	一次	五	三四
同年月同	同	モンテアレグレ	一次	二四	一六〇
同年同	同	マナカプル	一次	二三	一三九
一九五四年二月	同	ベレーン郊外	一次	一一	五六
同年六月	アメリカ丸	トメアス植民地	二次	二九	一七一
同年同	同	マナカプルー	二次	三八	二一九
同年七月	アフリカ丸	トレゼー植民地	一次	三〇	一八六
同年同	同	トメアス植民地	三次	一〇	六〇
同年同	同	モンテアレグレ	二次	二〇	一三一
同年同	同	マナカプルー	三次	七	三六
同年八月	?	ベレーン近郊	二次	一	一八三
同年九月	ブラジル丸	マナカプルー	四次	三〇	一三三
同年同	同	マタピー植民地	二次	二一	一六七
同年同	同	フアゼンジンヨ	二次	五	五一
同年十一月	アメリカ丸	マナカプルー	五次	二七	一六七
同年同	同	ベレーン近郊	三次	一〇	五一
同年十二月	アフリカ丸	トメアス植民地	四次	三六	二一五

伯具体案をひつさげて大統領に面接、遂に九月にアマゾン日本移民五千家族導入許可願が正式に提出され、迂余曲折を經て、十一月十九日移植民審議會を通過し、十二月六日の官報で發表された。これが南伯サンパウロ州より、一足先きに、日本移民がアマゾンに誘致された眞相である。ここまでこぎつけた辻小太郎の苦心はなみ〳〵ならぬものがあつた。

移民入植状況

官民共に經驗淺く混亂を招く

辻は最初から「移民を入れるには、二億円程度の移植民會社を創立する事が、先決問題である。もしも移民事業を個人の手で行う事になれば早晩行詰りになる」と云う見解を持つていたので、日本政府に、戰前あつた海外興業KKのような移植民會社の設立を進言したが、外務省は移住局も出來ないうちだし、貧乏な政府にそんな資本がある譯でなし、結局アマゾニヤ信用銀行の融資をうけて財團法人アマゾニヤ産業研究所（上塚司理事長）の手で行うこととし、日本では外務省歐米局と農林省農地局の二本立で、一九五二年十一月（昭和廿七年）「アマゾン移民案内書」が作成され「ジュート移民」募集にかゝつた。

⦿「ジュータ移民」

前頁の移民渡航表で解る通り、第一回はジュータ移民であつた。第一回募集は八十家族の予定であつたが、當時移民船がなく、サントス丸を急に移民船に改造し、これを當たので十八家族（五四人）しか渡伯しなかつた。配耕地は

木村一則耕地四家族、尾山良太耕地二家族、尾崎貞吉耕地四家族、南政耕地二家族、武富太郎耕地二家族、蛭田勝雄耕地二家族、牛田馬場耕地二家族となつた。入植は予定より、二家族がおくれ一九五三年二月に現地に着いた。然し同年はアマゾン河四十年來の大洪水で、配耕予定地の大半は水沒し、家屋も浸水、または流失するの慘狀その猛威に移民は恐怖した。その上に黄麻刈取・浸漬・剝皮・水洗作業は、本物のインド人さえ、臭氣プン〳〵で、そのうえ終日水浸になつていなくてはならず、邦人新來者はその困難にあきれた。しかもアマゾン河は小鰐や、電氣ウナギや血をみるとすぐ嚙つくピランヤ魔魚などいたので、恐れをなし一年契約の後に皆退散したこのジュート初移民の中にマナオス市の豪商羽田重吉やタバナン養鷄家の森光勝太等の如き大成功者がいた

ジュート移民交渉中（大統領・上塚氏・辻氏）

けている辻小太郎は、なんとかしてヴァルガス大統領を説きふせ、アマゾンに邦人移民を再開し、もつて黄麻栽培を再び邦人の手で支配できないかと熱望、廣量廣潤の辻は、思きつて「選擧前の公約たるサンタレーンに製麻工場を設置してもらいたい」と、伯人實業家某と共に連名で申請書を提出した。この申請書を、ヴァルガス大統領は直接讀み、速ちに辻に上府をうながした。時に一九五〇年一月で幸い大統領は好感をもつて辻を迎え、新設の製麻工場設立計画立案を委任した。この面接の機會を逸しては、二度と好機はこないと辻は「日本移民アマゾン誘致案」を申請した處、大統領は好意をもつて辻に具体案を提出せよとの返事であつた。辻小太郎が後年著者に語つた處によれば「この時くらい嬉しかつたことはなかつた。まだ日本と伯國は外交關係も正常化ぜず、大使の交換さえなされていないのに大統領の一聲で日本移民を入れる」と云われたのだから雀躍した。そしてその誘致家族數は實に五千家族であつた。

　これより先き、ヴァルガス大統領は、軍部（ゴーエス・モンテイロ参謀總長・ヅウトラ元帥・エドワルド・ゴーメス元帥等）の總意で、一九四五年十月二十九日獨裁の地位から下野、南大河州サン・ボルジャの農場に隠遁したが、間もなく議會政治が復活し、總選擧が始まると、ヴァルガスは再び出馬した。その頃邦人松原安太郎の顧問辯護士アキメーデス・マニヤンエス（後年政界の巨頭）は、往年ヴァルガス独裁時代の腹心で「いま日本人松原の知遇を得ている」と事ある毎にヴァルガスに話した。ヴァルガスもそこで邦人松原の名を記憶に殘していた。

　そこへ大統領選擧戰に出馬となつたので、腹心のアルキメーゼスは、東奔西走したが、選擧はなか／＼激戰で當選するかどうか予想がつきかねた。その苦心をアルメーデスからきいた松原安太郎はヴァルガスに選擧費の一部にと、財政的援助をすると共に、大いに激勵した。（當時二千コントスと噂が飛んでいたが眞疑の程は解らない。――當時の二千コントスは、一九六五年の十五万コントス位）ヴァルガスも不遇をかこつていた際とて、松原の好意を感謝し、ここにヴァルガスと松原の友情は結ばれた。軈てヴァルガスは壓倒的大勝利を得て再び大統領に當選した。當時のヴァルガスの權威は、その後の歴代の大統領どころではなかつた。各大臣でも忙がしい時は、なか／＼面會も出來なかつたが、松原だけは木戸御免で祕書なしで面會した。それ程親密で、翌年の話しだが一九五二年（昭和二十七年）十月五日には、ヴァルガス大統領は、サンパウロ州統領ルツカス・ガルセスと政治的重大な會談するのに、わざ／＼マリリアの松原耕地を會議場ときめ、同家に一泊すと云う前代未聞の記録さえ殘している。これは余談だが、ヴァルガスはかねてから松原に恩惠をほどこそうと日本移民配置の件を考えている處へ、辻小太郎のアマゾン邦人誘致の申請が出たので、北伯日本移民の件を辻に讓ねたのであつた。勿論松原とてヴァルガスと辻が面會した翌年即ち一九五一年（昭和廿六年）八月彼は、ヴァルガス大統領の特命を帯びて、軍用機で麻州・ゴヤス州・パラー州・アマゾナス州の移民配置の場所を尋ね、辻のアマゾン移民五千家族と同様、中伯マラニオン、バイア、ミナス及び南伯諸州に四千家族の邦人を誘入する權利を、移植民審議會を通じて許可をとつた。

　一九五一年一月大統領に會つた辻小太郎は、速ちにこれを在京の上塚司に報告、すぐ渡伯をうながしたので、上塚は七月渡

して不平組が続出、二十代の学生で渡伯した純情な支配人上野浩雨は戦後移民を統制することは困難であつた、温情をもつとしては、なかなかきく連中でなかつた。第二回移民は山切の準備が出來ていなかつたので、自から原始林を伐採した者も多かつた。そこへもつてきて、一九五五年ベルテーラ・ゴム園行きの家族五五家族が、ベルテーラ入植拒否で、行先がなく、止むなくモンテ・アレグレに入植した。突然だつたもので移民收容所もなければ、入植する原始林への道もないのだ。この第三次五五家族は止むなく、テント張して野營、共同作業で入植地までの道路をつくり、そして自分達で大森林を伐採した。ドイス・ガーリョ地區と呼ばれ、實に辛酸苦勞をなめた。この植民地の缺點は、港がアマゾン大江の沿岸でなく、支流なので、なかなか船舶が寄港せず不便である。しかも植民地は港から四十粁奥で、その間の交通機關は、たつた一台の貨物自動車が週一回通うだけであつた。農產物收穫期は各商人のトラックが往來したが、こうした處から入植者も、將來に不安を感じていた。そこへ一九五四年入植の大学卒の移民が精米業に失敗し、そこで聖州に脱出したが、これを皮切に、第一次二家族、第二次四家族第三次五家族の脱耕が続き、特にベルテーラから移轉した移民の脱出者は、同年二五家族に及んだ。そして翌年はまたも二三家族退植し、その後脱出者が後をたたず、今日は百家族以上脱耕し、残留組は全部で二九家族という淋しい數になつた。入植直後產業組合も結成され、今日はこれを運營して漸く再建に邁進している。

◉「**マカナプル**植民地―現在**ベラ・ビスタ**植民地」

評論家大宅壯一がきて「緑の地獄」と云うたのはこの植民地のことである。(大宅壯一著「中南米の裏街道を行く」文藝春秋新社版)この地はマナウス市の對岸にあり、最初辻小太郎がアマゾン移民の誘入を始めたとき、アマゾン產業KK旧主事の高村正壽を、この地方の支配人に任命、移民の世話をさせた。日本移民五千家族來るとの報に接し、アマゾナス州に三千家族誘致すが、移植民院C・A・N・Aは左の費用を獲得しなければならなかつた。

	コントス
A、カカオペレーラからベラビスタ間道路費	二・四〇〇
B、クワテロン迄三ケ所の坂の改修費	六〇〇
C、第一年度入植家族三六〇戸の耕地割當費	五〇〇
D、三百六十戸の家屋費、一戸當り二〇コント	七、二〇〇
E、交通ガソリン費	五〇〇
F、藥費・農具費の補助費	五〇〇
G、家畜・種苗・肥料・農藥品の補助	五〇〇
H、三六〇家族の入植第一年度の食料補助費	(相場變動で未定)

I、入植配置は二六〇家族カカオ・ペレーラ區、一二〇家族カルデロン區

右のような譯で、費用莫大なのを、遂に移植民院で豫算がとれなかつた。そうするうちに高良一等書記官、原梅三郎日伯協會理事が渡伯、移民送出しは既に發せられていると告げた。ツーリ農務長官から、命令をうけた支配人ビッセンテ・ランゼルはボツ／＼家屋を建てていいが、高村正壽が雨露をしのぐ急造のバラッカ(茅葺)を建てさし、急場の間に合せた。道路は完全でなし、山は伐採が終らず、受入態勢が整わず、といつて日本

松原安太郎私邸に於けるゼツリオ大統領晩餐會

この年にアマゾンの牧牛は水害のため數万頭が溺死したのでも水害の甚大が解るだろう。

◉「**トメアスー**植民地」

次が八月渡伯のトメアス植民地組で、始めて同胞を迎えるので、舊移民は親切にしたがなんと云つても前述したように戰爭中軟禁された後、漸く立ちあがつた舊移民で、胡椒景氣が出なければ、貧乏世帶で慘めな生活に苦しめられている人達であつたから、現金收入は多かつたが、生活様式は今日と違つてまだ〳〵低かつた戰後派移民は、終戰後の食料難の混乱期を經た千軍万馬の吉强者ばかりで、旧移民の耕主と、新移民の連中と意志の疎通を欠き新移民の中には特に成功を急ぐ者多く、そのため感激的に意見の衝突をきたし、退耕する者が続出した。それでもアマゾン各地の新來者で、トメアスー組が一番成功者を多く出した。

◉「**マタビー**植民地」

続いて九月にはアフリカ丸で、七六家族四七六人が大擧して渡伯、四ケ所に配耕になつた。その一部が伯國移植民院の指令によつてマタビー連邦植民地に入植したが、南伯サンパウロ州や、パラナ州と違つて受入態勢も出きず、入植民は水利に乏しく地味痩せ、交通も實に不便であつた。營農資金に乏しい家族はすぐ生活に困つた。永年作物のゴム樹を植えたが、これは收穫が何年先のことやら當にならず、その上にゴム接木技師の技術的拙劣のためか、続木成績は一〇％から三〇％も不良、入植者は前途に不安を感じた。土地が旱燥仕易く、旱魃が四、五カ月も続くと、野菜は勿論、諸々の木も枯木同様葉が落ちた。第二次を加えて四十一家族のうち三十三家族退植し、たつた八家族が踏みとどまつた。今日既に滿十年になるが、粒々辛苦してゴム・ピメンタを植え、更生の道に邁進している姿は涙ぐましく、著者はその精勵刻苦に賞讃を贈りたい。

◉「**モンテ・アレグレ**植民地」

マタビー組と一緒に上陸して入植したモンテ・アレグレ植民地は、戰前南米拓植會社が、四十万ヘクタールのコンセツソンを獲得し、新井高次農学士以下のりこみ、棉花農場その他諸農作物を植えたり、五反田貴己の大阪ＹＷＣＡ組四十七名が耕作した事は、前述したが、戰後いち早く、この土地が豊饒肥沃の處から着目された。勿論連邦植民地になつていたので、移植民院の管轄支配下であつた。當時同地にはＹＭＣＡ組の上野浩爾が一人殘つて牧場を經營していたので、上野が當移住地支配人に推選された。米・煙草・ゴム・椰子等の栽培に從事する自營開拓者二十四家族であつた。第一回入植予定地の山切は漸く濟んでいる處へ、早くも翌年第二次二〇家族一三〇人が入植した山伐りの準備もなされていない處だ。しかも第一回入植者の中三家族ほど酒癖の悪い者がいて植民地をかき廻し、それに同調

地點からはいる植民地の道路六粁は、泥土で歩道にもならない悪いものであつた。入植者は二年目から殆んど生活費を稼ぐのに窮し、午前二時頃起きて片道十一粁の悪路を、野菜を担つてボルト・ベーリョ市まで売りに行つた。その生活が約六年間続いて涙ぐましい努力であつた。連邦政府も見てくれず、海協連も移住振興も棄ててかえりみなかつた。脱植者も出たが、恰度六年目に大蔵省相澤書記官が訪づれ、このままにしたら、退化して土人部落となり、人道問題まで起すと痛感、同氏の進言で移民を取扱う海協連（今日の移住事業團）から、貨物運搬自動車と精米機が貸與された。ここで十一粁の道を毎日歩るいて通う必要もなくなり、耕作面積を増大しても農産物は多量に運搬出來、一九五八年から養鶏經營に入り、今日立派な植民地となつた。そして待望の國道も麻州へ通過、植民地内の小道路も修理され、産業組合も結成、小学校も設立された。ゴム・グワラナー・ピーメンタ・稲・野菜と多角農に生き、七・八年前にみるような惨めな植民地でなくなつた。ここの植民者も皆眞摯な拓人だと著者は激賞しておきたい。

アマツパー州オヤポツキ兵舎で捕縛のスクリユウ蛇（四十五米）

⦿「グアマー植民地」

連邦政府が米作地帯とすべく、大いに力を入れた處で、一九五五年一月ブラジル丸でベルテーラに入植した移民が、ベルテーラ・ゴム園で邦人入植を拒否したので、その内十五家族をマサゴン地域が不健康地なるため、入植を拒んだ。そこでこの十五家族は、グアマ植民地第一次入植者なつて十一月二十五日カラパショ地域五四ヘクタールの開拓に着いた。それからアマゾン開拓庁も、ペルナンブコ地域二万四千ヘクタールを購入、次の通り続々と邦人の入植をみた。

第一次	一九五五年ブラジル丸	一五家族	一一二名
第二次	一九五六年アメリカ丸	一六家族	一〇五名
第三次	一九五七年ブラジル丸	二六家族	一八〇名
第四次	一九五八年ブラジル丸	四七家族	一八四名
第五次	一九五九年ブラジル丸	三一家族	一四一名
計		一二五家族	八二二名

◎入植條件は

一、三ケ年間最低三ヘクタールのゴムと二ヘクタルの油椰子栽培
二、ゴム樹の蔭にバナナ・カカオ・カフエー栽培
三、毎年二ヘクタールの米作
四、毎年一ヘクタールの牧草
五、配給する乳牛二頭を飼う
六、豚・鶏・蜜蜂などを飼育する
七、住宅附近に配給する果樹を植える
八、適地に野菜を植える

◎貸與其の他條件

政府は戦前の南伯サンパウロ州の既成珈琲園移民と同じよう送りさえすればいい方針だつた。そして營農計画もなりたたない間に、一九五三年九月アフリカ丸二三家族を皮切に、一九五四年六月アメリカ丸三八家族、同年七月アフリカ丸二七家族、同年九月ブラジル丸三〇家族、同年十一月アメリカ丸二七家族と、僅々一年間に六次に亘り一二〇家族七百余人が入植した。連邦植民地事務所も、高村正壽職員も手を施しようなく、そこへもつてきて、初年度費用三千コントス、二年度六千コントを費しもう豫算もなくなつた。不幸にも地味瘦せ、ベラ・ビスタ地區で一ヘクタールの籾が二・三俵しかとれず、入植者の九割までが落胆し、前途に不安を感じた。そのうえ晝間からアマゾン特有の蚊群が襲い、夕食は蚊帳の中で喰べるという辛酸な生活、またムクイン（吸血虫）がいて躰中痒ゆく、小児はそのため皮膚が傷となつてただれた。ムクインというのは眼にみえない小虫で、ダニの一種であつた。收穫のない處に永住は無用と、こうした處から退耕の氣はいがみえた。一九五五年五月矢萩某がトメアスー植民地を視察した處、事業擴張中の邦人耕主は、旅費當方負擔、入植すれば二、三年で独立援助をすると棚からボタ餅式條件を提出されたので、この報告をベラ・ビスタに齎らしたそこで秋田縣人伊藤清四郎は渡伯前木村總一郎（秋田縣人トメアス産組常務理事で當時組合の實權者）に紹介狀をもらつていたので、眞實かどうかをたしかめるため、視察した處、ベラ・ビスタと收入は雲泥の差、ここで歸植して家財をまとめ移轉した。これをきつかけに続々移轉、トメアス植民地やベレーン近郊に移つた。なんと百二十家族入植した者が、到々三十家族になつた。幸い三十家族の残留組は總ゆる辛酸をなめて孤軍奮斗その後、ゴム・ピメンタ・カカオ・グワラナ・野菜等を植え、今日は他の植民地以上に裕富になつており、一九六二年十一月二七家族の後続部隊も入植立派な植民地となつた既に入植以來十一年、あの昔し、大宅壯一に「緑の地獄」と云われたのも、笑話となつている。この三十家族の先驅者の努力は賞讃するに余りあるものだ。著者も十年前訪づれ、蚊帳の中で夕食を喰べた想出があるが、當時の地獄はいま理想郷の樂園となつている。

モンテ・アレグレ山岡耕地の葡萄園

◉「ワワゼンジンニヨ」

アマツパー直轄州の首都マカツパ市から四十粁程離れた處である。野菜移民として入植したが、たつた五家族だつたので、生産過剰にもならず、マカツパ市に送り、他の植民地以上に早く独立した。特に鹿児島縣人吉留幸夫兄弟は巨利を博した。マタピー植民地はこの奥地で、野菜を作つても販売市場が遠いのと違つて、ここは有利であつた。

◉「トレーゼ・セツテンブロ植民地」

ロンドニア直轄州（旧名ガツポレ直轄州）の首都ポア・ビスタ市から十一粁の地點で、地味は肥沃、そして健康地であつた一九五四年七月アフリカ丸で二九家族一八六名が入植した。當時首都から麻州への幹線道路も小路で悪るく、その上に五粁の

四才）同
鯵坂青年（二十四才）同
谷口昭徳のみ九死に一生を得
三、濱田少年（十才）泳いで心臓痲痺
四、有馬老人・瓦積荷が沈沒して溺死
五、宮原祥子（三才）岸水泳していて溺死
のように、溺死続出で子供を多く持つ家族は危険を感じていた

このグワマ植民地に賭けるアマゾン開拓庁の期待は大きかつた。大体一九四八年から、國立農業審議會長フリスベルト・カマルゴ博士がグアマ河沿岸に二百米おきに、灌漑排水工事を施し、水田式米作を試み、一ヘクタール六トンの收穫を得た。普通一ヘクタール二トンであるが、この成績をみて、アルバロ・アドルフ上院議員は、米作に上手な邦人移民をここに入植させたならと云う處から、ベレーン總領事館に三〇〇家族米作移民を申込んだ。そして着手した植民地だが、一九五〇年からSALTE案による毎年二〇億クルゼイロが出費される計画もうまくゆかなかつた。そこでアマゾン開發庁と、移植民院の共同管理で、この植民地を經營した。その頃外務省柳田技官（宇都宮農場長）や、農林省南坊技官が、稀れにみる痩地であると云い、同行の鈴木醫学博士も、不健康地も甚だしいと痛罵した。勿論同年には稀にみるマラリヤ病が流行し、全入植民者は罹病し、病苦に呻つていたからでもあつた。

氣短かな戰後移民は、第二・三次の大擧退植の後に、第四次第五次の大半もアカラ植民地へ移動した。最初は入植者の熱意で産業組合も結成され、海協連から船舶、貨物自動車、トラクター五十馬力等が貸與され、大いに援助されたが、退植が多かつたのはやむを得なかつた。現在は入植十年目で、目的の水田米が、殘留組多年の苦心で生産されるようになつた。海協連の上村円太郎がドミニツカから、台灣の逢來米種を持參して移植してから、立派な日本米が實つた。また野菜も甘就の主産地として、一作五十トンも收穫する者もおり、高台地でもピメンタ・カカオ・ゴムなどを植え、殘留組の三十四家族（九十一家族退植）は、實に平和に滿ちた生活に浴している。苦斗辛酸満十年の上に幸あれと著者は祈つたが、アドルフ所長も、日本人の精勵刻苦なのに敬服している。アマゾンで逢來米を産出したことだけでも、黄麻、胡椒についでの功績甚大で特筆すべき記録である。

⦿「マサゴン植民地」

一九五七年十月ブラジル丸七家族が入植したものでアマツパ直轄州マサゴン町の對岸に横わるマサゴン島内にある五千ヘクタールの植民地で、一九五五年四月ベルテーラ・ゴム園から十五家族が移轉したが、この十五家族はマサゴンの町にいて、島に入植しなかつた。いまだ海協連ベレーン支部設立以前だつたので、十五家族は分散せず結束し、古關領事・廣瀬書記官・辻開發會社長の三人と鳩首協議し、遂にグアマー植民地に入植することになつた。グアマーはまだ受入れ態勢が整わなかつたが、それでも無理に入植した。マサゴン植民地は雨期に入り、稻の刈入時に胸まで水が浸入し、稻の收穫を放棄するときもあり、何を売るにも陸路でなく、船舶を利用する不便と濕地特有のマラリヤ病が發出するので、十五家族は入植せずに先見の明があつた。その後一九五七年十月ブラジル丸七家族が始めてマサゴンに入植したが、前記の通りで悪戰苦斗のあげく、六カ年

ベラ・ビスタ植民地第一回入植者が、上陸する晴やかな姿

一、入植當初一ケ年は、毎月一、五〇〇クルゼイロを貸與し返済は三ケ年間

一、植民地から配給する種苗・乳牛　農薬品・肥料・飼料は二ケ年後から五ケ年間に返済

三、住宅、土地代その他のものは、二年後から十ケ年間に返済

四、その他色々の條件

◎施設

一、病院　二、学校　三、農業指導　四、一ケ年間は農産物運搬は無料　五、道路は政府が建設する。

と紙上でみると條件がいいが、入植してみると、まず地勢が悪く、第一次の入植地カラパル區は、増水期に浸水地多く、理想の米作地にならず、ピメンタやゴムも濕地と雑草で育たなかつた。第二次、第三次と物凄い鳴物入りで入植したが、遂に収入がなく、日本から持参した資金を消費した。前途をあきらめて退陣する者も出てきた。幸い第一次の平瀬勝之助等試作の甘藍（レポーリヨ）が成績良好で市場で売れたので、ここで入植者は、皆甘藍を植えて、生活を支えた。アマゾン地方、特にベレーン市近郊では、それまで甘藍は酷暑のため巻かないと云われていた。それが成績よく出來たのであるから、皆驚ろいた。そこで産業組合も結成され、どうにか落ちついたが、やはり増水期に家屋が水浸（二階家で階下は浸水・寝食は二階）しになる生活は、みな好まなかつた。そして多くの家族が移轉を希望した。

この植民地はグワマ河に沿つているので、最初から縁起が悪く、溺死者が多かつた。

一、今野えみ子（十才、足をすべらして溺死

二、江越惠子（二十才）一九五七年七月二十九日にカノアが轉覆溺死

江越このえ（十九才）右と同じ

谷口忠美（二十

上のベツピンさんが半年後には黒人同様

あり、邦人の少ない處から、子供の教育をゆるがせにすると、退化するおそれがあるので、殘りの五家族も善處している。現在子供の教育は州首都リオ・ブランコ市に下宿させ就学させている。

◉「**コルネイロ・モツタ**植民地」（舊名**タイアーノ**）

アマゾン流域の邦人植民地のうち、一番不便な地で、マナオス市からの交通は、ネグロ河を遡航して、首都ボアビスタ市まで行きそこから九十五キロ奥のタイアーノ植民地まで行くのだが、ネグロ河八五〇キロの間は、乾燥八カ月間は、減水して溪流多く、航行の便が中止されるから、マナウスから水路ボア・ビスタ市まで行けない。そして陸路の道はまだ開通しない。そうなれば唯一の交通は空路のみである。著者もやむなく空路を選んだ。このロライマ直轄領は二十五万平方粁、一九四三年にアマゾナス州から獨立したもので、人口は僅かに二万人、首都ボア・ビスタ町が人口一万二千に過ぎない。舊名リオ・ブランコ州だつたが、高峯ロライマ（二・八六五米）の名に因んでロマイア州と改名された。タイヤーノ植民地は、一九五五年一月ブラジル丸のベルテーラ・ゴム園移民のうち、十一家族が移轉したが、このうち二家族はボア・ビスタ市の野菜移民として政府から招聘された。そして十一家族のうち六家族が退植し、殘り五家族と一九六一年七月七日入植した佐賀縣團体移民九家族が入植している。最も遺憾なことはボア・ビスタ市までの道路の大草原九十五粁が、雨期の四月から八月まで約五カ月間は、水浸しとなり、自動車はおろか、船でさえあぶなくて通えない。途中二つの河があり、雨期には氾濫して船でも横斷は危險である大体雨期にはこの大草原一帶南北一千キロが全部濕地になるのだから恐ろしい。植民地と首都との雨期の交通は唯一タクシー飛行機がある。

第二回目の佐賀縣團体移民は、一九六一年六月四日神戸出帆七月九日ベレーン着・八月四日植民地事務所に到着しているが神戸を出て滿二カ月、ベレーン市から約二十八日かゝつている一番困るのは、九十五粁も離れているので、野菜類の販賣が出來す、特に雨期はどうにもならない。地味肥沃で、モンテ・アレグレ植民地や、キナリー植民地より豊饒（テーラ・ロシヤ地質）だが、乾期が長く、特に乾燥酷しくピメンタ・コーヒー・・グワラナー等の永年作物は葉が萎びれる。植民地の小川の水も渇き、飲水にも不自由する事があり、乾燥期には自家用野菜にも不自由する。雨期に、稲、マンジョカ、玉蜀黍、などを收穫するが、これは命をつなぐ程度の收入で、將來永年作物を研究する必要がある。しかも生産物はボア・ビスタ首都で販賣するが、商人も生産物が多いと、船便でマナウス市まで運ぶので農産物價格は物凄く安く買わないと引合わない。娯樂一つもないこの遠隔の地で活躍している人々の辛抱を著者は推賞してやまない。因みに移住事業團支部長那賀君が、移住者の世話をやいている。

◉「**エフジエニオ・サーレス**植民地」

マナウス市から三十粁の地點にあり、イタコチアラ街道で、立派に舗裝されて、オニブス（バス）も午前六時から、午後七時までであり、實に便利である。昭和五年パレンチンスのアマゾニヤ産業KK創立當時の、名州統領の名を冠した植民地で、國道に沿うて兩側に地區割してあるので、バスは自分の農場の前を走つている。政府の援助は從來の植民地より好條件、住宅も

グアマ植民地の誇り、上は日本米の水田、下は甘藷畠

の無駄骨を折り、遂に退散した。四家族は同州カンポ・ベルデ植民地、二家族はトメアスーに移轉した。こんな處に最初から邦人を入植させると云うのはどうかと思う。アマツパー州にはこれ以上の良い地域がまだ〱たくさんあるはづだ。

◉「**キナリリ**植民地」

ボリビア國境で、アマゾン大河の一番奥地にある植民地である。百年前にこのアクレ州地方は、國境が解らなかつた。一八六四年～六九年のパラグワイ戦争のとき、國力の弱いボリビアがブラジルに開發権をゆだねた。その後一八九〇年頃からゴム景氣が出たので、ゴム採集にブラジル人が進出したが、開發権を譲つたボリビアも慾が出てアクレを占領し、ゴム採集のブラジル人を逐放した。ここで住民は暴動化したが、有名なブラジル外相リオ・ブランコが、一九〇三年外交々渉をとげ、遂にブラジル領にした。アクレ州は伯國となつた代り、マデイラ・マモレ鉄道の敷設をボリビアに約した。面積一五八・三七五平方粁、人口は稀薄で十五万人と稱されるが、飛行機から見下すと大密林の中の小川の岸に、土人の住家が多く見うけられ、人口調査はあてにはならない。人口十五万は稍文化に浴した人間だけを云うのであろう。キナリー植民地は首都リオ・ブランコ市(人口二万)から十五粁地の點にあり、全面積一・八〇〇ヘクタールで三十ヘクタールの土地に六十家族の農民を入植させる計画であつた。一九五九年四月六家族が入植したが、ベレーン港から、なんと六十日もかかつて着いた。監督はモンテ・アレグレ植民地支配人上野浩爾で、ベレーンからマナオス港二十日、マナオスからプルス河支流に入りラブレアで河船(船底の浅い)に乗換、ボツカ・デ・アクレまで三十七日、そこでまた小舟に乗換えた。蒸氣汽鑵の湯が湧く薪がなくなると、船を止めて、河岸で薪取り二・三日という悠長さだつた。ボツカ・デ・アクレからリオ・ブランコ市までまた三日もかかつた。これで移民は斗志そ失なつたようだ。第二次は同年六月で七家族上森六園・辻村の両氏引率であつた。入植既に六年目、十三家族のうち八家族退植し現在五家族が残つている。地味肥沃でコーヒー・カカオ・ゴム・ピメンタの永年作物はもとより、米、落花生、野菜パイナツプルなど一年作物もよく出來るが、余りに遠隔の地で

一九五四年十二月	アフリカ丸	六家族	三七名
一九五五年　一月	ブラジル丸	百家族	六二二名
一九五五年　四月	アフリカ丸	一六家族	一〇五名
合　計		一二二家族	七八五名

が入植した。處かこの入植が、伯國内國移植民院（ＩＮＩＣ）と、アマゾン開發會社（辻小太郎社長）との日本移民契約條綱に違反していた事が農務省で解つた、

一、移民監督官廳の農務省は、移植民院に對し、ゴム園に勤勉な日本人を入れることは、國内勞働者を壓迫すること。

一、移植民院技術部長が、邦人入植者の住宅整理の混乱や、當時兄弟で殺害事件があつた事などで、數百家族の伯人勞働者の中に混住させることを好まなかつた。

一、ゴム園縮少時代で、別に邦人雇傭者を必要としなかつた等で、入植移民はすぐ移轉の準備にかゝらなければならなかつた。責任者辻が寝食を忘れ、東奔西走して入植地を物色したのは、この時である。そして急場のしのぎに。

モンテ・アレグレ植民地	五五家族	三五八名
ベレーン市近郊	二一家族	一二七名
グアマ植民地	一五家族	一〇二名
タイヤーノ植民地	一二家族	七一名
サンタレーン市近郊	七家族	四三名
アレンケール市附近	五家族	三六名
トメアスー植民地	四家族	二六名
マナオスのＩＢサバ農場	三家族	二三名
合計	一二二家族	七八五名

を配置して、事なきを得た。以上で大体各邦人入植地の概略を説明した。

十年間のアマゾン戰後移民結果論

一九五三年二月ジュート移民が始まつて、一九六二年十一月ベラ・ビスタ植民地長崎縣團体移民まで、十年間のアマゾン移民事業を批判すると、まず戰前明治時代の南伯移民に似た時代錯誤的の觀があつた。

一、伯國移植民院の受入準備も充分出來なかつたが、その間にもうジュート移民の送出しが始められた。

二、日本では移住局も出來ないうちに移住事業を引受けた。なんでもかんでも送れ式であつた。どの植民地も山切はおろか、道路もないのに、送れ式であつた。少なくとも責任をとるべき官庁が、統一した移住行政管理をせず、農林・外務の二系統立てで行なつたのもまずかつた。

三、日本の官庁に、最初移住事業に詳しい人物がいなかつた。理論的には学者（例えば故梅本徹雄の如き）がいたが移住事業の實際を知らなかつた。貿易事業と違つて、移住事業は感情をもつ人間を取扱う仕事であるから、なんでも送れ式ではいけない。

四、移住事業は、金のかかる事業である。一例をひくと、前に書いたマナカプル植民地初期開拓でさへ、一年目三千コントス（邦貨三六〇〇万円）二年目六千コントス（邦貨七二〇〇万円）で、あの小さい一つの場所でさへそんなにかゝつた。その移住事業を早く海協連の手で管理しなかつたのもまずかつた。

五、最初辻小太郎個人でやり、第七次移民になつてから、一

タイヤーノ植民地の浸水悪路

立派なのが建ち、町に近いので、野菜を栽つてすぐ生活してゆける一九五八年當時の州知事プリニオ・フイリョ次のジュベルト・メストリンニョ州知事（前マナウス市長）一九六四年七月就任のアルツール・レイス州知事等皆植民地開拓に力を入れ、邦人に好意をもつている。入植當初の條件は

一、各戸四十ヘクタールづつ分譲

一、ヘクタール當り三〇〇ミル・クルゼイロ融資

一、ピメンタ栽培につき、一・二〇〇ミル・クルゼイロまで融資

一、資金は三カ年据置、その支拂いは次の通り

（イ）四カ年目全額返済

（A）第一回目六月中　一ヘクタール當り一七三ミルCRS

（B）第二回十二月まで一ヘクタール當り　五〇ミルCRS

（C）第三回二月まで　一ヘクタール當り　七七ミルCRS

総計　一ヘクタール當り三〇〇ミルCRS

他の植民地にみられない好條件で、なにからなにまで完備していた。

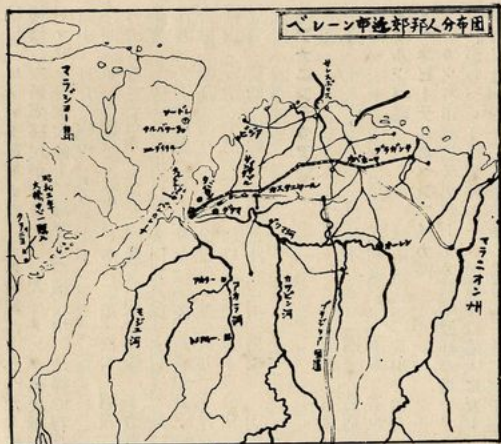
その内に永年作物のピメンタが育つ譯である。日曜日はマナウス市の映画館で、上映される日本映画さえ観にゆける。十年前のマナカプル植民地の移民の苦勞と雲泥の差である。一九五九年六月産業組合も十七家族で創立され、錦戸理平、東龍次、佐藤儀一、山田次郎、宮本竹一等が歴代理事長に就任している。一九五八年十一月第一次入植者は、雨期に入つて山焼が出來ず胡椒栽培は一年おくれ、翌一九五九年六月第二次はピメンタを適當に植えたが、胡椒栽培の指導者がいないので樹木が揃わず一九六〇年九月第三次に入植した家族（石川縣團体入植）が、前人の轍を踏まず、反つて營農成績をあげているのも面白い。欠點は四十ヘクタール全面積土地に起伏多く全部利用出來ないが、ここは第一農場とし、ここで儲けた資金で第二、第三と他に農場を拓いていけばよい。だが全アマゾン邦人植民地中、一番惠まれた植民地で、タイヤーノ植民地の不便などと比較すると、幸福の限りである。

⦿「フオツトランジヤ・ベルテーラ・ゴム園」

一九二八年（昭和三年）米國フオード會社は、五百五十万米弗の巨費を投じ、八百七十万本のゴム樹を、パラー州サンタレン市の奥二十五粁の地點に植えた。これがフオツトランジヤとベルテーラである。然しその成績がよくないので、戦後僅かに八〇〇万コントスで伯國政府に賣却、これを北伯農事研究所で經營した。このゴム園に邦人を雇用勞働者として入園させて、一・二年後に他の植民地に移すという條件で

第六章　アマゾン流域在留邦人々名録

◉**ベレーン市**

北伯アマゾン河口で人口四十万人、一六一六年の創設である
ベレーンのことは、本論で充分解つたと思うので、邦人關係を一寸のぞいてみよう。日本總領事館を始め、移住事業團ベレーン支店、貿易商業關係は、三井物産支店、ジヤブラス商會、島川文太郎商會、山田義雄商會、山田好治商會、高島將元商會森川春一商會、玄場茂商會、難波樂藏商店、河内東一市原津南三共營商會、大木七郎商店、竹村一雄商店等があり、鈴木一郎旅館、日高薫實旅館、渡邊要三旅館、山家自信車修理工場など、最近市内も賑やかくなつた。そして海岸朝市場で、野菜卸商が多くなり、小賣商と合せると四・五十家族位おると思う。

汎アマゾニヤ日本人會も、一九五九年結成され、その記念に廣大な敷地を購入し、日伯會館が建築された。大講堂の他、本館はアマゾニヤ救濟事業部と、子弟の宿舍になつている。救濟事業の方は、在伯三十五年の今田求名醫師と、在伯五十年の戸田善雄醫師が、その衝に當つている。ベレーン市日系二世會も結成され、親睦融和を計つている。南伯サンパウロ州やパラナ州みたように、二・三世が日本語熱がないのは、淋しいが、それでも追い／＼兩親の母國語を勉强したいという二世が、輩出してきたのは嬉しい限りである。そして奧地の高拓生（高拓生と云つても皆五十才上以）の子女は、大方銀行や伯國會社に勤務しながら、ベレーン綜合大学に通つている。法・經濟・商・工・醫・歯・薬学等、殆んど各科に在籍し、軈てこれ等二世陣が、ブラジル社會に出て、目覺しい活躍するのも、遠いことではないだろう。

◉**「コツケーロ植民地」**

サン・ブラス驛から十三キロ、プロビイデンシア驛から左に入り、イコアラシー驛に行くコツケイロ街道にある植民地で、昭和三十年頃に植民地として日本人に野菜をつくつてもらいたいと、いう話があつた。場所はアリリー河の支流クワトールゼ・オーラ川流域で、地區割などしたが、在留者が反對して市會でお流れになつた。處がその内に長谷川貞雄などが、先伐で入

一九五四年二月アマゾン産業開發ＫＫに移管された。だがこれも辻小太郎支配の會社であつて、一九五六年六月になつて、初めて海外協會連合會に移管された。長い間移民事業を一個人に委ねたのが悪るかつた。

六、移民を取扱う海協連と、移民に金融する移住振興と、二本立が悪るかつた。どちらの會社主腦部も、移住總支配權を把握しようとして對立し、これが何も知らない移民の生活にまで影響した。

七、金滿家の松原安太郎は一九五二年から、中・南（ウナ・ドラード）の移民 事業に着手、政府 立替の數千コントス（數千万円）はそのまま、もらへず立消えとなつた。資本のない辻小太郎は、政府の送金が大變遅れたので、移民が依託した携帶開拓資金を、移住行政に一時融資したので、植民の間で開拓資金の欠乏困難をきたし、一時は喧々囂々であつたが、監督官庁がこれを平氣で、どん〳〵移民を送つたのだから移民事業が円滑に行くはずがなかつた。當時辻は移民から攻撃をうけたが、松原のように立替える巨額の金がある譯でなし、行政上止むを得ないことで、責任は監督官庁にあつた。この金錢問題は非常に移民を迷わせた

八、第一次、第二次、第三次、第四次、第五次、と初期移民は、海外引揚者が多く、悪質な者が多かつた。なんでも反抗的で、舊移民の親切も善意に受けず、自我慾に走り、無茶な行動が多かつた。この人達の煽動で、どの植民地もいざこざがたえなかつた。後に來た移民は總べてが從順で、割合移住地はもめず平和にいつた。

九、配耕先の制定が杜撰たつた。移植民院の提供した土地は「日本人だつたら、どんな荒癈の地でも耕作するだろう」という觀念があつたろうし、こちらの方でも、入植すればなんとかなるだろうという慨念的なものがあつた。中にはとてもひどい土地があつた。一例をあげればマサゴン植民地の如く入植者は數年間犠牲を拂つて無一文で移轉した。

十、各植民地の指導的支配人が、純心な高拓生人りで、アマゾン生活は詳しいが、植民地の經營（農法）と、雜多な人間を統制する、複雜な行政管理に欠けていた。終戰後の混亂に飢餓戰線を經た自我慾の多い人達を導くには、余りに單純な性格を有し、その上に農業的にも專門的智識に欠けていた。

以上のような欠陥があつた。然しあれから十年後の今日は、實に戰後のアマゾン邦人は、辛酸苦勞に堪え、物凄く發展した。新來移民のお蔭げで養鶏も始められたし野菜も產出し、特にトマテやレポーリョ（甘藍）の栽培は、ベレーン市を始め、各都民の食卓を潤わした。戰後派移民が移住しなかつたら、こんなに發展はしなかつただろうと、確信してやまない。そしてやはり我田引水ではないが、日本移民は世界一である。

トメアスー植民地句集「樹海」より

去る移民着く移民あり花胡椒　阿部冬月
ニグロの子白いズボンにみな跣足　戸田素人
四男四女アマゾン生れ移民祭　藤橋耕春
單調で哀しきネグロの踊かな　山内移流児
行水す裏戸アマゾン河明り　吉丸丘南
道しるべ日本文字あり飛行雲　渡邊東風

岡治義がいち早くピメンタを植えた、佐藤信市の養鶏も戰前からである。戰後尾山万馬がパレンチンスから移轉、その兩親が最近移轉した。

片岡　和夫｜佐藤　信市｜岡島　政夫｜山本　和雄｜小山　道夫
片岡　利夫｜佐藤　正敏｜井上　勝｜神園　一生｜中田　賢
片岡　成美｜高田　利則｜天田　勝一｜平木　義高

⦿チンボテウア郡

関岡如幼児｜工藤　功一｜田上　稔｜志垣　行徳｜山口今朝太
片山　金一｜浜田　猛夫

⦿オーレン郡

山田義雄が昭和五年開拓した處で、その同志茂木茂は戻つてきて商賣をやつていたが、一九六四年輪禍で慘死した。當地で島川清人が大きく胡椒園を經營している。

河合　治｜島川　清人｜中西　照雄｜石田　某｜高浦　某

⦿カパネーマ市

十年前に訪ねたときは、三浦貞君と同行、ベレーン市を午前六時に出發、たつた百五十粁の鉄道を十時間もかゝつて着いた今は特急バスが通つている。

市原津南三｜稲垣　五三｜河内東一郎｜他　二家族

⦿ブラガンサ驛｜倉坪　敦雄｜菊永　泊｜松元　栄治

⦿サリノポリス町｜筒井茂利

⦿イコアラシー町

移民牧容所のある處で、往年ペルー下りの川本清や、南拓クーロ移民宿泊所長橋口傳次郎も野菜作りをしていた。戰後は高拓一回生の千葉彥祥が入植し、續いて菊地敏光、そしてメルカードで、吉岡榮（高拓一回生同行）關五郎・佐藤宏、中島好介などが商店を開いている。

大石　隆人｜菊地　敏光｜辻小太郎弟｜佐藤　宏｜吉岡　栄
千葉　彥祥｜大覞　次男｜中島　好介｜関　五郎

⦿タバナン區

千葉彥祥の世話で、パレンチンスやベルテーラから出耕してきた人達が入植した。今ではベレーン近郊の一大養鶏地で一万羽飼育の吉田貞介、森光勝太、日浦春雄、佐藤常彌等は異彩である。

渡辺　孝吉｜中島　信雄｜柴田　拡｜塩崎｜村山　義明
鈴木　英一｜松本　登｜安武　吉郎｜日浦　春雄｜沢田　重春
村田タダシ｜中橋　政一｜森光　勝太｜佐藤　常弥｜坂田安太郎
鈴木　美代｜吉田　貞介｜斉藤　充央｜中橋　辰夫｜簑輪　操
酒井　敬介｜西岡　正成｜河本パウロ｜佐藤　兼光

⦿バルカレーナ郡トランピオツカ島

ベレーン市の對岸オンサ島バルガンサ島を抜けて、その次に見える島である。トメアスー植民地の先驅者小川鎌一が、コシジューバ島から一九五二年一千ヘクタールの土地を購入し、親戚一同を引連れて入植したのが始まりである。

小川　博｜吉川弥三次｜政岡　三良｜**カフエザル**｜塩崎　武
高田　清｜吉川　良三｜重友　角助｜谷本　米蔵｜塩崎　弟
渡辺　正一｜小川　鎌一｜野口　清｜島川　耕地

⦿クチジユーバ島

一九四九年十月終戰直後、州知事ザツカリアス將軍の薦めもあり、警察署長モーラ・カルバーリヨの紹介で、小川鎌一・加藤豊・武・義郎三兄弟・高田幸之助・渡部正一・鹽崎盛美・石田勝之助の八家族が入植したが、地權がもらえぬと云つて？この内七家族はバルカレーナ島に移轉した。この島は元重罪犯人を押しこめた島で、戰後少年感化院となつた。その跡へグアマ植民地から日本一の米作王大川義則（香川縣）や山口義行が御法円龍耕地を購入した。高田幸之助はトメアスー産組創立の恩人である。

高田幸之助｜大川　義則｜山口　義行｜野口　義身｜斉藤　某

⦿コルデイシヤ町（マラジヨー島）

牧牛の產地マラジヨー島（アマゾン河口で九州より大きい島）の首都ソーレ市から、サルバテーラ町を經てコルデイシヤ町郊外に、トメアスー組の諸富寅雄、佐藤義信、岸俊藏、大屋

植し、ピメンタを植えた。その成績がよかつたので、奥地から移轉した新來移民が入植し、一大ピメンタ植民地が出來た。汎アマゾン野球大會も、毎年この植民地の球場で行なわれる。

田中良介　浅田芳介　正木正人　渋谷良一　安永進
江頭順一　河口義雄　谷本広茂　松本昭義　五十嵐光也
石田重二　石井泰治　内藤茂三郎　佐藤平治　久徳宣吉
江藤清　長谷川貞雄　菊田喜八郎　永村隆　木村久則
江藤久夫　佐藤和夫　井上茂　長谷川良三　瀬戸茂
吉村穂高　河口保　松村仁一郎　武井平作　伊藤春夫
河内清　小沼武男　河口長助　吉本公望　岩間剛
立岩信助　佐伯勇　近江達治　梅原実　佐久間貞光
武田義春

◉アナニンデウア驛

新海弟　井上一高　辻定　管野五郎　谷末繁美
中島正人　幡馬行　鈴木ジョジ　四釜良造
西岡宗一　土山岩吉　江刺家　木本省也

◉マルツバ驛　徳田徳兵衛　荒川和夫

◉ベネビーデス郡ベンフイカ區

マカッパ市藤島叉男がトマテ栽培發祥の地で、大いに儲け、これからベレーン郊外のトマテ栽培は盛大になり、一時は増元良規、北川福一・正雄兄弟のように一作、何千箱も生産する時代になつた。

ベネビデス　増元良規　有馬勲　大楠米三　森悦志
管原秀志　安武健次　木村照夫　吉川茂作　永田末次郎
吉岡定美　田中正治　田中健次　井口節戸　松本正人
門間真　榊原健吉　中村武夫　前田政市
御法円竜　高橋秀雄　成田周平　松本進
藤本春美　冷水繁吉　**ベンフイカ**　森貞人
下前原三郎　津川正芳　渡辺正男　永田良助

◉ジョン・コエーリヨ（舊名サンタ・イザベール）

モエマ區の、アマゾニヤ信用銀行總裁ガブレール・ヘルメンス連邦下院議員耕地で高島將元が支配人をしていたので、この地が邦人に拓けた。ジョン・コエーリョ驛はトメアスー植民地第一回移民の大橋伊太郎を始め、米澤重男、池谷藤一等とアマ興KKの鈴木信次郎、星井友一等が、戰前入植し、戰後大橋はすぐピメンタを植えて當方で第一人者にのし上つた。戰後派移民は北川勳、北川福一・正雄兄弟、須永金得、長島勳、高倉四三次等が米澤重男の世話で土地を斡旋してもらつたのが嚆矢である。最近ビチア街道（サント・アントニオ郡）が拓け、今後このビチア街道は邦人最高の集團地になるだろう。

モエーマ区　青柳健吾　青木仙太郎　須永金得　緒原トヨノ
谷木　青柳三四郎　藤井正己　和田哲白　斉藤義正
江藤　**聖イザベル**　井内新吉　北川正雄　藤原英彦
酒井　大橋康男　馬場善吾　北川福一　御法吉明
竹中正行　池谷義雄　三宅吉次郎　長島功　浜田主計
浅野茂夫　金井久　三宅次男　中田貞満　長島孝次
武田富義　山内隆　山本敏雄　**ビジア**街道　木村久敏
林常雄　杉本昇　星野豊作　佐藤正夫　堀井英武
西村輝雄　鈴木信也　国分伊次　草刈長四郎　石原市太郎
手島近雄　三宅謙助　北川陽一　磯部庄三郎　渡辺修身
手島正勝　加藤福松　高倉四三次　福田清二　磯部正
篠崎渉　浦本進　矢木力雄　磯部勇　詫摩誠治
福島定強　池谷藤一　撥上豊三郎　渡辺健　金子
田中常吉　安藤博則　岩永達治　小松勇　久徳
椀久秀章　村松朝輝　米沢重男　吉田かつ　北川美次
手島一義　大橋静男　佐川清　今野進　高倉宏安
宮崎克人　中村義一　西川郡治　佐伯正一　赤尾茂
佐藤末男　吉田貞扶　磯野宏　永村国男　藤山克郎

◉カスタニヤール驛

カスタニヤール市戰前の邦人關係は、本論文南拓KK創立の項に詳細に報じてあるから拔く。この市は一八〇〇年頃二〇二粁のブラガンサ鉄道が敷かれて、漸く町が拓らけた。戰後は片

横山四郎　山形
山本繁　北海道
一条忠吉　北海道
宮崎忠信　北海道
細越幸涼　北海道
大江儀一郎　山形
西村市郎　山口
野田忠雄　山口
日高武雄　福岡
渡辺繁　宮崎
早崎登　熊本
堂原明　宮崎
村上研太郎　宮城
半田茂雄　山形
岡本（森川耕地）

⊙トメアスー植民地

詳しい事は本論をみていただいて、すぐ人名簿に移る。

トメアスー港

井上敏雄
長田正平　鳥取
沢田脩　熊本
有坂輝雄　宮城
成瀬義治　大阪
榑木登　鹿児島
檜分登良一　広島
真根井孝行　福島
松崎甚三郎　福島
松崎喜代司　福島
沢田哲　熊本
平賀練吉　東京
村上修　長野
柴田英夫　長野
渡辺健郎　群馬
村上弘　長野
福島清次郎　北海道
神崎某　東京
和田茂二　岐阜
坂口陸　和歌山

ボアビスタ区

加藤万里男　山形
加藤邦蔵　山形
斎藤勇二　秋田
最上次郎　山形
常光憲之　広島
椿日吉　大分
久保利通　広島
横山猛　北海道
横山利得右衛門　同
岡部孝　北海道
北林勲　富山
北林邦夫　富山
義山良一　鹿児島
岡部荘　北海道
岡部勉　北海道
芝原義美　徳島
花輪克　山梨
佐藤清　宮城
半谷正通　千葉
斎藤一　福島
星野修　香川
武田武志　山形
鈴木信次郎　北海道
河野四郎　千葉
南部孝　千葉
川村邦雄　宮城
柳橋武　山形
横倉信由　茨城
日高二三　広島
西尾勝利　北海道
小野義清　青森
小野忠吉　青森
日高寅男　広島
渡辺兵衛　福島
河村能三　山口
加藤三郎　秋田
柴田昭雄　長野
大串駒雄　北海道
日高隆男　広島
斉藤上己　福島
生井竹松　茨城
角光雄　鳥取
黒木喬　宮崎
斉藤隆男　宮崎
河村年興　山口
兼清

イビチンガ区

伊藤勇　東京
武田虎男　山形
武田彦三郎　山形

武田平正　山形
佐藤仁秀　宮城
天野睦丸　宮城
本田義房　宮城
汽仙明　宮城
汽仙和幸　宮城
天野新彌　宮城
横田よし　宮城
佐々木秀男　宮城
阿部公文　宮城
中田吟十郎　愛媛
野沢幸雄　神奈川
木村嘉三郎　宮城
菊地正治　宮城
岸本次男　長崎
辻保　長崎
深水照吉　熊本
深水締男　熊本
深水逸男　熊本
村上某
大橋義久　宮城
渡辺七郎　宮城
矢野敏夫　愛媛
笠松梅吉　宮城
菊地勝男　宮城
日野進　宮崎
関勝治　宮城
関勝四郎　宮城
田中源吉　福島
渡辺一夫　宮城
影山弘　福島
白川三郎　福島
木村金太郎　秋田
村上某

アライア区

近藤秀雄　愛知
細川浩　岐阜
永野敬士　熊本
新井範明　北海道
押切他男　山形
山本弘美　佐賀
太田耕一　青森
押切正三　山形
沢田照夫　熊本
沢田毅　熊本
武藤南海治　栃木
安藤純　福岡
坂本達雄　福岡
川越邦夫　長野
山崎健二　新潟
林熊雄　福岡
日高薫男　広島
田中リウセイ　青森
大沼春雄　山形
猪股耕治　山形
八巻一男　宮城
石川静夫　熊本
松山数実　宮崎
梅村惣逸　宮城
梅村昭　宮城
梅村逸策　宮城
鈴木録郎　新潟
折笠某
三宅義雄　山形
津田常吉　東京
竹下正良　熊本
高野惣次郎　宮城
酒井清　静岡
渡辺庄助　福島
八巻恒男　宮城
久島清　熊本
笹原金三郎　山形
石川道善　熊本
田中角五郎　青森
山内堅太郎　鹿児島
鎌田務　鹿児島
塩屋昭男　鹿児島
大枝弘　宮城
峰下興三郎　栃木
福島某　（留守）
土屋準次　神奈川
土屋泰司　神奈川
大屋睦夫　三重

アグア・ブランカ

片岡治男　長崎
波多野昭　山口
下小園昭仁　鹿児島
宮本某　（留守）
関弘　茨城
関伯一　栃木
木下又一　福岡
小海マサ子　教師
崎山セリナ　教師

昇と大木勢也の五家族が、各々百ヘクタールづゝもらつて、牧場を計画している。一九五九年入植した大木が市長と交渉した譯で、一九六四年には山を伐り三千本の椰子樹を栽培した。このマテジョー島は、ソーレ市の対岸サルバテーラで、一九三五年昭和十年に篠田四郎が、バレンチンから移住。三輪勇、褒輪操など獨身組十余名で、葡萄園を仕立たことがあつた。奇人篠田は故人になつたが、この島に邦人の進出の遅すぎたのをなげきたい。大木勢也、金光某、大屋昇。

⊙グアマ植民地

詳しい事は本論をみていただきたい。一九六三年、サンタ・イザベールからタパジョース區へ、自動車道路が開通されたから、非常に便利になつた。道路が完全に修理されると、陸路二時間で往ける。

タカジョズ 村田 義和 | 笹本 爲治 | 中野 訓 | 宮原 元治
平瀬勝之助 | 米川 敏明 | 吉野 秀美 | 横山 定 | 高木 重男
上岡 傳吉 | 渡部 富雄 | **カラパル**河 | 渡邊 俊雄 | 高木 吉藏
崎山 巖 | 竹下 實 | 忠針千代造 | **ペルナンブツコ**區 | 砥綿ェツ子
石垣 金一 | 妻島 秀雄 | 坂内 芳惠 | 信重 時春
川崎 勇 | 矢野 進 | 山本 義明 | 小田桐三郎 | 伊藤 辰夫
平井平四郎 | 谷山 勝 | 渡部伊兵衛 | 大内 一男 | 堺入 廣之
宮本己代治 | 横山 久 | 三留 吉夫 | 大江 政夫 | 大和田忠信
上岡 一 | 渡邊 德治 | 林 丈一 | 三島 邦夫 | 櫻井 正勝

⊙アバイテツーバ郡—木田周次郎 山形 | 早瀬 義夫 栃木

⊙アカラ植民地

トメアスー植民地が獨立しない前の郡で、面積は實に尨大であつた。數十万ヘクタールをトメアスー郡に分譲しても、まだ〳〵開拓の余地は、何十万ヘクタールでもある。このアカラ植民地に、グアマ植民地から第四次・第五次の入植者が移轉した一九五七年六月ブラジル丸、同年十月ブラジル丸の四次・五次のグアマ入植者は、増水期に於ける浸水のため、陸地の稲が收穫出來ず貧乏した。そして日本から持參の營農資金も残り少なくなつた。將來の見込みのない土地をあきらめ、移轉希望の者のみがよつて、移住期成同盟會を結成（會長横山四郎）し、海協連に團体交渉をした。一時は海協連も交渉を流していたが、生活に窮した移民である以上、このまま棄てておけず、總領事と協議して、移轉適地を物色した。幸いマラニオン州街道でカバネーマ市から六十三粁、三十四平方粁の大森林があつたので、ブラガンサ市長の許しで、伐採を始めた處、原始人がオフソン（先住民居住特許權）を主張して、大擧暴動を起したので、全員引返した。その後に山本繁一行がトメアスー植民地視察歸りに、アカラ港に寄つた處、同港に住んでいた鎌田穰から、アカラ郡は邦人に好意をもつているから、土地を無償で分譲させるだろうと云つた。當時アカラ郡は、郡税の最も上るトメアスーを獨立さしたので、面積は廣いが貧乏郡となり、邦人の入植を熱望していたのであつた。鎌田は前年トメアスーから移轉し、同地に住み、郡長アントニオ・オリベーラと實懇であつた。その頃鎌田は少數の邦人入植者を入れることを郡長から許可をとつていた。この連中が一九六〇年一月から入植、十九粁地點に在住するガルマ地區の六家族がそれであるが、好人物の鎌田は海協連の意に同情し、特に葡語に精通せる野口を通譯に立合せ郡長に交渉し、この結果アカラ入植の許可をとつた。條件は一家族百ヘクタールづゝ、何百家族でも入植許可となつた。辛酸苦勞の三カ年で、すつかり心身共に疲れていた移民は、ここに更生の意氣に燃え、一九六〇年八月から開拓し、今日の繁榮をなした。同植民地は擴大で、宮崎・山本の指導者によつて、北海道人を一千家族入植させる計画をもつているが、最條件であるから好適であろう。現在産業組合も結成されている。

アカラ港 | 信坂 孝行 福岡 | 浜岡きみ子 熊本
鎌田 穰 鹿児島 | 信政 勇三 福岡 | 浦山 久夫 北海道
ガルマ區 | 三留 辰己 福島 | 岡田 嘉雄 山形
谷口 明水 鹿児島 | 江越 亀寿 長崎 | **イタピクル**區
谷口 俊光 鹿児島 | 柴田 政義 福岡 | 今野 大八 山形

柴原　富雄　徳島
平田　照行　熊本

ブレウ四区

岩間　敬造　東京
横山　健一　新潟
斉木千代吉　新潟
小長野親徳　鹿児島
乙幡　正三　東京
下前原光次　宮崎
林　利雄　熊本
鈴木　豊城　秋田
武田　章三　島根
杉　林造　岡山
坂上　勉　宮崎
西岡　繁光　愛媛
宮川　茂七　熊本
宮川　正三　熊本
宮川　正雄　熊本
佐伯　光安　熊本
宮川　正信　熊本
広瀬　勝則　熊本
宮川今朝次　熊本
宮川　孝　熊本
宮川毛佐行　熊本
広瀬　勝利　熊本
高木　哲夫　熊本
高木　整　熊本
高木　克行　熊本
田中　次夫　熊本
吉田　四郎　熊本
小野　太平　宮城
和田上　續　鹿児島
中川　春蔵　岩手
前田　宗一　大阪
小川金四郎　愛媛
久保　信男　宮崎
中川　伸一　岩手
山田　浅吉　愛知
遠藤英次郎　山形
日野　文夫　宮崎
伊藤　武　山口
斉藤　啓一　山口
葛尾　寅二　和歌山
善　清次　福岡
滝田　余慶　福島
小山啓一郎　長野
滝沢　秀雄　長野
青木　竹次　福岡
及川　昭　宮城
橋本　勇　福岡
黒木　重克　宮崎
一色　寿　長崎
北林　秀臣
森川　某

カンニデ区

黒沢　勝馬　北海道
工藤　市蔵　大分
長井　一益　熊本
長井　清　熊本
高野　賢寿　栃木
保科　義雄　鹿児島
稲田　清治　山形
茂木安太郎　群馬
海谷　長蔵　山形
工藤　万蔵　大分
以下不在地主や留守が多く調査不能

◉「**マオカ農場**」

眞岡農場は栃木縣眞岡農業学校のブラジル理想農園として、一九六〇年藤澤廣吉教師の提案に始まり、一九六〇年八月ブラジル丸で團長長島治（歸國）早瀬義夫（獨立）水沼滋夫（獨立）大根田恒晴（獨立）野澤太（獨立）高野賢壽（獨立）の獨身学生六人が渡伯、ブレウ四區に伯人既成耕地（胡椒二百本）を二百コントで購入した。軈て六人は各々獨立して退耕、第二回は一九六一年七月ブラジル丸で稲川眞澄、黒崎勝夫、佐々木敬雄の三人が渡伯、一緒に渡伯した團長夫人長島いく子が主人と歸國の後は、二回生の三人が自炊生活の辛酸に堪え五千本植え勤倹力行した。しかも一九六三十月發案者藤澤広吉教師も渡伯して視察歸國したが、現在そのままで後續部隊もこない、日本全國一の移住農高はどうしているか、その將來を待つ者、あに著者のみではないだろう。移住は机上の空論では駄目だ。

稲川　眞澄―黒崎　勝夫―佐々木敬雄―

◉**第二トメアスー**植民地

第二トメアスー植民地建設は、その創設がおくれ、到頭アマゾン移民最盛期の好機を失し、「笛吹けど踊らず」の感で、三万八百ヘクタールの大森林は太古そのまま眠っている。ベレーン總領事館（當時福岡章總領事）と、トメアスー産業組合の反目から、總領事館を支持する海協連ベレーン支部と、トメアスー側を支持する移住振興ベレーン支店が、眞正面から対立し、そのため植民地の創設がおくれ、ブラジル移民の衰徴になってからでは、植民地を拓いてももう遅い。この三万八百ヘクタールの地権を採るまでは發案者の澤田毅、永野敬士以下十八名の熱意はもとより、産婆役の大沼春雄、州政府と交渉役の澤田哲が寢食のひまもない位に東奔西走した功績は甚大で、トメアスー植民地の發展を熱愛したからである。この努力を理解せずして植民地造成が遅れたのは、誠に遺憾であった。全入植者完成は八八〇家族の豫定だが、滿植するのは（日本人六〇〇家族、伯人二八〇家族）日ぐれて尚道遠しである。

一九五七・八年頃から澤田毅・永野敬士・大沼春雄・佐藤忠雄等によって、隣接地の擴張案が噂にのぼり、一九五九年四月十七日委員長佐藤忠雄・副委員長大沼春雄のメンバーで「トメアスー第二植民地建設準備委員會」が結成せられた。一九五九年十月高木広一移住局長訪植して事業を促進、一九六〇年十月漸く最後的決定をみた。一九六〇年元南拓社員關弘・浅野純麗・鶴崎健三以下十八人で準備に着手、一九六二年二月山中正二測量開始、同年四月所長仁科雅夫と職員大石圭二着任、同年十

立岩ウーナ　教師
河内オデッサ　教師
東エバーナ　教師
宮下源蔵　栃木
山田義一　広島
山田元　広島
山田亢　広島
高尾平八郎　熊本
諸石輝雄　佐賀
菊地文雄　千葉
古本修二　佐賀
野原丈児　広島
仲丸忠男　伯生
鶴田藤助　熊本
右山克彦　熊本
浜口正雄　兵庫
山田充　広島
菊地善一　福島
石川正行　熊本
黒畑幸助　北海道
徳橋太郎　北海道
永野吉春　熊本
藤橋銅三　北海道
永野一水　熊本
佐藤義雄　熊本
鎌田譲二　鹿児島
沢田隆男　熊本
木村陽一郎　秋田
設楽市太郎　山形
小川平　愛媛
木村正三郎　秋田

伊藤豊彦
斉藤正　茨城
吉丸郁三　長崎
茂古沼専一　北海道
茂古沼邦一　北海道
小林浩三　宮城
細川実　岐阜
岡田義雄　群馬
矢内鉄　青森
細川伍一　岐阜
小林礼三郎　新潟
熊谷透　宮城
清野昌治　宮城

マルキタ区

野原啓太郎　広島
江原家俊　北海道
畑原竜一　北海道
牧野某　（留守）
平川常一　佐賀
野口義賢　熊本
斉藤政雄　福島
管野弥七　福島
柴田雄一郎　長野
渡辺六右衛門　福島
小原孫吉　宮城
佐藤憲吉　宮城
吉岡とよ子　（留守）
浜口照雄　兵庫
浜口敏雄　兵庫
湊利雄　広島
斉藤常吉　宮城

遠藤滝三　福島
菊地健作　宮城
笹本光雄　熊本
草野久治　福島
渡辺アキヨ　宮城
石川辰明　熊本
金義夫　秋田
斉藤春夫　福島
松本伝　福島
松井励　熊本
川辺弥男　三重
清水金右衛門　三重
清水隆　三重
橋口拓治　鹿児島

ブレウ一区

田辺毅　愛知
榎進　広島
永野安幸　熊本
北林淳一　富山
設楽政男　秋田
大口六郎　群馬
飯川嘉之　熊本
飯川政雄　熊本
堤春雄　群馬
河上義美　熊本
沼沢谷蔵　山形
遠藤四郎　秋田
山田元信　熊本
宮崎盛幸　熊本
野上又一　香川
仁平次郎　栃木

後藤賢司　宮城
佐藤正一郎　秋田
戸沢修治　秋田
小林幸雄　新潟
村上清晴　熊本
野田菊蔵　福岡
阿部久喜　熊本
一色徹　長崎
岡田義明　熊本
松永悦郎　熊本
松永年四男　熊本
田中次男　熊本
エイ川竜天　熊本
エイ川保弘　熊本
エイ川幸助　熊本
徳丸徳　熊本
橋本利之　福岡
平田金吾　福岡
橋本常利　福岡
蒲島久夫　熊本

ブレウ二区

大橋啓助　静岡
池田享　福岡
下小園長人　鹿児島
竹下純則　鹿児島
諸富八治　福岡
高木年次　熊本
諸富寅雄　福岡
月俣新一郎　福岡
酒井一勇　熊本
徳田数恵　島根

江口勲　伯生
三品嘉市　宮城
矢野武雄　熊本
本田博　山形
千葉文子　宮城
阿部雪雄　山形
野林キサエ　福岡
阿部昇　山形
阿部浩　山形
稲田繁　山形
松永時恵　熊本
関彰　栃木
青木松雄　福岡
池田孝志朗　福岡
水沼滋夫　栃木
神保睦江　新潟
石塚明　新潟
木下茂　福岡
鶴田倭男　鹿児島
上杉某
岸俊蔵　愛媛
武藤寅蔵　福島
岩下譲次　栃木
森塚安臣　熊本
木下昭夫　福岡
山野至孝　栃木
坂上秀雄　熊本

ブレウ三区

野田新太郎　愛知
植園徹　鹿児島
佐々木勇幸　秋田

大根田恒晴　栃木
松尾等　台湾生
中畑市郎　青森
永井則勝　北海道
准井文吉　富山
山本峰雄　愛媛
富岡新義　熊本
小林栄助　山口
下前原晃成　宮崎
山田栄一　山梨
土屋修治　山梨
杉田武雄　青森
岸勝美　山形
岸正美　山形
岸好美　山形
岸徹　山形
細川修　岐阜
野沢太　栃木
高橋道夫　富山
野口邦光　福岡
千葉久夫　宮城
佐藤清美　福島
佐藤勝彦　福島
千葉宗雄　宮城
木下秀三郎
佐藤義信　福島
大村公夫　山梨
中井留守　不明
山田忠昭　熊本
藤橋勲　北海道
河野力雄　宮崎

佐脇　忠　東京
岩坂　保　福岡
大西　虎雄　徳島
中村　健次　新移住
末永　満昭　新移住
大沢　新郎　新移住
坂口　成夫　熊本
岡田　隆典　宮崎
坂口　節夫　熊本
猪股　正　宮城
猪股　国夫　宮城
安達　晋　山形
吉村　某　新移住
丸岡　勇三

ウルシミナ市

原田　公三　岐阜
上条　浪太郎　東京
小林　増美　福岡

オビドス市

佐々木　一哲　広島
長尾　誠四郎　アマ興

ジュルチ市

戸口　恒治　埼玉
丸岡　京　宮崎
丸岡　東　宮崎
坂本　孝　高知
山本　昌夫　福島
徳橋　みつ子　北海道

パレンチンス市

木村　一則　熊本
中内　義正　北海道
川上　顕二　東京
尾山　多門　岡山
吉井　吉松　北海道
岡村　徹　山形
原　荘太呂　山形
河本　正六　高知
中井　憲明　香川
岡田　秀臣　山口
金子　亥三生　千葉
武富　義仲　神奈川
八田　八重　福岡
早田　正一　佐賀
高谷　弘光　北海道

ウワイクラツパ

徳田　源弥　山口
森　進一郎　福岡
森　源吾　福岡
古賀　邦次　佐賀

バレリンニヤ

小野　三郎　福岡
半田　二郎　愛媛
東海道　善之助　宮城
馬場　康二　和歌山
木村　宗一　愛媛

マウエス市

山根　武一　アマ興
大石　小作　アマ興
崎山　忍　東京
栗山　弥一　静岡
永井　としえ　アマ興
根尾　哲郎　富山
大野　一悦　宮城
種子田　秀雄　鹿児島

ウルカラ町

国宗　惇慎
御園　良子　千葉
青木　正司　新潟
中の目　正明　千葉
岡本　某　新移住

ウリクリツーバ

泉　桂治
内藤　菊次郎　新潟
小野　八郎　福岡
内海　要造　神奈川
南　政　熊本
山口　敏子　福井
高橋　亥年生　千葉
佐藤　正文　広島
相川　卓爾　静岡
権田　遺族・　新潟
小出　一郎　宮城
川村　茂吉　青森
羽田　京平　新潟
岩田　某　新移住
中村　庄司　奈良
橋　某

イタピランガ

千葉　守
田辺　博　東京
武富　大　アマ興
薬師寺　光雄　愛知
石丸　某　新移住
辻田　某　新移住

イタコチアラ

中島　敏三　神奈川
杉山　義見　青森
宮地　茂　愛知
畑原　稷　長崎
土師　郁郎　東京
加藤　清勝　宮城
平石　定吉　新潟
大川　博　東京
伊藤　松之助　海外植
山根　良忠　鳥取
尾崎　貞吉　アマ興
立川　尚一　大分
滝田　吉一　アマ興
岡　忠志　香川
大和田　某　新移住

マナウス市

高村　正寿　熊本
東　久一　広島
佐佐　行夫　広島
芹沢　正芳　静岡
安井　某　東京
古川　正清　長野
本田　光衛　熊本
岩田　清　島根
三輪　勇　兵庫
諏訪　数馬　兵庫
広重　公平　山口
長井　次郎松　新潟
高橋　数馬　遺族
白柳　敏男　静岡
荻野　源太郎　埼玉
内藤　きよ子　新潟
前田　勲　長崎
前田　孝治　長野
伊原　只郎　長野
井上　正吾　熊本
羽田　重吉　新潟
西本　広司　広島
櫟村　カネヨ　東京
松田　和夫　愛知
野口　己之吉　福岡
近藤　きみ　栃木
本田　一男　熊本
矢野　豊吉　福岡
平野　次郎蔵　東京
高木　正敏　熊本
神零　久彦　香川
渋谷　捷男　新潟
武田　興洋　鹿児島
中山　某　鹿児島
幸橋　常男　兵庫
具島　政雄　鹿児島

ソリモンエス河

生田　務　熊本
寺野　義勝　熊本
畑原　健夫　長崎
藤井　某　長崎
石原　弘義　熊本
吉田　一憲　熊本
豊田　俊治　熊本
橋本　勇　長崎
豊田　政治　熊本
平松　章　愛媛
赤松　某　新移住
木納　正人　熊本
田中　喜代治　北海道
飯野　太吉　鹿児島
小野　七郎　新潟
満田　六郎　福島
鈴木　五郎　栃木

カナカプル市

カカオペレラ区

高谷　善一　兵庫
金子　力太　福岡
三浦　勇一　青森
友田　時雄　熊本
岡　留久　香川
橋口　智　熊本

アグア・フリーア

木幡　栄　宮城
木幡　正　宮城
木原　勝工　福島
矢部　豊吉　京都

アリアウ区

藤田　猛　富山
木幡　巌　宮城
渡辺　進　岐阜
武部　辰治　秋田
渡辺　正男　福島
大沢　武丸　岐阜
平田　真市　長崎

一月入植を待機していた二十五家族入植した。そして今日満二カ年經過した。産業組合も結成され・入植者は皆一騎當千の强者で、營農成績はいい。後續部隊六家族を入れて全部で、三十一家族である。尙東京の「**サンダース・ホーム**」澤田喜美女史の開拓地も設立され、一九六三年一月六人の指導先發隊が渡伯し、一カ年間トメアス植民地各耕地で、植民生活と胡椒栽培を体驗し、その上で開拓地二百ヘクタールに入植した。混血兒の入植は農場がほぼ完成されてから入植した方がいいと、先輩の意見に從つている。

阿部隆次郎　秋田
大島宏生　秋田
中田英昭　青森
佐々木寅五郎　青森
高橋新作　山形
武藤徳　福島
太田幸一　青森
舟木良治　秋田
長浜栄三　青森
永田恭平　青森
仁和権次郎　青森
坂本藤吉　青森
大島弥太郎　秋田
山本宏己　大分
高谷善吉　青森
谷地村清志　青森
大貫光三　山形
笹原富雄　山形
伊藤広　青森
原口十一　熊本
鎌田喜久三　青森
矢内鉄衛　青森
矢島繁　栃木
岩下譲二　栃木
室井洋　栃木
中見川博司　栃木
富田昭一　栃木
菊地稔　栃木
尾崎誠誉　青森
鳴瀬久右エ門　同

（以下**エリザベス農場**）
松浦功
鈴木次郎
黒田真琴
南部尚
竹田雄二
鎌田勝行
（以下職員）
松井賢一
上森方園
山中正二
堂綱五男
本田勝久
浅野純麗
鶴崎健三
長浜雅博
堂綱愛代
木村シリア
野村エレナ

アマツパ直轄州**マカツパ**市
藤島正徳　熊本
藤島又男　熊本
真田正美　熊本
吉留義幸　鹿児島
高桑俊徳　鹿児島
紺野文雄　宮城
高橋武　宮城
柴山安喜　京都
鈴木繁太郎　北海道
栗林三郎　秋田
尾糖優之助　島根
林田広一　広島
山本栄二　静岡
岩永慶治　長崎
中西達男　三重
阿部豊久　医師

フアゼンジンニヨ
吉留幸夫　鹿児島
吉留留夫　鹿児島
長岡繁夫　福岡

サンターナ
立野良夫　鹿児島
坂口袈裟一　鹿児島
安達ちよ　静岡

カンポ・ベルデ
西孝義　鹿児島
川上亘　熊本
井上梅雄　福岡
前原公道　鹿児島
北野進　鹿児島

マタビー植民地
窪田伍平　岐阜
尾形孫三　福島
柴山八百蔵　京都
本田励爾　宮城
日黒宗一　宮城
日黒健二　宮城
斉藤安記　福島

テレジンニヤ
山口梅子　看護婦
中内イザベル　同
山口セリーナ　同
佐藤小夜子　同
山内蓉亥師　香川

クビシー駅
福岡末七　熊本

⊙**モンテ・アレグレ**植地旭

アサイ・ザール区
山田伊知郎　愛媛
平下青五郎　北海道
村上幸太郎　熊本
石黒条吉　富山
新井佐寿計　群馬
高谷古賀野　長崎
清水与市　宮城
小林保　群馬
西栄健次郎　石川

アセツナ区
波村福雄　熊本
恒松芳雄　宮城
藤山和正　山口

ドイス・ガーリヨ
石津増恵　山口
山口政太　長崎
大久保春一　高知
山岡市郎　秋田
榎本春太郎　長崎
篠田進　山口
吉本助三　熊本
斉藤博　熊本
中島高　大分
半田長三郎　山形
松井明　福岡
徳永勉　広島
吉野定雄　宮城
大久保亀寿　高知
大久保安政　高知
大久保光秀　高知

（其の他）
大竹末男　東京
上野浩爾　和歌山
前田安隆　佐賀
平下輝男　北海道
青木洋次　福岡
中野幸吉　熊本

⊙**サンタレン**市
辻小平　滋賀
飯田義平　埼玉
生田勇　山形
宇野円治　京都
千葉滝敬　宮城
岡田金蔵　宮崎
岡田照典　宮崎
岡田慶典　福岡
矢野勝男　福岡
矢野初男　福岡
及川陸郎　宮城
石津榮一　山口
瀬古公平　滋賀
矢野義弘　福岡
松原秀夫　福岡
矢野明彦　福岡

アルタミーナ市
北川勲　山口
徳田八十八　鹿児島

タパジョス
猪股喜次郎　宮城
猪股実　宮城

アレンケール市
池上欣二　熊本

大アマゾン産業開發に 健斗する人々

印象と略歴

産業開發に貢献した邦人は、その物質的な成功は勿論ほめたいが、それよりも不撓不屈不退轉の努力を讃えたい。成功するには、第一健康、第二に努力、第三に天災をまぬがれること、第四に地の利を得ること、第五に金融後援者を掴むことなど凡ゆる條件がいる。この條件の三つ・四つを欠いている邦人移民は、万難を排して成功の彼岸に邁進した。今日追懷すれば、總べてが肉体的にも精神的にも犠牲の二字に盡きたようだ。その尊い精神力を賞讃し、後輩拓人の龜鑑として、その人々の印象と略歴を執筆してみた。全文敬稱を略す。

橋本　博　長崎
永田　満夫　長崎
梶山　武士　長崎
宮崎　数馬　長崎
川島　唯雄　熊本
清水　忠彦　鹿児島
白井　平勝　長崎
江崎　繁一　長崎
金子　虎男　佐賀
西　義光　鹿児島
蒔本　国男　鹿児島
伊知地　定夫　鹿児島
高橋　勇作　福岡

カルデロン区

辻　信義　熊本
辻　正義　熊本
辻　福重　熊本
矢野　健一　熊本
吉田　喜一　熊本
大谷　八枝　富山
大谷　良三　富山
中谷　清作　石川
西本　繁夫　広島
渡辺　理喜　福島
出口　国義　熊本
野地　作治　福島
小茄川　力雄　宮城
竹野　某

ベラ・ビスタ区

藤本　操　岡山
門　正一　岡山

エフジニオ・サーレス植民地

（第一、二回入植者）

野沢　幸助　鹿児島
東　竜次　石川
江藤　きそ子　大分
山田　次郎　青森
大場　芳金　福岡
貞弘　貞男　石川
木場　繁志　鹿児島
立山　勉　福岡
武田　達親　鹿児島
宮崎　繁年　福岡
江藤　某　福岡
宮本　竹一　石川
直次　正一　福岡
伊藤　勝男　宮城
斉藤　勝男　宮城
佐藤　義一　青森
錦戸　理平　石川

（第三回入植者）

宮崎　みどり　福岡
大場　京太郎　福岡
渋谷　金男　新潟
長谷川　昭　新潟
長谷川　恬悟　新潟
安田　実　神奈川
橋本　実　福井
矢野　信幸　熊本
村本　由恵　石川
室谷　真二　石川
石場　武男　福岡
桃井　喚一　石川
青原　勇　石川
中山　弘　石川
岡本　春雄　石川
長谷川　進　新潟
高野　達弥　北海道
新谷　久吉　石川
森辻　政一　石川
渡辺　茂夫　新潟
笹川惣　次郎　新潟
浅井　外次　石川
酒井　清治　新潟

（第四回入植者）

岩本　広治　長崎
山口　秀次　石川
大久保　悟　石川
亀崎　満義　石川
亀崎　房男　石川
亀崎　義人　石川
二方　勝美　石川
藤井　勝也　石川
富永久　朝一　石川
羽座岡　繁市　石川
飯盛　明　石川
山中　一雄　石川
鎌田　功　青森
坂本英　太郎　青森
柿本　彰司　青森
開山　政男　宮城
村山　惟丸　熊本
西脇　竜男　岐阜
山形　稔　青森
石坂　力　山形
飯盛　義男　長崎

ロンドニヤ直轄州

トレセ・デ・セツテンブロ植民地

笹原　俊雄　山形
長岡　正雄　山形
黒田　重人　熊本
黒田　倉造　熊本
黒田長　一郎　福岡
田辺　信造　鹿児島
丸　五郎　千葉
門脇　勝治　山形
岡部　鶴吉　熊本
須藤　巌　福島
須藤　実　福島
松野　浩生　大分
栗山　信二　東京
小田島　広治　北海道
服部重　五郎　東京
松崎　恵一　熊本
山口　宣行　熊本
小関　睦太　山形
川田　敏之　長崎

⦿**アクレ**州**リオ・ブランコ**市

川田　節男　医師
坪野　由仁　沖縄
守屋　謙　岡山
生野　功　滋賀

キナリー植民地

菊地　信一郎　青森

⦿**ロライマ**州**ボア・ビスタ**市

那賀　勇　大分
佃　善三郎　大阪
江田藤之助

タイヤーノ区

江田　広治
中野　一馬
三木　和夫　兵庫
高尾　嘉兵衛　長崎
川田　信一　長崎
西田慶　太郎　京都
府内　清太郎　熊本
向山　英鷹　熊本
西本　某　長崎
原　淳二　徳島
浜口　寛　熊本
西沢　正司　長崎
立石　正司　長崎

ウマイタ市

櫟村　某　伯生
片桐　儀一　長崎
秀島　行夫　長崎
高城　染吉　長崎
松下　博　長崎
田代　春雄　長崎
土井健　三郎　長崎
中村　太一　長崎
木村　芳則　長崎

トメアスー植民地句集「海樹」より

移民史に残る日々あり浅茶漬　　阿部冬月
アマゾンにゆだねし余生いわし雲　　江畑かおる
夕立に濡れてニグラの大乳房　　加藤三浪
ゴムの木の切口乾く秋ひでり　　河内我童
吾が合羽ニグロに珍奇若葉雨　　田邊龍川

KOTARO TSUJI
R. 28 de Setembro, 106
Belem, — Pará

パラー州ベレーン市
辻 小太郎 氏

原籍　滋賀縣彦根市廿呂町
渡伯　昭和三年七月　備後丸

初めて實つたジュートと辻氏（右上）

北伯アマゾンに於ける事業家として第一人者である雄辯家で日伯兩語に精通、その上英語も流暢、創造力偉大で万年青年の如く衰えを知らず、意氣軒昂で過去四十年間國際的事業を行なつてきた。一九五八年日本移民五十年祭に、日本政府から藍綬褒章を授與された。

一九二七年二十四才で神戸高商（現商大）卒業、八幡商業神戸高商在学中から南米移住を研究、この頃ジュートの知識を小泉製麻會社長小泉庄助から傳授される。同年神戸日伯協會に入り、雜誌「ブラジル」の編集、一九二八年神戸高商講師となり、一九二九年外務省よりブラジル派遣、一九三〇年歸國、名著「ブラジルの同胞を訪ねて」を發行、神戸拓殖高等学校創立準備中に、上塚司（神戸高商先輩）の招聘で日本高等拓殖学校教授兼主事となり、一九三三年粟津金六退所のあと、アマゾニア産業研究所支配人となり、轆てアマゾニヤ産業株式會社ブラジル總支配人、同年訪日及びインドの黄麻研究視察、三年後に大戰勃發してサンタレン市郊外イツキ島で靜觀していた。

彼の一生の内で回天の事業と云うべきは、戰後日本移民再開の道を開けたことである。かつて知遇を得たゼツリオ大統領に一九五一年面談し、アマゾン移民五千家族誘入の許可を得た。ゼツリオの親友松原安太郎より先鞭をつけた點、如何に才氣撥剌かが窺われよう。一九五四年アマゾニヤ經濟開發會社を創立し、社長となり、約一千家族以上の日本移民を誘致した。日本側移民送出しも素人ブラジル側の受入態勢も未熟、仲にはいつて彼も立場は困難、例の心臓で杜撰を拂いのけた。ゼツリオ大統領とサンタレーン製麻會社の設立を膝詰談判、相手が獨裁政治家であつたから、全アマゾニヤ財界人も驚ろいた。一九五四年訪日した時にアマゾン移民十万論を説き、外務省農林省の官吏を驚愕させ、小笠原大藏大臣や吉田總理にも面會し、日本の資本投下を主張した。當時著者も訪日中で彼の活躍ぶりに驚ろいた。移住振興KKが北米資金千五百万ドルで成立し、後に吉田・岸は友人元東拓社長大志摩を社長に就かしめた。アマツパー州やトツカンチンスのカスタニヤ買占めをやり、タパジョス河シングー河の日系移民開發を叫び、自から卒先して事業に手を染めた。金融の逼迫にも泰然自若、尙資金回轉の妙を得ている短軀精悍神出鬼沒で、事業計画の尨大なること宇宙原子力線みたようで、一般人から「誇大妄想」と誤解されがちである。滋賀縣出身の大事業家故堤康次郎みたようで、一寸も退かず、前進ばかりしている人物だ、十五万本の胡椒栽培會社、いまや北伯にない肥料製造、農産加工製油工場、パルプ工場なども、即ちアマゾンにない工業資本の誘致を画策中である。明治三十六年十月三日卯年生。

TSUJI & CIA.

MATRIZ:
Rua João Pessôa, 260
C. Postal, 22
End. Telegr.: "ESPERANÇA"
Santarem — Pará

FILIAL:
Rua 28 de Setembro, 106
C. Postal, 573
End. Telegr.: "ESPERANÇA"
Belem — Pará

—oOo—

資本金積立金共二〇〇、〇〇〇、〇〇〇クルゼイロス（資産再評價済）

有限會社 辻合名會社

社長　辻　小太郎
副社長　辻　小　平

本店＝サンタレーン市
ジョン・ペソア街二六〇番
飯田義平　瀬古與平　従業員一同
地方物産取引、ボアエスペランサ百貨店
ジュート梱包工場、ラテックス工場經營
ノルデステ保險會社、ペトロブラス其の
他各種商社代理店

支店＝ベレーン市九月廿八日街一〇六番
江村良造　辻　君代　従業員一同
地方物産取引、ラテックス工場經營
パンメリカン航空會社、東京海上火災保
險會社、CATA製麻會社代理店

支店＝ツクルイー市
ゼツリオ・ヴアルガス街
地方物産取引、雑貨店經營
カスタニア園經營（ツクルイー及イピランガ郡）

資本金
一二、〇〇〇、〇〇〇クルゼイロス
ボア・エスペランサ薬局經營

有限責任 辻　商　會

サンタレーン市八月十五日街

有限責任 辻農牧商會

タパンナ、コケイロ胡椒園一万八千本

伯國胡椒栽培株式會社

資本金　三〇、〇〇〇、〇〇〇CRS
純資産　一二〇、〇〇〇、〇〇〇CRS
ピメンタ樹　一五〇、〇〇〇本栽培
ピメンタ生産　一九六四年度　一〇〇トン
一九六五年度　二〇〇トン（豫想）

本店　ベレーン市九月廿八日街一〇六番
農場　パラー州ノーバ・チンボテウア郡
土地面積　一、五〇〇町歩

役員

取締役社長　アントニオ・アズマール
專務取締役　辻　小太郎
會計取締役　ベリザリオ・オリベイラ

TOSHIO OHASHI
Av. Ceará, 678
Belem — E. de Pará

ベレーン市ピメンタ園經營

大橋敏男氏

原籍　靜岡縣濱名郡沖瀬村
渡伯　昭和四年九月　もんてびでお丸

左は父伊太郎氏、右は敏男氏

一九五五六年頃は、所有ピメンタ成樹四万本、收穫量年産五十トン、當時十トンを收積した者が豪壯だつた頃で、北伯第一の胡椒成金であつた。一九五五年度が收入四千コントス、一コントスが一万円時代だから彼の年收は四千万円であつた。今日の三十万コントスである。その胡椒樹が根腐病で枯死したのが不運で、自然に枯れるのと違つて、急激に枯れて翌年から實らなくなつたのだから、彼も逆境にたつた。幸いあれから再建し、一九六〇年クルサー街道に一万六千本（八〇ヘクタール）トアー街道七千本・ヌカンボ街道に八千本と増植し、漸く往年の盛時を取戻しつつあるが、全く天災と云うものは恐ろしいものである。黄金時代にはゴム園も經營、長谷川貞雄等とベレーン産業組合を結成し、ピメンタの販賣事業にまで手を伸ばしていた。著者も當時を追懷すると感慨に堪えない。

大橋康男氏

彼の渡伯は昭和四年で、トメアスー植民地第一回入植先驅者である。三カ年間米作を試みマラリヤ病の不健康地で退散、ジョン・コエーリヨ市附近に一粁平方の土地を購入し、七カ年蔬菜栽培に挺身した。その間彼は五カ年聖州マリリア方面で農業に從事、南伯農業の賭奕なのにいや氣がさし、再度北伯に歸り、ムカンボ地區に百五十ヘクタールの土地を購入した不幸大平洋戰爭勃發、彼は兩親・弟康男と共にトメアスー植民地に軟禁された。四カ年の後に終戰となり、再び耕地に戻つた幸い耕地は弟啓助達以下の少年群が、堅實に護つていたのでよかつた。ピメンタを早くから栽培していたので、一九五〇年頃からの好景氣にのり、一擧にして巨財を懷にした。

若冠十二才で渡伯したが、なか〳〵日本的学問もあり、社交にたけ、邦人間の信用は絶大である。父伊太郎は四十七才で渡伯したが、現在八十二才の高齢で未だカクシャクたるものだ。若き拓人彼も既に四十八才になつて、父の渡伯の年輩を越えたタリ夫人（トメアスー植民地故關久三郎令嬢）との間に敏彦、英二、三四郎、清　敏子、房子、案男等の子寶に惠まれ、弟康男もトメ夫人（トメアスー遠藤瀧三令嬢）との間に、安廣、貞子、政治、政子、重雄、やす子、惠美子、繁子、早苗の三男五女、弟啓助は藤香夫人（トメアスー池田忠藏三女）との間に正男、直忠、弟靜夫は三男一女、弟德壽は千代子夫人との間に一人、妹はな（池谷藤一夫人）末妹房子（山田準一郎夫人）等一族は數十人に増えた。今後の活躍を祈る。大正六年六月二日巳年生。

ベレーン市辻合資會社専務取締役

江村良造氏

RYOZO EMURA
R. 25 de Setembro, 1839
Belem — E. de Pará

原籍　山口縣（戸籍）福岡縣北九州市小倉舟町
渡伯　昭和六年九月　さんとす丸

生地の長州人に似合わない温厚篤實な實業家で先輩は彼を信用して引立て、後輩は彼の德を慕つて尊敬するのも當然と云えよう。幼名江本朋一、長じて江村家に入籍良造と改名した。山口縣立德山中學校（舊制）卒業後神戸高商（現在大學）に學び大正十一年卒業（第十六回生）東洋紡績と合併した大阪合同紡績KKに入社、原綿係として勤務した。後年渡伯して東洋綿花KKで活躍したのは、既にこの時素地が出來ていたのである。

軈て家庭の事情で退社、故里小倉市で合名會社江村商店の仕事に精勤していたが、中学時代から芽ばえた海外雄飛の志止み難く、その機會をねらつていた處、神戸高商の先輩である上塚司や粟津金六等が、神秘境アマゾンに百万ヘクタールの移住地を建設することをきき、好機至れりと一九三一年九月さんとす丸でリオ港に着しリオ港からぶえのす丸に乗り替え、ベレーンに到着、具さにトメアスー植民地やベレーン近郊を視察、一カ月の後パレンチンスに着いた。當時ビラ・アマゾナス産業研究所は開拓當初で事業らしいものもなかつたので、滯在一カ年後、聖州護憲革命後サンパウロ州へと南下、宮坂國人の紹介でブラジル拓殖組合に入社、バストス移住地に赴任した。彼はバストス開拓當初の先輩で軈て永住と決心、歌子夫人を呼寄せた。バストス時代の功績は脇山甚作理事長（戰後特攻隊に暗殺・元陸軍大佐）が采配を揮つていたバストス産業組合の事務整理に當り誠意をもつて奉公した事で、當時の舊友間でも今もつて語草りになつている。

一九三七年二月、在伯邦人の棉花栽培熱が全盛を誇つたのでそれに刺激されて東洋棉花KKが進出、南米棉花會社を聖市に創立した際に、島總支配人に招聘された。この時代が彼の最も華やかな時代であつた。恰度著者の新聞記者時代で、東綿と云えば豪商マタラーゾなども怖れていた位で、物凄く儲け、そして社員の金使いも荒かつた。田川社長時代を最後に太平洋戰爭に入り重役陣は歸國、彼は一九四二年から、戰後一九五三年まで會社代表重役として全責任を負つた。一九五〇年南米棉花KK篠原重役が渡伯した際に、別働隊として南米貿易KKを創立專務取締役として業務を擔當、戰後の日伯貿易に貢獻し、青春時代を二十二年間棉と心中したようなものであつた。一九五四年神戸高商時代の先輩辻小太郎がアマゾニヤ經濟開發KKを創立し、戰後初めての日本移民誘致に成功したので、招聘されるままに會社の取締役に納まつた。一九五六年まで移住事業に當り、同年海外協會連合會に事務を引渡し、軈て會社は一九六三年閉鎖した。現在は辻合名會社の株主重役でプロクラドールである。既に還暦を過ぎ人格高潔、一男四女のよき親で、長女淳子（プロヅトール會社高級社員で文筆家で有名な松本日出夫夫人）次女公子（聖市カーザ水本・清夫人）三女壽美子（加屋野淳夫人）長男勝雄（聖州工大出身）四女美和子（ベレーン文理大卒）等である。

ベレーン市農業關係取引商

森川春一氏

原籍　大阪府南河内郡下河内
渡伯　昭和六年五月　りお丸處女航海

HARUICHI MORIKAWA
R. Dr. Assai, 102
Belem — E. de Pará

何時訪ねても、お客のいない日がない。特に戰後は邦人移民が激増したので、色々の相談やら、或いは無錢一宿やらで、大變賑やかである。それもそうだろう戰前から森川氏の宅は、トメアスー植民地出身者がよく泊るところで、ベレーン市でマージャンが始まつたのは彼の宅で、河内・永石・戸田・阿部・武田・岡部等が集まつてやつた随分古い話しである。

よく後輩の世話をやくので、ベレーン市の次郎長格である。こんな人の出這入りが多いのにアヤ子夫人は少しも嫌な顔をせず、飲み放第喰い放第で、日本ならば破産するとこだ。アマゾンに移住した戰前派の多くはトメアスー組か、パレンチンの高拓生組だが、彼は毛色の變つた組で、モンテ・アレグレ植民地に入植した大阪YMCAの五反田組である。出身は大阪府立農学校獸醫科（現在大阪農業大学）で、同校の先輩に農科出身の生島重一が、ベレーン總領事館に勤務している。

ベレーン公設市場の遠望

雄大な希望をもつて渡伯、百ヘクタールの農場に入つたが、獨身青年三十名の團体生活はむづかしく、二三ヵ月で退耕者が續出、遂に彼も一年で退耕した。そして親日家上院議員アルバロ・アドルフのモスケーロ島農場に在住一年、成瀬義治（五反田組）山本紀雄（高拓生）神徳（五反田組）高橋勝衛（南伯）等と活動した。軈てベレーン市に轉じ、アルバロ氏耕地（現在北伯農事試驗所）の支配人を六年もやつた。當時耕地の農産物販賣の責任者だつた經驗を生かした。ベレーン市の邦人野菜販賣は一九三四年頃からで、故玄場松一が一番古く、そして森川春一・高橋勝衛等が續いた。だから彼はもう三十余年も市場の仕事をしている譯である。

五反田組の親友成瀬義治と共に、共同經營の店を開いていた處、一九四二年のベレーン市燒打事件のため、一切の財産を無にしてしまつた。ドイツ潜水艦がベレーン市沖で、ブラジル商船隊を撃沈させたのだから、市民が樞軸國民を憎んだのは當然で、彼もそのトバツチリを喰つた。そして終戰まで三ヵ年トメアスー植民地に軟禁された。終戰後平和になつたので再び古巣のベレーン市に戻り、少しづつ地盤を固めていつた。そして昭和二十八年以後一千家族に余る戰後移民が渡伯して、農産物をベレーン市で販賣するようになつて、その代理人となり、彼の地位は確固たるものとなつた。軈て三井物産、久保田鉄工所、ヅウポント肥料會社の代理店となり、ブラジル銀行の信用も絶大となつた。戰後派邦人農民が伯銀から融資を受ける場合銀行はその下調査に、わざ／＼彼に經營狀態を訊きにくる位、民間領事みたようになつた。あや子夫人は山形縣人故阿部正の長女で、二男三女がいる。長女みち子は伯人フエルト夫人、二女えみ子は岡本昭博夫人、長男勝治は農大志望、三女勝美、二男次郎は勉学中である。明治四十年五月二十日未年生。

SHIRO TODA
Caixa Postal, 842
Belem — E. de Pará

ベレーン市ニツポニカ
商工株式會社專務取締役

戸田子郎氏

原籍　岐阜縣大垣市室村町
渡伯　昭和七年ぶゑのすあいれす丸

　行水の靜かな音や吾娘らしく　　戸田素人

俳歴一年と云う彼の俳句である。俳號素人はシロウト即ち本名子郎をもじつたもので、俳聖高濱虚子が本名清をもじつたものに、あやかつた譯でもあるまいが、兎に角晩年の趣味としては奥ゆかしい。青年時代から野球、庭球、寫眞、麻雀、讀書等多趣味で、どれも水準以上に上手になつた處から、この俳句道も「寂」の幽玄境に達するのも遠いことではあるまい。なにしろコリ性の性格であるから……

どうした譯だか、彼は若い時代から人の頭になつてきた。渡伯した動機は、父春三が武藤山治の後輩で、慶大卒業後鐘紡の人事課長をしていたので、大阪高津中卒業後岐阜農事試驗所に勤務していたのを止めて、南拓アカラ植民地に入り、ボア・ビスタ農場係となつた年齢僅かに二十才、そして間もなく吉田耕退陣のあとトメアスー事務所支配人となつた。二十代の若さで大植民地支配人である。一九四二年大平洋戰爭勃發で、南拓も州政府に接收されたそこで獨身組は「和氣の寮」にこもつた。星野、村田、成瀬、庄野、森川の猛將ばかりであつた。一九四七年終戰後に「アカラ農民同志會」が組織され、CETAと交渉して生產物の販賣權や、物品の購買權を奪還した時も、同志會の委員長に推された。時に三十四才であつた。續いて一九四九年大同團結したトメアスー產業組合大改革に際し、衆望を擔つて專務理事に推された。事業慾旺盛　覇氣滿々、三十七才の若き彼は、年齢的に先輩の平賀理事長、木村常務理事以上に活躍した。そして八カ年間この職に就いた。しかもこの時代に自己農場の完成はもとより、鬼才日高寅男と共同で、ピメンタ二万本のボア・ビスタ農場を完成した。

　一九五七年產業組合の改選で後進に道を譲り、ニツポニカ商工株式會社に移り、專務理事として、商業界に進出した。時に四十五才であつた。現在までこうした人の頭となつて指導してきたが、最も華やかだつたのは終戰直後一九四六年四月產業組合の專務理事に就任してから、八カ年間辭職するまで、木村總一郎常務と、協力して組合の充實と擴張を計つたことだ。彼は主にベレーン市に駐在、幼稚だつた對外胡椒販路の擴張に奔走した。トメアスー組合が、聖市々場を始め全伯で認められたのはこの時であつた。木村常務が植民地にいて組合內部機構の充實を計つたのと、共に產組への功績は大きい。

　彼は「年をとつたから我々の出る幕では」と云うが、万年ボーイの情熱を忘れず、今もつて北伯野球連盟理事となり、後輩を指導している。內助の功多い澄子夫人との間に三男五女、長女翠は在宅、二女朱鷺江は常光憲之夫人、三女雪江（三才で死亡）四女瑞江は藤橋夫人、一郎、英二郎、省三、百合江等である。明治四十五年七月二十四日子年生。

BUNHACHIRO SHIMAKAWA
Av. Portugal, 323-2.o - C. P. 776
Belém — E. de Pará

ベレーン市輸出貿易・肥料・農薬
珈琲精選・パウ・デ・ローザ工場

島川文八郎氏

原籍　熊本縣阿蘇郡阿蘇町（舊若水町）
渡伯　昭和二十八年八月　あめりか丸

　熊本濟々校卒業後早大中退で渡伯、二十三才から、満十年間の今日まで、この靑年實業家ぐらい自由奔放に、自分の才能を發揮した者も少なかろう。特に戦後派邦人移民の中では、ナンバーワンである。

ベレーン市の繁華街

　著者が敬服することは、貯めることのみを知つて、敢することを知らない吝嗇家と違つて、万金を儲けて一夜にして豪遊するが如き太つ肚をもち、實に二十代を悔のない生活を送つた。あの當時儲けた莫大な金を今日貯めていたならばなあ——という、女々しい後悔もしない處に、肥後魂が何處かに祕められているようだ。「豪放磊落」このごろはこんな言葉は通らないがあの當時の彼の生活は本當にその通りであつた。
　ここ一、二年ピメンタの取引商として、鳴りを沈めていたが、再び業界に再スタートすると共に、バイア州バイア市で高級レスタウランテを開き、傍ら同市高官・豪商相手のキヤバレーを設け、一方アマツパ直轄州オヤポツキ市近郊に五万ヘクタールの土地を買收、アマゾニヤ産業研究所高拓第一回生の藤島正徳と共同で、"パウ・デ・ローザ工場を經營、伯國の高級製油の輸出に手を染めた。またマカツパ首都に政府統制下の珈琲精撰工場を經營し、アマツパ州の配給權を一手に引受けるなど八面六ピの活躍をしている。年齢滿三十四才今までの事業は順調に行きすぎて、ママゴトの感があつた。然しこれからの事業は骨身にこたえ、頭腦と手腕のみせ處で、彼も自己の試練場として、反つて勇氣百倍していることだろう。そして第二の十年間が油の乘切り盛りであるから、大いに自重してもらいたい。
　彼の性格は、實に純眞無垢だ。一寸氣にいらぬ事があると面に感情が現われる。時には怒る。それほど氣一本である。生すい性格だと、なか〳〵表情に出ない。それだけ三十代の純情と、まだ〳〵学生氣分が抜けきれないのだろう。早大に学んだだけあつてスポーツマンである。自費を投じて球團を組織したこともあつたが、周圍の事情で解散した。商賣以外にそうしたスポーツ方面に情熱があるから、風變りな人物である。
　父清久・母すみの長男に生れ、トメアスー植民地戦後第一回移民として入植した。同航海にはウナ植民地移民がいた。武田武志耕地就勞一年、父はオーレン市に移轉、彼は翌年產業組合に勤務、約半年の後に木田周次郎二女五月と結婚、バルカレーナ郡に移つてピメンタ園經營、軈て伯人貿易豪商と組んで、ピメンタ取引商となり、二十代で一年間に數千万円の金を儲けた事があつた。現在商業の他に胡椒園を三ヵ所に經營している夫婦の間に長女弘美、二女靜江の愛兒に惠まれている。長姉照子は作家竹内好夫人、次姉正子は上條夫人（大會社々員）で日本にいる。弟尚三は肥料商として獨立、妹容子は結婚して聖市に在住している。昭和六年十一月二十一日未年生。

ICHIRO SUZUKI
R. Dr. Malcher, 327
Belem — E. de Pará

ベレーン市鈴木旅館

鈴木一郎氏

原籍　山形縣西置賜郡長井町
渡伯　昭和五年十二月　さんとす丸

實に口數の少ない人で、重要な用件以外は喋らず、寡默愼重という言葉が、よくあてはまるが、学生時代は謹嚴實直な人物であつたろう。山形縣立（舊制）長井中学校時代五ヵ年間無欠席通しで、その表彰狀がいまもつて應接間に掲げてあるが、この精勤振りは小学校六年間も續いたから、合計滿十一ヵ年の通学精勵であつた。こうした性格だから何事にも責任感が強く、特に金錢問題に於いては、絕對信用のおける人物である。

トメアスー植民地開發初期時代に野菜組合が結成された當初から野菜係を任命された。軈て産業組合に改組されベレーン出張所の野菜販賣係となり、儲からぬ仕事をコツ〳〵とやつた。生活するのに漸くという處から、夫人が小使い稼ぎに出市する人達を泊めたのがホテル業の始まりであつた

鈴木氏夫妻

考えてみると、渡伯直後から二十年余りは、何を目的に働らいたのか、實に希望のない生活で、終日貧乏世帯をきり廻して、一日が終えると、やれ〳〵と疲れて眠るのが日課であつた。當時二十三才で、新婚若夫婦の生活は、夢も理想もあつたものでない。まるで奴隷生活に等しかつた。本當の奴隷と違つた點は自由があつたと云うに過ぎない。そんな最底での生活でも夫婦は不平の一言も漏らさなかつた。前途の光明に燃えてきたのは、戰後ピメンタ栽培に手を染めてからである。それまでは次から次へと生まれる子供を育てるのが精一ぱいであつた。

「似たもの夫婦」と諺にあるが、鈴木夫妻の性格は、丸で正反對である。八重夫人は機略縱横で、しかも能弁、人をそらさず脚腰が輕く、全くホテルの女主人にはうつてつけである。もしこの夫人が少し鈍重であつたら、鈴木ホテルは遠い昔しに破産したであろう。アマゾン流域に住む邦人の殆んどが、一度や二度、何かの用事で泊り、この女主人の世話にならない者はないだろう。何事を頼んでも、何一ついやな顔をせず、すぐ引受けてくれるのは、主人一郎氏と同じである。ホテルの女主人だから、そんな事は當然でもあるが、要件以外に好意をもつて立廻つてくれることが、實にうれしい。

千客万來の賑があり、ピメンタ園も經營していたのに、割合財産を貯めなかつたのは、夫婦が案外金錢に淡白でもあつたからだが、七男三女の子供を教育するのに、消費したものだろう……と著者は想像する。それでも一郎氏は万難を排し、一九五六年に訪日親しく肉親にも接したが、これなども八重夫人の心盡しで、その祕められた溫かい心情には泣かさざるを得ない。長女多美香は河内東一夫人、長男順一は獨立して胡椒園經營、二女靜子は結婚して聖市在住、二男明彥は一九六五年マツケンジー大学卒業、貞一、信子、庄藏、永藏、庄吉、エドワルド、アンナ・マリア等勉学中である。在伯三十五年の古参移民、ベレーン市になくてはならない一人で、ベレーン市邦人の生字引である。明治四十年七月六日未年生。

KOUJI YAMADA
Caixa Postal, 1019
Belem — E. de Pará

ベレーン市三井物産・パイロット代理店・書店

山田好治氏

原籍　熊本縣飽託郡託馬村石原
渡伯　昭和二十九年六月あふりか丸

彼は戦後渡伯した移住者で、ベレーン商業界では島川文八郎と共に、異彩を放つている新人である。兎に角戦後渡伯の人々は、ベレーン市で獨立するには小資本で、なか〳〵思うように活躍が出來ないのが當然であるが、そうした万難を排して、戦前派に伍して健斗してきたのは、賞讃してしかるべきである。島川文八郎と共に、この二新人が熊本縣出身なのも、面白い。

父盛重、母はじめの三男に生れた。三男坊で、幼少から豪毅果斷、昭和十三年日支事變が起きるや、第一先陣にたち中南支戦線で活躍した。戦争は軈て大平洋戦争に突入し日本は擧げて苦斗した。青春を戦争にかけた彼の運命も、天の幸か幾度の死線を域えてボルネオで終戦を迎えた。戦争のため青春八ヵ年を犠牲にしたのであつた。復員した彼は、かつての運命と變つた方面に就職、社會福祉事業に勤務した。そしてその熱烈な公共事業への誠意が認められ、第四回日本全國兒童福祉大會には、代表として派遣された。こうした兒童福祉事業に從つた關係で、渡伯後商業界に進出しても、文化事業に關係のある日本書籍・雜誌販賣事業に最初から手を染めた。今日北伯野球連盟理事として奉仕しているのも、スポーツが文化事業として、最も青年に必要欠くべからざる處から、盡力している譯である。

昭和二十九年六月アマゾナス州マナオス市對岸ベラ・ビスタ植民地アグア・フリーア區に入植した。移民受入態勢が整つていない處から、連邦政府や移民會社も混乱したが、それよりも植民者は、塗炭の苦をなめた。評論家大宅荘一が訪づれて「緑の地獄」と云つたのは當時のベラ・ビスタ植民地を云つたものであつた。文化國家ばかり觀て廻つた大宅には、混雜している原始林開拓地生活はそう見えたのであろう。彼は在住一カ年、長居は無用と退植し、ベレーン市郊外コツケイロ植民地の奥地に移り、ここで四ヵ年頑張つた。幸いこの四カ年の生活で、ベレーン市附近の模様が解つたので、ベレーン市進出の機會をねらつていた。その頃はベレーン市の邦商と云えば野菜賣以外は三・四人に過ぎなかつた。

マナオス方面から移轉してきた邦人は、コツケイロを始め、各方面に入植してピメンタを栽培し、ピメンタを植えねば農業人でないように、一色に塗られた感があつた。彼はそのピメンタ熱と反對の方向に進み、ベレーン市に進出し、日本書籍・雜誌や、農業關係の肥料農藥品等を販賣した。資本も充分でないので手堅く經營していつた。幸い在留邦人にも信用を得て、今日の地盤を築きあげた。只遺憾な事は南伯ほど少年・少女の日本語熱が盛んでないので、日本文の兒童雜誌がはけない事であるだが最近北伯の二世にも日本語が盛んになつてきたから、軈て販賣されるだろう。エイ子夫人との間に長男隆（高校）長女則子（中学）共に聖市で勉强している。大正九年一月一日申年生

IWAKICHI TSUTIYAMA
R. Quintino Bocaiuva, 1414
Belem — E. de Pará

ベレーン市農產物取引商・農場經營

土山岩氣智氏

原籍　北海道山越郡八雲町
渡伯　昭和七年九月　ぶえのすあいれす丸

溫厚篤實、然し事業の推進力は嵐の夜に押寄せる怒濤の如く、底力のある積極性をもつている。滿十三才で渡伯したが、日本人との交際も円滿で、誰れからでも好感をもたれ、そのため商取引も、益々發展した。

現在個人商賣をやめ・安井、淸水、小松の新人とジャブラス商事會社を創立し、ピメンタを主体に諸物產の貿易事業に健斗している。誠に堅實な方針で、若い頃から苦勞しただけあつて、周到綿密な人生道を辿つている。

父山家三次郎、母フサの三男に生れ、十三才の時に同鄕の成澤誠志の構成家族の一員となつて渡伯、サンタ・マリア區の直營農場に入植した。トメアスー港から僅か一キロの地點在住二カ年の後にアサヒザール試験場で、宇都宮職員の助手をつとめ、ピメンタ栽培をやつた。在植一年で、アライヤ直營農場に移り現場監督として、滿十五才の青年は大いに活動したが、會社の事業縮少で直營農場が閉鎖されたので止むなくブレウ區に入植した。一九三七年頃から一九四〇年の四カ年は黑水病の猖獗がひどく、二・三日おきに死人が續出、家長成澤誠志夫人も犠牲の一人となり、罹病した彼も一時は醫者に見放されたが、幸い天の扶けか、九死に一生を得た。軈てベレーン市方面で一時は活躍したが、戦時中は「和氣の寮」に立籠つた。そして戸田耕地支配人として二カ年半頑張つた。間もなく福岡縣人野口邦光令妹道子と結婚し、米作三カ年を經て、一九四九年ブレウ三區の高田幸之助・管江共營農場を、十一コントスで買收し、ここで若夫婦は死者狂いに働らいた。當時胡椒はたつた五百本植えてあつたのを、遂に二万一千本に增植し、トメアスー植民地で山田義一農場、澤田毅農場と共に第一級の農場にまで仕上げてしまつた。特に夫人は次から次に生まれる子供を育てながら伯人を畑で監督し、實に人間業と思われない位の努力を續け、辛酸苦勞をなめた。

軈てベレーン市郊外アナニンデウア區に百ヘクタールの農場を二百八十コントスで購入、三万本の胡椒を植え、新來の甥八幡光博に支配させた。續いて一九五五年ベレーン市に移轉、バナナ仲買業、運搬業、雜貨商、ホテル業等を經營、ベンフイカ三百ヘクタール、マラニヨン街道五千ヘクタール、聖市にも土地を所有している。一九五五年二十三年振りで訪日した。父祖の墓前に座した時は、「あのブレウ區時代、命がけで働らいてよかつた。あの働らきがなかつたら訪日も出來ず、墓參も出來なかつただろう」と涙を流して悦び、そして地下に眠る先祖の靈を慰めた。再渡伯後は商業界に活躍、そして現在に至り、實兄山家岩雄も渡伯した。糟糠の道子夫人との間に四男四女、勝正、妙子、繁子、三枝子、晴美、巖、毅、力等で、一九六三年十二月十九日十四才の四女晴美が輪禍で逝去したのは哀悼に堪えない。大正八年四月十七日未年生。

つた。食料品など一ヵ月交代で町に買いに行く事にし、馬やカノアで町まで一週間もかゝる交通不便な處であつた。そんな背水の陣を布いて虎穴に入り虎児を得るような冒険をあえてした日産平均百グラムづつ採集したが、日本軍が佛領印度支那上陸敢行で、佛人經營者は契約を破棄した。

再びベレーン市に戻つて、ウワシマ栽培に邁進していた處、大平洋戦争勃發、續いて樞軸國民住宅の焼打事件が起き、ベレーン市から百粁離れたカスタニヤールに難をのがれた。四ヵ年間は戦争の成行を眺めて暮したに過ぎない。漸く生活が出來ればいいのであつた。そして一九四五年の終戦であつた。渡伯してから滿十五ヵ年は、何にをやつたか、全く儲けのない無一文生活、しかも轉々する流浪ジプシー生活であつた。戦後の日本移民が、十ヵ年經てば巨財を儲けて、やれ貨物自動車、やれ乘用自動車、やれ貸家、その上に飛行機で訪日と、しやれるのと雲泥の差である。

彼は終戦でベレーン市に戻り植物園の隣地を借地、往年の地盤を築きつゝ、一九五三年コツケイロ植民地にピメンタを栽培した。一時は聖市から洗濯機を取寄せ、洗濯屋を開業したが、ベレーン市民には向かず閉店した。再び生活は蔬菜栽培で糊口を凌いだ。幸いピメンタ一万本が結實しだしたので、これに勢いを得て増植約四万本までになつた。ベレーン市郊外では大橋敏男の四万本と双璧をなし、この時に同志をかたらつて、パラー産業組合を結成した。一九五三年からアマゾンに邦人移民が入植し、その七・八割までが奥アマゾンを逃亡してきたので、親分肌の彼は、この人達をコツケイロ植民地に入植させた。コツケイロ植民地は戦後移民の安住地みたようになつた。

私心を棄て後輩移住者を救うこと限りなく、彼の住宅はこの點一時はベレーン市の人事相談所の感があつた。ツネ夫人はこの混乱に一つもいやな顔もせず職に迷える人々を慰め、激勵した。彼の宅に、誰れでも心安すく出這入り出來るのは、人間を差別しないツネ夫人の温情によるものである。家庭は三男四女の子福者、長男良保（在日本）二男良二と三男良三は妻帯して耕地經營、長女マルガリーグ、二女ビオレッタ、三女マリア、四女テレジンニヤがいる。一九五八年訪日し戦後の日本を視察した。リオの白土貫治、聖市の藤平正義と共に彼を在伯千葉縣人三羽烏の一人として推賞しておこう。明治三十三年十月四日子年生。

ベレーン市ピーメンタ園經營

長谷川貞雄氏

原籍　千葉縣長生郡七睦村
渡伯　昭和四年九月　もんてびでお丸

SADAO, HASEGAWA
R. Romas Bolente, 1186
Belem — E. de Pará

南米拓殖會社がトメアスー植民地を創設するや、第一回入植者として應募、昭和四年渡伯して以來、實に滿三十五年は過ぎた。その三十五年の開拓生活は波瀾重疊を極め、この人ぐらい數奇の運命に奔弄された人物も少ないだろう。

終戰直後ベレーン日本人會々長に就任し、一九五九年汎アマゾニヤ日伯文化協會がベレーン市に創立されると、副會長に推選された。ベレーン市近郊邦人ピメンタ栽培者が、パラー産業組合を結成すると、その理事長に推された。衆望を擔つて責任者に推される程、信用が絶大である。滿二十九才で渡伯した彼も既に六十五才の老境にはいつた。

著者がいまもつて惜しいのは、彼の晩年の事業であるブラジル胡椒栽培株式會社を、色々の事情で退いた事である。その會社創立の當初計画は尨大で、發起人引受株數も、彼が誰れよりも最高であつた。長谷川貞雄（四〇〇〇株）辻小太郎（三〇〇〇株）ベリザリオ地主（二〇〇〇株）茂木勇（一〇〇〇株）山内登（二五〇株）市原津南三（二五〇株）他に伯人重役陣がいたが、最高一千株位であつた。五ケ年計画で五十万本の予定、コロノ一家族五千本位を單位として、百家族雇傭し、コロノには純益二五パーセント配當するという條件であつた。初年度十五万本栽培し、その栽培が終えたら、同僚辻小太郎との意志の疎通で、遂に脱退、最後には裁判問題にまでなり、法廷で黒白を争つたが、この五十万本のピメンタ栽培農場だけは、邦人の誇りとして完成させたかつたし、彼れ長谷川貞雄としても、晩年を飾る上からも惜別の感が深い。もう彼も年齢的に十年、二十年の期間を要する事業に着手は出來ない。そう考えると全くあの事業は、殘念であつたと云える。

彼の開拓生活三十五年を繙くと、彼はいつでも丸裸で事業に体當りしている。決して私利私慾に走らない。最初の入植地アカラ植民地では、カカオ栽培で、齋藤円治と双璧をなす程、數多く栽培していた。處がカカオ栽培の見込みがなくなると南拓本社はカカオ栽培直營農場を閉鎖させた。そのためカカオ栽培に六カ年も全精力を盡した植民者は無駄骨を折つた譯である。この時に會社の不法をなじつたので、不隠分子として植民地から退去命令をくつた。三十五年昔しの專制政治時代だつたから會社もそんな無茶が出來たが、今日から考えると、彼の行動は正當な抗議であると云わねばならない。

無一文でベレーン市に出たときも、身なりもかまわず、糊口をしのぐために、先輩藤井力太郎の指導で、炭焼を始めた。日産百俵づつの熟練工までなつたが、三年後にはその貯蓄で雜貨店を開いた。職業に上下のへだてがないと云うのが、彼の主義であるから、手當り次第にやつた。

一九三八年田中館博士一行が、パラー州クルピー地方を調査した際、ビリア河上流ミナ・デ・マカコが砂金採集に有望と聞き、彼の發案で伊藤、阿部、野原、河内、千葉、政木等一騎當千の强者が往つて鉱區の分譲をうけ、淘汰法で砂金採集を行な

ある。どうしたはづみか、アマゾン開拓に挺身し、若冠二十二才で新婚みよし夫人と養子國治、養女ちよ（加藤豊夫人）を連れ、勇躍アカラ植民地に入植した。希望に燃えたアカラ植民地は、その頃マラリヤ病の猖獗ひどく、理想郷どころではなかつた。入植者の殆んどが、米作で旅費を稼ぐと、どし／＼南伯サンパウロ州へと移轉した。豫期しない魔境に飛込み、辛酸をなめること四カ年、この間に長男久夫（三才）を失つた。そこでアカラ植民地を退散、流轉生活が始まつた。ベレーン市トロツカメント區蔬菜生活二カ年、モスケーロ島の隣オテロ島の炭焼生活、ここで大平洋戦争となり、續いて翌一九四〇年八月十八日ドイツ潜水艦がブラジル商船隊を、ベレーン沖で撃沈させたので、ブラジル國民の憎しみをかい、そのため着のみ着のままで、アカラ植民地に難をさけた。いや政府の取計いで軟禁された譯である。

ベレーン市近郊蔬菜栽培の王者五十嵐家の人々

一九四二年から一九四五年まで、アカラ植民地で蔬菜栽培、この三カ年間は實に長いような氣がした。野菜を植えても自分勝手に賣れず、州政府監督官がベレーン市に輸送して販賣するのであるから、如何程で賣つたか、その値段さえ知るはずがなく、努力の甲斐がない骨折損の生活であつた。そんな精神的慘めな生活に堪え、遂に終戦となつた。日本は全力をあげて戦つたが、遂に力が盡きて敗れた。在伯邦人は祖國を頼れず、一人々々が自己の信念に生き、生活を拓いていかなければならなかつた。

彼は終戦直後ベレーン市に出て、前記の土地を借地、そして十年後自己所有となした。またコツケイロ植民地にピメンタ園三十ヘクタールを所有、二万本の胡椒と、ゴム樹を植えているコツケイロ植民地の草分開拓者長谷川貞雄や、サンタ・イザベルの草分開拓者大橋敏男などと、パラー産業組合を結成し、仲間商人の搾取に對抗した。そして戦後移民の増加と共に、ベレーン市日伯文化協會の幹部として重きをなした。

同伴の五十嵐國治も獨立、ちよは加藤豊夫人として幸福な家庭をもち、彼も長女明美、みち子、惠一、哲也、雄司、純也、あやめ、ひとみ、修の七男四女に惠まれた。長女明美は戦後呼寄せた五十嵐光也と結婚し、よき協力者である。彼の開拓生活は晩年美しい實を結んで幸福である。明治四十四年二月二十二日亥年生。

ベレーン市ピーメンタ・ゴム・蔬菜園經營

五十嵐明氏

AKIRA IGARASHI
Travessa Mauriti, 1351
Belem — E. de Pará

原籍　山形縣寒河江市皿沼
渡伯　昭和九年四月　あふりか丸

東北人特有の粘着力のある拓人である。一つの物事が紛争すると、正しく解決するまでは、待期して腰を落ちつけ決して焦らない。そして最悪の場合がきても、決して事件を投棄てない。この隠忍自重さが、今日の彼を築きあげたと云える。

彼の住宅附近は、二十年前までは住宅がない處で、彼は一九四五年終戰直後、軟禁されていたトメアスー植民地からベレーン市に出てきて、同地を借地した。その土地は戰前に及川・福島・田中・野口等が借地をした處で、戰争の焼打事件で日本人が追拂われた跡を、伯人が無斷で耕作地を占領したのであつたその場所を、その侵入者から權利金を拂つて讓受けた。伯人の強要權利金十二コントスを三コントスにまけさせた譯である。伯人は無料で占領したのだから、取つただけ儲けである。この土地は二ヘクタールであつた。恰度面積も野菜園に好適地であつたので、彼等夫婦は約十年間頑張つて、その汗と膏の結晶で一九五一年四百コントス（當時邦貨四百万円）で購入した。そして永住の地と定め、三百コント（三百万円）の二階煉瓦建の豪壯な住宅を新築し、安住のねぐらに安んじていた。

處がそれから間もなく、北伯アマゾンにも産業開發の黄金時代がきて、ベレーン市の人口は急激に膨脹した。彼の住宅附近は野菜畑にしか、ならない周圍にどん／＼住安分讓地が建ち、到頭その邊りは立派な市街地になつた。その住宅地に殘つている土地は、彼の蔬菜園ばかりであつた。處がこの蔬菜園に、不法にもどし／＼伯人が無斷で侵入、堀立小屋を建て始めた。隨分無茶な話しで、終戰直後の焼野原の東京と同じことであつた彼はこの不法侵入を訴えたが、當局は全然手を拱いて傍觀したこれをいい事にして侵入者は益々殖えた。いよ／＼警察の手でいかぬので、辯護士の手を經て裁判所に訴えた。刑事問題であるが、警察が知らぬ顔をしているので、民事法となつて法廷で争つた。民事だから事件は長引き、アマゾナス州裁判所から、ついで連邦都裁判所まで、事件は持越された。法治國日本だつたらすぐ解決する問題だが、そこが悠長なブラジルのことである。この時に激昂せんとする胸を靜め、隠忍自重した。辯護士の代辯も齒痒いことが幾度かあつたが、これも我慢した。そして數年越しにこの事件は彼に有利に傾むいた。この東北型の辛棒強さには著者も感心した。それだからこそ、無一文から叩きあげ、あの土地を購入出來たのである。現在は住宅地にすると七・八十區にもなるし、自分で長屋を建てると三、四百軒は建てることが出來る。電車通りは五十米の近距離で、五十米の舗裝道路にはオニブスや自動車も通い、そのアスファルト幹線道路は、ベレーン市とブラジリア首都との直通道路である。彼はこの土地を購つたことによつて數億の巨財を殘した。

父久三郎、母かな兩親の二男に生れた。日本にいた時は、山形縣柔道界の巨星尾形源治六段（大正末期から昭和初頭）の門下生として黒帶をはめたし、實弟は五十嵐七段として有名人で

ンタを植え年産四十トンである。耕地の管理は、長女ふみ子の婿下前原晃等に全権をゆだねてある。ふみ子は渡伯當時十六才で、それ以來耕地に親しみ、女婿下前原晃等は宮崎縣人下前原光次の令息で、十八才で渡伯した青年、父光次は稀にみる篤農家でその父に鍛えあげられたから、耕地の管理には後顧の憂いがない。既に長女ふみ子には孫さえ恵まれている。

尙家族は前記長女ふみ子以下、二女ひで子（サンパウロ市で洋裁学校通学）長男義美（高校一年）二男哲雄（中学校）三男邦雄（小学校）四男光雄（小学校）三女美喜子（幼女）等である。追懐すれば、あの雪深い北海道八雲町に生れ、中外鉱業KKに十二ヵ年も勤務、軈て日支事變が勃發して死線を越える激斗に遭い、大平洋戦争と續いて軈て復員、遂に寒風吹き捲くる北國から、寒さ知らずの常夏のアマゾンに轉住した。人間の運命程變化の多いものはない。糟糠のつま夫人の健康を祈つて筆を擱く。大正五年十二月四日辰年生。

（左）は家族一同（右）は二女ひで子と長男義美

IWAKITI YAMAYA
R. Quintino Bocaiuva, 1414
Belem — E. de Pará

ベレーン市自動車修理工場經營

山 家 岩 雄 氏

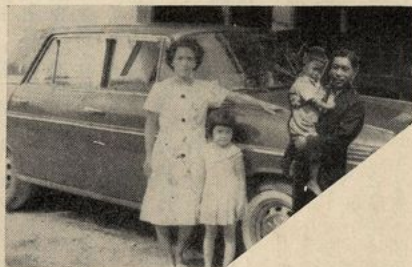
原籍　北海道山越郡八雲町
渡伯　昭和二十九年十二月　あふりか丸

彼の性格は、純然たる技術屋向きで、どうみても商人肌とはみえない。自動車を修理するのに、少しでも不整備な處があれば、それが氣になつて、徹底的にそれを完成させねば氣にくわぬ。そんな小部分な處などホツテおいても、自動車は動くのだが、軈てその小部から故障が大きくなつて、動かなくなることが解つているので、彼としてはゴマカシが出來ない。ブラジルの自動車修理工場の惡弊は修理して二、三日走れば、また修理工場に戻つてくる程度の修理しかしない。それでも戰前はまだ親切・丁寧だつたが、戰後はひどくなつたものだ。一九五七・八年度著者は、全伯を二十万粁ほど走つたが、この旅行で、特にブラジルの自動車修理工場のデタラメさを痛感した。

そうした折に、日本で卓越した技術をもつている彼が、ベレーン市郊外に、自動車修理工場を開いたのは、誠に有難い。特に交通便利なコツケイロ街道であるから尙都合がいい。彼は学校を卒業すると、すぐ山雲中外鉱業株式會社に入社、そこで自動車修理部に勤務、十二カ年も精勤した。しかも中支事變が起きてからは、自動車部隊、機械化部隊等に編入して、中支戰線に轉戰した。軍隊の事であるからボート一つおそまつにする譯にいかない。所有權は主上にあるので上官から「天皇陛下の物をそまつにすると嚴罰だぞ」と云つてビンタ一つ張飛ばされるぐらいは普通であつた。その嚴格な軍隊で鍛えたのだから何から何まで整然だ。今でも使用人の伯人がマゴ／＼していると自分の手のあいた時は自分が車台の下にもぐり込んで仕事をする。實に迅速・丁寧だ。彼の自動車修理工場は軈て繁昌するだろうと確信する。

山家夫妻と四女美喜子

彼は父三次郎、母ふさ兩親の二男に生れた父は故人だが、母は現在故郷で八十三才で健在である。ベレーン市の豪商土山岩吉は、彼の次弟で三男である。弟岩吉は昭和九年成澤誠志の構成家族の一員となつて渡伯し、成澤誠志が夫人をマラリヤ病で喪つて、棄市へと移轉してから、土山五郎家の養嗣子となり、土山と改名した。弟土山岩吉はなか／＼の努力家で、遂にアマゾン有數のピメンタ園主になつたが、その弟の呼寄せで彼は昭和二十九年十二月アフリカ丸で渡伯した。そしてトメアスー植民地ブレウ三區の土山耕地に入植し、軈て同地域の新耕地帯にピメンタを栽培した。現在一万一千本のピメ

ベレーン市トラベッサ・ビジア街三一六

TOICHI KAWACHI
Travessa Vigia, 33
Belem — E. de Pará

河内東一氏

原籍　北海道上川郡清水町
渡伯　昭和八年六月　はわい丸

立岩信助氏

原籍　静岡縣田方郡湯ガ島町
渡伯　昭和六年十二月　さんとす丸

温厚篤實　慈眼に滿ち、怒つたことがない童顔そのものの河内東一は、アカラ植民地第十二回入植者で、同航海でアマゾンに殘つているのは河内卓三、高山鉄藏、四釜信造　細川悦次郎　諸富八治等位のもので、追々この連中も老齢となつてきた。追懐すれば既に三十二年の過去になる譯で、年をとるのも無理からぬ事である。

日本一の大會社鐘紡の後援で經營するアカラ植民地だから、極北の北海道より住み易い處と思つて、勇躍植民地に飛び込んでみると、あに計らんや有名なマラリアの巣窟でロッテを會社に返上一カ月で退散した。命あつての物種であつた。當時死人續出で恐怖の的であつた。本論のトメアスー植民地マラリア病死亡者名簿を見ると解るだろうが、二、三日おきに葬式が出るしまつであつた。退植してカパネーマ植民地に移り、二ロッテを購入し、マンジョーカ、棉、米などを栽培した。兄弟が多かつたので、甘蔗を植え、ピンガ製造を始め巨利を博したので雑貨店を開いた。處が不幸にも太平洋戦争が勃發し、止むなく町から退去、四カ年農の生活に戻り、終戦後に再出發した。從義兄稻垣五三（稻垣すが夫人の妹が河内きみ夫人）と共營で　カパネーマで一番繁昌する雑貨店までに發展さした。この頃著者も訪づれた事があつたが、千客万來で、面談する暇もなかつた程多忙を極めていた。軈て十余年後稻垣義兄と共營をやめ、ピメンタ園と養鶏事業專門に邁進するに至つた。誰れからでも尊敬される人格者で、その信用は絶大である。

立岩信助は、静岡縣出身で、同縣出身先輩の山田義雄が、拓務省の補助金でオーレン開拓に手を染めたので、山田の呼寄せで、大嶽一、簑輪操、山本榮二等より一船遅れて渡伯した。處がオーレンはマラリア病の猖獗ひどく開拓は困難、そこへもつてきて補助金五万円をめぐつて、山田と青年達の間に感情の衝突をきたし、どん／＼青年達は退去し、彼だけは八カ年間最後まで頑張り通した。山田のみ一人残りオーレン町で商賣をやつた。軈てオーレン退散後數奇の運命に奔弄され、總ゆる辛酸をなめたのち、河内東一の妹そのを娶り安住の地を得た。現在義兄等と農場を共同經營している。伊豆の修善寺近くの温泉地帯に生れ、歌手近江の「伊豆の山々月淡く」の歌謡曲を聞く度に生れ故郷の想い出にふけつている。

河内東一は三男三女の愛兒に惠まれ、弟清はしう子夫人（ベレーン市今野氏令嬢）弟信市は多美香夫人（鈴木一郎氏長女）弟守はかおる夫人（富山縣人井川氏令嬢）弟正一、妹その子、末妹れい子（熊本縣人土屋一男夫人）等一族は數十人に繁榮しアマゾン移住を有意義にした。明治四十年十月十五日未年生。

（寫眞は彼が活躍するベレーン市）

ベレーン市農産物委託販賣・商業

新妻常顯氏

TSUNEAKI NIIZUMA
R. 15 de Novembro, 70
Belem — E. de Pará

原籍 福島縣双葉郡大熊町
渡伯 昭和二十九年十二月ぶらじる丸

満身これ斗志、どんな苦境でも征服して邁進する精神の持主で、しかも満三十七才の青春謳歌の年輩である。今が一番油の乗りきり盛り、もう十年もすれば事業におじけがつき消極的となる。ベレーン市郊外に住む邦人蔬菜栽培養鶏家などが、生活擁護のために結成した生産者團体の専務理事に就任し、多端な事務に當つている。雄辯であり機略縦横で、なにをさしてもやりこなせる能力を持つているからこの團休の専務は適役であろう。働く事にかけても、骨身を惜しまず、他人のためにも身軽く飛び廻る。恰度南伯サンパウロ州代議士京野四郎のようなタイプで疲れを知らず活躍している。

蔬菜卸市場の見えるベレーン市

渡伯は昭和二十九年で配耕地はトメアスー植民地ブレウ三區岸勝美耕地家長は伯父渡邊常正で、伯父は不幸妻と娘を自動車事故で喪つて、現在聖市郊外モジ・ダス・クルーゼス市で不幸をかこつているが、その伯父の連家族となつて、大アマゾン開拓に挺身した。岸耕地で辛抱すること實に四カ月半、伯父と別れて獨身の輕裝でベレーン市に飛び出し、マナウス市出身の代議士ドクトル・アグリード・ミランダ・コヘイ所有の耕地管理人になつた。場所はマリツーバ驛近くでピメンタ一万二千本が栽培してあり、親日家で彼は信用絶大、三ヵ年在住した時に耕主が突然病死した。そのため惜しくも退耕したが、もし耕主が健在であつたら、彼の人生はまた別の方向に發展していただろう。

未亡人の耕地經營方針が變つたので、渡は退耕して、ベンフイカ地區で獨立した。幸いミランダ耕地時代に結婚した妻洋子（ヒロ子と讀む　サンタ・イザベル在福田清二長女）が協力してくれたので、辛酸に貧乏生活ものりきる事ができた。この頃からベンフイカ地域に漸く邦人の手でトマテ栽培が始められた藤島叉男（現在マカツパ市）が手を染め、續いて増元七太郎、北川福一、北川正雄等が五万本、十万本と植え、ベレーン市四十万人の食卓を満たしてくれた。トマテはこれまで野生しか出來ないと思われていたのを、邦人が接木して、人工栽培法を發見したものであつた。この蔬菜熱勃興期に際し、友人北川正雄等の奬めで、その生産物の委託販賣を引受けることになり、ベレーン市に移轉、農産物を朝市場で商う身となつた。

この商業界に進出して彼の視野は廣くなり、交際する人々も數多く、運命は自から拓けていつた。ベンフイカ區で土をいじくる仕事は廣潤廣量、多才な彼には不適であつた。やはり彼の性格は繁華な都會に出て、生存競争の激しさを味わい、その渦中で激斗するのが適當で、社會的地位は一歩々々向上していつた。敏腕家新妻常顯として、今はベレーン市近郊邦人で知らぬ人がない位い、有名人になつてしまつた。糟糠の洋子夫人は渡伯前は縣庁に勤務していた事がある。夫婦の間に長男常之、二男宏、長女史子（フミ子と讀む）の三児がおる。昭和三年十月十六日辰年生。

SEIJIRO FUKUSHIMA
C. P. 39 — Cooperado N.o 70
Belem, — Pará

トメアスー植民地トメアスー港

福島清次郎氏

原籍　北海道小樽市相生町
渡伯　昭和六年一月　りおでじゃねいろ丸

日本からの指物師でしかも少年時代から父について習得した技術だから、腕には自信がある。それだけでなく、實に嚴格である。少年期から、青年期にかけて嚴格に育つたので、その習慣が今日も消えない。ブラジルみたような、個人主義の徹底した處では、どうも彼のような嚴格主義はあてはまらないかも知れない。然し習性で今さらヤワラカクなれと云われても出來る相談でない。

アマゾンを訪づれた人々や訪日するアマゾン在住者が、土産に持つていくコクタンの杖の多くが彼の製作である。伯人が製造する杖と違つて、精根を盡して製作するので、實に立派である。木刀の如きは、正宗、村正、鄕の義弘とまではゆかぬが、その立派さに一寸手にして正眼に構えたくなる。商賣の余暇として、頼まれて製作するのだが、年はとつても（六十七才）少年時代に修得した技術の眞髄は忘れられない。

彼の人生六十七年は數奇に滿ち、波らん万丈を極めている。晩年戸田子郎、澤田哲・木村總一郎等の旧友の薦めで、トメアスー植民地に戻つてから、案外安住の生活を得たが、それまでの運命は辛酸につきる。その苦勞の多かつたのを、平然として突破してきたのは、彼の剛毅果斷、直情徑行の賜である。「なに負けるものか」という魂が、肚の底にあつたからである。

父政吉、母みや兩親は新潟縣出身の指物師で、北海道に渡り彼は小樽市で生れた。寒風肌を刺す鰊の漁場を眺めながら育つた。一人前の指物師になり、軈て南拓アカラ植民地第五回移民としてブレウ區（現在の德田數惠耕地）に入植した。米作二カ年の苦斗は身にしみた。百姓をした事もなく、その上にマラリア病のため家族を喪い、遂に農業を止めざるを得なかつた。幼兒清一・すみの二兒を伴い南拓會社の学校・事務所の家具備品の製造を請負つて糊口を凌いだ。在職四カ年、昭和十二年ベレーン市に出て、マウルチン區植物園前（現在五十嵐明耕地）で及川、田中、野口等と一緒に蔬菜栽培を始めた。然し不運にも大平洋戰爭勃發續いて燒打事件で、難をアカラ植民地に逃れた一九四五年終戰まで家具製造で糊口をしのぎ、終戰後思い切つて南進、サンパウロ市に進出し、羽瀬商會の旭時計工場に勤務した。然し聖市の月給生活は奴隷と等しく、希望のない生活であつた。午前五時から午後八時まで働き通しで、しかも薄給であつた。この生活を四カ年で見かぎり、同僚三人の薦めでトメアスーに戻り、一九五四年から胡椒六千本を植え、今日一万本になした。しかも彼は得意の指物工場を經營、安住の晩年を送つた長男清一は土木・橋梁工事會社を經營、巖は木工場、澄子は結婚、榮子は煉瓦工場經營者井上敏雄夫人、信男は大学希望を中退して耕地の管理、武男と政男が信男の協力者、君子・七郎・八郎は勉学中である。明治三十一年八月二十八日戌年生

JABRAS IMPORTAÇÃO E EXPORTAÇÃO LTDA.

MATRIZ: Rua Conselheiro João Alfredo, 70 - 10 and. S/ 103-105 - Fone, 3850
C. Postal, 607 - End. Telegráfico: "JABRAS" - Belém - Pará

FILIAIS: Av. Ipiranga, 81 - 6' and. S/ 603 - Fone, 32-0409 - C. Postal, 7608
End. Telegráfico: "JABPEPPER" - São Paulo - S. P.

Quatro Bôcas - Tomé-Açú - Pará

⦿輸　入 — イタリー國FIAT會社製トラツトール
⦿輸　出 — ピメンタをニユーヨーク、ロスアンゼルス、ブエノス・アイレス、ハンブルグ、アントブアープ其の他に1964年150トン。
— 國内販賣1964年度350トン。

ジヤブラス商事有限會社

本店　パラー州ベレーン市コンセレーロ・ジヨン・アルフレツド街七〇番一階一〇三〜一〇五號室
電話　三八五〇

支店　聖市イピランガ大通り八一番　六階　六〇三號室
電話　三二・〇四〇九　郵函　七六〇八

共營者　安部井　俊輔
同　清水　廉三員
同　小松　英彦
同　土山　岩吉

三人の新人に古參の土山氏が一枚加わって、北伯商業界に進出した新會社である。安部井氏は（本籍・東京都新宿區柏木町一ノ一七八）大学卒業後某會社に入社、北米に渡り貿易事業四カ年、後ちベレーン市某貿易KK勤務、そして獨立したビジネスマン。清水氏は（三重縣三重郡四日市市平津町）比島生れの純コスモポタリンで家族は大胡椒園主、戦後派ながら早くから商業界に進出した敏腕家、聖市支店長小松氏は南銀出身の經驗者、それに戦後いち早くピメンタ仲買商として頭角を現わした土山岩吉氏が一枚加わっているから、將來飛躍する會社である。目覺ましい飛躍より手堅く堅實に事業を切り廻して行きたいのが、モットーであるから、軈て取引は北伯全体に及ぶことだろう。

が旺盛で、物欲にこだわらず若い頃は事業上で大いにあばれたものであつた。日本で二十年、北米で十八年、朝鮮で十年、アマゾンで二十四年という人生史を持つている。

中学卒業後満二十才で北米に渡つた。明治三十七年で日露の風雲は火華を散していた。スクール・ボイをやり、大学に通つた。當時苦学の友に松岡洋右（外相）がいる。天家國家を論じ意氣軒昂、今の学生みたように、卒業後の月給の計算ばかりしている者と違つて、夢が大きかつた。通譯・葡萄園主となり放浪八カ年、最後にソート・レーキ市で商業に活躍、そして十万円（今日の三千万円の價値あり）を懐ろにして大正十一年歸朝した。日本滞在二カ月、猫額大の日本に住めず、すぐ朝鮮に飛び水田耕作地を買收して大耕主になり、年收五万俵もある事業家になつた。一時は道會議員を始め、産組理事、學校評議員等總ゆる自治政治機關にも參與した。大アマゾン開拓の話をきき朝鮮十年の生活を打きり、永住の決心で渡伯した。戰前のトメアスー植民地入植者のうちで、開拓資金を持參したナンバーワンであつた。

槍別登良一翁（中心）を圍んで平和な眞根井氏家族

七十二才の母堂スガや、實弟由一夫婦（現在聖市）と一男三女を伴つて入植、ブレウ區で四十ヘクタールの大米作を決行し一千二百俵の籾を收穫し、覇氣滿々の斗志に一般入植者は吃驚した。時に滿四十八才であつた。米作生活六年、甘蔗栽培からピンガ製造工場を設置、また製棉工場經營を高木三郎支配人に提出し心膽を寒からしめた。一九三九年社長代理の井口茂壽郎が植民地の設備を整理した時に、製材工場、精米工場賣店などの運營を引受けてくれと頼まれたが、彼は南拓賣店のみを引受けた。彼はその以前に上利盛夫商店を引受けていたが、その店を賣却してトメアス賣店に移つた。この店はのちに女婿眞根井孝門が經營した。流轉星霜八十二年、北米、朝鮮時代に大活躍した想い出にふけりつつ、雲畑野鶴を友として余生を送つている。一九三六年（昭和十一年）南伯で「アマゾンは人間の住む處でない」と北伯邦人進出撲滅論が盛んであつた時に、吉田耕（支配人代理）齋藤丹治（故人で押切他男岳父）と共に聖市にのり込み、堂々と北伯論を說いたこともあり、六十才前までは氣慨天を衝く勇猛さがあつた。長女とし子は眞根井孝門と結婚し、二女花子、三女洋子、長男ジョージ等も成人して世帯をもつている。西郷南州のような無慾な氣持ちで、余生を送つている彼の長壽を祈る。明治十六年九月二日戌年生。

トメアスー植民地トメアスー港

眞根井孝門氏

原籍　福島縣石城郡平市
渡伯　昭和十二年十月ぶえのすあいれす丸

槍別登良一氏

原籍　廣島縣双三郡河内村志和知
渡伯　昭和六年十一月さんとす丸

TAKATO MANEI
C. P. 39 -- Cooperado N.o 57
Belem, — Pará

拓人眞根井孝門は温厚篤實で教育家タイプ、無欲恬淡な彼が戦時中から戦後に亘つて雑貨商を經營、その後に大々的農産物取引商人として、活躍したのだから、流石にブラジルは面白い。彼は何事を観察するにも善い方に採る。盗人がおると、社會の悪い環境がそうさせたと思い、物の相場が暴落して損をすると、一寸先は闇だと言つて諦めが早い。物質的問題にくよくよせず、實に春風駘蕩だ。満五十才であるが、彼の体内にはまだ東京外語大當時の学生氣分が潜在し、天眞爛漫さが微動している。

渡伯したのが、一九三七年（昭和十二年）で、南拓アカラ植民地の混乱期であつた。東京外國語学校葡語科（現外語大）を卒業した。先輩に星野修（トメアスー植民地ボア・ビスタ區）がいた。南拓KKは既に三七〇万円を投資して、まだ物にならずカカオ栽培は將來性がもてなかつた。南洋熱帯植物学の権威高木三郎が赴任したが、もう大手術をして改革するには遅かつた。井口、神崎両人がきて、一九三五年農場を縮少、そして植民者は自給自足の生活に入り、南拓會社は専ら貿易に力を入れることになつた。これは確かに賢明な策であつた。恰度彼の入社した頃は、この會社の方針が轉向した直後であつた。植民地はマラリア病の猖獗酷惨を極め、そして南伯への脱耕者が續出した頃であつた。

會社の沈滞期に南拓に入社赴任して、四年後には、日米戦争勃發、その翌年八月ドイツ潜水艦がアマゾン沖でブラジル商船隊を撃沈せしめたので、ベレーン市民の激昂で、枢軸國民住宅の焼打事件が起き、到頭トメアスー植民地に難をさけた。そして終戦まで四年間、軟禁同様で、一歩も植民地を出ることが出來なかつた。彼は南拓社員の星野修、戸田子郎などや、アマゾン開拓團青年の森川春一、成瀬義治などと共に「和氣の寮」に立籠つた。そして農に就き四年間戦争の成行を静観し、軈て終戦後にトメアスー港で商店を開いた。

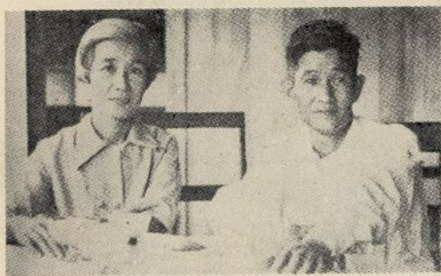
船舶を購入して、黄麻の取引を始めた。トメアスー産業組合更生により理事に推選された。その間に廣島縣人槍別登良一長女とし子と結婚した。胡椒園を經營し八千本の成樹に仕上げた終戦後満二十年、三男一女も成人した。長男孝太郎（高校）二男勇（中学）長女美子（中学）三男清（小学）等健在である。姉チバの家族松崎喜代司も昭和二十九年渡伯し幸福にくらしている。大正四年九月七日卯年生。

岳父槍別登良一は満八十二才、物欲の世界から離れた聖人で武田武志岳父鈴木信次郎、細川實祖父宇之助等と共に、トメアスー植民地の長老である。八十才を越えてから、物欲がなくなつたと云うのでなく、彼は青壮年の頃から、物に對する執着心よりも、寧ろ人間として成すべき仕事をしたいという、精神力

RENKICHI HIRAGA
C. P. 39 — Cooperado N.o 37
Belem, — Pará

トメアスー植民地トメアスー港

平賀練吉氏

原籍　東京都千田代麴町一番丁
渡伯　昭和六年五月　りお丸處女航海

日本政府から産業功労賞の監綬褒章をもらい、ブラジル地理学會から勲章を授けられているが、彼の功績は社會一般が認めている處であろう。駒場農大卒業後に農林省に入り官吏としてスタートしたが、官吏遊泳術にたけていない彼のことであるから、課長まで昇進したかどうか解らなかつた。或いは農林省關係の地方試驗所長にでもなつていたかも知れない。

兎に角、昭和六年アマゾンに渡り、モンテ・アレグレ農場に入つたが、例の五反田組四十七人は間もなく混乱に陥り四散した。最後に踏止まつたのが、彼等夫婦と上野浩爾・近藤の三人きりであつた。最後まで頑張つた森川春一、成瀬義治、などもベレーンへと去つた彼は去つて行く者の姿をみながら、悠々と牛飼に力を入れていたと云うから、心からアマゾン開拓に打込んでいたのであろうと思う。幼年時代から良家に育ち、ゼイタクな生活をしてきた彼が、處もあろうにあの食生活の不自由なモンテ・アレグレに入植し、數年頑張り通したのだから一般人と何處か違つた處があるようだ。今もつて三高時代の幣衣破帽の姿そのままで、あまり身なりをかまわぬ生活を送つている。糟糠の淸子夫人がまた主人に似て、虚榮を好まず、裸心の生活に浸つているのも「似た者夫婦」で面白い。

在伯三十四年、渡伯した當時がYMCA五反田組の副團長、南拓KKに招聘されてからトメアスー事務所長、トメアスー産業組合大改革で理事長に推された。汎アマゾニヤ日伯文化協會長にも辻會長の後任に推されたことがある。殆んど指導格の名譽職は一通り就任したので、今は現役から退いて、後進に道を開いている。

一見すると柔和であるが、仕事をさすと根氣が強いのは、学窓を巣出つてから、近衛師團麻布三連隊で鍛えあげたからで、陸軍少尉の肩書がある。父は大阪財閥の巨頭平賀敏で、寶塚少女歌劇を創立した小林一三が阪急電鉄副社長時代に初代社長であつたし、大和証券の前身藤本ビルブローカKK社長や、三井銀行重役など數十の會社の重役であつた。前社會黨委員長鈴木茂三郎も大正九年大学卒業と同時に、平賀敏の紹介で東日に入社、薄茂人（スキモンド）の筆名で有名になつた。怖らく今日實業界の巨頭の多くが、大なり小なり平賀敏に御世話になり緣故があつただろう。

父が鐘紡重役であつた關係で、武藤山治が南拓を創立するや多くの子供等の中から、一人ぐらい南米に送つてもいいだろうと、父の奬めで農林省を辭めて渡伯した。だから最初から永住の目的だつたので、五反田組が解散しても歸國しなかつた。操志強靱、節操潔癖な点、著者も感服している。トメアスー植民地を訪づれる名士の大かたが、一度は彼の宅に訪づれ何かと北伯事情をきいた。それほど彼は北伯で有名である。明治三十五年十二月十八日寅年生。

トメアスー植民地トメアスー港

澤田哲氏

原籍　熊本縣菊地郡合志村幾久富
渡伯　昭和五年二月　まにら丸

SATOSHI SAWADA
C. P. 39 — Cooperado, N.o 38
Belem, — Pará

誰れとでも對談するとき物軟らかく、相手に好感を與える處は、印象深く、これが彼の外交手腕にどれだけ助けとなるか解らない。一九四六年アカラ農民同志會が十七名の同志で結成され、ウニベルサル號が完成いよいよ州政府に、生産物の自由販賣權獲得の猛運動を起した時に、同志高橋勝正と共に、外交に當つたが時に満二十七才、この時から今日まで満十九カ年産業組合の渉外部長となり、寢食を忘れて外交々渉にばかり盡した。産組大改組で正式に渉外理事となり、大いに活躍、特に第二トメアスー植民地建設のときは約一カ年に亙つて、州政府に裏面工作をつづけ、十八人の名儀で三万八百ヘクタールの地權証書をトメアスー郡長ネイ・ブラジルから受取つたときは、感慨無量であつた。自己一個人の問題だつたら、もうとつくに放棄していただろう。

一九六二年トメアスー郡長の選擧があつた。弟脩が労働黨から立候補したが、一般人は彼の立候補を希つていた。然し政治に余り關心がなかつたので黨よりの懇願を拒み、遂に立候補しなかつた。やはり彼は政治に生きるより貿易商業界で生きる人間であると思う。そうした方が、また鵬翼を伸ばすのにも自由奔放だし、政治と違つて相手えの氣苦労もしないし、反つてよかつた。兎に角、アマゾン邦人の活躍史は、軈てブラジル生れの二世の手に移るが、それまでの初期邦人の對伯人交渉史では、彼の功績が一番光彩を放つているようだ。なんと云つても幼稚な邦人團体をここまでもつてきたその交渉振りは鮮であつた。後世の史家にも、その点、多くの功績を認められるであろう。

父彌太郎、母つぬ兩親の二男に生れた。渡伯したのは十一才の少年期であつた。母は一九三七年五月五日、父は同年十月二十七日共に黒水病で斃れた。父が死んだのが四十七才だから、彼もその父の年齡に達している譯である。兩親とも若死であつた。父の死後、二十才になる兄毅を中心に、少年少女群の一團（照夫・能子・富子・孝夫）等が必死になつて開拓戰と斗つた多くの入植者が米作で儲けた金を旅費にして、南伯地方へ移つたが、彼等は少年少女が多くそれが出來なかつた。それでも彼は父が逝去するまで、ベレーン市公認小学校を卒業し、上級学校まで通学していたから、伯語に精通し、後年これが役にたつた。終戰後トメアスー産業組合が、ピメンタ・ブームの順風にのつて、物凄く發展した際に、早くも戸田子郎専務のよき相談相手となり、全伯に胡椒販賣市場を擴張した。續いて阿部昇専務になつても、輸出貿易まで發展させたので、渉外を一手に引受けた。何代か理事長・專務理事は變つても、怖らく渉外理事の職は當分彼につきまとつているだろう。組合事務の他に、トメアスー港に胡椒園を經營一万本栽培している。家庭は内助の功多い柴田寛二女藤江夫人との間に、長男幸を交えて三人暮しである。大正八年九月十二日未年生。

去した。
故人の農民道は、邦人の悪弊たる賭博農でなかつた。天候を相手にする農のこととて、單一農をさけた。北伯でピメンタ一式に進む者が多いが、南伯でもコーヒーとか、ハッカとか、棉とか、邦人は單一農に傾き易い。そして自己經濟能力以上に、事業を擴張し、金融は出來る範圍手一ぱいにしているがこの冒險を愼しんでいた。ピメンタの黄金時代にも故人はシザール畠百ヘクタールを耕作、シザール纖維工場を經營、またマンジョカ製粉工場や精米工場も經營していた。故人は決して白米を他より購入しなかつた。「百姓が米を買うて食うのはいけない」と戒めていた。

故加藤友治氏（後列右端）健在當時の家族

故人は多くの名譽職に就いたが、自分の能力で出來ない名譽職には就かなかつた。一九三七年野菜組合が産業組合になつた時の書務理事、一九三九年に理事長、一九四七年から營業顧問となつたが、それ以外は拒絶した。親友故斉藤円治が、サンパウロ市に移轉し、聖市の悪ブローカーに担がれて協和銀行頭取になつた時も、葡語に精通しない斉藤円治をいましめ、愼重に考えるよう忠告したが、この忠告が故人の本心であつた。身分相應以上の野心を持たぬ性格であつた。
十年前、まだ健在だつた故人の宅に泊つて、一夜を語り明した事があつた。毎日朝から日本のラジオはもとより、聖市の邦語ラジオに耳を傾け、暇があると日本の書籍・雜誌に眼を通していた。そのため政治・經濟・國際・外交から、邦人コロニヤの動情等、常識が發達し、そしてよく話しかけた。著者は夜半旅のつかれで眠たかつたが、故人は決して眠らせず、著者の訪問を好機來れりとばかり、次々に質問するのには僻易した。そして夜が知ら〳〵明ける頃に寢についた記憶があるが、それ程に社會一般の知識を吸收することに熱心であつた。
故人の最大の功績勳一等は、ピメンタ栽培の發見であつた。南拓社員臼井牧之助が、シンガポールから持參した胡椒苗木二十本直營農場に移植され、そのうち二本が發芽した。一九三五年直營農場閉鎖の時に彼は職員尾花福太郎から苗木を讓りうけ齊藤円治と共に、わが兒を可愛いがるように育てた。その以前故人は自家製造日本酒を直營農場に賣りに往つた時、臼井持參の胡椒苗の成育振りをみて、本來種と違う事を痛感していたので、直營農場閉鎖後、苗木を棄てるのが物体なくて讓りうけた

トメアスー植民地アグア・ブランカ區

加藤ラウロ邦藏氏

原籍　山形縣寒河江市内三五八
渡伯　昭和四年七月　もんてびでお丸

加藤万里夫氏

原籍　山形縣寒河江市内三五八

最上次郎氏

原籍　山形縣　渡伯　昭和三十年

齊藤勇二氏

原籍　秋田縣　渡伯　昭和二十九年

KUIZO KATO
C. P. 39 — Cooperado N.o 1
Belem, — Pará

加藤ラウロ邦藏を語らんとすれば、まづ故嚴父加藤友治の事に最初筆を染めねばなるまい。一九五八年（昭和三十三年）日本移民渡伯満五十年祭典に際し、ブラジル移民事業に盡した人々で、物故した者だけを六十三人選んで一冊の單行本を編集、在伯邦人有志は勿論、日本全國各学校及び圖書館に配布したことがある。その六十三人の中には大使級で田村七太、石井射太郎、君塚愼、實業家で鐘紡社長武藤山治、大阪商船社長兼通相村田省藏、三菱財閥代表岩崎久彌、川崎造船所社長兼文相平生釟三郎、大阪毎日新聞創立社長本山彥一、日伯辭典の著者大武和三郎、海外興業株式會社社長井上雅二、在伯邦人からは平野植民地創立者平野運平、上塚植民地創立者上塚周平、コチア產業組合創立者下元健吉など、社會に貢獻した人々ばかりであるが、この物故者の中に、北伯アマゾンを代表して前田光世コンデ・コマ六段、崎山比佐衛と共に彼も一枚加わつている。この物故者傳は「日系コロニヤの礎石として忘れ得ぬ人々」と云う添書がしてあるが、加藤友治が、如何にアマゾン產業開發に盡したかが、この一書によつて解るだろう。彼は肩書こそ前記の高名人ほどでないが、產業に盡した功績は、むしろそれ等高名人以上であつたと著者は思う。

故人は渡伯前、皿谷太郎兵衛商店（米・肥料・雜穀問屋）や酒造會社に店員として勤務していた。南拓アカラ植民地が開發されたので、第一回の草分開拓者として入植したが、日本出發の門出に、國井門三郎老から「身土不二」の揮毫辭に貰つた。その教訓の四字を忘れず、不況時代脱耕者増出の時でも「まあ食うだけあれば、その内なんとかなるよ」と悟りを開き、トメアスー植民地に踏みとどまり、耕地を死守した。廿五周年記念の時に第一回入植者で、この死守組で褒彰されたのは加藤友治木村總一郎、伊藤勇、山田義一の四人で、その内二人は既に逝

円満福徳な加藤邦蔵氏

トメアスー植民地ボア・ビスタ區

横山　猛氏

TAKESHI YOKOYAMA
C. P. 39 — Cooperado N.o 68
Belem, — Pará

原籍　北海道帯廣市
渡伯　昭和九年五月　ありぞな丸

實に眞面目な拓人である。そう云えば渡伯以來、今日まで働くことが生活そのものであつたから社會の裏面——即ち罪悪の巷を知らない。汚れていない彼の心は純白な雪であり、幽境に湧く岩清水の如く無垢である。一つ違いの實兄を、本當に親代りとして尊敬し、横山家再興のため献身的に盡した点は、賞してかなりである。現在九千本のピーメンタ園を所有し二十余トンの収穫をあげ、先輩に伍して少しも遜色のない經濟生活を營み、静枝夫人（トメアスーアランニャ區大沼春雄二女）との間に、茂・照男・三郎・敏郎・多津子の四男一女に惠まれ、幸福な生活に浸つているから、少年期から青年期にかけての、辛酸苦労の仕甲斐があつた。

自動車やトラットールの前で

渡伯三年目に母が悪性マラリヤ病で死んだ時は、満十一才で子供心にも悲しかつた。日本での生活は、おいしい物をたべて幸福な生活であつたが、アカラ植民地えきてからは、一回も樂しい日はなかつた。小学校え行くのさえつまらなかつた。其處へ母の死である。母の死後實兄がベレーン市で家庭奉公したので、それを頼つて父や姉妹と共に、ベレーン市に出て、野菜作りをしながら、糊口を凌いだ。軈て父が病死した時は、母の死んだ時以上に悲しかつた。當時十七才であつた彼は、今後どうして暮してゆかなければならないかと案じた。毎日心配しているうちに、二ヵ月後にベレーン市で樞軸國民住宅焼打事件がおきて命からがらトメアスー植民地に難をさけた。そこで州政府監督の軟禁生活が始まり、終戦まで辛捧したが、この三ヵ年の百姓生活で、すつかりトメアスー植民地に永住と決心がついたのがよかつた。ここで一生の方針を兄と相談し、ピメンタを栽培した。

多くの家族は、両親が健在であり、また片親が缺けても、父が母が健在であつたりして、一家團らんし實になごやかであつたが、自分達少年群を慰さめてくれる両親がなかつたのが、一番淋しかつた。カトリック教のお盆である十一月一日には、誰れよりも先に、母の墓前にひざまづき、地下に眠る母の靈を慰めた。長姉禮子（星野修夫人）が、母代りとなつて激励してくれ、台所一切を賄つてくれたので非常に助かつた。戦後にアマゾンを視察した評論家大宅壯一が「綠の地獄」と言つたが、戦前はもつと悲惨であつた。トメアスーで病死した者が二百人も續出した位であつた。その地獄が、胡椒栽培で急激に發展し、三千ヘグタルばかりの大集團地は「綠の極樂」となつた。一年に數千万円の収入のある者もおり、どの家庭も自動車を所有、豪荘お住宅に住み、飲み物も英國製のスコットや白馬を冷蔵庫から傾ける時代になつた。九割九分までが、子女を大学に通学させる教育万能の時代となり、また二世も、一世の苦労を知らず明朗發剌として勉学に勵むようになつた。姉静江（星野脩夫人）兄利得右ェ門、妹敏江（永野吉春夫人）四人とも晩年は幸福な生活を送ることが出來た。大正十四年九月十九日丑年生。

最上次郎氏と和子夫人

この二本の苗木が土台になり、一九四二・三年頃一キロ三十＄一九四六年には八五＄となつた。一九四六年當時故人の栽培本數は八百本（年産五百キロ）であつたが、植民地の發展のため齊藤円治と共に、どし〳〵全植民に苗を配布して栽培を奬勵した。そのお蔭で、一九五三年百五十＄、一九五四年二百二十＄まで暴騰し「黒ダイヤ」に限ると云うことになり、今日のトメアスー植民地の黄金時代を出現するに至つた。往年の「緑の地獄」が「生きた極樂」に急變した譯である。

ピメンタを持參した臼井牧之助の功績はもとよりだが、それを栽培した故人の功績は大きい。その功績のお蔭で物故先驅傳に掲載されたのである。故人の死後、長男ラウロ邦藏はよく父の遺訓を護つて今日に至つた。産業組合理事として自動車工場部支配をまかされたが、その任にあらずとして辭任した。胡椒一点張りの農道をやめ、多角農に生き、毎年籾五千俵内外の收穫をあげ、この方で一家の生計は充分賄える譯だ。戰後流行しはじめた麻雀にも熱中せず、義弟最上次郎、齊藤勇二などのよく相談相手となり、植民地の發展に盡している。

昌子夫人は故木村總一郎長女で、夫婦の間に惠子、邦治、俊男、良平の三男一女に恵まれている。弟万里夫は伯國女性エウニゼーを娶り、一粒種マウロが生れ、妹禮子は横山利得右エ門に嫁つぎ、妹和子（ベレン師範卒）は最上次郎（一九三二年十一月九日生）と結婚、長女サンドラ出生、妹春子はベレン藥大在学中、妹潤子は齊藤勇二（一九三三年十二月五日生）と結婚妹のり子はトメアスー中学校教諭兼監事、弟アデマールはベレーン法科大学在学中、末弟ジョージはベレーン中学に通学している。母堂マサエは子供の教育のためベレーン市に在住している。加藤家はかくしてアマゾンで益々發展した。昭和元年十一月二日寅年生。

斉藤勇二氏と潤子夫人

策を講ぜしめた。獨立開拓資金少額な者はすぐにも生活に困つた。彼等はアグア・ブランカ病院裏に移り、米作に邁進した。

恰度この一九三六年（昭和十一年）頃から惡性マラリヤ病が流行し、その猛威は烈しく、遂に黒水病まで襲つてきた。熱帶病特有の病氣で、原始林の不健康地帶におこる病氣であるが、このため全植民者の殆んどが羅病した。そのため母ちよは、渡伯三年目に遂に病魔のため逝去した。異郷の空で幼兒數人を殘して黄泉の客になつた母の心情は如何ばかりであつたろう。當時長女静江十五才、長男の彼が十二才、二男猛十一才、二女敏枝九才で、無責任な會社のため、生活は赤貧洗うが如きであつた。母の死後、彼は南拓重役コンデ・コマ前田光世宅で家庭奉公をしながら、夜学に通い、中学校の課程を身につけた。父は母なき跡、この悪魔のような植民地にいたくなく、ベレーン市に出て野菜栽培に轉じたが、悶々の情を慰めるものなく、連日の深酒は重なるばかり、遂に胃腸を患い、一九四二年六月十五日、太平洋戰爭中に滿五十才で母の後を追つた。時に彼は滿十八才であつた。

父の死後僅かに二ヵ月目に、ベレーン沖でドイツ潜水艦が伯國商船隊を撃沈させたので、ブラジル國民は激昂、樞軸國民の住宅燒打事件が起き、彼等も着のみ着のままで、トメアスー植民地に避をさけた。トメアスー植民地に戻つてから、秋田縣人加藤三郎の温情で、その隣地を借り、不慣な農業に三ヵ年間精魂を打込んだ。軈て終戰を迎え、自由の身となつたが、子供ばかりの生活は少しも向上せず、苦難の生活は續いた。幸いその頃からピメンタを栽培したので、經濟的にもよくなり一九四八年加藤友治長女禮子を娶り、一家は明るさを益した。續いて姉静江もトメアスー産業組合理事星野修と結婚、順風に帆をあげて來た經濟的飛躍によつて、弟猛も大沼春雄二女静江を娶り、別に耕地を建設して獨立し、最後に末妹敏枝も永野吉春に嫁づいだ。

一九五六年六千本の胡椒を完植、同年十五トンの收穫をあげ、邦貨一千五百万円の收穫をあげ、二階建の豪荘な住宅を新築した。そして第二耕地を建設、現在一万本の胡椒を栽培している長女やすえ・二女みち子はベレーン市中学校に在学、長男健治二男オタビオ、三女リージアは小学校に通学している。堅忍不抜の精神をもつて、總ゆる逆境を克服し、今日に至つた彼の精神力を著者は讃えたい。兩親は不幸挫折したが、伯國で横山家を再興させ、兩親の遺志に酬いたから、彼は本望であろう。大正十三年二月十三日子年生。

（上）渡伯當時船中で（中列右より四人目故父好見）
（下）前列右母ちよ、左祖母江川さと

トメアスー植民地アグア・ブランカ區

横山利得右門氏

原籍　北海道帯廣市
渡伯　昭和九年五月ありぞな丸

RYU-EMON YOKOYAMA
C. P. 39 — Cooperado N.o 3
Belem, — Pará

「去る者日々に疎とし」と諺にあるが、全くもつて肉親でも一寸離れると文通も斷えがちである。特に日本と伯國とは地球の裏表で一番遠隔の地であるから、日本の親戚と在伯邦人との文通が斷えるのは當然で、毎月總領事館は日本からの尋人を、邦字新聞に廣告している。一家族健康でも、特に貧乏していると通信するのが辱がしく、それが五年なり十年なりして、到々三・四十年たつても一回の文通さえしない邦人家族の多いのには、著者も驚かさるを得ない。

處が本編の横山家は、母親が早逝し、十五才の長女靜江（星野修夫人）を頭に、幼児ばかり残り、軈て六年後には父親も逝去するの悲惨な境遇にありながら、日本との文通は斷えなかつた。特に祖母江川さと（母ちよの母）は、渡伯直後三十九才の青春で、異郷の空で、あえなく散つた娘の心情に想をはせ、その孫達にいつも激勵の手紙を寄越していた。その祖母江川さとの愛情のこまやかさに、愛孫達も泣かされ、母堂の靈前にひざまづき、横山家をブラジルで再興さすことを誓つた。その親愛なる祖母江川さとが、一九六三年十二月五日、八十九才の高齢で、眠るが如く昇天した。その葬儀は一族數百人が參列、盛大を極め　その寫眞が・彼のもとに送つてきた。十二才で日本を出發した彼の少年期の想出は時々薄らいでゆくが、こうした肉親の手紙や寫眞を見るにつけ、氣分が新らたになり、日本の追憶にふけるのであつた。そして「一度訪日してみたい」と著者にも洩らした。次頁の寫眞は、逝去した祖母江川さとと、實母故ちよの訣別の記念寫眞で、昭和九年渡伯寸前のものである。祖母もまだ五十九才、母ちよは三十代の若さであつた。そして父も渡伯當時は若々しかつた。その父も開拓線で病死した。今は亡き故人の靈の安らかならん事を祈るのみである。

故實父好見は日本で材木商であつた。事業に失敗したので、其の更生の道を伯國にもとめた。南米拓殖株式會社は日本一の鐘紡會社の後援で創立されたから、その經營するアカラ植民地は立派な植民地だと想像し、昭和九年五月ありぞな丸で渡伯、第十六回入植者として、アカラ植民地ボア・ビスタ直營農場に入植した。處がその頃は既に會社の主栽培たるカカオが不適地なる事が解り、翌年は遂にカカオ直營農場を閉鎖し、會社は事業を縮少、南拓社長福原八郎も辭職し歸國した。そして會社は入植者に對し、自給自足の對

右　やすえ、みちえの令孃達
左　小学生の三児と夫妻

TSUYOSHI HANAWA
C. P. 39 — Cooperado N.o 254
Belem, — Pará

トメアスー植民地ボア・ビスタ區

花輪　克氏

原籍　山梨縣中巨摩郡豊村字十五所
渡伯　昭和二十八年九月　あふりか丸

由來山梨縣は隣縣長野や靜岡に比較すると、海外移住熱が少なかつた。そのため花輪一家が、戰後始めて再開された大アマゾン移住に、卒先して志望、その横濱出帆の門出に際し、村長は四万円の餞別を贈つた。しかもそれから後年、應神村長が訪伯し、具に彼の耕地を視察して、故里の新聞紙上にのせたので、彼等は花輪家の名誉のためにも、異郷の空で敗惨の姿をさらしたくないと決心し、今日まで健斗してきた。幸い今日はピメンタ二千本を栽培し、農場は完成、妻の弟花輪節男及び一（はじめ）も協力してくれた。彼は別動隊として、本職の指物師として多くの仕事を引受け、多才多能な處を發揮しているから、その拓人生活は必ずや美しい實を結ぶに至ること必然であると思う。

追懐すれば既に十年の昔しになる。評論家大宅壮一がマナカプル植民地を訪づれて「綠の地獄」と評し名著「中南米の裏街道を行く」に書いたことがあつた。著者もその直後アマゾン全流域を旅行し、マナカプル植民地を訪づれたが、その時に彼の父虎之助と面接、辻一家で深夜まで快談した。原始林の伐採當初で蚊群來襲、蚊帖の中で夕食をとつたほど、植民地は創業當時であつた。翌日彼の父と共にクワテロン區から、マリア・フリーアまで數キロの間を同行し、彼の將來への開拓意慾をきいた。既に六十才を越えているが、その開拓精神は旺盛であつた著者に對し記念にと著名帳を差出された。辭退したがきかれず日本からの名士の名が連ねられてあつたのに驚き、大宅壮一のあとにサインした。一句開拓の教訓をと云われたが、一介の文筆放浪人が、名句の出るはずがなく、著名だけにした。あの懐かしい想出の父虎之助は、開拓初期の生活の無理がたたり、傷口からバイキンが入り、六十余才でマナカプル植民地で逝去した。大きな夢をもつていたが、實に惜別の感が深い。

克夫婦はマナカプル植民地アグア・フリーア區に一カ年半在住し、軈てトメアスー植民地に移転、岡部孝耕地一年その實弟勉耕地三年勤務の後に独立して耕地經營に邁進した。父死亡で奥地生活に、希望を失つた母かめよや、弟妹が彼を頼つてきたそして父の死で落膽した母も現地で空しく昇天した。殘つた兄弟は、ここで協力一致、立派な耕地建設へと努力した。幸い今日は堂々たる耕地を完成したし、これからは節男・一等の耕地建設に移る時代となつた。末妹鶴子も成人し、アグア・ブランカ區仲丸忠男（二世）と結婚し、長男朗、二男信幸の二兒に恵まれている。鶴子は著者が十年前蚊帳の中で座談會を催した事を記憶していた少女であつたが、二兒の母親となつた。彼も愛妻美行（みゆき）の間に長男正人、長女信美、二女悅美の三兒に恵まれている。構成家族で渡伯した丸茂安彦は歸國した。昭和二年三月十八日卯年生。

トメアスー植民地ボア・ビスタ區

芝原茂美氏

原籍　徳島縣麻植郡木屋平村川井
渡伯　昭和三十年五月　あふりか丸

TOSHIMI SHIBAHARA
C. P. 39 — Cooperado N.o 199
Belem, — Pará

冒険を慎み、堅實な拓人生活を進む人で、彼の百姓道は少しの危険性がない。彼の農場は、トメアスー植民地の幹線本道から、五、六粁も山間に入りこんだ處で、一寸不便を感ずる。洋裁に通う長女佳代子や、中学生二女安由子、小学生三女めぐみ・四女マリーなどが通学で不便だろうと思つたが、彼は交通至便でも痩地では永住が出來ないと思うた。また獨立早々無資本だつたので、旧耕主横山利得右エ門に物質的な援助をうけねばならなかつたのも原因でブレウ區の新興地帶に移轉するのをさけ、現地に農場を建設した。徳島縣海外協會員が訪伯し、彼の堅實な生活を見て、歸朝の後に徳島新聞に發表したが、彼は篤農家と評される價値のある拓人だと云える。

（左）は家族一同、（右）長男ジャニオを抱く良子夫人

人間的には情味横溢、實に親切で義理堅い。禮節を知り、必ず恩をかえす節操豊かな阿波人である。日支事變が長びき、太平洋戰爭にまで擴大されるや、中支戰線から南太平洋に轉戰、ラバウル基地に一年、最後に死の行軍と稱されたビルマ戰線に廻り、インパール作戰に參加、激戰・豪雨・飢餓・敗退と死線の連續で、九死に一生を得て終戰となつた。だから渡伯後どんな苦境にたつても、インパール作戰の苦労を想えば、どんな辛抱も出來ると思つて、今日まで健斗してきた。

日本に復員してから、山林労働に勤務した。五年六ヵ月の戰爭の疲れを休めるひまもなく、生活と斗かわなければならなかつた。山林労働者と云つても、その日〳〵を生活するのみで將來の希望は一つもなかつた。恰度そのころアマゾン移民の話をきき一度はビルマで死んだ我身だと決心、海外移住を第二の人生と心得、遂に實弟富男を連家族となし、日本生れの三兒を連れて渡伯した。配耕地はトメアスー植民地横山利得右エ門耕地この耕主は人情深く、また禮子夫人が實に親切な女性だつたので、彼は獻身的に盡した。多くの戰後移民が不平だら〳〵で退耕するのに、彼は義理人情をわきまえ、實に三年六ヵ月も辛棒した。耕主横山もそのお禮として、旧ブラジル人耕地を買收し彼に開拓資金の援助を與えた。軈てここに四千本の胡椒を栽培現在は收穫期となり、彼の經濟的生活は豊となり、一九六三年十一月には、それまで協力してくれた實弟富男も、ブレウ三區の原始林を購入して独立させた。

由來徳島縣は四國で最も海外發展の淋しい縣である。隣りの香川・愛媛・高知は盛大で、しかも巨星が多いが、徳島縣人は豪商河野忠重（神須村）工業家岸田好明（藍園村）豪商野上豊（市場町）大農場主丸木治二（小松島）の四人位で、在伯縣人も三百家族位で小數である。この際大いに活躍し、北伯で名を擧げてもらいたい。糟糠の良子夫人の協力偉大、五女ローザ、長男ジャニオ悠之助が出生した。大正九年四月一日申年生。

トメアスー植民地ボア・ビスタ區

TAKESHI TAKEDA
C. P. 39 — Cooperado N.o 6
Belem, — Pará

武田武志氏

原籍　山形縣西村山郡西川町楡原
渡伯　昭和八年九月　あらびあ丸

鈴木信次郎氏

原籍　北海道日高郡浦河町
渡伯　昭和八年九月　あらびあ丸

誰れからでも好感をいだかれる八面冷朧の拓人である。現職トメアスー産業組合常務理事は適役であろう。理事長押切他男専務理事阿部昇、そして常務武田武志が三人とも、山形縣人でそれにトメアスー植民地地區連合會長大沼春雄が山形出身で、まるで山形内閣みたようである。いまの處後任適役がないからこの内閣は當分續くであろう。

彼は實に壮事に忠實であるそして影・日陽がなく實に明朗濶達である。父清吉は、一九三六年七月六日ー四十二才の活動盛りで逝去したが、あの當時十五才で父の跡をついだ長男彼が既に父の年輩以上に年をとつた。星霜の迅いのは一瞬の夢である。追憶するとアカラ植民地に入植した當時は悲惨の一語に盡きた。十二才で渡伯しカカオ栽培直營農場二カ年は丸で奴隷であつた。辛酸目も當てられずベレーン市に移轉、野菜栽培八カ年、父死亡の後に幼児ばかりで生活力がなく、弊履粗食に辛抱した。戰争勃發でトメアスー植民地に移つた。ここで和氣の寮に立籠り、母藤野は炊事係として奉仕した。アカラ農民同植志會の一員として蹶起、情熱をもやして斗つた。昭和九年から、昭和二十年の終戰まで、十一年間は實に無我夢中で働らいた期間であつた。

軈て青年となり一九五三年には産業組合會計係、一九五五年理事に推され、一九五七年から常務理事に就任、一九六四年の改選後も現職に留任して、公人として、トメアスー植民地に重きをなしている。苦労の多かつた弟虎男（ミツ夫人は菊地藤吉二女）弟彦三郎（洋子夫人は檜別登良一三女）弟平正（邦子夫人は菅野彌七二女）末妹町子（柳橋武夫人）も皆一家を構え、晩年は幸福な家庭に浴している。彼も京子夫人（鈴木信次郎三女）との間に長女京子・長男幸一・二女きよみ・三女まり・二男マリオ・四女ダッセの子寶に恵まれている。

岳父鈴木信次郎は明治二十二年五月十五日生れだから、當年七十六才の高齢である。アマゾン興業株式會社の株主となり、第一回入植者として、マウエス植民地に入植した。渡伯前は北海道庁植民係をやつたり、台灣で活躍したり、測量、製圖に造詣深く、そのためトメアスー植民地の精密産業地圖の作製はみな彼の手になつている。マウエス植民地が不幸實らず、カスタニヤ驛南米企業KKの土地で活躍したりして、晩年は女婿武田家で世話になつている。長男信也はサンタ・イザベル市郊外で活躍している。武田武志氏は大正十二年十二月八日亥年生。

OSAMU HOSHINO
C. P. 39 — Cooperado N.o 7
Belem, — Pará

トメアスー植民地ボア・ビスタ區

星野修氏

原籍　香川縣高松市

渡伯　昭和三年十一月　河内丸

東京駒場農大出身の平賀錬吉と共に、北伯アマゾン地方に於ける最高インテリで、教養があるため、誇大妄想的ホラを吹かない温厚篤實な紳士である。しかも他人を押しのけてまで出娑婆らず、謙嚴居士である。コンデ・コマ柔道六段前田光世逝きあと、アマゾンに於ける最古參拓人でトメアスー植民地創設當時の事情を實際に識つているのは、ベレーン總領事館勤務の生島重一と共に双壁で現存せるアマソンに於ける生字引の一人である。

農業に經驗のない彼が遂に農場主になつたのも面白い。一九四一年十二月七日太平洋戰爭勃發、すぐスパイの嫌疑で二カ月中央警察に監禁されたが、疑が晴れて出獄、そして翌年八月の樞軸の國民住宅の焼打事件で、トメアスー植民地に禁軟された。ここで「和氣の寮」に立籠り、他の獨身社員と共に天下國家を論じ、悠々たる生活に浸つた。一九四五年終戰、この年に横山利得右エ門姉静江と結婚、ピメンタ栽培に本腰を入れて農場經營に着し、今年で滿二十年目である。

アマゾンに移住した動機は他の移民とコースが違つていた。彼は判事星野龜太郎の三男に生れ、日大附属中学から、外語大葡語科を卒業した頃、同縣人先輩の農学士芦澤安平から、アマゾン地方の葡文原書の飜譯をたのまれた。芦澤は武藤山治の命でアマゾン調査に行く寸前であつた。それが動機で芦澤ど實懇になり、南拓が一九二八年に創立されるや南拓に入社、アカラ調査團に参加　奥正助や服部廉太郎等と草分で入り込み、トメアスー波止場やコロニヤの撰定など、彼の手でしたものだ。また南拓だけでなく、奥アマゾン開拓にも先陣をたまわり、粟津・山西コンセソン第一回調査團にも参加、葡語の解る處から一九二九年一月内藤克俊と共にベンデス州知事に面談して、既得權の二カ年延長の交渉をまとめた。南拓でいよ〳〵入植者が開始されるや、物品販賣部主任、労働者係主任、製材所主任、運搬部主任などをやり、一九三五年直營農場閉鎖後は貿易商事部長であつた。終戰後は農についたが、一九四九年トメアスー産業組合改革で理事に推選され、ニツポニカ商事株式會社の創立には專務取締役に就いた。二十代の若い頃から責任のある職席にばかり就いてきたが、現在は産組の理事のみで、商事會社專務も戸田子郎に席を譲つた。

貞節の誉たかい静江夫人との間に、大郎（ベレーン醫大豫定）二郎（中学）友子（ベレーン師範）恵美子（中学）進・農夫雄・良雄（共に小学）みよ（幼女）の五男三女の子福者である晩婚であつたので、皆高等教育を授けることが出來るから幸福である。明治三十九年十一月十八日午年生。

つた。その不健康な躰を押して文字通り不眠不休で看護を盡した。一九三五・六年（昭和十一年）頃で、彼が三十才前後、人生最も情熱に傾き、惜みなく俠義を捧げる年輩であつた。この年に父留吉も六十八才で黃泉の客となつた。しかも彼自身、三女早苗、三男耕、五男宏の三兒を、マラリヤ惡性病のため忽然として喪つた。我身の悲しみを体驗した彼は、それ以上他人の悲境に同情し、滅死奉公の精神に滿ちた譯であつた。

この病院事務主任時代位、彼の人生に最も印象深いものはなくそしてアマゾン初期開拓時代の困難さを痛感したことはなかつた。彼と妹花子の溫い手に看護され、幸い病氣が治り、現在健在でいる人が幾人おるだろう。誠に幸である。またそれと反對に運命の奔浪によつて、不幸開拓戰線の中途で墓石の下に眠つた者が幾人居るだろうか彼は毎年十一月一日お盆の來る度に、地下に眠るそれ等の人々の冥福を祈つている。

一家睦まじく玄關で

終戰直後一九四七年トメアスー産業組合の大改革で彼は理事に推選され、購賣部主任として十余年間精勤した。この時も彼は私心を棄てて奉仕した。殆んど毎日ほどが時間外勤務で夜遲くまで購買品の整理をしている直摯な姿を、著者も數回みたことがある安月給で、組合の發展のため盡した譯である。大体西尾家は明治維新前祖父の代に京都に住み、勤王黨で、純然たる武家であつた。滅死奉公の精神を持つ事を誇りにしているので、血脈の中に秋水三尺靈魂が流れているようだ。決して惡い事をしないと云う誇りをもつている。明治維新の創業で、東京に移轉、父の代になつて、北海道に移住した。彼は父留吉、母みわ兩親の長男に生れた。恰度日露戰爭で日本が大勝利を擧げた頃であつた

前記の通り妹花子の奬めで渡伯、中央病院に勤務、一九四二年二月の伯國交斷絶後に、彼も病院を辭職し、一介の農人となり、現地の耕地開拓に邁進し、一万本以上の胡椒を栽培し、植民地隨一を誇る住宅（五百平方米）二階家を建て、安住の生活に浴している。パウリスタ新聞代表河野寛が、來植すると必ず彼の宅が塒であるが、それと同樣著者も必ずお世話になつている。あい夫人は虚心なく、女性に珍らしい桯直情經行で、正邪に潔癖、主人の寡默愼重と比較して、能辯明朗、社交上手である

子女は前記三兒逝去の他に、三男三女が健在である。長男一夫は八州子夫人の間に孫マリオ、ジョージの二兒がいたが、不幸マリオは他界した。二男俊治は、兄と共に耕地管理に協力し長女眞弓はベレーン市家政学校卒業のインテリ女性である。二女万里子は栃木縣人茂古沼專一の甥と結婚し、第二植民地で獨立、悅郎・利彥等はトメアスー中学校に在学している。姉豊子は加藤三郎と結婚して名夫人の譽たかかつたが、先年物故した倘妹花子は南米銀行勤務の荒木衛門と結婚しているし、弟茂は聖市に在住している。明治三十八年八月十日巳年生。

トメアスー植民地ボア・ビスタ區

西尾勝利氏

原籍　北海道帯廣市西二條
渡伯　昭和九年月　あふりか丸

KATSUTOSHI NISHIO
C. P. 39 — Cooperado N.o 10
Belem, — Pará

彼の應接間の壁に、墨痕鮮かに一枚の色紙が掲げてある。名文は

西尾勝利兄

一枚の最後に残つたこの衣、神のためにぞ猶脱がんとぞ思う

一九五五年　賀川豊彦

とある。成程民衆の斗士賀川豊彦が、アマゾンを訪づれた時に彼に贈つた記念品だが、私慾私利を棄てた宗教家賀川豊彦らしい人生教訓で、この心境は彼西尾勝利の開拓道にもよく當はまつているようだ。

賀川豊彦は東京明治学院宗教科を卒業後、北米に遊学、歸朝すると丸裸となつて、神戸葺合の貧民屈に飛込み、民衆の味方となり、貧民救濟に尽し、大正六年川崎造船所の大爭議を指導し、二十七才で名著「死線を越えて」を出版して一躍名聲をあげた。この頃の賀川は、全精神を打込んで民衆のために尽し、全く野心のない宗教家であつた。本編の拓人も、かつて入植間もなくアグア・ブランカ病院事務主任として勤務した事があつたが、その頃トメアスー植民地はマラリヤ病猖獗を極め、軈て悪性黒水病まで發生した。世人恐怖の黒水病は、發熱後二・三日内に死亡する病氣で、血の小便をもよおすに至る病状を呈した。本書の總論トメアスー植民地創設期の項に、掲げてある死亡者名簿をみられると解るように、罹病者は全家族に及び、中央病院に收容しきれず橋爪會館を仮病室として治療に當つたほどだつた。そして二、三日おきに葬式が出た。重病患者は、その葬式をみて自からの死期の迫ることを豫感し、この精神的落膽が尚一層病状を悪化せしめた。この時である。彼はこの病院事務主任として勤務していた。と云う縁故は、妹花子が看護婦として勤務していたからである。妹花子は日本で正式免状をもつた看護婦で、和田馨博士夫妻が渡伯した際い、それに同伴し、再歸朝の時に彼女は北海道に還つて伯國の将來性ある處を話し、伯國移住を薦めたので、一家はあげて渡伯したのであつた。そうした關係で花子は中央病院に勤務し、奥村博士、菊地醫師と共に風土病の對策に盡していたが、この病魔の蔓延には流石に醫者連中も手の施しようがなかつた。事務主任の彼も看護卒みたようで、この時ぐらい、私心を忘れて、全霊を傾け・看護に盡した事はなかつた。勿論自身も軽いマラリヤ病に罹つていたが、幸に豫防していたので悪化しなかつたのが幸運であ

豪莊な住宅遠望

トメアスー植民地ボア・ビスタ區

日高二三氏

原籍　廣島縣山縣郡壬生町
渡伯　昭和九年六月　あらびあ丸

NIZO HIDAKA
C. P. 39 — Cooperado N.o 249
Belem — E. de Pará

實に朗らかな人物で、三十年間の開拓生活を苦勞してきた割合に、話す相手をそらさず、社交上手である實兄薫實は昭和十一年最初からアカラ植民地に入植したが、彼は寺田立次の構成家族の一員となり、はるせ夫人と新婚で南伯聖州ノロエステ線リンス驛スイサ耕地に入植した。伯國の珈琲暴落時代で、コロノ生活は薄給で糊口を凌ぐぐらいのものであつた。在住一カ年の後に、家長と共にマリリア市外ベアード植民地に移轉した。新興植民地で案外棉作も成績よく、邦人が百數十家族もいて日本学校もあり著者の親友平野德雄が教鞭をとつていた。マリリア棉作全盛時代にベアード植民地は有名であつた。

同植民地に二年在住の後に、新興地帯ツゥパン市に移つた。トッパン市の創設は一九二九年で、邦人岡崎司三が邦人に土地を賣出し入植したのは一九三二年須賀音次郎、大岡甚作の両人で、一九三五年になつて土地周旋業の右田辰彦等が町に移轉したので七家族になつた。彼が移轉した一九三八年には未だベナポリス管轄で、平井、本松、釘本、伊藤等を加えて邦人二十七家族であつた。その創設當初に町にいてパン製造業本松健造工場に勤務、軈て一九四〇年頃トツパンより北方三十キロの地點に、第二アナポリス植民地が拓け、翌年百二十二域を一時に伐採、家長寺田立次と共に尾崎・河村・井上・武田・石丸・高田、住友等九家族で、一九四一年斧鉞を下した。時に年齢三十六才、血氣旺盛、斗志滿々の年頃であつた。家長寺田立次は人望衆にすぐれ初代會長に推されたが、普通のガリ〳〵妄者の拓人と違つて、文操豊潤、南画を嗜んで寺田耕亭と画號をつけ、當時インヂオ・ドイスと稱された土地なので、入植三年目の一九四四年に土人の石器石斧などを發掘、トッパン地方の考古学に貢献した。そんな處から交通不便で辛酸をなめたが家長の感化をうけて、彼の天性は春風蕩駘、明朗闊達になつた現在もその性格は失なわれない。

植民地はパウダーリヨ地帯で、豊饒肥沃、一域で籾が二百俵も收穫、アナポリス米として有名、軈て棉作に變り、そして現在落花生地帯となつているが、この地で十二、三年健斗、一九五四年實兄薫實のすゝめで、トメアスー植民地に移轉した。實兄は同年訪日、前年物故した厳父太六の一周忌に墓参し、その折に北伯移住を奨めたので、あつた。當時ピーメンタの黄金時代で南伯の珈琲・棉・薄荷　米等の作物と違つて、純益はボロかつた。確かにあの景氣はもう來ないだろう。

移轉して既に滿十年は過ぎた。現在五千本のピメンタを栽培し余生を悠々送つている。長男正幸（二十七才）は耕地を管理長女和子は一柳繁雄と結婚してトッパン在住、二女清子健在、二男輝雄はトッパン市、三男登、三女よし子、四女みつ子が自家で勉学中である。三十一年の開拓生活を追懐すると、一瞬の夢であつた。明治四十四年三月十日亥年生。

NORIYUKI TSUNEMITSU
C. P. 39 — Cooperado N.o 2
Belem, — Pará

トメアスー植民地ボア・ビスタ區

常光憲之氏

原籍　廣島縣高田郡吉田町
渡伯　昭和三十二年三月
　　　伯漁船アリツパ・ヘライス號

滿三十才、人生最も華やかな青春時代で、何物も恐れず、事業欲旺盛の時代である。現在岳父の戸田農場一万八千本（四十五トン生產）を管理、その監督を東京農大出身の後輩久保利通（廣島縣出身）にまかせ、自からは、日高寅男と共に、カニンデ區奥に六百ヘクタールの第二農場開拓に邁進、胡椒栽培と、牧場設立に健斗している。ここ十年後には、この六百ヘクタールが綠の牧場となり、牛數千頭が悠々と牧草を喰つている姿を想像しただけでも、痛快である。開拓地のせまい日本では、到底望みもつかぬ事實であろう。盟友日高寅男は廣島縣人で同縣の誼、しかも日高寅男は岳父と十年間胡椒園を共營した人物で、唇齒補車の親密さがあるから、この事業は必ずや成功せずにはおられない。

彼は父憲治、母幸江の長男に生れ、廣島原爆投下の終戰時は滿十才の少年、軈て吉田農業高校を卒業、東京農大に學び、拓殖科に籍を置いた。內野忠雄教授の指導で、南米開拓に志した。內野教授は大アマゾンに農大出身者の理想農場を建設する夢をもつていたので、當時伯國は珈琲園万能期でありながら、南伯サンパウロ州やパラナ州に卒業生を送らずアマゾンに送つた。

渡伯するにも他人と變つたコースをとつた。ブラジル漁船アリツパ・ヘイラス號が、日本寄港から、歸伯するときに上船し航海中船員として身心を鍛練した。當時の学窓盟友の、坂口陞（ノボル）はトメアスー港で獨立し、木村廣三はカニ・デ區で二千本の胡椒園主になつている。現在東京農大出身者が、アマゾンに二十五人いるが、在伯日數が少ないので、社會的に頭角を現わした者は少ない。そして初期に渡伯した者は、割合農業に就くが、最近渡伯した後輩は農業に就きたがらず、都會生活に憧がれるので、先輩として彼はその點をなげいている。

大体彼が岳父戸田子郎の信用をとつたのは、何でも裸になつてやるという、徹底した飽くなき推進力があつたからである。てやれあの仕事はいやだとか、あれはきたないとか云つて、仕事に差別をつけなかつた處に彼の偉大さがあつた。そして戸田子郎二女米鷺江（ときえ）と結婚した。岳父の戸田はトメアスー産業組合專務理事を後進に讓り、ニツポニカ商工KK專務となりベレーン市に定着したので、彼は農場一切の責任者となり、軈てニツポニカ經營の煉瓦工場を引受ける事になり、井上敏雄に管理させている。

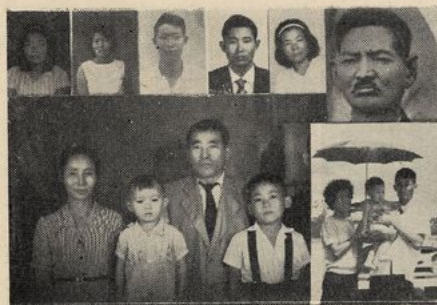
由來在伯廣島縣人は、柞磨宗一（珈琲百万本・既成耕地五千ヘクタール）竹內豊次（豪商・牧場四万ヘクタール牧牛一万頭）藤原久人（在伯金派家ナンバーワン戰前邦貨八十億円）の三羽烏を始め、傑出した事業家は數百家族いて、各縣人を睥睨しているが、彼も將來アマゾンでそうした事業家になつてもらいたい。夫婦の間に長男ときのり、長女みきえ、二男ときをの三兒がいる。昭和十年三月九日亥年生。

KOMAO OGUSHI
C. P. 39 — Cooperado N.o 182
Belem — E. de Pará

トメアー植民地ボア・ビスタ區

大串駒雄氏

原籍　北海道岩見澤市市内
渡伯　昭和八年八月　あらびあ丸

在伯三十二年、追懐するとブラジル開拓生活は夢のようだつた。昭和八年渡伯同航海の家長連中で、岳父鈴木與惣治を始め、山口壽五郎、菊地藤吉、清田卯一岡部正敏、武田清志、竹下勝二、池谷藤松等が逝去した。そして多くの家族は聖州に移轉していつたが、實は彼もマラリア病が恐ろしく、聖州に移轉した一人であつた。

南米拓殖會社經營のアガラ植民地は、常夏の理想郷と思つて、入植した處、有名なマラリア病巣窟地帶でブレウ區に入植して四ヵ年健斗した。妻の母鈴木かずい（戸田子郎澄子夫人の母）が、一九三六年十二月八日四十五才で黒水病に犯かされ罹病二三日目で忽然となくなつた。この猛毒黒水病の蔓延に命あつての物種だと、預金のあるうちに移轉すべく決心した。全く當時のトメアスー植民地は、二、三日おきに葬式が出るので、罹病者でなくても、身震いがした。

聖州に移轉し、マリリア市郊外キング植民地に二ヵ年在住、棉作に邁進した。このキング植民地はチピリツサ河畔でマラリア病の巣窟、著者も一夜この植民地に泊りホウ／＼の態で逃げたことがあつたが、彼もまた永居は無用と思つて、健康地たるトツパン市奥のリノポリス植民地に移つた。リノポリスは一九二八年エウゼニグ・リノ大佐が二千八百域を購入して、自分の名をつけ「リノポリス」と云つて賣出した處で、近澤恒信が邦人代理人となつて宣傳した。草分の廣島縣人砂原裕が一九三二年入植した頃は、ビラツキ町から四十五粁、ピツカードを切り拓いて入植した程の交通不便な處であつたが、彼が入植した頃はそれから六年も經ち、パラプアン市方面から入植出來るようになつていた。このリノポリス植民地は實に土地肥沃、棉・米・落花生・豆・玉蜀黍等万作に適し、約二十年間も在住していた。

終戰後に聖市郊外が拓け、移轉する者が多くなつた頃、妹等の薦めで遂にトメアスー植民地に戻つた。

一九五七年度で、往年の地獄は、緑の樂園となり、理想的な健康地であり、彼も本耕地七千本、岡部孝隣耕地に三千五百本のピメンタを栽培、遂に今日豊かな生活を送るようになつた。糟糠のたつ子夫人との間に五男三女の子福者で、アマゾン生れの長男輝雄はイビチンガ區宮城縣人大橋義夫長女きよ子を娶り孫幸一が出生、二男龍雄、長女榮子、三男光雄等は家業を扶け二女きみ子は洋裁、四男雄幸、三女とみ子、五男廣治等は勉学中である。トメアーに入植、聖市で活躍、再び北伯に戻つた拓人の晩年は幸福であつた。明治四十一年一月二十日申年生。

上段右から　故岳父鈴木與惣治、長女榮子、二男龍雄、二女きみ子、三女とみ子
下段右から　長男輝雄夫婦と孫、四男雄幸、主人、五男廣治、たつ子夫人

トメアスー植民地ボアビスタ區

日 高 寅 男 氏

原籍　廣島縣山縣郡壬生町
渡伯　昭和十一年三月　あふりか丸

TORAO HIDAKA
C. P. 39 — Cooperado N.o 78
Belem — E. de Pará

大正十五年寅年生れだから「寅男」と名づけられたが、名は体を現わすで、猛虎の如く、果斷俊敏、猛進直情である。進むことを知つて退くことを知らない戰國時代の猛將にホウフツな處がある。滿二十代から二十年間、即ち終戰直後にアカラ農民同志會の一員となり、ウニベルサル號の造船に健斗してから今日まで八面六ピの活躍振りであつた。そしてその猛進振りが、ブラジルのインフレ景氣の波にのつて、好調に伸てびていつた。これから後は、大いに思慮分別盛り「四十にして不惑」とか、滿四十才を迎えた彼の今後の人生道こそ興味をもたれよう。

カニンデ區奥に六百ヘクタールの新農場を建設して、ピーメンタ栽培を主作に、あとは毎年米作をしつつ、伐採して牧場に仕上げてゆく計画で「僕はトメアスーが永住の地だよだから何百町歩、何千町歩の牧場を、トメアスーの郊外に建設するよ」と著者に語つた。トメアスーを見かぎつて南進する人が多いなかで珍らしい名言を吐く拓人である。牧場計画の協力者が新人常光憲之であるから、大きな物が生れるだろう。現在本耕地は河村能之（山口縣人）に管理させ、自からは、大原始林の眞中に飛込み、多くの伯人を指揮しているから、その行動は勇壯である。

渡伯したのが滿十才、父薫實の長男に生れた。アカラ植民地ブレウ區（現在の沼澤耕地）に入植、一ヵ年の米作生活を經てすぐトメアスー港の武田旅館を父が引受けたのでここで少年期から、青年期を過ごした。この頃はアカラ植民地を退耕、南伯移轉流行時代で、一九三七年開業、一九三八年一一九名退植、一九三九年四六五名退植、一九四〇年四一五名退植という賑やかさで、少年時代の彼には、移轉者の多いのに吃驚していた位であつた。多くの南伯移轉者が、彼の宅の世話になつた。

成長してアカラ産組の鉄工場に勤務、運搬自動車係になつた戰後トメアスー産組大改革で組合にオフイシーナを設けたのも彼の創意であつたし、道路改修も郡長との交渉に力を入れたのも彼で、その震源は、二十余年前に遡のぼらねばならない。鉄工場に精勤した關係で、ウニベルサル號の造船にも關係し、そて委員長戸田子郎と親密を交え、軈て一九五一年から共同で一万五千本のピメンタ栽培に全力を注いだ。軈て戸田子郎との共營を解散し、獨立体勢に入り、胡椒を二万本に增植、豪壯な住宅も新築した。そして第一期の事業が完成するや、第二期の牧場計画に手を染めた。趣味の野球、麻雀、寫眞等必らず水準以上にこなすから、第二期牧場計画も中退しないだろう。愛妻とみ子（澤田毅妹）の間に長男節男・二男満人（共にベレーン中学）三男義之（以下小学）四男富男・長女和枝等で、兩親も長命、弟妹ー薫男・哲夫・逸男・とみ子・貢・鈴江・美智代等も健在である。大正十五年三月十三日寅年生。

終戰時中彼が奮斗したトメアスー港

TORAO TAKEDA
C. P. 39 — Cooperado N.o 63
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地イビチンガ區

武田虎男氏

原籍　山形縣西村山郡西川町松原
渡伯　昭和八年九月　あらびあ丸

實に手堅い人物で、無駄な金は一文たりとも使わない。寄附金にしても、盲目的であいまいなのには、金を出さない。と云つて惜んで出さないのではない。勤倹力行型の性格だから。何事でも几帳面である。そんな性格だから、イビチンガ區の自治日本人會の會計や学校増築、寄附金係など、雑務を仰せつかつているが正に適役である。主人がこんな質實剛健なばかりでなく、みつ夫人がまた虚榮心の少ない女性で、似た者夫婦とはこの人にぴつたり當はまるようだ。

實兄武志實弟彥三郎は趣味の麻雀に夢中になるが、彼は熱中しない。趣味は娯樂範圍程度にするという、自制心をわきまえている。その反面、無一文にもならぬことでも、のつぴきならぬ事を頼まれると、自分の仕事を後廻しにしてまでも盡すだけの、義侠心をもつている。どつちかと云うと几帳面ではあるが、情にもろい處がある。トメアスー産業組合理事に推選され池田亨理事と共に　胡椒等級監定役をつとめているが、正に適材適所の感が深い。しかも池田理事とは意氣投合のあいだがらである。

父清志が早逝した時に、兄武志が十五才で、彼は十二才であつた。ベレーン市に出て野菜栽培の貧乏生活であつた。伯國公認小学校で伯語の勉強をすること六ヵ月で、退校のやむなきに至つた。向学心に燃ゆる彼は少年ながら悲しかつた。そして弟彥三郎、弟平正、妹町子は幼兒えあつた。この人達が、父の死後二十九年の後に、皆成人して、トメアスー植民地に於ける重陣になつているのは、母ふち夫人の訓陶育兒がよろしきを得たからであろう。その母も孤潤を守り通し、皆を成人させて前年物故した。貞節のたかいみつ夫人は第十三回トメアスー入植者菊地藤吉二女で、彼のよき協力者である。教育に熱心で、長女あき子（ベレーン中学）以下正一、美由紀・英樹・泉・ひとみ等皆通学している。夫妻の生活が放逸でないから、子供等も自立心強く、なにごとにもキビ〳〵している。彼は渡伯した時が九才で日本の小学三年生、そして無から今日胡椒一万本の大農場主となり、豪壮な二階建の住宅に住み、文化生活に浴している。文筆に盡せないような辛酸苦勞を味わつた事は、ここに書くまでもない。ブラジル育ちの準二世として、著者は推賞して止まない。大正十三年四月二十日子年生。

ISAMU ITO
C. P. 39 — Cooperado N.o 8
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地イビチンガ區

伊藤　勇　氏

原籍　東京都太田區大森馬込町
渡伯　昭和四年七月　もんてびでお丸

十年前に訪問した時に、一生牛飼いで生活したいと語つたが、今回訪ねていつたら、やはり彼の言葉の通り乳牛を二十五頭飼い、理想的な牧舎を建て、近隣三十五家族に牛乳を配給していた。そして乳牛經營はこの位にして今後は肉牛に力を注ぎたいと熱望していた。彼は日本から牛と共に育つた人物であるから、余生をこの肉牛に盡すのは本望であろう。

非常に柔和であるが、本性は丙午生れで駿馬の性格を多分に持ち、新進氣鋭で常に若々しさを失わない。トメアスー第一回入植者でこの間まで加藤友治、木村總一郎がいたが物故し、今は山田義一とマラニオン州から戻つてきた佐藤義雄と三人になつた。旅券は東京都であるが、原籍は北海道壽都郡壽都町で、父健が釧路郡役所助役時代に、その五男に生れた。父は彼が二才の時に死亡、母しめは彼と兄義夫を連れ札幌に移轉、彼は札幌小学校を卒業した。十五才で上京、開成豫備校を卒業荏原馬込町淺沼搾乳所に勤務した。この搾乳所の研究時代が、彼をして終生乳牛と取組むことになつた。二十一才で兵隊に呼集され、旭川六師團二十六連隊で二カ年鍛練、退隊後結婚してすぐアカラ植民地草分開拓者として入植した。時に滿二十三才であつた。

渡伯してカカオを栽培しながらも、三年目から農事部長春日亨農学士に薦められ、乳牛を飼つて、牛乳屋となつた。軈て不健康地アカラを退散、移轉費は乳牛二頭の賣却金であつた。オイテーロ島に移り、マラリア病の養生を一カ年送つた。この頃はマラリアのため病身であつた。長谷川貞雄の奬めで、マラニオン州境で（詳しくは本論文）阿部・野原・河内・千葉・政木等七人で砂金掘りした事もあつた。日本軍の佛印進駐で、佛人の經營主が契約を破棄したので、ベレーンに戻り、軈て大平洋戰爭勃發、續いて樞軸國民住宅の焼打事件となり、トメアスー植民地に難をのがれた。一九四二年八月のことで、これからトメアスー植民地に永住することになつた。

ここまでが恰度渡伯して滿十三年目で、日本から渡伯した當時よりまだ着のみ着のままで、丸裸であつた。隨分苦勞したもので戰後移民が滿十年になつて、自家用車を乘廻し、豪壯な住宅に住むのと雲泥の差である。トメアスーに戻つて一回移民の舊友加藤友治耕地に就勞し、マンジョーカ製粉に精勤、軈てイビチンガ區に二十五ヘクタールの土地を拓いてピーメンタを栽培した。あれから滿二十三年、今日は胡椒一万五千本、收穫四十ドン、トメアスー植民地でも右翼組である。一九五五年オルテーロ島にも牧場十三ヘクタールを所有しているが、いずれ再開拓するだろう。長女まり子（岡部孝夫人）二女富美子（佐藤仁秀夫人）長男牧郎（とし子夫人はプレウ四區宮崎縣人黒木重克二女）三男健三、三女洋子（教師）四女なか子（中学生）等健在である。二男睦郎が七才で早逝した。草分開拓者の長壽を心から祈る。明治三十九年四月六日午年生。

關勝四郎氏一家

も、どし／＼入植した。イビチンガ區は、もとボア・ビスタ區に屬していて、その區域には、伊藤勇、武田虎男、關兄弟の四家族しかいなかつたが、新移民が入植して、大家族となり、遂にボア・ビスタ區から獨立した。その入植の多數が宮城縣人であるのは、先驅者關兄弟が宮城縣人なるためである。渡邊一夫渡邊七郎、笠松梅吉、菊地勝男、菊地正吾、木村嘉三郎、大橋義久、佐藤仁秀、天野睦丸、本田義房、汽仙明、天野新彌、横田耕平未亡人、阿部公文、佐々木秀男等實に十七家族も在住、まるで宮城縣植民地の觀がある。そして宮城縣人の恥にならぬよう、彼は特に後輩を指導し、イビチンガ區をトメアスー植民地でも賞讚されるべき、模範地域にしたいと念願している。新興地帶ブレウ區などより、經濟的に獨立の遲れた人々のみであるから、ここ五六年は生活の余裕がないだろう。然し平棒すれば、必ずまとまつた地域となつてゆくと確信してやまない。その點彼のよき指導を待つこと多しいと云わねばならない。

女婿矢野敏夫は、高校卒業後昭和三十三年六月ぶらじる丸で渡伯した。著者が輸送助監督で渡つた時の同航海者である。同船は約八百名、コチア産組青年百名、東山農場實習生二十名という大多數であつた。彼はアマッパ直轄州マタピー植民地同縣今治市出身の清井学耕地で四カ年健斗した。マタピー植民地は交通不便、水利も不自由、ゴム樹の成長も悪く四十數家族の邦人が、前途を見きつて退植した處で、彼も將來性のない處に、青春を葬るのは惜しいと思い遂に退植し、關耕地に就勞した。軈て彼の誠意耕主には認められ、二年後に二女百合子を娶り、岳父の耕地管理の傍ら、菊地勝男耕地の隣りに新耕地を建設した。同船者に高尾平三郎、諸石輝雄、松永時憲、遠藤四郎、山内堅太郎等多勢いるが、そのトップを進んでいるから、將來が賴毋しい。昭和十一年四月十日生れで若冠二十九才好漢自重を祈つて止まない。關勝四郎は渡邊七郎、矢野敏夫といい女婿に惠まれた。關勝四郎氏は大正二年十二月二十六日亥年生。

三女米子さんと二男二郎君

トメアスー植民地イビチンガ區

KATSUSHIRO SEKI
C. P. 39 — Cooperado N.o 13
Belem — E. de Pará

關　勝　四　郎　氏

原籍　宮城縣柴田郡村田町小泉
渡伯　昭和二年十二月　さんとす丸

矢　野　敏　夫　氏

原籍　愛媛縣今治市大字石井
渡伯　昭和三十三年五月　ぶらじる丸

十年前に訪問した時は、終戰直後の惡戰苦斗から漸く脱し、胡椒黄金時代で、耕地の設備に無我夢中であつた。今回訪ねてみたら、長女多津子は宮城縣人渡邊七郎夫人となり、三男一女の母親であり、二女百合子も愛媛縣人矢野敏夫夫人となり孫一人に恵まれていた。三女末子はベレーン文理科大学勉学中であり、長男久人は耕地の總支配人で、ピーメンタ一万八千本の管理に多忙を極めている。二男二郎はベレーン中学、三男晶三は妹婿田中源吉氏を嗣ぎ、四女直子、四男四郎、五男勝彦、六男信男等も夫々中学・小学校に通学し、六男三女の成長ぶりに吃驚した。そして當時第一線にたつて指揮していた彼も、既に長男久人や女婿矢野敏夫などに、耕地の經營をまかせ、相談役として一線から退いた。またそうあるべきが當然で、彼も既に五十二才になつた。

關兄弟（兄勝治）は、父に似て外見を飾らない人物である。父は戰前トメアスー植民地第一の成金で、いつも貯金が五十コント（今日一千倍として五万コントス）位あつた。よく働く人で、いつも籾の收穫量は植民地内のトップであつた。惜しい事に母ちよは一九三七年十二月十五日、父久三郎は翌一九三八年十月三日に、黒水病のため逝去した。一九三六・七・八年頃のトメアスー植民地のマラリア病の流行は想像以上で、生地獄の感があつた。両親の死後、彼等は協力一致して奮斗努力した。

彼が最も華やかであつたのは、終戰直後アカラ農民同志會の結成に際し、戸田子郎、藤橋銅三、澤田毅、佐藤忠雄等の猛者連や、高橋勝正、永野敬士、池田亨、澤田哲、澤田脩、澤田照夫、永野吉春、柴田英夫、日高寅男、村上廣の新進精鋭の士等十七人から會長に推され委員長戸田子郎と協力して、よく統制、農民同志會の目的を遂行させた事である。勿論年齢的にも、三十三才で年上でもあつたが、温厚篤實な性格が、その首となるべき資格があつた譯である。あの當時は實に眞剣そのもので彼の一生のうち、忘れることの出來ない想い出であつた。

終戰後にアマゾン邦人移民が再開され、トメアスー植民地に

矢野敏夫氏夫妻

トメアスー植民地イビチンガ區

田中源吉氏

GONKICHI TANAKA
C. P. 39 — Cooperado N.o 92
Belem — E. de Pará

原籍　福島縣福島市松木町
渡伯　昭和六年五月　ぶえのすあいれす丸

「佛の源吉」と云つてもいいように、眞正直である父忠吉。母あさよの二男に生れ、少年時代に福島市松木町に育ち、兩親の愛を一身にあつめて可愛がられ、スク／＼と自由に育つたので悪いことを知らない、誠に實直な拓人である。彼の妻いなよ夫人は、關勝四郎の妹で、夫婦の間に子寶に恵まれていないので、關勝四郎三男晶三が田中家をついでいる。

昭和六年五月ぶえのすあいれす丸で、トメアスー植民地に入植した。トメアスー植民地入植者は、同船に田中忠吉一家族しか乘つてなかつた。兩親に弟新左衛門と妹で、一家五人であつた。入植してマルキタ区の開拓に盡していたが、恰度一九三六、七年、カカオ栽培直營農場閉鎖の頃から、マラリア病が猖獗を極め、やがて血の小便をする黒水病の蔓延となつた。このため入植者は恐怖の念をいだいたが、當時まだ特効薬がなく、バルダンやキニーネなどの藥で漸く治療するに過ぎなかつた。一九三六年一月四日二十一才になる弟新左衛門は、その悪性マラリア病のため遂に斃れた。この前後には幼少年の死亡より、年輩者が續いて死亡した。佐藤ハツエ（三十七才）柴田八重（三十二才）清田サダ（二十四才）竹下弘（二十八才）星野久太郎（四十七才）鈴木かずい（四十五才）串田きく（二十四才）宇都宮たか（二十八才）と、毎日ほど枕をならべて死んでいつた。

田中一家も、これ以上犠牲を出したくないので、殘りの者が健在の間にと遂にサンパウロ州に移轉することを決めた。一九三八年度（昭和十三年）で、その頃はサンパウロ州えと移轉する者が多かつた。一九三九年四六五名退植、一九四〇年四一五名退植という風に、生地獄に似た不健康地からぞく／＼と移轉した。彼等一家も南進し、サンパウロ州マリリアに腰をすえた當時マリリアは棉作全盛期で、邦人家族は附近に五千家族も密集していた。この棉の黄金時代を經て、終戰直後にオズワルド・クルーズ市郊外に移つた。オズワルド・クルーズ市はその頃漸く邦人が進出した新興地帯であつた。有名な臣道連盟オズワルド・クルーズ殺人事件があつた處で。この地帯に約八カ年辛棒した。ここにはトメアスー組十二回入植の北海道出身渡邊藤五郎・惣五郎の兄弟が珈琲園を經營して頑張つていた。

一九五四年義兄勝四郎の慮めで、再びアマゾンに戻つた。母あさよと妹は日本に歸國したし、彼等夫婦が殘つたきりであつた。特に子供に恵まれず淋しい家庭であつたので、彼も緣者の多いトメアスー植民地に戻つた。再びアマゾンの人となり、土地を撰定して、五千本の胡椒を栽培した。あれから滿十年は過ぎ、ピーメンタも成樹となり、幸福な生活に浴している。明治四十年三月九日未年生。

KATSUJI SEKI
C. P. 39 — Cooperado N.o 12
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地イビチンガ區

關　勝　治　氏

原籍　宮城縣柴田郡村田町小泉
渡伯　昭和四年十二月　さんとす丸

東北訛の言葉でボツ〳〵と語る態度は、どこからみても純農人である。故嚴父久次郎が純然たる農一式に生きる人物だつたのと、好一對で、父が一九三八年十月三日マラリア病のため逝去した時が、五十五才であつたが、彼も恰度今年が満五十五才、父の年齢と同じになつた。満十八才で渡伯、三十有余年の開拓生活は一瞬の夢であつた

苦勞人の彼に協力する春代夫人もまた、人並以上茨の道を踏んできた女性である。山形縣人林米太郎の娘で、父とは幼少で死別だから瞼の父であり、母は十八才の時に喪つた。それで二十才の時に、實兄耕作がトメアスー植民地移住をした折に、同伴した、兩親に早く死別したので、だから普通人以上に、涙もろく人情味に豊んでいる。宮城縣出身の後輩移民が、戰後どし〳〵イビチンガ區に入植したが、皆出來るだけの事は援助してやつた。夫婦ともこんなだから社會的信用は絶大である

耕地は一万五千本のピメンタが植えてあり、年收は四十トン内外で、經濟的豊潤と共に、家族も増えて平和に満ちた。長女八重子は宮城縣人阿部公文と結婚して、イビチンガ區で農場を經營、孫綾子に惠まれている。長男勝男は現在耕地を管理し、二女久子は宮城縣伊豆郡出身の笠松梅吉と結婚している。長女の婿阿部公文は篤農家小野太平（ブレウ四區）の甥であり、この笠松梅吉も、ボア・ビスタ區の篤農家佐藤清小春夫人の弟で共によき婿に惠まれている。二女久子は孫春子、みどりの二兒がいる。二男廣治はベレーン市中学卒業後、兄に協力して働き三男袈裟雄死亡、四男良雄はベレーン中学校で勉強、三女廣子五男秀雄はトメアスー小学校に通学している。末子みつ子は一九六二年八才で逝去した。五男四女を生み、七人健在である。次弟勝四郎は六男三女の子福者この兄弟で、關家はトメアスー植民地で分家が、ぞく〳〵と増えてゆくだろう。その他に末弟已之吉がおり、聖州ソロカバナ線サント・アナスタシオ驛奥クヤバ・パウリスタ植民地で健在、マルキタ區遠藤瀧三・女婿佐藤繁雄と共に、アマゾン下りの拓人として、サンパウロ州で大いに名聲をあげて活躍している。

彼等關兄弟は第二回移民で、マルキタ區に入り、カカオ栽培に挺身したが、一九三六年（昭和十一年）直營農場に續いて、直營精米所の閉鎖となつたので、止むなくマルキタ區七十五號で水車を備え、死斗した。不幸翌年十二月十五日母ケサノが五十三才で病歿、續いて又翌年父が死亡したので、彼等兄弟は協力一致して關家再興のため盡した。多くの人達がトメアスー植民地をみかぎつて、聖州に移轉したが、彼等兄弟は兩親の墓の下を去るにしのびず、到頭在植三十六ヵ年になつた。妹いなは田中源吉夫人、末妹たりは大橋康男夫人となり、一族はみな幸福な家庭に惠まれた。明治四十三年十一月二日戌年生。

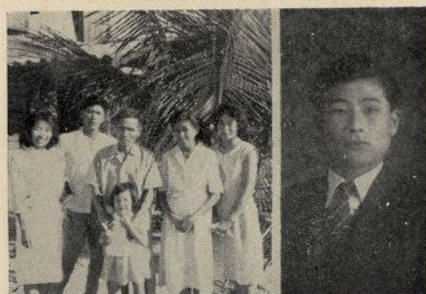
トメアスー植民地イビチンガ區

日野　進氏

SUSUMU HINO
C. P. 39 Cooperado n.o 129
Belem — E. de Pará

原籍　宮崎縣佐土原市
渡伯　昭和二十九年十二月　あふりか丸

(右は渡伯記念の日野進氏)
(右から順子・夫人・主人・英生・まさ子)

胡椒園を箱庭みたように手入れし、雑草一本生えても氣になる性格、胡椒樹も碁盤の五目目みたように、必ず整然と樹えねば氣がすまず、住宅も道路からかた寄らず、眞正面に見える處に建て、總べてがこの式で實に几帳面である。著者は戰後派移民篤農家として、先ず一流の人物に推したい。

戰前は満州鞍山の昭和製鋼KK電氣係として勤務していた。太平洋戰爭で日本は惨敗、復員して故郷で暮していた。故郷は旧佐土原藩で島津久太の出身地。恰度故郷の出身小原アイが、ブラジルから歸朝し、伯國自由の天地のよさを說明したのですみえ夫人がそれに同感され、渡伯を決心した。時に彼は四十九才で、既に大原始林開拓をするには年齢的におそ過ぎていた。

アマゾン移民として、すぐトメアスー植民地イビチンガ區伊藤勇耕地に入植したのが、幸運の第一歩であった。ブラジル移民の成功の鍵は色々と條件があるが。まず最初に入植した耕主が温情円満な人物でなくてはいけないと云う事である。これが強慾無情で搾取一点張りの耕主であれば、それこそ成功の道は遅れる。伊藤耕主は第一回トメアスー入植者で實に苦労人で、彼の獨立にも何くれと心から援助してくれた。彼は伊藤勇耕地に三年在住して同地域最上の土地を購入、最初胡椒六百本を植えた。獨立してから早や八年、今日は胡椒八千五百本を完植し昨年は十五トンの收穫をあげた。幼樹が多いが、ここ三・四年もすれば、三十年の古參者組に伍することになろう。

長女すみ子は渡伯前に新名博と結婚し日本に在住、長男幸生は二十三才で渡伯した青年だが、渡伯後カトリック教に歸依、その傳導牧師となつた。物に熱中すると人間の精神力は偉いもので獨学の葡語も上達、葡語で伯人を傳導するほど流暢になつた一九六四年七月日本から京子夫人を呼寄せたが、この夫人は茨城縣人で宗教の上で文通を始め、お互い本人同志で理解仕合つた上、結婚を契つて渡伯した。通弊のフシダラな南の花嫁と違つて高踏高雅な女性である。彼は長男が耕地支配を止めて、宗教家となつたのを、心からよろこんでいる。二女喜美子はボア・ビスタ區岡部勉と結婚、三女順子はサンタ・イザベル市群馬縣人須永和男に嫁づき、二男英生が耕地を管理支配しているが長兄が宗教家になつたので、兄の分まで働く堅實な拓人である四女まさ子はトメアス病院で看護婦として勤務、その傍らタイプライターや洋裁を習得、なか〳〵聡明理智な女性である。なんと云つても、辛酸苦労は多かつたが、奥アマゾンに配置された戰後移民に比較したら幸運なコースを進んできた。晩年の幸福を祈つてやまない。明治三十七年十月三十日辰年生。

KAZUO WATANABE
C. P. 39 — Cooperado N.o 241
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地イビチンガ區

渡邊一夫氏

原籍　宮城縣柴田郡柴田町
渡伯　昭和二十九年五月　あめりか丸

渡邊一夫・七郎・九郎の兄弟は實に仲睦まじく、聽て舊耕主關勝治・勝四郎兄弟のように、立派な農場主となるであろう。父安藏、母くに兩親の長男に生れた一夫は、終戰後二十五才まで進駐軍の自動車運轉手をしていた。だが月給生活は前途に光明はなし、しかも進駐軍の下で働くことはなんとなく奴隷的に命令されているようで、氣持の上からでも面白くなかつた。その時にアマゾン移民募集の話をきき同村人大橋義久長女初美を娶り、弟七郎と初美の弟大橋勝彦（十五才）などを連れ、勇躍アマゾン開拓地に飛込んだ。

配耕地はトメアスー植民地關勝四郎耕地であつた。耕主關勝四郎は宮城縣人で、トメアスー植民地の重鎭、しかも同縣人の後輩である彼等に對し出來るだけの待遇をした。彼等が渡伯した昭和二十九年頃は宮城縣庁内でも、アマゾン地域の事情にくわしい職員がおらず「ただ「緑の天國」であるから、何物も持參しないでいい。ピメンタを植えれば、二、三年で年收五、六百万円の豪農になれるよ」と云うだけで、宣傳はとてもよかつた。勿論昭和二十九年頃は、ピメンタの黄金時代で、當時邦貨五百万円程度の收入のある邦人農家は、ざらであつたが、それは旧移民で、これから丸裸で進む、戰後移民はそんな譯にゆかなかつた。

處が入植してみると、蚊帳の必要があつたり、中古でもいいから自轉車の必要を痛感したり、古着でも大いに役に立つたりしたから、何物も持參しなかつた渡邊夫婦は、とても不自由をした。そしてその後に儲けた金で、少しづつ世帶道具を購入したが、その方の消費が莫大であつた。聽て岳父大橋義久も渡伯したので、協力者たる大橋勝彦も實父の方へ戻り、實弟一夫も獨立したので、夫婦きりの勞働力しかない家庭となつた。ここで焦る心を落ちつかせ、戰後移民がどん／＼獨立するのを平然と眺めながら隱忍自重、關耕地に實に五ヵ年も辛棒した。

幸い耕主の溫情により、關耕地の隣地を分讓してもらい、胡椒二千五百本栽培した。現在は四千本となり、既に成樹は結實期にはいつた。一九六一年マラリア病流行期には、彼等も罹病したが、幸い現在健康となり、農場擴張のため邁進している。

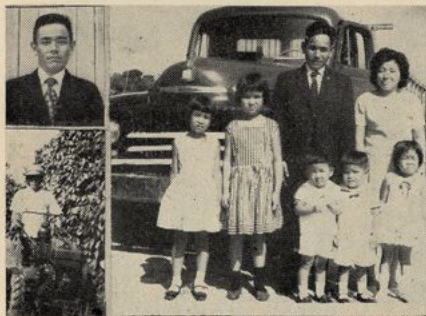
夫婦の間に邦子・俊夫・次郎の三兒に惠まれ、弟七郎は耕主關勝四郎長女多津子を娶り、獨立して農場經營、マリオ・マリア・エキオ・ケンゾウの四兒に惠まれ、末弟九郎も妻なか子を迎えて夫婦とも同郷の先輩小原宗耕地で活躍している。一夫氏は昭和四年三月三十四日己年生。

右　一夫氏夫婦と愛兒三人
中　九郎氏夫婦
左　七郎氏夫婦と愛兒四人

SHIMEKICHI FUKAMIZU
C. P. 39 — Cooperado N.o 147
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地イビチンガ區

深水締吉氏

原籍　熊本縣人吉市下永野町
渡伯　昭和三十一年十一月ぶらじる丸

深水締吉・昭吉・逸男の三兄弟は肥後人の血をひき、明朗な拓人である。長兄締吉は十六才から満州の曠野で活躍、満鉄の四平街汽罐部に勤務した。昭和十八年頃で、満州國は日本の属國同様、その經濟支配權を牛耳つている満鉄のこととて、自由な振舞をし、少年汽罐工の彼等でさえ、満州人に對しては優越感を抱き、悠々濶歩して四平街の町で遊んだ。昭和二十一年十九才の時に軍隊に呼集された。太平洋戰争が長びき彼も出征し、軈て昭和二十年八月の終戰を迎えた。終戰は通化であつた。多くの同胞がソ連に送られたが、彼は技術者のため四平街に留められ、物資の輸送、軍隊の移動輸送などに從事させられた。これが幸して、一年後復員することを得た。もし技術者でなく普通兵であつたら、今頃はシベリヤの曠野で、墓石の下で眠つていたかも知れない。人間の運命は、誠に紙一重で、終戰直後の満州各地に起きた悲惨な事件を追懐すると誠に感慨無量である。

終戰直後數度か「死線を越えた」經驗があつたので、伯國にきても割合氣分的には安であつた。日本に復員し、昭和三十一年十一月ぶらじる丸で、アマゾン開拓移民となり渡伯した。時に二十七才の血氣旺盛な年輩、弟昭吉と逸男を同伴し、勇躍トメアスー植民地ボアビスタ區齊藤一耕地に入植した。想像したよりピメンタ栽培事業は安樂で三ヵ年辛棒し、獨立の機會を待つていた。幸い弟二人が大いに協力したので、三年後にはイビチンガ區に好適な土地を選定し、胡椒栽培に邁進した。獨立早々は資本少なく、体にも無理して働らいた。一九六三年度腎臓病で休養したのは、獨立當時の無理がたたつていたのである。

幸いピメンタ栽培は順調にゆき、今日は九千三百本を満植した。未だ幼樹が多いので、古参者ほど多收穫ではないが、ここ四・五年もすれば、二・三十トンの收穫はあるだろう。既に貨物運搬自動車や、トラクター耕耘機など、農場に缺くべからざる機械を購入したから、今後の農場經營は案外樂である。前年妻を喪つたが、貞節献身の新妻巴（ともえ）を迎えた。熊本縣鹿本郡出身で、同郷人なるため實に円満、愛兒長女みよ子、二女せい子、三女マリア、長男マリオ、二男健一の二男三女を中心に、平和な家庭に浴している。次弟昭吉もブレウ區宮崎縣人林利雄従妹久保光子を娶り、長女セシーリヤ、二女和美の二兒に恵まれ隣地で獨立して農場を建設、胡椒二千本を栽培している。末弟逸男は現在彼に協力しているが、既に農場を建設し、妻帯の準備中である。仲睦ましい深水三兄弟の健在を祈つてやまない。締吉氏ー昭和二年四月五日卯年生、昭吉氏ー昭和四年十二月十日巳年生。

左上は弟逸男氏、下は耕運機で耕作中の締吉氏

トメアスー植民地イビチンガ區

大橋　義　久氏

YOSHIHISA OHASHI
C. P. 39 — Cooperado N.o 208
Belem — E. de Pará

原籍　宮城縣柴田郡柴田町
渡伯　昭和三十年十月　ぶらじる丸

青年時代から鉄工専門の職人となり、社會で活躍したので、鉄の如く物堅い人間で、何事をなすにも山師氣がなく、實に謹嚴實直そのものである。旅券は宮城縣柴田町となつているが、彼の生地は愛媛縣越智郡波方村小部で、十七才まで故郷で育ち軈て大阪市に出て尼ガ崎市西長州中央鉄工所に勤務、繁華な都會の空氣を吸い、會社の命令で各地方に出張した。鉄筋、鉄骨の鍛治工事の方を擔當し、大建築も經驗があり、戰前は軍部關係の建築のみに従事していた。少年期から苦労して世渡りしたのでなか／＼人情深く、近隣の人々と仲睦しく生活してゆく共存共營の精神に富んでいる。自分だけが儲けて、蔭でこつそり、悦に入るような、抜がけの功名心がない。そうした心がけの人であるから、耕地の經營も焦つて建設せず、堅實に一歩／＼築いていくようだ。

ブラジルに渡つた動機は、長女初美の婿渡邊一夫が昭和二十九年五月あめりか丸で渡伯したので、その時に長男勝彦（當時十五才）も同伴した。これは翌年彼も渡伯する準備工作であつた。當時四十九才で、年齢的にもあと十二・三年が社會的に活動期だと観念したので、今日までの日本の生活を精算、志を海外に向けた譯で、この計画は結果において良策であつた。入植地はトメアスー植民地關勝四郎耕地、前年女婿渡邊一夫が入植したので、何くれとなく便宜を計つてもらつた。

耕主は宮城縣人でトメアスー植民地の古参拓人、アマゾン開拓について色々と忠告をうけた。約三カ年辛棒し、軈て同地域に土地を撰定し、ピメンタを栽培した。入植當初ピメンタを栽培する土地の撰定を誤まつて、雨期に雨水がたまる處に植えたので、折角苦心して栽えたピメンタが枯れ、再度場所を變更して植えた。恰度その頃マラリヤ病が十余年振りで流行し、彼も到々罹病した。一九三六・七年の黒水病流行時代程なかつたが健康地のアマゾン地域全体に病魔は襲い、奥アマゾン一帯まで、在留邦人は罹病した。彼は肝藏を病みベレーン市で治療したが、入植獨立當時で一時は苦難の生活が續いた。幸にその後健康になり、現在六千五百本の胡椒を栽培している。長女初美にも孫三人、二女清美はボア・ビスタ區大串駒雄長男輝雄に嫁づき、長男勝彦は父に代つて耕地を管理し、昨年十月妻帯した二男浩二は兄に協力しているが、既に第二耕地を隣接地に拓きこの方は浩二名儀の農場である。終りにしま夫人の協力を賞し大橋家はアマゾンで幸福な生活に浴した。明治四十年四月十日未年生。

寫眞は新婚の長男勝彦君を圍んで記念撮影

トメアスー植民地イビチンガ區

岩本次男氏

TSUGUIO YUWAMOTO
C. P. 39 Ibitinga
Belem — E. de Pará

原籍　長崎縣佐世保市桐之浦
渡伯　昭和二十九年十一月　あめりか丸

若冠十六才で渡伯、マナウス市對岸ベラ・ビスタ植民地の辛酸苦労の生活を經て、今日まで、到々満十年は過ぎた。本當に夢の十年間であつた。その間最も悲しかつたことは、父藤松が現地に移轉して六ヵ月目に死亡した時であつた。一番の逆境時代を經て漸く獨立、これから希望に満ち自己農場建設に着手したばかりであつた。まだ幸福な生活に充分浴しきれず、開拓半ばで異郷の露と消えていつた父藤松の心中を察すると、實に同情を禁じ得ない。父の死は最もマラリヤ病の盛んであつた一九六二年八月二十七日であつた。

彼はこの父死亡の衝動が骨身に深く彫みこまれ、石にかじりついても岩本家を再興させずんばならないと、勇氣百倍、孤軍奮斗している。孤軍奮斗と云うと、おかしいが、事實文字通り一人で農場を經營している。彼は父藤松、母みさお兩親の二男に生れた。母は隣地の辻保の姉で、辻一家と一緒に渡伯した譯である。長兄要はベレーン市郊外ベネビーテス郡で活躍している。姉婿片岡治男はマルキタ區で活動、妹菊江はベレーン市三井物產KKに勤務、末妹征子は移住事業團ベレーン市支店に勤務して家庭に殘る者は、母と彼二人である。母は老齢で農の仕事は出來ず、結局ピメンタを育ててゆくのは、彼一人である。青春多端情熱溢れるばかりの二十七才の青年だから、總ゆる苦難が襲つてもびくともせず、次から次へと征服していくが、その勇往邁進は賞讃せずにはおられない。悲しみにつけ、喜びにつけ必ずや父の寫眞にひざまづき、心から奉公すると云う親孝行者である。母も次男を頼りにしているので、父に代つて永生きするであろう。いや長生きしてもらわなくてはならない。

大体彼等の家族は、移住のスタートが不運であつた。配耕地のマナカプル植民地ーベラ・ビスタ區には、百家族近くが配耕されたが、殆んど脱耕し、現在ベラ・ビスタ區には、一家族も邦人はいない。理想郷建設と云つて入植したが、痩地で籾も一ヘクタール二、三俵しかとれない處であつた。米で生活してゆく邦人に籾がとれぬ土地ときかされ吃驚、遂に初年度から、永居は無用ときめ、叔父辻保や兩親は一緒になつて、トメアスー植民地斉藤一耕地に移つた。ベラ・ビスタ植民地が約一年一ヵ月ばかり、收穫なしで遊んでくらしたので、持参の營農資金も殆んど消費してしまつた。同じ年にトメアスー植民地に入植した移民は、既に一年間の就労で、ピメンタ栽培の經驗もつみ、獨立後の準備に移つている者さえいた。それに引替え、彼等の家族は資金缺乏で、再スタートしなければならなかつた。全くつらい運命であつた。こうした運命を克服した青年拓人のことだから、必ず幸福を齎すことだろう。昭和十二年十一月二十九日丑年生。

TAMOTSU TSUJI
C. P. 39 — Cooperado N.o 146
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地イビチンガ區

辻　保氏

原籍　長崎縣佐世保市相之浦
渡伯　昭和二十九年十一月　あめりか丸

九州特有の豪放磊落で、物事に余りクヨ／＼しない年齢満五十才、今日までの五十年間の人生は、余りに浮き沈みが多過ぎた。然しその波爛重疊な人生を後悔せず、運命とあきらめ水に流し、一家擧つて耕地經營に邁進しているのは賞したい。一九六三年十月三日糟糠の妻しづ夫人が四十一才の働き盛りで、心臓ゼンソク病で忽然と逝去したのは、哀悼に堪えない。渡伯直後マナカプル植民地時代から、満九年間辛酸苦労をかけ通しであつた。開拓當初であつたから苦労はつきもので、生活にゆとりがつき、いよ／＼これからが樂しみと云う處で、黄泉の客になつたのは實に氣の毒で、著者も同情を禁じえない。

彼は日支事變と共に太平洋戰爭には野砲兵として參戰、南支方面特に廣東・廣西戰線に轉じた。終戰後は故郷に復員し、日本炭鑛株式會社に勤務した。恰度昭和二十九年炭鉱が營業不振で閉山したので、アマゾン移民募集をみて 渡りに船とどかり應募した。時に三十九才であつた。

配耕地はアマゾナス州マナオス市對岸マナカプルのベラ・ビスタ植民地、このベラ・ビスタ植民地の邦人入植地は、稀にみる痩地で、一ヘクタール二、三俵の籾しか收穫出來ない處で、豊饒肥沃の土地を想像して入植した邦人はみな落膽した。彼も入植先輩移民が、耕作しても無駄だと云うので、山切もせず今後の對策を考え、一年間遊んでくらした。その間に持參した營農資金を使いはたしてしまつた。伊藤清四郎が、トメアスー植民地邦人耕地の雇傭好條件を齎らしたので、それから集團脱耕が始まつた。移民會社の辻小太郎は、州外旅行を禁じたが、必死の戰後移民は、そんなことには耳にもかさず、百家族以上のものがベレーン郊外に移動した。彼も工藤・黒澤・永井・今野などと共に、トメアスー植民地に移轉、斉藤一耕地に就労することになつた。その間、實に一年一カ月で、無駄な日數をベラ・ビスタ植民地で送つた。

トメアスー植民地に移轉して、胡椒栽培の景氣をきくと、ベラ・ビスタ植民地とは雲泥の差であつた。早く來てよかつたと痛感、斉藤耕地で健斗し、軈てイビチンガ區に好適な土地を選定し獨立した。最初からトメアスー植民地に入植した戰後移民は既に成樹の胡椒園を持つていたのに、マナカプル植民地で無駄な一年を送つたばかりに、獨立が立遅れたが幸い胡椒栽培は順調にゆき、現在四千本を栽培し、トラクターや耕耘機など、一切の農具も設備された。幸い二十二才の長男孝を始め、二男透、三男裕が協力してくれるから 順風満帆である。長女純子二女洋子、三女ダリア、四女マルガリーダも健在である。亡妻の靈を慰め、一家の幸福を祈る。大正四年三月二十日卯年生。

雄、中川春藏、林利雄、坂上勉、須永金得、北川勳、岸俊藏、北川正雄、鈴木豊藏、北林淳一等以下二十二家族が皆成功している。毎年一月には同航海者が参集して記念祭を催すが、今年は滿十周年で夫婦揃つて參集、盛大な祝典を催した。確かにこの組は幸運を摑んだ人が多いようだ。

彼は昭和九年上海事變が起きるや軍隊に呼集された。そしてその後に大東亞戰争に移つても、戰線に踏みとどまり、通算十二・三年も砲煙の下でくらした、最後には三十才を越したので第一線にたたず、軍需品補給部隊となり、ラバウル基地で四カ年間、穀物や蔬菜栽培に從事した。この蔬菜栽培が、トメアスー植民地入植後に、生活費を稼せぐのに大いに役にたつた。終戰の時は既に四十才になつていた。だから四十六才から再出發した彼のブラジル移住は、大いなる決心の基になされたものであつた。配耕地の加藤邦藏は、ピメンタ栽培の恩人故加藤友治の長男で彼が就労した頃は、まだ加藤友治も生きていた。どんどんピーメンタの苗を他人に讓り、大いにピーメンタ栽培を奬勵した。そして故人は人情深い人で生活に困る人があると、どし／＼援助していた。こんな情味横溢の人がピメンタ栽培を發見したのだから、トメアスー植民地は、一躍してピメンタ植民地となつた譯である。

加藤耕地に三カ年在住し、軈てイビチンガ區で獨立した。最初は旧耕地に就労しながら、日曜日ごとに通つて、自己農場に五百本植えた。その頃は丸で不眠不休の働をつづけた。そして移轉してから、本腰で栽培し、今日本耕地は八千本植わつている長男賢（タカシ）は高校三年生中途退学、滿十七才で渡伯したが、成人して、秋田縣人木村金太郎長女よう子を娶り、孫サフミに恵まれ、クルサ街道第二農場を支配している。二男勝彥は二十一才、本耕地の經營に當り、十六才の長女博美はベレーン市高校に通学、末子三男實はトノアスー小学校に通学している中田吟十郎一家はブラジルにきて隆盛を誇つた。今後賢や勝彥等の活躍によつて奈邊まで發展するか、著者は括目して待つ。

明治四十二年九月二十一日酉年生。

寫眞は戰後派移民の篤農家中田家の人々

トメアスー植民地イビチンガ區

中田吟十郎氏

原籍　愛媛縣温泉郡小野村
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

GUINJURO NAKATA
C. P. 39 — Cooperado N.o 145
Belem — E. de Pará

石橋を叩いて渡るような堅實な拓人である。その生活も勤倹力行で絶對に無駄使いしない。トメアスー植民地戰後派移民四百家族の中、十指に數えられるべきトツプクラスの篤農家であり、金満家でもある。全耕地に八千本のピメンタを満植し、その上に第二耕地たるベレーン市郊外カスタニヤール市クルサ街道に二千本のピメンタを植え、長男賢に管理させている。そのような順風満帆の堂々たる耕主であるが、今もつて蔬菜缺乏の乾燥期には、腕に自信をもつて栽培した蔬菜を、十字路市場で販賣し小金を儲け實に堅實な百姓道に生きる人物である。こんな質實剛健であれば絶對倒産なんか、こんりんざいしつこない。

イビチンガ地域を戸別に歩いて、彼の耕地にくると、耕地の入口から雜草一つなく、實に公園みたようである。乾燥期には他の家庭など、野菜に不自由しているのに、彼の家庭では、棚式に土を盛り、盆栽鉢に水をかけるような式で毎日水をかけ、新鮮な野菜サラダの美食にありついている。物凄く努力を要するので、この棚式栽培法は誰れでもやらないが、野菜と果物が不足するとビータンミンBとCが体内に缺けて、悪性マラリヤ病やその他風土病に犯かされ易いので、他人の二倍の激労に堪え野菜をきらしたことがない。熱帶特有のマモンやバナナを始め總ゆる果物が植えてあるが、枯葉一枚あると氣になる性格で全農場は美しく、まるで盆栽鉢を數万倍にしたようなのが彼の農場と思えば間違いない。誠に潔癖過ぎる位い綺麗好きである。

一九六三年愛妻みつ子夫人が訪日した。三・四十年の古参移民でも、なか／＼訪日出來ないのに、満十年に達する前に、墓参を兼ねて訪日した。トメアスー植民地四百家族の戰後移民のうち、訪日した者と云えば、高木清人、河上義美、濱口末松、後藤かおる、野上みつえ、中田みつ子と數えると　本當に僅かしかいない。満十年と云えば、漸く農場が固まつた處で、まだ／＼農場の諸設備に投資せねばならぬ時代で、訪日する旅費がある位なら、この設備の方に投資したいのが山々である。その投資時代に万難を排して訪日したのだから、確かに經済的には余裕綽々たるものがある。

一体彼の渡伯のコースは幸運であつた。昭和三十年一月ぶらじる丸で渡伯、日本での契約はベレーン市郊外の野菜移民であつた。ベレーン市には野菜が皆無で、四十万の市民は不自由していた。ブラジル人は熱帶地で野菜栽培の技巧を知らなかつたそこで野菜補給の目的で日本移民を誘入したが、ベレーン上陸間際で、契約が變更され、トメアスー植民地の邦人胡椒園に配耕された。二十二家族の邦人は皆不平を云つたが、當時氣候不慣なベレーン市で、獨立して野菜を栽培してみた處で、失敗すること必然で、結果的にはトメアスー植民地に配耕されてよかつた。そうした幸運を摑んだ處から二十二家族の人々が、また運よく理解ある邦人耕地に入植した。戰後移民の大成功者と激賞される石川道喜は永野敬士耕地、下前原光次は岩間徹造耕地彼も篤農家加藤邦藏耕地、以下同航者の堤春雄、千葉久夫・宗

トメアスー植民地アライア區

澤田照男氏

TERUÓ SAWADA
C. P. 39 — Cooperado N.o 58
Belem — E. de Pará

原籍　熊本縣菊地郡合志村幾久富
渡伯　昭和五年二月　まにら丸

渡伯した時が、満三才の幼児であるから、純然たる二世と言つていい譯だ。澤田一族は兩親が早逝して、幼にして貧乏のどん底に陷いたが、その割合に後年は皆トメアスー植民地第一級の人物にのしあがつた。長兄毅はトメアスー産組の元理事で大農場主、次兄哲は産組渉外理事でトメアスー植民地の至寶的存在、脩はトメアスー郡長で政界の明星、妹能は川越邦夫夫人、妹富子は日高寅男夫人である。

その兄弟の中でも、最近めき／＼事業家として頭角を現わしてきたのが彼で、本耕地一万一千本、第二耕地（ブレウ二區池田孝志郎耕地隣）が八千本、第三耕地（アライア二區松山耕地隣）三千本の三耕地で、ピメンタ樹二万一千本を所有、生産胡椒も五十トンに及んでいる。そして耕地支配人として、千葉縣出身で東京農大卒業の白井常男（昭和三十六年渡伯）が就任、その他多くの邦人青年を雇傭、要所／＼に就かしめ、伯人労働者を指揮して經營に滿全を期している。現在満三十八才の青春多端、覇氣横溢の年輩だから、まだ／＼事業はこれ以上に伸展していく事は必然で、その前途は洋々たるものがある。一九六三年には實兄毅の住宅に劣らぬ宏荘優美な住宅を建てた。實兄は一九五四年度に、トメアスー植民地で最初の豪華な邸宅を新築したが、當時その立派なのに吃驚大原始林の眞中にもつたいないと評されたが、彼の住宅も、それに劣らない優雅なものである。いくら耕地に建てる住宅でも、仮住いみたようなお粗末なのでは、安住する氣持になれず、そうした点を考慮し思きつて建てた訳ぺある。

追懐すると、在伯三十八年は瞬く間に過ぎた。父彌太郎や、母いねが健在のうちは幼児照男は、兩親の寵愛を一身にあつめ可愛がられて育つたが、母が一九三七年五月七日。父が一九三八年十月二十七日、共に黑水病で逝去してからは辛酸な生活が續いた。

長兄毅は當時二十一才、幼ない弟妹を集めて澤田家今後の對策を錬ねつた。當時彼は十一才であつた。そして次兄哲・脩等の兄と共に世の荒波にもまれた。渡伯して恰度八年目であつた幸い長兄毅の方針がよく、それに哲や脩の兄も聰明理智で、よく長兄に從つていつたので、澤田家は戰後のピメンタ景氣に他家よりも一足先に、生産多收穫を誇り、ベレーン近郊邦人家族のトツプをきることになつた。彼も一九五〇年には分家して胡椒一万本を植え、軈て福岡縣人池田忠藏三女文香を娶り、獨立した。文香夫人は、兄毅静香夫人の妹である。既に今日は長男アルマンド武（ベレーン中学）長女エレーナ照美（ベレーン中学）二男ロベルト昭雄（トメアスー中学）と三人とも学生となつた。切に今後の飛躍を祈つてやまない。昭和二年七月一日卯年生。

後列右から照男氏・山崎健二氏・前例三兒と文香夫人

KEISHI NAGANO
C. P. 39 — Cooperado N.o 27
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地アライア區

永野敬士氏

原籍　熊本縣鹿本郡六郷村下内田
渡伯　昭和七年一月　もんてびでお丸

上掲の寫眞は、戰後派移民家族のなか、彼の耕地に就いて働いた人々ばかりが一九六三年六月二日參集して、謝恩の意味で彼を招待した時のものである。參加者は二十一家族で、既にその人々のなかでは、三・四十年の古参拓人以上に大成功し、堂々たる耕主になつている人もいるが、こうした人達が、旧耕主の溫情を忘れず謝恩會を催したのは、トメアスー植民地始めての事である。考えてみると　就労者が獨立の時永野耕主の援助で他の耕地の人々より一足先きに獨立出來た事も、謝恩會催しの一原因であつた。一般のコロノは旧耕主の惡口を云うのが當然であるが、永野耕地就労者のコロノは皆揃つて旧耕主の惡口を云わないから、彼の戰後派移民の取扱いは上策であつたと云わねばなるまい。この一事をもつてしても彼の人生道の全貌が解るだろう。

熊本肥後魂で鍛錬されているから、不退轉である。その点隣地の澤田毅と似た處があり、そのため意氣投合し、ブレウ三區地帶に共同農場を經營、胡椒三万本を栽培している。ブレウ三區と云うと、彼は一九六二年には大原始林の眞中に、製材所を設け藤橋勳に管理支配させている。トメアスー植民地は、現在郡政を布き、アカラ郡から獨立して、物凄く發展し、家屋、倉庫などがどんどん建つているが、從來村上製材所一カ所で材木が不足勝ちであつた。この機會をねらつて製材所を建てたのは時宜に適していた。

十三才で渡伯、長兄敬一が原始林伐採中死亡したので、その後に兄代りとなつて、第一線に起つた。一九四六年アカラ農民同志會結成の時は、二十六才の血氣旺盛、覇氣横溢の年輩だつたので、ウニベルサル號造船棟梁に推選され、遂に造船に成功ベレーン市まで進水させたエピソーゾがある。一九四七年弟吉春も分家し、彼は一万二千本の胡椒を植え、一九五七年には四十トンの收穫をあげた。その後増植し、現在二万本を滿植し、新井範明（旭川市出身）が、支配人として管理している。前年豪荘な住宅も新築した。往年トメアス産業組合が、大改革と共に急速に發展したときに、機械部が新設された。このとき佐藤忠雄理事と共に機械部の充實を計つたのは彼で、長期に亘つて工場トラクター係長をしていた。若い〳〵と思つていた彼も、四十四才の不惑の年輩になつた。胡椒栽培で經濟的地盤は固いが、今後製材事業の發展に伴い、益々充實するだろう。熊本縣人村上清治姉まき子を娶り、京子（ベレーン市高商）鈴子（トメアスー洋裁（ベレーン市中学）惠美子（ベレーン市中学）貴美江（ベレーン市中学）強（トメアス中学）環・尚美・敬次・スエリ（共に小学）の二男六女が健在である。兩親健在、弟吉春（敏枝夫人は横山利得右エ門妹）弟一水（とく子夫人は山田好治夫人妹）姉つじお（藤橋銅三夫人）等健在である。大正十年九月二十三日酉年生。

ボニツカ株式會社取締役であり、在伯熊本縣人會トメアスー支部長など多くの肩書を持つている。

著者もトメアスー植民地訪問の時は、必ず彼の邸宅に泊めさせてもらう。昨今は静香夫人が子女教育のため、ベレーン市に

アマゾン開拓生活三十五年の追想にふける澤田毅氏夫妻

定住しているため、外來者を泊めなくなつたが、それ以前は有名人の殆んどが彼の邸宅に宿をとつた。静香夫人は池田忠藏長女で、著者と一緒に日本から、らぷらた丸に乗船してきた女性である。少女時代から父と苦難を伴にし、なか〳〵の苦労人で彼のよき理解者である。この夫人の内助で、澤田毅家は今日になつた事は申すまでもない。次弟哲（さとし）はトメアスー産業組合渉外理事であり、弟脩（ふかし）はアマゾン地域最初の日系二世郡長で、現在トメアスー郡長として、郡の發展に盡力している。兩弟が社會的に進出し、澤田一家は益々信用をたかめていつた。

一九六〇年（昭和三十五年）ベレーン市の長谷川貞雄と一緒に空路訪日した。十三才で日本を出發したので、三十年振りの訪日は浦島太郎であつた。少年時代の夢と物凄く變つていた。日本の復興を見て、新しく事業意欲が湧いて歸伯した。「山川草木の美しさと、食生活の豊潤と、女性の優美なのは格別ですね」と著者に歸朝談を物語つたが、やはり彼の性格は日本情緒である。

若い〳〵と思つていた彼も、既に孫ができた。長女照美は栃木縣人關弘二男明と結婚している。二女晔（ベレン市高女卒業）長男功（高校三年）三男定（高商在学）四男護（高校）五男正）中学）二女千惠（中学）六男鉄也（中学）等である。父彌太郎は一九三八年四十八才で、母いねはその前年五月七日四十二才で共に黒水病で逝れた。もう二十年兩親が長生きしたら、幸福な世を送つたがなーといつた追懐する。彼も父逝去の年輩以上になつた。大正六年三月二十六日己年生。

トメアスー植民地アライア區

澤　田　毅　氏

原籍　熊本縣菊地郡合志村幾久富
渡伯　昭和五年二月まにら丸

KOWASHI SAWADA
C. P. 39 — Cooperado N.o 30
Belem — E. de Pará

その名毅＝「こわし」＝の如く豪毅果断、明朗濶達な拓人で、肥後魂の血が脈々と血液の間に躍動しているようだ。十三才の少年で渡伯したが、若冠二十一才で早くも両親がマラリヤ病で斃れ、それ以來貧乏世帯のやりくりに真剣であつた。中学校に通学中の次弟哲（産業組合渉外理事）倫（トメアス郡長）照男（アニィア農場主）隆男（ボア・ビスタ農場主）能（しのぶ川越邦夫夫人）富子（日高寅男夫人）等が幼少だつたので、それを一室に集め今後の一家協力の誓をさせた。あれから十年間は實に辛酸であつた。幸いピメンタ栽培が時流にのつたので、一氣呵成に、經済的飛躍を遂げた。

物凄く推進力のある性格で、趣味はなんでもござれである。野球は戦前から始め、戦後は特に南伯にいた鎌田穰を招聘し、今日北伯随一を誇るトメアスーチームの基礎をかためた。讀書がなりより好きで、日本は小学校しか出ないのに高級文化雑誌も讀みこなし、特に時代小説は無類に愛讀する。麻雀は既に免許をもちその方の道樂は卒業、酒も無類の酒豪で、ビールよりもウイスキー黨で、何時訪ねても白馬やスコッチ製の高級ウイスキーが食卓にならべてある。また忙中閑を求めて大公望をきめ、溪流清水で釣する彼の姿は老熟を想わしめるものがある。

トメアスー植民地で豪荘な煉瓦造りの二階家を建てたのも彼がトツプであり、一九四六年アカラ農民同志會を結成して産業組合の基礎をかためたのも彼である。他人の先端をきる彼は、一九五五年頃は既に四万本のピメンタを栽培し、當時四十トンの収穫をあげ、五千コントス（邦貨五千万円）の年收をあげていた。

彼の耕地にはこの十年間いつも戦後渡伯の青年が就労している。現在も東京農大出身の安藤純、武田南海治（朽木）武田勇雄（東京の）諸君が働らいているが、その他に過去十年間に就労家族は、數十家族に及んだ。皆それ等の人々は現在獨立し、裕福に暮している。彼自身も本耕地以外に、ブレゥ三區に永野敬士と共同で十万本のピメンタ栽培を計画、既に三万本は植こんでいる。尚第二トメアスー植民地にも、毎年米作地を耕作して、數百俵の籾を収穫している。第二トメアスー植民地と云うとその植民地設立の發案原動力は彼で、隣地の永野敬士に話しそれから同志を呼び、遂に十八人の名儀で州有地三万六百ヘクタールを、印紙代の安値で拂下げてもらつた。これを一九五二年十二月海外移住事業團に報酬なしで提供したのである。

日本の平塚市にある有名な混血育児園「サンダース・ホーム」の澤田美喜夫人が第二トメアスー植民地に二百ヘクタールの農園を築くにも彼は最初からよき相談相手であつた。一般社會の公共事業に對する理解が非常に強い。植民地は無味乾燥な處から、青少年が發足した音学會にも、後援を惜まず、樂器その他を寄贈、そしてその音樂團バンド・キングローズを中心に、トメアスーのど自慢大會の開催となつた。物心兩方面から盡す彼の義侠によつて、彼の社會的信用は益々たかく、今日はニッ

トメアスー植民地アライア南區

石川靜夫氏

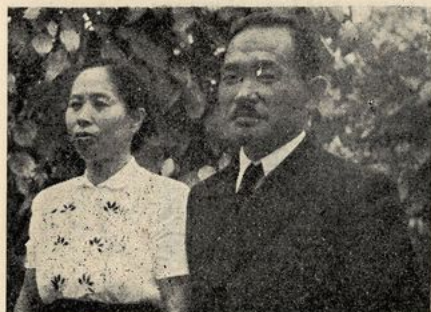
寄留地　熊本縣下益城郡松橋町
渡　伯　昭和三十一年五月　あふりか丸

SHIZUO ISHIKAWA
C. P. 39 — Cooperado N.o 135
Belem — E. de Pará

　大平洋戰爭中は、北海道から移住した南洋パラオ孤島で現地軍に呼集された。緒戰には日本はハワイ島の奇襲で大勝利をあげたが、軈てミッドウエー島の海戰で慘敗し、一年後には南大平洋の制海權を北米に把握された。それからは日本の大平洋東進基地トラック島が攻略され、遂に大平洋戰の關ヵ原と云われるサイパン島が陷落してから、ここで北米がB29の飛行基地を建設、これが致命傷となり、日本は降服した。そのサイパン島の近くにあるテニアン島、パラオ島の在留邦人は、サイパン島陷落後は孤立となり、補給食糧が無くなり、自給自足の農業も、連日の空襲で收穫なく、彼等一家も榮養失調におちいつた。幸い昭和二十年八月十五日終戰を迎えたからよかつたが、もう二・三年戰爭が長引けば、彼等一家は飢餓で病死していたかも知れない。終戰によつて昭和二十一年二月浦賀に上陸した時には、長兄猛夫は榮養失調で、遂に橫須賀で死亡したくらいであつたテニアン島の女王比嘉和子の傳記を讀むと僅か二・三十名の者が生きてゆくのに必死で、ブタ芋を植え、漸く糊口を凌いだと云うからパラオ島の如きは人口多く、飢餓がせまつていたことは確かであろう。彼は九死に一生を得た記錄の持主である。

　石川兄弟は長男猛夫（死亡）二男政行、三男道喜、四男静夫五男辰明で、その他に姉妹を數えると十人以上いるが、今日皆富裕な生活をしている。彼は父秀太郎、母しづか兩親の四男に生れた。生れたとき泣きもせず、おとなしく生れたので、靜かな赤かちやんだと云われ靜夫と名づけられた。四十七才の今日まで他人と口論喧嘩をしたことなく、親がつけた名前の通り、物靜かで、近隣の人々と共榮共存に生きる人物である。

　父は德島縣出身、明治四十年初期に藩主蜂須賀侯が、北海道雨龍郡雨龍村に蜂須賀農場を建設した時に、移住したので、彼はこの農場で生れ、道產子である。大正七年に出生して、二十一才まで北海道開拓に健斗、ついで一家は南洋パラオ島に移住した。南拓ボウリKKの土地でパイナツプル栽培に從事した。同島朝日植民地で滿十年働き、昭和二十一年日本に復員し熊本開拓地に腰をすえ、滿十年働き、そして昭和三十一年アマゾンに移住した。ブラジル在住も足掛十年になる。兄道喜が先伐隊で移住したので、それを賴つて永野耕地に入植した。實兄正行や弟辰明などと一緒であつた。永野耕地二年後に獨立してピメンタを栽培、現在六千本を植えている。貞節のとしえ夫人の協力は賞すまでもないが、子供は一男四女で、長女保子は渡伯前に熊本縣人沖田榮一と結婚して熊本縣在住、二女育子はブレウ區德田耕地の月俣新一郎に嫁づき、三女廣子は洋裁に精勤、四女賀代子はトメアスー中学二年、末子和雄は男子として一粒種である。溫厚篤實な拓人石川靜夫家の幸福を祈る。大正七年四月二十三日午年生。

HARUO ONUMA
C. P. 39 — Cooperado N.o 33
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地アライア南區

大沼春雄氏

原籍　山形縣北村山郡宮澤村市野々
渡伯　昭和四年十二月　さんとす丸

一男九女の子寶があるが、その一粒種の長男が九番目に生れて、當年まだ高校一年生であるのは淋しい。これが反対に長男・二男・三男・四男と男性が最初から續いたら、大沼家はトメアスー植民地はおろか、北伯全地域で随一を誇る事業家になつていたであろう。天は二物を與えなかつたそれでも一九五六年頃は一万本の胡椒から四十トンを収穫、邦貨五千万円を儲け同年二千万円を投資して四百五十平方米の豪壮な住宅を建てた。その前年一九五四年に夫婦で母國を訪問し、墓參をすませ、自由奔放の氣慨を示した。

トメアスー植民地自治團体たる地區連合會長に就任している。産業組合とは別働隊で、自治團体の相談役である。既に一九六三年度總選擧で日系から澤田脩が當選したが郡長に當選させるのに、票數がなくて悪戦苦闘したので、戦後派移住者にも殆んど歸化してもらい自治團体の實績をあげている。往年は産業組合理事、第二トメアスー植民地建設委員會副會長で事實上の會長、あの粘着力で到頭三万ヘクタールを物にした。絶対に立腹しない円滿福德居士、午前はエビス、午後は大黒で毎日起きる紛争事件から、各團体の選擧運動まで仲裁に入る。勿論男性ばかりでなく、女性を相手にする結婚問題も妙手をうち、その祕傳でまとめた夫婦は六十余組もいる。南伯でも、この位い他人のために盡力する人を、著者もみたことがない。自分の耕地經營は丸でそつちのけである。敵のない點では、植民地内でナンバーワンであると著者は確認する。座談の名手で、世情に精通し彼と話していると三・四時間經つのはすぐである。夫婦とも來客を喜び、大沼御殿には、特に日本座敷を備え、疊で一杯やれる準備をしている。美津子夫人は賢夫人の譽たかく、著者など何時訪づれても一宿を乞い、ビールをタラフク飲ませてもらう。夫人の父山口清松はアカラ植民地在住四カ年で歸朝し、日本で永眠した。

彼は二十三才の時に、南拓KK重役千葉三郎（現代議士）弟福島五郎の薦めでトメアスーに入植した。第二回移民で當時押切他男（産組理事長）など獨身組が十人いて、その一人であつたアサヒザール農場に入り、數奇の運命を辿り、マリキタ農場を經て、アライヤ區で、カスタニヤ、カカオ、そして最後にピメンタを植えて、成功した。その間マラリア病とも斗つたりして死線を越えた。だから余り能書を云う移民成功者のテガラ話をききたがらない。それ以上に彼は命がけで開拓戦線を突破したからである。

子供等も皆成長して孫も多い。長女靜子（横山猛夫人）二女節子（細川浩夫人）三女和子（澤田隆男夫人）四女清子（相原正彦夫人）五女春美（猪股耕治夫人）六女榮子（土居準司夫人）七女多美子（高校卒）八女八千代（師範在学）長男パウロ（高校一年）九女（中学）等である。明治四十二年四月六日酉年生

半目には遂に獨立し。そのスピード振りには舊耕主連も啞然とした。

軈て次から次へとピメンタを栽培、遂に一万二千本を滿植させた。彼の耕地が拓けると、その奥に篤農家石川道喜を始め、新進精鋭の拓人がどし／＼入植し、今日の隆盛を誇るアライア南區が拓かれたのであつた。勿論ここまでくるには、糟糠の夫人の協力が偉大だつたことも認めねばなるまい

戰後派トップの八巻家一同（右は大枝弘君）

由來宮城縣は東北でも雄藩であり、伊達正宗時代から、支倉使節をして遠くイタリアのローマ法皇まで書簡の捧呈をした位い海外の知識吸收に醒めた處であつたが、明治維新後には兎角、海外に對し退嬰的となり、隣縣福島や、山形などに非常におくれをとつた。この大南米でも數の上でもそうであるが特に質の上では大物の出現が少ない。そうした折に、戰後の八巻一家が旭日昇天の勢いで、先輩一流事業家にせまつているのは、誠に目出度いことである。

長男一男は十七才で渡伯、隣地に住む新潟縣人鈴木綠郎長女みどりを娶り、長男南米生（ナミオ）長女元子、二男一實の三兒に惠まれている。彼は父に似て剛毅果斷、こうと思つたらすぐ自分の決心の赴くままに驀進する直情徑行型で、頼母しい青年である。當年二十九才、恐れを知らず事業慾旺盛、大いに活躍してもらいたい。そして父の成し遂げなかつた希望を達成してもらいたい。弟佳和はいまだ獨身で兄一男のよき協力者、妹歡子はベレーン市高女通学中、末妹まり子は洋裁学校に通つている。

從弟大枝弘は昭和二十九年六月あめりか丸で渡伯し、今日まで耕地經營に盡してくれた青年である。故父菊治の姉の子で、從弟に當り、滿十年も勤儉力行してくれたので、その恩返しにアライア東區の宮内三郎耕地を買收（ピメンタ樹二千五百本）一九六四年四月二十三日に、トメアスー港永田かつ子と結婚式をあげ、獨立した。義理人情の堅い故菊男の血が、一男にも脈々と流動、盡すべき處は盡した點、故人も墓石の下で冥福をかこつているだろう。著者も彼の潔白な性格をこよなく祝福したい。

故鄕を出て滿十二年、既に渡伯後事業の第一期建設時代は終つた。これから後の十年間は飛躍時代である。切に今後の活躍を期待してやまない。好漢冒險を愼しみ、自重を期したい。昭和十一年七月十二日子年生

トメアスー植民地アライア南區

八巻一男氏

KAZUO YAMAKI
C. P. 39 — Cooperado N.o 97
Belem — E. de Pará

原籍　宮城縣伊具郡丸森町
渡伯　昭和二十八年八月　あめりか丸

戰後アマゾン邦人移民が開始され、第一回ジュート移民に續いて、彼は第二回目の移民で、ベレーン市近郊ピメンタ栽培者では、トップ移民である。當時トメアスー植民地入植者二九家族、百八十三名であつたがどの人も既に滿十二年になり、皆戰前派と同格位に成功している。その二十九家族の中でも特に光彩を放つているのが八巻一男家であつた。

渡伯した當時彼は滿十七才の青年で、父菊男（明治四十二年二月十一日生）は、四十五才の思慮分別盛り、あれからアライア區の大沼春雄耕地に入植した。そして父菊男は一九六一年九月七日食道ガンで逝去するまで、實に七年間は血みどろの生活で總ゆる辛酸苦勞をなめた。然し父は貧乏生活でも、實に心は明鏡止水で、戰後派移民にかかわらず、トメアスー移住地發展のため社會的に貢獻した。特に次代を擔う青年處女の將來を考慮青年には柔劍道・野球等のスポーツを奬勵させ、柔道部を堤四段と共に結成、一九六〇年トメアスー植民地創設三十周年記念祭には、副會長に就任して大役をはたした。州知事を始め伯人高官に日本の特技柔道を紹介、古元修司二段、高尾平八郎二段、戸田修治二段以下青少年八十余名の乱取を観賞させたお手並は、一寸眞似が出來得ない藝當であつた。

故八巻菊男氏

植民地中有名な酒豪で、飲めば生來の豪放磊落な處が益々現われ誰彼となく御馳走し、その點交際も明朗で、友人も全植民地に及んだ。戰後派の中には、いやしい酒のみがいて他人の酒ばかり、たかつて飲み歩く者が、サンパウロ州方面には多いが、こんな酒豪と違つて、持金の全都をはたいて他人に御馳走した。余り飲み過ぎたからではないが、食道ガンで五十二才の活動期で死んだのは惜しいことであつた、尠くとも、まだ十五年は生きて社會に盡してもらいたかつた。支那事變で出征し、滿州で負傷して日本に還り、戰後移民再開には、パラグワイを志望していたが、幸いアマゾン移民が手取り早いとアマゾンに變更して、開拓に挺身した菊男であつた。アライア區の戰後派移民十九家族が、大原始林を開拓して、トメアスー植民地隨一を誇る模範地域を創設した曉に、アライア區から獨立して、アライア南區を結成、その自治團体の最高幹部となり。快刀乱麻の手練をみせ、地域の發展に盡した。幸い配耕地たる大沼耕主の理解ある後援もあつたので、同耕地就勞中に、隣接地の密林を伐採し、長男一男、二男佳和の青年達は大沼耕地の經營に協力、父菊男夫婦は、自分の荒山耕地開拓に不眠不休の建斗をつづけ、一年

MICHIYOSHI ISHIKAWA
C. P. 39 — Cooperado N.o 98
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地アライア南區

石川道喜氏

原籍　熊本縣下益城郡松橋町
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

アマゾン戦後派移民のトップ・クラスで事業家として、實行力旺盛なばかりでなく、精勵刻苦・思慮分別があり、何事に對しても綿密繊細な心がけの人物である。既に滿十年の開拓生活であるが、三・四十年組の古參者以上の收益をあげ、本耕地一万六千本、分耕地五千本、合計二万一千本の新樹を育成、一九六三年は七十トンの收穫があり、その收入の點でも他の新移民の追從を許さない。しかも農場設備は、トラクター、貨物自動車、乘用自動車、胡椒乾燥機、脫皮機、除草耕耘機、自家發電機など、一切は完備されている。しかも社會的には、トメアスー産業組合監事に推選され、トメアスー地區連合自治會には、アライア南區の代表幹事に推されている。こうした公職に就くほど、人望が深まってきた。

彼の生地は德島縣で、父秀太郎、母しづかは、舊藩主蜂須賀侯が、北海道雨龍郡雨龍村に蜂須賀農場を建設したときに北海道に渡つた。だから明治四十年代のことで、彼は長兄故猛夫、次兄正行等と共に北海道生れであつた。北海道時代が二十余年そしてこの寒地開拓から、昭和十一年五月十日二十才の時に南拓ホウリ株式會社が經營する、パラオ島朝日村植民地に移轉した。パラオ島は南洋日本委任統治領で舊ドイツ領、大正七年に第一次世界大戰後日本領になつた處で、彼の所屬の會社はパイナップル罐詰製造が目的で、松江南洋興發株式會社の砂糖工場畑と共に南洋で有名であつた。

このパラオ島で活躍すること實に十カ年、大平洋戰爭中も島でくらした。軈て終戰となり昭和二十一年二月浦賀に上陸、軈て習志野練兵場收容所に入り、間もなく熊本縣開拓地に移つた。この開拓地で約十カ年働らいたが、北海道で生れ、パラオで青年期を過ごした彼等は熊本辯が解らず「よそもの」と云われ、入植當時は相當精神的にも苦勞した。幸い開墾の方は不毛に近い土地であつたが、耕作して良い畠となし、多大の收穫をあげた。然し一度北海道の雄大な大地でくらし、大南洋のパラオ島で自由奔放に育つた石川一家は、金は儲けてもセセコマシイ猫額大の開拓地に住む氣になれず、到頭アマゾン移民が戰後再開されたので、好機至れりとばかり、卒先して應募、遂にトメアスー植民地に入植した。

永野敬士耕地に入植したが、耕主は熊本縣人、理解ある後援で一年二カ月目に獨立し、三千本の胡椒を栽培する大馬力をかけて今日に至つた。父秀太郎は昭和三十一年九月渡伯當初に逝去、母は健在彼はぶし夫人との間に二男二女があり、長男靖夫（パラオ生れ）二男邦夫（熊本生）は耕地の管理に健斗、長女節子（中学校）二女ふみ子（小学校）で既に成長した。同航した連家族の妻弟笹原金三郎も隣地で大農場を經營、妻甥野口義賢はマリキタ區で獨立している。大正五年六月三日辰年生。

YOSHIO MIYAGUE
TSUNEKICHI TSUDA
C. P. 39 — Cooperado N.o 262
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地アライア南區

三宅義雄氏

原籍　山形縣戸花澤市野邊澤
渡伯　昭和二十九年七月　あふりか丸

津田常吉氏

原籍　東京都澁谷區幡ヶ谷笹塚町
渡伯　昭和三十年十月　ぶらじる丸

三宅義雄は父龜吉、母はるの兩親の長男に生れ、中学卒業後建築業に従事していたが、兩親の渡伯でアマゾンに移住した。父は不幸一九六二年八月八日五十六才で、マラリア病ー黒水病で逝去した。山形縣出身の篤農家であつたが、惜しい事をした。配耕地大沼春雄耕地に丸三年在住、その後に半獨立農で三ヵ年その間に一万本の胡椒を栽培し、遂に今日堂々たる經濟地盤を礎きあげた。そして二階家屋を新築し、農場經營を機械化し、乗用自動車、貨物運搬自動車、トラクター、耕耘機消毒散粉機等が完備している。母はるのは健在、彼はブレウー区佐藤正一郎長女あき子と一九六二年十二月結婚した。姉よしのは東京都出身津田常吉と結婚、隣地に住居している。妹てる枝は洋裁に、妹美津枝は洋裁を終え、パーマを修得し、いま開業している。滿二十九才の青年拓人の今後の活躍を期待してやまない。(昭和十一年六月十五日子年生)

津田常吉は建築業の父竹七郎、母すがの兩親の四男に生れ、少年期を終えて建築業に年期を入れた技術者で、特に日本間建築に卓越し、大沼春雄邸宅の日本間は、彼の腕によつて完成された。舊耕主大沼春雄の呼寄せで、二十六才の獨身時代に渡伯同耕地に就勞中の三宅義雄姉よしのと結婚した。義弟三宅義雄が大沼耕地を出て獨立した時、義弟と一緒に移轉、三宅耕地の隣りに耕地を建設、五千本のピメンタを栽培した。然し本職の建築業が忙しいので、耕地は義弟等に管理してもらつている。父竹七郎が本職の大工だつたので、厳格な父について習つた建築業なので、ブラジルで憶えた半パ大工と違つて、腕は立派なものである。だから各地方から注文が多く、請負きれない程仕事は多い。夫婦の間に長女初枝、二女尚美、長男常義の三児の内、長女初枝が早逝したのは氣の毒であつた。三宅義雄、津田常吉兩義兄弟はこうして隣接耕地に住み、仲睦まじく事業を發展さしているから、將來大きな何物かが生れてくるだろうと期待して止まない。

上段右側から母はるの夫人、故父龜吉氏、耕主義雄氏
弟鉄雄君、あき子夫人
下段右から妹てる枝、妹美津枝、津田常吉夫妻、津田尚美
津田常義

一九三六年十月二十日には聖州へと移轉し、その際同行を奬められたのだが、彼は拒絶し、遂にトメアスー植民地を埋墓の地ときめ、隠忍自重した。あれから一九四五年すゑの夫人が逝去したり、總ゆる災難が續いたが、遂に初志を貫徹させ、トメアスー植民地の氏神になつてしまつた。第一回草分でトメアスー植民地に最初より踏み留まり健在なのは、彼一人になつてしまつた。前年まで木村總一郎・加藤友治の二人がいたが、到頭前年物故した。第一回移民で一度植民地を退散し、再度歸植した伊藤勇、佐藤義雄を加えると三人である。

渡伯の動機は上布野部落の土居勘三郎の義父小太郎が鐘紡社員で南拓アカラ植民地勸誘員だつたので、その薦めで渡伯した父岩藏の三男に生れ、岡山十七師團の兵隊生活を味い、除隊してからは蹄鉄工として、何不自由のない生活をしていたが、生來の負けじ魂は遂に海外に身を躍らせた。時に年齢三十一才であつた。長女文江と三女八重子を日本に殘し、長男元と二女三江を伴い、一家四人で入植したアサヒザール區に入植、創業當初の開拓地のこととて筆舌に盡し難い辛酸なことのみであつた。一九三六年カカオ栽培直營農場閉鎖後は、希望の永年作物が駄目となり、米作専門で更生の道を辿るしかなく、一九三二年（昭和七年）からイビチンガ区で米作耕地を經營毎年々々荒山を伐採し四百五十俵の收穫をあげ、全植民地の米作王となつた。

トメアスー植民地重鎮山田義一氏

一九四五年終戰、翌一九四六年アグア・ブランカ区に移り、ゴムとカスタニヤを栽培したが、ピメンタ栽培を故加藤友治に薦められ、同年千八百本植えた。そして胡椒が生産するまで水車による精米所を經營、傍らトマテ、野菜で生活費を補つた。もう入植して二十年目に近かつたが、まだ貧乏世帯であつた。幸い胡椒が生産され、それから順風滿帆、今日は成樹三万本、九十トン以上の生産量である。一九五四年には訪日し、廣島縣下にアマゾン熱を吹きこんだ。

貞節の譽たかいみつよ夫人の協力は涙ぐましい程で、この家庭の平和の中心人物である。長男元（はじめ）は、一家經濟發展の原動力で、現在トメアスー産組理事で、昨年理事選擧で最高點をとつた人望豊かな人物で、二才で渡伯した準二世である豊江夫人は廣島縣人今村靖一二女で、夫婦の間に、里子（早逝）旭、とき子（一九六三年十二才で輪禍）充（みつる）工（たくみ）亘等が健在である。長女文江は日本で山田家を嗣ぎ、二女三江はモジ市で氏家勇に嫁つぎ、三女八重子は日本で佛門を嗣いでいる。二男充（まこと）は小林仁治令嬢照子を娶り分家獨立、四女すみれ（早逝）五女和子は濱口正雄に嫁づき、三男昭（死亡）四男弘と五男克は聖市で勉强、六男義（ただし）はトメアスーで学校、末子とき子は早逝した。心から山田家の幸福を祈り、彼の長壽を祝福したい。義一氏（明治三十一年五月十三日戌年生）元氏（昭和二年五月十八日卯年生）

トメアスー植民地アグア・ブランカ區

山田義一氏
山田元氏

原籍　廣島縣双三郡布野村
渡伯　昭和四年七月もんてびでお丸

GUIICHI YAMADA
HAJIME YAMADA
C. P. 39 — Cooperado N.o 19
Belem — E. de Pará

父山田義一は一生を農に生きる拓人で、トメアスー植民地第一回草分入植者である。農聖二宮尊徳みたようなタイプで、決して農業以外のことに出娑婆らない。彼は「己を知つている」譯で、その點が偉らい。トメアスー産業組合理事になつても、相談役的理事で、現場業務にたづさわらなかつた。

毎朝午前四時半起床　午五時半頃前は夏冬を問わず野菜畑に出て新鮮な野菜の手入れに余念がない。そして眞暗くなるまで働らいている。アマゾンの酷暑乾燥期が五・六カ月も長びくとトメアスー植民地は殆んど、水が少ないから散水も出來ず、野菜に不自由をする。降雨期はこれまた長期に亘るので、病害虫が多く發生して野菜が出來ない。然し彼の農場野菜畑には、何時行つても新鮮な野菜が色とりどりに緑色を漂えている。見ただけで食慾をそそるが、こんな時期には、他の農場主は野菜缺乏で、困難している。氣候不順で野菜が出來ず損ばかりするので、野菜作りがいないのである。在住者は野菜不足でビタミンBが不足、果物の缺乏でビタミンCが皆無、軈てマラリア病に罹ると抵抗力がなく、間もなく病歿する。彼はこんな事を考えて、數倍も働き健康について對策している。

夜は必ず佛壇の前で經を讀み、故人の冥福を祈つてから寢に就く。朝と夜のこの日課は重病でない限り缺かしたことがない。

山田元氏夫妻

廣島縣出身だが、同縣は西本願寺派の盛大な處で、それで彼も同門の信者である。一九五三年大谷光照夫妻が巡錫された折同家に宿を定められて以來、殆んど佛教の事は、一切を世話している。特にお墓の事など、細心な注意を拂い、献身している本書本論文中のトメアスー植民地物故者名簿も、彼がタンネンに記錄して、保存した帳簿から寫したものである。ピメンタ黄金時代に、胡椒胡椒と無我夢中になつているので、宗教じみた事など誰も關心をもつまでに至らない譯である。その點彼がこうした方面に老骨をひきさげて東奔西走してくれるので、ピカ一的存在で、誠にありがたい。

一九三六、七年のマラリア病蔓延時代は、四女すみれ(四才)も病歿し、一家全部が罹病したので、退植しようかと幾度も決心した。同村人同字でしかも一緒に渡伯した土居勘三郎でさへ

トメアスー植民地アグア・ブランカ區

鶴田藤助氏

原籍　熊本縣菊地市隈府町
渡伯　昭和二十九年九月　ぶらじる丸

TOSUKE TSURUDA
C. P. 39 — Agua-Branca
Belem — E. de Pará

夫婦とも福徳円満の人物である。非常に教育に熱心な人で、長女綾美は日本で高校出身、長男正憲は聖市住友銀行勤務傍ら勉强、四女里美もサンパウロで就学している。余りコセ〳〵して金をためない性分である。

昭和二十九年ぶらじる丸處女航海で渡伯、マナカプル植民地第四次三十家族一八三名と共に、ベラ・ビスタ区に入植した。瘦地で現在一家族も邦人は残留していない處で、それでも一年二カ月開拓地に辛抱していた。十年前著者も訪づれたが受入態勢も出來ず、植民は混乱した、トメアスー植民地池田亨耕地に移轉して好調、一九五六年（昭和三十一年）から歯科醫を開いた。日本からの歯科醫であるので評判はいい。尚ピメンタ園も經營し、既に四千本を植えた。同航海で親しい熊本縣出身の古山克彥に管理させている。一九六三年度は、ブラジリア首都で隨一を誇る農場を建設している三分一致司農場を訪づれた。同氏は同航海でマナカプル植民地の入植者、裸一貫でブラジリアに飛込み、模範農場を完成した篤農家で、視察のついでに都市住宅地区を購入し、ついでにサンパウロ市まで脚を伸ばした。長女綾美は國広青年と結婚し、聖州カンピーナス市在住二女美穗子はトメアスー産業組合勤務の下小園昭仁に嫁づき、三女明子と、伯國生れの二男雄二が在宅している。明治三十九年四月二十三日午年生。

ピメンタ園
歯科醫院

鶴田藤助
妻　**多喜子**　出身　熊本縣菊地市

下小園昭仁
妻　**美穗**　出身　鹿兒島縣大口市

トメアスー植民地アグア・ブランカ區

野原丈治氏

原籍　廣島縣廣島市大手町
渡伯　昭和十年七月　あふりか丸

JOJI NOBARA
C. P. 39 — Cooperado N.o 21
Belem — E. de Pará

「オギャー」と生れると、スナオな顔をして笑つているようであつた。面白い子供が生れたと云つて、ジョージ、ワシントン（北米第一回大統領）にあやかつて「ジョージ」と名づけられた。生れたのはハワイ島であつた。父啓太郎は、日本で履物職人であつたが、二十二才で船員、二十四才で外國航路に乗り、ニューヨークで脱船、ニューオリンス市を経て在住四年、軈てハワイに渡り、ハワイ生活十余年に及んだ。

ハワイの生活は常に悠然たるもので、ブラジル以上に常夏氣分が味わえた。丈兒はこの豊かな島でオウヨウに育つたので、小事に拘泥しない春風駘蕩の性格が備わり、明朗な少年となつた。ダーグラス・フエアンバンクスやエデー・ボロの西部劇映画などをみて樂しむ少年であつた。昭和七年十月父と共に、廣島市に戻つたのは滿十七才の時であつた。その少年が、日本に歸つた當初は日本の嚴寒はつらかつた。そして父はハワイでためた金で履物商を開店したが、広島市に住んでみてハワイの日本人と性格が違うようであつた、何處となくコセ〱し青年丈兒にも住みにくい處だと思つた。父は青年時代からアメリカで脱船する位の冒險好な男だつたから、三年したら、もう日本の生活にコリ〱した、と云つて再びハワイに戻るのもイマ〱しいので遂に、南米に眼をむけ、南米拓殖會社のアカラ植民地に入植した時に彼は二十一才であつた。

入植してみて驚ろいた事は、天國ハワイと違つて、マラリア病の巣窟で「緑の地獄」であつた。ここで三年在住し遂に植民地を見かぎつて退植、ベレーン市に出て郊外ウナ街道で野菜栽培に努力した。この間、著者は彼等が野菜栽培していた場所を見にいつたが、もうあすこは住宅地になつていた。野菜も最初は賣行が惡かつたがその内に漸くよくなつたと思つたら、日米戰爭、そして樞軸國民住宅の焼打事件と續けさまで、彼等は一時警察に監禁され、軈てアカラ植民地に移された。ここで、遂に今日まで二十二年間のトメアスー生活が始まつた。

彼の人生はハワイ生活十七年、日本生活三年、ブラジル流浪生活七年、トメアスー定着生活二十二年と四段に別けられる。本當に有意義だつたのは、トメアスー生活であつた。十字路で米作と野菜栽培に健斗、すぐ翌年は熊本縣出身の竹下勝次三女みつ子と結婚し、父と別れて獨立した。みつ子夫人は昭和八年十三才で渡伯し、總ゆる艱難苦勞をなめた女性で實母や實弟はアライア區に在住している。ここで一九五〇年から胡椒を栽培、マルキタ分耕地と共に一万二千本を滿植、住宅も新築した。長女丈子（たけ子）は聖市赤間女学校で洋裁研究、以下英兒、秀子菊枝、二郎等健在である。彼と共に永年くらした母が昨年逝去したのは惜別であつた。大正四年五月八日辰年生。寫眞上は野原夫妻に三兒、下右たけ子、左英兒

トメアスー植民地アグア・ブランカ區

濱口正雄氏

原籍　兵庫縣尼ヶ崎市
渡伯　昭和二十九年七月　あふりか丸

MASAO HAMAGUCHI
C. P. 39 — Cooperado N.o 200
Belem — E. de Pará

彼の出身地は兵庫縣尼ヶ崎市であるが、父末松は長崎縣五島列島福江市出身で建築業が本職、終戰は福江市で迎えた。だから渡伯の時は長崎からで一九六四年に長崎縣移住團体參事永田猛が、ブラジル移住視察にきたときは、具さにアマゾン地域までもきて、濱口耕地を視察した。やはり兵庫縣に籍があるが、父が長崎縣出身なので、長崎縣人は同縣の好誼で訪ねてくる譯だ。

父は日本でも一流大會社である尼ヶ崎市神戸製銅所に勤務した。長男照雄、次が彼で、弟敏雄とつづき、兄も弟も既にマルキタ区で獨立、堂々たる農場主となり、兄は篤農家加藤福松長女和子を娶り四兒に惠まれ、弟敏雄もきみよ夫人との間に二兒に惠まれ、共に幸福にくらしている。父は一九六四年三月空路訪日した昭和二十九年の渡伯であるから、滿十年振りの墓參訪日である。空路で訪日ということは三・四十年の古參拓人でもなか〳〵出來ないことで、この訪日の旅費を仕たてた兄弟三人の親孝行振りは賞讃してしかるべきである。世の多くの人は、訪日よりまず住宅、まず自動車と、色々農場設備をしたがるが、老齢な父は一度軽い腦溢血を患いそのため十年目に日本が見たくて戀しくなり　その熱望をかなえるべく、三兄弟はあらゆる物は後廻しにしたのであつたブラジルの邦人社會も昨今は個人主義が徹底化されつゝあり、父子の間でも結婚して獨立分家すれば、經濟的問題は一切援け合いこしないという家庭が多くなつた。そうした折に、この濱口家三兄弟の溫い心は、すさんでゆく邦人社會の空氣を溫めそして清淨化する上に大いに役だつた。

大体濱口家は、昭和二十九年七月あふりか丸で渡伯して、すぐトメアスー植民地山田義一耕地に入植した。アグア・ブランカ分耕地で約三カ年就勞した。恰度ピメンタの黄金時代で、舊移民は贅澤の限りをしていた。千ミル・クルゼイロが一万円した當時で、三・四千ミル・クルゼイロ（邦貨三・四千万円）も收穫する者もおり、彼等も將來ピメンタを植えようと熱望した幸い耕主の山田義一は人情豊かな人物で、經濟的にもトメアス１植民地の第一人者であつたので、耕主の理解で濱口家も三カ年後には獨立した。彼は耕主の五女和子（當時二十才）と結婚し義兄山田允耕地の隣接地に胡椒を栽培し獨立した。幸い義兄等の絶大な、協力があつて、一九六五年には七千本を滿植し、堂々たる二階造りの住宅も新築し、貨物運搬自動車、自家用自動車、トラクター、除草耕耘機、消毒散粉自動機等の農場附属品を完備、自宅も自動發電機を備えて電化し、冷藏庫、ラジオステレオ等文化生活に浴することが出來た。愛妻和子は幼少時代から父や兄と共に苦勞した女性で、溫情貞節な人柄である。彼のよき伴侶として、濱口家は榮えるであろう。夫婦の間にあつ子、二枝・ゆかり・正和の一男三女に惠まれている。昭和八年十一月十二日酉年生。

トメアスー植民地アグア・ブランカ區

山田　允（まこと）氏

父戸籍　広島双三郡布野村
伯國生　昭和八年二月十六日

MAKATO YAMADA
C. P. 39 — Cooperado N.o 187
Belem — E. de Pará

父義一は昭和四年の渡伯第一回草分開拓者で、アサヒザール直營農場に入植したが、カカオ栽培の前途に不安を感じ、一九三二年（昭和七年）イピランガに移りここで米作専門の農場を拓いた。ここに移つた翌年彼は出生した。父が渡伯して四年目であつた。

それから三年目には、南拓カカオ直營農場は閉鎖、直營農場に就勞した者は、明日からの食生活に窮した。またいままでカカオ栽培に力を注いでいた自營農民も、役にたたないカカオ栽培に注いだ無駄な努力をなげいた山田家はその悲境に際し米作方面に力を注いでいたので、少しでも被害が少なくてすんだ。

一九四五年八月十五日に大平洋戰争が終つた。十二才になつたばかりの少年允も母國の敗戰は悲なしく、少年の心に淋みしさを感じた。然し最も大きな衝動を胸にうけたことは、母すゑが終戰後二十五日目の九月十日に病歿した事であつた。母の逝去は一生忘れることの出來ない痛恨事であつた。その悲しみの土地に思いを残して、翌一九四六年にはアグアブランカ区に移つた。この頃に父は米作専門の傍ら、水車による精米所を經營していた。今でもその精米所のあとは残り、水車を廻した水は、當時を永遠に偲ぶが如く流れており、筆者はそれを眺めて、感無量にせまつたことがある。當時山田家は年收籾五百俵以上生産し、トメアスー第一の多收穫者であつた。毎年々々荒山を伐採して新植してゆく米作だから、二十余年の米作生活では、總算してみると五・六百ヘクタール耕作しただろう。

父はアグア・ブランカ区に移轉と同時に、ピメンタを植えた最初千五百本であつたが、それから毎年殖やした。少年允は、聽て青年になり父や兄に協力して耕地の經營に健斗し、その甲斐あつて父は一九五四年六月訪日、そして翌年は二万五千本の胡椒園を完成、五十トンの收穫をあげ、澤田毅農場と共に兩横綱と公稱されるに至つた。これまでに至る苦心は筆舌に盡し難かつた。一九五八年獨立分家し、宮城縣人小林仁治令孃輝子と結婚した。輝子夫人は同区小林孝造（木村陽一郎妹房子の夫）關伯一麗子夫人などは姉弟である。農場は一万三千本の胡椒を植え、また一方十字路で商業に發展している。夫婦の間に一允（かずよし）・二允（つぎよし）・三（允みつよし）・史允（ふみよし）の四兒に恵まれている。寫眞は左から輝子夫人、（中上）允氏、（中）史允、（右）一允、三允、二允

トメアスー植民地アグア・ブランカ區

木村正三郎氏

原籍　秋田縣北秋田郡早口町季代
渡伯　昭和八年四月　りおでじやねいろ丸

SHOZABURO KIMURA
C. P. 39 — Cooperado N.o 276
Belem — E. de Pará

若冠十五才の時に、長兄總一郎の呼寄せで昭和八年四月りおでじやねいろ丸で渡伯した。弟正四郎、姉とくよ（設樂市太郎夫人）母いとの三人を連れた。同航海に同縣人加藤三郎がいた。十七家族入植したもののうちトメアスーに在住しているのは、加藤三郎と共にたつた二家族だけになつた。

兄の耕地で米作・野菜などを栽培した。カカオ栽培が駄目になり、植民者は前途に希望がなくなつた。その日／＼は米作と野菜とで補つたが、永住の決心はつきかねた。そこへもつてきて一九三七年頃から始まつた黒水病の蔓延である。赤い血の小便をして。發熱二・三日目に病歿する悪魔のような病氣でこの流行のため、二・三日おきに植民者が死んでいつた。そこでこの病魔から脱れるために、一九三九年遂に彼等はサンパウロ州へと移轉した。前年退耕者が一一九名あつたのに、一九三九年は四六五名と急激に増えていた。

サンパウロ市に着いて、弟正四郎と共にフエランテになつた戰前のこととて、まだ聖市人口は百万人ぐらい、その上に市民は殆んど野菜・果物を喰べなかつた。だから邦人フランテは毎日市場を移動して休日がなかつた。そして蔬菜・果物の卸賣する中央市場に、午前二時頃出かけなければならないし、激労も酷どかつた。表面は都會人として安逸にみえるが、その生活の裏面は惨めであつた。フエラーから歸宅する頃は午後二・三時頃で、それから晝食であつた。毎日十四・五時間も働いたが、それでも生活は樂でなかつた。と云つて聖市郊外の野菜作り、バタタ栽培、養鷄も當時は市民の購買力がなく、邦人農民は、實に貧乏していた。少しでも貧乏から逃れようと、仲間卸商人の手を經ないで生産者から直接消費者への方法を考えだしたのが、コチア産業組合の誕生であつた。その頃は今と違つて邦人農家へ金融する銀行の機關は一つもなかつた。

彼等もそれでフエランテを止めて、農業に轉向する訳にゆかかなかつた。惰性の生活が十二年もつづいた。恰度トメアスーはピメンタの黄金時代になつたので、一九五一年兄總一郎の薦めで、義兄設樂市太郎家族と共に、再びトメアスー植民地に戻り、兄の隣地に胡椒を栽培した。幸い時期がよかつたので一九五五・六年頃の好景氣には一寸あたつた。あれから滿十四年、現在八千本を完植、二十四・五トンの收穫をあげている。

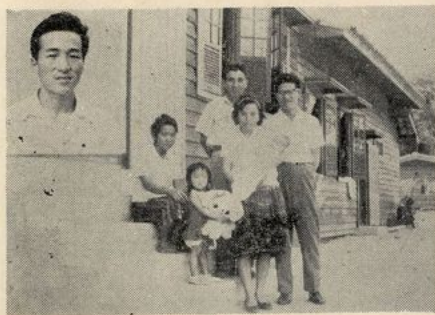
とし子夫人はグワルリョスに在住の宮城縣人高橋休助令嬢で伯國生れである・義兄高橋久雄は「生長の家」の幹部でタボンに在住している。彼等夫婦は和生・進・富美子・和三・元子・五十子・子郎の四男三女に惠まれている。同航の弟正四郎は長年トメアスー産業組合聖市支店長であつたが、兄總一郎が常務理事を退職する時に一緒にやめて、現在獨立して木村商會を經營している。子弟の教育と、自分の健康のために聖市移轉を希望しこいる。大正七年十月十五日午年生。

MASAYUKI ISHIKAWA
C. P. 39 — Cooperado N.o 109
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地アグア・ブランガ區

石川正行氏

原籍　熊本縣下益城郡松橋町
渡伯　昭和三十一年五月　あふりか丸

石川四兄弟（正行・道喜・静夫・辰明）はどの人物もみても物静かである。多分死んだ秀太郎の感化によるものだろう。父秀太郎は昭和三十一年九月七十三才で永野耕地で逝去し、母しづかは健在で末弟辰明のマルキタ區耕地で余世を送つている。

彼等兄弟は運命の放浪児で、ブラジル永住までに各地を流轉した。大体父は徳島縣人である。明治時代に藩主蜂須賀侯が北海道雨龍雨龍村に峰須賀農場を建設したのに参加し、そこで彼は二男として生れた。嚴寒の北海道で育ち、昭和十一年南洋パラオ島に移り、南拓ホウリKK經營の朝日村開拓地で、パイナップルの栽培に従事した。ここが約十年間、その間に太平洋戰争が始まり、パラオ島は敵中にあつて孤立し、食糧缺乏、自給自足の農業も、毎日の空襲で耕作出來ず、飢餓に瀕し、全家族營養失調となつた。昭和二十年八月十五日終戰、昭和二十一年二月浦賀上陸、長兄猛夫はこの横須賀で遂に營養失調が因で死亡した。父の故郷徳島に還る訳にもゆかず、習志野練兵場收容所で開拓地を斡旋してくれ昭和二十一年五月十日熊本縣豊橋村に入植した。ここで約十年いた。熊本は南洋や北海道開拓地と違つて、郷土色が強く、肥後辯のバツテンが使えぬため「よそもの」と言われて、いかにも他國人あつかいにされた。そうした地方で裸から叩きあげた石川一家の努力は泣ぐましいものがあつた。満十年してアマゾン移民の再開に際し應募、最初に弟道喜が先陣として昭和三十年乗込み、翌三十一年に兩親、弟静夫、辰明、妹としえ等が擧つて移住した。

弟道喜が永野耕地にいたので、そのまま永野耕地で働らいた耕主永野敬士は少年時代渡伯した苦勞人であつたから、戰後移民にもよく援助してくれた。幸い理解ある耕主の取計いで、二年在住の後にアグア・ブランカ區で獨立、この農場に六千本の胡椒を栽培した。石川兄弟は弟道喜と静夫が、アライア區、弟辰明がマルキタ區と、おの〳〵立派な農場を完成し、石川兄弟として先輩後輩から尊敬された。確に篤農家の誇たかい人達ばかりである。追懐してみると、北海道の開拓生活も永住地でなかつた。南洋パラオは悲惨の十年間であつた。熊本開墾地も墓の地でなかつた。そして最後にアマゾンにきたが、アマゾンに移住するまでの、流轉生活は實に辛酸苦勞の連續であつた場所が變ればまた最初からやり直しで、こんな生活を數回もくりかえしたので、不運が長すぎた。

温厚な彼を扶けるゆきえ夫人は一家の陰に盡す女性、長男功はパラオ生れで二十六才の氣鋭の青年、長女紀惠子もパラオ生れで、大野登志雄氏と結婚して聖市に移轉、熊本生れの二女惠津子、二男正、三男竜三、伯國生れの四男ジョージ等健在である。切に今後の發展を祈る。明治四十三年九月二十三日戌年生

寫眞は右から女婿大野登志雄、長女紀惠子、孫マユミ、ゆきえ夫人、右上は長男功

収入は比較が出來ない程遙かに多い」と豪語し「アハハハ…」と笑つた。二日ばかり彼の宅にゴロ寢をさしてもらつたが、なか／＼の讀書家で、盃を傾ける傍らも書籍から目を離さなかつた。やはり他の植民と一寸變つた處があつた。糟糠の浪江夫人が彼よりも一足先きに昇天するのかと思つていた。夫人は一時危篤で、聖市の病院までも入院、体重二十九キロまで衰弱、もう駄目だろうかと思つていたが、夫人の方が長命して、彼の方が物故した。

不幸の重なる時は妙なもので、三男昌三が結婚式を前にして、二十七才の青春をあたら黒水病で散らしてしまつた。昭和三十七年三月二十四日のことであつた。長男陽一郎は十一才の時に五回目の黒水病でこの時は既に一家の人々は死を覺悟していたが、運命は幸し今日まども生きのびたが、昌三の場合は忽然として散つた。そして同年九月二十九日には母いとが七十六才で天壽を全うし、翌年八月二十八日に彼が死んだ訳である。逝年五十八才であつたが、まだまだこの世と訣別するのは早過ぎた。彼は少年時代より苦労人であつた。十六才の時に父總吉に死別し、上京して東京四谷區舟町で家業の薪炭商を經營すること四年、その間送荷の受取りに秋葉原、上野、池袋の各驛を廻り、そして銀行通い、夜は商業学校に通つた。この苦学時代が後年役にたつたのであつた。そして滿二十五才で渡伯、長女昌子（加藤邦藏夫人）はまだ幼女であつた。アカラ植民地でも、間もなく二男鉄郎、四男茂樹を喪い、人生最大の悲境にも數回遭遇している。ワンマンで性格の剛毅な反面情にもろいのは、自から悲境をくぐつたからである。

一九五一年弟正三郎や義弟設樂市太郎を呼戻したり、弟正四郎を産組聖市支店長に就任させたり、その他旧友福島清次郎などトメアスー戻りを薦めて逆境を救濟した。戰後は同郷人伊藤清四郎がマナカプルから移轉し、それでマナカプル組の移轉が始まつた。彼の耕地には戰後移民も高倉四三次、伊藤清四郎、吉田馨等酒家が揃つていた。

父の死後長男陽一郎が二万四千本の胡椒園を經營後を嗣いだ。麗子夫人は故吉丸一長女で既に、とも子、五十男、錠二の三兒に惠まれている。二女聰子は宮城縣人小林孝造と結婚、隣地で獨立している。五男壽は陽一郎に協力、三女綾子は聖市で洋裁を勉强中である。一度死期を脱した浪江未亡人も、最近は見違えるように健康になつた。義母いと（病歿七十八才）以上に長壽をしてもらいたいものである。（陽一郎氏昭和六年四月三十日伯國生）寫眞は小畑知事來宅の記念、右二番目故總一郎氏、前列右端故母いとえ、後列右端故昌三氏、後列中央小畑知事

トメアスー植民地アグア・ブランカ區

故　木村總一郎氏

木村陽一郎氏

YOICHIRO KIMURA
C. P. 39 — Cooperado 276
Belem — Pará

原籍　秋田縣北秋田郡早口町季岱
渡伯　昭和四年七月　もんてびでお丸

トメアスー植民地が創設され、昭和四年七月第一回入植者四十三家族百八十九人が、將來の希望をいだいて耕地の建設にかゝつたが、三・四年前まで一回も退植せず頑張り通したものは山田義一、木村總一郎、加藤友治の三人であつた。その内に木村總一郎、加藤友治の二人も前年物故したが、この三人は皆個性が强く　信念深い性格であつた。そして三人が三人とも目の前の金儲けばかり考えず「まあ二・三十年もすれば、なんとかなるだろう」式で悠然と構え、人生を達觀していた。山田義一は佛教の「悟」で人生を達觀し、加藤友治は禪の「肚」でこれを押え、木村總一郎は武士道の「無念無想」で吹き流していた。確にこの三奇人は、トメアスーを退散する人々を尻眼に、泰然と構えていた。

特に木村總一郎は他の二人と違つて、一九三八年實弟正三郎や正四郎、それに妹とくえの聟設樂市太郎一族十余人が、大擧して退植、サンパウロ州に移轉するのに、彼は肉親との同行を拒み最後まで踏みとどまつた。氣の弱い者であつたら「俺一人だけ残るのも淋しいし、黒水病もひどいから」と云つて同行すべきであつた。確に信念の人物であつた。一九五六年產業組合の大改革で、若手の理事連が出るまで、實に二十年近く組合のために盡した。產業組合創成期の最高理事高田幸之助・丸弘毅、土屋一・加藤友治・斉藤円治連中が退植したり辭職したりしてから、彼は一九三九年會計理事に推され、事實上の業務擔當者となつた。當時理事長は加藤友治、專務理事が斉藤円治であつたが兩人とも實務に詳しい彼に全權をゆだねていた。

故木村總一郎の面影

南拓から營農援助を見離されたトメアスー植民地は、產業組合によつて自治自活の道を拓こうと考えた。この心境をよくとらえ、彼は一致團結をとなえ組合の充實を計つた。一九四六年の終戰後の大同團結の改革で常務理事に座つた。そして專務理事戸田子郎と共に、一九五七年辭職するまで就任したが、終戰の大混乱期、ピメンタの黃金時代、戰後移民入植の大擴張時代の三大難局にも機略縦横な處をみせ、少しの破綻もなく事務を處理した。死後組合から組合葬として墓石が建てられたのは、彼の功績に對する報恩である。

滿十九ヵ年の長期產組奉公であるから、或る程度は、獨裁的であり、ワンマンな處があつた。十年前に訪ねた時は胡椒の黃金時代で「人數の少ない組合だが、大コチアより個人〳〵の實

SENYCHI MOGONUMA
KUNIYCHI MOGONUMA
C. P. 39 — Cooperado N.o 169
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地アグア・ブランカ區

茂古沼専一氏
茂古沼邦一氏

原籍　北海道河東郡音更町
渡伯　昭和二十九年九月　ぶらじる丸

両親は富山縣出身、北海道に移住して、兄弟は北海道で生れた。生地は十勝國で酪農の隆盛な地方であつた。だから弟邦一は酪農家を志し、ノロボロ高校在学中（第四期生）に、北大の創立者クラーク先生の教訓「青年よ大望をいだけ」に憧れた。内村鑑三、新戸部稲造、有島武朗等後年の大学者を出した處だ。彼も黒澤塾長の指導に感化された。あの研究時代の北海道の酪農は實に幼稚なものであつたが、軈て將來大をなし現在「日本一の雪印」として有名である。彼等も土地の擴大な處で牧場でも經營しようと兄弟志を同じうしてアマソン移民募集に應じ、昭和二十九年渡伯した。そしてマナウス市對岸マナカプル植民地ベラ・ビスタ區に入植した。北海道にいた時の想像と違いこの痩地には、一ヘクタールに籾二・三俵しかとれず、ここでマゴ／＼している内に一年半過ぎ持参の營農資金を消費してしまつた。入植した多くの人達がトメアスー植民地に移轉したので、彼も永居は無用だと思い、トメアスーに移り木村總一郎耕地に入植した木村總一郎は秋田縣人で人情豊潤、後輩の面倒をみた。二カ年後に姪やす子が西尾勝利長男和雄と結婚したので、兄専一は、西尾耕地に十カ月手傳に行つたが、その他は木村耕地で四カ年辛抱した。そのお陰で木村耕地近くで獨立し、兄専一は三千本弟邦人は二千本の成樹を完植した。

母そとえも健在、兄専一は孝子夫人との間に長男一三（かずみ）長女いよ子（武田房彦夫人）、二男秀彥、二女久枝の四兒がおる。一男一三はトメアスー音樂團のマネージャである。弟邦一はきぬ子夫人との間に長男保英、二男朋邦の二兒がおり、この二兄弟は實に睦まじい、兄はベラ、ビスタ時代、自動車事故で頭部に打撲傷をうけたが、それも全治し、現在健康そのもの、茂古沼家はアマゾンで發展した。専一氏（明治四十四年三月十一日亥年生）邦一氏（大正五年九月二十一日午年生）

茂古沼邦一氏家族

茂古沼専一氏家族

ICHITARO SHITARA
C. P. 39 — Cooperado N.o 66
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地アグア・ブランカ區

設樂市太郎氏

原籍　山形縣西村山郡石山村間澤
渡伯　昭和五年十二月　さんとす丸

渡伯したのが一九三〇年、そして聖市に移轉して再度トメアスーに戻つてきたのが一九五一年、その二十一年間は、まるでブルのように働らいて儲からなかつた。處が義兄木村總一郎の薦めで、裸一貫で戻つてから再出發するや五年後には、五千本の胡椒を栽培し、十年後には一万五千本の胡椒を植え、長女のり子は勤倹力行の小川平（小川金四郎弟）と結婚し、同君の協力で耕地の管理はぐん／＼成績をあげ、年收三十トン以上も收穫した。經濟的安定で、子供の教育のためとくえ夫人は聖市に住居を備え（Rua Decio 162、Jardim da Saude、Praça Alvoradaの近く）長男功一はゼツリオ工業学校卒業後に綜合大学工科に入学、二男功二はパウリスタ高等工業に入学、三男功三は小学校在学中で、彼は後半全く幸福な生活に酔つた。特にアグア・ブランカ耕地は、稀にみる努力家小川平の協力で後顧の憂がなくなつた。これは鬼に金棒で、設樂家は益々發展していくだろう。

大体設樂家は永住の決心で渡伯、當時は十人家族であつた。父猶次は、ブレウ區にいた佐藤忠雄嚴父己之松の實弟で、忠雄は從兄弟であつた。兩親の長男に生れ、當時十九才の彼は南拓會社直營精米所に勤務し、精勤六ヵ年の間に、木村總一郎妹とくえと結婚した。弟政治は病院勤務であつた。

一九三八年度は黒水病の猛襲時代で、八十人も病死し、同年遂に南進してサンパウロ州マリリア郊外キング植民地に移轉した。移轉したキング植民地も、有名なチビリツサ河畔で、マラリヤ病の巣、アカラ植民地でコリ／＼していたので在住一年で聖市郊外イタカケセツーバに移り、篠田耕地に三年辛抱した。少々資本が貯つたので聖市で「洗濯業」を始め二年後に「チンツラリヤ・スザーノ」は弟政太郎に讓つた。そしてフエランテを始め七年辛酸をなめた。朝市場の仕事は、買出しがつらく、午前一時頃はもう中央卸市場に出ていなくてはならなかつた。こんなつらい思いをしても儲からず、恰度義兄からトメアスーに戻れとの言葉で、再びトメアスーに還り、ピメンタを栽培した

追懷すると一番つらかつたのはフエランテであつた。午前五時から朝市場に出て、歸宅は午後二時頃で、十四・五時間働らいても、尚儲からなかつた。それを考えると胡椒栽培は安樂であつた。いま九人の弟妹は皆裕福に暮している。弟政治は聖市シネ・ニテロイ前で菓子販賣店、弟政太郎は往年のチンツラリヤ、妹みつよは鈴木喜三郎に、妹たに子は鈴木喜三郎弟喜四郎に共々嫁つぎ、妹たに子はイタカセツーバ市の石川氏に、妹ちえ子は鈴木喜三郎弟六郎に、妹信子は聖市ジヤバクワラ區西電氣店に共々嫁づいでいる。末弟政夫は愛知縣人田邊毅二女ますよを娶り、ブレウ一區でピメンタを栽培している。明治四十四年十一月十一日亥年生。

左小川平夫妻と功二君達。中央功一君と孫金市、右設樂夫妻と子供達

トメアスー植民地アグア・ブランカ區

佐藤義雄氏

YOSHIO SATO
C. P. 39 — Cooperado N.o 209
Belem — E. de Pará

原籍　熊本縣菊地郡合志村
渡伯　昭和四年九月　もんてびでお丸

主人佐藤義雄は當時六十六才、明朗濶達、春風駘蕩の性格で、何事でもクヨ／＼しないので一見して四十代の壯者をしのぐ位の年輩にみえる。座談しても一寸もいやみがなく、誰れからでも好かれる。他人が儲けてそねまず、自から儲けておごらず、ビールを傾ける姿は「佛の義雄さん」と云いたい處だ。愛妻であり糟糠の女性であるはつ子夫人は、これまた似た者夫婦で訪客があれば、おしげもなく御馳走を出し歡待してくれる。そして主人の訥辯と比較して能辯であるから話がつきない。

主人が熊本肥後人であるのに彼女は宮崎縣細江家出身の日向人で、共に九州バッテンで心から打とけ合つている。立派な家庭でも暗い家庭があり、訪ねにくい家庭もあるがこの佐藤家ぐらい陽氣に溢れ、訪ねやすい家庭も少ないだろう。

彼は第一回草分開拓者で、加藤友治耕地の隣地（現在の岡部孝耕地）に入植した。まだ荒山を伐採したばかりで、随分苦労した。作物は米が主作で、入植するときに米の収穫までと思つてベレーン市で買つた米が、一俵九〇＄で、籾を收穫して白米にし販賣するときは、一俵八・九＄で、その莫迦らしさに啞然として物が云えなかつた。三・四年は辛酸苦労の限りをなめた一九三六年カカオ栽培中止で、直營農場閉鎖、そしてこの不運につけて悪性マラリヤ病の蔓延で、遂に生き地獄の有様であつた。同郷の親友澤田彌太郎夫婦も、四十代の働き盛りで逝去した。そして百余十名の墓石は瞬くひまにたつた。到々一九三八年退植し、マラニオン州サン・ルイス首都に移転した。

一九四一年大戰勃發、在留邦人が少なく特に一九四二年にベレーン市で樞軸國民住宅燒打事件があつた當座は、彼等も相當恐怖心にかられたが、幸い州政府の理解ある處理で、事なきを得て軈て終戰を迎えた。長い間雑貨商として市井で健斗していた譯である。一九五五年トメアスー植民地創設二十五周年記念祭に、第一回草分開拓者として招聘され、その盛大な催に参加した。往年の地獄は胡椒栽培で天國となり、一千万円位の年收ある農家はざらにあつた。この好景氣に驚ろいている處へ、親友澤田の遺児長男毅が「出來るだけ援助するから、叔父さん戻つてきて」と情をかけてくれたので、到々雑貨店を賣却して、現地に耕地を建設した。幸い約束通りに澤田毅の後援があつて耕地は瞬く間に拓け、六千本の胡椒は滿植され、あれから十年目には二十五トン以上收穫するようになつた。夫婦だけで子供がなく、伯人労働者で經營、これだけの年收があれば幸福だ。

追懐すれば、昭和四年入植當初は、熊本縣組でアンデス下りの本郷勇（測量師）石田某、江口某（通訳兼コジンニエイロ）などいて、創業の苦心を話合つたが、皆故人となつた。そして青年だつた彼も七十才に近づきつつある。人生は實に一瞬の夢である。明治三十三年九月一日亥年生。

トメアスー植民地アグア・ブランカ區

吉丸郁三氏

YUZO YOSHIMARU
C. P. 39 — Cooperado N.o 186
Belem — E. de Pará

原籍 長崎縣佐世保市山手町
渡伯 昭和三十年五月 あふりか丸

ベレーンまで十五時間の川若葉 兵南
行水す裏戸アマゾン河明り 同
法らばかり吹きいし男転耕す 同

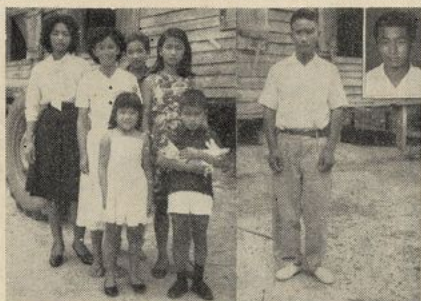
この一連の俳句は、故嚴父吉九一（俳號岳南）の句で、いかにも大アマゾンの寫生に生きているようだ。故人は日本俳壇の巨星青木月斗師の門下で俳誌「同人」の誌友で、句歴は昭和五年以來で古く、トメアスー植民地の俳人を集めて、大河句會を催した發起人であつた。惜しいことに一九六四年満六十才で逝去した。（明治三十七年七月二十三日生）

故人は大正十二年旧制佐世保中学校を卒業、將來海軍々人たらんとの希望で、江田島海軍兵学校に受驗したが、不運にも入学出來ず、後年も初志貫徹で、海軍の御用達をなし、太平洋戰爭時代は警報團長として、民間で活躍、軈て一九四五年五月海兵隊に入隊したが、八月十五日終戰で復員した。故郷伊万里にいたが、恰度大アマゾン開拓移民の話をきき、海外發展の情熱おさえがたく、遂に一家をあげて渡伯した。故人は最初からアマゾン地方の事情を研究、トメアスー植民地を第一志望としたので、同地の大沼耕地に入植した。入植後満二年目母ハヤが昭和三十二年六月十六日七十六才で逝去する悲しみにも遭遇したが、幸い同年長女玲が木村陽一郎と結婚したので、木村耕地の近くに移つて、本腰で胡椒を栽培し、到々五千本の農場を完成し、安住の生活に浸ることが出來た。故人は六十才になつても天眞爛漫で童顔に満ち、愛國の熱血漢であり、藝術に精進する文化人であつた。その昇天は世人に惜しまれた。

父が文化人であつたので二男郁三や三男禎保（よしやす）等も音樂愛好家である。長男玄（しづか）は日本で早逝している。三女紀子はベレーン洋裁学校、四男幹宏は聖市でメカニコ研究中、五男完（たもつ）は在宅で、きぬ夫人も、子供の成長で晩年幸福な生活に浸ることが出來た。切に地下に眠る故人の冥福を祈つて止まない。

上段右から二男郁三、三男禎保、五男完
下段吉丸一夫妻と長女玲と孫達（想出の寫眞）

渡伯記念故父上吉九一氏

REISABURO KOBAYASHI
C. P. 39 — Cooperado N.o 110
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地アグア・ブランカ區

小林禮三郎氏

原籍　新潟縣高田市高士地區
渡伯　昭和二十八年八月　あめりか丸

借りた物や、支拂うべきものは、期限がくれば約束通り實行し、絶對に他人に迷惑をかけない義理堅い人物である。勿論他人を利用して甘い汁をすうと云う悪辣な観念などもつての他、生地高田市に積もる吹雪の如く、純情潔白であり、しかも氣骨のある拓人である。

生地高士地區は、ブレウ區に住む横山健一の隣村であるが、戰前既にアマゾン移住を計画した事があつた。パンンチンスのアマゾニヤ産業研究所の會員で、研究所發行の「アマゾニヤ月報」の熱心な讀者であつた。終戰後もいと早くアマゾニア研究所長上塚司と文通しアマゾン移住の機會をねらつていた。彼等一家は海外雄飛の熱ある拓士ばかりで、戰前満州開拓が始まるや、次弟が同地方の團長となつて三人連れで渡満した。不幸日本の敗戰で、満州から引揚げて、現在高田市で活躍しているが、敗戰でなかつたら、満州の曠野で大活躍していた訳である。彼は父國助、母さくの三男に生れ兩親は共に死亡。彼は大東亜戰争のとき海軍に呼集され、驅逐艦「戸根」にのり従横無盡に南太平洋の怒濤をのりこえて、第一線に活躍し、江田島から舞鶴軍港に廻航したときに、八月十五日となり終戰になつた。ソ連参戰で、その背任行爲に憤慨し、日本海で一戰を交えるべく、勇往邁進していたのだつたが、ここで軍隊は解散した。無條件降服ときかされ、無念の涙を拂つた。そして復員するや、すぐ海外に出ることを考えた。満州、朝鮮。樺太、台灣、南洋委任統治領からの移住者の歸還、その上に四百万人にあたる派兵の復員で、せまい日本は一ぱいであつた。

昭和二十八年アマゾン移民再會で、最初から申込み、同年八月あめりか丸で渡伯、第一回トメアスー植民地入植者として、二九家族一八三人と共に、大アマソンの開拓に挺身し、三十年來の宿望を達した。配耕地はアグア・ブランカ區の木村總一郎耕地、耕主木村はワンマンで剛直だが、反面涙もろく、侠客的な處があり、義理堅かつた。この耕地就労中に、日曜日や、祭日には遠くまで歩いて現農場の建設に精勵した。そして漸くピメンタの實がなる頃に木村耕地を退耕し、自己農場に移つた。恰度四年三ヵ月目で、到々今日は全耕地に七千本の胡椒を植え古参拓人に伍して大いに健斗している。新樹が多いが、三・四年もすると三・四十トンの収穫になるだろう。

この耕地建設に不眠不休の働きをみせたちよ夫人の功績は、勿論書くまでもない。その涙ぐましい奮斗に賞讃を贈りたい。夫婦の間に三男三女、長女勝子は熊本縣出身アライヤ區石川道喜甥野口義賢（マルキタ區農場）に嫁づいている。長男邦夫、二男實、二女菊野が日本生れ、二男仁、三女千津子が伯國生、長男邦夫と二男實が耕地の管理をしている。同航の弟幸雄も結婚してブレウ一區で獨立している。生來の海外發展の熱血漢彼の健斗を祈る。明治四十四年十二月二十五日亥年生。

トメアスー植民地アグア・ブランカ區

細川伍一氏

GOICHI HOSOGAWA
C. P. 39 — Cooperado N.o 96
Belem — E. de Pará

原籍　岐阜縣群上郡奥明方村
渡伯　昭和二十九年九月　あふりか丸

義兄悦次郎の寡默愼重、地味な性格と反對に、明朗濶達、春風駘蕩で、彼と對座して話していると、不景氣風が何時も吹きとんでしもう。「なにおくよ〳〵川端柳、水の流れをみて暮す」と云う訳ではないが、彼は過ぎ去つた事は後悔せず、來るべき事に對策する方針である。義兄悦次郎、ふるよ夫人は、彼の愛妻明子夫人の姉である處から、終戰後に卒先して呼寄せられ、老齢の父母（父宇之吉、母よしも）同行した。

彼は渡伯前、既に大南洋で活躍、三菱系のスマトラ農場に高級社員として派遣されていた。恰度三菱がブラジル東山農場を經營していたのと同じようなものであつた。ここで、ゴム・紅茶栽培の指導に當つた。インドネシヤ人は、ブラジル人と同じく、ガツ〳〵働らかず、彼の性格も轉て浩然たる氣持になつた。既に南鮮全羅南道旺谷面地方で生活もしたし、大東亞をせましと東奔西走し、小事に拘泥しない鷹揚な性格が自然に備つた。要件を頼むと決していやな顔をせず「はい、そうしておきましょう」と快諾する。出來ない相談でも一應は「なんとか方法を講じてみましょう」と相手に不快を與えない。これは自から性格が明るいからである。他人が儲けても妬けず、いや味も云わないので、戰後派の人にかかわらず、植民地でも衆人に好感をもたれ、一九六〇年にはトメアスー産業組合理事に當選した。戰後派移民として珍らしく、續いて一九六四年度の改選にも、勿論當選した。理事になつたからと云つて偉張らず、實に腰が輕るくて、何の用件でもすぐ達してくれる、誠にチョホウな人である。一般普通人だと理事になり、理事席に座ると、偉張りたがるものだが、この成り上りの不遜な態度がなく、視野が廣く、天上天下唯我獨專的ワンマンさがない。青年時代に三菱系大會社に勤めて、上には上がある事をよく知り、それに反省して「自を知つている」からである。酒豪であり座談の好きな人であるから、勢い社交家にならざるを得ない。勿論仲裁事から、一小事に至るまで他人の世話を面倒がらない人柄だから、大沼春雄元老が引退した場合、自治團休の產婆役としてその後釜に好適であろう。

岳父宇之吉は大正八年朝鮮開拓に挺身した熱血漢、義兄悦次郎も朝鮮開拓から昭和八年七月アマゾン開拓に邁進した海外發展家である。彼も朝鮮で活躍した事があり、トメアスー港にいる槍別登良一老とは朝鮮時代の知人である。

渡伯して悦次郎耕地に二年いて、その後は甥實の絶大な援助で、隣地に最初一千五百本胡椒を植え、そして今日は一万本を滿植させた。長女佐智子は日本で結婚して在日本、長男剛が耕地を管理、二女淑子は朝鮮で早逝、三女みどり、二男達（イタル）は健在である。明治四十年十月二十日亥年生。

YUICHIRO SHIBATA
C. P. 39 — Cooperado N.o 275
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地マルキタ区

柴田雄一郎氏

原籍　長野縣小縣郡丸子町小丸子
渡伯　昭和八年八月　はわい丸

一九五四年サンパウロ市創立四百年記念の折、著者は一千二百頁に余る尨大な「サンパウロ市及び近郊邦人發展史」を出版した。その折に柴田寛家を訪づれ、母なきあと父を中心に兄妹六人が團んで寫した寫眞をいただいたが、その記憶が未だに殘つている。あの當時はクレメンチーナ区タンケ街一六四で「チンツラリア・アジア」を經營していた。あの當時の青年雄一郎が、成人して今日農場主になつているのである。

彼は長男に生れ、二才の幼児で渡伯した。長男と云つても、姉が五人もいたので六番目の子である。長女絹子（在聖市菅江幸雄夫人）二女藤江（澤田哲夫人）三女みづ子（タバナン菊地敏克夫人）四女妙子（在聖市獨身）五女末女（死亡）、次が長男の雄一郎、六女元枝（聖市坂倉夫人）二男伯美、三男留男（共に在聖市）で三男六女の家族であつた。彼等一家は昭和八年にトメアスー植民地に入植、當時の家長は柴田昭司（トメアスー港柴田英夫嚴父）で、彼の父寛は昭司の弟であつた。だから英夫は從兄弟の間柄である。

トメアスー植民地に入植していたが、母が一九四五年終戰の年に病死したので、父は耕地の仕事が嫌になつた。なんと云つても多勢の娘ばかりかかえて、耕地の勞働力は少ないのが原因であつた。そして一九四九年にブレウ一区の耕地（現在の北村耕地）から、聖市に移り、娘達で出來る洗濯屋を始めたのであつた。洗濯屋にはトメアスー出身の設樂政太郎などがいたので指導してもらつた。終戰直後のことで、まだ洗濯も水洗機、乾燥機パッサ機など機械化されていない頃で、女手ばかりで、辛酸苦勞をなめた。特に洋服は日曜日に着るために土曜日は忙しく、徹夜することが多かつた。外觀はいいが、内容をみると洗濯業も儲ける割合に、激務過勞の仕事であつた。

アマゾン地方のピメンタ栽培が、一九五二、三年頃から黄金時代になつたので、一九五六年に再びトメアスー植民地に戻つた。義兄澤田哲の薦めもあつて、再擧を計つた譯である。そして娶て福島縣人松崎喜代司長女久米子と結婚した。久米子の母チバは眞栂井孝門の姉で、彼女は妊に當り、十九才の青春で日本から渡伯した麗人である。雄一郎は二才で渡伯した明朗な拓人で、日本で成人した多才な女性を娶り、日本趣味の缺陥を補う意味で、この睦まじい夫婦の上に幸あれと、著者は希つてやまない。夫婦の間に長女セウーマ節子、長男シルビオ一宇（カズヒロ）二男倘之の三兒に惠まれている。

現在ピメンタ一万本を栽培、幼樹が多いので二十トン内外の收穫しかないが、姉藤江（澤田哲夫人）もよき相談相手となり三・四年も經てば、植民地でも多收穫者の一人に數えられるだろう。切に大器晩成を祈る。昭和五年十二月二十六日午年生

右の寫眞長女節子、長男一宇。

トメアスー植民地アグア・ブランカ區

SHOJI SEINO
C. P. 39 — Cooperado N.o 176
Belem — E. de Pará

清 野 昌 治 氏

原籍　宮城縣亘利郡逢隈村高尾
渡伯　昭和二十八年八月　あめりか丸

彼の宅を訪づれると、玄關に猿、オーム、ペリキット、など色々の動物がいて、まるで動物園の観がする成程そう云えば、彼が肩に猟銃をかついで、悠々大密林の中を歩るいている勇姿を時々みる。「英雄閑日月あり」でもないが、焦つても一獲千金に棚からボタ餅式に儲かる訳でないから、晴耕雨讀式考えで、趣味の猟に生きているのであろう。當年三十八才、事業的には最も油の乗りきり盛り、覇氣満々の年輩で、推進力旺盛な斗志を仰えて泰然自若しているは偉らい。

と云つて退嬰的ではない。既に第二植民地に五千本の胡椒栽培を目的に、十五・六人の伯人労働者を雇傭して第二計画をたてている今日まで満十年が第一期計画だつたので、次の十年が第二計画、そして四十八才から第三次計画に移る訳で、周到綿密東北型だけあるわいと著者も思つた。彼の生れた村からは宮城縣出身第一の成功者が出ている。南麻州アンマイバイ郡に二万五千ヘクタールの牧場建設に着手している只野万吉一家で、父万吉は死亡、今は長男の文吉が後を嗣いでいる。個人で大密林に數十粁の道路を開鑿、タタノボリス町を、その密林中に建設して、その住宅地の賣却金で事業を推進するつもりである。一九四五・六年頃の珈琲黄金時代にコーヒーで儲かり、クタノボリスの土地を一ヘクタール百クルゼイロぐらいで購つたが、今は十万クルゼイロでも賣るまい。文吉少年が今や大事業家になつたが、この只野家をみるにつけ、彼も發奮心をおこしているわけである。その他に聖市近郊アルジア町に篤農家玉田善九郎がおり、みな三十余年昔しからの著者の親友であるが、こうした同村の先輩が成功しているから彼もアマゾンで名をあげなければ故郷の人々に申訳がない。

彼はアライア區高野惣次郎の構成家族の一員となつて渡伯した。昭和二十八年八月あめりか丸で、トメアスー植民地戦後第一回移民である。配耕地は細川實耕地であつた。耕主細川實一家は四十年前に朝鮮開拓から、アマゾン開拓に転身した海外發展家で、地味な農民、この人の耕地で三ヵ年就労した事はよかつた。細川耕地の隣地の隣りに大密林があつたので、耕主の思いやりで、そこを開拓し、胡椒を植えて三年目に獨立した。その一寸前に熊本縣人橋元元七の長女はる子と結婚し、新婚夫婦の開拓生活が始まつた。愛し合つた夫婦のこととて仲睦まじく初期の辛酸苦労も苦にならず、将來への希望に輝き、酷暑もいとわず働き、遂に第一期計画の三千本を完植させた。

彼は父光治、母さと両親の二男に生れ、當然分家しなければならない身分であつた。その分家を彼自身の腕一本脛一本でなしとげたのだから、満足だろう。もう経済的基礎は固つた。

夫婦の間に、勇・由合子・明美・智明の二男二女に恵まれている。昭和二年十月一日卯年生。

して五ヵ年勤務した。常夏の國で何時しか二十代の青春も過ぎ事業欲旺盛な三十代となり、彼も結婚して獨立、小料理店を開業した。そして四ヵ年斯業に從事し、故郷戀しさに、昭和七年十三年振りで、故郷廣島に歸つた。

故郷では、修得した本職の履物屋を開業し、持參の資本金で大々的にやつたが、一度北米大陸曠野の天地で活躍したり、常夏のハワイで自由氣儘な生活をしたので、コセ〳〵した日本の生活がいやになつた。そこで今度は鉾を變えて南米で發展すべく、アカラ植民地第十八回入植者として開拓に身を投じた。

同航海入植者は六家族で、故阿部與之助（阿部昇父）故永井橋（永井則勝父）故齋藤林藏（齋藤一父）などの他に、林鹿太郎（聖州）阿部繁雄（聖州）本木はつ（ベレーン市）などがいた日本滯在僅かに三年、トメアスー入植地は、最初から十字路であつた。四ヵ年在住したが、一九三九年には黒水病の蔓延で、遂に命からがらベレーン市に移轉、ウナ街道で野菜栽培に邁進した。この頃の野菜栽培は、今日の野菜作りと違つて、市民が野菜を食べなかつたので、大々的に植える譯にもいかなかつた漸く生活をする位であつた。そして一九四一年の日米戰爭一九四二年の樞軸國民住宅の燒打事件と續づき、着のみ着のままでトメアスー植民地に難をのがれた。あの燒打事件は突然だつたので、身の危險を感じたが、警察で軟禁し、トメアスーに護送してくれたので助かつたが、丸裸になつたのは悲しかつた。この日本滯在から、このベレーン退却までの十年間が、儲けのない轉時代とも云われるべき第三期であつた。

そして最後の人生、定着時代が、一九四二年八月からトメアスー植民地で始まつた。今日まで二十三年、それが美しい結實となつた。植民地に戻つた當時は苦難の再出發だつたが十年後の一九五二年頃から、ピメンタ栽培に燭光がみえ、そして一九五三・四年の黄金時代の出現、彼の六千本の胡椒からも巨財が生まれ、一九五六年一月雜貨店開業、そのまま順風滿帆の勢いで、今日の盛況を呈した。夫人は昨年惜しくも昇天、長男丈兒健在、長女みえ（菊地文雄醫師夫人）三女芳枝（成瀨義治夫人）長男愼吉はふみ子夫人（渡邊六右衛門姪）との間に俊明・文男・けい子・パウロの三男一女の孫がいる。南北米を股にかけて四十八年、サイコロは何回もすべつて、振出しに戻つたが、遂に有終美に上つて幸福の實を結んだ。明治二十九年五月四日中年生。

トメアスー植民地十字路角

野原啓太郎氏

原籍　廣島縣廣島市大手町
渡伯　昭和十年七月　あふりか丸

KEITARO NOBARA
C. P. 39 — Cooperado N.o 18
Belem — E. de Pará

彼も七十才の聲をきくようになつた。若い時は猛虎のような度胸があり、ドスで渡り合つた經驗もあるが年をとると柔和になり、實に溫厚な好々爺になつた。それでも本性は失なわないもので、醉拂つて商賣をさまたげたり、掛賣を强要されるお客さんがあれば、他の客に迷惑するので、商賣上ゆるがせに出來ず、しかり飛ばしたりする。その時の鋭い眼と、口角泡を飛ばす唇は、いまもつて青年啓太郎の面影にホウフツたるものがある。「三つ兒の魂百まで」と云うが、それが啓太郎老人によくあてはまる。

七十になつても、商品の購買から、小賣の販賣まで切廻すから、精神的年齢は四十四・五才とみていい。腰輕く立廻るその姿は實に若々しい。そして人間的にも心が廣量である。義理人情をわきまへ、公共團体への寄附も、皆と同額で、出す處へはどん／＼出し、少しもケチンボな處がない。大体廣島縣人は一般に海外に發展し、その九割までが明朗だ。彼もその通りで朗らかな日常をすごしているから、不慮の災難がない限り、九十才以上長壽を保つだろう。またそうありたいものだ。彼の海外生活も滿四十七年となつた。青年時代を追懷すると、波らん重疊な運命に自分ながら驚くだろう。

父啓七、母きえ、十才のときに生母に死なれ、少年啓太郎も悲しみのどん底に陷つた。あの時に母が死ななかつたら、彼の運命はどの方向に轉換していたか解らなかつた。多感な少年時代を孤獨寥淋の中に送り、小学校を卒業する頃には、意志强靱の性格が備わつた。だつてあまえるべき母はなし、と云つて父は嚴格だし、止むを得なかつた。軈て廣島市で履物屋に奉公にやられ、ここで一人前になつた。年期奉公のつらさを、いやという程味わつた。徵兵檢査を終えた翌年二十二才の折に履物屋職人では一生奉公人と同じだと考え、獨立心旺盛な彼は、北米の大原野で思う存分活躍してみようと心身を躍かせた。そして旅費のない彼はまず船員になれと、同年船員となつた。二カ年の後に船員にハクがつき信用がたかまり、外國航路船員となりニューヨーク航路にのつた。そしてその最高のチャンスをとらえてニューヨークで脫船上陸した。この年が二十四才で、大正七年、漸く第一次世界大戰が終了した年であつた。

ここで來た二十四才までが彼の人生一期とすれば、これから日本に歸國するまでが北米生活の第二期で、夢の青春期とでもつけようか、夢の如くに自由奔放に振舞つた。二、三十代でありこんな夢は再び見られない。世界一の都市ニューヨークで下船、すぐ家庭奉公、準備していた英語じや間に合わず、米語會話の研究に余念なく、その内に世界一の罐詰會社アルムームに勤務した。或るときはホテルのボーイもやり流轉時代、處をかえてニューオリンス市に轉じ、テキサス州を視察、北米中央高原デンバー市（戰時中日本人收容所で有名）をみてまた、ニューヨークに戻つた。恰度滿四年目で、到頭北米生活をみかぎり歸國の途についた。歸國の途中ハワイに立寄つたら、在留邦人が多く、スタンダード石油會社に職があつたので、歸國を中止

トメアスー植民地マルキタ區

渡邊六右エ門氏

原籍　福島縣二本松市原瀬
渡伯　昭和二十九年六月　あめりか丸

ROKUEMON WATANABE
C. P. 39 — Maruquita
Belem — E. de Pará

東北人らしい實直剛健な性格で、日記帳には、毎日その日の出來事を、ことこまかに記入、特にメモ帳には天候、肥料、農藥品の研究まで記している。短歌もつくり、多才多能な人物である。一攫千金、破天荒な成功をしない反面、金城湯池の堅實な財産を築くことは間違いない人だ。現在が、ベレーン對岸のグワジヤラミリン郡サント・アントニオ耕地百七十五ヘクタール購入して、よし夫人と、長男宏勝（獨身）その經營に當り、彼は二男兼興（かねおき）を伴い、マルキタ區で七千五百本の胡椒を栽培し、二本建てで事業を經營、晩年老齢に立ち至つたら、長男はサント・アントニオ耕地、二男はマルキタ耕地を經營し共に安住の地たらんと、その用意周到なことは驚くのほかはない。確かに「石橋を叩いて渡る」タイプである。

日本で農に就いていたが日支事變が起きて、昭和十三年出征硝煙彈雨の中をくぐり、猛攻撃の間で脚部を負傷し、遂に病院生活、その勇猛さを認められ勳八等を賜られた。戰線が擴大され中支方面に及び、漢口戰に參加し、昭和十五年に除隊歸國した。第二回呼集がきて山形市に參集する準備中、再出征二十五日前の八月十五日に終戰になつた。それから農に就いていた。日本でも各地の農事研究會農事講習會に出席し、專門的智識の吸收につとめた。

伯父菅野彌七が昭和二十八年アマゾン再開後に草分移民として渡伯したので、その後を追つて渡伯した。彼等家族以外に弟渡邊要三（ベレーン市ホテル業）佐藤博（パラナ州在住）姪渡邊ふみ子（野原愼一夫人）大内敏夫（聖市在住）の大家族であつた。渡伯してすぐ佐藤忠雄耕地に入り、一年後ベレーン市コツケイロ植民地、再び戻つて野原啓太郎耕地で一ヵ年野菜栽培に從事、軈てアカラ郡サント・アントニオ耕地百七十五ヘクタールを購入して移轉した。ここに千五百本の胡椒を栽培する傍ら野菜を栽培したが、農場建設の最終目的は椰子園にあつた。椰子樹の實は食料油の外にバター、機械油、ポマード原料等六十余種に使用されるので、その將來性がある處から計画した。勿論二十年計画の長期を考えねばならない。前記の通り夫人と長男が經營している。そのサント・アントニオ耕地の經營だけでは、いけないので、ピメンタ栽培の好適地マルキタ區に適地をもとめ、既に七千五百本を植えつけた。まだ幼樹だけだが、成樹ともなれば巨財がころがりこんでくる譯である。なか／＼將來を考慮したやりかただ。

伯國にきて二女ルシアが生れたが、長女陽子は、隣地小原孫吉長男宗と結婚している。聰明理智、父に似て視野廣く智識人で、伯國育ちの夫宗（たかし）とよいコンストラツトである。既に孫一枝・宗一の二兒に惠まれている。大器晩成型の彼の幸福を祈る。明治四十四年十一月十五日亥年生。

トメアスー植民地マルキタ區

小原　宗（たかし）氏

TAKASHI OBARA
C. P. 39 — Cooperado N.o 231
Belem — E. de Pará

原籍　宮城縣柴田郡村田町
渡伯　昭和四年十二月　もんてびでお丸

宮城縣人小原孫吉、宮城縣人渡邊秋代、福島縣人遠藤瀧三、この三人はマルキタ區のマラリア病巣窟に、三十五年もよく頑張り通したものだと、感心している。十年前に訪ねた頃は、まだ〳〵經濟的に逆境で、漸くピメンタが黄金時代に移つたことゝて、貨物自動車もなければ、豪壮な住宅も新築されず、二十六年前入植した堀立小屋で辛抱していた。その後に十年間の胡椒栽培で順風満帆の波にのり、今日はアグア・ブランカ耕地（石川正行耕地近く）を合計して、一万五千本のピメンタを植え、堂々たる經濟地盤を礎づいたその昔しは家族の勞働力はなかつた。父孫吉は老齢だし、母は病氣がち、姉ますえは佐藤憲吉に嫁づき一人息子の彼が働くのみであつた。よくこの大農場を建設したことを激賞してやまない。

彼は生後たつた百日目の赤兒で渡伯した。父は三十六才の時に、南拓社員臼井牧之助（元女優で映画監督大島瀦夫人の父）にすすめられて渡伯した。村田町の同村から、庄司芳吉、庄司善吉、關久三郎兄弟等五家族が一緒に渡伯した。そして同じ宮城縣から一緒に、我妻龜四郎、桝澤榮吉、菊田常雄、相澤末吉等を加えると八家族であつた。この人達がマルキタ區に入植した。第二回移民は東北組が多く、同船で三十四家族が渡り、マルキタに入植したのは二十八家族であつた。そのうちマラリア病が猛襲した時に、皆退散し、殘つた者はたつた三家族になつた。この三家族とて、皆不幸な家族のみであつた。彼は姉よしみを一九三六年四月十一日十七才の蕾で死なした。遠藤瀧三も二男正記が二十八才で黒水病でやられた。渡邊助八は病苦を押して仕事を無理したので、遂に五十二才の働き盛りで自分が斃れた。そんな家庭のみで三家族淋しく殘り、退散した人々の耕地には空家が幽靈小屋みたように雨さらしとなり、邊りは雜草が生えていた。

兩親夫婦とも、明日とも解らない黒水病からのがれ、漸く一命をひろい、一九五〇年頃からピメンタを栽培した。幸い胡椒の値段が出て栽培熱は旺んになつた。小家族であつたが、あれからどん〳〵植え、一九五六年には六千本となり、十トンの收穫をあげ、これに勢いづいたので、アグア・ブランカ區石川正行農場の近くにも分耕地を建設、現在一万五千本のピメンタを植え、三十トン以上の收穫をあげている。既に農場はトラクター、耕耘機、消毒散粉機等完備し、自家用發電機で電化し、文化生活に浴している。姉ますえも成人して、宮城縣人佐藤憲吉に嫁し、靜子・三千代（死亡）秀夫・とも子・桂子・讓二・純子・惠美子・則光等が生れ、彼は福島縣人渡邊六右衛門長女陽子を娶つて、長女一枝、長男宗一に惠まれている。「綠の地獄」が變じて、綠の天國になつたが、よくこれまで頑張り通した（宗氏）昭和四年一月二十日己年生。

トメアス植民地マルキタ區

TAKIZO ENDO
C. P. 39 — Cooperado N.o 14
Belem — E. de Pará

遠藤瀧三氏

原籍 福島縣耶麻郡駒形村中屋澤
渡伯 昭和四年十二月 さんとす丸

遠藤博元氏

原籍 福島縣原之町市
渡伯 昭和四年十二月 さんとす丸

全アマゾン流域在留邦人で「あごひげ」を生やした者が、三人おる。ベレーン市高山鉄藏、モンテ・アレグレ市平下清五郎それに本編の遠藤瀧三であるが、特にその中で、遠藤老人の顎髭は白銀色を呈して美しい。年齢七十七才で、今年五月三日が喜の字の祝である。恐らくこの老人は九十才以上長命することだろう。渡伯の時が四十二才、北米歸りの鈴木宇三郎（磐梯山出身）が「金が目的だつたら止めろ土地が目的だつたら往け」と忠告され、土地を目的にアマゾンに移住したから、あのマラリア病の猛襲時代にも、二十八家族中二十五家族退散したが脱落しなかつたその信念の確固なのには全く頭が下がる。

父渡邊門作、母きち両親の三男で、磐梯村瀧の原で生れたので瀧三となづけられた。十五才の麒麟兒は、不毛の瀧の原を一人で開拓しようと決心した事があり、二十一才で山嶽地帯なので木挽になり、二十五才で遠藤倉吉家を嗣いだ。寒風吹きすさぶ磐梯山麓の生活は何時までたつてもうだつがあがらず、四十二才になつて、大南米に移住した。長男政雄は勉学中で日本に殘り二男政記以下幼兒を連れて、原始林の中に飛びこんだ。例のマラリア病にも全員かゝり、入植二十九日目に四男治八（四才）が死んだり、一九四三年には頼りにした二男政記が二十八才で點水病で斃れた。十四才で渡つた少年であつたが、今でも政記の死は悲しく面影が瞼にうかんでくる。時には逃げだしたかつたが「土にかじりついても遠藤農場をここに建設せよ」の初志貫徹に生きた。そして今日まで同地に三十六年頑張り通した

日本に殘した長男政雄も成人して一九五三年に呼寄せ現在立派な農場を經營している。きよ子夫人との間に三男四女の孫で頭の照子はブレウー區德丸德と結婚既に曾孫が生れ、次の孫文子も瀬戸孝（コツケイロ）に嫁づいている。彼の二男政記は前記の通り死亡、四男治八も早逝、長女きよみ（佐藤繁雄夫人）二女千代子（關勝四郎夫人）三女とめ子（大橋康男夫人）四女ウラ子（草野久治夫人）で孫のみでも三十三人おる。多くの娘も家から出たので、末娘しめ子に高田幸之助子息博元と結婚させ、嗣子として遠藤家をつがせている。

高田幸之助は福島縣出身で、彼と同じ船で第二回入植者、トメアスー産組の前身野菜組合の創立者で、コチジユーバ島で健在、博元も父の質實剛健の血を享けて、眞摯な拓人である。夫婦の間に、元志・久芳・紀・ジョージ・五男・ひろみ・勇がいる。全耕地に一万二千本の胡椒を植え、この方面でもA級の篤農家だ。瀧三氏ー明治二十一年五月二十一日生。博元氏ー大正十四年八月二十日生。（日の丸の旗と愛國の遠藤家）

トメアスー植民地マルキタ區

湊 利 雄 氏

原籍　廣島縣双三郡布野村
渡伯　昭和三十二年二月　ぶらじる丸

TOSHIO MINATO
C. P. 39 — Marquita
Belem — E. de Pará

彼の長男和幸は州立トメアスー中学校で成績抜群、その優秀さを校長は賞讃し、二百コントスの賞金を贈つた。然し和幸の父たる彼は、そんな金があるなら貧苦の学生に、学用品の一つも買つてやつてくれと云つてその莫大な賞金を受取らなかつた。それ程彼は名利に恬淡である。こんな親をもつ子供も力づよいが、またこんな頭腦明晳な子供を持つ親も將來が樂しく、前途は光明に滿ちている。現在獨立早々で、經濟的にはトメアスー植民地獨立農家のしんがりをいつているがそんな事など「我關せず」と云う風で農場建設に力も出てくる。

大体彼はトメアスー植民地の至寶篤農家山田義一の呼寄せで渡伯した。彼の父荒市の妹が、山田義一故すえの夫人で、山田義一は彼の叔父に當つた。昭和七年以來村役場の書記をしたり農業協同組合の書記をしていたが、安月給取りでうだつがあがらず、一九五三年（昭和二十八年）叔父山田義一が訪日した時に、アマゾン地方の事情をきゝ、遂に志を海外に向けるようになり、昭和三十二年二月ぶらじる丸で呼寄せてもらつた。だから渡伯後は山田耕地に就勞した。この叔父の處に五カ年辛抱したのがよかつた。

大体に彼自身が、三〇年近く月給生活をしても大きな野心もなく、失策もなく、立派に事務を仕上げてきたのであつた。だから渡伯してからでも一日も早く獨立して、巨財を殘そうという短兵急な考えはなく、叔父につかえて、子供を立派に成人さしてもらえばいいと云う位の實直さであつた。だから五カ年間も默々と辛抱した譯である。

文女（あやめ）夫人も立派な女性である。四女雅美が輪禍で打撲傷を負つた。この輪禍はひどく、山田義一の孫とき子（十二才）は、そのため慘死した。一時間前は樂しく祭典場で遊んでいたのに、この悲しみである。幸い文女は傷が治つたが、一時は心配した。この時も、加害者を余りうらまなかつた。それは運命だとあきらめていた。夫婦とも、とても働く人で、ピメンタ栽培の傍ら、野菜を栽培しているが、乾燥期で水に不自由する頃でも、手入れがよく、新鮮な野菜が青々として生えている。野菜作りの少ないトメアスーの事だから、野菜の收入だけでも相當なものであろう。

長女英美は鉄道病院省護婦であつたが、日本で小林敏暢と結婚して、現在日本におる。二女成子（しげ子）はベレーン市郊外ベンフイカ區小林宗雄と結婚して幸福に暮している。小林宗雄は、木村陽一郎妹婿小林孝造、山田義一次男允夫人輝子、關伯一夫人寵子などは兄弟姉妹關係で、親戚も多い。三女幸子は關伯一商店に勤務、長男和幸は中学校、四女雅美は母の手傳い伯國生れの五女いつ子等健在である。大正四年二月二十五日卯年生。

前列左から二番目山田はじめ二女とき子（輪禍で故人）
後列右端山田允（たかし）君

渡邊アキヨ氏

原籍　宮城縣勝田郡宮村馬場
渡伯　昭和四年十二月　さんとす丸

AKIYO WATANABE
C. P. 39 — Maruquita
Belem — E. de Pará

　十年前に訪ねた時は、ピメンタも幼樹で本數は七千本植えていたが、生產は六トンに過ぎなかつた。それが今度訪ねて行つてみたら、耕地は長男にまかせ、自分は十字路で、堂々たる雜貨店を開き、實に裕福な生活に浸つていた。秋代夫人の植民地生活も晩年は全く幸福であつた。ここまで持つて來た茨の道は、涙ぐましいものがあり、到底筆舌に盡し難いものがあつた。その辛酸苦勞を突破し、未亡人でありながら、今日を礎きあげたことを賞讃したい。

　彼女の渡伯は昭和四年で、第二回トメアスー移民であつた。宮城縣人八家族を含んで三十四家族で、うち二十八家族が入植し、一九三七・八年のマラリア病猛襲時代に、恐怖の巷と化し遂に殆んど退散し、たつた遠藤瀧三、小原孫吉、渡邊助八の三家族が殘つた。滿二十才のうら若き女性で人生の苦惱を味わつたことのない彼女は、このマラリア病で躰は衰弱した。その上に夫助八も脊炎の病苦に惱んだ。渡伯前海軍に入隊し、看護卒として勤務、頑健無双を誇つた躰だつたが、病氣には打克てずその上に農業の方はおくれ、暴飲となり、一九四二年四十七才の働き盛りで動脈硬化症となり、五ヵ年間病床で呻吟、遂に彼女の健氣な手當も甲斐なく、一九四七年九月十七日、五十二才で逝去した。三兒を殘された彼女は時に三十八才の年盛りで、未亡人となつた。渡伯十八年目であつた。

　戰後渡伯の移民は、十年後には堂々たる耕主となり、自家用自動車をのり廻し、伯人勞働者を雇傭して、安樂な生活に浴し中には空路母國訪問としやれているが、戰前移民は南伯サンパウロ州やパラナ州も同じく、十五・六年間も、生きるのに漸くであつた。渡邊秋代未亡人も、主人が死んだ時は、路頭に迷つた。少女とし子、少年利平、幼兒アントニオの三兒をかかへ、どうしようかと思つた。五ヵ年の夫への看護で躰は疲勞しきつていた。姉ふみ子の主人三浦晋吉が聖州にいるので賴つて行こうかと思つたが、旅費もなかつた。幸い秋田縣出身の加藤三郎や本村總一郎の激勵と、經濟的な援助で米作をつづけ、野菜を栽培、ピメンタの成育に全力を注いだ。幸いその甲斐あつて、農場の胡椒は成樹となり、十字路で商賣することが出來た。明治四十二年八月八日酉年生。

トメアスー植民地マルキタ區

草野久治氏

原籍　福島縣石城郡三坂村
渡伯　昭和二十九年十二月　あふりか丸

KYUJI KUSANO
C. P. 39 — Cooperado N.o 205
Belem — E. de Pará

長い大東亞戰爭で少年航空兵として呼集され、到頭飛行隊に入營し、飛行機の機關整備係となつた。修理をするとき、部分品が一寸でも狂うと動かないし、またその材料一つお粗末にすると「天皇陛下の所有品を勝手になくするな」と上官にビンタを張られ、偉らいお灸をすえさせれらた。こうした處から勢い青年期になつたばかりの草野久治の性質は、嚴格になり、そして他人に賴まれた事は腰輕く、引受けるようになつた。

少年期から青年期になつたばかりで、軍隊生活をしたので、金儲けの話しなど緣がうすく、一九四五年終戰の時は二十一才で除隊した。「ああ、戰爭がすんだ」と思つて故鄉に歸ると、食糧難の社會が襲つてきた。純情一點張の青年久治はコツ／＼と働らいていたが、うだつがあがらなかつた。恰度その折ブラジル移民の募集を耳にした。由來三坂村からも南部サンパウロ州には小平始（モジ市在住篤農家）を始め、多くの人達が戰前移住したのでこれ幸いと、それに應募した。

渡伯してアマゾン地方にきたが、トメアスー植民地に配耕され、阿部昇耕地に入植した。阿部耕主は篤農の譽たかい人物、ここで一心不亂に農事に盡している時、三カ月目に妻が病歿した。渡伯して早々の不幸で、前途が眞暗闇になつた。傷心の躰を鞭ち、更生の道を求め、同縣人遠藤瀧三耕地に移つた。幸い遠藤家は女子のみの家族で、既に長女きよみは佐藤繁雄家に、二女千代子はマルキタ區の關久三郎家に、三女とめ子はサンタ・イザベールの大橋康男家に嫁づいていた。そこで働くうちに末娘の四女とめ子と結婚し、二カ年間同耕地で健斗した。耕主遠藤瀧三は人情豊かな人物で、この岳父を得たことは彼に幸福を齎らした。

恰度昭和三十一・二年頃で戰後派移民もどし／＼獨立農となりピメンタ園を創設する頃であつた。特にブレウ區新興地帯は新獨立者が多く、毎年何百ヘクタール何千ヘクタールと荒山は燒かれていつた。彼もこの機會にとばかり遠藤耕地の近くに農場建設を計畫した。恰度三十才のときで、勇往邁進の精神を發揮あれから開拓しはじめ、現在三千三百本の成樹を所有している。いづれおい／＼增植することであろう。

由來東北人は前進することよりも失敗することを恐れて、退嬰的になりがちである。青年時代は進取の氣性に富み、敏腕を發揮していい時代である。少々やり過ぎる位の覇氣があつて、恰度零と云う處である。そうした處から、まだ四十代になつたばかりの彼の事である。大いに健斗して前進してもらいたい。そして南伯した同村人に對し、北伯アマゾンにも三坂村出身の草野久治ありと、大いに存在を明らかにしてもらいたい。うら夫人との間に、長男常男、二男重男、長女きよ子・二女惠子等がいる。大正十四年十月七日丑年生。

トメアスー植民地マルキタ區

金　義　夫　氏

YOSHIO KIN
C. P. 39 — Cooperado N.o 256
Belem — E. de Pará

原籍　秋田縣秋田市川尻町
渡伯　昭和三十五年八月　ぶらじる丸

トメアスー産業組合事務所で、武田武志常務理事について會計係をやつているが、適材適所である。謹嚴實直、一字を間違ても氣にする正確なタイプで、組合は好適な青年を傭うことが出來た。彼は彥助（養父）母きえの二男で、金彥助は戰後創立した秋田縣海外協會に最初から主事として勤務、移住事業に關し一切を司り、一九五八年（昭和三十二年）ブラジル日本移民五十年祭典のときは、秋田縣代表して渡伯、大會に參加したことがあり、現在海外移住事業團に組織が變つてからも秋田縣事務所長として精勤している。由來秋田縣は、海外發展熱少なく、隣縣山形福島に遅れをとつていたが、戰後多くの移民を送つたのは、父の功績による。

彼は秋田市立秋田商業高校を卒業し、外務省商業實習生として渡伯、最初は東山農場酒釀部に勤務「東麒麟」「東鳳」の銘酒の帳簿をいじつた。それから在伯邦人資本の「南米銀行」に移つた。南銀は既に伯國銀行内でも、二流から、一流の下に進出、支店もパラナ州を入れて六十余ヵ所あり、物凄く發展していた。だが南銀の方針は純二世を登用し、軈ては伯人間に進出する方針であつたので、日本で勉强した彼等が伸びる余地がなかつた。と云つて、商業練習生として、他の日系大會社をみても大同小異で、昨今は純二世のみの進出しか望めず、また待遇するのも、技術者以外の渡伯日本人学生は好遇されなかつた。サンパウロ市近郊の空氣を充分みてとつた彼は北伯に飛んだ。

アマゾン地方は、まだ二世の学校出身者が少なく、日系商社が進出しても、日系二世を傭うにも困る位であつた。彼はここが永住の地と定め、トメアスー産業組合に勤務した。幸い上司の理事も彼を信用してくれ、一九六二年十二月十五日には、早くもブレウ二區愛媛縣人岸俊藏三女眞佐子と結婚した。渡伯して一年四ヵ月目であつた。南伯サンパウロ州コチア産業組合呼寄の高校出身の青年二千五百人の七・八割までが、十年經つても、まだ結婚難にウロ〳〵しているのと雲泥の差で、早く家庭愛に浴した彼は幸福であつた。時に若冠二十二才であつた。そしてマルキタ區の影山耕地を購入し、胡椒栽培は伯人に管理させ、經濟生活の安定を求めた。既に長女クリチーナ江理加が生れた。父は移民事業に一生を捧げる人物、彼は一生を北伯アマゾン移民界に捧げる拓人、父子共に移民事業に献身する一家はお目出度いことである。昭和十五年二月二十三日辰年生。

羨やましい金夫婦（なにが嬉れしいの？）
寫眞下は秋田縣移住事業所長金彥助氏

TATSUAKI ISHIKAWA
C. P. 39 — Cooperado N.o 99
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地マルキタ區

石川辰明氏

原籍　熊本縣下益城郡松橋町
渡伯　昭和三十一年五月　あふりか丸

日本で二人の子供が出生し、常夏の國に移つて瞬ち四人生れ、とうとう六人の子供になつた。辰明夫婦はブラジルにきてよかつたと思つた。渡伯後に父秀太郎は昭和三十一年九月に七十三才の高齢で逝去したが、母は今だに健在、彼の宅で余生を送つている。彼は兄弟姉妹の末子である。十余人いる中で男は五人、長男猛夫が終戰直後死亡しただけで、正行、道喜、静夫共にトメアスーで耕主となり成功している。中でも道喜兄は戰後移民のトップを往き、もう金滿家の一人に數えられる。

彼の父秀太郎は德島縣出身、藩主蜂須賀侯が北海道雨龍村に農場經營の折に渡道し、彼は道產子である。昭和十一年八才の時に南洋パラオ島に一家と渡り、南拓ホウリＫＫの朝日植民地でパイナプル栽培をやつた少年辰明はパラオ小学校で「イロハ」を習つた。昭和十六年太平洋戰爭、軈て戰況は日本に非となり、パラオ島は敵中に圍まれて、外からの食糧補給は絶無、島中で耕作しても毎日の空襲におびやかされて出來ず、全島民は全く營養失調に陥つた。昭和二十年八月十五日終戰當時十七才の青年辰明もホッとした。

翌昭和二十一年二月浦賀に上陸し、習志野復員歸還収容所に入つた。この間に横須賀で長兄猛夫が營養失調の上に寒冷で病歿した約三ヵ月の後五月十日に熊本開拓地に入植した。豊福村の荒野で辛抱した。十七才の青年には、のんびりしだパラオ島のパイナップル生活が懐かしかつた。常夏の國で、島の小学校生活も友達と仲善く遊んだ。それが今は戰後の食糧難で腹一ぱいも喰えなかつた。いつになつたら明るい生活がくるか見通しもつきかねた。そこへブラジル移民の再開で兄道喜が卒先して應募。これにつづいて彼等一家がつづいた。

配耕地は永野耕地、兄達の指導で、七ヵ月目にわ獨立して、旧伯人耕地を購入し、あれから滿九年目、現在六千五百本を収穫、成樹が多いので、既に二十トンの生産量をあげている。熊本開拓地で結婚した妻たへのとの間に、秀明・しげ子・義明・静江・八千代・春美の二男四女に恵まれ、同行の未亡人姉としえは洋裁教授として今日までくらし、一粒種の道子（中学）の成長を樂しみに彼の家で暮している。昭和三年十一月七日辰年生。

寫眞下右は両親健在の姿
寫眞上は後列左端辰明氏、次が大野君（正行女婿）次が正行長男功君前列右端姉としえ、次が大野きえ子、母堂

TSUTOMU MATSUI
C. P. 39 — Cooperado N.o 192
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地マルキタ區

松井 勵（つとむ）氏

原籍　熊本縣天草郡大矢野町
渡伯　昭和二十九年九月　ぶらじる丸

幸運に惠まれてもおごらず、逆境にたつても落膽せず、太平洋の波濤を悠々と泳よぐ鯨の如く泰然自若たる性格で、實に陽氣な人物である。似た者夫婦のまさ子夫人も、その通りで、來客のあるのを福來ると喜ぶ人柄である。戰前朝鮮で生活し、漁業、水產物加工品を、支那方面に卸し、商業界で活躍、三・四十代は裕福な生活をなし、極樂往生が出來ると思つていた處があに計らんや、大東亞戰爭で日本の慘敗、永年築きあげた財産は放棄し、無一文で復員した。故鄕大矢野町に歸るにしても、新開拓の余地なく、止むなく菊地郡の痩地に入植、辛酸苦勞の限りを盡した。「ああ朝鮮時代が懷かしい。あの頃が一番よかつた」と悲しみにつけ、喜びにつけ、想出すばかりであつた。

無味乾燥，希望のない開拓地生活數年，恰度アマゾン移民再開の聲をきき、好機いたれりとばかりそれに應募した。昭和二十九年九月ぶらじる丸で渡伯、アマゾン上流マナウス市の對岸マナカプル植民地第四次でアグア・フリーア區に入植した。このアグア・フリーア區には、現在宍戸その他二・三家族しか残つていないが、當時受入態勢も悪く、永年作物ゴム樹も何年たつたら金になるやら目當がなく、と云つてその日〳〵をくらしてゆく野菜作りも、マナウス市民が野菜を喰わぬため、大々的に栽培しても金にならなかつた。米作も旱魃で一ヘクタール二・三俵しかとれず、マゴ〳〵してるうちに貧苦な生活を迎え、二ヵ年は過ぎた。ベラ・ビスタ區に在住する人々は永住をあきらめ、どし〳〵トメアスー植民地に移轉したので、彼も永住をあきらめ、遂にトメアスーに移り、同縣人先輩の澤田毅を賴つて、同耕地に入植した

幸い耕主澤田毅は準二世であるが、父彌太郎の肥後魂をうけついで、なか〳〵剛毅果斷、彼も三ヵ年精勤しているうち、植民地の事情が解り、遂に胡椒千五百本栽培してある伯人耕地を購入し移轉した。それから一致協力し、今日は五千本のピーメンタを栽培している。渡伯して滿十年は過ぎた。マナカプル時代の辛酸を追懷すると、まるで夢であの頃は「ブラジルと云うと、こんな悲慘な生活をしなければならぬかと」歎いた。それが十年目には自家用發電機で農場は電化され、自宅には冷藏庫に白馬・スコットの高級ウイスキーも揃え、大平樂に伯人を雇傭し、悠々安住の晩年を送るようになつた。

高校卒業の長男清は聖市でセールスマンとして活躍している二男清二はベレーン市でバールを經營している。中学卒業十四才で渡伯した長女すみ子は產組ベレーン出張所勤務福島縣人菊地健治（大連生れ）に嫁つぎ孫一人、二女一子（かず子）は聖市でパーマ店に勤務，三男建（たけし）三女宥子（ひろ子）は自宅にいる。松井家のブラジル移住は成功であつた。明治三十八年二月十九日巳年生。

（右上）清、（右下）二女かず子、（右から）すみ子、主人清二、夫人健、ひろ子

HARUO SAITO
C. P. 39 — Cooperado N.o 150
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地マルキタ區

齋藤春夫氏

原籍　福島縣安達郡安達町
渡伯　昭和三十一年五月　あふりか丸

東北地方出身の風習をそのまま身につけた質素な拓人で、外観を飾らず、眞面目な拓人である。愛妻ふみもその通りであり、十九才の長男俊道は現在父に代つて耕地の管理をなしているが性格も地味である。一九六四年宿望の住宅が新築され、さぞかし嬉れしい事であろう。

彼は二十五才で軍隊に呼寄され、上海を振出しに中支方面に転戰した。終戰まで五ヵ年硝煙砲雨の間をくぐり、幸い生きのびて復員し、故郷に歸つた。農についているうちに、ブラジル移民再開のことを耳にし、これ幸とばかりそれに應募、一九五六年（昭和三十一年）五月あふりか丸で渡伯した。配耕地はトメアスー植民地マルキタ區遠藤瀧三耕地、耕主は福島縣出身の篤農家でこの先輩の教訓をよくきき、その指導方針の通りに進んだ。在耕二ヵ年の間に通つて近隣の荒山を伐採し、斉藤耕地の建設に着いた。そして七年後の今日は六千本のピメンタを植え、渡伯九年目に堂々たる耕主となつた。もし日本にいたら、九年目の今日といえど、貧乏したに違いない。今日彼は自動車を持ち、トラクターで耕作し總べては機械化された。そして宏壮な住宅を新築し、二・三年もすれば聽て長男の嫁と云う段取りである。遠藤耕地に入植したのが幸運のキツカケで、その近隣に大密林の空いたのがあつたから、よかつた。

渡伯するときに構成家族の一員に連れてきた松本博もふみ夫人の兄の子（昭和八年二月十一日生）渡伯一年後に隣地に獨立して獨力でピメンタを栽培し、自炊生活の間に五千三百本を植えた。一九六二年三月（昭和三十七年）渡伯六年目に、ブレウ四區橋本實長女とみえと結婚、既に長女早苗に惠まれている。獨立心旺盛な青年拓人であるから、その将來は期待すべきだ。

ふみ夫人の姉みよ夫人の聟佐藤清美も、彼より一船おくれて昭和三十一年十二月あめりか丸で渡伯、同じく遠藤瀧三耕地に就勞、八ヵ月後に彼より一足先きに獨立、ブレウ三區クノウ耕地を購入して、佐藤耕地をつくつた。姉婿清藏は死亡、姉みよは五十九才で健在、甥の清美はます夫人（松川村出身）との間に長男榮作、二男直樹が出生し、ピメンタも旧耕主が千本しか植えてなかつたのを、四千本増植し、現在五千本に増やしている。昭和三年二月一日生れで當年三十七才の少壮拓人であるから、前途は伸びてゆくだろう。斉藤一家はこうして三家族共に發展した。大正六年三月三日己年生。

上は齋藤春夫家の人々、下は佐藤清美家の人々、

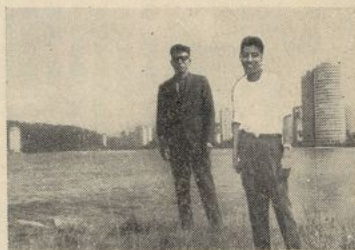
による大河の氾濫で、糟糠の夫人は、あつと云うまに魔水に飲まれて、溺死した。助けるにも瞬間の事で、大暴雨の水流では如何ともしがたかつた。飢餓の苦境に堪え、終戰の今日を待つていたのだが、その終戰を迎え、日本に歸還する希望も束の間遂に惨死した夫人の心中は察するに余りありだが、残された遺族の悲歎鳴咽の姿もはた目で見れず、同情を禁じ得なかつた。

かくして悲しみの間に、焼土の日本に歸り故郷で暮していたが、恰度アマゾン移民の再開で、それに應募、第一回トメアスー植民地移民として、押切耕地に入植した。マニラで働いた經驗を生かし、入植一年目に現地に通つて胡椒五百本を植え、早くも二年目には獨立し、米作・養豚・野菜栽培で貧苦を突破、マルキタ農場は遂に今日一万六千本を満植し、年産五十トン以上を生産している。軈てその余力を驅つて、一九六三年にベレーン郊外カスタニヤール驛に佰人耕地百四十ヘクタールを購入、ここに一年目二千五百本、二年目五千本を植え合計七千五百本を植えこの耕地の方は五万本十万本と大農場の計画である。カスタニヤール市はブラガンサ街道随一の商業都市でその近くに耕地を建設することは、誠に便利である。と云う戰後派移民一千家族中、胡椒多收穫では石川道喜を第一人者とするが、事業の規模においては彼が第一人者であろうと推定させられる。

主人と三男麻三員君

四男茂治（左）と五男正治

長男博は不幸幼少の頃比島で病死、二男隆は戰時中現地呼集兵として激戰参加の經驗があり、渡伯するとき妻とよ子を娶り家長となり、一家を統卒した。現在カスタニヤール新農場に主力を注ぎ、愛兒佐恵子・光雄。博之がおり、三男麻三員（まさかず）は聖市木村氏長女早苗を娶り、ベレーン市ジャーブラス商事會社取締として商業界に活躍している。四男茂治はピメンタ仲買業として兄麻三員に協力している。そして五男正治は本耕地經營、末娘由紀子は黒澤家に嫁づいている。きみえ夫人の死後、孤獨の間に生きた拓人彼の晩年の幸福を祈りたい。明治二十七年十月十日午年生

トメアスー植民地マルキタ區

父 清水金右エ門氏
同 隆氏
同 麻三員氏
同 茂治氏

KIN-EMON SHIMIZU
TAKASHI SHIMIZU
C. P. 39 — Cooperado N.o 104
Belem — E. de Pará

原籍　三重縣四日市市平津町
渡伯　明治二十九年六月　あめりか丸

涙なき人生は、オアシスなき砂漠に等しく潤がなく、人間をして冷血漢たらしめる。映画をみても格斗が連續するギャング物は、觀ている時は面白いが、觀てしまえば、何等印象に残らない。それと反對に涙のある映画は感銘深く、永く我が腦裏に残る。敬愛する本編の清水家の過去人生史は、物語りを一寸聞いただけで、著者の腦裏に一生記憶として残るだろう。それだけ印象深いのは、人生悲劇の一幕があつたからだ。

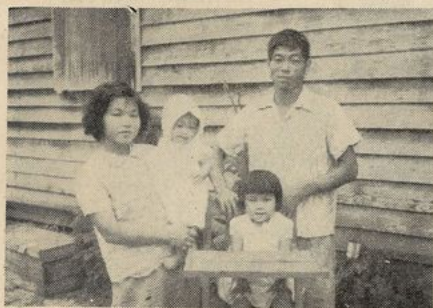
質實剛健な彼は、少年時代から海外發展を熱望していた。大正四年第一次世界大戰中に二十一才でフイリッピン島に渡り、ダバオ市郊外でマニラ麻の栽培に從事した。比島邦人の草分開拓者太田が經營する太田興業KK系統の會社で、仕事は辛かつたが、無駄使いしなかつたので、勤倹力行の結果、貯金も出來妻きみえを呼寄せた。新婚夫婦はここで協力一致、次から次へ生れる子供の生長を樂しみ、將來大農場經營を夢みて、日々の辛さも反つて樂しく鍬を引くことが出來た。順風滿帆の清水家は他人から羨望される程の裕福な家庭となり、子供も五男三女の子福者となり「清水さんはほんとに幸福だわー」と云われるようになつた。人生誰しも幸福の絶頂の時が、一番危険であり、誰れしも幸福な生活は五十年・六十年と續かない。これは神のみ知る人生であつた。

幸福であつた清水家にも迅風のように極悪な魔の嵐が吹きつけてきた。一九四一年太平洋戰爭勃發、緒戰の喜こびもつかの間、四ヵ年後は遂に無條件降服と云う、建國二千五百年來の悲慘な日が訪づれた。敵中硝煙彈雨の間で、彼等非戰斗員は、山野をかきわけ避難した。然し神出鬼沒の敵人の攻擊で、彼等の家族も、幾度も生命の危險にさらされ、必ずしも安全でなかつた、遂に逃走中に、可愛い盛りの少女長女とし子、二女愛子は流彈に當つて、あえなく一陣の硝煙の中に散つた。今日生きていれば妹の由紀子（ブレゥ四區黒澤昭良夫人）が成人しているから、立派に家庭の主婦となつていたであろう。二人の愛兒が比島で散つただけでなく、一九四五年八月終戰直後の九月一日に、日本に歸るべく山間を辿つて歸路につく途中、連日の豪雨

二男隆氏の家族

SUSUMU ENOKI
C. P. 39 — Cooperado N.o 87
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ一區

榎　進氏

原籍　廣島縣安藝郡音戸町
渡伯　昭和廿八年八月　あめりか丸

戦後トメアスー植民地に二十九家族百八十三人が入植した。アマゾン再開移民の草分先驅者である。第一回移民は黄麻移民で奥アマゾンに行き、彼等の第二回組がピメンタ移民としてトメアスーに入植した。廣島縣人なる故に、植民地第一の篤農家山田義一耕地に入植したのは幸運であつた。

彼は渡伯當時青春多端の情熱家であつた。戦時中少年兵として、海軍工廠に働き、少年ながらも義勇奉公の念に燃え、國家に身を捧げた。渡伯當時の家族は多數で、父武、母花枝、妹美代子、妹康子妹美津子（在日本）弟義雄、弟戸根雄、弟利雄等で、両親一家はブラジリャ首都建設に際し移轉、シダーデ・リーブレ區で商業に邁進している。その家族のうち弟義雄だけが戻つてきて彼の片腕となつて協力している。

榎青年と云われる位に、元氣潑剌、新鮮味溢れる彼に配する末子夫人は、岐阜縣人牧野忠雄（十字路ガラージ勤務）の妹で昭和三十年五月あふりか丸で十六才の少女で渡伯した。生地が文豪島崎藤村出生地で、彼女は少女時代より文学に憧れをもつて育つた。なか／＼記憶力のいい女性で、九年前に岡部孝耕地で御手傳をしておる頃、著者が岡部家を訪問、親しく快談した事を記憶していたのには驚ろいた。文学少女なるため著述家の筆者の印象が深く殘つたのであろうが、それにしても九年振りの訪問に、一介の浪人を憶えていたのは頭腦明晳である。

この若夫婦は、遠くアグア・ブランカ區山田耕地から耕地建設に通勤して、現地に胡椒を最初二百本植えた。大密林をやきそしてその燒跡の整理に、死物狂いに働らいた。顏は炭で眞黒くなり、夕方疲れた軀を鞭打つて、また四・五粁離れた我家に還つていつた。共に二十代の若さであり、獨立精神旺盛の二人であつたから、將來を樂しみに辛酸苦勞した譯である。建設當時の苦難を物語ると、涙が出る程に努力したと語つた。そして現在六千本の胡椒を栽え、貨物運搬自動車を持ち、多勢の伯人を使用している。幸い實弟義雄が伯人の指揮者であるから、この協力は偉大である。夫婦の間に長女久江、二女梨枝、三女ミルの三兒に惠まれている。

彼は戦後渡伯者の中でトメアスー産業組合加入がいと早く、一番卒先して加入した山本峰雄（八十五番ブレウ三區）につづいて、八十七番で、植民地の共存共榮に同感していた譯である個人的暴走や、他人の迷惑おかまいなしとする戦後派移民中の白眉で、この若人の精神美に敬服を表したい。両親もブラジリア首都で健斗している。ブラジリアの完成は、怖らく五十年かゝるだろう。そうした悠長な都市計画だから、両親も頑張らねばなるまい。著者も一九六二年「ゴヤス州邦人開拓五十年史」「ブラジリア建設五年史」を出版した時にその親を深うした。切に夫婦の健在を祈るつてやまない。昭和九年四月十日戌年生。

トメアスー植民地マルキタ區

川邊彌男（ますお）氏

原籍　三重縣津市河邊
渡伯　昭和二十八年八月　あめりか丸

MASUO KAWABE
C. P. 39 — Cooperado N.o 100
Belem — E. de Pará

幸運、逆境、幸運と、その數奇な運命に奔浪され、その波瀾重畳の人生は一編の移民小説の種になりそうだ。少年時代から清廉潔白な彼は、小学校卒業後に大阪商船ＫＫの船員になつた。船長、事務長などの信用をたかめ、軈て南洋方面航路から、大阪商船の金庫と云われた大連航路の船員となつた。當時の滿州は物凄く邦人が發展し、彼等の待遇もよくなつた。

二十五才の時に船員をやめた。時に大正十五年で、南洋比島タバオに渡り、マニラ麻の栽培に従事した。勿論獨身であつた現地人の土地を借地し、大いに儲けた。當時邦人會社は大田興業と古川興業があり、共に日系會社の華形であつた。勤倹力行して大いに儲け、十五年後（昭和十五年）には、歸國して結婚再び現地に戻つた。將來の大農場經營の夢をみていた當時が、彼の一番樂しい時代であつた。

上、浩君
下彌男氏、右から長女滋子.しづ夫人

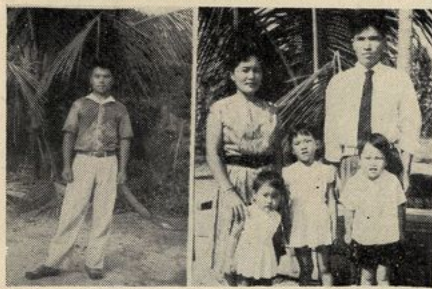
處が翌年十二月七日、大東亞戦争勃發、それからの四ヵ年間の運命は奈良苦の底に落されていつた。日々に悪化する運命には抗し難く、一九四五年八月十五日終戦、その頃は激戦のため山林に追われ、食糧なく遂に營養失調、木の葉、木の實をかじつて命をつないだが、どの家族からも營養失調でバタ〳〵斃れる犠牲者が續出した。三ヵ月後に漸く日本へ歸れる事となり、復員船にのり、十一月十日浦賀に上陸した途端、日本の厳寒に吹きさらされ、營養失調の妻は二男隆と共に故郷の土を踏んだだけで、万斛のうらみをのんで黄泉の客となつた。

かくして樂園生活から、地獄の生活に落され故郷に還つた。故郷と云つても、大阪商船々員の大正時代から離れること三十年、海外自由の天地で育つた彼には、實にキュウクツであつた猫額大の山間生活で辛酸をなめている時に、アマゾン移民の話をきき、これこそ我が意を得たりと、すぐ應募した。フイリツピン島の常夏生活の習慣がついていたので、どうしても日本の冬がなじめなかつた。一九五三年（昭和二十八年）八月第一回トメアスー植民地入植者として、二十八家族の一員となり押切耕地（現産組理事長）に入植した。押切耕主の同情ある援助で二年半の就勞中に、耕地から通つて大密林を拓き、到々現在は一万本の胡椒を栽培した。幼樹が多いので、未だ多收穫者とは云えないが、現在二十トン近くを生産し、ここ三・四年もすれば五・六十トンも生産し、一流耕主となるだろう。

耕地建設に盡した現在のしづ夫人の涙ぐましい功績は書くまでもない。苦労人しづ夫人の内助で一家は円満、長男浩、長女滋子の少家族だが、他人眼でも羨やましい位、順風で常になごやかな笑聲が室外にあふれている。長男浩は二十六才、彼がダバオで獨力耕地經營に突進した年輩で、今後は彼の活躍如何で一家は伸展して行くだろう。明治三十五年七月八日寅年生。

飯川嘉之氏

原籍　熊本縣鹿本郡菊地村
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

YOSHIYUKI IGAWA
C. P. 39 — Cooperado N.o 234
Belem — E. de Pará

義理に固く人情にもろく、仕事に對しては實に不退轉の努力をつづける拓人である。この主人に配するに幸美夫人が彼以上の働き手である。彼女はブレウ二區酒井一雄の姪で舊姓森久保幸美、彼とは故郷も同じく同じぶらじる丸で渡伯した。

彼は渡伯當時は二十三才青春の情熱湧く新人、この二人が結ばれるのは當然と云えよう。

彼の耕地は雜草一本もないまるで盆栽鉢みたようで、その手入れの行きとどいていることでも、几帳面な人であり清潔好きな夫婦の性格がうかがわれる。子供等も三人とも毎朝奇麗な着物に着替え、何時見ても奇麗さつぱりしている。住宅の中も整然たるもので、塵一つないほどだ。しかも彼は獨立直後に、マラリヤ病の流行で、それに罹り高熱を出し、そのため健し康を害た。今もつて完全とは言えない。そうした苦難を克服して勞働力の少ない夫婦が、この美しい庭園農場を建設した事は賞讃したい。

彼は弟政敏を昭和三十四年ぶらじる丸で呼奇せた。そして將來は兄弟して大農場を建設するつもりでいたが、弟はアマゾンの氣候を好まず、間もなく聖市方面に移轉した。處が生存競爭の激しい聖市では、アマゾン方面から移轉する連中を「カモ」にしようと待つているヨタ者が多く、政敏も幾度もそうした苦難にあい、適當な仕事にありつけなかつた。そのため志を得なつた弟の逆境に同情し、彼はわざわざ旅費を送つてアマゾンに呼び戻し、一九六四年にカニンデ区に分農場を拓かせ、既に八百本の胡椒が栽えてある。弟思いで、人情味豊かな人柄は、自然と親しさを感ずる。著者は初對面であつたが、座談している内に尊敬すべき人物だなあと感じた。

父茂、母かずえ兩親の次男に生れた。長兄輝雄は在日本、兩親も健在である。十八才まで父の手傳いをして、軈て熊本市に出て建築業の見習いをし、軈て一人前となつて、市井で働いていた。トメアスー植民地模範農家の一人永野豊喜夫婦が一九五五年（昭和三十年）訪日した時に、アマゾンの話をきき無限の寶庫開拓に胸を躍らせた。そして同年ぶらじる丸で渡伯した。配耕地は永野義春（豊喜二男）耕地、同縣人の先輩の指導をもつて四カ年半働いた。耕主の父豊喜も二男吉春も、後輩移民に特別待遇をよくした。そのお蔭で、ブレウ一区に土地を求めて飯川農場を建設し、現在四千本の成樹を栽培している。愛情こまやかき夫婦の間に、長女和子、長男良男、二女雅子の三児に恵まれている。この樂しい農場の風景を、故郷の兩親が見たら歡喜にむせびなき、嬉し涙を流すだろう。弟政敏も既に二十七才、獨立して二・三年後は妻帯しなくてはいけないだろう。この時にも彼の援助が必要である。切に夫妻の健在を祈り、弟の飛躍を希つてやまない。昭和七年二月二十五日申年生。

美ましい飯川家，左は弟政敏君

ROKURO OKUCHI
C. P. 39 — Cooperado N.o 106
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ一區

大口六郎氏

原籍　群馬縣高崎市
渡伯　昭和二十九年十二月　あふりか丸

實に辛抱強い性格で、これをやりたいと思つたら、一心不乱にその仕事に熱中する人である。それなればこそ、僅々十年でピメンタ園八千本も栽培し、しかも貨物運搬自動車から、輕自動車・トラクター、消毒散粉自動機などを機械化した訳で、その堅忍不拔の精神はすばらしい。一九六一・二年度のマラリヤ病流行時代には皆熱を出して困つたが、幸い善處したため全快も早やかつた絶對の健康地になつたとは云え、アマゾンは地理的に十二三年おきにマラリヤが猛襲するので衛生局では原病菌撲滅の對策を講じているから、文字通りの健康地になるだろう

彼は昭和八年に日本通運株式會社に入社、そして二十年も精勤した。自動車、トラック兩方とも使いこなし、戰時中は軍隊とも關係があり、この方面はベテラン中のベテランであつた。處がこんなに長期に精勤しても、やはり下級社員なるため、退職する場合、退職金は少なく、そして退職後の獨立營業は、ブラジルと違つて不可能、一家の将來を考えると、日本の生活が莫迦〳〵しくなつた。恰度四十三才の時に、友人がブラジル移民宣傳のパンフレットを見せたので、善いとも、悪いとも前後を考慮せず「よしきた、更生の道をブラジルに求めよう」と決心した。そして昭和二十九年十二月渡伯したが、「思い立つたが吉日で」その決斷ぶりに父御供平八、母ひさよも吃驚した。

勿論みよ夫人も主人の決心が強いので渡伯と決心した。一休に關東地方一都六縣は海外移住熱がない。東京で日雇仕事があるからだ。その移住熱の少ない地方で、最も海外に出ているのが群馬縣であるが、他の東北、中國、四國、九州の各縣と較ぶれば比較にならない。だから彼は群馬縣人として戰後南米移民の先驅草分である。四十三才で海外に移住するには年をとり過ぎていたが、永住の決心をしていたので、移住に年齢は關係なしと自覺した。この決心は今になつて先見の明があつた。あれから滿十年後は立派な耕地を建設し、安住の地を得たが、日本にいたら今頃は、まだトラックの運轉をしなければならなかつただろう。しかも今は長男公一（昭和十六年生）が成長し、耕地を管理し、多くの伯人労働者を使用している。長女文子も、稀れにみる努力家戸澤修治（秋田縣出身大曲農業高校出身、昭和三十一年渡伯・柔道二段のスポーツマン）と結婚し、立派な農場主夫人になつている。ここまで來た十年間の陰に、みよ夫人の内助の功は忘られない。入植當時沼澤耕地に就労三ヵ年の間に、日曜・祭日・雨の降日を利用して大密林を拓き、そして胡椒を栽培したが、その時に最も働手は彼女であつた。そのため子供等も母に見習つて辛抱した。大口家のブラジル移住は成功であつた。明治四十五年七月十九日子年生。

トメアスー植民地ブレウ 一區

山田元信氏

MOTONOBU YAMADA
C. P. 39 — Cooperado N.o 215
Belem — E. de Pará

原籍　熊本縣下益城郡松橋町
渡伯　昭和二十八年九月　あふりか丸

人生は長いマラソン競走である。スタートを同時に切つても、途中まではグングン拔いて、目覺ましいが余り走り過ぎて呼吸困難となり、競走から脱落する者もいる。と云つて自分の力に相應するペースを守つて悠々と走つている内に、先走隊が脱落するので、案外優秀な成績でゴールインする人もおる。開拓社會もマラソンと同じで、その いい實例が、彼の舊耕主沼澤谷藏である。舊耕主は二十五才の新婚で渡伯、こん夫人の眼病で上船できず神戸で六カ月治療、アカラ植民地に入植すれば、マルキタ直營農場閉鎖で生活苦、ブレウ区で米作に挺身すれば、黑水病の恐怖で實弟が二十才で病死、黑水病を恐れてベレーンに出れば、太平洋戰爭で燒打事件に遭い着のみ着のままで歸植、その人が現在トメアスー植民地最高收穫者にあげられているのだから、人生マラソンは短兵急ではいけない。

彼等も昭和二十八年の渡伯で戰後再開されたアマゾン移民では早い方であるが、配耕地のマナカプル植民地アグア・フリーア区でマゴマゴしている内に三カ年は過ぎた。この三カ年の無駄骨が、トメアスー植民地の六カ年の生活にかけ合う譯で、結論から言えば彼は六年おくれて渡伯した譯で、昭和三十四年（一九五九年）渡伯したのと同じである。そうしたハンデキヤツプを考慮に入れて、決して焦らず自巳農場を完成してもらいたい。例えば舊豊福村出身の石川四兄弟などは、彼より後年にトメアスー植民地に入植したから、現在のように大成功したが、もし彼のいたマナカプル植民地に入植していたら、一・二年で營業資金を消耗し、どんな方向に落ちぶれていつつたか解らない。

彼は實に農場建設に熱心で、そのピメンタの成績は拔群である。特にてる子夫人が雜草一本生やすのが嫌いで、そのため樹木の發育は立派である。現在三千本の成樹があるが必ずや立派な農場になるだろう。

彼の渡伯は滿二十九才で、てる子夫人と愛兒三人、それに弟世爲（せいじ）を伴い、マナカプル植民地アグアフリーア區に入植した。受入態勢整わず、ゴム樹も希望なく野菜も賣れず、米も一ヘクタール二、三十俵で特に旱魃期が長く、全く生活するのに漸くであつた。百四十家族入植して百家族以上が、脫耕した。この瘦地に三カ年辛抱したが、將來の見込がないので、遂に沼澤耕地に轉じた。四カ年コロノ生活をしている内に、耕主の信用で開拓資金を借り、隣地を拓いた。そして今日までアマゾン生活は十二年になるが、その幸酸苦勞は筆舌に盡しがたいしかも弟世爲は軈てサンパウロ市に移轉したので、農場建設は夫婦のみでやらねばならなかつた。そして傍ら四男四女を育ててきた堅忍不拔の精神は賞して余りあるものだ。日本生れの長男源穗（もとほ）長女近加子、二女たつ子以下かおる、朝子、信二、輝三等健在である。大正十三年七月十六日子年生。

寫眞は耕地建設當時の想出

HARU0 TSUTSUMI
C. P. 39 — Cooperado N.o 215
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ一區

堤　春　雄　氏

原籍　群馬縣利根郡昭和村
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

一家擧つて「のん氣」な人々ばかりで、よくもこう揃いも揃つたものである。著者が全アマゾン八カ月の旅行で、一千家族以上も訪問したなかで、この位大陸的な家族も少なかろう。それが戦前派だつたら、既に三・四十年にもなるから、習慣に染まつて、そうした事もあるだろうが、それがなんと戦後派移民の事である。全くたまげる程に悠然たるものだ。彼は渡伯當時に「二・三年は手傳うがあとはお前達やれよ」と言つたきり、四十代の若さで到々、鍬を手に握らなくなつた。松乃夫人はマラリヤ病がたたつて、もう無理出來ない軀で炊事も出來ない。長男靜滋は「總領の甚六」で焦らない。「また今日も雨かなあー」と空をみたら、腰をあげない。二男宣雄はインテリで商取引に熱中、三男裕道は入植當初の激務がたたつてマラリヤがこじれ健康を害しているので、これまた母と一緒で當分畑に出れない。長女勝子は炊事をまかされ、二女昭子、四男忠信、五男昌敏は勉学中である。結局長男靜滋（せいじ）のみが畑に出て、伯人勞働者を傭つて農場を經營してゆかねばならない。あれでカニンデ分耕地ともで、九千本の胡椒が栽つているのだから、その經營法の上手なのに吃驚する。

彼はなかなか腰が重く、囲碁を打ち始めたら倘さらである。時には家庭の事まで忘れる、と云つて思い立つたら、氣の向くままに飄然と仕事に就く。渡伯後三・四年目に聖市方面の噂をきき誰れにも言わず思い立つたが吉日で、その朝空路聖市に飛んだ。アマゾンと聖市の距離は東京シンガポール間と同じで、彼はアマゾン地方戰後派の聖市視察者の嚆矢である。東京游学時代に講道館で柔道を学んで實力三段である。今式に云えば名誉五段とも云ろうか、三船久藏、徳三寶の獨者連に鍛えあげられた組で、ついでに接骨業を修得した。そのお蔭で、渡伯してからは數百人の患者を治してやつた。と云つて無料報酬である。接骨醫として立つてゆけば、けつこう儲かるのだが、もう金儲けの婆婆から、離れて見向きもしない。

終戦直後は三十代の青春を驅つて、覇氣横溢、多くの新設會社を目論見、農林省、自治省などを、駈廻り、農協、縣廳に申請書の提出、金融、經營と不眠不休の活動をした。そして十年間獻身して、金は儲からなかつた。大体金の儲からぬ性格の人物が、金儲けに夢中になるのが無理だつたのかも知れん。そこへ農業高校出身の靜滋がアマゾン移民の話をきかされ、一家の移住を懇願したので、「まあ行つてみよか」と云う譯で、財産も整理せず、身廻り品のみ持參して渡伯した。沼澤耕地に三カ年就働中、隣地を拓いて農場を建設して今日に至つた。長男靜滋は一九六四年六月故郷より愛妻藤子を呼寄せた。雲を摑むような一家であるが、大器晩成一家として將來は明るいし、宣雄・裕道・勝子・昭子・忠信等頭腦明晳なのは頼もしい。大正三年一月二十八日寅年生。

KIYOHARU MURAKAMI
C. P. 39 — Cooperado N.o 177
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ一區

村上清春氏

原籍　熊本縣下益城郡城南町
渡伯　昭和二十九年六月　あめりか丸

彼は北伯アマゾンで活躍すること實に滿十年、昭和三十九年末に、叔父村上茂人を頼つてサンパウロ市に進出した。節子夫人が、一九六一年にマラリヤ病に罹り、それから不健康勝ちであつたので止むを得なかつた。一九六一年のマラリヤ病は、アマゾン二十五年振りに再流行したもので、誰れしも豫想していない事であつた。やはり熱帶地の事であつたから、健康地になつたとは云え、厚生省の方で、マラリヤ病原虫撲滅剤の撒布だけは忘れてはいけない。

サンパウロ市は氣候温和、何時も日本の秋晴のようで氣候は良好だ。十年間にブラジルの事情も解つてきたから、叔父村上茂人を相談役にして、第二期の活動期に進んだらいい。

父又吉、母まさか兩親の長男に生れ、男子では一人息子、兩親に死なれ自由の身となつた。学校を卒業し、農産物商に勤務していたがうだつ上らず、そこへアマゾン移民再開の募集となつたので、遂に姉まきと子、節子夫人の弟河上義美を伴い、アマゾンに移住した。最初は南伯の叔父村上茂人を頼つて行きたかつたが、呼寄の手續や、その他のむづかしい事があつたので、手取早いアマゾン移民に應募した。

配耕地はトメアスー植民地アグア・ブランカ區永野豊喜耕地永野耕主は稀に見る苦勞人であり、特に二男の吉春が親切であつた。新入植者に同情し、出來るだけの便宜をはかつた。幸にして三年半の間に、現ブレウ一區の土地にピメンタ二千本を栽培したので、獨立の自信がつき、喜こんだ。これから獅子奮迅の勢いで、二千八百本に增植、合計四千八百本になつた。ブレウ一区は、沼澤谷藏・谷末繁美等をのぞくと、皆新移民ばかりで勢い競走なつた。このブレウ一区で實に滿六カ年半働いた。幸いピメンタ園は美事に成育し、二十トン前後を生産するようになつた。

未亡人であつた姉まき子は、舊耕主永野吉春實兄敏士と結婚し、幸福な生活に浴している。永野敬士は同じく熊本縣人で、トメアスー植民地を更生させた、アカラ青年同志會の一人であり現在胡椒園の他に、製材所も經營する事業家である。著者も先年永野家を訪ずれこの再婚を祝福した。義弟河上義美はブレウ一区の先輩沼澤谷藏長女涼子を娶り堂々と獨立して耕地を經營、一九六四年には滿十年目に訪日した。アマゾン新移民一千家族の中、滿十年目に訪日した者は十家族はいない。最も成功者の多いトメアスー植民地でさえ、僅かに五家族（女性で中田後藤、野上、男性で濱口末松と彼）だけである。母國の兩親もよろこんだことであろう。

彼は節子夫人の間に四男二女の子供が出生、長男誠治、長女みか、二男哲治（死亡）伯國生れの三男巧、二女香代子、四男壽男等である。切に今後の飛躍を望む。昭和三年十月五日辰年生。

YUKIO KOBAYASHI
C. P. 39 — Cooperado N.o 107
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ一區

小林幸雄氏

原籍　新潟縣高田市高士地区
渡伯　昭和二十八年八月　あめりか丸

実にこまめに働き、その甲斐／＼しさは同胞として力づよい。家長禮三郎耕地よりも、十年二十年後には或いは飛躍するかも知れない。訪ねてゆくと「妾はあちらで仕事していますからねー」と云う幸子夫人の聲は男性以上の頼もしさを感ずる。幸子夫人は家長禮三郎の姪であつた。幼いときから親しく知り合つていたので、長所も短所も解る位い知り抜いているのである。だから夫婦は渡伯後お互いの欠點を補い、そして助け合つて今日まで來た。

渡伯する時が新婚夫婦で、彼は二十五才、青春の野望を持ち、大アマゾン何物ぞと思つて、太平洋の怒濤を眺めながら、愛妻幸子と将來を誓い、長い船旅をしてきた。

「あなた兄さん達に負けんようやりましようね」
「うんあたりまえよ。兄貴に負けるものか」
「あなた頼もしいわねー」
「そう、お前が幸子（サチコ）で俺が幸雄（ユキオ）だ。幸福になれと親がつけた名で一心同体よ」

若夫婦の聲は、神に誓つた如く固かつた。

家長禮三郎は、戰前からアマゾン移住希望者で、上塚司所長と文通し「アマゾニヤ産業研究所月報」の愛讀者であつた。しかも禮三郎の三人兄弟は、皆滿州開拓團に參加、その一人が、團長となつていつた位で、小林家は一家擧つて海外發展兒であつた。特に彼の生地（舊名）中頸城郡清里村の隣村からは、ブレウ四区横山健一のような篤農家もおつたし、彼等禮三郎・幸雄の渡伯も、責任が重大であつた。

ベレーン市に着き、家長と共に木村總一郎耕地に就勞した。當時耕主はトメアスー産業組合常務理事でワンマン、なかなか剛直だつただが人情にはもろかつた。この耕地に一年いて、ブレウ一区沼澤耕地に移つた。沼澤耕主も稀にみる篤農家で、後輩を引立てる人情味豊かな人物、この耕地に三カ年働いたが、この三カ年が役に立つた。沼澤耕主は働くことが唯一の趣味で、そのため全耕地は庭園のように美しく、しかも手入れがゆきとどいていた。胡椒栽培の黄金時代に毎日毎晩賭突麻雀にこりかたまつたが、この耕主はそれを好まなかつた。農場建設はこれでなくてはいけないと彼は悟つた。

三年就働の後に隣地に大密林を拓き、そして若夫婦で五千二百本のピメンタを植えた。勿調新樹であるから多收穫ではないが、既に二十トン近くを生産した。そしておいおい經濟的にゆとりが出來たので、農場の機械化を計り、自宅の電化を充實さしている。胡椒樹が成長するように、子供も次から次へと誕生し、長男耕治、二男洋治、三男年和はすくすくと成長していつた渡伯滿十年、第一期の研究基礎時代は過ぎ、次の十年事業飛躍時代に移つた。切に今後の發展を祈る。昭和三年八月九日辰年生。

HISAKI ABE
C. P. 39 — Cooperado N.o 251
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ一區

阿部久喜氏

原籍　熊本縣菊地郡菊陽村
渡伯　昭和二十九年九月　ぶらじる丸

明朗闊達な拓人で、余り成功を焦らない夫婦である彼の生地菊陽村は往年野田村と稱し、戦前から南米移住の盛んな村で、前年著者の住宅を購入してくれた聖州モジアナ線オニブス會社經營の大事業家磯部定雄を始め、大成功者も多いし、戦後はアマゾンで、ブレウ二區酒井一雄、ブレウ一區飯川ゆきみ夫人など多數の人が輩出している。阿部夫妻も、そのためブラジル移民の事はかねがね耳にしていた。そこへ熊本日日新聞によつて、アマゾン移民の再開が紙上に廣告された。終戦後のことで日本の農業は行詰りを感じていたので、それとばかりに應募した。それに彼は故友五郎、母いま兩親の末子で五男に當り、いづれは自から獨立すべき運命にあつたので故里を離れても少しもいとわない氣持があつた。

配耕地は奥アマゾン大流マナウス市の對岸マナカプル植民地アグア・フリーア區であつた。既に前年九月のあふりか丸で第一次移民二十三家族一三九人が入植、受入れ態勢が充分でないので混乱を呈している處へ、第二次移民が翌年六月あめりか丸で三十八家族二一九人が入植し、そして一月おくれて第三次移民七家族三六人が入植し、續いてまた二カ月おくれて第四次移民が三十家族一八三人入植した。特に彼等入植地は、未だ密林も充分伐採してなく、道もなく、河には橋なくという風で、この三十家族で残つている者は一家族もなく、僅かに熊本縣人矢野健一が、クワテロン區に移轉して一人踏みとどまつているに過ぎない。彼等が入植した當時評論家大宅壮一が視察にきて、そのお粗末な住宅、食生活を見て「綠の地獄」と評し名著「中南米の裏街道を行く」に發表しているが、全くひどいものであつた。著者も大宅壮一より一寸遅れて視察し、クワテロン區辻福重耕地、アグア・フリーア區小副川耕地で一夜を明したが、軀全体が吸血ダニ・ムクインではれあがり、その上夕方は蚊群の來襲でひどかつた。彼はここに一年半いてトメアスー植民地諸富耕地に移り、五ガ年辛抱して現地に移つた。だから他人の數倍の精神的苦惱と、肉体的苦痛を感じた譯である。現在四千本を植えておるが、男の子二人が成長したので、今後は耕地の充實に力を注ぐことだろう。

一体に肥後人は冒險兒が多く、大ざつぱで向う見ずだが、彼は肥後人の悪弊を愼しみ、隱忍自重してゆく人で、その點汽車が軌道を進むように安全性がある。その點日常生活にも堅實で金錢貸借問題から、公共團体事業まで共存共榮的で、總べてに信用がおける。綾子夫人は實に淸楚な感じのする義理堅い女性である。長女ひで子はサンタ・イザベル在住宮城縣人只野禮治に嫁づき、二女春實、長男孝一、二男昭二、伯國生れの三男久德等健在である。明治四十三年三月一日戌年生。

KIKUZO NODA
C. P. 39 — Cooperado N.o 95
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ一區
野田菊藏氏

原籍　福岡縣山門郡山川村
渡伯　昭和三十年十二月　あふりか丸

父才吉、母アサノ兩親の長男に生れた。姉きさえの次弟で、父才吉は彼が八才の時に死亡し、母の手一つで育つた。その母も一九六三年九月故人となつた。姉きさえが福岡縣山野郡竹井町出身の野林二三郎と結婚して、大アマゾンのトメアスー植民地に入植するときは、その壯行を見送つたが當時彼は小学校二年生であつた。姉きさえが十九才で義兄野林二三郎が二十一才の青年、何も知らない少年菊藏には、外國に行くときかされ、夢物語りみたようであつた。この義兄も遂に一九五二年（昭和二十七年）二月四日四十三才の働き盛りで惜しくも永眠した。

彼は成長するに及んで炭鑛生活に乗込み、太平洋戰爭中は三井鑛山の至寶三川鑛山にいて、報國會を組織した事があつた。熱血漢だつたので、軈て三菱系古賀山炭鑛に移つた。炭山生活は若い時はいいが、年をとると穴倉生活で空氣の流通悪く、それに太陽光線をうけず、激勞なので、三十六才になつた彼の肉体にも、應々疲勞をおぼえだした。その頃であつた、實姉きさえから實兄の死を知らされ出來れば渡伯しないかとの手紙で、渡りに舟とばかり、炭鑛を辭職しブラジルに渡つた。この渡伯は誠に時宜に適していた。その頃の炭鑛は漸く石油に壓されて、賣行き悪く、斜陽産業と云われかけていた。會社としても離職者を望んでいた。あれから滿十年間に世界を震駭させた三井三川鑛の、六カ月に亙る總ストライキなどがあつたが、世界の經濟界は、一少部分の炭鑛で動かせるものでなく、九州の各炭鑛は全部閉山するのやむなきに至つた。明治三十年以來日本炭鑛史に殘る有名な日鉄二瀬の大炭鑛までが閉鎖したのだから悲惨であつた。今日追懷すると一日も早く渡伯してよかつたと思う。

渡伯後は、野林きさえ耕地に一年いて、すぐ現地に移り、野田耕地建設に着手した。現地は義兄故野林二三郎が活動した遺跡で、戰後移民としては、ブレウ一区の草分開拓者である。梅子夫人も同村出身で理解ある女性、協力して現在三千七百本を植えておる　既に子供も、日本生れの長男正彥、二男信行、三男泰正、四男博等の男性組が協力しているが、この四青年等がもう少し成人したら野田農場は各方面に事業を擴張し　物凄く發展することとうけ合である。

既に農場につきもののトラクター、耕運機、貨物運搬自動車自動粉散消毒機、などは勿論、自宅も自家發電機で電化し、夜ともなればラジオ、ステレオの妙曲がひびき、冷藏庫から冷めたい飲物を傾ける姿がみえる。ブラジルで生れた長女菊枝、五男利昭も成長した。實姉野林きさえも、長女みよしが阿部雪雄家に嫁ぎ、長男收藏も成人して耕地運營に邁進しているから、晩年は幸福な生活を送ることが出來た。やはり姉弟で、日曜日など往來し、お互に扶合つているのは傍でみても羨ましい位である。切に今後の發展を祈る。大正十年五月二十七日寅年生。
（左上は菊藏氏）

KENSHI GOTO
C. P. 39 — Cooperado N.o 163
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ一區

後藤賢司氏

原籍　宮城縣遠田郡田尻町
渡伯　昭和三十九年六月　あめりか丸

滿五十三才、その半生は全く悪戰苦斗の人生で、かくも神は我身に試練の鞭を與えるものかと歎いたこともあつた。逆境、不運、天災と丸で苦勞しに生れてきたようなものだつたが「待てば海路の日より」で到々樂園が近づき、現在安住の生活に浴することが出來たそして財産が出來た上に、四男二女も成人し、今後の後藤家は順風滿帆の好調の波に乘り、奈邊まで飛躍するか、自分でも嬉しくて毎日の生活が愉快であろう。しかも貞節のかおる夫人は滿十年目に訪日するし、全く正月と盆が一緒にきたような幸運に廻り合した。

彼は日本におるときは色々な職業に就いた。鉄道に十二年、鑛山に四年、そして大東亞戰に呼集され、硝煙彈雨の下で五ヵ年、復員して農業に二年、全く血みどろの生活斗爭であつた。得る處の財産は一つもなかつたが、この二十三ヵ年の間に、何をやつてもやりこなせるという自信と 逆境にたつても負けない不退轉の精神が身についた。この精神的修養は一朝一夕で出來るものでなく、實に二十三年間に自分でも知らず識らずの間に培かわれた譯である。

昭和二十九年アマゾン移民募集に參加、奧アマゾン、マナウス市の對岸ベラ・ビスタ植民地に入植した。百四十家族入植して、百家族以上退植した原因は、受入態勢悪く、一ヘクタール二・三俵しか籾がとれず、瑞穗の國民はこれで落膽、野菜もマナウス市が遠距離で運搬出來ず、と云つて他の作物も駄目、ゴム樹栽培も十年後でないと金にならず、そこへ吸血ダニムクインや、晝間から藪蚊の大軍猛襲で仕事にならずという悪條件であつた。評論家大宅壯一が訪ねて「緑の地獄」と痛罵し、名著「中南米の裏街道を往く」で叩いたのも、その頃であつた。著者もその頃訪ねていつた事があるが、全く見通しのつかない混乱狀態であつた。ここに二年五ヵ月辛抱した。彼は最初からこんな瘦地と知らずして、甘蔗十町歩を栽培し、その甘蔗汁を賣却した金を貯め、それと十町歩の甘蔗園の賣却金を旅費としてトメアスー植民地山田義一耕地に移轉した。一緒の頃に渡伯して直接トメアスーに入植した人は、もう半獨立農として、自分の耕地經營に邁進していた。これをみて切歯扼腕、負けるものかと子供等にも教訓、山田耕地三年目に、自己農場建設に着手した。耕主の溫情にかなえて、その代償として二男孝司を四年間耕主のもとでお禮奉仕をさせた。耕地獨立經營に立遅れたが一心不乱、日曜・祭日・雨の降る日も働き、驚くなかれ現在一万本を滿植し、年産二十トン以上を生産、余力をかつてブラジリア首都に土地を購入して、二階建の商店向家屋も建てた。そして滿十年目にはかおる夫人が訪日した。長男賢一、二男孝司三男信也、四男光一、長女靜香、二女房枝等健在である。斗志滿々、まで／＼事業は何十倍も飛躍する事必然である。明治四十五年九月十日子年生。

（寫眞は後藤一家ー左上篤農家後藤賢司氏）

MATAICHI NOGAMI
C. P. 39 — Cooperado N.o 212
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ一區

野上又一氏

原籍　香川縣木田郡三木町
渡伯　昭和二十九年十一月　あめりか丸

トメアスー植民地戰後派移民の中でも、異彩を放つている拓人で、その勤儉力行振りは、既に評判となつている。他の移民よりも獨立するのが少々立遲れたが耕地の管理がいいために、胡椒の成樹が物凄く成績よく、一本當りの生産量割にすると、全植民地でも彼の耕地の右にでるものは少ないだろう。もし彼のような勇往邁進な拓人が、最初からトメアスー植民地に入植していたら、戰後派アマゾン移民一千家族のトツプを往き、既に巨財を貯めていただろう

いやそれでなくても、みつゑ夫人は一九六四年(昭和三十九年)十二月に訪日した。三・四十年になる古參移民さえ、未だに墓參をしない人々が多い。特に南部サンパウロ州はひどく、五十年間に墓參した人々の統計は在伯邦人の二分(二パーセント)と云われている金を儲けて土地を購つたり、農場を購入したりすると財産が增えるし、住宅を建てたり、自動車を購つたりすると、それだけ文化生活が出來るが、訪日の金はそのまま一時に棄てゝ、再び手元に戻つてこない。金を貯めた古參　民の多くが「訪日する金があれば、土地でも購つて貸家でも建てた方がましだ。もつたいない金だ」と云つて訪日しないのや「兩親の墓は誰れか見てくれているだろう。親が死んだらもう日本とは緣が薄い」とまるで他人ごとのように云う人が多いが、こうした人々の聲を他に、みつゑ夫人は滿十年目に訪日した。アマゾン戰後移民一千家族の中で訪日した者は、トメアスー組で高木清人、河上義美、女性では中田みつ子、佐藤かおる、そして彼女、ベレン近郊で井内新吉唯一人で奥アマゾンは皆無という譯である。みつゑ夫人が十年目に訪日墓參したことは、その家庭の溫かさが解り、主人野上又一の人間性がよく現われているようだ。この一事を推してみて、全体が窺知られる。

彼の出生地は木田郡木田町である。戰前ブラジル移民が盛んだつた木田農林学校のある處だ。今雪校長は舊制鹿兒島高農出身の篤学者で、大いに南米移住を宣傳、戰後は自からも一家をあげてパラグワイに移住した。この地で育ち、成長して高松市野田鉄工所に勤務していた。昭和二十九年アマゾン移民の再開で、好機至れりと應募し、配耕地奥アマゾンのベラ・ビスタ植民地に入植した。植民地は受入れ態勢整わず、混乱していた。一ヘクタール二・三俵しかとれぬ米を見て前途を悲觀していたここでトメアスーに移轉し、山田義一耕地に入植した。在住五カ年其の間に通勤して大密林を拓き、胡椒を栽培し獨立五年目で現在七千五百本を植え、二十五トン前後の生産量をあげるに至つた。長子きみ子はブレウ四區佐伯光晴に嫁づき、二女しげ子はブレウ二區岸健一に嫁づいている。三女あき子健在、長男勝は聖市サ学園で勉学、二男進、三男健二、四男弘等勉学中である。野上家はブラジルで發展する家庭である。明治四十五年四月七日子年生。寫眞は昭和二十九年高松港離別の記念

MEGUMI TOKUMARU
C. P. 39 — Cooperado N.o 188
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ 一區

徳丸徳(めぐみ)氏

原籍　熊本縣鹿本郡菊鹿村
渡伯　昭和三十年十二月　あふりか丸

熊本縣出身、果斷俊敏の青年である。肥後人通有の酒豪でもあるが、また事業にかけても絶對おくれをとらないという、勇往邁進の氣性で、一つの仕事をやりとげねば氣がすまない不退轉の拓人である。

父彌一、母ふさお、兩親の二男に生れた。兩親はこの二男が生れたとき、將來円滿な人物になるように上から讀んでも下から讀んでもいいように、「徳丸徳」となづけた。そして特に「徳」の字を「日本呼名めぐみ」と讀ました徳のある人間になり、惠を施してやる人格者になれという意味でもあつたろう。愛妻照子夫人は、マリキタ區遠藤政雄長女である。彼女の父政雄は祖父遠藤瀧三が昭和四年渡伯の時に、眼病のため止むなく渡伯が出來ず、兩親と別れて、故郷福島縣でくらした人物で、そのため成人してからも、特に子供の教育に熱心な人物になつた。照子夫人も中等教育をうけ、学力優秀、特に算盤は学校内でも光つていた。ついでだが彼女の妹美代子は日本生れだが、唯一の日本女性伯語訓導として、トメアスー中央小学校に奉仕している。實に稀らしい事で、他の伯語訓導、藤林千鶴子、川越早苗、近藤リージヤ、河内オデッサ、立岩ウーナ、崎山セリーナ、小海ナイジ伊藤ユウ子、武田キヨ子、千葉かず子、木村ジリシア、野村エレーナ等が皆ブラジル生れの純二世であるのに彼女一人だけが日本生れなのは、照子夫人の兩親が教育に熱心で、妹美代子を早く伯語学校にあげたからである。そうした教育熱心な家庭に育つた女性を夫人に迎えた徳丸拓人は、この上もない幸福な人と云わねばなるまい。

彼の渡伯の動機は、一九五四年（昭和二十九年）トメアスー植民地の篤農家熊本縣人永野豊喜夫婦が、三十年振りで訪日したときに、アマゾン自由の天地の話をきき、自分の一生を捧げるべき場所と決心、遂に永野耕主に呼寄せてもらい、翌一九五五年にトメアスーに入植した。勿論就勞耕地は永野耕地で、永野豊喜は隠居して二男の吉春に耕地をまかせていた。この耕地に三ヵ年半在住して、眞劍に耕主に奉仕したので、溫厚な永野耕主はブレウ二區濱岡耕地の買収にも後援し、そして照子夫人との結婚にも、媒酌の勞をとつた。結婚式は一九五七年（昭和三十二年）で、まだ永野耕地就勞中であつた。

ブレウ區に移轉して、自己農場建設につくや、驚異的努力をつづけ、僅々二、三年の間に六千五百本の胡椒園にしてしまつた。そして昨年は十五トンの收穫をあげた。しかも成樹が增えるように、愛兒にも惠まれ、長女みきえ、二女妙子、三子かずえの三兒出生、一家は陽春に照され、順風滿帆の人生の波がただよつた。未だ若冠三十三才。眞の事業は今後の十五年間にある。冒險を愼しみ自重して軌道を往かば、將來大きな物が生れよう。昭和七年八月二十七日申年生。

トメアスー植民地ブレウ一區

仁平次郎氏

JIRO NIDAIRA
C. P. 39 — Secão Breu
Belem — E. de Pará

原籍　栃木縣羽賀郡益子町
渡伯　昭和二十八年八月　あめりか丸

「己を知つて、人生の道を誤まらず」と云うのが、彼の人生觀である。彼は栃木縣の出身であるが、軍隊生活では銃機隊に編入されていた。除隊後は青森縣の進駐軍につかえ、實に六カ年も勤務、そのため渡伯の旅劵は青森縣になつている。そうした軍隊生活のため晩婚となり、子供が小さく、渡伯當時四十三才の壯年でありながら、長男務十二才を頭に、二男武、三男博、四男正と續いたそしてブラジルにきて長女明美が生れたが、彼は家庭の勞働力のないことを考え、決して無理のないコースを辿つていつた。特にアマゾン地方はマラリア病もあり雨期には長期に亙る降雨で、野菜も出來ず、果實も少なく、ビータミンB・Cが不足しがちになる。そうしたことを考慮し、四兒の成長するまで無理な獨立をせず、池田亨ブレウ耕地の支配人をしているこれは全くうつてつけの仕事で、耕主池田亨も、安心して彼に耕地の管理をまかせるだろう。

彼がブレウ區池田分耕地の支配人で、二十四才になる長男務は池田本耕地で、多くの伯人勞働者を指揮している。池田耕主は稀にみる人情豊かな人物で、忠藏兩親は著者と日本から一緒に渡伯した三十余年の舊友で、トメアスー植民地篤農家のナンバーワンである。時期が來れば、彼も軈て獨立の機會もくるし耕主も大いに援助してくれるだろう。その時こそ、賢明な四兒が兄弟心を合せて協力し、立派な仁平耕地を建設してくれることうけ合である。

彼は昭和二十八年五月あふりか丸で渡伯し、第一回草分開拓者として、奥アマゾン大流マナウス首都の對岸マナカプル植民地に入植した。入植同航者二十三家族一三九人であつた。アグア・フリーア區開墾地に入植したが、受入態勢悪るく、混乱を呈していた。ゴムを植えたが十年先に收穫とのことで吃驚、稲穂は旱魃で白穗が出て、瑞穂の國民はいまさら、陸穂（おかぼ）の危險さを感じた。野菜をつくつたが、マナウス市民十万人は一般に野菜をたべず、大半が人參、茄子、大根など初めて見たという有様であつた。そこへ第二次二一九人、第三次三六人、第四次一八三人、第五次一六七人と、まるで豚箱に豚を押つめるようにしたので、移民は憤慨、不毛の地をあきらめ、百家族以上が無斷强引な退植をした。大宅壯一が訪づれ「緑の地獄」と悪評したのはこのときである。

彼はここに二カ年辛抱し、トメアスー植民地ブレウ二區大橋啓助耕地に移り、一年八カ月在住、それから藤橋銅三耕地に三年八カ月、池田耕主が稲澤精榮耕地を購入したので、その支配人として招聘された。軍隊生活で鍛えているので、几帳面で、しかも清廉潔白、得がたき支配人であり、池田耕主は全く好適な人を物色した。切に今後の自重を祈る。明治四十三年八月九日戍年生

トメアスー植民地ブレウー區

平田金吾氏

原籍　福岡縣三井郡太刀洗町
渡伯　昭和二十八年八月　あめりか丸

KINGO HIRATA
C. P. 39 — Cooperado N.o 165
Belem — E. de Pará

由來福岡縣は、明治時代から海外發展の旺盛な處でここブラジルも、在伯縣人の數から云えば、熊本縣人の七千家族の次で六千家族三万人ぐらいはおると思う量の點だけでなく、質の點でも在伯邦人のトップ級に五千町歩の米作王鐘ケ江久之助（水縄村）を始め駿足雲の如く輩出している

また彼の生地太刀洗町からは聖州プロミッソン市の豪商平田千嘉藏（大正二年若狭丸渡伯）ソロカバナ線パラグワスー驛豪商黒岩實（大正二年若狭丸渡伯）を始めこれまた多くの傑物が活躍している。こうした故郷のことをきくにつけ、後輩の彼等は大いに刺激劑としてこれに見習なくてはならない。

彼は日本で農にも就き、商業にも就き、總ゆる辛酸をなめた。だから少壯にして社會の荒液にもまれても、少しも苦にならず邁進し、戰後いち早くブラジル移民に對し應募した。よし子夫人の妹はる子（清野昌治夫人）と義弟常利を同伴し、青春の雄圖をいだいて渡伯した。アマゾン移民と云われて、當時でさへ反對する者がいたが、彼は邦人植民地だときかされ絶對健康地であり、生活のしやすい處と思い、安心して渡つた。時に三十五才で、トメアスー植民地のブレウ二区池田忠藏耕地に入植した。池田耕主は同縣久留米の出身で、稀に見る篤農家「胡椒を栽培して初成りで一瓩半採集出來なかつたら、優秀な農業者でない」と云う人で、この耕主の處に二カ年辛抱したのは後学のためよかつた。

翌年岳父橋本元七が渡伯し、姪甥も岳父のもとに戻つたので彼の家庭は勞働力もなく、隱忍自重しなければいけなかつた。焦る心をおさえ、二カ年後に現地に移り、大密林を焼き拂い、焼跡の大木をかたづけ、ピメンタを栽培した。長女きよ子、二女きぬえはまだ幼女であつた。耕地建設當時は何から何まで獨力を押してやらねばならなかつた。だから焦つては病氣になるので、ボツ〳〵と進んだ。ピメンタの樹數が増えてゆくようにブラジルにきてから長男信夫、三女れい子、二男進、四女すえ子などが増えていつた。よし子夫人は主人への協力以外に、生れてくる幼兒を育てるのがせい一ぱいであつた。こうして他人眼には解らない辛酸苦勞をなめ、遂に二千本の胡椒を栽培したここまで來る茨の道は大變であつた。既に渡伯滿十年目は過ぎて、十二年目になつた。

好子夫人は橋元元七の長女で、義妹はま子はアグア・ブランカ区清野昌治に嫁づき、その次の義妹さよ子はアライア区梅村昭に嫁づいて共々幸福な生活に浴している。義弟橋元常利と忠義は、堂々たる耕主となり、隣地で暮している。岳父元八が四年前に逝去したのは惜しかつたが、義母いとのは健在で靜かな余生を送つている。切に平田家の發展を祈る。大正六年十月十六日巳年生

トメアスー植民地ブレウ一區

橋元利光氏

TOSHIMITSU HASHIMOTO
C. P. 39 — Cooperado N.o 167
Belem — E. de Pará

原籍　福岡縣三井郡太刀洗町
渡伯　昭和二十八年八月　あめりか丸

「池田さん、戰爭に負けたらひどいですねー」と著者に語る彼の顏は悲壯であつた。そうであろう。歐州の弱小國や、支那のような國は、戰爭となるとすぐ負けることを豫想し、逃げ支度をする習慣がついているから、そう感じないが、日本の如く建國二千五百年以來外敵に一度も負けたことのない國民は、敗戰の慘酷を知らず、今度が初めての体驗でさぞかし彼も悲慘な目に遭つただろう。

彼は十三才で父に呼寄せられて、比島ミンダナオ島に移住した。だから妹靜江（松永悅郎夫人）はフイリツピン島生れである。平和な生活に浴している時に、突然日米戰爭が勃發し、比島は戰禍に見舞われた。緒戰は日本の大勝利であつたが、戰爭が長期化すると、戰爭物資の豊富な北米が有利となり、しかもドイツ降伏後は日本が世界中を相手にして孤立無援、この敗慘振りで彼等は密林中に逃がれ、食糧皆無、木の實本の葉をたべて糊口を凌いだ。軈て八月十五日の終戰、着のみ着のままで日本に復員したが、長女みつよ（七才）長男進（四才）は榮養失調であえなく死亡した。あの當時のことを追憶すると「身震いがしますよ」と云うが、さもあらん。平和社會に生きていても、次から次へと二人の愛兒が死ねば、氣が狂いそうになるのだ。それがあの混乱中である。著者といえども同情を禁じ得ない。十三才で比島に渡り、南方生活の悠長なのに慣れ、しかも冬の寒さを知らない常夏の生活、それに引替え日本の終戰後は人情あさましい社會で、つくづく嫌になつた。食生活は悪るく、海外から歸還した者はまるで他人あつかいにされ、精神的苦惱は重なるのみ。少年時代に日本を去つた彼は、日本の土がいやになつた。

恰度ブラジル、アマゾン移民が再開された。彼はこの絶好のチャンスをのがさなかつた。昭和二十八年二月ジユート移民十八家族に續いて、同年八月第一回トメアスー植民地ピメンタ移民二十九家族一八三人の中に加わり、勇躍希望の天地アマゾンの土を踏んだ。どんなにつらくても海外生活がいいと決心、ブレウ二區池田忠藏耕地に入植した。働らいてみると胡椒栽培はそう辛くなかつた。アマゾンの氣候も、思つたより暑くなかつた。幸い池田耕主の理解ある取計いで、在植二年目には、現地に獨立して荒地を拓いた。なんと云つても長女、長男が死亡し二女すみれ、三女みつ子、四女みどりは、少女と幼女であり、くによ夫人は四女みどりを姙娠中で充分な働きも出來ず、彼は四十才過ぎてから、一人で大密林の開拓に突進し、よく辛酸に堪え、今日ピメンタ四千本を栽培した。ここまで來る彼の人生裏街道は涙の物語りであり、血の奮斗史であつた。彼より後に渡伯して、幸運を摑んで出世街道を進んでゆく拓人もおるが、彼は過去の不運を悟り、少しも羨望せず、靜かに自己のベースを守つて人生を過ごしている。大正二年十二月七日丑年生。

トメスス一植民地ブレウ 一區

蒲島久夫氏

原籍　熊本縣鹿本郡菊鹿村
渡伯　昭和三十年十月　あふりか丸

HISAO KABASHIMA
C. P. 39 — Cooperado N.o 236
Belem — E. de Pará

若冠二十四才の獨身青年で、勇躍太平洋の波濤を越え、青春の雄圖を胸にいだき、大アマゾン地域、トメアス一植民地に入植した。日本にいても、うだつがあがらぬと感じたから、自由の天地に憧がれたのであつた。彼が感じた通り、日本では学歴、先輩の引立、社會遊泳術の技巧等、總ゆる祕術を盡さなければ成功しない。それを考えると彼の如き自由奔放の野人は、何時までたつてもうだつが上らない。ここに彼の海外發展の理由があつた。そしてあれから今年十月で滿十年になつたが、その結果は如何幸に今日は、二千本の胡椒栽培の耕主となり、いまた増植中で、痩せても枯れても一國一城の主である。收穫期や、耕作期には十數人の伯人を雇傭している。自分の耕地でさえ忠實に經營していれば、誰一人干渉する者もいない。氣樂な身分である。日本にいてヘボ會社に勤務、上司の御機嫌を窺い、馘首されて失職する不安な生活と、雲泥の差である。彼の渡伯は確に當を得ていた。

渡伯の動機は、熊本縣人永野豊喜が三十年振りで訪日したとき、自由の天地、働き甲斐のある天地、アマゾンの話をしたので、當時二十三才の彼は血湧き肉躍り、翼があつたら飛んで往きたいように熱望した。現に永野耕主は當時年收邦貨一千万円（一コントス一万円）程の收入があつた。彼は矢もたつてもたまらなく遂に呼寄せてもらい、同縣人德丸德などと一緒に渡伯した。トメアス一植民地に着いて、彼は永野豊喜長男敬士耕地友人の德丸德は二男吉春耕地に入植した。耕主永野敬士は稀に見る篤農家で、これまた苦労人、三年目にはブレウ四區宮崎縣人下前原光次長女みつ子を媒酌してくれ、ここで新しい家庭をもつた。そしてそのあと三ヵ年間耕主に奉仕した。

軈てブレウ一區の伯人耕地（二百五十本栽培）を購入して獨立、ピメンタを増植し、遂に蒲島農場を建設した。一緒に渡伯した德丸德も近隣に耕地を創設し、日雇時代の辛らさを夢物語りする時代になつた。本年十月は渡伯滿十周年記念である。十年一昔と云うが一瞬の夢であつた。愛妻みつ子は、篤農家下前原光次の令孃だけあつて、仕事熱心である。一寸でも休むことなく、主人に代つて勤倹力行している。彼女は結婚する前に両親に手傳い、現在の下前原大農場の基礎を固めた女性で、この似合の夫婦には、少々妬け氣味にならざるを得ない。おつと失禮

無一文、裸一貫、脛一本で渡伯して今日立派な農場を築き、トラクターや、消毒自動散粉機など設備も完成したが、その姿を故郷にいる姉等が、一眼見たら、吃驚するだろう「あのキカン坊の久夫」がと……

由來熊本縣人は、在伯邦人の數もナンバーワンで三万人以上いるし、人物も全伯一流に秀でた者が數百家族いる。こうした處から、彼も肥後魂を益々發揮し、今後も發展してもらいたい

昭和六年三月一日未年生。

TSUNETOSHI HASHIMOTO
C. P. 39 — Cooperado N.o 108
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ 一區

橋元常利氏

原籍 福岡縣三井郡太刀洗町
渡伯 昭和二十九年六月 あめりか丸

「天眞爛漫」その言葉がぴつたり、當はまる程、悪びれもせず、心豊かな青年拓人である。滿十五才で義兄平田金吾（長姉よし子の夫）の構成家族の一人となつて渡伯したから、當年滿二十六才の青年である。もうそろ／＼妻帯すべき春を迎えている。

父元七は四年前に死亡した。明治二十九年一月十一日生れであるから、滿五十五才で逝去したのである。福岡魂が全身に溢れ、開拓精神豊かな人物であつたが、長年の激勞がたたつて逝去した。まだ／＼働ける年輩であり、長男常利の嫁でもとつてからならいいが、その前に黄泉の客となつたのは惜しい。トメアスー植民地では、故元七と同年輩の人はトメアスー産業組合理事長押地他男、理事星野修、監事加藤三郎、他數多くの人がおるが、今を働き盛りと思つて大いに活躍している。それを考えると、父の死は早かつたし悲しいことであつた。

二十二才で一家の主となり、この若武者常利は初めて責任の重大さを感じた。今まではお坊ちやんで、父に一切をまかしていたのが、今度は耕地管理の責任を、いやでも負わねばならなかつた。母堂いとの未亡人がいて相談相手になるのが、何より心強かつた。そして少年である弟忠義の協力を求めて、二千本の胡椒を新しく栽培、幼樹と共に八千本のピメンタ園を經營、戦後派移民一千家族中、遜色のない經濟的地盤をきづきあげた。昨年は十二・三トンの収穫もあり、幼樹が成長すると共に収穫量は多くなるだろう。

二十五・六才と云えば世の常として一番遊びたい盛りであるその盛りに責任ある一家の主となつたから、早く一人前になつてよかつたかも解らない。それにつけても、早く妻帯して愛妻の協力を望みたい。そして母堂を安心させれば、橋元家は安泰であるし、地下に眠る故父上も冥福をかこつことが出來るだろう。

彼の渡伯は義兄平田金吾と一緒で、昭和二十九年六月あめりか丸で、直接トメアスー植民地ブレウ二区池田忠藏耕地に入植した。そこに滿一年いて両親が渡伯し、翌年には早くも獨立、現地の大密林を伐採、焼拂つて拓いた。物凄く獨立精神旺盛で當時は姉はる子（アグア・ブランカ区清野昌治夫人）姉さよ子（アライア南区梅村昭夫人）なども嫁に行くまえで、両親に連立つて開拓に協力した。十六才の青年彼も父以上に働らいた。年とつた父を余り働らかす事を心配したからである。幸い獨立後六千本の胡椒は完植され、姉達も嫁にゆき、一安心という處で父は斃れた。運命のしからしめる處で、致し方がなかつた。今は母堂を慰め親孝行を胸に祕め弟忠義と共に健斗している。既に農場の設備も万全を期し、必要な自動車も購入した。大いに將來發展せん事を望むと共に、母堂の長壽を祈つてやまない。

昭和十三年十一月十一日子年生。
父元七（中央）父健在な頃の寫真

大橋一家は、飛躍して後は耕地を分散し、各人が獨立會計にしたからよかつた。彼が今日ブレウ二區大橋農場に主力を注ぐことが出來たのも、獨立會計になつたからである。二万余本の胡椒樹は肥料を滿腹して青々と茂り、手入も行詰いている。そして收穫量もトメアスー植民地でもトップ級である。彼は產業組合に忠實な人柄で、岩間敬造、沼澤谷藏、池田享など大耕主連と同じく組合への出荷は一番多く、しかも組合の貯金は筆頭でもある。伯國のインフレで貨幣價値が、二十分の一も暴落してゆくが、あの貯金を昔し引出し、植民地の隣接地を購入しておれば今頃は數千ヘクタールの大耕主となつて居ただろう。だが彼は產業組合中心主義であつたので、組合の經濟窮狀をみるにしのびず、無理に預金に手をつけなかつた。その点、義兄弟の池田享を始め他の豪農の人々と共に、植民地發展のために奉仕する人物だと思う。

藤香夫人と四人の愛兒

父伊太郎は渡伯當時四十七才、第一回アカラ植民地入植者で今日八十四才で未だカクシヤクたるもので、母はま共に健在である。北伯ベレーン市の大橋兄弟と云えば、南伯でも一寸した人々は皆知つている。勿論一面識もなく、新聞紙上か諸々の刊行物の上の知合であるが、それ程全伯的に有名人である。長兄敏男(たり夫人はトメアスー關勝治・勝四郎妹)次兄康男(とめ夫人はトメアスー遠藤瀧三參女)弟靜男(ジョーニア夫人)弟德壽(千代夫人は馬場氏令孃)等はサンタ・イザベル市及びカスタニヤール方面で大々的に農場を經營、妹はな(サンタ・イザベル池谷藤一夫人)妹房子(ベレーン市貿易商山田義男長男準一郎夫人)二人も幸福な生活に浴している。渡伯して家内中で逝去したのは、叔父大橋行雄(母の弟)が逝去したのみで、猛毒マラリヤ病の巣窟に入植して、三ヵ年米作に邁進した家族としては、まあ犠牲者の少い方である。

兄弟と共にトメアスー植民地を三年で退植、サンタ・イザベル驛で健斗、兄敏男はその間聖州で四年間農事研究、歸村して間もなく戰爭、戰後は兄と交代して彼はトメアスー植民地農場を管理、池田忠藏二女藤香を娶り純農一式に集中、遂にトメアスー植民地トップ級の農場主になつた。カニンデ區奥に數百ヘクタールの原始林地帶を購入、將來牧畜方面にも駿足を伸ばす考えである。藤香夫人は實に質朴な女性、結婚前に長兄欽一郎死後、姉靜香(澤田毅夫人)次兄享、妹文香(澤田照男夫人)等兄弟姉妹手を取り合つて、兩親に盡した健氣な女性で、彼とは好一對である。大正九年四月一日申年生。

トメアスー植民地ブレウ二區

大橋啓助氏

KEISUKE OHASHI
C. P. 39 — Cooperado N.o 51
Belem — E. de Pará

原籍　静岡縣濱名郡仲瀬村
渡伯　昭和四年九月　りおでじやねいろ丸

「啓ちやんアメリカに行くんだつてねー」
「そうよー」
「美やましいなー。僕達も行きたいねー」
小学校の運動場で、啓助少年は学友に取囲まれて話しかけられていた。三十六年昔のことで、仲瀬村の田舎では、ブラジルと云つても解らず、みなアメリカの中にあるものだとしか思つていなかつた。啓助少年は當時満九才であつた長兄斂男が十二才、二兄康男が十才であつた。こうして九才の少年は夢のアマゾンに渡り、遂にあれから満三十六年も經ち、旣に彼の愛兒正男、直（すなお）忠の三人が、彼の渡伯年齢より成長した。人生の走馬燈は悠々と廻ぐつてゆくのが、考えてみると一瞬の夢のようで早いのに驚く。

三十六年のアマゾン開拓中、最も人間的に印象に殘る彼の記錄は戰時中である。一九四一年十二月七日、大東亞戰爭勃發、續いて翌一九四二年二月伯國の國交斷絕、そして同年八月ドイツ潜水艦がベレーン沖でブラジル商船隊を擊沈さしたので、樞軸國民住宅や農場は燒打にあつた。ベレーン市近郊の邦人三十余族は、トメアスーに難をのがれたり、長谷川貞雄の如く、百粁離れたカスタニヤールにのがれたりした。州政府でも殆んど日系人をトメアスーに軟禁したが、この時に彼等の家庭は、兩親と兄斂男、康男の四人がトメアスーに軟禁された。幸い彼と弟静男は、片岡治義家族と共に、その壓迫がなかつたので、毎日農場を死守することが出來た。不自由な四カ年の生活であつたが、滿二十二才であつたので、不退轉の決心は定まつているし、少しも恐れることなく、終戰後の農場對策に熱中した。だから一九四五年八月終戰のときは、サンタ・イザベル驛サン・ジユゼー耕地は立派な農場となつていた。この頃が一番彼の人生史で覇氣のあつた時代である。幸い彼等弟二人の死守によつて兩親兩兄達が歸村するや、間もなく一万三千本のピメンタは成樹となり、軈て第二農場サンパウロ耕地にも一万二千本の胡椒を栽培、續いてゴム六千本、カカオ、カスタニヤ、グワラナー、マンガ、ラランジヤ、バナナ等まるで農場試驗場みたように滿植した。一九五〇年頃からのピメンタ黄金時代の波にのり、彼が所有するトメアスー農場と共に四万本の生産量は物凄く、全北伯唯一を誇る胡椒成金になつた。一九五三年度は四千コントスの收益をあげて世人を驚ろかした。當時（一コントス一万円で邦貨四千万円今日の二十四万コントス）こうした軌道にのつたのも、彼と弟静男が共にサンタ・イザベルの耕地を四年間死守したのが原因であつた。

植民地の重鎭大橋啓助氏

トメアスー植民地ブレウ 二區

諸 富 八 治 氏

原籍　福岡縣三猪郡三叉村
渡伯　昭和八年七月　はわい丸

HACHIJI MOROTOMI
C. P. 39 — Cooperado N.o 48
Belem — E. de Pará

十年前は胡椒栽培一点張りであつたが、一九六〇年から建築請負業に轉じ、製材に必要な機械を設備、多くの板を自家工場で造り、そして急場を間に合している。トメアスー植民地はベレーン市から離れた處で、郡内に二カ所しか製材所がなく、時々不足することがある。そのため材木は何時も缺さんように準備している。農場は長男鶴雄が二十一才になつたので管理してくれるし、彼も後顧の憂がなくなつたので建築業に專心することが出來た。植民地中、多くの顧客を持ち、評判はたかい。

彼は立志傳中の人物で獨立自立の精神は旺盛、既に若冠十五才で海外に飛出した。父德太郎、母とは兩親の五男で、姉と一緒に渡伯したかつたが眼病で駄目、到々細川悅次郎家族の一員となつてトメアスー植民地に入植して細川一家に二カ年奉仕し、軈てマルキタ區高田幸之助耕地で四カ月獅子奮迅の働をなし、そして十七才で早くもベレーン市に出て、邦人耕地に六カ月働らいた。漸くベレーン市の事情が解つたので、葡語研究が最も必要だと感じ、パン販賣に從事し、傍ら伯人に伯語を教わり二カ年過ごした。恰度トメアスー植民地から退散した德田數惠一家と知合い、逆境を語らい合たのが動機で縁故となり、遂に同家長女とみ子と結婚した。そして野菜栽培に轉職し邁進した。

苦斗數年漸く春が甦ろうとする頃に、また運命は逆轉した。一九四二年世界大戰中、ドイツ潛水艦がベレーン沖でブラジル商船隊を撃沈さしたので、その反動で樞軸國民住宅は焼打された。彼等は岳父と共にコンジユーバ島に逃がれ、それから四カ月ベレーン市で収監された。軈てトメアスーに護送されて軟禁ここでアライア區の串田耕地で三カ月働き、ブレウ二區に移り胡椒栽培に轉向、一九五六年は八千本収穫十二トン、一九六四年は一万二千本に增え二十トンを収穫した。もうここまで來たらあとは軌道にのつて汽車が走るのと同じようで、年々增産發展するのみである。

若くして海外に飛出した彼は、親孝行が出來なかつた。それのみが悩であつた。終戰によつて朝鮮から熊本開拓地に歸還して苦難に遭つている父や兄を、一九五四年八月トメアスーに呼寄せた。兄寅雄は隣地で現在堂々たる耕主となり、幸福な家庭を營んでいる。父德太郎は渡伯一年三カ月目の一九五五年十一月八十二才の高齢で滿足して昇天したが、この一年三カ月の間孝養は至り盡せりであつた。その点、晩年に至つて悔を殘すことなく、彼は先祖に對して申譯がたつた。

追懐すると、十五才で朝鮮から轉住した彼の開拓生活は、既に三十二年となつた。實に數奇の運命で、もしピメンタ黄金時代がこなかつたら、人生行路はどんな風に轉落していたか判らない。長男鶴雄の次に健治・衛（まもる）あさ子・正人がいる大正八年九月六日未年生

CHUZO IKEDA
TORU IKEDA
C. P. 39 — Cooperado N.o 31
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ 二區

池田忠藏氏
池田亨氏

原籍　福岡縣三池市
渡伯　昭和七年二月　らぷらた丸

トメアスー植民地だけでなく、アマゾン胡椒栽培者中、随一の研究家で篤農の誉がたかい。「初成で一本から一瓩半收穫しない者は胡椒栽培者のうちにはいらぬ」と云いきる人で、一本の成樹から九瓩も收穫したことがある。故郷三池炭鉱の擴張で手離したくない果樹園を強制買収され、やむなくアカラ植民地に入植、カカオ栽培五カ月、同年アライア區で在來種のピメンタを二十本栽培した元祖である。十九才の長男欽一郎を黒水病で喪い、七カ年のアライア區と訣別、一九三九年トメアスー波止場近くで野菜栽培、「棚揚上式」の發見者で三カ年辛抱、一九四二年ブレウ二區移住六年間流轉生活、現地に腰をすえたのは一九四九年、最初七百本から植え、今日は二万一千本に満植し。分耕地も經營多くの新來移民の獨立も援助、植民地多收穫者の一人となつた。忠藏夫婦はベレーン市で孫の教育に當つている。二男亨は產業組合理事で清廉潔白の九州男子、愛妻ひさ(細川悦一郎二女)の間に健・務・靖・明の四兒に惠まれている。長女靜香（澤田毅夫人）二女藤香（大橋啓助夫人）三女文香（澤田照男夫人）共々優雅な生活に浸り、末子算はベレーン農大出身で二世の白眉である。池田家晩年の幸福を祝福して、著者卽詠十首を贈つて印象の駄文を略す。

（上）忠藏氏夫妻・（下）亨氏夫妻

著者卽詠

贈五首・池田忠藏氏夫妻へ

過ぎ去りし茨の道をふりむけば涙に曇る君でもありなん
幾度か茨の路を踏みこへて古稀を迎へる君は目出度き
成す事の總べてをなして孫をみる今日の生活は惠まれにけり
君と我共に船出し友なれば、君の幸こそ便り嬉れしき
金も欲せず名譽もいらずひたすらにほとけ心の君を羨やむ

贈五首・池田亨氏へ

なにわさて黒水病の苦しみは、とわに脳裏を去りがたきかな
魔病で死にし欽一郎にたち代り苦難を踏みしめ君斗へり
默々と働く無口のまご心を陽光美くしく君おぞ照らす
眞心もち新來移民引立し、時の氣持を誰か知るらん
少年で渡伯せし君四十路を過ぎて日本の面影日々うすれゆく

徳 田 數 惠 氏

KAZUE TOKUDA
C. P. 39 — Cooperado N.o 49
Belem — E. de Pará

原籍 島根縣那賀郡周布村日那
渡伯 昭和五年八月 もんてびでお丸

幾度か死の魔境に呻吟した夫婦で「徳田さんは反つて長生きをする」と云われている。あの逆境、あのどん底生活を征服、一九六五年には待望の訪日墓參旅行に夫婦してでかけた。誠にお目出たいことで、その訪日を著者も祝福したい。既に今日は全農場に胡椒一万八千本を栽え、年收五十トン以上で、アマゾン地方胡椒栽培者のトップ級にのしあがつた。しかも長男新一郎が耕地を管理してくれるので、後顧の憂がない。波乱万丈、數奇な運命に春が來たとは、彼等夫婦のことであろう。

彼は鐘紡女工募集人廣澤の勸めで、二十八才のときトメアスーに入植した。三才の幼女とみ子(諸富八治夫人)を連れ入植した處、到々新入植者五家族と共に悪性マラリヤ病に罹り、病苦で悲鳴をあげた。そのため六年目の一九三六年五月十九日に妻せんが逝去そして愛兒實(二才)米子(三才)他一人の三兒も喪つた。彼と長女とみ子も、今日か明日かの躰で、毎日の葬式をみて、次に自分の番かと思うと身震がした。トメアスー植民地はカカオ栽培をやめたので、将來の見込がなく皆退散した。彼は不運な境遇に陥り更生の道をベレーン市に求め、野菜栽培で漸く糊口を凌いだ。その頃ベレーン市で夫を死なした福岡縣人月俣みち子未亡人が、逆境だつたので、ここで彼等は共に同じ境遇に同情し合い結婚した。夫人も同じトメアスー入植者で、マラリヤが恐ろしく退散した女性であつた。

ベレーン郊外野菜栽培六年、漸く生活が安定した處へ、一九四一年日米戰爭、一九四二年一月國交斷絶、同年八月ドイツ潜水艦が伯國商船撃沈で、樞軸國民住宅焼打事件が勃發、遂に彼等はコシジューバ島に逃げたが、家財は燒かれ、着のみ着のままベレーン監獄に四ヵ月收監された。丸裸となり軈てトメアスー植民地に軟禁され、アライア區串田耕地で、日雇傭から再出發、三ヵ年働き、遂にブレウ二區で密林を拓いてピメンタを栽えた。涙ぐましい夫人の協力で、遂に一九五六年には一万本の胡椒を植え、十トンの收穫をあげ、それから一万七千本にふやし、昨年は五十トンの收穫をあげ、堂々トップ級にのしあがつた。巨財が毎年懐に入るので宏壮な住宅を建て、自家用自動車、貨物運搬自動車、トラクター、除草耕運機、消毒自動散粉機などを完備させ、自家用發電機で電化に惠まれ、冷藏庫の中には白馬・スコッチ等高級ウイスキーが揃えてある。

幼時から苦勞した長女とみ子は隣地諸富八治に嫁づき、長男新一郎はアライア區石川靜夫二女いく子を娶り、孫三兒に惠まれ、三女ふみ子と四女はベレーン市で洋裁研究、二男守男はベレーン小学校在学中である。特に最近は子供の教育に熱心であるが、在伯三十五年に春は甦えり、徳田家は發展した。明治三十六年八月二十日卯年生。

右側徳田氏家族、左側新一郎氏夫婦

トメアスー植民地ブレウ 二區

諸 富 寅 雄 氏

原籍　福岡縣三猪郡三又村
渡伯　昭和二十九年六月　あめりか丸

TORAO MOROTOMI
C. P. 39 — Cooperado N.o 119
Belem — E. de Pará

　大正三年第一次世界大戰勃發の時に生れた拓人である。五甲寅年で果斷俊敏、この猛虎の年に生れた者は南伯でも二十七・八才で一國一城になつた者が多い。例えばサンパウロ新聞社長水本光任、ブラジル豊田自動車伯國總代理人西谷一郎、聖市四百年祭典委員長武田俊男等數えきれない程多いが、皆三十才前に社會的一線に浮びあがつた。本編の主人も大東亞戰爭と云う不運がなかつたら、若くして名を成したかも知れなかつた。

　然し二十年後の立遅れを、これから二世の協力で取戻そうとする、その意欲はかつていい、彼は渡伯滿十年を機會に一九六三年度から大アマゾン河口のマラジヨウー島コンデイシヤ部落近くに、五人の友人と百ヘクタールづつ土地を購め、最初椰子樹栽培を行い、將來牧場經營を目論んでいる。成程いい考えで、牧場計画は十年、二十年後の夢で、二世につがせるつもりでいる。實に賢明な方針でこの計画は是非實現させたいものである。ピメンタ栽培の純益を、全部牧場經營と椰子樹栽培に投資するつもりである。ピメンタ栽培單一農の危險を考慮してのことだが、一般に北伯は牛が不足している。北伯はどこでも牧場になるとは限らない。特に酷暑がつづくと牧草が枯れるので、高台は駄目だ。その点マラジョー島は最適地である。彼等の計画にソウデ市長も大いに援助、彼等邦人が投資してくれるなら、何百ヘクタール、何千ヘクタールの土地も無償提供するとさえ云つている。この好機を逃がさず、大いに飛躍してもらいたい。南伯麻州で五万ヘクタールの牧場を經營する廣島縣人竹内豊次（一万頭）も、十一万ヘクタール農場の大分縣人宮本邦弘（一万頭）も皆最初は五頭十頭の牛から始めた。だから焦ることはない。普通牧場經營は二・三百頭までが長く、それ以上增えるのは加速的で早いとの事である。彼の牧場經營に著者も大いに期待する。

　彼は弟八治を賴つて、昭和二十九年渡伯した。弟は昭和八年岐阜縣人細川悅次郎家族の一員となつて渡伯した。十五才で渡つたので苦勞の限りを盡し、遂に堂々たる農場を築いた拓人である。彼は弟八治の耕地に三カ年奉仕し、その間に隣地を拓き七千本のピメンタを栽培して、滿十年にして、立派な農場主になつた。未だ幼樹が多いが二十トン内外の收穫をあげている。くにえ夫人の献身は申すまでもないことで、子供は皆日本生れである。長男忠志はブレウ四區宮崎縣人坂上袈裟之進二女きみえを娶り、長女光枝は下前原光次長男照雄に嫁づいでいる。下前原光次の姉すえまつは、坂上袈裟之進の妻で、嫁きみえと、女婿下前原照雄は從兄妹の間柄である。また二女好惠はサリーナ市福岡縣人筒井茂利長男一年（かずとし）に嫁つぎ、三女雅枝（洋裁研究）二男英昭（中学校）等である。長男忠志（昭和十三年二月二十七日生）は健在が農場管理をしてくれるから後顧の憂がない。大正三年一月二十一寅年生。

FUMIKO CHIBA
C. P. 39 — Cooperado N.o 46
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ 二區

千　葉　文　子　氏

原籍　宮城縣登米郡上沼村
渡伯　昭和十一年七月　あふりか丸

トメアスー植民地戰前の渡伯者は、彼女をもつて終りで、あとは同年九月あふりか丸で二家族、次船で眞根井孝門一人であつた。植民地で四十ヘクタールの大米作を經營していた夫に迎えられ、航海は夢のように樂しく、トメアスーに入植する廣島縣人住川行人青年兩親呼寄の女性土居國野（船中戀愛して現住川夫人）正木政人（コツケイロ）と共に入植したが、あれから十一年後には、樂しい家庭も夢破れ、遂に一九四九年八月十九日夫大平が四十九才の働き盛りで逝去した。あれから今日まで、幼児四人を育だて、十六年間の辛酸苦勞は筆舌に盡し難いものがあつた。然し努力した甲斐があつて、四児の成人をみて、漸く安堵の胸をなぜ下した。

長男滿は聖市に留学、コラソン・デ・ジュウス高校を卒業、長女和子は師範を卒業してブレウ区小学校訓導、二男茂は産組事務所勤務二女とも子はベレーン市師範学校在学中である。しかも一九五七年には宏壯優美な住宅を建てた。ピメンタを栽え始めたのが一九四五年終戰の年で二百本、そして僅か四年目に夫は病歿したので、栽培した胡椒八千本の大半は彼女の手により、またその後の管理も女一人で管理してきた。物凄くシンの強い女性で「トメアスーの賢夫人・女傑」の譽がたかい。著者も北伯アマゾン地方賢夫人の一人に推賞したい。

彼女が子供の教育に熱心なのほ、彼女自身がインテリ女性であつた。父菅原勝五郎、母ちよ兩親の四女に生れ、上沼女学校卒業後に、上京して東京で田園調希産婆学校を卒業した。田舍育ちでなく、東京生活も味つたので常識も發達し、視野も廣く社交性に豊んでいる。その彼女に配する夫、千葉大平もトメアスー植民地ではインテリ組であつた。宮城縣石森町出身で仙台工業高校出身、昭和七年渡伯で同縣人齋藤円治(舊理事長)北海道人江畑家俊などと、二十二家族で入植した。ボア・ビスタ直營農場閉鎖後はアヌエイラ區で米作四十ヘクタールを經營したり、實に先端を切つた。しかも野菜組合の結成主唱者で副組合長をつとめた。その頃に夫は弟太刀夫と共に自炊生活時代で、彼女がきてから光明がさし間もなく弟太刀夫も、岸しげよと結婚した。處が不運にも弟太刀夫が一九四八年病死し、翌年夫が昇天した。終戰後のことでピメンタ栽培に曙光がみえはじめ、植民地は雀躍していた頃であつた。弟太刀夫も死ぬ前年は組合の幹部であつたから、この兄弟が今日まで生命を全うしていたら、千葉兄弟は山田・澤田・池田・沼澤・岩間・大橋等に劣らぬ大農場をきずき、そして産組發展に盡し、組合三役に就任していただろう。誠に惜しいが、今は父の遺志を嗣いで長男滿や二男茂が努力しているから、文子夫人の晩年は幸福である。切に墓石に眠る故人の冥福を祈ると共に、未亡人の長壽を希たい。

明治四十四年四月六日亥年生。

右から長女和子・文子未亡人・とも子・滿・左上は茂

トメアスー植民地ブレウ 二區

三品嘉市氏

原籍　宮城縣伊具郡角田町鳩原
渡伯　昭和二十九年十二月　あめりか丸

KAICHI MISHINA
C. P. 39 — Cooperado N.o 193
Belem — E. de Pará

人間の運命は一寸の先も解らない。純農に生き、軈て成人式をあげ、消防所に勤務している時に、大アマゾン開拓移民募集の話をきき、一生安月給取りの生活でくらすことにいや氣がさし、将來の農場主を夢みて早速渡航準備。三十才の彼に配偶する新婚のケサ子夫人の協力を得ると共に、商業高校二年生で成績抜群の弟榮を構成家族の一員として、この若鮎夫婦は太平洋の怒濤を越え大南米への旅についた。前途は希望に満ち、如何なる苦難災難があつても、それを征服する青春の覇氣に焔えた。清楚な夫人の姿も甲斐々々しく、弟榮は大南米を一のみにするような夢をみていた。希望の大アマゾントメアスー植民地ブレウ四区千葉文子耕地に就働することになつた着いて驚いたことには耕主はうら若い美貌な女性で、方々から再婚の斡旋もあるが、ガンとして拒み、故人の遺靈を守り、遺兒四人の教育に余生を捧げ、自から眞黒くなり、畑の仕事をしている事であつた。彼等は新婚の樂しい夢の生活も忘れ、耕主未亡人の生活が大いに刺激となり、ここに夫婦協力、一心不乱に働くこと實に二カ年、この忠實さが耕主にも理解され、軈て同区に大密林を拓き、三品耕地建設に着手した。そしてあれから八年目の現在は、既に四千本の成樹を完成し、十余トンの胡椒實を収穫した。

経濟的安定と共に、住宅も建て、炊事場には冷藏庫もならべラジオによつて日本の近況を知り、用件の多いにつけジープも購入、裸で渡つた若夫婦の財産は、僅々十年間で、物凄いものになつた。日本にいて消防所に勤めていたら、それこそジープ一台も購えなかつただろう。愛情こまやかき夫妻には、渡伯後に長女和子（かずこ）長男秀旗（ひでき）の一男一女が生れている。耕地の此方にならぶ大密林の上に、夕陽傾き眞紅の夕焼が反射して樂しい食卓を照らし、愛兒二人を圍んで、その日の苦勞話に更ける夕餉の卓はいともなごやかである。三品夫妻は本當にブラジルに來てよかつたと著者は思う。

兄嘉市に絶大な協力をしてくれた弟榮は、兄が獨立して一年後、耕地經營の見通しがつくと、南伯に飛び、總ゆる苦勞辛酸をなめた。渡伯した時が十七才で三カ年兄に盡して、二十才で南進した譯である。軈て零細な金を貯め、パラナ州カンピナ・グランデ市で、鮮魚店を開いて獨立、大いに商業界に發展したが、将來の大成をなすには、伯國の大学を卒業しなくていけないと考えた。人間は大器晩成、焦ることなかれと悟り、鮮魚店經營傍ら、商科大学に通学している。なかなか出來ない事でその篤学振りにに著者も頭がさがる。人情味豊かな彼等夫婦は時々温い激勵の手紙をやり、遠いパラナ州で孤獨をかこつている弟を慰めている。誠に美ましい兄弟愛に滿ちた人々である。切に兄弟の大成を祈つてやまない。昭和九年五月十七日午年年生

（右上）弟榮君、左は三品氏夫妻と愛兒

トメアスー植民地ブレウ 二區

阿部雪雄氏

原籍　山形縣東田川郡八榮里村
渡伯　昭和十年六月　あふりか丸

YUKIO ABE
C. P. 39 — Cooperado N.o 69
Belem — E. de Pará

一九五三年、滿三十才で結婚して獨立、それから、ぐんぐんピメンタを増植し、現在一万二千本栽培し、三十余トンを生産している。結婚して十年目の記念に豪壮な住宅を建てた。如何にも彼好みで、應接間に連なつて横に台所が續き、一般勞働者が、簡單に出這入してすぐ話しが出來るように便宜に造作してある。台所は食堂を廣くとり、四五十人の宴會場にも役立つように設計してある入植當初の掘立小屋時代からの宿望であつた。

（上）は樂しい一家（下）は住宅

立派な農場の完成、清楚な住宅の新築と共に、愛兒三男二女も成長した。長男アデマール正、二男フラビオ鉄人、長女グローリア雪江、二女イビーニ友江、三男イラーリオ政司等であるみよし夫人は福岡縣人故野林二三郎二女で、父の死後、悲嘆にくれる母をいたわり、弟收藏を激勵して甲斐々々しく働いた女性であつた。堅忍不拔の努力家の彼に應わしい女性で、この夫人と結婚してから、彼の事業は一段と飛躍した。みよし夫人の父野林二三郎が逝去したのが滿四十二才であるが、四十二才といえば、現在の主人の年齢である。この若さで逝去したのだからみよし夫人は母と共に苦勞した譯であつた。そうした苦勞人なるが故に、阿部雪雄家を主人と共に隆盛にさせた譯である。

彼は若冠十二才で渡伯した。そしてトメアスー植民地の開墾地に飛びこみ、總ゆる苦勞をした。青年時代向学心に燃えていたこともあつたが、移民生活の初期で、貧乏のどん底生活、情けないかな、それが出來なかつた。だから彼は自分が就学出來なかつた代りに、子供の教育には熱心である。「これからの二・三世は大学教育まではしなければ」と教育の必要性を語つている。確にそうで、トメアスー植民地の二世三十代前後の青年は、南伯サンパウロ州の三十代の二世青年より、伯國の中等・高等の教育が遅れていた。これは地理的條件と、經濟的問題も關係し、トメアスー植民地に中学校や高等学校がなかつたからである。一九六二年度からトメアスー中学校が創立され、ベレーン市まで遊学する必要もなくなつた。今後は彼等の希望通り聽て、中学校が建つたから、高等学校も建つだろう。

彼は昭和十年の渡伯、今年で滿三十周年だ。十字路の野菜生活三年、オルティロ島の生活三年、一九四二年のベレーン市近郊の熱打事件で、一家と共にトメアスーに歸り、そして長い開拓生活が續いた。兄に協力して米作生活三年、一九四五年から胡椒栽培、そして一九五三年結婚して獨立したが、最初の十年間は血み泥の斗いであつた。あのマラリヤ病猛襲期にも、それに耐え、ベレーン市野菜生活の貧苦もなんのその、米作三年間も辛酸を拂いのけた。幸い今日まで操志强靭で頑張り通したから榮冠を得た譯である。大正十二年一月二十七日亥年生。

KISAE NOBAYASHI
C. P. 39 — Cooperado N.o 52
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ 二區

野林きさえ氏

原籍　福岡縣山野郡竹野町
渡伯　昭和五年十一月　さんとす丸

鬼神も悲しむ程の逆境不幸を經てきた女性と思えない位に、實に明るい性格で、誰れと座談しても好感が持てる。やはり九州の曠野で育つたからでもあるだろう。夫君二三郎が逝去したのが一九五二年二月四日で四十三才であつた。恰度長男收藏が十三才で、末子ひふみが腹の中にいた。主人の悲しみに遭う前に、長女梅香（一才）と、三女ます子（八才）が猛毒マラリヤ病で斃れたのであつた。今後どうして女の細腕で暮してゆけるか、それを考えると頭が狂つてきそうであつた。渡伯當時主人の弟が一緒に來ることになつていたが、眼病でブラジル領事は署名せず到々中止、そこで無理を押して若夫婦で渡伯したのであつた。當時主人は二十才の覇氣に滿ち、彼女も十九才の青春で苦勞を考えない年配であつた。流石に若かつたが、あの主人が死んでから、恰度十二年目の今日は、二女のみよしが阿部雪雄と結婚、そのお蔭で阿部三兄弟の援助があつて、ピメンタ園も經營出來た。

阿部兄弟も戰前ベレーン市で野菜栽培をし、一九四二年の燒打事件で、トメアスーに戻り、若くして苦勞した人達で、實に貧乏人に理解があつた。女婿雪雄は特に溫厚篤實で、義母である彼女を、實母以上に慰めてくれ、そのお蔭で五千本の胡椒が植えられた。そうでなければ少年收藏一人を抱えては、どうにもならなかつた。確に運命の神は、彼女の誠實を認めてくれたのであろう。幸運の鍵は開かれ、それから今日みるような豊かな生活が出來るようになつた。

長男收藏（一九三九年二月二十八日生）は、伯國婦人ジアーナと結婚、日伯親善を地でゆき、孫エリーザ・アサミが出生した。今日まで母の陰になつて働いてきた青年である。幼兒だつた美惠子、二男敏治、五女ひふみ等は學校で勉强中である。一九五五年には彼女の實弟野田菊藏も呼寄せた。現在ブレウ一區で堂々たる農場を築いているが、この姉弟は、母まさが早く逝去したので、遠く離れていても尙姉弟の情愛はこまかやであつた。弟菊藏が八才のとき父が死亡し、彼女が十八才であつた。戰後炭鑛生活で苦勞していたので呼寄せたのであつた。そして自分達が米作地を經營していたブレウ一區の農場に弟達を入れた。あれから滿十年相變らず兩家は親しく交際している。

追懷すると彼女の渡伯も冒險であつた。アマゾンはどんな處であるか知りもしないのに、十九才の青春で渡伯した譯で、入植してからなんと、十四ヵ年も米作りばかりした。多くの人達は籾を賣つて南伯に逃げだしたが、彼等若夫婦は勞働力少なくそんな旅費はたまらなかつた。そして軈て戰爭となつて軟禁された。大きな不幸がきたが、戰後ピメンタ栽培の黄金時代がきたので、幸い好調の波にのり、今日安住の幸福を得た。切に一家の健在を祈る。明治四十四年二月二十日亥年生。

トメアスー植民地ブレウ 二區

青木松雄氏

原籍　福岡縣三井郡太刀洗町
渡伯　昭和二十九年六月　あめりか丸

MATSUO AOKI
C. P. 39 — Seção Breu
Belem — E. de Pará

彼は父竹次、母くに両親の長男に生れた。兄弟は十男二女で、長男の彼は少年時代より責任感が强かつた昭和十年生れで亥年生、この猪は、負けることがきらい。そして猪の如く威勢よく驀進することが好きで、中学校を十六才で卒業するや、軈て自轉車競走選手となり、競輪場の花形となつた。「松ちん勝つて」女性のカナキリ聲や「松公敗けるな頑張れ」と、男性のドラ聲に激勵される身となつた。十七・八才の青春時代は夢のように華やかだつたが、なんと云つても危險な職業で身をひく機會をねらつていた。

父竹次は長年八幡製鉄所に勤務していたが二三十代の青年時代と違い、四十代になると軀も軽装さを失い、鈍感となり、何時腕や脚を機械でもぎとられるか解らず、そのため退職し農についていたが、零細農業では多勢の子供を育ててゆけず、恰度アマゾン移民の募集に應じ、昭和二十九年六月あめりか丸で渡伯した。當時男の子七人もある青木家の渡伯は、必ず成功を齎らさなくてはならなかつた。配耕地池田亭耕地に入植したが、長男松雄が十九才、以下博・義夫・强・春美・林・忍がいて、勞働力は過剰、池田耕地一年後にはブレウ四區の大密林を焼いて、青木農場を拓き、そして一万二千本のピメンタを栽培した母きくの指揮振りも涙ぐましく、多くの子供はこの両親の一擧一動に追隨していつた。そのお陰で現在二十トン以上の收穫をあげ、堂々たる耕主になつた。

軈て彼はブレウ區カニンデの工藤市藏長女ひろ子と結婚したそして多くの弟達の將來を考えて、他に獨立すべき耕地を物色中、ブレウ二区の大野登志雄が聖市に移轉するのに耕地賣却の話をきき、これ幸いとばかり一九六三年十二月大野耕地を購入した。既に四千本のピメンタがあり、場所もブレウ二区の入口で交通至便、彼の活躍場所として絶好の處であつた。既に兩人の間には長女雅子、長男等の愛兒に惠まれ、一家は順風滿帆である。兩親も健在、次弟正美と次妹はるえは早逝、弟博はブラリア首都で活躍している。弟義夫・强・春美が父の耕地を管理し、弟林、弟忍、伯國生れの弟光男は勉学中、そして弟光一妹露子が伯國で最後に生れた。母くにはブレウ四区の橋本實の妹で従兄妹も多く、青木・橋本一家はアマゾンで物凄く發展するだろう。産めや増やせで、大いに子孫を増やしてもらいたい

追懐すると彼等の渡伯も滿十年を過ぎ、十一年になつた。ここまでが基礎時代の第一期で、次の十年間が飛躍時代の第二期である。若冠三十才、青春の血湧き肉躍る彼の今後の事業振りこそ刮目して期待したい。三十代に發展しなければ、四十代には退嬰的となる、切に青年開拓者青木松雄夫妻の健在を祈つてやまない。昭和十年六月十二日亥年生。

トメアスー植民地ブレウ 二區

阿 部 浩 氏

原籍　山形縣東田川郡八榮里村
渡伯　昭和十年六月　あふりか丸

KOU ABE
C. P. 39 — Cooperado N.o 91
Belem — E. de Pará

阿部三兄弟の末弟で、要件以外の事は余りベラベラ饒舌らない眞面目な拓人である。胡椒栽培一万本、昨年は三十六トンも收穫し、一流拓人にのしあがつた。ベレーン市に豪壯な住宅を構え、きさ子夫人や長女梢（こずえ）二女香緒利（かおり）などは、都市生活である。阿部三兄弟は苦勞人で、どの人も立派である。父與之助は農業技師で、渡伯前は山形縣最上郡古口村で悠々暮していたのだが、海外發展熱に刺激されて、トメアスー植民地に入植した。父の血を享けて皆聰明である。

まさ子夫人は戰後日本から呼寄せた女性で三重縣人舊姓藤田まさ子、夫人の母も特に伯國に呼寄せ、養母は一九六三年に歸朝したが早い話が彼の溫情で常夏のブラジル見物が出來た譯である。なかなか出來ない事で、溫厚な彼なればこそ出來る藝當である。夫人の弟藤田勉は、サンパウロ市で有名な「中根すし」に勤務している。いずれ將來一家をなすであろう。こうして阿部一家と、藤田一家は共に隆々として榮えている。

彼は八才の時に兩親に連れられて渡伯した。同航海には野原丈兒（アグア・ブランカ區）齋藏一（アグア・ブランカ區）永井則勝（ブレウ三區）の少年、幼年組がいて共に七家族で入植した。少年の彼は渡伯してみて、ブラジルの天地がいかに無味乾燥であるかに情けなくなつた。子供心にも生家の樂しい生活が懐かしかつた。長兄昇が十五才で、次いで次兄雪雄が十二才であつた。十字路に入植し家族は野菜栽培に三ヵ年も奮斗したカカオ栽培の見込がない處から、植民地を見切り、第一回草分入植者伊藤勇などとオイテーロ島に移轉し、野菜を栽培し、ベレーン市で販賣していた。ここで彼も成長し、漸く滿十五才になつた。

恰度その時に日米戰爭が勃發、軈て伯國の對日宣戰布告、そして一九四二年ドイツ潜水艦がブラジル商船隊撃沈で、ブラジル國民の激昂となり、樞軸國民の住宅の燒打事件が起きた。十五才の青年彼にも、これは大變だと感じた。戰爭のため着のみ着のままでトメアスーに軟禁された。それからトメアスー生活が始まつた。歸植早々から米作に邁進、三ヵ年の後一九四五年からピメンタ栽培に邁進した。父は恰度六十才で逝去したが、今から考えると、十五・六年早く死んだように思う。

兄弟三人協力して建設した耕地は、トメアスー植民地でも、立派な農場となり、長兄昇（禮子夫人は江畑家俊長女）は産業組合理事から、遂に衆望を擔つて、專務理事に推され、二期の務めである。次兄雪雄（みよし夫人は野林きさえ長女）は一九五三年に獨立して堂々一万二千本の胡椒園主、彼も今日の榮冠をかちえた。妹みえ子、京子、洋子もそれぞれ結婚して幸福な生活に浴している。ゆきの母堂も長壽で未だカクシヤク、切に彼等夫妻の健在を祈る。大正十四年七月二十一日丑年生。

SHIZUO TSURUDA
C. P. 39 — Cooperado N.o 124
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ二區

鶴田倭男（しづお）氏

原籍　鹿児島縣國分市廣瀬
渡伯　昭和二十九年十月　あふりか丸

渡伯滿十年が過ぎた。戰後派移民一千家族の中で、胡椒栽培一万本以上所有している者は十家族は居るまいが、その中の一家族が彼である。何の事業でも十指に数えられるのは至難のことである。渡伯當時丸裸の彼等が、遂に十年後に三・四十年の古参拓人を追越して、堂々たる經済地盤をきづき、生産收穫も二十トンを超え、サンパウロ市には宏壮優美な住宅を購入するなど、八面六ピの活躍振りである。しかもトメアスー植民地の耕地は末弟澄男と二人で經營し、中の兄弟は各々特技を發揮、次弟稔は聖市の前田木工所で働き將來鶴田木工所を開業準備中であり、その次の弟律男は聖市南米銀行に勤務、夜は高等商業学校に通学している。

彼等兄弟は實に明朗春風の型で、而もスポーツマン、明星野球部の花形として、弟稔は捕手、弟律男は二壘手である。弟ばかりでなく家庭全部が明るい。父茂男（明治四十四年五月二十日生）ば、青年時代滿州に住み、旭日旗の下で安樂に生活していた。母としえは宮崎縣小林市出身で、大東亞戰争がなければ滿州國で極樂な生活が出來たが、日本の敗戰で歸還、滿州引揚後は福岡の炭鑛生活をつづけねばならなかつた。恰度アマゾン移民再開で、炭鉱生活がいやになつていた頃とて、好機至れりとばかり應募した。

上船して神戸の港を出帆すると、ヤレ／＼と思つた。太平洋の海原は涯しなく、恰度滿州の曠野の如く洋々として廣く、大アマゾンの天地も、かくの如く自由であると想像すると、勇氣百倍、航海は樂しかつた。そして三十余日の後にトメアスー植民地ブレウ二區池田忠藏耕地に入植した。

この池田忠藏耕地に入植したのがよかつた。忠藏耕主は稀に見る篤農家で北伯胡椒栽培の第一人者、非常に嚴格だが、人情味豊かであつた。その長男亨もまた純情な青年耕主で、清廉な拓人、この耕地に働くうちに、二年目から現農場のある大密林を拓き、そこに父茂男や弟達は通つてピメンタを栽培した。池田耕主の溫かい心に感謝、返禮の意味で、彼は池田耕地に五カ年奉仕した。その間獨立資金の缺乏で、母は日本の飴菓子を製造して賣つたり、その他に植民者の欲求する物などを販賣しその僅かな利潤で生活の補助をなし、遂に滿十年目に堂々たる鶴田農場をきづき、長男の彼は一九六一年青森縣人中畑市郎長女敏江を娶り、既に長女に惠まれている。そして貨物自動車、乘用自動車、トラクター、除草耕耘機など機械の完備と共に、弟を出聖させ弟達の獨立準備に移つた。妹久子もサンパウロ市に出て勉强している。母としえの健氣な働きぶりは涙ぐましいものがあるが、また父に激勵され乍ら、兄弟協力一致した兄弟愛も限りなく讃えたい。著者も同縣人としてうれしく、鶴田家は將來大きなものが生れよう。昭和十一年五月十九日子年生。（右端）みちえ夫人（左寫眞）弟達が分散する寸前の記念

AKIRA ISHIZUKA
C. P. 39 — Cooperado N.o 121
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ 二區

石塚明氏

原籍　新潟縣東頸城郡安塚町
渡伯　昭和二十九年七月　あふりか丸

酷熱無風帯の砂漠にも、清水湧き緑蔭滴る清楚なオアシスがあつて、始めて砂漠の旅行も楽しいように、人生にも極楽無上の生活がある反面、涙に曇る悲しみも味わつて始めて人間性は完成され、潤のある人格が備わつてゆくのである。恰度ピメンタ栽培に、長雨で根ぐされが出るときもあり、天候順調想像外の収穫と價格暴騰で、喜こびに浸るときもあるようなものである。

本編の拓人石塚明夫妻は、そうした波燗重畳、轉變極まりない運命に奔浪されてきた人で、その人生街道を踏みながら、自から修養の道をつみ人生妙味の豊さを身につけることが出來た。父敏明、母ふじ両親は青年時代より海外發展を望み、幼少の彼を日本に置いて一まず台灣に渡つた。大正時代の頃で、台灣も後藤新平名總督によつて、物凄く治政もよくなり、下村海南民政長官（後の朝日新聞社長で法学博士）の平和政策ど、藤山雷太（元外相藤山愛一郎嚴父）等が台灣製糖株式會社を起し、そのため各地の產業はこれに刺激されて發達した。一寒村であり漁村であつた花連港が、台灣一の貿易港になつたのもその頃で彼の父敏明も台灣の發展に伴い花連港に住んで大いに儲けた。そこで両親は生活の安定を見て、彼を呼寄せた。彼の台灣生活は實に樂しかつた。今でも台灣生活三十年が懐かしい。台灣人が現在蔣介石政權を嫌い「日本人は犬であつた。犬は番をしてくれるからいいが、中國本土人は豚で、何んでもかんでも裸になるまで喰いちらして搾取するから嫌いだ」とこぼしている。これ程台灣人は日本人台灣治政四十年間に懐かしさを憶えているが、朝鮮と違い、彼等も台灣人に人徳を施した譯である。

あの樂しい生活が、大東亞戰爭の日本敗戰で急降下、奈良苦の底に落された。そして台灣生活の財產を棄て、着のみ着のままで、日本に歸還した。海外から歸還した者は惨めで、遂に開拓地生活の辛酸をなめた。きみ子夫人は熊本縣出身で、この開拓地生活によく耐えた。そして昭和二十九年ブラジル移民の募集に應じ、アマゾン大流トメアスー植民地に入植し、アグア・ブランカ区藤橋銅三耕地に就勞した。

想像していたより、アマゾン氣候は酷暑でもなく、ピメンタ栽培も激勞でなかつた。藤橋耕地では同僚の武藤寅藏、岸俊藏などがどし〳〵退耕して獨立していつたが、長男道明（中学卒業）長女せき子の愛兒二人きりで、勞働力の劣る家庭の事情を考慮し、焦る心をおさえ、藤橋耕地に三カ年半辛抱した。台灣開拓地生活で隠忍自重の精神が培かわれていたわけである。あれから獅子奮迅の努力で遂に六千本のピメンタを植えた。未だ幼樹で十トン位しか收穫がないが二・三十トンを收穫するのは間もない事である。四十一才の若さで渡伯した彼も滿五十二才になつた。聰明な長男道明、理智的な長女せき子の成長と共に一家は發展するだろう。大正四年十月二十六日卯年生。

TORAZO, MUTO
C. P. 39 — Cooperado N.o 218
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ 二區

武藤寅藏氏

原籍　福島縣二本松市若宮
渡伯　昭和三十年十一月　ぶらじる丸

實に明朗濶達、春風駘蕩の人柄で、どんな苦難に遭つても落膽せず、勇往邁進する拓人で、しかも無欲恬淡寄附すべき金はあつさり出すという情味横溢さがある

マサ夫人は詩人高村光太郎の遠縁に當る女性で、これまた情緒豊かで、優雅玲瓏な人柄である。この夫婦が無一文から叩きあげて今日を築いたのは誰も想像すまい。彼は最近霞城と雅號をつけ、俳句に精進している。ブラジル俳壇は虚子の影響をうけた佐藤念腹（ホトトギス誌同人）によつて風靡されているので、彼はこの風派を好まず、石田波郷、中村草田男、水原秋櫻子系統に属する俳誌「火焔樹」の同人となり主観句の作道に熱中している。晩年の趣味として著者も共鳴する

（上）勅子（右端）在伯中の記念
（下）農場と機械

彼は五黄の寅年生れで、性格は猛虎の如く駿敏である。父はそのため寅藏と名づけた。昭和九年軍隊に呼集され、無線電信技師となり、軈て濱松第七連隊の重爆撃機隊に編入され、支那事變勃發後は徐州の大會戰に參戰した。そして大東亜戰争に引續き參加、實に十一年間も戰線にいた。最も印象に残る戰績は長沙作戰で、その大激戰で生殘りは二人となり、その一人が彼であつた。終戰は上海で、復員後は農機具商で市井で生活を支えた。アマゾン移民再開の聲をきき四十二才の厄年で應募、トメアスー植民地藤橋銅三耕地に入植、十ヵ月就勞した。

元來他人にこき使われることがきらいで、獨立自立の精神旺盛なる處から、獨立資金も少ないのに、藤橋耕地を退耕して現地の大密林を少しばかり拓き、そこに野菜を栽培して、戰後派移民野菜屋のトップをきつた。アマゾンは熱帯地で、なか／＼野菜が出來ず、特に雨期は四・五ヵ月に亘り野菜はみな水浸しとなつて腐つた。棚揚式野菜法と云つて、蚕棚をつくり、それに土をもつて野菜をつくる程、北伯の野菜作りは苦心した。彼はこの野菜作りの特技に秀で、到頭「野菜作りの武藤名人」と稱されるに至つた。今もつて「あの當時の武藤さんは眞劍そのものであつた」と成功者 仲間の噂にのぼるほどである。この儲けをどん／＼ピメンタ園に投下し、遂に四千五百本の胡椒園を完成、トラクター、ジープ、除草耕耘機等農場の機械化をはかつた。ここまで來た武藤夫妻の不退轉の努力は賞讃したい。

愛兒三人は令嬢ばかり、十三才で渡伯した長女勅子（ときこ）は文豪徳富蘇峯健在なりし頃命名した名で年齢二十三才の理智的女性、成人になる寸前ベレーン駐在福岡總領事歸朝の折に同航して歸國、今は故郷で暮らしている。二女衛子は産業組合勤務、三女紀子は勉学中である。大正三年五月二十八日寅年生

トメアスー植民地ブレウ 二區

岸　俊　藏　氏

原籍愛媛縣宇摩郡土居町天間
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

TOSHIZO KISHI
C. P. 39 — Cooperado N.o 120
Belem — E. de Pará

亥年生れで、思い出した事は、まつしぐらに突貫して、初志貫徹しなければ氣のすまぬ性格である。その操志强靱は物凄い。十九才の時に酒の上で失敗し、それを機會に禁酒と禁煙を心に誓つたが、五十四才の今日までそれを實行している。三日坊主の禁酒禁煙いや近酒勤煙のたぐいと比較にならない。純農に生きる拓人でピメンタ栽培單一農の危険を感じて、一九六三年十二月から諸富寅雄、佐藤義信、大木勢也、大屋昇など五家族で、大アマゾン河口にあるマラジョー島（九州より少し大きい島）のコンデツシヤ町郊外に、各百ヘクタールづつ州政府の土地を拂下げ、そこに最初椰子樹を全耕地六千五百本に植えこの椰子樹に續いて、熱帯地方で栽培困難な葡萄栽培に手を染めた。この地帯は一九三五年（昭和十年頃）篠田六郎が大々的に葡萄栽培をやつたが失敗した處で、研究を重ね栽培法に注意すれば成長の可能性はある譯だ。その歴史を知つているので、彼は今後その方面に敏腕を伸すつもり、行くとして可ならざるはない彼の事であるから、必ずや實現するだろうし、彼の代で完成しなければ長男健一が、彼の遺志をついでくれるだろう。牧場計画もしているが何百町、何千町の大平原に、幾百頭の牧牛が陽光をうけて悠々と牧草を喰つている雄大な姿を想像しただけで　ピメンタ園の如く、相場の變動に神經をとがらしている農業から、早く逃がれたい氣がするのは當然だ。

椰子樹はこれまた十年後の收穫で、その果實はバター・菓子類の原料から機械油にもなり、或いはポマード類等、現在應用化学の力で六十余種類の原料として使用される。その使用販路が廣いのでこれまた將來性がある。こうした將來性ある物ばかりに手をつけている彼の前途は明るい。

彼はトメアスー植民地藤橋銅三耕地に就勞した。隣地の武藤寅雄が早く退耕したように、彼も間もなく退耕し、現地に獨立した。だから現在胡椒は八千五百本栽培し、既に十七・八トンも生産し、三男五女の子福者で、この方も勳三等である。長女よし子はブレウ三区高橋道夫に嫁ぎ、長男健一は廣島縣人野上ヌ一長女しげ子を娶り、二女房子はベレーン市廣島縣人日高哲夫に、三女まさ子はマルキタ区秋田縣人金簑夫（産組勤務）に嫁ぎ、四女とみ子は産業組合勤務、三男清昭はベレーン中学校五女智惠子も勉强中である。どの息子をみても心豊かであり、どの令嬢（嫁に行つた娘も）をみても愛嬌万福である。一九五五年一月ぶらじる丸でアマゾンに入植した移民八十三家族は農業に石川道善、商業に岩坂强を始め、傑物ばかりである。彼もその中の一人で將來の大成を祈る。明治四十四年九月一日亥年生。

（右上）三男清昭（右下）長女よし子（上中）長男健一家族
（上右）岸夫妻（下）母を中心に令孃達

トメアスー植民地ブレウ三區

植園徹（とおる）氏

TORU UEZONO
C. P. 39 — Seção Breu
Belem — E. de Pará

原籍　鹿児島縣川内市下東郷中瀬
渡伯　昭和三十六年八月　ぶらじる丸

　南伯サンパウロ州やパラナ州では、大学や高校卒業生が、渡伯後六・七年になつても未だ生活が安定もせず、流轉の生活をつづけている者が多い。實際コチア産業組合呼寄青年二千五百人のなかで、先輩の援助がなかつたら、これ等青年は必ずや地下に埋もれるだろう。この生存競争の激しい南伯では獨力ではたてない。その点北伯アマゾン地方は、先輩が後輩に對し理解があるから、獨身青年も割合伸びてゆく。産業組合に勤務する金義夫青年は若冠二十二才で、妻帯して農場主となつた。同じく彼の隣地にいる大根田恒晴も、渡伯四年目に若冠二十二才で妻帯し、二十三才で耕主となつたこんな實例はトメアスー植民地に限らず、奥アマゾンでも然りで、それだけアマゾン地方は人情豊かであることを物語つているようだ。

　本編の主人公も、その例にもれず、渡伯満二年目に耕主になつた。渡伯するとき、僅かに一万円しか手持金がなく、裸一貫の青年拓人は一九六二年（昭和三十六年）八月上陸、そして満一年二ヵ月後（一九六三年十月）には旧和田耕地を購入した。耕地には三千五百本も胡椒が植えてあり、十トン内外の收穫があつた。十年前の戰後派古参移民でも、まだ／＼うろたえている人もあるのに、これは稀有の出世頭と云つていい。

　彼は父仲藏。母たけ子両親の三男に生れた。故郷川内高等学校を卒業し、小倉市で就職し、軈て北九州大学商科に通学した商科卒業後は両親と共に大阪市に轉任、彼も大阪市で働らいていた。恰度外務省海外商業實習生の募集廣告をみて飛付き、京都府から申請し、許可されて北伯アマゾン地域トメアスー植民地に入植し、トメアスー産業組合ガラージ（自動車修理工場）係として、社會生活のスタートを切つた。学生時代からスポーツマンで特に空手を好み、明朗な拓人であつたので、上司の信用もたかまつた。忠實な良犬みたように、終日實務に盡すのが彼の性格で、何事をやつても正確をきし、一分の隙もない位に清浄であつた。産業組合の大改革後は阿部昇専務、武田常務、澤田渉外、山田次席常務、岡部購買と若手の人々で、元氣溌剌明朗な空氣は漂い、海外貿易に手を染めるなど、事業的意欲は目覺ましいものがあつた。だから各理事連も、植園徹の如き若手事務員の採用を熱望していた時で、彼も幸運な時に就職した。

　理解ある上司のお目にとまり、産業組合に末長く勤務してもらいたい意味で、彼に腰をおちつかせる事になり、上司の後援で耕地を買收し、遂に今日の地位を得た。祖國の両親や實兄が知つたらどの位よろこぶだろう。著者も故郷を同じうする縁故で彼の成功を祝福したい。この順風な軌道の上を走るなら、もうあとは天災のない限り彼岸に到達する訳で、焦らず自重していつてもらいたい。昭和十二年一月一日子年生。

トメアスー植民地ブレウ三區

野田新太郎氏

SHINTARO NODA
C. P. 39 — Seção Breu
Belem — E. de Pará

原籍　愛知縣名古屋市千種
渡伯　昭和二十九年十二月　ぶらじる丸

　夫妻とも實に眞面目な拓人で、終日默々と農事に精勤しているのだが、過去七八年間、不運が續いて、一緒にブラジルに渡つた連中よりも、少々遅れをとつた在伯既に滿十年、アマゾン生活第一歩はベルテーラ・ゴム園であつた。このゴム園は一九二九年北米の自動車會社ヘンリー・フォードが、當時の米貨五百五十万ドルを投下して、八百万本のゴム樹を植えたが、アマゾン・ゴムは接木法の研究不足で、物にならず、遂に二百二十万コントスで伯國政府に賣却した。伯國政府は北伯農事試驗所に經營をまかせていたが、やはり營業不振であつた。彼はここに入植したが、日伯移民協定違反でベルテーラ園に邦人が入植することは、伯人勞働者を壓迫するものだと農林省の横槍で退耕することになつた。軈てゴム園のあるサンタレン市郊外で野菜栽培をしたが、サンタレン市民は野菜の消費量少なく、到底生活してゆくにも困難、将來性のない處から、ベレーン市郊外バルカレーナ郡トロンペット島小川鎌一耕地に移轉した。ここで一年辛抱したあげく、島の生活ではベレーン市近郊の事情に通じないと思い、一年後にトメアスー植民地土山耕地に轉じた。この土山耕地で一年している内に、事情も解つてきたので、独立して耕地經營に邁進、野菜栽培の傍らボツ〳〵ピメンタを植え、現在一千二百本の胡椒園の後に増植している。

　こうして彼の開拓生活滿十年史を追懷すると、ベルテーラ・ゴム園のスタートが運悪く、次のサンタレン市外野菜栽培生活が長過ぎた。一日も早くサンタレンの野菜生活を打切り、永年作物のピメンタ園經營に轉向すべきであつた。それでも早く活眼し、現地にピメンタ園を建設したからよかつた。スタートはおくれても、大陸的悠長なブラジルのことである。軌道にのれば、天災のない限りあとはそれを進むばかりである。

　彼は二十一才のとき徴兵檢査をうけ、そのまま海軍に編隊、中支事變の中途で四・五年除隊しただけで、大平洋戰爭で再び出征した。戰友の多くが海の藻屑となつたのに、彼は運よく生命を全うし、終戰後復員してからは福岡縣に勤務先を求め、軈て太刀洗飛行場跡の開拓地に入植した。だから彼の旅券は本籍地でなく、寄留地の福岡縣となつている。海上生活が長く、農村生活には馴れなかつたが、必死の覺悟で瘦地を耕作し、辛酸な開拓地生活と斗つた。八重子夫人も涙ぐましい程に協力してくれたので心強く、生れる幼児をかかえて健斗した。

　恰度アマゾン移民の募集があつたので、これ幸いとばかり應募、遂にアマゾンの地に永住することになつた。長男隆興は二十五才の青年で、耕地の管理をよくしてくれる。長女英代、二男岡三の三兒があり平和な家庭である。切に今後の發展を祈る
大正二年九月十五日丑年生。

TSUNEHARU ONEDA
C. P. 39 — Seção Breu
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ 三區

大根田恒晴氏

原籍　栃木縣芳賀郡芽賀町
渡伯　昭和三十五七月ぶらじる丸

　戰前には海外發展の中等学校は、香川縣立木田農林学校が有名で日本全國一であつた。同校には今雪眞一教諭（鹿児島高農出身で後に校長）が傑物であつた。今雪は大地主の息子であつたが、將來二・三男の對策を考え四十年前から海外發展を奬勵し、自からも戰後パラグワイに移住して手本を示した。理論家であり實行家である今雪校長の方針はよかつた。

　戰後は日本一の海外發展高校は眞岡農高で余りに有名　農林、外務兩省はもとより、海協連、全拓連などから褒賞された。その学校出身の若き拓人が大根田恒晴であつた。トメアスー植民地のブレウ區に眞岡農場を建設して、海外發展の基地をつくるつもりで一九六〇年頃に藤澤廣吉教諭の創案で、旧伯人耕地（胡椒二百本栽培）を二百コントスで購入、先伐隊として團長長島治が卒業生早瀬義夫（アバイテッーバ永井耕地）水沼滋夫（池田軍次女婿）野澤太（岸勝美耕地）高野賢壽（ブレウ四區永井耕地）に彼の五人を引卒して入植した。由來南伯でもそうだが南米の開拓地で、獨身寄合世帶の耕地や集團植民地が完成した例がない。これは五十年間の實例がよくその内容を示しているが、個人の物質欲と、妻帶を考慮しないからで、眞岡農場建設も實際に於いて經營は困難を極めた。本當だつたら發案者の藤澤孝吉教諭が、私心を棄て自から夫人や家族を連れ、大密林の中に飛込まなくては駄目であつた。發案者が日本にいて高見の見物では、いくら長島團長やいく子夫人（元教諭）が頑張つても駄目である。それでも彼等先伐隊と第二隊の稲川眞澄、黒崎勝夫、佐々木敬雄等は協力して五千本の胡椒栽培の農場を完成し眞岡健兒の意氣を示した。軈て長島團長は病氣で一九六三年夫婦とも歸國した。

　彼は渡伯するや研究修学のためアライア區八巻耕地に三ヵ月就勞し、軈て眞岡農場建設に挺身し、實に二年六ヵ月活躍した雨期には水浸になる地勢のよくない處で、純情無垢の拓人大根田恒晴は学校の名譽のためにも、この農場を完成せずんばならないと、頑張つた。到々五千本のピメンタを完植したので、バンドを第二回生に渡し、ブレウ四區下前原耕地に就勞した。今追懐すると、あの無味乾燥の男世帶でよく耐えたものであつたそれは青年特有の情熱と、責任を感じていたからであつた。下前原光次耕地で九ヵ月就労の後に、堅忍不拔のその精神を認められ、耕主の二女靜子と一九六三年十一月結婚した。妻靜子は十二才の少女時代に渡伯し、よく兩親に仕えた健氣な人柄である。翌一九六四年一月には棚町耕地を購入して獨立した。耕地は三千本のピメンタが植えてあつた。彼は父乘夫、母きみの両親の三男に生れ、将來は何處かに獨立すべき運命にあつた青年である。自由の天地アマゾンにきて、自己の宿望を達し、古参移民に伍して農場主になつたのは偉らい。若冠二十四才で将來の大成を望む。昭和十六年四月二十九日己年生。

YUKO SASAKI
C. P. 39 — Cooperado N.o 263
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ 三區

佐々木勇幸氏

原籍　秋田縣由利郡大内村
渡伯　昭和三十五年七月　ぶらじる丸

在伯秋田縣人は四百家族内外で、全國一都一道二府四十五縣の中で二十五・六番目に當り、東北地方でも隣縣山形、宮城、福島など量に於いて少なかつた。一九五五年秋田縣海外協會主事金彦助が訪伯してから、大いに移民熱があがり、トメアスー産業組合理事加藤三郎、パウリスタ新聞社長蛭田德彌などが故郷を訪づれ、啓蒙したので、どし／＼海外に出るようになつた。彼の渡伯もアマゾン移民再開後七年目で、戰後派移民の中でも早い方ではなかつた。それだのに、既に耕主となり、先輩耕主の地位にせまらんとして孜々として奮迅している。誠にお目出度いことである。

渡伯の動機と云えば、彼は日本で痔病であつた毎年嚴寒の冬がくると、この痔病のため苦しんだそこで溫たかい國へいつたら治るだろうと思つていた處、ブラジル移民募集を新聞でみて、絶好のチャンスとばかり、遂に渡伯を決心した。そして一九六〇年（昭和三十五年）永住の心がまえでトメアスー植民地は入植した。最初は夫婦移民として入植しアライア區林熊男耕地に就勞六カ月、轉てアグア・ブランカ區細川伍一耕地に一カ年奉仕した。トメアスー植民地には元産業組合常務理事で、トメアスー發展の原動力者たる木村總一郎（早口町出身）産組理事加藤三郎（本荘市）などの先輩や、有力者がいたので、これら先輩に今後の方針を相談した。その指導が宜敷を得たので、轉一九六一年にてブレウ三區渡邊惣八耕地を購入した。耕地は一千七百本の胡椒が栽培されてあり、金額は四七五ミル・クルゼイロで安價であつた。

渡伯一年後に早くも耕主になつた彼は、後續部隊の一家が移住してきたので佐々木家の耕地經營は見る／＼内に目立つてよくなつた。既に五百本、一千本と無理押に胡椒を植え、三年後には四千本も植えた。そして成樹一千七百本からは、四トンの收穫をあげるに至つた。京子夫人は平鹿郡大森町の出身で、農村生活には適任の主婦である。幸運がくる時は續くもので、生來苦しんでいた難病も、常夏の國に移住して、自然と全治、どんな激務をしても、あの苦しさを感じなくなつた。天の惠みと思つて感謝している。おそらく故郷秋田に今頃までいたら、人に解らない持病のため働らけず、まるでナマケモノみたように云われていたかも知れなかつた。それを憶えば彼のブラジル移住は成功であつた。

現在は父德松、母ちや健在、弟次郎はトメアスー産業組合に勤務、農機具係として精勵している。妹あや子は秋田縣人先輩の加藤三郎二男智に嫁づき、弟初藏は耕地管理の協力者、弟國久と久男は小学校に通学、姉（未亡人）高田菊江は一兒節男（小学校）の成長を樂しみにくらしている。彼も長女瞳、二女晴美、長男和之に惠まれている。若冠二十八才の若人、しかも在伯五年目將來の大成を祈る。昭和十二年二月十日生。

妹あや子の結婚式（左上は）弟次郎

トメアスー植民地ブレウ三區

永井則勝氏

原籍　北海道空知郡栗澤村
渡伯　昭和十年六月　あふりか丸

NORIKATSU NAGAI
C. P. 39 — Seção Breu
Belem — E. de Pará

彼の父永井橋（たかし）は昭和十年六月渡伯し、苦労の限りを盡し昭和二十九年五十八才で逝去した。やはり黒水病が根治できず、それがもとで中風になり、病歿した。昭和十年六月一緒に渡伯した六家族のうち阿部與之助（阿部昇父）齋藤林藏（斉藤一文）野原源吾などが昇天したが、開拓生活で成功の彼岸に達せず、涙の中で死んでゆく人達は氣の毒である。彼は父の不幸のみでなく、祖母永井こうも一九三九年一月四日六十一才で、従兄（母の弟）乙井佐吉も昭和二十七年三十八才で逝去し、もう三つの墓石を建てた。そして現在母藤野も、永年のマラリヤ病がたたつて、眼病を患い、遂に視覺神經を犯され視力を失つて不自由な生活に呻吟している。若かりし頃は、主人と共に大密林に入り、斧を振り雑木を伐した男勝りの母であつたが、アマゾン特有の風土病には克てず、遂に不自由な躰となつた。實に同情を禁じ得ず、開拓生活の裏面は如何に犠牲が多いかを知ることが出來る。

彼等ばトメアスー植民地が樂天地であると思つて入植した。昭和十年であるから、既に滿三十年前の話しである。十字路近くで（現在の墓地近く）土地がみつかるまで一年いた。既に會社はカカオ栽培直營農場閉鎖の方針であつた。軈てブレウ區に入植、米作の傍ら野菜を栽え漸く生活した。長男の則勝が四才から七才になる頃であつた。間もなくブレウ二區（現在の江口動耕地）に移り、米作五年、相變らず黒水病の猛威はすごく、バタ／＼と邦人は死出の旅に出た。そして一九五三年現地に移り、大密林を拓いてピメンタを栽培した。彼等はブレウ三區の草分開拓者である。こうしてトメアスー植民地に入植して以來實に二十二・三年間は、米作と野菜栽培で死物狂いの生活をしたがこの積年の無理がたたつて、父は今日の繁榮をみず地下に眠つた。實に悲しい事であつた。

四才で渡伯した長男則勝は、準二世であるが、一家の不幸を少しも苦にせず、襲つてくる災難を拂のけ、今日ピメンタを五千本植え、既に十余トンの生産をあげ、一九六三年には住宅も新築した。そして両親の宿願たる子供の教育をと思い、末弟健はサンパウロ市に遊学させ、サン・フランシスコ中学校で勉強中である。妹まち子も向学心に焔えた健氣な女性で老母への孝行者である。耕地經營は彼と次弟昭が満身の斗志をいだいて、支配している。あの長期に亘る米作生活を追懷すると身震がする。米作の激労でマラリヤに罹り、斃れた者は幾人かで、彼の父を始め千葉兄弟、野林二三郎を始め犠牲者の數は幾十人にのぼる。悪魔の如く呪いたくなる米作生活である。然しそのトメアスーにもマラリヤ病もなくなり、ピメンタ栽培の黄金の春が甦つて來た。長年淋寥たる永井家にも春風がなびいてきた。切に地下に眠る故人の冥福を祈ると共に、一家の幸福を望む。昭和六年十一月二十三日未年生。

（右上）健君（右下）勉強中のまち子、左は母を中心に近影

ICHIRO NAKAHATA
C. P. 39 — Seção Breu
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ三區

中畑市郎氏

原籍　青森縣岩木町上彌生
渡伯　昭和三十六年八月　ぶらじる丸

彼は一九六一年（昭和三十六年）八月の渡伯で、在伯僅かに滿三年と數ヵ月しかならない。それにもう獨立している。上の寫眞は渡伯するときの記念寫眞であるが、それを見るとあの積雪では農業をするにも、物を栽培することが出來ない。多くの者は山林の木挽になつたりしている。雪のため働くにも働らけない程情けない事はない。それを考えるとブラジルは常夏の國で何時も働けるし、自分の努力次第では、何處まで發展成功するか解らないので實にいい國である。

父兼吉、母すま両親の長男に生れた。父は故人で母は現在七十二才で健在、彼の渡伯の出世を樂しんでいる。彼はアマゾン移民に應募し、上陸後トメアスー植民地に入植するや、ブレウ二區鹿児島縣人鶴田倭男耕地に入植した。鶴田耕主も戰後派移民で池田忠藏耕地で苦労した人柄、池田耕主の援助で今日の大農場を築きあげた人であつたので、この耕地に入植したのはよかつた。恰度入植した年に、耕主鶴田倭男は二十五才で両親と三男一女の弟妹をかかえている青年拓人、結婚適齢者で恰度その配偶者に、長女美智江を懇望されたので、入植早々両親に孝養を盡した娘を手離すに忍びなかつたのだが良縁と思つて遂に嫁づかせた。そこで鶴田家と中畑家は縁家となつたが、縁家同志が雇傭の關係で同耕地にいるのは、氣まずい思いがするので、四ヵ月半就耕の後に、近隣伯人耕地（胡椒六百本栽培）を購入して、ここに獨立して中畑耕地の經營に邁進し、その後に七百本を増植、現在一千三百本になつた。既にピメンタを生産して營農が安定したので、長男明はベレーン市の三井物産株式會社に勤務、ブラジル商業界に活躍している。だから現在耕地には夫妻と、二男修、三男忠、二女靜江の三児がおり、實になごやかである。

トメアスー植民地は、過去十年間ピメンタの黄金時代で、どの耕主も、喰べる野菜と果物はおろか、主食の米も植えない。ピメンタを植えて、巨利を博した金で、それ等を購つた方が手間がはぶけて安樂な生活が出來ると考えている。米は貯藏が出き、遠い處から運搬してきてもいいが、野菜・果物はすぐ腐るからそうわ行かない。だから野菜果物に不自由し、ビータミンB・Cは皆不足勝ちである。それでも野菜を栽えようとしない。十年前に野菜栽培で儲けた人でさえ、ピメンタ園を完成するともう面倒くさがつて野菜を栽えない。そこで新移住者の彼は、邦人五百家族、伯人三千家族の一大集團地の野菜不足に目をつけ、いま新鮮な蔬菜栽培に全力を注いでいる。この野菜栽培で巨利を博し、その儲けた金で胡椒樹を増植している。確にいい方法で、蔬菜栽培こそ、彼の農場完成えの近路であろう。

在伯僅かに三年と少し、十年の古参者でさえマゴ／＼している時に、中畑農場を建設し耕主となり、生活の安定をはかつた彼の運命を祝福する。明治四十五年六月十八日子年生。

◉上の寫眞は中畑家渡伯記念

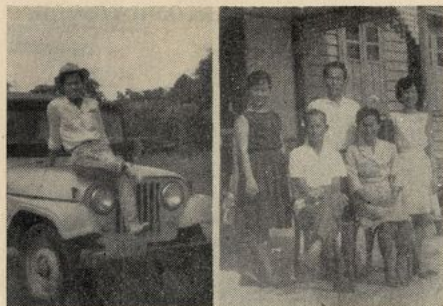
MINEO YAMAMOTO
C. P. 39 — Cooperado N.o 85
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ 三區

山本峰雄氏

原籍 香川縣坂出市坂出町
渡伯 昭和二十九年七月 あふりか丸

小さき子のすがる梯子や胡椒摘む
タマタ買う娘を通譯に値切る妻
喜雨を待て明日の予定を變更す
ポ語和語の新墓碑ふえて墓地の秋

少年の頃級友山下松麓に手ほどきされた俳三昧を、今頃になつて思出し、五十路を過ぎて「寂」の幽境に浸つている。清歩と雅號をつけ趣味として最高である

　彼は戦後派移民でトメアスー産業組合加入者の草分で番號は八五番、そして役員になつたのも早く監事に公選された。理論は法にかなつて整然、書類の整理も正確で組合監事には適任者である。そうした處から戦後派移民の生活向上を計るため、結成された戦後移民住者協議會會長に推されたり實態調査分會長に就任させられたり、多くの名譽職に就いた。日本で警察官史、戦時中は特高警察・經濟警察部にいて警部補となり、三十四才の若さで坂出署長就任のとき突然退職した。部長や友人が止めたが、決心したあとであつた。恰度一九四五年の終戦時で、それから官服を脱いで丸腰となり、義弟などと共同で商業界に進出したが、武士の商法で失敗した。恰度アマゾン移住の廣告をみて、悶々の胸を大南米の曠野ではらし、思存分敏腕を伸ばそうと渡伯を決心した。時に四十三才で、長男陽三は坂出高校卒業、二男拓男も坂出工業高校卒、三男雄三郎、長女美穂子、二女てい子の七人家族で、トメアスー植民地福島清次郎耕地に入植した。

　福島耕地三カ月、そして和田茂二耕地一カ年で、間もなくブレウ三區で獨立、大密林を焼拂つて獅子奮迅の勢で、酷熱をものともせず開墾、胡椒を栽培し、十年後の今日は遂に一万五千本を滿植し三十トン以上の收穫をあげるに至つた。と書くといかにも幸運児みたようだが彼にもここまでくるには涙の犠牲を拂つている。一九五八年渡伯四年目で新開墾地入植當初、三男雄三郎が心臓ベンマク症に罹り、十七才の青春であえなく逝つた今生さていたら二十四才の働き盛りである。「盆參り獨り異國に眠る子よ」彼の俳境は彼の悲しみをよく表現している。

　一九六四年渡伯十周年頃から、トメアスー植民地の山本耕地は二男拓男の支配下にまかせ、カスタニヤル市郊外に分耕地を建設した。それと同時にベレーン市MAURITI街六二番に住宅を購い、長女美穂子（サンタ・ローザ女学校）てい子等の通学の便をはかつた。そして長男陽三はニッポニカ會社から新設貿易會社（三井物産・高砂香料・産組の三社出資で胡椒加工品販賣）に轉勤し、ベレーン市に起居している。陽三は昭和十年生れで戦後派青年中の白眉、大いに活躍してもらいたい。こうした一家族發展の陰に千枝子夫人（大正七年生）がいて、主人に協力し家計を切廻した點、賢夫人の譽がたかい。視野廣く、社交性にたけ、座談の巧な夫人である。切に山本家の發展を祈る

　明治四十四年三月二十五日亥年生。
右は家族一、同左は二男拓男君

トメアスー植民地ブレウ 三區

碓井文吉氏

原籍　富山縣魚津市村木町
渡伯　昭和二十九年七月　あふりか丸

BUNKICHI USUI
C. P. 39 — Cooperado N.o 223
Belem — E. de Pará

「今日は――」
と玄關を這入つて行くと、脇目もふらず一心不乱にミシンをふんでいる婦人がいた。斜で見るとしよう洒な中年婦人が
「あれ――お客さんだつたのね――。これは失禮しましたわ、あんまり縫物に熱中しているもんで」
とほんのり笑い、婦人は丁寧におじぎをして主人を呼んだ。
「ハハ……この婦人はなか／＼仕事に熱心な人であるわい」と著者は心の中で思つた。後日色々とさぐつてみると、成程貞節健氣な夫人で、碓井耕地の柱石であることが解つた。耕地の建設當時、開拓資金に缺乏した。そうだろう渡伯して一年だけ土山耕地に就労して二年目には無理と知りつつ、大密林を拓き、獨立したのであつた。家族の労働力は、夫妻に少女の紀美子、そして十才の長男紘一だけだ。夫人と娘の細腕は燒野原の耕作に適せず、紘一は少年で頼りにならない。結局多くの伯人労働者を傭つて、ピメンタを栽培しなくてはならなかつた。そうなると資金の問題である。その資金稼ぎに菊江夫人は、特技の縫物で稼いだ譯である。特に戰前移民で大成功している夫人の中には、貧乏な少女時代に洋裁研究のヒマがなかつたので、針仕事の出來ないものがいた。だから、仕事は幼兒・少年・少女等の縫物から、時には大人のものまであつて注文は殺到、これで稼ぎまくつて漸く生活のたしにした。著者は碓井耕地の胡椒樹を見る度に、すぐその成樹の一葉には、夫人の精神がこもつていると思つている。

拓人碓井文吉は實に恬淡純心な人柄で、どんなに困つても他人を押しのけてまで儲けようとしない。共に生き、共に儲け、共に悲しみをわける人情豊かな人柄である。大東亞戰爭中は、南太平洋に轉戰、激斗の嵐の中で命を拾い、一九四五年八月十五日、終戰のときはスマトラであつた。やれ／＼と思つて復員し、セールスマンとして市井で、その日／＼を暮していた。毎日／＼辛らい外交員生活、身の轉向を考えたが、好い轉職はなかつた。そこへ新聞でアマゾン移民募集の廣告をみた。「これ／＼」とばかり、夫人に内密でブラジル事情の研究、そして手續をし一年後にやつと機會を見て夫人に相談した。夫人もビツクリ、だが主人の決心が堅いので、ここで渡伯の決心がつき、同鄉の青年高橋道夫（ブレウ三區で商店經營）を同伴し、勇躍アマゾンの人になつた。

トメアスー植民地に入植して、土山耕地一年就労、耕主の溫情で獨立して、三千本の胡椒を栽培、あれから滿十年、彼の宿望はかなつた。長女紀美子は少女時代兩親に盡した健氣な女性で、福岡縣人善一史と結婚している。長男紘一は二十一才となり碓井家を嗣ぐ頼もしい少壯青年である。同伴の高橋道夫も土山耕地の近くで雜貨店を開き、岸俊藏長女で愛嬌円滿な嘉子夫人を得て、既に惠美子・良一・哲良・小百合に惠まれた。四十二才の厄年に渡伯した彼は、厄拂いをして最後の實を結びとつた。明治四十四年七月十五日亥年生。

トメアスー植民地ブレウ三區

下前原晃(あきら)等氏

原籍　宮崎縣西諸縣郡飯町町
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

AKIRA SHIMOMAEBARA
C. P. 39 — Cooperado N.o 230
Belem — E. de Pará

「おかあさん何處へ行くの、日本に還るの――」七才になつた晃等の聲は、子供心にも震えている。兩親や、姉みつ子、兄輝男等がオゾオゾしていたからである。「日本に歸る」と云うのば、彼等は昭和二十一年十月十五日皇滿州興安省札蘭屯（ジャラトン）部落にいて、ここから日本に歸還するのであつた。三才のとき滿州に渡つた。彼の故郷は神武天皇の生地として有名で、昭和十五年皇紀二千六百年祭記念事業として、宮崎縣人百家族で、滿州に大植民地を建設することとなり、最初の十一人の先發隊が乗込んだ。命知らずの一騎當千の若者ばかりで準備をなし彼等は昭和十六年に移住した。そしてシベリアから吹きよせる嚴寒に耐え、或る時は蒙古から吹きさらす熱砂の風におののき、四カ年間は國家的事業の美名のもとに辛抱した。軈て大東亜戰爭は遂に日本の敗戰に終つた。安住の地と思つていた開拓地から日本に引揚げなければならなかつた。彼等一家は滿州にきて妹靜子も生れ、手足まといになる幼兒が多かつた。滿州悲運を胸に祕め日本に歸つたのであつた。

混乱の日本で成長し小学校に通つた。恰度卒業して中学生の時に父はアマゾン移住を決心、率先してアマゾン・トメアスー植民地に入植した。長い戰時生活で、日本に復員して、戰後の食糧難と税金攻勢にいや氣がさし、一思いに南米に移住したのであつた。幸いブレウ四區岩間耕主は理解ある拓人で、クリスチャンであり、アマゾン稀有の篤農家でもあつた。同耕地に三カ年間辛抱している間に、隣地の大密林を拓き、そこへ通勤でピメンタを植えた。隣耕地なので實に便利であつた。そして一年九カ月目には、自己農場に建てた新住宅に移り家族を手分して舊耕地の請負胡椒を手入しながら、家族の半分は自分の胡椒栽培に邁進した。そのお蔭で一万二千五百本の栽培を終え、十年後は二十五六トンの收穫をあげるに至つた。十五才で渡伯した彼は、これまでに兄と共に兩親のため盡した。

彼は軈てブレウ三區の北海道人山家岩雄長女ふみ子と結婚した。ふみ子夫人は昭和三十年十六才のとき、渡伯した戰後派移民である。岳父山家岩雄が、一九六四年ベレーン市で自動車修理工場を開くのに移轉するや、その跡に山家耕地の管理を引受けた。同耕地は一万一千本の胡椒が栽培してあり、成樹が多いので年産三十五トンである。山家耕地とはいえ、共同經營である。夫婦の間に二人の愛兒がある。昭和十四年二月四日卯年生る。

寫眞は（右）愛兒二人とふみ子夫人。（左は）下前原晃等氏

CHIKAYOSHI TOMIOKA
C. P. 39 — Cooperado N.o 266
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ 二區

富岡親義氏

原籍　熊本縣菊池市
渡伯　昭和三十六年八月　ぶらじる丸

（右）ぶらじる丸船上甲板で渡伯記念（左）近影

トメアスー植民地全邦人地主中、最も新しい渡伯者は誰れかと云うと、昭和三十六年八月ぶらじる丸で入植した青森縣人中畑市郎（ブレウ三區）植園徹や、本編の富岡親義等であろう。しかも彼等はまだまだ滿三年と少しである。北伯アマゾンなればこそ、獨立出來るが、南伯サンパウロ州では、三・四年頃では、コロノ生活（雇傭活生活）から漸く抜けて、借地農生活をしたり、或いは珈琲園や、蔬菜園や果樹園の歩合割の小作農時代の頃で、獨立するのはまだまだ十年後の事である南伯では土地を求めるのが高價でなかなか獨立出來ない。それに比較すれば、北伯アマゾンは地價が安價であるし、戰前移民も、戰後移民も人情豊で、日本人同志扶け合うので獨立が仕易い。

故郷で建築業に従事していた頃に、笹本光雄（マルキタにいる）がブラジル行を大いに奨めた。笹本光雄の岳父谷山勝（妻初代の父）は昭和二十九年に、アマゾン地域トメアスー植民地に入植し、建築業の傍、胡椒園を經營し、裕福にくらしていた。時々アマゾンから便りがあつて岳父の健在をよろこんでいた。そこへ戰後派移民で全アマゾン移民一千家族中の第一の成功者高木清人（菊地市隈府出身）が歸朝し、大いにアマゾンの胡椒栽培の生活のよさを話し、渡伯をすすめた。高木清人は昭和二十八年に渡伯して七年目に一万二千本の成樹から收穫七百万円（當時の伯貨換算）をあげ、空路訪日したのであつた。この話をきいてタマゲて、遂に土地を賣却して渡伯を決心したが、その時に彼にも同行をすすめた。彼も一介の市井人では、その日ぐらしだし、笹本光雄と弟爲治が行くならと、到々あつ子夫人も賛成、長女豊子、長男等子供を連れてぶらじる丸で渡伯した。思えば夢のようであつだ。

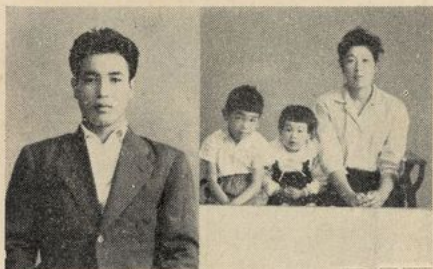
トメアスー植民地に入植して、すぐマルキタ區谷山勝耕地に就働し、三ヵ月後に、邦人耕地が賣物に出ていたので、笹本兄弟と共同で同耕地を購入した。渡伯三ヵ月目に地主になつたと云うのは、全伯廣しといえども少なかろう。ピメンタ栽培二千本で、既に成樹である。この耕地を經營しながら、彼は建築業に従事した。

一九六二年十二月に共同經營者の笹本爲治が、グアマ植民地に農場を購入したので、ここに移轉するとき、共同經營の權利を笹本爲治から讓受け、遂に完全なる富岡農場にした。そこで獨立會計になつてからは經營も困難であつたが、それだけ活氣を呈し勇氣百倍してきた。既にトメアスー産業組合にも加入している。先輩高木清人にならつて大いに發展してもらいたい。伯國では熊本縣人は三万五千人もいて全國一、しかも傑物が數千人も輩出している。在伯四年でその將來を期待したい・大正三年三月一日寅年生。

TAKEO SUGUITA
C. P. 39 — Seção Breu
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ 三區

杉田武雄氏

原籍　青森縣黒石市沖浦町青荷驛
渡伯　昭和三十六年八月　ぶらじる丸

「ねえあなた、こんな寒い冬がある處より、常夏のブラジルに移住しましょうよ」

物やさしい妻松江の聲であつた。二十八才の若さで新婚間もない夫婦であつたが、冬期の長さには、貧乏世帯が辛かつた。余程の貯えがない限り、冬は餓死状態にまで貧乏した。

「そうだねー、お前が決心してくれるなら俺も腰を起とう」

そこで、この若夫婦は、構成家族の件も心配がなく、夫婦移民として特別海協運の許可で一九六一年（昭和三十六年）八月のぶらじる丸でアマゾンの人となつた。

二十八才の若き夫婦には、海外旅行は初めて、太平洋の長航海、ロスアンゼルス港、世界の奇観パナマ運河、土人の都クリストバール、石油の新興國ラガイラ港、そして待望のアマゾン河口ベレーン市と物珍らしいものはかり、軈てトメアスー植民地に入植した。ブレウ三区の澤田・永野・須磨三共同經營耕地に入植し軈てブレウ区の各耕地を轉々した。恰度一九六二年度はアマゾン。地域二十五年來流行した、マラリヤ病が、全アマゾンに及んだ。アマゾンは健康地だと云われていたのに、この獰猛なマラリヤ病の猛襲で、健康であつた彼は罹病し、病床で四十度の高熱を出し呻吟した。時には余りの苦しさに悲鳴も出す、故郷の姿が面前に浮び悲しむこともあつた。

その時であつた、日本から持參の耕運機、オートバイ、テント、消毒噴霧機など、金に替えられるものは總べて、手許から放つて藥に代えた。マラリヤ特効藥は高價であつた。こうして渡伯二年目には、早くも大きな炎難に遭い前途は暗膽たるものがあつだ。惡夢のような一九六二年がすぎる頃、漸く彼も全快し、往年の健康な躰になつた。ふり返つてみると、同縣人の移住者中畑市郎は既に一年目に獨立し、堂々と成樹のある胡椒園主になつていた。病氣をしたぼかりに、立遅れたかと思うと、殘念でならなかつた。親しい同縣人に追いつかんと焦つたが、今は無一文で丸裸、病後の躰で誰も同情してくれてがないと思つている處に、棄る神あれば扶ける佛ありで、ブレウ区の人情家岸勝美が土地を斡旋してくれそこへ、本田博が獨立の援助をしてくれ、この兩人のお蔭でピメンタ八百五十本を植え、一九六三年に漸く獨立農へのスタートを切つた。やはりこんな逆境のときは、自分の肉親か、妻の弟妹を同伴すればよかつたと思つた。あの惡魔のようなマラリア病も全快し、現在健在で活躍松江夫人も長男秀範、長女優子の成長を樂しみに、終日彼と共に奮斗している。在伯三年と數カ月、開拓人生街道は長い。好漢自重して大器晩成に生きてもらい、青森縣海外發展のため模範農になり、後進に道を拓いてくれんことを希いたい。昭和八年五月十五日酉年生。

◉寫眞は日本出發の記念

トメアスー植民地ブレウ三區

山田榮一氏

原籍　山梨縣韮崎市穴山町
渡伯　昭和二十八年九月　あふりか丸

EIICHI YAMADA
C. P. 39 — Cooperado N.o 227
Belem — E. de Pará

物やわい話ぶりをする人であるが。その話に眞實性があり、骨があるので、この拓人は肚の座つた人物だという事が一目で判る。自己の宣傳ぎらいだから、おそらく近隣の人々にも解　　　、一般常識にも富み社會性にも伸縮自在の社交性を持ち、農業にかけては一應の知識を有しているだからマナカプル植民地で、アグア・フリーア産業組合創立の時に、衆望もだしがたく、初代理事長に推選された。

彼の故郷山梨縣は戰前でも海外熱に乏しかつた隣縣長野や靜岡などに較ぶれば雲泥の差であつたブラジル移民再開の聲をきき、彼はこの海外移住熱少なき縣から、率先して共鳴、奥アマゾン移民の草分として、マナカプル植民地アグア・フリーア區に入植した。彼と同船者の花輪虎之助（山梨縣中巨摩郡豊村）は「海外發展熱のない縣で、我が村から率先して出てゆくのは稀有の事で名譽だ」と應神村長は金四万円（當時は莫大）を餞別にしたぐらいであつた。だから彼の渡伯も、さぞかし穴山町の知人間では吃驚したことであつたろう。兎に角四十二才の厄年に、一生の運命轉換期とばかり、地球の反對側にあるブラジル移住を決心したのだ。しかも當時の外務省はまた移住局も出來ず、海協連には海外事情を知らぬ職員ばかりであつたから、アマゾン移民はデタラメ、いよいよ入植してみると　アグア・フリーア入植地は入植態勢が整わず、二十三家族一三九人の草分移民は混乱を呈した。そこへ翌年第二次三十八家族二一九人、第三次七家族三六人、第四次三〇家族一八三人、第五次二十七家族一六七人と入れた。密林を充分焼拂つてなく、住むに小屋もなく、まるで豚小屋に豚をつめるようであつた。ベラ・ビスタ區では一ヘクタール二・三俵の籾しか穫れず、瑞穂の國民は落膽した。吸血ダニムクイン、と吸血藪蚊で仕事も出來ず、婦人連は悲鳴をあげた。野菜栽培で漸く生計の燭光をみつけたが、二年目には早くも百家族以上が脱耕した。大宅壮一が訪植「緑の地獄」と痛罵、名著「中南米の裏街道を行く」で酷評したのはこの時であつた。

彼はこの植民地に三カ年も辛抱した。そしてその間に、ゴム樹三千本、珈琲樹一千本、グワラナー樹一千本、蜜柑二百本、パイナツプル三千株、バナナ五百株の理想的多角農場を建設しだが、その將來性なきを熟慮し、遂に三カ年の結晶を放棄し、トメアスー植民地に移轉、ブレウ二區千葉文子耕地に二年六カ月就働した。その間現地の開拓に着手、遂に四千五百本の成樹を完植させた。農地の管理は二十六才の長男和夫、二男勇夫、三男昇が健斗している。四男義光が一九六二年のマラリヤ病流行期に罹病し十才で早逝したのは哀悼に堪えない。長女勝子はマナウス市在住前田好治と結婚、二女末子三女由利江も健在である明治四十三年十月十日亥年生。

（右）船上記念（左）渡伯記念（驛出發寸前）

たこともあつたが、神は彼にいまだ人生苦難の試練を與えた。そして軈て弟宗雄と一緒に、大アマゾン開拓移民に應募し、昭和三十年一月ぶらじる丸で、アマゾンの土に斗いをいどんだ。今年でアマゾン生活滿十周年になる。彼の同航者は六十三家族四七八人で、その中で六一家族三二九人はベルテーラ・ゴム園往きの移民で残りの二十二家族一四九人が、ベレーン郊外の野菜栽培移民であつた。處がベレーン到着寸前に變更になり、トメアスー植民地に入植した。北伯地方は熱帶國で野菜が出來ない。太陽の光線が強く風氣も暑く、表土は焼けているのだ。邦人は蠶棚をつくり、それに土をもり、棚揚式野菜栽培法を苦心して發明したりした。だから、ベレーン市民四十万人は野菜缺乏で、ビータミンBに不足していた。州知事、市長等は、農業に優秀な日本人に野菜をつくらして、市民の健康をはかるつもりでいたが、受入態勢が整わなかつた。入植地變更で二十二家族はブウ／＼不平を云つたが、十年後の今日結果論から云えばトメアスー植民地に入植したのは幸運であつた。ベレーン市郊外の痩地に入り、肥料の配合、氣候の不變、病害虫の豫防等熱帶植物栽培を知らずして、入植していたら、營農資金はすぐ無くなり、生産物は出來ず、路頭に迷つて、日雇勞働者となり、流轉の生活をつづけなければならなかつたか知れなかつた。それを考えると、先輩指導者の多い、トメアスー植民地に入植したのは幸運であつた。

千葉久夫氏家族

　そしてトメアスー植民地に入植した二十二家族は、胡椒栽培に邁進したが、どの耕主も後輩移民に理解ある人ばかりで、二・三年で独立させ、二十二家族が揃つて堂々たる農場を建設した。無一文、裸移民もいたが、今日の榮冠は立派なものである

　彼は土山耕地に入植した。土山耕主は若冠十五才で渡伯した苦勞人、情味横溢な拓人で、土山耕地二ヵ年在住中に隣地の大密林を拓き、千葉農場を建設、胡椒四千五百本を植えた。そして今日は八代子夫人との間に長女みち子以外に伯國生れの二男日呂晃、三女みえ子、三男純弘が生れ、弟宗雄も一九六二年に眞田茂（在聖市）妹えみと結婚して、分耕地を拓いて一千五百本を植え独立した。愛兒一人に惠まれて、兩人とも既に生産物の純益は莫大、實に幸福な生活に浴している。宮城縣海協連の石川開拓課長の薦めで渡伯したが、彼のアマゾン移住は輝やかしい實を結んだ。兩人の幸福を祈つて筆を擱く。久夫氏大正八年十一月十日未年生。

トメアスー植民地ブレウ三區

千葉久夫氏
千葉宗雄氏

原籍　宮城縣本吉郡本吉町
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

HISAO CHIBA
MUNEO CHIBA
C. P. 39 — Cooperado N.o 189
Belem — E. de Pará

囲碁・麻雀・花札・トランプなど、なにごとにも勝負ごとは、その人の性格をよく現わす。一攫千金の夢好きな人は、冒險を知りつつ、敵中にピカ一をほうり込む。謹嚴實直な人は、自分のペースを守つてボツ〳〵定跡を進む。猿心僞瞞な人は誘いの手ばかり打つて、ゴマカそうとばかりする。豪肚廣量の人は負けても勝つても、我關せずえんで、堂々たる明るい手を打つ。ケチン坊の人はすぐコゼリ合をして、大局的な勝負よりも、その方にばかりこだわりたがる。實に勝負の世界は面白いものだ。もし地球上の女性が子供のときからこの勝負の世界にとびこむ習慣がついていたら、見合結婚は、勝負の場でと言うことになると、理想的な性格の女房が持てる譯だが、世の中はそうはいかない。

本編の千葉久夫も囲碁が好きであるが、無理をせず、ボツ〳〵と常道を進む手を打つていく。もし一手でも相手に缺陷が出來たら、その穴に一石勝負手を打つという術策が實に無理がないそして負けても勝つても、明朗でニコ〳〵している。少しは切齒扼腕しそうなものだが、その表情さえもみうけない。實に清楚淡々たるもので、これでは爭碁など出來るものでない。この性格が日常生活にも現われ、農場經營から社會的な交際、家庭生活に至るまで、終始一貫している。

彼は一九五五年（昭和三十年）二月、ブラジルに着くと間もなくマラリア病で二女みよ子を病歿させ、悲しみの内に野邊の送りをした。到着したのが一月で移住後間もない頃の混乱期であつた。八代子夫人の悲歎は勿論だが、男性の彼も困却した。しかも一九六四年（昭和三十九年）一月には、又もや滿十五才になつた長男久一がこれまた、風土病のため、あえなく昇天した。こうした悲しみの數々を、ブラジル移民生活で送つたが、その暗い生活の反面を、少しも面影に現わさない。そして子供の病死でさへ噂にしない。運命とあきらめているのであろうか性格が明朗型であるのだろうか、泰然自若たるものである。

大東亞戰線に出征し、幾度か死線を越えた。もう死を覺悟し

千葉宗雄氏夫妻

宅壯一が訪ねて「緑の地獄」と痛罵し、名著「中南米の裏街道を行く」で叩いたのはこの頃であつた。然し彼等は六町歩にマンジョカを植えて、澱粉を採集、その金で伯人耕作地を譲りうけて、甘蔗を栽培した。瓦葺の家屋があり、果樹を植えてあつたが、約一年半在住の後に。トメアスー植民地邦人耕主連から入植の勧誘があり、とても好條件であつたので、十年先の將來を熟慮して、到頭この耕作地をそのまゝ放棄して、トメアスー植民地ブレウ四區岩間徹造耕地に入植した。

岩間耕主は東京出身で、青年時代から苦勞した人物、そしてクリスチヤンでアマゾンの父崎山比佐衛と共に、奥アマゾン開拓に挺身した篤農家、この岩間耕地に入植したのは幸運であつた。入植三年目には早くも現地の大密林開拓に邁進、荒山を伐採して焼拂いその跡にピメンタを最初二千本植え、二年後には一万本近くになつたので、早くも二男義光の耕地經營に着手、これまた今日六千本のピメンタを完植した。

（上）勝彥一家
（下）理想的な胡椒園

一九六三年の十二月は、渡伯滿十周年記念事業として、第二期の事業に移つた。アマゾン河口のマラジョー島（九州より大きい）に友人四家族と共に各々百ヘクタールの州有地を拂下げ椰子樹園を經營した。また熱帯地で不可能な葡萄栽培にも着手これが見通しがつけば、その余力をもつて、州有地を何百ヘクタールも拂下げて、年來の宿望たる牧場經營に着手するつもりである。マラジョー島は北伯隨一の牧場地帯で何百万頭の牛が飼育されているが、軈て佐藤牧場幾百ヘクタールの實現をみるのも、そう遠くはあるまい。現在胡椒からの收益は莫大、その純益を全部投資する考えである

長男勝彥（昭和十一年二月二十一日生）は聰明理智、都立青梅農林高校二年退学で、勉学出來なかつたのが殘念と、今でも歎いている。篤学俊敏な青年で九才のとき日本に復員した苦勞人、黒澤勝馬長女くに子を娶り、孫裕男（よしを）ゆき子・乃生江（のぶえ）の三兒に惠まれている。滿州からブラジルに七轉八起の運命兒、佐藤家は滿十年で物凄く發展し、今後の素晴しい飛躍が望まれる。明治三十五年九月十七日寅年生。

北海道牧場時代

トメアスー植民地ブレウ　三區

父　佐藤義信氏
長男　佐藤勝彦氏
二男　佐藤義光氏

原籍　福島縣田村郡芦澤村
渡伯　昭和二十九年四月　あめりか丸

YOSHINOBU SATO
KATSUHIKO SATO
C. P. 39 — Cooperado N.º 113
Belem — E. de Pará

拓人佐藤義信は満六十三才、その半生はまるで放浪児みたようで定住性のない轉落の詩集であつた。福島・滿州・北海道・東京・アマゾンと、實に運命は七轉八起・その末に安住の地を求めて遂にブラジルが双六の「上り」になつた。その上りは誰れよりも壯觀な上りで、大平洋の彼方に雲一つない紺碧の大空に勇姿を現わした陽光が、ぐん／＼と昇つてゆくようであつた

彼は大東亞戰争の惨敗がなかつたら、滿州錦州省女兒河の日本人開拓村で、實に人も羨やましい位の豊かな生活をしていた早くから滿州開拓を志し、三十七・八才で既に開拓自警村の村長に推された。温厚篤實、共存共榮の性格は今もつて衆望を擔う親しさを憶えるが、當時は特に若さも手傳つて、後輩を引立てた。壯觀なリンゴ園を經營、傍らコーラン・大豆を植え、そしてホルスタインの乳牛を所有、牛乳を搾つて都市に配給していた。そして彼は九才になる勝彦を始め、義光などの成長を樂しみに幕していた。そこへ一九四五年八月十五日の無條件降服である。積年の努力も水泡に歸し、遂に涙をのんで本國に歸還した。歸還しても充分な開拓地がなく、止むなく北海道遠輕郡に入植した。幸い滿州で牧場經營に熟練していたので、少々の資本が出來るとすぐ幼牛を入れ、乳牛の飼育に移つた。まだ四十才を僅かに過ぎた頃で、彼も斗志滿々更生の意氣は軒昻であつた。あさ夫人も木枯が肌をさす寒さを辛抱し、農にいそしんだ。

漸く生活が安定したので、ホット安心した頃、東京都青梅市開拓地の話をきき、遂に交通不便な遠輕の地を去り、青梅市に移つた。處が着いてみるとなか／＼開拓地の入植條件はむづかしく、中込殺到で土地が手にはいらなかつた。持參の資金も少しづつ喰うて乏しくなつたので、彼等は一時しのぎに、紡績工場に働らいたその頃に恰度ブラジル移民再開募集の廣告をみて、滿州時代の夢をもう一度實現したいものと、早速應募し、昭和二十九年四月渡伯した。配耕地は奥アマゾン大流マナオス市對岸マナカプル植民地、ベラ・ビスタ區一ヘクタールの籾の收穫二・三俵、瑞穂の國民が落膽するのも當然、その痩地に百四十家族七百人以上の者が、受入態勢も悪いのに入植したから混乱を呈した。ゴム樹は十年先の收入しかなく、野菜栽培はマナオス市が遠隔で駄目、そこへ支配人が交代して理解のない監督となつた。大

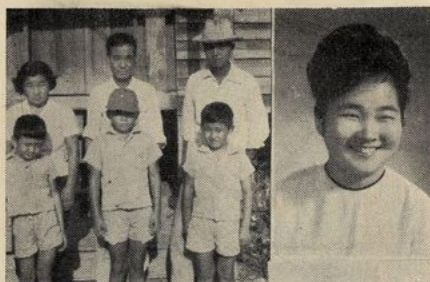
滿州リンゴ園時代中央勝彦

KATSUMI KISHI
C. P. 39 — Seção Breu
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ三區

岸 勝 美 氏

原籍　山形縣最上郡東小國村富澤
渡伯　昭和五年十二月　さんとす丸

十二才で渡伯して滿三十五年、その三十五年は茨の路で、今漸くその重任をはたしたかと思う頃は、今度は七男一女の、自分の子供を教育する重大な責任を担つた。この人は一生他人のため犠牲になるような運命を負つてきたようだ。長兄が早逝し、十三才で弟妹の頭となつて渡伯、アナウエラ區の米作生活ほ黒水病で九死に一生を得た。四十度の高熱で「勝美君も駄目だろう」と云われた。十年働らいて一文にもならないトメアスー生活十年したら自家自動車を乗廻す戰後移民さんと雲泥の差、岸一家は一九四〇年オイテーロ島に移つて、炭燒生活で糊口をしのいだ。最悪のどん底生活の中で二年目一九四二年一月二十日母はマラリア病かコジレて空しく病歿した。一家は悲しみの最中、同年八月樞軸國民住宅の燒打事件でオルテイーロ島退去、戻りたくないトメアスー植民地にまた護送されて軟禁された。ここまでが第一期十二年間の涙の生活である。

ブレウ區に入り米作貧農生活が始まつた。着のみ着のままで再出發、やれ終戰と安心した翌年、今度は十二月二十日父善助が五十八才で逝去した。彼が二十五才の時で、普通だつたら遊びだい盛りであつた。佐藤忠雄の激勵で命をつなぎ、三年後一九四九年五十嵐明（現ベレーン市）ブレウ區耕地を購入した。ここで胡椒栽培を始め、遂に七年目の一九五六年には一万六千本完植、約三十トンを收穫した。そして妹敏江は五十嵐邦治（ベレーン市）に、妹淺乃は鈴木信也（聖イザベル）に、妹清乃は赤塚順一（リオ郊外カンポ・グランデ）に嫁づき、あとは弟達の獨立を考えた。ここまでが第二期耕地建設基礎時代である。

漸くピメンタの黄金時代となつたので、幸い約二十年間のどん底生活にも、燭光がみえた。同格の連中は宏壯な住宅を建てるやら、聖市や訪日と觀光見物で賑つたが「黒ダイヤ」の黄金時代を迎えても、彼は一寸も樂でなかつた。先ず最初に次弟正美に一九五六年度和田嚴（在ベレーン市）長女まさ子を娶りブレウ四區で獨立させた。次に弟國美と弟好美は一九三四年一月一日の双生兒なるため、結婚式も一緒にあげ獨立させた。國美はブレウ四区滝澤秀雄長女春美を、好美の方はブレウ四区鈴木豊城姪三浦きみ子をそれぞれ娶つて、堂々たる耕主にさせたそして今日、正美は豊・元弘、國美は和江、好美は美津江・修一の愛兒に惠まれている。末弟徹が二十六才で未婚、會計士の免狀をとり、產組に働らいている。第三期弟妹獨立時代の役目がすんで、第四期は自分の子供等の教育時代である。

長男一司（二十二才ベレーン大学經濟科）宏行（中学）長女初江（赤間洋裁学校）謙二（中学）雄二・勝則・雅晴（共に小学）の七男一女で任務は重大、賢夫人の譽たかいみどり夫人（細川悦次郎長女で池田亨ひさえ夫人姉）の涙ぐましい功績は偉大である。北伯でも稀らしい淸廉潔白な拓人、彼の幸福を祈つてまやない。大正六年六月十六日已年生。

（左）長女初江（右）後列左ー岸夫妻

KUMIMITSU NOGUCHI
C. P. 39 — Seção Breu
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウー三區

野口邦光氏

原籍　福岡縣浮羽郡河井村
渡伯　昭和四年十二月　さんとす丸

若冠十四才で渡伯した拓人で、一九五九年「アマゾン邦人開拓三十周年」には、三十年在留邦人として記念に褒狀をもらつた。姉婿野口好之助を家長として、父七五郎、母つき妹みち子などが、仲睦じく昭和四年十二月さんとす丸で、三十四家族一九二人でトメアスー植民地に入植した。移民輸送監督は故人になつた聖州義塾長小林美登利であつた。三十四家族の同航者で現在トメアスー植民地在住者は關勝治・勝四郎一家、小原孫吉・遠藤瀧三に彼と渡邊秋代未亡人獨身組できた大沼春雄、押地他男の二人で、合計八家族だけであつた、あとは歸國か聖州移轉それ以外は死亡であつた。

彼は入植まもなくアサヒザール直營農場に入り、軈てブレウ區方面で米作をした。マラリア病がひどく、黒水病の來襲で、ベレーン市に出て野菜を栽培した。ベレーン植物園の前で、及川　福島、田中等の家族と一緒であつた。どうやら喰つてゆけそうになつている處へ、一九四二年八月に、ベレーン沖でドイツ潜水艦がブラジル商船隊を撃沈したので、ベレーン市民の激昂となり、樞軸國民住宅の燒打事件が起きた彼等は命からがらトメアスー植民地に難をさけた。全く着のみ着のままであつた

父七五郎は一九四〇年ベレーン市の野菜作り時代に死亡し、母も既に故人である。戰時中の一九四四年に妹みつ子が北海道人土山岩吉と結婚した。土山岩吉は稀にみる篤農家で、一九四九年ブレウ區で獨立するや彼もその隣地にピメンタ六千本を植えた。義弟土山岩吉は二万本のピメンタを栽培していたが、彼は古いマラリア病の再發で、治療費にくわれ、遂に農場を義弟に讓り病氣の治療に全力を盡しだ。幸い全快したので、再び植民地に戻り、ブレウ四區の土山農場の支配人として二万本のピメンタの管理をなしている。

非常に苦勞した人物だが少しも、その苦勞が顔に表われていない明朗な人物である。アネージャ夫人は伯國女性で、ホガラかな人柄、夫婦の間に長女ひろ子、長男勝、二女やす子、二男邦雄、三男光雄、三女春子、四男孝の四男三女に惠まれている伯人女性と結婚して、生れた子供に全部日本名をつけているのも珍らしく、やはり日本人の血が二世にも、脈々として血管に流れているように感ずる。アネージャ夫人も邦人に對し、よき理解者で植民地の發展のために盡している。

土山耕地支配人として既に五ヵ年になつた。年齡滿五十才、在伯三十六年の古参拓人である。切に今後の發展を祈る。

大正四年十一月二日卯年生

方岩間敬造三女比佐枝の女婿乙幡正三にブレウ三區胡椒六千本の農場を買つて與えた。乙幡青年はコチア産業組合呼寄の学生で、東京都北多摩郡村山町出身、南伯から北伯に轉向、岳父の眼鏡にかなつて女婿となつた拓人である。

岩間敬造は少年時代から苦労人で、世田ヶ谷區に住み、牛乳を配達し、苦学している姿を、アマゾンの父崎山校長がみて「ブラジルに行つたらいい」と薦められた。それが動機で昭和七年八月ぶえのす丸で、一まずトメアスー植民地に腰をおちつけ、サンタ・マリア直營農場に一年在住後、崎山校長を慕つてマウエス植民地に移つた。ここで不幸小石夫人をマラリヤで喪い、ついで一九四一年七月一日には、恩師崎山比佐衛も昇天した。その死後遺髪をついで神園万輔翁などと一緒に、マウエス植民地の再建を計つたが、植民地の更生策なく、終戦後一九四七年ベレーン市に出た。軈て友人のすゝめで岸勝美妹しげよ夫人と再婚しここにブレウ四區の農場建設に邁進した。一九五一年神園尚と一緒に聖市に出てチンツラリヤをソロカバナ驛前で開業していた横山健一を、トメアスーに呼寄協力一致の態勢を整え、一年後に久子夫人も聖市より移轉した。一九五五年のことで、あれから十年後に今日の大成をなした譯である。岩間家は長女愛子既婚、二女石子聖市勉学、三女比佐枝（乙幡夫人）長男綜治、四女京子、五女きみ子等健在、横山家は祥子紘一の他に二女悦子、三女滿壽子（共に聖市師範学校）四女静子、二男良民等健在である。岩間、横山兩拓人の過去は炎のような死線の路であつた。よくそれを征服して今日の榮冠を得た譯である。二人とも著者が尊敬するアマゾン在留邦人、兩人の健在を祈つてやまない。岩間氏＝明治三十六年一月十八日卯年生。横山氏＝大正四年九月二十五日巳年生。

横山健一氏夫妻

横山久子夫人を囲んで

KEIZO YUWAMA
C. P. 39— Cooperado N.o 45
KEN-ICHI YOKOYAMA
C. P. 39 — Cooperado N.o 204
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ四區

岩間敬造氏

原籍　東京都目黒區碑衾縁ケ岡
渡伯　昭和七年八月　ぶえのす丸

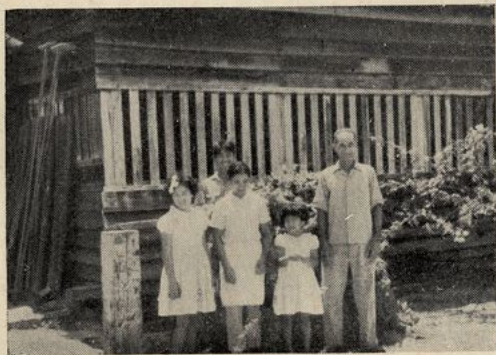
横山健一氏

原籍　新潟縣中頸城郡五十公野村水吉
渡伯　岩間敬造氏と一緒

云いだしたら一徹居士で、と云つて老の頑固さではなく、情理を盡して云うので、誰れも歯がたたない。青年時代からクリスチヤンだから、眞面目さも徹底している。毒舌家の反面、人情味があり、彼の耕地に就労した下前原光次、坂上勉以下數十家族の人々に、獨立を便宜を與えたので、今日は皆に尊敬されている。マラリヤ病で小石先夫人を喪くしているし、自分も明日の命が知れん位の猛悪なマラリヤ病に罹つたりして、人間は鍛れている。確に上調子で物を云う連中と違つて、話す言葉に骨がある。

横山健一は故小石夫人の弟で、彼とは反對の性格で、一見して伯人かと思われる位に、アマゾン事情に精通し、容貌も小型で太り大陸的である。義兄にどんなにドナラレテモ反駁せず馬耳東風、悠々として仕事をしている姿は、大利好者か、大莫迦者か、まるで哲人のように人生を超越した雄大さが窺える。誰れからでも「横山さんは人づき合がいい」と好かれる。年齢満五十才、聖市で長女祥子（さち子）長男紘一（大学）などと一緒に歩るいていると「妹さんか弟さんか」と云われる位に若々しく三十才と一般の評するぐらい若に見う年ける。物事を苦にしない、明朗春風な性格と激勞する筋肉美の發達によつたためであろう。

岩間敬造は耕地經營の大局を掴り、横山健一が實務について仕事をしている實にいいコンビである。だから僅々十年間に岩間耕地二万五千本、七・八十トンの生産、横山耕地一万一千本、三十トン内外生産、その合計は百トン内外でトメアスー植民地多收穫者四天王のトップを切つている。しかも余力をかつて一九六四年カスタニヤ市に二百ヘクタール胡椒一万五千本の既成耕地を購入、横山健一義兄神園一生に管理させているし、また一

右端岩間氏、一人おいてしげよ夫人

き、終戦後食糧難と、税金攻勢に、その日〳〵を過し前途に希望が持てなかつたので、自由の天地大アマゾン移住に彼は意欲をもやし、遂に昭和三十年一月ぶらじる丸で渡伯した。入植したのはトメアスー植民地ブレゥ四區岩間耕地であつた。岩間耕主は海外殖民学校長崎山比佐衛を慕つて、奥アマゾン・マウエス植民地に入植した篤農家で、稀にみる人格者、この耕地に入植したのは幸運であつた。三年間その耕地で働くうち、一年九ヵ月目には隣地の大密林を拓いて到々住宅を建てて移轉し、自分の住宅から岩間耕地のピメンタ樹の手入に通つた。そして家族を手別して、自分の耕地に胡椒を栽え、これに全力を注いだ

（上）美事な農場（下）耕作中の畑

そのお蔭で、見る〳〵内に一万二千五百本を栽培、今は三十トン内外を收穫している。こんな都合のよい條件は南伯サンパウロ州やパラナ州にはなかつた。勿論いせの夫人や、長男輝男、二男晃等の少年群も、大人以上の働きをした事は、書くまでもない。戦後派移民で一万二千本以上のピメンタを植えている者は少なく堂々たる耕主となつた。そして農場に附属したトラクター、除草耕耘機、貨物運搬自動車、乗用自動車など完備し、また農場の電化をはかり、製材所、自動車修理工場を設け、自宅の應接間には冷藏庫をすえ、飲料水、ビールはもとより、白馬・スコッチなど英國製高級ウイスキーが仕まつてある。渡伯して今年で満十年、たつた十年でかくも立派な農場を建設したのも、アマゾンなればこそである。

家族もあれから皆成長した。長女みつ子はブレゥ一區熊本縣人蒲島久夫と結婚し、孫千草、ふみ、一男の三兒がいる。長男輝男はブレゥ二区福岡縣人諸富寅雄長女美津江を娶り、これも孫二人、二男晃等は北海道人山家岩雄長女ふみ子を娶り、これも孫二人でブレゥ三区で獨立し、一万二千本のピメンタ園主となつている。満州生れの三女静子は栃木縣人で眞岡農林高校出身の新進拓人大根田恒晴と結婚し、これまた獨立早々の耕地を經營し、賢夫人たる處を發揮している。二女悦子はトメアスー病院看護婦として勤務、三男茂子は中学校在学中である。同伴の甥坂上勉も隣地で成功した。

ここ二三年もすれば、耕地は胡椒が全部成樹になるので、夫婦して墓参を兼ねて訪日したいと云つているが、その日の早からん事を望んでやまない。十年一昔と云うが、一瞬の夢だつた切に今後の發展を祈る。大正三年十二月三十一日寅年生。

トメアスー植民地ブレウ四區

下前原光次氏

MITSUJI SHIMOMAEBARA
C. P .39 — Cooperado N.o 140
Belem — E. de Pará

原籍　宮嶋縣西諸縣郡飯野村
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

先輩を敬い後輩を引立て、團体仕事とか、公共事業だとかには腰輕く立廻り、それで少しも恩ぎせがましい顔もせず、成程彼は社會人である。戰後派移民にかかわらず、先輩の仲間にはいり　トメアスー産業組合の評議員や監事になり、自治團体の方は、ブレウ區長もつとめ、青年會、處女會の相談役にもなり、實態調査地方區委員とか戰後移住者協議會委員とか、多くの公職にもついた。別に学問がある譯でなし、特別な才能がある譯でないのだが、やはりそれは人格のしからしめる處であろう。誰にでも親しまれるあの親切味が、衆望を擔う原因ともなつたのであろう。

純日本色豊かな愛國者である。愛國者であるのは、少年期から青年期にかけて、故郷宮崎縣高千穂峰の見える下で育ち、古くさい文字だが「八紘一宇」の精神をいやと云う程、頭に叩きこまれた。いや叩きこまれただけでなく、彼はその日本色豊かな當時の精神をもつて、満州の曠野に渡り、満州開拓に挺身した譯である。世界中の移民が流れこんで、人種展覽會場と云われるコスモポリタンのブラジルで、彼がコスモポリタンになりきれないのは、そうした満州開拓で、血の惨むような記憶が脳裏に残つているからである。宮崎縣廳は皇紀二千六百年祭記念事業として、満州興安省札蘭屯（シャラントン）に、開拓地を求め百家族を入植せしめ、以つて満州建國の主旨に添いたいと云う譯であつた。土地は奥地だが無肥料で作物が採れるので、入植者は前途に希望をもつた。昭和十五年十一人が單身先遣隊として乗込み翌年一般開拓者が入植したそして二十年もすれば立派な宮崎村が完成するつもりであつたが、あにはからんや、大東亜戰の惨敗で、満州國の夢は一朝にして消え彼等一家は翌昭和二十一年十月十九日歸還した。祖國を出るときは満二十六才、寅年生れの彼は猛虎以上の猛勇さをもつていた時代で、りせの夫人も長女みつ子、長男輝男、二男晃等の三兒をかかえて渡満したそして満五年目には二女静子が満州で生れ、三十一才で着のみ着のままで歸還した。大東亜戰争中は、開拓地から現地呼寄で戰争に參加、終戰と共に開拓地に歸り、日本に歸還したので、彼は開拓地で充分活躍することは出來なかつた。

家族一同、左上は三女悦子

故郷に還り農に就いている時に、アマゾン移民募集の話をき

TOYOSHIRO SUSUKI
C. P. 39 — Cooperado N.o 157
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ四區

鈴木豊城（とよしろ）氏

原籍　秋田縣仙北郡角館町下延生
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

ピメンタを五千本栽培しているが、野菜作りの名人で、特に最も作りにくいトマテ栽培が上手で、毎年この作物で巨利を博し、その純益をもつて農場の擴張をはかつている。胡椒栽培とピメンタ栽培と、両立して進んでいるので躰を休めるひまがないかと云うと、そうでもない。好きな碁を圍むと、親の死眼にも遭わない位に夢中になる。そうなると農場はと云う事になるが、そこはよくしたもので、いの子賢夫人が、多勢の伯人を激励して野菜畑を管理している、と云うといかにも彼は働らかない者のようだが左にあらず、寅年生れに因んで生れたこの猛虎は氣がむいてやりだすと、東天曉もみえぬ内から畑に出て、夜はくらくなるまで働くと云う勤倹力行の人である。長男安男を頭に幼児四人、それに姪（姉の娘）三浦きみ子を連れて渡伯、家族は至つて労働力がなかつた。その貧弱な家族で、遂に今日立派な農場をきづきあげたのだから、やはり努力家ではある。

大体東北地方の津經衆や秋田衆の青年は、越年を過ぎ、雪とけ始めると北海道の鰊漁場や、カムチヤツカの蟹工船、鮭マス漁業船志望者が多かつた。處が二十代の獨身青年豊城は、同僚と反對に北米大陸カリホルニア州へと移住を熱望していた。軈て妻帯し、戰後北米戰災移民が募集されたとき。六百家族應募し合格して出發と云う間ぎわになつて色々の事情で、渡米が出來なくなつた。少年時代のころからの念願だつた北米行が駄目になり、切齒扼腕した。と云つてそのまま現狀維持の惰性生活は續けたくなく、折から募集中のアマゾン移民募集をききつけ、これ幸とばかり轉向、昭和三十年一月遂にトメアスー植民地ブレウ三区岸勝美耕地に入植した。追懐すれば長い希望の海外移住がやつと達せられた訳であつた。

耕主岸勝美は、少壮にして渡伯、そしてベレーン市に移轉、戰時中焼打事件で植民地に戻り、間もなく父の逝去で、若くして數人の弟達を育てながら、今日を築いた立志傳中の人物であつた。この耕地入植は當を得ていた。僅か三年の間に、耕主の理解で現地の大密林を拓いて、ピメンタを植えた。幸い新移民連中の入植開拓地で、皆競争心理が出て、一生懸命働いたから彼等若人も大いに刺激され、遂に五千本の胡椒を栽培した。その間人に知られない涙ぐましい奮斗をしたのは、ここに記すまでもない。北米への希望が到達されなかつたが、考えようによつてはアマゾンに移住し、滿十年目に立派な農場主になつたから、結果に於いては、或いはこちらがよかつたか知れない。日本生れの長男安男、二男秀三、長女八重子（日本で早逝）伯國生れの三男修、二女テレーザ、三女レジーナも成長しつつある姪三浦きみ子は舊耕主岸勝美の弟好美と結婚し、長女みつえ、長男修一が出生した。尚同家には武田章三（島根縣人）二十六才が働らいている。大正十五年一月二日寅年生。

トメアスー植民地ブレウ四區

林　利　雄　氏

原籍　熊本縣下益城郡松橋町西下郷
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

TOSHIO HAYASHI
C. P. 39 — Cooperado N.o 131
Belem — E. de Pará

北海道アカシヤの都札幌市で生れ、南洋パラオ島で二十年生活し、日本に歸還、熊本からアマゾンに移住し、しかも兩親由夫、母はりの二人は島根縣で悠々余生を送つているという、七轉八起の運命兒である。海外生活が長かつたのか、一緒に暮した石川正行・道喜・静夫・辰昭兄弟や、隣地の下前原光次などと共に明朗濶達、金錢取引も、實に淡泊淸楚移民地によくあるあのズルサが少しもない。

北海道大学創設者クラーク先生が叫んだ「青年よ大望をいだけ」の聲をききながら、幼年を雪の札幌で送つた二男坊の彼は、南洋に一足先きに行つた兩親に呼寄せられた。南洋拓殖ＫＫの經營するパラオ島の旭開拓地ではパイナツプル栽培が主眼であつた。然し父由夫は農業をせず、船舶をもつて食糧、農産物の運搬にたづさわり、巨利を博し、利雄少年も、軈て青年となり、天國のような常夏の生活に醉つてくらした。そこへ突然大東亞戰爭が勃發した。緒戰は歡喜の巷であつたが、一年後には物量豊富なアメリカ軍の反擊で遂に基地サイパン島を占領されてから逆轉した。彼のいるパラオ島は遂に敵軍のなかに孤立し、食糧難に遭つた。食料を得ようと畑を耕作すれば、毎日の空襲で出來ず、在留民は到々食糧不足で營養失調になつた。彼は戰爭勃發と同時に軍属として志願、二十一才の青春を祖國愛に捧げたが、この食糧欠乏では如何とも仕難かつた。昭和二十年八月十五日終戰で、漸く蘇生の思いがした。もう二・三年も戰爭が長びいたら、餓死したか解らなかつた。大正十五年南洋パラオ島に渡つてから、日本々土に歸還するまで、實に二十年間、その想出は盡きない。

昭和二十一年二月浦賀に歸還して、日本の土を踏んだ。北海道で悠長に育ち、南洋で樂しく成長した彼は、熊本の開拓地で息のつまるような生活をつづけた。そこえ軈てブラジル移民再開の話があつたので、南洋パラオ島時代の友人石川道喜（アライア区）などと一緒に渡伯した。家族構成の關係でやす子夫人（北海道生れ）の兄の子、久保信男と久保光子を連れて渡伯した。配耕地熊本縣人澤田哲耕地に三年いて、その間にブレウ四区の現地を選定、日曜・祭日のひまをみて開拓につき、軈て三年後に移轉、一瀉千里の勢で四千五百本の胡椒を植えた。

今年で滿十年になつた。お互に同航海の人々は、皆立派な耕主となつたが、彼も他人に劣らない耕地を建設し、アマゾン移住の目的を達した。今後の十年間で林家の充實をはかつてほしい。日本生れの正男・直人・文子・富男、伯國生れのみどり、正之、ジュベルト等健在、甥久保信男もトメアス港在住の鳥取縣人永田正平長女えみ子を娶り、姪久保光子はイビチンガ区深水昭吉に嫁づいでいる。大正九年四月十三日申年生。

上の寫眞は一九五九年度撮

MOHICHI MIYAGAWA
SHOZO MIYAGAWA
C. P. 39 — Cooperado N.o 189
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ四區

宮川兄弟農場

長兄　宮川茂七氏
弟　宮川正三氏
弟　宮川正雄氏
義弟　佐伯光安氏

原籍　熊本縣阿蘇郡阿蘇町字的石
渡伯　昭和三十年十月　ぶらじる丸

アマゾン戰後派移民一千家族のなかで兄弟協力一致して北伯地方に尨大な農場を建設した模範家族と云えば、前に高木哲夫後に宮川茂七の家族にまず指を屈するであろう。宮川兄弟は、長兄茂七農場九千本、次弟正三九千本、末弟正雄五千本、義弟佐伯光安（宮川茂七妻靜子夫人弟）五千本、兄弟して既に二万八千本のピメンタを植え、しかも合計總收入七・八十トンをあげている。既に千本五トン平均生產する成樹もあり、特種な成樹は一本で七・八キロ收穫した模範的な樹もあり、次頁にあるような立派な胡椒園を經營している。まだ全部が成樹でないので、その將來は大きな望がもたれるだろう。僅々十年間で、かくも物凄く成功した原因は奈邊にありやと云えば、彼等は戰前に一度、ブラジルに渡つて、開拓地の事情を熟知していたからであつた。

自動車倉庫

父源四郎は、母茂壽、弟正三（當時三才）を連れ、二十九才のとき昭和四年五月さんとす丸で渡伯した。昭和四年（一九二九年）と云えば第一次コーヒー黃金時代で、小農の珈琲園主でも余りに大儲けするので、歐米に見物と洒落た時代であつた。この時に長兄茂七は七才であつたが眼病で旅券が下附されず、日本に殘つた。配耕地は聖州モジアナ線イツベラーバ驛伯人耕地新移民五家族と共に入植したが、一年後にはコーヒー園を建設中の邦人田中某に招聘され、新興地帶パウリスタ延長線マリリア市外に移り、コーヒー栽培四年契約を請負つた。四年契約

TSUTOMU SAKAGAMI
C. P. 39 — Cooperado N.o 142
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ四區

坂上　勉　氏

原籍　宮崎縣西諸縣郡飯野町
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

九州人特有の春風駘蕩な人柄で、若冠二十三才のとき、叔父下前原光次家族の一員として獨身で渡伯した青春の身を自由の天地ブラジルの曠野で、思う存分活躍する人は幸福である。失敗して一文なしになつても元もとで、もし努力の甲斐あつて巨億の金を摑めばそれだけは儲けものである。だからブラジルに來た以上は、少しは冒險心をおこし積極進取の氣性がないと成功はおぼつかない。本編の坂上青年も渡伯當時は、叔父以上の意欲をもつて開拓精神を發揮遂に今日の榮冠を得るに至つた。

彼は父袈裟之進、母すえまつ兩親の長男に生れた。母は下前原光次の實姉であるから、彼にとつて叔父に當つた。叔父と共にトメアスー植民地に入植し、ブレウ四区の草分開拓者岩間耕地に入植した。父と一緒に渡伯するつもりでいたが、事情があつて四カ月おくれ、あめりか丸で渡伯、有名なゴム園ベルテーラに三九家族と共に入植した。處がブラジル連邦農林省は、雇傭勞働者の形式としてベルテーラ・ゴム園に日本移民を入植させることは、伯人勞働者を壓迫するもので、日伯移民協定に違反するものだと退耕を命令した。ゴム園管理たる北伯農事研究所でも、農林大臣の横槍で如何ともしがたく、父達は二カ月後に急據モンテ・アレグレ植民地に移住したが、モンテ・アレグレも、受入態勢整わず、入植地域の山焼は勿論のこと、仮住宅も出來ず、その上道路まで自分が開かなければならぬということで、天幕生活一カ月で愛想がつき、軈て彼を頼つてトメアスー植民地に轉じ、岩間耕地に入植した。四月ベレーン市に上陸し、七月岩間耕地に入植するまで三カ所も入植地を轉々したのであつた。

父子一緒になつて、一家協力した事はよかつた。しかも妹等も女性ながらも甲斐々々しく立働いた。そして岩間耕主の溫い理解で、一年後にはその近隣の大密林を拓いて、早くも獨立への第一歩を踏み出した。その人情豊かな耕主に對し、返禮として彼は岩間耕地に四カ年間奉仕し、多勢の伯人を監督した。耕主も非常に大助かりであつたが、彼等の家族は、この独立への歩調に急ピッチをあげ、遂に一万本のピメンタを栽培、現在二十五六トンの收穫をあげるに至つた。「青年坂上君はよくやるわい」と賞められたが、岩間耕地を辭して自己農場建設に移つてからの努力は不眠不休で、その意氣軒昂は確にほめていい。兎に角叔父の耕地に劣らぬ耕地を建設した。彼は同區山田淺吉二女美枝子を娶り、長男惠一、長女美喜、二女瑞惠が出生、妹きよ子は愛媛縣人西岡繁光と結婚、二兒に惠まれ隣地で独立、妹貴美江はブレウ二区福岡縣人諸富寅雄長男忠志に嫁しづいている。末弟馨も兩親と共に健在、坂上家の渡伯は有終の美を飾つた。昭和六年八月四日未年生。

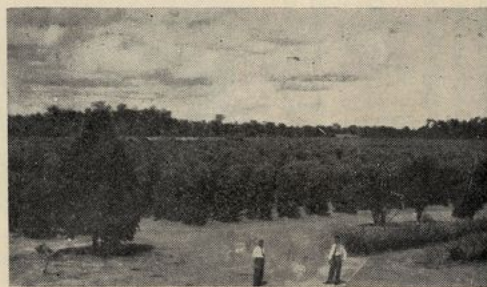
の年収があり、熊本縣人の後輩にも出來るだけの援助を惜しまなかつた。就労一・二年でどしどし獨立させたのだが、彼等も翌年には兄茂七・兩親・義弟佐伯光安などが大擧渡伯したのでここで独立への第一歩を踏み出し、澤田耕地を退植した。ブレゥ四區の大密林地帶を伐採して焼拂い、父源四郎母茂壽も、往年マリリア地帶で何万町歩も焼拂つた想出に耽けりつつ健斗した。この大家族が、赤道直下の酷熱をものともせず、勇往邁進したので軈て近隣で羨ましい位の宮川兄弟農場が完成され、次から次へと兄弟の分耕地を拓き、各農場附属の貨物自動車、除草耕耘機、トラクターなども完備された。一度ブラジル生活の經驗があつたので、日本から精米機、製材機、十五馬力のエンジンなども持參したので、倉庫・本住宅・ガレージ・使用人住宅などの建築も案外早くできた。

幸福な宮川兄弟家族一同

　そして宮川茂七家族は、四農場となり人的方面も増えた。父源四郎が一九五八年（昭和二十三年、渡伯三年目）大腸癌を病み六十五才で逝去したのは惜しかつた。最初の渡伯が二十九才の時で、熊本六師團で鍛えた壯健な拓人であつた。（マナカプル植民地吉田一憲父喜一は同年兵）母茂壽は壯健、長兄茂七は靜子夫人の間に長男一男（中学）二男君男（小男）がおり、次弟正三（大正十二年二月二日生きりゑ夫人は宮川正信妹）長女あさ子（一三才）を頭に律子、正一、正士の四人、末弟正雄は昭和七年九月十七日生、日本から呼寄せた熊本縣玉名郡中山春雄令嬢とし子との間に、長男正昭、二男英樹、長女順子の三人、佐伯光安（昭和十二年生）はブレゥ一區の篤農家香川縣人野上又一長女きみ子を娶り、長男孝一に惠まれている。次弟正三と一緒に渡伯した妹しげ子は、隣地高木哲夫に嫁つぎ、くみ子、誠也、よう子、健二、けい子が出生、母茂壽は多勢の孫にとりかこまれ幸福な晩年を過ごしている。宮川兄弟はアマゾンに再移住してよかつた。これからは子供等の教育である。今後は彼等の一家から伯國社會に貢献する二・三世が輩出せん事を望んで擱筆す。長兄茂七大正十一年九月二十一日生。

とは、大密林を焼拂いその跡にコーヒー苗木を植えると、四年目は實がなる。耕主は大密林の焼拂から住宅やら、苗木その他一切を負擔し、雇傭人は四年間珈琲を育てながら、その四年間に幼樹の間に栽えた作物と、四年目になつた珈琲實を利益としそして四年目退植のときに、育成した珈琲樹の一本當りの成育費を何千本と計算してもらつていく譯で、三・四十年昔の無資本の日本移民は、皆この方法で獨立資金をつくつた。

宮川一家はこの四年契約中に大いに儲けた。マリリア地方は聖州でも最高の肥沃豊饒な處で、そこで宮川家も毎年六・七百俵の籾を收穫した。幸運の波にのつて巨財を殘したので、永住して大農場建設に邁進しようと思つたが、長男茂七を故郷に殘していたので、昭和十四年遂に歸國した。ブラジル在住十カ年であつた。宮川源四郎夫妻が、もしも歸國せず大農場建設の途に就いたら、今日全伯有數の大農場主になつていたであろう。

歸朝翌年は皇紀二千六百年祭で、目出度し／＼であり、軈て一九四一年大東亞戰爭勃發で、緒戰の大勝利に酔うたがミツドウエー海戰の慘敗で、日本が空母を撃沈されてから敗退となり遂に四カ年の激斗も甲斐なく、一億の國民は涙をのんで、無條件降伏の前にひれふした。軈て四百万の海外派兵が復員、滿州・台灣・朝鮮・樺太、南洋諸島舊日本植民地からの在留邦人歸還家族で四つの孤島は混乱を呈した。食糧難は物凄く、共產黨は跋こ、政治は未熟で前途は暗黑社會、宮川一家はありしブラジルの悠長な生活が戀しくなつた。アマゾン移民再開の噂をきき本當だろうかと疑つた。然しよくきくと流石民主國家ブラジルで戰時中も敵國人たる日本人を余り壓迫せず、農・商・工に自由の身で勤めさせたとの事で、戰後率先してゼツリオ大統領は日本人をアマゾン開拓に誘致した。アマゾン再開ときいて、眞先に應募し、昭和廿九年五月あめりか丸で、一まず弟正三、弟正雄等が渡伯し、熊本縣人の先輩澤田毅耕地に入植した。

澤田耕主は若冠、二十代で兩親を失い、弟妹幼兒を入れて六人を育てる逆境から、のしあげた拓人である。彼等が入植した當時はトメアスー植民地多收穫の第一人者で、邦貨二千万円位

理想的な大農園

情味豊かな人物だつた。當時收入邦貨二千万円もあり、剛腹な處から彼等の獨立にも大いに贊成し、なにくれと助援した。一家總出の渡伯であるだけその決心も固く、ブレゥ四區の大密林を伐投、そして焼拂つた。このブレゥ四區地帶は、當時新移民獨立隊が、どしどし入植したので數千ヘクタールの原始林は瞬ち焼拂われ、一望千里の焼野原となり、その跡に何十家族の拓人が、酷暑をものともせず眞黒くなり健斗していた。

三十代の若さで疲れを知らない彼は他人の三・四倍も働いた驀て弟達も來援して、ここに後續部隊の充實と共にピメンタは續々と植わつた。この頃戰前の移民は胡椒栽培の黄金時代の夢に醉つてどんどん空路訪日と洒落、トメアスー植民地は金がうなつていた。二年前に渡伯した同縣人高木淸人は、もう七年目には空路訪日し、戰前移民をあつと言わした。

(上 原始林伐採後の稲作(下)美事な胡椒園

間もなく宮川正信農場は、一万三百本の胡椒が完植された、この蔭に父の協力も偉大であつた。老年ながら山から木を擔いで激勞に堪えた。毎日の晩酌を樂しみにしていたが、二十五年來の悪性マラリヤ病流行で、遂に罹病昇天した。彼等は毎年巨利を博したので、貨物自動車、トラクター、除草耕耘機、消毒自動粉撒機等も驀て一通り揃つた。農場の機械化に莫大な投資だつたが　毎年の純益で完備した。入植當時日本から精米機や製材機モートルなどを持參してきていたから、これが大いに役に立つた。驀て最も高價な胡椒乾燥機も設備することが出來た。

長男たる彼はこの間に弟達の耕地建設の準備をしていた。幸い彼の耕地のならびに大密林地帶があつたので、そこに皆を獨立させた。次弟今朝次は胡椒四千本を植え、初子夫人との間に実・明・毅・（赤児）の四人出生、弟孝も胡椒四千本の農場主でグアマ植民地篤農家宮崎縣人宮本三代治二女とみ子を娶り、礼子・眞智に恵まれた。末弟毛佐行も獨立して農場を經營、熊本縣人坂上秀雄（ブレゥ三區）長女節子を迎えたが、一九六一年十二月二十六日急病で逝去しだのは哀悼に堪えない。正月前で樂しく支度をしたのに、突然の病歿であつた。弟達を獨立さすまでこぎつけた宮川正信の責任は重大で、勞働方面の努力以外に精神的苦悩の數々をなめた。茂壽夫人が、これによく協力したからこそ、この難關を突破したのであつた

兄弟の耕地を合してピメンタは二万三千本、堂々たる大農場となつた。兄弟五々自重して活躍してもらつたら、地下に眠る嚴父も冥福をかこつ事になるだろう。正信（大正八年十一月二十九日生）今朝次（昭和二年三月二十五月生）孝（昭和九年十一月十八日生）毛佐行（昭和十二年五月一日生）

トメアスー植民地ブレウ四區

宮川正信氏
宮川今朝次氏
宮川孝氏
宮川毛佐行氏

MASANOBU MIYAGAWA
C. P. 39 — Seção Breu
Belem — E. de Pará

原籍　熊本縣阿蘇郡阿蘇町的石
渡伯　昭和三十年十月　ぶらじる丸

宮川正信家と、隣地の宮川茂七家は親戚であるが、余程親しくしないと、どの人が宮川正信家で、どの人が宮川茂七家の人か、なかなか解らない程である。宮川正信の両親は父政喜、母朝江で彼は長男である。父政喜の妹茂壽が、隣地宮川茂七の母である。彼の妹霧江は宮川茂七の弟正三と結婚しているが、從兄弟同志の結婚である。彼の妻静茂は宮川茂七の姉で、これも從兄弟同志の結婚になる。だから宮川茂七家と、宮川正信家はきつても切られない密接な血のつながりをもつている家庭である

宮川正信の父政喜は、一九六一年六十八才でトメアスー植民地で逝去したが、實によく働く人で、六十才を過ぎても、壯年の人々に負けない位い、終日激勞に堪えていた。惜しかな人間の壽命は致しかたなく昇天した。彼の兄弟姉妹は五男三女で、その内五人が渡伯し、日本には三人残つている。長男が正信で二男正友（在日本）長女ともえ（既婚在日本）三男今朝次（ブレゥ四區）二女澄江（佐日本・宮川政俊夫人）三女霧江（ブレウ四區宮川正三夫人）四男孝（ブレゥ四區）五男毛佐行（ブレウ四區）である。ブラジルに渡つた弟達も、渡伯滿十年目で、既に分家して、堂々たる耕地を所有しているのは、お目出度いことである。

彼等の渡伯一年前に、妹霧江の婿宮川正三（茂七弟）が先伐隊としてアマゾンに渡つた。正三は滿三才昭和四年に、父源四郎と渡伯し、滯伯滿十年の後に昭和十四年歸國し、一度ブラジル生活をした事があるので、まあ先伐隊がよかろうと先行した譯だ。翌年正三の両親と兄茂七等一家に、宮川正信一家も連れて渡伯した。着いてみて直感した事は、胡椒栽培が案外むずかしい仕事でもないし、氣候も想像したような酷暑でもなく、これなら将來有望だと自信を得た。就勞した耕地は熊本縣人澤田穀耕地であつた。同縣人なるため耕主も大いに待遇してくれたしかも澤田耕主は、二十代で両親をマラリア病で喪い、少年幼女の弟妹をかかえて、苦戰苦斗、最悪の人生街道を突破した人

故父政喜氏健在の姿

むのではないかと思う。トメアスー植民地の農場から生産する胡椒の純益を十年間全部椰子園に投下しただけで、尨大な椰子園が完成されるものと期待される。

大体彼は三十七・八年前、まだ十九才の青年時代にブラジルに移住を熱望していた。熊本縣葦北郡田之浦出身で、在伯邦人界でも篤農家として有名な大珈琲園主農田源行（麻州ロンドノポリスに三万ヘクタールのコーヒー園を所有）が、昭和三年に訪日したときブラジル事情をきき渡伯の手續をしたが、家族の反對で、涙をふるつて中止のやむなきに至つただから心の中ではいつも貧乏するたびに「ブラジルに行つていたならばなー」と歎いた。處が恰度日本は大東亞戰爭で慘敗四百万の海外派兵は復員、その上に滿州・朝鮮・樺太・南洋方面の日本植民地からは、在留同胞が四百万人も歸還するということで、四つの孤島は人口増加で食糧難を呈した。そこへアマゾン移民の再開ときいて、自ら進んで早速應募した。だから最初から心がまえが違つていた。

妻ともゑに長男哲夫が二十三才、以下長女みさ子、整、克行さき子の三男二女を連れ家族七人、子供も手足まといの幼児がいないので皆働ける者ばかり、トメアスー植民地アライア區熊本縣人永野敬士耕地に入植した。同耕地に在住二年半、生活は雇傭人であるから心配がなかつたので、長男や二男など荒仕事

長男哲夫、三男克行、吉田四郎君等の家族

胡椒樹と哲夫君

トメアスー植民地ブレウ四區

父　高木清人氏
長男　高木哲夫氏
三男　高木克行氏
婿　吉田四郎氏

原籍　熊本縣菊池市隈府
渡伯　昭和二十八年八月　あめりか丸

KIYOTO TAKAGUI
C. P. 39 — Cooperado N.o 273
Belem — E. de Pará

戰後派アマゾン邦人移民一千家族のトツプを、颯爽として進んでゆく拓人家族で、訪日墓參もどの家族より早く、なにをやつても先端を切つている。

渡伯は一九五四年（昭和二十八年）であつた。他の家族は精米機、脱穀機、製材機、單車など、やれ何々と持參したが彼は本當の丸腰無一文で渡伯した。それが一九六〇年滿六年目には堂々一万二千本の高木農場を完成し、同年三月訪日した。そして二男の妻すゞ子、三男の妻房子、二女の婿吉田四郎を同伴して翌一九六一年（昭和三十六年）八月ぶらじる丸でベレーン市に着いた。三四十年の古參移民でもまだ〳〵訪日出來ないのに、在伯六年目に訪日、しかも嫁や婿を連行するという壯觀は、きいただけで同胞として嬉しい。當時は伯貨も値打があり、四十トン近くの收穫をあげて、その代價は邦貨にして七百万円あり六年目にしてこれだけの年收の農場主になつたかと思えば、日本では驚嘆するばかりである。

彼等は現在二万四千本の胡椒を滿植しているが、單一農の危險を考えて、一九六四年度からバイア州サン・サルバドール首都郊外に一地域七百ヘクタールづつの農場を、三カ所まとめて購入、總面積二千ヘクタールに椰子樹を栽培している。そのためトメアスー植民地の胡椒園は、三男克行が管理し、長男哲夫と女婿吉田四郎が、その耕地建設に着手している。そして二男整は長女美佐子の女婿田中正雄と共に、サンパウロ市の繁華街で商業方面に進出し、實に多角形な生活方針を採り、どの方面で不慮天災がきても、倒産することのないよう、後顧の憂を斷つた。なか〳〵周到綿密なやりかたで、著者のみる處では、今後十年後にはこの高木家がやはり、アマゾン移民のトツプを進

トメアスー植民地ブレウ四區

小野太平氏

TAHEI ONO
C. P. 39 — Cooperado N.o 225
Belem — E. de Pará

原籍　宮城縣白石市福岡
渡伯　昭和三十二年一月　ぶらじる丸

依頼心の少ない、獨立自尊の強い拓人である。渡伯當時は戸田子朗耕地に就勞、長男浩道、長女妙子の二人は四ヵ年も奉仕、その代りに彼等夫婦は二年目から獨立さしてもらい、二千四百本の胡椒を自力で植えたという努力家である。現在は三千七百本に埓植しているが、今もつて伯人労働者も傭わず自家労力で農場を經營している。

と書くと、日本で純農らしく考えるが、そうではなく、日本ではもと野口社長が經營した東洋一の日本窒素株式會社に勤務朝鮮興南府の舍宅で安泰な生活をしていた。會社はアルミ工場肥料工場、石鹸工場、その他二十余種の綜合化学製品製造會社で従業員十万人そのため興南府は人口十五万に膨脹した。この安住の地で夫人は教師として勤務していた。彼は大東亞戰勃發で中南支戰線に出征、七十四連隊に編入して各地に轉戰した。頑健な体格、その上に責任感の強い人なので、自から進んで危險な使命を遂げたこともあつた幸い一命を拾つて歸還、酒田に駐在している時に終戰となつた家族は羅南成興府にいたので、すぐ歸還した。日本に復員後は進駐軍の警備兵となり、市井で活躍していた。轡て進駐軍に永く勤務出來ない事を考えて、アマゾン移住にふみきつた。

長男浩通（ひろのり）は今年二十八才であるが、白石高校卒業生で、卓球選手、渡伯當時は十九才であつた。長女妙子は二つ違い、中学卒業で渡伯した。兄妹の卒業記念帳や、渡伯記念帳に友人の贈語は「忍耐は苦、然しその實は甘い」とか「ブラジルの土を立派に耕して下さい」とかの激勵があり、二女公子のアルバムにも「今日なしうる事は明日に延ばすなかれ、フランクリン」の格言があり、この小野一家は自然とナマケル譯にいかなくなつた。その上に貞子夫人（仙台市立町出身）が、その名の如く貞節良妻で、早くから少女時代に朝鮮に渡つた女性で苦労人であつた。そのため今日育兒にも最大の注意を拂い、今は三女邦子、十五才になる末の幸子まで五人とも、實に禮儀作法が行きとどいている。仲睦まじい家庭で、如何に貧乏世帯でも精神的には文化生活の最右端をゆくという明るい家庭だ。

返済の出來ない金はどんなにこまつても借りないし、事業も見通しのつかない山師的仕事はしないし、紅葉におわれる谷間の秋清水の如く、清楚清浄の家庭である。こんな人柄の家庭だから胡椒栽培にも無理がない。ブラジル開拓生活も、トメアス1植民地戸田耕地を經て現地に移り、堅實な農場經營をつづけている。聰明理智な貞子夫人を中心に、この家庭は繁榮してゆくだろう。義弟櫻田公平が一九六四年逝去したのは、氣の毒であつた。五男四女の多くの子供をかゝえて、イビチンガ農場を經營していたが、病魔にはかてなかつた、今後は何くれと彼が相談役とならねばなるまい。明治三十八年五月二日己年生。

（右）四女幸子と治通君（左上）貞子夫人（左下）主人

に耐える青年をもつて、ブレゥ四區の大密林の開墾に主力を注ぎ一千本の胡椒を植え、遂に一年半後には漸く三瓩半の収穫を得た。これに勢づいて、六ヘクタールを開拓、一万三千本を植え六年目に三十余トンを收穫した。そして彼の訪日となり、三男二女が結婚すると同時に、農場を二十ヘクタールに擴げ、二万四千本の胡椒を滿植した。やがて自分は二男整を連行し、サンパウロに出て商業界に進出これを二男に管理させ、今年からバイア州の椰子樹栽培に邁進するに至つた。椰子樹の實は、化学工業の盛んになつた今日は、バターの原料、菓子の原料など食料品から、機械油等の工業油の原料にもなり、またポマードの化粧品の原料など、その用途の範圍は六十余種類に及んでいる。まだ〳〵應用化学の發達で用途は擴がるだろうが、前途は益々有望である現在も工業家はその原料不足で惱んでいる位であるから、彼等事業の前途は明るい。

自 動 車 修 理 工 場

財的方面の大飛躍と共に、彼等の家族も人的に膨脹した。長男哲夫は宮川茂七妹繁子（聖州マリリア生れ）を娶りくみ子・誠也・よう子・健二、恵子の五兒出生、二男整は日本から呼寄せた有働武寛令孃鈴子を娶り、孫秀和出生、長女美佐子はブレゥ一區田中次男弟田中正雄に嫁つぎ、良一・勉・まゆみ・八千代出生、三男克行は二男整の嫁鈴子の妹房子と結婚、末子のさき子は日本から父が連れてきた吉田四郎と結婚して孫清一に恵まれている。追懐すれば、獨立早々は資金もなく、一年分に當る僅かな主食糧品と、千本の苗と、主柱だけを持つて背水の陣を布き入植した。これが一年半後に三キロ半實がなり賣却金が今日の資財の源になつた譯である。今後十年も經てば巨億の富がつまれるであろう。切にその日の近づかん事を著者も望んでやまない。清人（明治四十一年三月十五日生）哲夫（昭和六年九月二十五日生）克行（昭和十二年九月七日生）吉田四郎（昭和十二年三月一日生）

一九六〇年訪日中墓參の高木清人氏夫妻

トメアスー植民地ブレウ四區

小川金四郎氏

原籍　愛媛縣松山市松前町五ノ六
渡伯　昭和三十年五月　あふりか丸

KINSHIRO OGAWA
C. P. 39 — Cooperado N.o 172
Belem — E. de Pará

彼は實によく働く拓人である。處が活動家の彼以上に次弟平（ただし）はよく働く青年である。次弟平はアグア・ブランカ區山形縣人設樂市太郎長女と結婚、設樂耕地胡椒一万五千本の管理を引受けている。伯人の使い方も上手だが、自分自身軀を動かして模範を示すので、伯人勞働者もナマケル譯にいかない。人間機械に相應しい揮名の青年である。末弟平任（ひらお）は、この次弟平以上以上の活動家で、今はサンパウロ市に轉じイピランガ區シルバ・ブエノ街でクリーニング店を經營している。一九六三年伯人洗濯店を購入して開業したが、伯人經營時代より得意先が二倍もふえ新婚のひろ子夫人も協力、オックスハーゲン車で配達するのに間に合わない位、多忙を極めている。全く三人ともよく軀の動く人達である。

彼は父金次郎、母くまよ兩親の五男に生れた。舊制松山中學校卒業後大東亞戰爭勃發、戰線は大南洋まで擴大されたので、彼は學徒動員として志願した。國家奉公の情熱をもやした戰爭も、遂に慘敗に終つた。彼は歸郷し、終戰直後は松山地方裁判所事務員となり、勤務していたが、軈て九州に本社のある商社に轉勤した、恰度その頃、弟達も成人した。五男・六男・七男の彼等三人は、自由奔放の境遇であつたので「海外に出てみようか、三・四年働らいて悪かつたら、戻つてくればよし」という譯で、三人共に海外進出に共鳴、善は急げとばかり、渡伯の手續をして、昭和三十年五月トメアスー植民地アライア區澤田穀耕地に入植した。

入植してみると、澤田穀耕地には田中次男・松永十四雄・岡田義明・宮川茂七・宮川正信・中川春藏、善淸次等その他數十家族の新移民が就勞し、一・二年後にどし／＼獨立してゆく姿をみて、俺達もこのままではいけないと、ブレウ区の一劃に小川耕地の土地を獲得、大密林を燒拂い、遂に開拓に着手した。澤田耕地には在住一年半であつた。

あれから、恰度八年半、渡伯してから本年は滿十年目である八千本のピメンタは成樹となり、二十五・六トンの收穫をあげている。入植當初の仮小屋もせまかつたので、住宅も新築し、一九六四年にはジープも購入、トラクター、貨物運搬自動車、除草耕耘機、消毒自動散粉機、十二馬力の電力發動機等農場の設備を完成、ついでに住宅、乾燥場の電化をはかり、台所には冷藏庫をすえ、飲料水、ビールは云うに及ばず、白馬・スコッチ・ジンなど高級ウイスキーがならんでいる。

農場建設の當初二・三年で弟達が獨立した時が、一番つらかつた。と云つて獨立していく弟達を引止める譯にいかなかつた幸いみよ子夫人が弟達に代り、男勝りの働きをして協力してくれたから、今日の地位を求めることが出來た。夫婦の間に長女照美、二男太郎が健在、長男明は早逝した。昭和二年十二月六日卯年生。（寫眞右端は使用人）

HARUZO NAKAGAWA
C. P. 39 — Cooperado N.º 156
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ四區

中川春藏氏

原籍　岩手縣柴波郡赤石村
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

彼がお客と話している聲は、四・五十米さきまで聞こる。祕密な話しをしても、勢づくと聲が大きくなるので、内緒話など出來ない人である。父金兵衛、母いさ兩親の二男に生れた。長男たる兄金次郎は壯年で逝去、その息子伸一を渡伯する時に連れてきた。彼は日本で「馬クロ」が本職で、馬の本場盛岡市を中心に、日本全國を股にかけて飛び廻つた。事業が隆盛な時は印半纒の前襟に「中川馬商」と屋號を入れ、その信用は絶大で多いときは何百頭も一時に取引した事があつた。この仕事は信用がなくては出來ないし、それに全國各地の「馬クロ」の有志とも懇意でなくては出來ず、むづかしい商賣であつた。

戰前はよかつたが、この職業も戰後總べてが機械化され、農村は耕耘機、都會は貨物運搬自動車が發達してきて、馬を使用しなくなつてすたれた。戰時中あれ程多くの馬を賣却し、日本通運株式會社と取引した彼の商賣も、戰後段々とさびれていつた。そこでその將來を考え、二・三男對策のため、ブラジル移住を決心し、アマゾンに永住地を求めた。時に四十三才の厄年であつた。

彼の考えは當を得ていた。渡伯するやトメアスー植民地アライア區澤田毅耕地に就勞した。耕主は熊本縣人で苦勞人、獨立の意志に燃えていたので、耕主の理解で八ヵ月後には早くもブレウ四區の大密林を燒拂つて、開拓の途に就いた。大木が燒拂われた後の灰に、熱帶特有の酷暑が襲つて、荒山開拓の仕事は辛酸なものであつた。その頃は、近隣も新移民獨立組で、前陣を爭つて、胡椒栽培に邁進していた。余りに夢中になつて、陽のくれるのも忘れる人もあつたくらいだつた。近隣でも羨やむぐらいに事業は伸展していたが、不幸入植翌年（一九五六年）にあさの夫人が腦溢血で斃れた。逝年三十九才の若さであつた。

入伯早々の災難で落膽、事業にも一時手がつけられなかつたが、日本出發の想い出にふけるとそのまま萎縮している譯にいかず再建の意氣にもえ勇往邁進、遂に一万本のピメンタを滿植することが出來た。そして彼も千代子夫人と再婚し、秋風悲しみにとざされた家庭も、春風たわむれ、陽光は射し、なごやかな生活を迎えることが出來た。十二才で渡伯した長男昌三も二十三才の青年となり、耕地の管理に奮斗している。二男清一、三男三男（みつお）伯國生れの長女いく、四男良一など健在である。上の三兒が成長したので、後顧の憂がなくなつた。そして農場の機械化をはかり、貨物運搬自動車、トラクター、耕耘機などを完備させた。

渡伯のとき、一緒につれてきた甥中川伸一も、岡山縣人杉林造二女多津江を娶り、近くで耕地を經營している。伸一が三才のとき父金次郎が死亡したので、彼が引とつて育てた甥であつた。中川家はどちらもブラジルで繁榮したから、移住の目的を貫ぬいた。目出度いことだ。大正二年一月十二日丑年生。

SHIN-ICHI NAKAGAWA
C. P. 39 — Cooperado N.o 222
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ四區

中川伸一氏

原籍　岩手縣柴波郡赤石村
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

彼の父金次郎は、彼が三才の時に早逝した。一人息子の彼は、叔父中川春藏（父金次郎の弟）の家庭で育つた。だから父金次郎は喩の父であつた。

叔父春藏は馬グロで、多くの人逹を相手にする商賣であるから豪放磊落な時があつたり、或いは質實剛直な處があつたり、その日によつて伸縮自在であつた。この叔父は向みづで物事に躰當りする冒險性もあり　ここで育つたので、彼も自然と社交性にたけ明朗濶逹の人柄となつた。社會に生きるのは共存共榮でなくてはいけないと悟り、社會と自己のつながりをよく考えるようになつた。終戰の時が小学校を終えたときで十四才、軈て文部省の学校改革案で六・三・三制となり、彼も義務教育の新制中学校に入学・そして三ヵ年後に卒業した。農業に従事しているときに、恰度叔父がアマゾン移住を決心したので、それに同行してアマゾンに永住するようになつた。

渡伯は彼が二十四才のときだつた。配耕地トメアスー植民地澤田毅耕地に入植している内に、叔父春藏は早くも八ヵ月目に獨立した。彼は澤田耕地に殘されて三ヵ年奉仕した、耕主澤田毅は温情豊かな人物、彼が忠實に働らいてくれるその誠意に對し、出來るだけの援助を惜しまなかつた。この澤田耕地三ヵ年間に、岡山縣人杉林造長女多津江と結婚した。新婚の多津江夫人は、十九才で渡伯、弟がなくて妹ばかり五人、長姉としての責任感つよく、よく兩親に孝養を盡した女性で、しかも彼が新制中学出身に對し、夫人は岡山縣立新見高校（新制）卒業後、すぐ渡伯したインテリであつた。この若き新星賢夫人を得た彼の得意や思うべしで、羨やましい限りである。

彼はここで澤田耕地を退植、岳父杉耕地の建設に邁進、女手ばかりの同家のため總べてを捧げた。日本時代に商業界で活躍した岳父杉林造は理解ある人物、また義母久子夫人は質朴清楚な女性で、彼に對しても我子のように待遇した。そして一年後には現地の再生林地帶を伐採、ピメンタを栽え、今日は六千本になした。獨立して滿六年目である。愛妻多津江夫人との間に長男光幸、二男政幸、長女ゆみ子、二女ふみ等が健在、胡椒の生産量の增大と共に、子女の成長を樂しみに努力している。叔父中川春藏もトメアスー植民地有數の耕主となり、一家円満である。但し彼を育ててくれた叔母あさのが、一九五六年三十九才の若さで脳溢血で病歿したときは、我を忘れて悲しんだ。三才の幼児時代から可愛がつてくれた叔母だつたが、今は亡き靈の安ならんことを祈つている。

岩手縣は面積廣く、その割合に人口少なく、海外熱が隣りの山形・宮城・福島に劣つている。この際に是非岩手縣出身者として將來アマゾンで名を成し、亡父金次郎の靈前にひざまづいてもらいたい。好漢自重を祈る。昭和六年十二月三十日未年生

トメアスー植民地ブレウ四區

久保信男氏

原籍　宮崎縣西諸縣郡加久藤村
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

NOBUO KUBO
C. P. 39 — Seção Breu
Belem — E. de Pará

當時二十五才になつた信男は、まだ獨身で、出稼に行く身であつた。北海道で生れ、幼兒で南洋パラオ島に移り、大平洋の孤島でスク〱育ち、小学校はパラオ小学校であつた。パラオ島で父は南洋拓殖會社に勤務、パイナツプル栽培の旭植民地にいた。父は樂しそうに働らいていたし、やす子叔母（ブレウ四区林利雄夫人・父の妹）も毎日忙しそうに立廻つていた。小学校を卒業する寸前大平洋戰争が勃發、子供心にも日本の勝利を喜こんだが、二年後にほ、サイパン島をアメリカに占領されてから、日本は敗退した。樂しかつたパラオ島も空爆で燒野原敵中の孤島となつた。島は食糧缺乏、作物を耕作するにも空爆がひどく、不可能であつた。榮養失調の悲しい生活が續き昭和二十年八月十五日を迎え時に滿十五才であつた。

あれから宮崎縣の開拓地に移轉したが、少しも生活はよくならず、希望なき野良犬の如く、毎日々々出稼生活でくらしていた。然しもう二十五才となり、その將來の事を考える焦燥の氣が胸に襲つてきた。恰度その時であつた。叔父林利雄がアマゾンに移住したいので、その構成家族員が必要だから、誰か一人同行しないかとの事で、悶々の日を過ごしていた彼は、大南米ときいて心うきたち、妹光子と共に、同伴することにした。信男の兄弟姉妹は、長男一郎、長女はる、二男信男、三男政男、二女光子、三女ささ子で、父勇も二男の信男と二女の光子の二人ぐらい、海外に出てもいいと許した。彼は血潮が高なり、二十五才の青春をもてあます頃で、妹の光子は漸くはな恥かしい十七才の蕾が咲きかけた頃であつた。叔父と共にトメアスー植民地澤田哲耕地に入植した。そして物堅い叔父と共に三カ年間ここで就労した。その三カ年間に、叔父は日曜・祭日のひまをみてブレウ四区の耕地建設に通い、遂に叔父は獨立した。彼はその後に澤田耕主の懇望により、もう三カ年も勤務、都合六カ年奉公した。澤田哲耕主は產業組合涉外理事で人情深い人であつた。妹光子は渡伯四年目にイビチンガ区深水締吉弟昭吉と結婚した。彼も同年（一九五九年）八百本の胡椒が植えてあるブレウ四区の伯人耕地を購入し、それを二千三百本の成樹に增やしてから、一九六一年移轉した。

その間に澤田耕主や、叔父の援助で、鳥取縣人永田正平（トメアスー港で雜貨商）長女えみ子を娶り、既に春美・浩美・君男の一男二女が出生した。渡伯してから滿十年經つた。叔父は立派な耕地を建設したが、彼等はこれからである。獨立して滿三年半にしかならない。然し午年生れの駿馬であるから、今後は物凄く飛躍するだろう。日本におる父勇も、彼の健在を遠くから祈つているはずである。北海道・南洋・宮崎・アマゾンと七轉八起の運命に幸あれと祈つて筆をおく。昭和五年二月二十五日午年生。（右）寫眞右端は主人と夫人の弟、左端夫人の妹（左の寫眞）長女春美と二女浩美

トメアスー植民地ブレウ四區

伊藤斌（たけし）氏

原籍　山口縣萩市山田區小原
渡伯　昭和二十九年六月　あめりか丸

TAKESHI ITO
C. P. 39 — Cooperado N.o 137
Belem — E. de Pará

北パラナ・アサイに山口縣大津郡三隅町出身田村勇人は、稀にみる篤農家で、著者の親友でもあるが、この田村勇人が訪日した時に彼は面會し、同氏の話しで渡伯を決心、アマゾン移住に踏切つた。時に三十一才人生最も油の乗切り盛り、活動力旺盛で、宇宙を一飲みする位の意欲でトメアスー植民地岡部孝耕地に入植した。家族は夫妻二人に長女惠子、それに幸子夫人の弟斉藤啓一（十六才）の四人であつた。それから後に、父秀一、母みつ子二人が渡伯した兩親は長男斌が立派になつたので、一九六三年に日本に歸つたが心配なく、生地でくらしている事であろう。

山口縣は海外熱が旺盛であり、在伯同胞随一の土地成金上利新吉（百億円）を始め全伯的有數な成功者も輩出しているが、不思議に萩市からは出ていない。昔しの城下町で長州武家の流れをくみ、郷土愛が強いので、なか／＼海外に移住しない。南伯サンパウロ方面でも中原兄弟位のもので余りみうけない。萩市出身で長年山口縣知事をした衆議院議員小澤太郎は、ドメアスー植民地を訪づれたとき、特に彼と郷里を同じうしたので、激勵の言葉を贈つて別れた。彼はなか／＼責任感の強い人物だから小澤知事の言葉に添う事が出來るだろう。

彼は陸軍經理学校を卒業したので、大東亞戰争にも、戰線に出征せずに濟んだ。それで終戰まで、經理の事務に従事していた。前記の田村勇人の話をきき、昭和二十九年九月渡伯、岡部孝耕地に入植した。隣地の山田淺吉拓人と一緒に入植、山田淺吉は一年で獨立したが、彼は三ヵ年も同耕地に在住した。あの頃は、入植耕地に一年いて、大方は獨立するものだつたが、彼はよく三ヵ年も辛抱した。そして三ヵ年就労の間に、日曜・祭日や農閑期をみてブレウ四区の大密林を伐採、開墾してピメンタを栽培した。これで獨立は安全と思う頃に、移轉した訳である。今は全耕地六千五百本も植え、二十トン内外の收穫をあげている。そして今日まで協力してくれた義弟斉藤啓一も、ブレウ四区瀧田余慶耕地の隣に斉藤耕地を拓ぎ、ピメンタ三千本を栽培している。伯國にきて生れた長男ジョージ、二女のり子と共に一家五人くらしでめる。大正十二年三月三十日亥年生。

一九六一年兩親歸國記念

ASAKICHI YAMADA
C. P. 39 — Cooperado N.o 117
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ四區

山田淺吉氏

原籍　愛知縣碧海郡知立町西中新林
渡伯　昭和二十九年六月　あめりか丸

茨の道を踏み越えてと云う文句があるが、この人によく當はまるようだ。渡伯したのが昭和二十九年六月五ヵ月後には、長女千鶴子が產後の病氣で、赤子芳樹を遺して他界した。女婿一柳茂雄も落膽したが、狂氣になつたのは愛孃を喪つた夫妻であつた。岡部孝耕地に入植して、アマゾンの風俗習慣も解らない頃の災難で、全く哀悼の限りであつた。其の後今日まで兩夫妻はお經をあげて、故千鶴子の冥福を祈ると共に、孫芳樹の育兒を千鶴子に誓つている。悲歎の一ヵ年も過ぎ無資本にかゝわらず、ブレウ四區の大密林を拓き、蔬菜を栽培して販賣、その僅かな利益で、生活を支え、あれから滿十年後には、遂に一万本の胡椒を栽培し、まだ幼樹も多いが、二十トンの生產をあげた。入植當時は家族的にも労働力がなかつた。長女死亡、二女美枝子（坂上勉夫人）三女惠子（一色徹夫人）と上が女子でその次が長男英樹で當時小学校四年生で十才であつた。末子昌樹が六才で、これではいくら頑張つても、開墾は無理であつた。その無理を押しきつて遂に今日の榮冠を握つたのだから「徒手空拳」をもつて自己の信念を貫徹さした人物として推賞したい。ここまでもつてきたしげ夫人の內助の功は、涙ぐましいものがある。一九六一年マラリヤ病流行のときも、罹病し床にいたが、いつも案ずる一家の經濟に、床より日常の事情を訊ねたと云う程、家內の主柱であつた。

彼は安城農林学校出身で農聖山崎延吉校長の薫陶をうけた。卒業後に大日本人造肥料株式會社、日本化成株式會社、最後に石原廣一郎社長の石原產業KKに勤務、三重縣四日市にいた。だから渡伯の旅券は三重縣になつている。會社勤めをやめ、鈴鹿市で商業に敏腕を揮つているときに、マーケットが火事にあい、彼も全燒の厄にあつた。旧高女出身の夫人に、農林高校出身のこの家族は、ここにブラジル移住に轉向し、遂にアマゾン・トメアスー植民地に入植した。

入植早々の不幸は涙の限りであるが、その後に粉骨砕身、精神力は應年の学生氣分をとりかえし、今日みるような模範農場をきづきあけた、もうこれからは軌道にのつた汽車と同じで、經濟的飛躍は目にみえている。彼は渡伯前にベルナンブコ州に鑛石の採集があり、これを工業化しようとの話で、神田雷藏博士（アマゾン河の著者）も同意し、奥アマゾンの事業家中島敏三、牛田次郎等も發起人として大いに乘氣だつたが、それが駄目になり、運命のサイコロが急轉しトメアスー植民地に入植したのであつた。幸い今日は農場に必要な貨物自動車やトラクター其の他一他の機械類も完備した。そして嫁づいた二女美枝子も、三女惠子も幸福な生活に浴している。元氣旺盛の青年英樹が耕地の管理、昌樹は中学校に通つている。切に晩年の幸福を祝したい。明治三十八年四月二十三日己年生。

（右から）坂上勉孫芳樹、夫人、二女美枝子、三女惠子、二男昌樹、主人と孫達（左）長男英樹君

TOMOYOSHI TAKIDA
C. P. 39 — Cooperado N.o 191
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ四區

瀧田余慶（ともよし）氏

原籍　福島縣田村郡中田村
渡伯　昭和三十年十一月　ぶらじる丸

青年時代に東京都目黒寫真専門学校（現藝大）を卒業し九段の野々宮寫真館で實地に就き技術を磨いた。東京一の野々宮には、當時九十人程寫真技術師がいたので、彼も大いに得る處があつた。その寫真技術が、今日ブラジルに渡つてから、大いに役にたち、瀧田農場ピメンタ樹五千五百本はこの寫真を撮つて廻つた純益が投資されている。トメアスー植民地——いやトメアスー郡にはたつた一人の職業寫真屋もいない。だから一人ぐらい寫真屋がいてもいいのだ。彼は一九六五年度から本腰になつて寫真館を開業した。これは彼だけが儲けるだけでなく植民者にも嬉れしい事である。

彼は共存共榮の精神にとみ金錢的にも恬淡だ。尊大ぶらず、頼まれた事は、腰輕く要件を達してくれる。戰前ノモンハン事變にも参戰硝煙彈雨の中をくぐつてきたし、大東亞戰争のときは滿州に轉戰、終戰後はソ連シベリヤのホリョ生活も送り、いま生きているのは不思議な位で、人生最悪のどん底生活も味つた戰時中衛生部隊に入り、そこでレントゲン技術を修得し、多才多能な處を發揮した。操夫人は、その名の如く貞節な女性で、獨立當初、彼が植民地で写真とりして廻る間幼兒を育てながら多くの伯人を指揮して、胡椒栽培を滿植させた人である。手柄話しに話さないが、その涙ぐましい努力は、大いに賞讃していい。日本で小学校の訓導であり教え兒もブラジルに渡つている（ビジア街道の斉藤安正兄弟）夫婦ともブラジルに親戚は多く古關富彌元ベレーン總領事の兄林太郎夫人は、操夫人の姉であり、聖州リンス市の測量師瀧田森義は、主人の親戚に當る。親戚を頼つていけば、數々の仕事もあるのだが、夫婦とも獨立自尊の精神が旺盛で、依頼心少なく、貧乏しても他人を頼らず、初志貫徹の生活に浴しているのは偉らい。

ブレウ二区にいる篤農家武藤寅藏などと一緒に渡伯したが、彼は渡伯條件の家族構成員が不足していたので、不合格であつた。然し過去の略歴を照してみて、成績優秀、その上にレントゲン・写真などの技術屋でもあつたので、アマゾン移住者として特別に許された。トメアスー植民地に入植、阿部昇耕地で三カ年を送り、それから夫婦して筆舌に盡しがたい辛酸苦労をなめ、今年でアマゾン生活滿十年、到々立派な農場を建設した。誰れより郡内の地圖をよく知つているは、農場建設の資金を稼ぐため、單車で郡内を駈廻り、写真をうつして歩るいたからである。

六才で渡伯した長女とし子も成長して中学校在学中、成績抜群である。長男勝仁、二女いつ子の小家族である。「池田さんみたように、奥アマゾンに行つて藝術風景映画を撮つてみたい。特にインヂオの生態を撮りたい」と念願している。藝術的香りの深い人だから、必ず宿望を達するだろう。大正五年十二月二十日辰年生。

（右）家族一同（左）寫真暗室

トメアスー植民地ブレウ四區

善　清次　氏

SEIJI ZEN
C. P. 39 — Cooperado N.o 132
Belem — E. de Pará

原籍　福岡縣浮羽郡御幸町
渡伯　昭和二十九年十二月　あふりか丸

純朴な農村人で、飾り氣のない人柄である。渡伯後徒手空拳で、一万一千本の胡椒園を建設したから、母ふじのも、一九六一年四月二十五日八十一才の天壽を全うした時は、心から安堵の胸をなぜおろし、後顧の憂がなかつただろう。彼もブラジルにきて實にいい親孝行をした。この点晩年幸福であつた。

十代の青年時代ば鉄工場で働らいた。兵役の義務に服し飛行隊に編入され、飛行機の機關部工手として精勤した。民主國家と違つて、往年の軍國主義の日本の事で、一寸でも部分品をお粗末にすると「天皇陛下の品物を何故粗末にするか」と下士官から、ビンタをいやと云う程叩かれた。世界一厳格な日本の軍隊生活を終えて、軈て帰村、そしてまた出征、今度は軍属に編隊された。日支事變からの長い戰争も、遂に一九四五年八月十五日で終戰、彼は當時朝鮮にいた。日本に復員し、福岡縣飯塚市三井鉱業株式會社經營の鴨生鉱業所の炭鉱に務めた。

既に年齢四十才を越え、七轉八起の我身の運命は一生貧乏生活かと思うと、殘念でならなかつた。敗戰祖國の十年間は、食糧難であり、勞資の爭斗は激化、何處でも總ストライキで人情紙より薄く、他人を瞞すぐらいは朝飯前、戰前軍隊生活で影日向なく精勤した彼には、この陰慘な社會が嫌になつた。もつと明るい社會で自由に自分の才能を伸ばしたいと考えても、東京京阪の都會も同じこと、中年の身を慨げいていた。そこえブラジル移民の再開、場所は自由の天地アマゾン大流河畔、彼等はこのときばかりとすぐ應募した。

時に彼が四十四才、長男一史（かずふみ）が十八才で、長女千代子、二男健輔三人で、手足まといがなく、開拓者として絶好の適任者、勇躍太平洋の波濤を越え、希望の地へ渡つた。

「お父さん頑張るよ」長男一史の聲であつた。母もブラジルを永住の地と定めて、彼等を激勵した。この一家協力の態勢で移住してから、トメアスー植民地澤田毅耕地入植後は、實に眞剣であつた。耕主澤田毅は二十代で兩親を喪い、少年幼女の弟妹を育てて堂々たる耕主になつた人情家、耕主の理解で、すぐ獨立の準備にかゝり、無資本で現地の大密林を焼拂い、胡椒を植えた。その代りに、長男一史以下は澤田耕地に三カ年間奉仕した。あれから滿十年後は、栽培胡椒一万一千本、二十五、六トンの收穫をあげている。

一九六四年には自家乗用自動車も購入した。農場に附屬する多くの機械類も完備した。長男一史はブレウ三區碓井文吉長女紀美子を娶り。長女千代子はブレウ四区黒澤勝馬長男正三に嫁づいた。二男健輔は伯人商人と共同で、農産物仲買業として活躍している。十年前鴨生鉱業所で我身をなげいた彼の境遇は、物凄く變つた。冷藏庫から取り出す高級ウイスキー、自動車で散歩と洒落る晩年である。確に彼のブラジル移住は有美に實を結んだ。明治四十四年十一月二十六日亥年生。

一九六〇年母健在なりし頃、同年銀婚式

HISANORI KIMURA
Caixa 342 - a/c Niponico
Belem — E. de Pará

ベレーン市郊外コッケイロ植民地

木村久則氏

原籍　熊本縣玉名郡横島村
渡伯　昭和二十八年九月　あふりか丸

サンパウロ日本文化協會長中尾熊喜は、彼の村落の出身で、單身十四才で渡伯し、遂に全伯有數の肥料工場を經營した立志傳中の人物であるが、彼の實兄木村一則も、奥アマゾンで中島敏三と共に、兩横綱と呼ばれる位の事業家である。兄一則は熊本セイセイ校出身高等拓殖学校卒業後二十一才で單身渡伯し、今日の大をなした人物で、牧場五千ヘクタール、牛六百頭、グワラナー飲料水工場經營、黄麻農場、果樹園、雜貨店とあらゆる方面に頭角を現わしている。

この兄の成功をきいて、實兄の呼寄で戰後第一回のアマゾン・ジュート移民としてベレンチンスに上陸した。處が不幸にも、一九五三年二月（昭和廿八年）の年は五十年來のアマゾン大洪水でアンデスの積雪がひどく、それが解け始めると雪崩は物凄く、その水がアマゾン下流へ擴がり、どの家屋も床上にあがり、ひどいのは軒下まで水浸となり、牧場は洪水に侵され、牧牛は移動するひまもなくて溺死した。彼等も黄麻收穫期で、終日水につかつて仕事をしたが、增水で腰、胸、肩まで上つて吃驚した。そこへ小鰐、スクリュー蛇、電氣ウナギ、猛魚ピラニアと云う惡魔が現われ不慣なアマゾン黄麻生活がいやになり、兄の諒解のもとに退植して、ベレーン市郊外コッケイロ植民地に入植した。同年には新移民の彼等のみでなく、四五十年アマゾンに住んでいる人々も恐怖したぐらいであつた。

彼は兄弟姉妹の一番末子で、六つ違いの兄一則は玉名中学卒業、彼は方面をかえて阿蘇農学校（舊制）を卒業した。学校卒業後間もなく、徵兵檢査を終つた二十二才の彼は、昭和十三年日支事變で、すぐ呼集され、北支方面に出征した。熊本師團編成で轉戰したが、軈て大東亞戰爭になり、ここで混成連隊に編入され朝鮮方面でも活躍した。まるで兵隊で青春をへらしたようなもので、硝煙彈雨の空も慢性になるぐらいであつた。一九四五年終戰、彼が二十九才のときであつた。

天眞爛漫な学生々活、純情一點張の軍隊生活を終り、日本に復員してみると、終戰後の日本は暗黑社會、人情は紙一重より薄くなり、しかも食糧不足で生活難、到々アマゾン第一回移民募集の聲をきき、それに應募した。

不幸奥アマゾンの生活は、スタートが惡かつたが、十八家族の第一回移民はみな立派な人ばかりであつた。今日ダハナンの熊本縣人森光勝太、マナウス市の羽田幸吉を始め立派に成功している。彼もコッケイロ植民地に移り、六ヘクタールの農場に胡椒を植え、一九六一年にはビジア街道に長男久敏（まさよ夫人は熊本縣人菊田氏長女）と二男賢四郎が耕地を拓き、五千本の胡椒園を經營、一九六四年には本耕地を養鷄場にした。健康美にあふれる長女まさえ・高德・明美以下皆子女は健在で、賢夫人の譽たかい愛妻に守られ、家庭はいつも明るい。久敏・賢四郎等によつてこの家庭は大きな飛躍をなすだろう。大正五年二月一日辰年生。（右）長男久則夫妻（左）繁榮する一家の集い

HISASHI ISHIKI
C. P. 39 — Cooperado N.o 239
Belem — E. de Pará

トメアスー植民地ブレウ四區

一色　壽　氏

原籍　長崎縣長崎市袋町
渡伯　昭和二十九年十二月　あふりか丸

　少しでも暗い事が嫌らいで嘘はいえない性格、農場の胡椒樹が、一木でも不揃であると氣になるし、計算をするとき一厘一毛でも間違うと、何回もやり直すと云う潔癖家である。よく考えてみると、彼の後天性がそうさしたのであろう。少年時代より満州で育ち、甲子園野球で有名な大連商業学校を卒業、満州銀行に入社、軈て満銀と朝鮮銀行が合併して満州興業銀行になるや、奉天市に轉勤、出納係主任に榮轉した。この銀行生活が長かつたから、この几帳面な習慣が身についた。大東亜戰爭の擴大で呼集され満州の曠野で轉戰、一九四五年八月十五日に終戰、家族は幸い昭和二十年日本に歸還。彼はソ連シベリヤに繋留、二ヵ年後に漸く祖國の土を踏んだ。銀行サラリーマン生活が長かつたので、戰爭中は難儀したが、これが心身の鍛錬になり、渡伯してからの役にたつた。復員してから田舎で農に就いていた家族を呼び、長崎市で飲料水販賣會社の會計部に勤務した。

　ふみ子夫人は、「奥さま」と満人から尊敬され、極樂のような生活をしていたのに似合わず、勤倹力行の女性、容器次第で円くもなり四角にもなる「卵」のように、伸縮自在の精神をもち、逆境にたつても落膽せず、貧乏のときは貧乏なりにあきらめて前進する性格である。主人を扶け、一色本農場と分農場（長男徹君管理）を建設した陰の功績は、ここに書くまでもない一度上流生活をした女性だから、教養もあり、禮節を知り、實にインギンである。長男徹、長女充子（のぶ子）二男光（あきら）は故德富蘇峯翁が名づけ親である。武藤實藏長女勅子も文豪が名づけ親であるが、故文豪とは著者も大正十二年東京大震災以來親しくし、戰後も何十通も翁から書簡をいただいた。文豪が名附親ときいて、特に親しみを覺えた。

　義理に堅く、人情にもろい彼は、トメアスー植民地細川實耕地に入植して、五ヵ年も辛抱した。他の同僚はみな一・二年で獨立、おそい者でも三年目には獨立したが、彼は周到用意で、獨立してからの不慮の天災を考慮し、經濟的に充分な安定を見さだめるまで、獨立をしなかつた。勿論その五ヵ年間に耕主細川實に忠實な良犬のように奉仕した。だから細川實耕主は十年後の今日でも感謝、まるで親戚みたように交遊している。この五ヵ間年に日曜・祭日・農閑期をみて現地開拓に邁進、遂に七千八百本の胡椒を満植、二十トン近くを收穫、その余勢をかつてブレウ一区園田耕地を一九六三年購入し、長男徹の管理下においた。同耕地は胡椒五千本栽培してある。そして徹も三重縣人山田淺吉三女惠子と結婚、もう孫裕治に惠まれている。長女充子は頴川龍夫と結婚、二男光、二女良子、三女惠子など健在である

　獨立後の發展は物凄く、一万四千本の胡椒園を基礎に第二期十年間の事業飛躍時代に移つた。如何なる手を打つか、夫妻の健在を祈りつつ期して待つ。明治四十三年七月十五日戌年生。

ベレーン市郊外アナニンデウア驛

中島弘人氏

HIROTO NAKAJIMA
a/c Kawachi: R. Dr. Malcher
Belem — E. de Pará

原籍　福岡縣大牟田市三川町
渡伯　昭和二十九年十二月あふりか丸

蔬菜園と胡椒園を經營、しかも弟孝義夫妻と仲睦しく、十ヘクタルの中島農場の發展に兄弟協力一致している質實剛健な拓人で、父由太郎、母はるゑは晩年幸福な生活に浴することが出來た。父由太郎は終戰後日本で野菜と果物販賣七カ年、漬物工場三カ年のあとにアマゾン移住にふみきつた。彼は三井染料株式會社工場に勤務し、二十六才のとき渡伯、サンタレン市外ベルテーラ・ゴム園に就働した。ゴム園の第一回入植者であつた。ベルテーラ・ゴム園は、北米の自動車王ヘンリー・フォードが一九二九年五百五十万ドルの大資本を投じ、八百万本のゴム樹を植えた農場であつた。接木法の失敗でフォードは伯國政府に、二百二十万コントの安値で賣却し、伯國政府は北伯農事研究所に管理させていた。アマゾンでは日本移民の受入態勢が整わぬうちに、日本側で物凄く移民を募集しどんどん送出したため、移民會社の辻小太郎は、やむなく一時しのぎにベルテーラのゴム園に邦人を入植させた。處が四回に亘つて百何十家族を入れたので、連邦農林省は、日伯移住協定に違反するものだと、退植を命じた。止むなくこの百家族を他に分散させたが、彼等は増元七太郎などと共に、リオ・ブランコ州に往くことになつていた。そのリオ・ブランコ州をやめてベレーン市郊外マリツーバ驛細田徳兵衛耕地の近くで、伯人農場管理人になつた。

これのリオ・ブランコ行を中止してよかつた。リオ・ブランコ州タイヤーノ植民地は今もつて交通不便、一緒に行つた三木佃以下の家族がいるだけで、皆退散してしまつた。彼はこの伯人耕地管理人時代に風土病で夫人を喪つた。翌年タバナン地區に移りここで松本正人（ベネビーデス在住）姉すみ子と結婚し伯人（テネンテ）耕地の管理人になり、一年半を過ごした。間もなく獨立して借地農生活、このときトマテ栽培で大いに儲かり、その次にレボーリヨで巨利を博し、この二年間の純益をもつて、アナニンデウアに十ヘクタルの土地を講入した。一九五九年度であつた。自分の土地の開墾は希望に滿ち、ピメンタ六百本を栽培、續いて野菜もよく賣れた。入植當初自動軍道路も惡かつたのを、邦人共同で、立派な道路もつくり、軈て住宅・倉庫を建て、一九六二年には貨物運搬自動車も講入した。ピメンタも三千本植えるべく、既に計画中である。

弟孝義も一九六三年十二月には、カパネーマ市熊本縣人松永一人三女圭惠（たまえ）と結婚した。弟孝義の協力でこの中島農場は益々充實したのであつた。彼も日本生れの長男博美も十六才、長女幸子も十三才になり、伯國生れの二男ジョージ、二女エレーナ、三女ジャネツテ、三祕ラウレアン、四女アラジラ等健在である。彼の渡伯は有終美であつあた。昭和三年九月二十二日辰年生。（上）は家族（下）荒山開拓當時の住宅附近

ベレーン市郊外コッケイロ植民地

石井泰治氏

原籍　千葉縣八日市場市
渡伯　昭和二十九年二月　あふりか丸

TAIJI ISHIY
R. Romas Bolente, 1186
Belem — E. de Pará

子供の教育に熱心であり、日本からの純農者のごとく、ガツガツした生活をせず、明るい文化生活に生き社會とともに共存共榮に生きる拓人である。そう云えば、日本にいたときは、千葉縣にある財團法人社會福祉学園「弘済学園」の職員であつた。常識に富み、視野が廣く絢子夫人も明朗で、交際してもなごやかである。ベンフイカ農場主增元良規夫人となつている長女清子も女子短大卒業のインテリ女性であり、日本に残してきた二女照子も、今は東京で電氣機具販賣商の石井秀彥と結婚、樂しい家庭を營んでいる。子供ば少なく二男二女で、末の二人の男はみなサンパウロ市の学校で勉强している長男章は高等学校、二男善治は中学校に共々通学している。農場にはたつた二人で悠々と生活している。日本にいても安樂に生活ができていたが、寅年生れの彼には現狀を打破して、伸びて行く覇氣が充分あつた。四十二才の厄年で、既に中年になつていたが、その頃の東京は、まだ復興したとは云え、朝鮮内乱が済んで、あべこべにナベ底景氣で、不況の暗黒世界であつた。第三次原子戰爭におびえつつある東京の社會道德は惡化し、犯罪は日增しに多くなつた。福祉事業に從つている彼は、その事がよく解つた。そこで伸々とした自由の天地で活動し、二人の男子にも民主的自由世界の空氣を味あわせようと、辻構想のアマゾン移住に應募した譯であつた。だから一摑千金を夢みて來た譯でなく、金儲もボツボツ貯るという考であつた

ベレーン市郊外の蔬菜移民として第一回生で、アマゾン移民としては、前年のサントス丸ジユート移民、アメリカ丸トメアスー植民地第一回移民、アフリカ丸マタピー・マナカプル・モンテアレグレ移民について、第四回目であつた。十一家族五十六人で、この年に辻小太郎は從來の辻商會移民部を改革してアマゾニヤ開發株式會社を創立して、移民事業を一手に引受けた

入植したのはコツケイロ植民地長谷川貞雄耕地、長谷川耕主は千葉縣人でトメアスー植民地第一回草分開拓者、ベレーンの親分と云われる程に、後輩を引立てた人情家、この耕地に入植し二年間彼のピメンタ園に働き、軈て近隣に獨立して三ヘクタルを拓き、三千五百本のピメンタを栽培した。彼がコツケイロ植民地に入植した頃は、淋しい開拓地であつたが、それから邦人がぞくぞく奥地から入植し、到々四十家族近くの邦人集團地となり、間もなく近所に伯人も住宅を建て、今日は住宅地域になつた。ここ二十年もすれば、あの農場は全部住宅地になり、今日の東京世田ケ谷區みたように、ベレーン市コツケイロ區になるだろう。財力が出來、ベンフイカ區增元耕地隣りに七千本の胡椒園も經營、本耕地には文化住宅を建て、十年にして渡伯當時の宿願を達した。悠々自適の生活をする夫妻が羨ましい。

大正三年十二月二十日寅年生。

（上）住宅（下右）二男善治

ベレーン市郊外ベンフイカ街道

御法圓龍氏

原籍　熊本縣飽託郡立田村上立田
渡伯　昭和八年八月　あらびあ丸

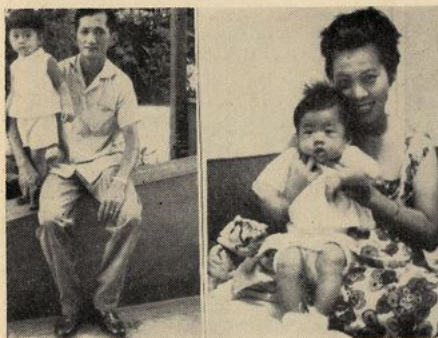
ENRYU MINORI
R. Dr. Malcher, 327
Belem — E. de Pará

何事でも、先端を切ると云う變り者である。父は上立田の實積寺の僧侶で、浄土真宗派、惜しいかな三十九才の若さで病歿、母は彼等四人の子供を連れ、四十四才のとき、守田末熊の構成家族となつて同行、トメアスー植民地に移住した。時に円龍は十五才であつた。父が生きておれば、僧籍を嗣ぎ、今頃は衣を着て「何無阿彌陀佛」をとなえている處であつた。

同航海者は武田武志・岡部孝・池谷藤一・菊地敏光等で、彼等はトメアスー植民地イビチンガ直營農場に入り、一年後に将來の見込みがないので退植、ベレーン郊外アルバーロ・アドルフ耕地（現在の北伯農事試驗所）に移り、炭焼きを始め、それを市内で販賣した。そして野菜も栽培した。ここに四年在住、漸くベレーン市近郊の事情が解りかけてきたので、コツケイロでペルー下りの川本清八などと一緒に、野菜作りを兼ねて、炭焼生活を四年間送り、そこから植物園近くのローマス區に移つた。ここで一九四二年八月の焼打事件に遭つて、到々もとの古巣トメアスー植民地に護送軟禁された。流轉生活八カ年はまるで夢であつた。そしてトメアスー港では製材所に働いた。

三カ年辛抱しているうちに、世界大戰も終了した。悶々の日を送つていたこの駿馬は、すぐ飛ぶようにしてベレーン市に出た。戰後ベレーン市進出の一番乘りであつた。軈てクチジューバ島の州有地に移つた。一九四五年十月のことで、警察署長モーラ・カルバーリョの紹介で、小川鎌一・木下又一等と草分入植者であつた。この島はもと重罪犯人を押込めた島で、當時感化院があつた。彼等はここに十二年もいたが、この篤農振りを、アッスンン州統領、エルメス・アマゾニア銀行總裁等が賞讃していた。ここに在住中、彼は北伯邦人として戰後最初の南伯視察をなし、スザーノ小山農場の自動散水機の研究をして歸村した。次弟馨はアナニンデウア地方に入植し、それから邦人が後續、今日の集團地になつた。弟吉明はベンフイカ地方の草分で入植、軈て彼はクチジューバ島耕地を、山口義行に賣却（弟香耕地は大川義則に賣却）してベンフイカに移るや、吉明はベレーン市に轉じ、タクシー業を始めた。然し一度大事業をやつたので小錢稼ぎのタクシー業は嫌になり、現在ビジア街道サント・アントニオ耕地を經營している。吉明は往年聖市郊外スザノ市南米銀行に勤務した事があり、なかなか伯語にも精通敏腕家である。サント・アントニオ耕地は二百ヘクタール（八ロツテ）現在四年生の胡椒六千本が植えてある。

戻子夫人は高拓一回生大石隆人長女で、日本生れ、昭和七年九月りお丸で祖母積山かず子、母秋子と一緒に幼女で渡伯した。夫妻の間にアベラルド、アデミー、ベラ・ルシア、ジュリエッタ、ボメロの三男三女がいる。末妹龍子は聖市に在住している。（右）吉明君（中上）戻子夫人大正七年十二月十一日午年生。（下）二男アデミール、長男アルベルト（左端円龍氏）

SHOYA MOTOGUI
Tv. Padre Entiguio, 1406
Belem — E. de Pará

ベレーン市郊外アナニンデウア驛

本木省也氏

原籍　福岡縣柳川市
渡伯　昭和十年六月　あふりか丸

南米拓殖株式會社々長福原八郎の實弟本木七郎の二男であるこの拓人は、長兄健一郎や弟洋三などが、ベレーン市で商業界に進出しているのと反對に、田園生活を好み、アナニンデウア驛の閑靜な場所に、十ヘクタルの本木農場を拓いて生活している。ピメンタ樹・アバカテ・コプンヤ（赤い椰子樹）マンガ・レモン・バナナ・アサイなど、其の他熱帯果樹を植えている。まるで植物園みたようであるが、その繁茂する一角に、しょう洒な家屋を建て、養鶏千羽を飼育している。十ヘクタルの果樹園なので廣大な面積、番犬も二匹いて、忠實に主人につかえている。

眞子（まさこ）夫人はアマゾンに住んでいる人とは思われない位い肌白く、清楚優美な麗人、生れはと訊けば新潟縣と答えた。道理で新潟美人が連想させられる。現在彼女の両親は東京都に住んでいる。一九五六年十二月日本から呼寄せて結婚し、在伯九年である。長男健太郎二男英二郎の愛兒に惠まれ、ロマンチックな常夏の夢をむさぼりつつ、平和な生活に浴している。應接間に入ると、書棚にぎつちり書籍がつまつている。毎月の新刊雜誌も四・五種類テーブルの上においてある。如何にも文化人らしい生活「主人は賭マージャンはやらんですか」と訊くと、とんでもないと吃驚する。アマゾンは南伯と違つて、農閑期が長いので、徒然の軀をもて余し、退屈しのぎに麻雀をやり、遂にこれが賭麻雀となり全アマゾン到る處、賭麻雀が盛んである。この賭事に彼が染らないのは、眞子夫人の趣味が、彼と一致して文化的方面のみに集中しているからである。聰明理智な夫人を得た事は、彼の人生を有意義にした。

彼は福岡縣柳川藩の出身であるが、生れたのは大阪市である父七郎は伯父福原八郎の呼寄せで、一足先きに渡伯していたが彼は六才のとき、昭和十年六月あふりか丸で母はつと共に呼寄せられた。同船者は野原啓太郎、野原丈兒、阿部昇兄弟、齋藤一兄弟、永井則勝兄弟等がいた。父は昭和九年七月渡伯して、南米拓殖會社カスタニヤ農場支配人として同農場を管理高知縣人片岡治義なども一緒であつた。同農場は昭和十年四月南拓が事業縮少のとき閉鎖したが、本木一族は同農場に踏止まつた。

一九四一年大東亜戰争勃發、一九四二年の焼打事件のとき、ベレーン近郊やサンタ・イザベル地方の邦人は、トメアスー植民地に立退きしたが、彼等は同農場にいてピメンタを栽えていた。終戰後ベレーン市に出て、弟等と商業に邁進、そして現在の生活に移つた。伯父福原八郎個人の土地もカスタニヤール、ベレーン郊外其の他數千ヘクタルもあつたが、大戰のため總べてを喪つた、甥である彼が反つて小規模ながら農場を所有しているのは、目出度いことである。大正十五年七月三日寅年生。

（右）眞子夫人と英次郎（左）主人と健太郎

MASATO MATSUMOTO
a/c Kawachi: R. Dr. Malcher
Belem — E. de Pará

ベレーン市郊外ベネビーデス郡

松本正人氏

原籍　長崎縣佐世保市
渡伯　昭和三十年四月　あめりか丸

在伯滿十年その間、前半六・七年は辛酸苦勞の限りを盡し、不幸の連續で天を仰いで、幾度か泣き、地にひれ伏して幾度か悲しんだ。その逆境の青年が、後半三・四年は、これまた盆と正月が一緒にきたような、目出度い幸運に惠まれ、自分ながら運命はこんなに七轉八起であるものかと吃驚した。現在の農場を購入したのは三年前であつた。この農場を購入するときは、まだ交通不便であつたが、六ヵ月後には農場の中心にブラジリア首都に通ずる國道十四號線が開通、しかもアスファルトの舗裝幹線である。そのため彼の農場の地價は一遍に十倍にはね上つた。そのお陰で、農作物の運搬も安樂であるし、土地も追々住宅地域に變貌しつつある。誠にお目出度いことこの上ない。

彼はビジア街道の篤農家赤尾敏、草刈長四郎、隣地の永田末次郎などと、三十九家族一緒にサンタレン市外ベルテーラ・ゴム園に入植した。處が連邦農林省は、ゴム園に邦人が雇傭として就勞することは日伯移民協定に違反すると、退園を命じた。ゴム園はフォード自動車會社が一九二九年五百五十万ドル投資して、八百万本のゴム樹を植えた農場だつた。接木法の研究不足で成績惡く、二百二十万コントスの安値で伯國政府に讓渡したもので、彼等はここにたつた二十日いてすぐモンテ・アレグレ植民地アサヒザール區に移動した。最初から彼等を入植せしめる目的でないので、入植準備も整わず、荒山も燒かれず、住宅はなし、やむなく日雇傭の道路造りなどしていたが、將來に希望を失ない、ベレーン近郊アナニンデウア驛土山耕地に移り、ピメンタ園管理人になつて　ここに三ヵ年辛抱した。

軈て土山耕地の近くで借地して野菜栽培をはじめ、ここに三ヵ年いて次にタバナン地區に移つた。この邦人入植の新興地帶はよく野菜が出來て、ここで大いに儲け、一九六〇年散水發動機を購入、一九六一年貨物運搬自動車を購入、一九六二年二百五十コントスで二十ヘクタールの現地を購入するなど、經濟的には大いに發展したが、一方家庭的には涙ぐましい事があつた一九六〇年父龜次郎がマラリア病のため腎臟病を併發し、十一月二十日五十九才で逝去、續いて母が一九六三年二月十九日には、膽石病に罹り父と同年の五十九才で逝去した。十七才で渡伯し一家の主柱になり、働いてきた彼は落膽し、遂にタバナン地域から退植し、自己の荒山開拓地に移つた。この地に移つて前記のように、幸運に惠まれ、ぐん〳〵事業は發展している。

兄弟姉妹は五男六女で多い。長姉藤子、幸子、みつ子は在日本、姉すみ子は中島弘人夫人、兄登はタバナン地域で弟武志と共同事業、妹榮子はトメアスー植民地山内堅太郎夫人、末妹やす子は彼と一緒、末弟稔は神学校、彼はトメアスー植民地岩間耕地在住熊本縣人四之宮貢長女しげ子と結婚した。二十七才の新人の活躍を期待する。昭和十二年七月四日廿年生。

（右）今は逝き兩親（左）夫妻の近影

MASAYOSHI TSUGAWA
a/c Yamada - Caixa 1019
Belem — E. de Pará

ベレーン市郊外ベンフイカ街道

津川正芳氏

原籍　北海道石狩郡當別村
渡伯　昭和三十二年十月　ぶらじる丸

石狩郡當別村と云うと、札幌市に近い。彼はこの地で、四十三才までいて、昭和三十二年十月ブラジル移住に踏みきつた。實に堅實な拓人で、現農場の經營もピメンタ成樹四千本、それ以上擴張せず、余力は野菜栽培に力を注ぎ、貨物自動車を購入して、長男繁之が卸販賣している。そして肥料も自給を目的に養鶏二千羽を飼つている住宅も立派な煉瓦家屋で農場は自動散水機、消毒自動撒粉機など、機械化の充實に力をいれているきく夫人も貞節の譽たかく、少年少女の教育の傍ら、畑に出て夫を激勵、大いに健斗している。毎日の生活を見ていると、少しの無理がない。こんな人物は、一攫千金の大飛躍は望めないが、一歩一歩前進してゆくから、二十年後長男繁之の時代になれば、物凄く發展繁榮すること間違いなしである。そうなれば結局津川家のアマゾン移住は、目的を達した譯で、有意義であつた。

彼はアマゾン移民の華、グアマ植民地第五次入植者であつた何故グアマ植民地がアマゾン移民の華かと云うと、北伯で水田が出來ぬのを、伯國政府の後援で、日本人の手によつて水田米を實らせる計画で、その連邦植民地は世人注目の的であつた。北伯農事試驗所長でブラジル農政經濟学の權威國立農業審議會長フリスベルト・カマルゴ博士が、低濕地開拓を試驗、少面積だつたが一ヘクタル當り六トン（百俵）收穫を得た。そこでアルバロ・アドルホ上院議員が、大々的に水田計画をなし、カラパジョ區八千ヘクタルの私有地を買上げ、これに三百家族の日本人を入植せしめる事を實行に移し、連邦政府から二〇億クルゼイロの補助金を得た。この尨大なる計画米作地に彼は入植したが、地形悪く、アマゾン増水期には床上までも浸水し、三四カ月も水浸し　これでは水田計画はおろか、野菜も栽えられず日常生活の收入もない逆境、到々邦人は移轉してしまつた。受入の研究が足りなかつたのである。彼もこの地に入植したが、先驅の第三次、第四次が皆移轉するので、心細くなり、營農資金を消滅しない間にと、各地を視察、恰度ベンフイカ地區の篤農家榊原健吉の世話で現地を購入した。だからグアマ植民地にいたのは、僅かに十カ月であつた。

現地に入植して、ピメンタを植え、野菜の成績良好、一九六四年地權も津川名儀に登錄した。北海道廳立ツキガタ高校卒業間ぎわで渡伯（十七才）した長男繁之が、農場を管理してくれるので一安心、長女れい子は隣地に住む徳島縣人木村昭夫に嫁づき、現在孫二人の母親になつている。二男勳、二女千惠子、三女美枝子、四女美智子等も勉学中である。父平吉は山口縣人、若くして北海道に移住した人物で、その四男に生れ、いずれ分家する身分であつた。この地帯はベネビーデス郡コレア地區と云うが、雜草一つない美しい立派な津川農場のある事を、著者は同胞として誇りとしている。大正二年十二月一日丑年生。

一九五七年神戸移住所前で渡伯記念

TOMIYOSHI TAKEDA
a/c Yamada - Caixa 1019
Belem — E. de Pará

ベレーン市郊外サンタ・イザベル郡

武田富義氏

原籍　熊本縣天草郡本渡市
渡伯　昭和三十年五月　あふりか丸

ベレーン市民が、今日のように新鮮な野菜を喰べられるようになつたのは、戦後に日本移民がアマゾンに來てからの事で、特にトマテの如きは、接木法栽培を編出してから商品となつて生産された。甘藍（レポーリョ）の如きもグアマ植民地に入植した第一回草分組が、試作したのがよく出來て、今日では一家族で三十トンとか五十トンとか生産するようになつた。また人参・茄子・胡瓜・西瓜・大根などの野菜は市場にも見られなかつたのが今日みえるようになつた。最後に養鶏もそうで十五・六年昔しは野生の鶏が産んだ卵を集めて、伯人が賣る位だつたのが、僅々六年間に邦人養鶏家が三四百家族に増え、一家族で一万羽飼う人でさえおり、市民は安價な卵が食えて幸である。熱帯地方で相當苦心をしなければ、野菜は出來ない。その野菜栽培の先端を切つているのが本編の武田富義である。

彼の渡航旅券は、福岡縣遠賀郡水巻町になつている。生地は熊本縣天草郡だが、渡伯前に日本炭鑛株式會社に勤務していたから、寄留地で渡伯旅券の申請をした。三十八才のとき、斜陽産業になりかけた炭鉱業の將來なきを見定め、ここにブラジル移住を決心アマゾン移民募集に踏切つた。この移住の計画は結果的によかつた。あれから十年後の今日は如何ん。長期の炭鉱ストライキで、世界史上有名な三井KK三川鉱でさえ、遂に閉鎖し、日本炭鉱史に残る有名な日鉄二瀬炭鉱も昨年涙をのんで閉山した。石炭事業は、現在石油に押しまくられた。全盛を誇る石油も四・五十年後は原子力に押しまくられる時代が來るだろう。榮枯盛衰は世のならい、斜陽炭鉱業に、早くみきりをつけた彼の先見の明を祝福したい。

渡伯するとき、長男英俊がまだ十一才だつたので、澄江夫人の弟藤野次男（十八才）を家族の一員として同行、トメアスー植民地澤田照男耕地に入植した。ここに一年いて、早くもベレーン市近郊に進出、コツケイロ植民地長谷川貞雄耕地の近くに移轉、トマテを主眼に野菜栽培をつづけた。在住一カ年、モエマ地域に移り、ここに六カ年在住、ここで毎回一万本以上のトマテを栽培、年三回で三万本、その間に總ゆる蔬菜を栽培した幸い純益は物凄く、貨物運搬自動車を購入し、そしてその勢いで、耕地を購入した。六年後にその耕地を淺野某に賣却、現地カスタニヤ街道に面した便利な場所に土地を購入して、一九六三年十月移轉した。現地はアスファルトの舗裝道路で遠くブラジリア首都への幹線に沿うている。

既にピメンタ成樹三千五百本を植えているが、ベレーン市から三十二粁、いづれ果樹蔬菜園として理想的な武田農場になるだろう。長男英俊・英昭・義則の三人は次代をつぐ日系模範青年、義弟藤野次男も健在である。大正八年三月十一日未年生。

右は家族一同、左は藤野次男君

ベレーン市郊外ベネビーデス郡

永田末次郎氏

SUEJIRO NAGATA
a/c Yamada - Caixa 1019
Belem — E. de Pará

原籍　長崎縣長崎市
渡伯　昭和三十年四月　あめりか丸

　長崎市に長く住んでいたので、旅券は長崎市であるが、生地は北松浦郡黒島村で、佐世保市の近くにある島が彼の故郷である。長崎縣はサン・フランシスコ・サビエルが四百年前日本に來て、舊教を宣傳してから本場となり、五島列島など全村カトリック教という珍らしい處もある。一帶にカトリック教信者は純朴であるが、三十才までカトリック教校に勤務していた彼は、特にその感が深かい。

　戰前は大村航空隊で、旋盤檢査員になり精勤。戰後は航空隊の廢止で三菱造船所に勤務した。正直一途で曲つたことがきらい、その上に勤儉力行の性格だから上司から信用されどし〳〵昇進していつたが、例の造船疑獄後、造船界の補助金停止となり、三菱造船所でも事業不振、彼等も收入減となつた。この折に戰後アマゾン移民再開募集の廣告をみて、大南米移住に踏みきつた。時に四十七才で、移住するには少し年寄つていたが、長男勝己が既に十五才となり、二男稔、三男義則の男達が成長すれば、すぐ勞働力が增大すると思つて、遂にアマゾンに渡つた。

　配耕先はベルテーラ・ゴム園、このゴム園に着くと、たつた二十日いて、農場を退去、モンテ・アレグレ植民地に移つた。ゴム園は伯人のみの就勞農園で、邦人が日雇人として働くことは日伯移住協定に違反すると、農林省の横槍で、急遽移轉となつた譯である。モンテ・アレグレ植民地も三・四十家族も邦人が急に入植する準備も整わず、彼等は天幕生活で、アサヒザール区の荒山に入つたが、どう考えてもその將來性がなかつた。そこで、いよ〳〵退植を決心、三カ月の後に、ベレーン市郊外アナニンデウア驛本木七郎耕地に移り、半年就勞した。そして次にアマゾニア銀行頭取の耕地に半年腰をおろし　ついでタバナン地区に半年と、ここ一年半の間に五カ所も住居が變つた。それ程に彼の運命は、未だ軌道にのつていなかつたのである。

　轉てカヌタマ地域に移り、ここで四カ年辛抱した。このカヌタマ生活で漸く地盤をきづき、松本正人が同航海であり、同縣人で、父上とも親交があつたので、同耕地の一劃を借地、ここで大いに儲け、遂に一九六四年に、ベネビーデス町から三百米離れた場所に、縱六六〇米、横三三〇米の農場をみつけ、これを購入してすぐ移轉した。今年は渡伯滿十年であるが、彼の開拓生活は實に辛酸苦勞であつた。然し十年後の今日は立派な永田農場をつくりあげた。

　長男勝己は伯人女性マリアと結婚して、日伯親善の範を示し孫ジェラールド、孫ジュゼーに惠まれ、既に独立している。二男稔は二十四才、三男義則、長女和子、四男ペードロ（伯國生）等健在である。海外發展の巨盤な長崎縣人として、今後も大きく伸びてもらいたい。明治四十一年八月八日中年生。

　寫眞は（右）勝巳夫婦（左）家族一同

ベレーン市郊外モエマ區

青柳健吾氏

KENGO AOYAGUI
a/c Yamada - Caixa 1019
Belem — E. de Pará

原籍　長野縣南佐久市平賀
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

十七・八才の時に燒野原の復興都市東京に進出し、タクシーをやつたという剛腹豪膽な男である。兄三四郎と性格は反對で、少々冒險家、獨身時代に奥アマゾンの都マナウス市から、北進してリオ・ブランコ州の首都ボア・ビスタ市を經て　ロライマ連山を突破、ベネズエラ國に密入國のコースを計画、邦人の少ない石油王國ベネズエラで大活躍しようと思つた。立案者の二人が先行し、道不案内とスペイン語の不通でノイローゼになり、命からがら歸伯したので、遂に石油王國への冒險旅行はやめたが、そんな猛猪的な行動をとる型であつた。今は家庭をもつて溫厚だがねー。兎に角ベネズエラ行の密入國をやらなくてよかつた。行つていたらどんな人生に轉落していたか解らなかつた。

トメアスー植民地細川悅次郎耕地に入植し、五カ月の後に兄がベレーン市に出たので、彼も一緒に移轉、モエマ地區邦人草分として辛酸苦勞をなめた。在住一年、サンパウロ市の繁華なことと、金儲けのいい話をきき、青春の血潮は高鳴つた。兄の理解ですぐサンパウロ市郊外モジ市コツケイロ區九粁の前田伴一郎耕地に就勞した。アマゾン地方と違い、毎朝暗い内に起き終日激勞、夕方はまた暗くならないと仕事はやめない。そして零細な金を貯金してゆく郊外の蔬菜生活、五カ月で愛想がつき郊外農業に見切をつけ、軈て都會の中心地に進出、リベルダーデ區のクランダ・チャイナース店に勤務し、人口五百万の國際都市の裏生活を研究した。世界百カ國の移民都市、人種展覽會場みたようなこの怪奇なサンパウロ生活にも、資本の必要を感じ、他日の再建を胸にふくめて、アマゾンに歸つた。二年半のサンパウロ生活は、海外生活のなにものかをよく知る絶好の機會であつた。大学六年の過程に必適する尊い教訓をうけて、モエマ區の兄耕地に就勞した。

アマゾンに歸つて一年半後に、獨立して農場を建設、富山縣人福田清二次女英子と結婚した。あれから粉骨碎身、獨立獨歩で、眞劍な農業生活四カ年、ピメンタ一千六百本を植えた。父正喜、母もとじ兩親の末子（五男）に生れ、自由奔放の性格も長男耕一郎が出生して、漸く父親となり、落ちつきが出來た。本當の開拓はこれからだ。今日までのブラジル生活十年間は、研究基礎時代であつた。今後十年間に、本當の自己飛躍の時代に進展すべきであると熟慮した。內助の功多き英子夫人の絶大な協力で、今日を礎いたが、今後は如何ん。

一度苦斗をつづけたサンパウロ市の生活に再びいどみかけるだろう。大南米第一の繁華な都市であり、戰前人口百万人から戰後五百万人に膨脹した新興都市で活躍するのも、面白いだろう。邦人も戰前在住者は僅かに二百家族、それが今日二万家族十万人もいるサンパウロ市、彼の活躍舞台の夢は大きい。好漢自重を祈る。昭和七年九月十日中年生れ。

TEIKYO FUKUSHIMA
a/c Takashima, - Caixa 65
Belem — E. de Pará

ベレーン市郊外モエマ地區

福島定（てい）強（きょう）氏

原籍　熊本縣菊池郡合志村
渡伯　昭和二十七年九月　あめりか丸

北伯アマゾン地方で合志村出身と云えば、すぐトメアスー植民地澤田四兄弟（毅・哲・昭男・孝）のおるのが、印象に殘る。彼は九州肥後人らしく、實に明朗闊達、嫌らいなものと　好きなものとの判斷は即決、グズ〳〵、ニヤ〳〵しているのがきらいである。いく子夫人も似た者夫婦で、物解りがいい。渡伯滿十年は過ぎた。滿十年間に福島農場は五千本のピメンタが栽培、養鷄四千羽も兼ねて、自給肥料で安定、その他に野菜を栽培している。ヤンマー・ジーゼルの發電機で自家發電の惠に浴し、貨物運搬自動車、自動耕耘機、トラクター、消毒粉散機、そして台所にはガス・フオゴン冷藏庫と、すべて文化生活に浴し、幸福な生活だ。この拓人が、渡伯した時は若冠二十一才の青年、それが裸一貫から十年の財産とは、驚歎するばかりである。

そしていく子夫人の弟村上太（ふとし）はタバナン地区で独立、福島縣人丹治六郎二女和子を娶り、五ヘクタールに養鷄三千羽を飼育している。一九六二年に独立させたが、躍進した。夫人の末弟村上洋（ひろし）は、ミナス州に進出、ポツソ・デ・カルダス温泉都市で、竹細工をなして大いに儲かつている。こうしてブラジルに渡つた若人が、十年後に大いに成功したのはうれしい限りである。そして彼も長女マリア絹子、二女小百合、長男幸喜の三兒に惠まれている。

彼は昭和七年の生れ、恰度滿州事變の勃發の年であつた。大東亞戰爭勃發のときは九才で小学生、終戰のときは十三才であつた。小学校卒業後、家事の手傳いをしていたが、戰後の物量不足な生活は悲しかつた。東洋各國に轉戰の派兵四百万人は復員するし、滿州・朝鮮・台灣・樺太・南洋の各植民地の在留邦人ば歸還するし、食糧難の日本は益々壓迫してきた。少年の定強にもそれが解つてきたし、青年となつて、自活してゆく将來を考えると悲しくなつた。

恰度二十一才のとき、アマゾン移民募集の話をきゝ、これこそ我が運命の開拓地なりと自から進んで應募、一家四人を構成して渡伯、ベレーン近郊アマゾニア銀行總裁ガブリエル耕地に就勞した。約七カ月在耕している内に、アマゾニア産業研究所出身の高島將元が、独立をすゝめ、彼の耕地の近くに原始林を斡旋してくれた。高島は現在商業界で活躍しているが、なか〳〵の才人、彼のよき指導で方針を誤まらず、いく子夫人の涙ぐましい協力で遂に蔬菜栽培で巨利を博し、そしてピメンタで儲け、養鷄で貯金は殖えていつた。滿十年目だから、訪日しようとも云つているが、それ程に財産は膨脹した。切に今後とも伸展してもらいたい。昭和七年三月十八日申年生。

寫眞は福島一家の近影

HIDEAKI KAKIHISA
a/c Yamada - Caixa 1019
Belem — E. de Pará

ベレーン市郊外サンタ・イザベル郡

椀久秀章氏

（かき）（ひさ）

原籍　熊本縣天草郡木渡市
渡伯　昭和二十八年一月　さんとす丸

丙午の生れで、この駿馬は實に明朗、過ぎ去つた事をクョ〳〵しない諦観は徹底している。碁を圍むときは、心から熱中、彼はこの趣味に生きることを、老後の唯一の樂しみにしている

旧制天草中学卒業、若い頃は一時叔父の茶園を手傳つた。渡伯前は縣庁商工課に勤務していたが、普通の職員では出世も出來ず、遂にアマゾン移民募集があつたので、それに應募、戰後第一回の移民として渡伯した

彼がブラジル移住を決心すると、同僚は吃驚した。「別にブラジルまでも行かなくてもいいじやないか」と勸告したが、一度決心した彼の意志は堅かつた。

第一回の移民船さんとす丸は、貨物船を急に移民船に造變えたもので、航路は戰前のアフリカ廻航であつた。開拓者としては四十六才の年輩で、少々年をとり過ぎていたが、長男博が健在なのでそれを頼りに移住した。ジュート移民だつたので、奥アマゾンパレンチンに十八家族五百人が着き、彼は熊本縣人木村一則耕地に就勞した。木村一則は第一回高拓生、なか〳〵努力家で高拓生の中、拔群の成功者であつた。彼は耕主の弟久則などと一緒に河中に浸つて黄麻作業をしたが、その年はアマゾン五十年來の大洪水で、水は床上にあがり、ひどい處は軒下まで漬つた大牧場は水浸しで數万の牛が溺死した。黄麻作業も腰、腹、肩までつかつてやつたが、もう出來なくなつた。その上に小鰐、スクリユウ蛇、電氣ウナギ、猛魚ピランニヤなどがいて、熱帯地方に不慣な彼等は、この作業は苛酷であつた。それで三ヵ月で中止し、木村耕主と話合つて退植　ベレーン市郊外アナニンデウア驛伯人耕地の管理人になつた。

悠長な生活一年後に、借地農の野菜栽培を二ヵ年半續け、それから航空隊飛行場脇きで、また數年を送り、一九六〇年現地に入植した。現地に在住五ヵ年、ピメンタ成樹二千五百本を經營し、トマテ栽培を毎日八千本ぐらいやつている。

渡伯して滿十二年になつた。その間に長男博はカパナネーマ市今野氏令嬢ひで子を娶り、孫やす子・けい子・よしえに惠まれている。長男博も父に似て質實剛健である。追懐するとアマゾン移民十二年間に色々海外の事情が解つた。運の悪い人もおるが、やはり根氣よく頑張ることであつた。海外生活は先輩も後輩もない實力の世界である。彼と一緒にパレンチンに入植して無一文で出耕した同縣人森光勝太は、いまやベレーン近郊有數の養鶏家にのしあがつた。羽田幸吉はマナウス市邦人中の大商人になつた。そしてこれ等成功者が相變らず、昔し無一文だつた貧乏時代と同じく、仲睦じく交際している。實に移民社會は平和である。四十六才で移住した彼は、本當に移住してきてよかつたと思つた。晩年幸福な家庭に浴したからである。明治三十九年六月十五日午年生。

（右）碁を樂しむ主人（左）立派な農場と家族一同

SANSHIRO AOYAGUI
a/c Yamada - Caixa 1019
Belem — E. de Pará

ベレーン市郊外モエマ區

青柳 三四郎 氏

原籍　長野縣南佐久市平賀村
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

父正喜、母もとじ両親の二男に生れ、五男の末弟健吾を連れて渡伯した、長兄正一が家を嗣いで、先祖代々の墓を護つている。

大東亞戰争が勃發したのは滿十九才の時であつた。軈て現役兵として呼集され出征した。高知部隊と編成して、支那大陸に轉戰したり、と云つて比島作戰にも參加、また佛印方面にも激斗した。終戰までによく數々の硝煙砲彈の下をくぐつて、戰死しなかつたのが不思議なくらいであつた。青春の命をかけた大東亞戰も四カ年の後に力盡き敗退、彼も劍を棄てた。そして日本歸還を熱望したが、まる一カ年間は南方にいて復員はおくれた。そして結局五カ年の國家奉公の生活を終えて歸國、懐かしい故郷に還つた。

故郷の山川草木は懐かしかつたが、終戰直後の日本の生活は慘めであつた。人口過剩、食糧難、勞資斗争、道德的頹廢、極惡犯罪瀕發という世相であつた。一時朝鮮戰争で金が日本に落ち復興したようにみえたが、なか〱戰前の裕福さに戻らなかつた。その時にアマゾン移民募集の廣告をみた。家庭は兄正一が嗣ぐので、海外發展に踏みきり、弟と一緒にアマゾン河口、トメアスー植民地細川悦次郎耕地に入植した。

彼等は日本出發前にベレーン市郊外の蔬菜移民であつた。その希望でベレーン港に着いたら突然、受入態勢が整つていないからと、トメアスー植民地に入植變更になつた。彼の心の中にはいつもベレーン市郊外進出が殘つていた。だから五カ月後には細川耕主に理解してもらつて、ベレーン市郊外に進出、カスタニャール市の大先輩大橋康男の斡旋で、現地を二地區購入しここに年來の青柳農場建設のスタートをきつた。この地方邦人の草分で、その開拓には辛酸をなめた。そして一千五百本のビメンタを植えた。

弟健吾は一年後には獨身の輕装でサンパウロ市に飛んだのでつね子夫人は甲斐々々しく男勝りになつて、涙ぐましい協力をつづけた。伯人を雇つても言葉も解らず、ジレツタイばかりであつた。長男信太郎、長女みどり、二女明美、二男正と次から次へ家族も増え、つね夫人は育兒に忙がしかつた。然し背水の陣を布いて勤倹力行した甲斐あつて、今日は五千本の成樹が植わつた。最初に植えたビメンタはもう九年生になつている。渡伯してから十年實に一瞬の夢であつた。

十年すればなんとかなるだろうと思つた通り、やはり生活は安定した。彼等の同航海者は、毎年一月の上陸日に會合して記念祭を催している。今年は滿十年目である。奥アマゾンで商業界に一頭地を抜く岩坂強、ベレーン近郊の篤農家北川正雄、トメアスー植民地の石川道喜を始め、殆んどが成功者と云われるようになつた。その一組に彼の姓名を見出す事を著者も心から嬉しい。兄弟協力して今後の發展を祈る。大正十一年十一月十五日戌年生。

ベレーン市郊外サンタ・イザベル郡

北川淳治氏

JUNJI KITAGAWA
Estação Santa Isabel, E.F.B.
Belem — E. de Pará

原籍　山口縣厚狭郡山陽町
渡伯　昭和三十四年二月　ぶらじる丸

兄豊逸は周到綿密の型、弟勳は豪放冒険型、中の彼は二つを合して眞中で切つたから、中道を往く温厚篤實型だろう。父新六、母とらは、そんな計算づくで彼等三兄弟を生んだ譯でもないが、三人三様の性格は大變に違つている。長男陽一は十一才までは「坊ちゃん陽ちゃん」と可愛がられたがそれが大東亞戦争で日本の惨敗に終り朝鮮で立派な農場を所有して、安樂な生活をしていた彼等は、着のみ着のままで、日本に歸らねばならなかつた。

大体、彼の父新六は若いころ、北米で活躍した。日露戦争の折り歸國して出征、終戰後歸還の折り朝鮮を視察南鮮が將來性ある處に着眼、明治三十九年二月渡鮮した。だから、今度日本に歸るにしても、北川家は三十九年も朝鮮にいたので、日本の事情がよく解らなかつた。新六翁が渡つた頃は、南鮮にはよい水田もなく、一万ヘクタールの開拓地に最初三家族しか入植しなかつた淋しい時代から、遂に三十九年間の努力の結晶で釜山市郊外に立派な果樹園（水田數十ヘクタール）までも所有していた。こんな裕福な生活から、食糧難の日本に歸還したのだから彼等は悲惨であつた。陽一少年は中学を卒業すると、農業も出來ないので、タクシーの運轉手もやつた、「戦争に負けなかつたらなあー」といつも考えた。

アマゾン移住計画を三兄弟の弟勳がききつけ、遂に兄豊逸の二男正雄や、彼の二男美次などを同伴して、昭和三十年一月ぶらじる丸でアマゾンに渡つた。幸い勳は稀にみる努力家、すぐ配耕地岡部孝農場を半年で退植し、美次を連れて、サンタ・イザベル郡の大密林を拓き、道なき處を何キロも道をつけ、筆舌に盡しがたい辛酸をなめ、北川勳農場を拓き、ピメンタを植えた。そして移住の手本を示し、兄豊逸一家を呼んだ。ここで兄豊逸等もすぐ獨立し、トマテ栽培で儲け、それから二年目の昭和三十四年二月ぶらじる丸で彼等も渡伯、ベレーン市近郊に移住した。幸い兄弟が耕地候補地を購入していたので、上陸早々から北川農場の建設に着手、三・四年前に渡伯した戦後派移民にありがちな肉体的苦労もなく、また耕主から戦後派移民と輕く見られる精神的苦惱もなく、水平線から朝日があがるようにスヤ〳〵と順調なコースを辿つて、今日に至つた。

長女静子は和田哲自と結婚して日本から一緒に渡伯した。和田哲自は十七才のときから朝鮮釜山北川農場に働らいた人物である。長男陽一も渡伯當時は二十五才で愛妻妙子と新婚、孫宣久、孫厚博に惠まれている。二男美次は小野田工業高校機械科三年生の時、勳と一緒に先發隊で渡伯した努力家、熊本縣人田中初行長女祐子と結結し、孫洋子　孫小合百出生、ビジア街道で獨立、二女光子は藤原英彦と結婚、三男晃はアルタミーナで弟勳と共に活躍、三女とみ子も健在である。長男陽一氏—昭和九年四月二十八日戌年生。眞寫は右淳治夫妻、左北川家一同

KORETSUGU KOKUBU

Estação Santa Isabel, E.F.B.
Belem — E. de Pará

ベレーン市郊外サンタ・イザベル郡

國分伊次（これつぐ）氏

原籍　福島縣安達郡白澤村

渡伯　昭和二十九年十二月　あふりか丸

渡伯前農業協同組合に勤務した忠實な人物である。純農に生きるつもりで南米に渡つただけであつて、決して冒險な事をしない。現在も農場經營は四千三百本の胡椒の成樹を主体に、トマテ毎回五・六千本づつ栽え、そして他の野菜を加えしかも自給肥料を考慮して養鶏も三千羽ぐらいにしている。その多角形農法は、安全そのものである。

家族も小人數で母堂とめが六十六才、未だカクシヤクとして、コマメに働いている。まつ夫人と、十四才の長男勝夫、二男眞二の五人暮しで、實に平和である。渡伯以來艱難を共にしてくれた妹きみ子は、新潟縣人高倉四三次の長男直輔に嫁づいでいる。彼は當年四十六才、思慮分別盛り「四十にして惑わず」と云うが、もう他人の儲け話しなどのららなくなつた。それ程、自分の能力を知り、自分の境遇が解つてきた。勞働力の少ない自分の家族のことだから、無理をしても駄目だと言うことが解つた。ベレーン近郊の野菜業者が、販賣價格統制で儲からなくなり、價格が統制されないサンパウロ市にでも行こうと、そんな氣運が高まつてきたが、彼はその聲に同調しなかつた。もしサンパウロ市に行くとすれば、もつと／＼資金を充分持つてゆかなければ駄目だと痛感、隱忍自重した。確にいいことである、人口五百万の都市サンパウロ市、その郊外の蔬菜栽培と養鶏はいいに違いないが、余りに同業者の日本人が多いので、競爭が激しい。そのため儲かる人もおるが倒產する人もいる。そんな處え少資本で移轉するのは「飛んで火に入る夏の虫」であつて、彼の好まぬ處であつた。

彼はアマゾンに移住して、滿十年は過ぎた。早いもので追懷すると、一瞬の夢であつた。配耕地は奥アマゾン・パレンチンス市近くのビラ・アマゾニアであつた。この土地は昭和五年から、上塚司がアマゾナス產業研究所を開き、日本高等拓殖学校卒業生をもつて、建設した農場で、苦心慘膽して印度のジユート栽培を、アマゾンに持つてきたもので、そのお陰でアマゾンは黄麻王國になつた。その基地を世界大戰のドヤクシヤまぎさにアマゾナス州隨一の金滿家J・Kアラウージヨが買收したものであつた。本來ならば日本の旧地主に返濟すべきシロモノであつた。この耕地になんとまる三年半いた。儲かりもしない奴隷みたような生活、附近の邦人耕地に入植した新移民は、半年か一年でどし／＼獨立してゆくのに、彼等はまる三年縛られたこの三年半で彼の移民生活のスタートは全く狂つた。漸く退植しサンタ・イザベルに入植し、そして現在の耕地を建設したがあのビラ・アマゾナスの格子なき牢獄生活がなかつたならば、もつと／＼經濟的に飛躍していただろう。温厚篤實、禮節の拓人である。大正八年十二月二十日未年生。

寫眞は同村出身の農業實習生佐野義則君（左端）歸國記念

K. SUNAGA
Estação Santa Isabel, E.F.B.
Belem — E. de Pará

ベレーン市郊外サンタ・イザベル郡

須永金得氏

原籍　群馬縣邑樂郡明和村
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

寅年生れのこの猛虎は、一度ほえると、絶對に後に退かぬ剛直猛勇さがある。特に正義感の強い男で、善悪に潔癖、悪辣な移民ゴロなどすぐまくしたてられる佐野商業学校（旧制）を卒業し、長らく小学校訓導になり奉公したから、純情さがある。赤城山に立籠つた國定忠次的義侠心があつたり、と云つて妙義山の奇岩曲折の如き角張つた理窟を押通したり、時にはまた丸で反對に、頼まれた事は何んでも引受ける榛名山の如きまる味があつたり上州三山を一緒にした伸縮自在の性格所有者である。年齢三十九才、もう一つで「不惑」の年輩である。口角泡を飛ばす雄辯家で、毒舌も大いにはくが、誰れかれからでも信用され、尊敬されるのは、その心が純情潔白なためであろう。弟和男は兄と反對、柔和円熟朴訥で事業方面に熱中するのみ、館林高校出身の戦後派である。この二人の浰好な青年を連れてきた父勘市、母くまも幸福で、須永農場發展の将來を樂しく待つていたが、母だけは一九六二年、六十五才で脳溢血で仆れた。天壽であつて致し方なかつた。

兩親は日本で自轉車商二人の将來を考えて渡伯した。長男金得が二十九才の時で既にきよ夫人と結婚していた。家族構成に不安がなく、昭和三十年一月ベレーン市着港、最初ベレーン市近郊蔬菜移民が急變して、トメアスー植民地入植になつた。十五家族の移民は不平満々、彼は永野吉春耕地に入植したが、ベレーン市近郊進出の初志貫徹は不變不動、遂に六ヵ月で退植し高倉・緒方・國井・山岡等と共に視察して、同地方先輩米澤重男の斡旋で現地を購入して入植した。入植當時は交通不便、獨立資金欠乏、その上に熱帯地特有の適作の野菜栽培を知らず、葡語はチンプンカンプン、手眞似・足眞似で漸く用をたした。上州特有のカラッカゼ心臓で押し通したのだと思う。

耕地へも小路もないので、自分で幹線道路まで私道を拓いた後輩移住者の十倍の苦労をした。母はこの時の苦労辛酸がたたつて逝去したのであろう。野菜で儲け、一九五七年（昭和三十二年）には養鶏を始め、アマゾン地方でゲージ式養鶏のトップを切り、遂に六千羽以上の養鶏家にのしあがつた。ベレーン近郊の養鶏組合結成の産婆役になつたり、なか〳〵公共團体の世話もした。農場は既に全部機械化で、自家發電機で鶏舎を点燈している。魚粉飼糧も自家製造、製材機も所有しているので、鶏舎の増築にはこと缺さない。

彼はきよ夫人の間に二男三女、長女惠子はベレーン洋裁学校、二女陽子（あき子）三女典子、長男嵩（たかし）二男健二がおり、弟和男はトメアスー植民地日野進三女順子と結婚し、長男一郎が出生した。一九六四年聖市郊外モジ市リオ街道に土地を購入、彼はその方面に移轉、果樹栽培に手を染めた。好漢自重を祈つてやまない。大正十五年六月六日寅年生。

YOSÔJI TAKAKURA
Estação Santa Isabel, E.F.B.
Belem — E. de Pará

ベレーン市郊外サンタ・イザベル郡

高倉四三次氏

原籍　新潟縣東頸城郡牧村
渡伯　昭和二十九年十二月　あふりか丸

寒風肌を棘す吹雪の中で育つた操志强靱、質實剛健な人物である。ビシア街道で名を成した三羽烏・北川一族、長島一族、高倉一族の一人で、その飛躍ぶりは羨望の的である。ことほど左様に事業は目覺ましく推進している。

「和是處生之大道」と北村正男知事の色紙が飾つてあるが、これは渡伯に際し知事が贈つた心の餞別であつた。社會と共に和合していく共存共榮の精神こそ、彼が最も熱望している處であつた。在伯滿十年、この間にこの心がげで開拓道を踏んできた。彼は父直次郎母その兩親の四男に生れたので四三次と名づけられ、長じて兵役に服し　大東亞戰爭には、朝鮮感興七四連隊に編入され奮斗、終戰は幸い長野縣駐在のときであつた。復員後高田市で石炭土木、材木の各事業に手を染め、十余台の貨物運搬自動車を持つて派手に事業を經營していた。地方政界にもボス的存在となり、現藏相田中角榮、現知事塚田十三郎などとも交際していた。現在故郷の新聞が郵送されてくるのも、往年の彼らしい事業の輪廓を窺知る好恰の立証である。

渡伯の動機は、小学校の同級生宮澤啓示（北パラナ・アサイ市篤農家、著者とも親友）が三十年振りで訪日し、自由の天地海外生活の好さを話したので、大いに乗氣になり、あつと言う間に手續をして渡伯した。

トメアスー植民地木村總一郎耕地に入植した。耕主木村總一郎は、産業組合理事として二十年の經驗者、産組を更生させた實力者でワンマン、木村天皇の呼名があつたが、彼は「後輩移民を早く獨立させることが、大局的にみて邦人のためだ」と豪語し、皆恐れていた木村に苦言を呈した。そこで彼も六カ月で退耕し、サンタ・イザベル郡の現地に移つた。彼が在耕六カ月目に退耕し、獨立したので、後輩移民もぞく／＼と彼にならつて獨立した。現地帶はその頃は大密林帶であつたが、あれから幾千ヘクタールの原始林が焼かれ、そして邦人が入植し、北伯有數の邦人集團地になつた。彼は邦人先輩の池谷義雄の斡旋で現地を求め、現在一万三千本のピメンタを栽培している。そして毎年／＼巨利を博したが、一九六三年にはビシア街道に第一分耕地を求めこれまた一万一千本の胡椒を植え、現在二万四千本の胡椒を所有している。本耕地は長男直輔が管理している。直輔は十九才で渡伯、福島縣人國分伊次妹きみ子を娶り、孫日出雄、孫雄次が出生している。物産購販賣と金融方面を擔當している。分耕地は二男宏安が支配している。宏安はコツクイロ福岡縣人梅原實養女露子と結婚した。三男登、四男道和は勉学中である。賢夫人の譽たかいきみ夫人が、木耕地、分耕地と毎週掛持で飛廻る働き振りには、敬意を表したい。尚ビシア街道にどし／＼第三、第四分農場の土地を購入した。明治四十二年十二月二十一日酉年生。

きみ夫人と二男宏安夫妻（左上）主人

ベレーン市郊外ザンタ・イザベル郡

長島万藏氏

原籍　神奈川縣川崎市大師河原
渡伯　昭和三十年五月　あふりか丸

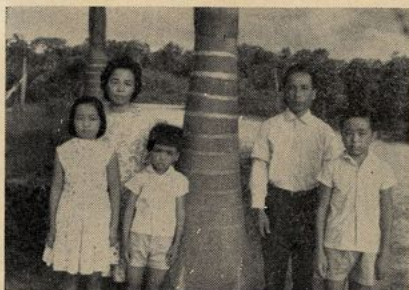
MANZO NAGASHIMA
Estação Santa Isabel, E.F.B.
Belem — E. de Pará

アマゾンで活躍する神奈川縣人といえば、マナウス近郊の黄麻王中島敏三（川崎市出身）がいるが、戰後派移民である彼がベレーン市近郊で素晴らしく頭角を現わしているのも頼もしい。神奈川縣知事内山岩太郎は三十五年昔サンパウロ總領事でブラジルを愛する外交官出身の知事、生地は群馬縣だが神奈川縣知事を五選もやり獨走知事で、生地群馬縣よりむしろ神奈川縣を愛着しているから、戰後北伯アマゾンで、彼の如き移民が大飛躍している事をきけば大いに喜ぶだろう。

彼は日本で鮮魚商であつた。終戰後の横濱市や川崎市は混乱限りなく、彼もその渦巻の中で奮斗した。意氣のいい魚河岸の連中と一緒になり、その日その日を暮していたが、恰度アマゾン移民募集の話を聞き、渡りに舟と思つて、すぐ應募した。時に長女千惠子につづいて長男功が二十才で、二男孝次十九才、三男弘十八才、二女妙子十六才、四男次助十四才、三女勝子十一才と云う、ブラジル移民には最高の條件を備えている家族であつた。

昭和三十年五月ベレーン上陸、すぐトメアスー植民地林熊男耕地に入植、トメアスー植民地在住中長女千惠子は鳥取縣人濱田主計と結婚した。在住一カ年ですぐベレーン市郊外に移轉、アナニンデウア驛伯人農場の管理人となつた。ここでベレーン近郊の事情に接し、漸くその地方に通じてきたので、サンタ・イザベル郡の現地に二十五ヘクタルの土地を購入、長島耕地開拓に着手した。

現地開墾地に入植してから、北伯で最も出來にくかつたトマテ栽培に力を注ぎ、この方で毎年巨利を博した。また甘藍も酷暑で巻かないものを技術研究で巻かせ、この方面にも特技を發揮した。そして本耕地は遂に一万二千本の胡椒を完植した。纏てトラクター、貨物運搬自動車、耕運機、消毒自動散粉機など農場の機械化が完備したので、一九六二年三月には、ビジア街道に進出、二男孝次農場五十ヘクタル胡椒八千本栽培、三男弘農場二十五ヘクタル胡椒四千本、四男次助農場五十ヘクタル（胡椒栽培中）現在長島農場は百五十ヘクタール、ピメンタ樹は二万四千本を所有している。その上に毎年トマテ栽培十万本を植え、この方で莫大な利益をあげている。長島農場の胡椒樹は實に立派で手入の行とどいた點、皆吃驚している。女婿濱田主計も孝次農場の近くに農場を建設し、二千本のピメンタを植えた。ベレーン近郊の邦人で、十年後に最も飛躍する者は戰後移民の北川一族、高倉一族、長島一族の三羽烏であろうと定評があるが、著者もその點について異論はない。長男功は三羽烏の一人北川豊逸の孫に當る堀井裕子を娶り本耕地を管理している二男孝次は高校卒業の麒麟兒、ベレーン市近郊農業者團体の創立者である。二女好子、三女勝子も妙麗の年輩になつた。長島家の移住は半ば目的を達した。万藏氏—明治三十五年五月二十日。功氏—昭和九年八月七日生。

TETSUJI WADA
Estação Santa Isabel, E.F.B.
Belem — E. de Pará

ベレーン市郊外サンタ・イザベル郡
和田哲自氏

原籍　岡山縣小田郡北川村
渡伯　昭和三十四年二月　ぶらじる丸

　十七才の時から、朝鮮釜山市郊外で、立派な果樹園北川淳治農場に働き、長じて北川淳治長女静子と結婚した。現在の農場は岳父北川淳治の弟勳の所有で、勳の妻きみよは彼の姉妹である。だから和田家と北川家は切つても切れない密接な血のつながりになつている。

　生地は岡山縣北川村隣村は縣主村でアマゾン黄麻栽培の神様と呼ばれる尾山良太の出生地である。彼は若くして朝鮮にいて植民地生活の風氣を吸つているので、いつも春風駘蕩明朗清楚である。自分一人よがりな行動をとらず、共存共樂に生きる人柄で、誰れからでも親しまれる。静子夫人がまた玲瓏な女性で親しみやすく、自然と信用をたかめてゆくであろう。

　渡伯した動機は、義兄北川勳が呼寄せたので、岳父北川淳治と一緒に渡伯した。だから生地は岡山縣でも旅券は寄留地の山口縣になつている。岳父と共に伯父北川豊逸の指導で、渡伯前に購入してあつたサンタ・イザベル耕地に入植、約一ヵ年その開墾地の創業時代に奉仕した。密林を焼き拂い、大木の焼跡にピメンタの苗木を植え、これでよいと思つた頃、義兄北川勳がシングー河上流のアルタミーナ市郊外開發に先伐隊として入植したので、その北川勳耕地の留守管理人として移轉した。

　この勳耕地は實に苦心して建設された。北川勳はこの地方の戰後派移民の草分開拓者で、真摯卒直な拓人、直情經行、こう思つたら猪のように真しぐらに突貫する人で、この誠實が幸いして、この耕地の完成となつた。胡椒栽培四千本の農場で、彼は入植して養鷄に移り、現地四千羽を飼育している。勳の開拓するシングー河は、アマゾン大流の支流になり、長さ一九八〇粁の大河である。アマゾン各支流のうち、一番開拓の遅れているのはその奥地に獰猛な食人種の土人がおり、しかも大流は河幅七・八粁で水深は十七・八米であるから航行に適するが、端瀧が多く、そのため上流まで開拓しきれない。その中部地帯の肥沃土アルタミーナの開拓に邁進した勳、それに甥晃三（北川淳治三男）など先伐隊の勇猛さは、賞讃してしかるべきだ。トツカンチンス河、タパジョス河、マデイラ河、プルース河など皆その沿岸は邦人開拓に手をそめたが、まだシングー河だけが邦人入植をみなかつたのだ。その草分を北川一族が決行したから目出度い事である。

　渡伯して既に五年になつた。長男由春、長女圭子（けい子）二男浩二等も成長して通学している。岳父北川淳治耕地も立派になり、その他北川福一耕地、北川正雄耕地、北川美次耕地など北伯アマゾン地方の模範耕地の一つに數えられるに至つた。北伯アマゾンの北川一族と云えば篤農家の代辯の如く習慣づけられている事はうれしい。今後の飛躍を希む。大正十三年十月三日子年生。

く前途への曙光もみえたので、兄豊逸家族を呼寄せた。豊逸は長女澄江、二女芳美は日本に残し、長男福一、三男弘之が渡伯した。父の渡伯まで二男正雄は満二ヵ年辛抱強く岡部耕地に就働した。父豊逸に似てこの邊りが、なかなか根強く、正雄青年の評價はこの頃から絶讃をあびていた。

豊逸両親の渡伯で、獨立への一歩を踏み出し岡部耕地から勳耕地の隣地に移つた。勳耕地と一緒に二年前に購入した三十七ヘクタルの耕地開拓に着手した。次にまた三十七ヘクタルの福一農場弘之農場も建設した。尨大な土地を一時に開拓したので資金の欠乏をまねいたが、恰度ベンフイカ區熊本縣人藤島又男(現在マカッパ市)が、熱帶地方でトマテ栽培に成功するには接木法が良いと試作に成功、これで大儲けをするや、彼等もこれにつづけとトマテを栽培した。ベレーン市民四十万人はトマテの出現で大喜び、その需要が物凄く増大したので、彼等も五万本十万本と事業を擴張「トマテの北川」の名をほしいままにした。そして満十年後の現在は胡椒は成樹となり、正雄耕地一万三千本・四十トン、福一耕地一万五千本・四十トンの生産をあげ、あの多忙だつたトマテ栽培は中止した

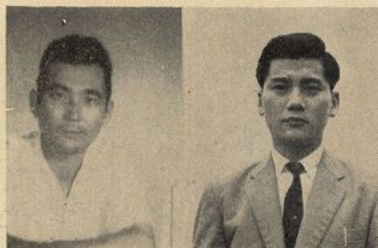
豊逸氏夫妻と正雄氏夫人

自給肥料の必要にせまられ、養鶏を始め、一万羽近くを飼つている。長男福一は日本で妻帶した春子夫人との間に正明・和雄・文江の三兒に惠まれ、二男正雄は佐賀縣人松尾佳乃妹末子(まつこ)と結婚している。三男弘之は山縣宇一(在山口縣)二女あや子を娶り、孫弘美・雪江が出生した。日本に殘してきた長女澄江は亡夫堀井渡の遺兒裕子(隣地長島功夫人)英武・勝彥の三兒を連れて渡伯して、別に堀井農場を建設、北川淳治一家も昭和三十四年渡伯、これまた北川一家の名に恥じない理想郷を建設した。先驅者北川勳は邦人未踏の地域シングー河アルタミーナ地方の開拓に邁進するなど、戰後派アマゾン移民の中に、北川一族ありの勇名を天下に轟かした。著者が見るに「ロうるさい北川豊逸の指揮と、勇住邁進、元氣溌剌な三兄弟が、不眠不休の努力をしたからである」と思う。朝鮮生活四十年間の富を敗戰で失つたが、それ以上の巨財をここ十年間で得た。今後十年間に北川豊逸家の財力は、物凄く充實するであろう。「池田さん、ベレーン郊外の邦人模範農場はどこですか」と訊ねられれば筆者は文句なく「北川兄弟農場」を推すことにやぶさかでない。豊逸氏ー明治三十一年九月二十五日生、福一氏ー昭和二年生、正雄氏ー昭和六年生、弘之氏ー昭和九年生。

(右)弘之氏 (左)正雄氏

ベレーン市郊外サンタ・イザベル郡

父 北川豊逸氏
長男 北川福一氏
二男 北川正雄氏
三男 北川弘之氏

原籍 山口縣厚狭郡山陽町
渡伯 (正雄氏)昭和三十年一月 ぶらじる丸
(其の他)昭和三十三年二月 ぶらじる丸

TOYOITSU KITAGAWA
FUKUICHI KITAGAWA
MASAO KITAGAWA
Estação Santa Isabel, E.F.B.
Belem — E. de Pará

一九六四年一月から降り始めた雨は、四月、五月になつても止まず。地勢大平坦で排水工事をしてないアマゾン胡椒園は、六七割が水害を蒙むつた。その中で彼の農場は一つも水害がなかつた。これは六・七年前から水害があるものだと予想し、排水溝の設備をなしていたからで、少しの根腐病もなかつた。「流石に北川はうるさいおやじだけあるわい」と皆彼の篤農振りと、水害に対する先見の明を激賞した。

北川豊逸は實に嚴格だ。そして農園經營に綿密細心で、その指圖はうるさい。だから現代の自由社會に育つた青年達には、余り向かないかも知れないが、結果においては、彼の忠告が一番適中しているので、誰も反駁するものがない。著者の見る處では、北伯邦人中のナンバー・ワンであると見うける。大体彼の父新六は青年時代に北米に渡り、日露戰爭で歸國して出征、奉天戰に參加、軈て終戰歸還の折に朝鮮を視察した。朝鮮は開拓すべき余地が多かつたので、除隊後明治三十九年に、とら母堂と共に彼は七才の幼児で朝鮮に移住した。最初朝鮮の開拓地一万ヘクタルの中にたつた三家族入植した。軈て山林を持ち、水田も數十ヘクタル所有 釜山市郊外に立派な果樹園を所有するようになつた。豪壯な生活に浴している時に、大東亞戰爭は終り、日本慘敗で四十年間の努力も水泡にきした。長男福一を始め釜山中学四年生の正雄など三男二女を連れて祖國に引揚げた朝鮮で模範果樹園を四十年も經營した篤農家だから、ブラジルに渡つても、農業については、口やかましいのは當然である。

福一氏夫妻を中心として

北川豊逸は長男で、次弟淳治、末弟が勲、昭和三十年一月末弟勲がアマゾン移住を決心して渡伯する際に、勲夫妻に子供のないため渡伯條件に添わず、よつて豊逸の二男正雄、淳治二男美次が構成家族の一員として同行した。そして配耕地トメアスー植民地岡部耕地に入植した。精悍勇猛の北川勲は、半年後に岡部耕地を退植、すぐベレーン郊外サンタ・イザベル郡に適當な候補地の大密林を見つけ、自分で小路をひらいて、耕地建設に邁進した。熱帶特有の暑さと、土人が喰う粗末な食糧で辛抱し、開拓は言語に絶する困難を極めた。そして二年目には漸

ベレーン市郊外サンタ・イザベル郡

草刈長四郎氏

原籍　山形縣寒河江市
渡伯　昭和三十年三月　あめりか丸

TYOSHIRO KUSAGARI
Estação Santa Isabel, E.F.B.
Belem — E. de Pará

アマゾン特有の豪壮な二階建ての住宅が、農場の人口に目立つている。窓を大きくとり風通しはいいし、階下は食堂、台所などで、寝室は皆階上である。ことほど左様に大きな家屋でないと、いけないのは、彼等夫妻に二人の子供夫妻の三夫婦が住んでいるからである。純日本式な家族主義に生きる平和な家庭で、草刈家は仲睦しいなあとすぐ感じた。

彼は昭和八年二十三才の折に、朝鮮に渡り、苦節十余年にして水田を經營していた。不幸大東亞戰争の日本慘敗で、着のみ着のまま日本に歸還した。祖國に歸り福島縣常磐炭鑛に働いた。だから渡伯當時の旅券は福島縣常磐市日和田（舊岩城郡湯本町）になつている。長男武も成長して十九才の渡伯前まで炭鑛に勤務していた。日本の炭鑛は漸く斜陽産業になりかけてきた。石油燃料におしまくられ、段々採算が合わなくなつた。しかも勞資衝突の一番ひどいのは、炭鑛ストライキであつた。斜陽産業の前途に光明をみだし得なかつたので悶々の日を送つていた時、恰度アマゾン移民募集の廣告をみて、我意を得たりと、すぐ應募した。二男幸哉も既に十五才になつていた。

大アマゾン河口ベレーン港に着き、ブラジル船に乗換、ベルテーラ・ゴム園に着き就働した。處がこのゴム園に邦人が入植して日雇人として働くことは、日伯移民協定に違反するものだと、農林省の横槍で退去命令、遂に二カ月で移轉した。ベルテーラ・ゴム園は、一九二九年自動車王フォードが五百五十万ドルを投資して、八百万本のゴム樹を栽培したが、接木法の研究不足で成績悪く、ブラジル政府に二百二十万コントスの安値で賣却した農場で、世界一の人工ゴム園であつた。

ゴム園を出て、モンテ・アレグレ植民地に移つた。急な移轉だつたので、移轉先の植民地も受入態勢が整わず、まだ荒山も焼拂つてなかつた。それから道路もまだというわけで、仮小屋の天幕生活を續けながら、道路をつくり、橋をかけ、大密林を伐採して焼拂い開墾に邁進した。多くの者が力盡き脱耕し、ベレーン近郊へ移轉したが、彼等は移住の目的貫徹のため、到頭入植地を立派な農場にし、毎年籾二百俵を収穫し、煙草も他人の數倍収穫をあげ、胡椒も一千五百本植えた、恰度一九六一年ベレーン市に農事研究會があり、代表として長男武が出席した折にビジア街道を視察し、將來性ある地方だと痛感、土地二十五ヘクタルを百二十コントスで買收した。そして一九六三年三月現地に移轉し、早くも胡椒を二千五百本植え、生計はトマテ二万本を頼りに栽培している。

ふみ夫人との間に三人の男子があり、豪肚な長男武は美保子夫人との間に孫和美が出生した。美保子夫人は舊姓渡邊、齋藤博叔父と一緒に渡伯した聰明な女性である。二男幸哉はモンテ・アレグレ在住徳永勉の妹壽子（すみ子）を娶り、まゆみ・美枝子が出生し、三男誠は中学在学中である。明治四十三年十二月卅日戌年生。寫眞は仲睦まじい草刈家

MASSAO SATO
Estação Santa Isabel, E.F.B.
Belem — E. de Pará

ベレーン市郊外サンタ・イザベル郡

佐藤政夫氏

原籍　群馬縣勢多郡新里村
渡伯　昭和二十九年十二月　あふりか丸

佐藤農場はサンタ・イザベル郡ビジア街道の交通至便な沿線にあつて、その住宅の周圍は熱帶植物が繁茂し、いかにもアマゾンだなあと感じさせられる。この農場に胡椒三千本を植え、傍ら蔬菜栽培に邁進している拓人が本編の佐藤正夫である。朴吶で純眞、赤城山麓で育ち、軈てあさの夫人の兄星野豊作と一緒にアマゾン移住に踏みきつた。時に二十七才で、幼兒昭夫が一人生れていた。義兄星野は既に長男治郎（現在二十四才）長女いく子（現在二十一才）の二兒がいた。太平洋の波濤を越え、三十余日の長航海は希望に滿ちていた。

ベレーン港に着き、軈て伯國船に乗換え、奥アマゾンへと遡行、熱風をうけて十余日目にパレンチンスに着きその近郊に働くべきビラ・アマゾナスがあつた。この農場は戰前上塚司代議士が、アマゾニヤ産業研究所をたて、百万ヘクタルのコンセツソンを州政府から拂下げてもらい、この中心地にビラ・アマゾナスをつくり、学校、教會、農事試驗所、病院など設備も整つていた。この農場を戰時中、アラウージョ財閥が安價に買いとつたものであつたが、本來は戰争中のドシヤグシヤまぎれに乗じて買收したものであつた。彼等はこの耕地に入植したが、待遇は決してよくなく、また利益も充分でなかつた。一年ほどして退耕しようとしたが、耕主がなかなか許可しなかつた。この頃邦人がどんどんアマゾン各地に移住したが、どの耕地でも半年か一年で獨立していつた。それにもかかわらず、ここに入植した彼等四家族磯部・西川・國分等家族は、到頭三ヵ年縛られていた。焦つてみても伯人耕地で、しかも耕主はアマゾンナス州随一の財閥で州知事や、州出身の上院議員・下院議員を動かすことが出來る有力者であるため、如何とも仕難かつた。

まる三年後に、義兄星野が先伐隊としてベレーン市に出て、サンタ・イザベル地帯の邦人を訪ね、漸く適當の土地を定め、星野耕地建設に邁進した。約一年半共同で荒山開拓に努力　三千本のピメンタを栽培した後に、彼も獨立した。時に一九六〇年であつた。もうこの地帯は同船者の邦人が密集し　立派な農場を經營している者もいたし、中にはトマテ栽培で儲けて、貨物自動車を購入したものもいた。裸一貫から叩きあげトラクターを所有する者もいた。然し三ヵ年立遅れた彼はいかん。義兄の耕地建設に一年半援助して、結局獨立したのは渡伯四年半の後であつた。然しそのハンデキヤツプはすぐ取戻しだ。栽培した作物が毎年々々豊作で、しかも高値をよび、ピメンタも三千本成樹となり、先輩入植者の地位に追ついてきた。伯國に來て出生した長女晴美、二女まりえも大きくなつた。在伯十年の基礎時代を經て、第二期の活動飛躍時代に移つた。今後十年間に大きくなるだろう。昭和二年九月十五日生。

（右）想出のビラ・アマゾナス時代（左）主人と二兒

ベレーン市郊外サンタ・イザベル郡

佐 伯 正 一 氏

SHOICHI SAHEKI
Estação Santa Isabel, E.F.B.
Belem — E de Pará

原籍　山口縣徳山市西松原町
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

在伯徳島市出身と云えば　サンパウロ市の海産物商吉廣義助氏を始め、著者の知つているものでも二十余名いるが、なか／＼海外發展熱の旺盛な都市である。彼はこの移民熱の盛んな都市出身であるから、北伯アマゾンで大いに活躍してもらいたい。

現在ビジア街道十四キロの地點、藤原英彦耕地の隣りに、佐伯農場を建設、既に二千本のピメンタを栽培しているが、その傍ら移住事業團囑託越智榮耕地の支配人に就任、その農場の管理も引受けている。在伯滿十年。その十年間は七轉八起運命のサイコロが半と出たり、丁と行きたい處が半と出たり、實に奇々怪々、一九六二年（昭和三十六年）までの六カ年は　波らん重疊を極めた。

幸い渡伯當初ベルテーラ・ゴム園に入植した折の知人越智榮の援助で、經濟的地盤が定まり、將來の見通しがきくようになつたから、まず一安心した。

南伯サンパウロ州やパラナ州でもそうだが、移民生活はスタートにつまづくと、それがたたつて方向を失ない、そうなると焦りぎみになり。五・六年は夢の間に過ぎ去つてしまう。だからスタートが肝腎だが、じつと時期のくるのを待つのみである。こんな時は焦らず、じつと時期のくるのを待つのみである。「急がば廻れ」で、焦つて早く成功しようと思うと、反つて失敗して墓穴を掘るようになる。

敏愛する彼はベルテーラ・ゴム園に入植した。このゴム園は一九二九年自動車會社ヘンリー・フオードが、五百五十万ドルの資本を投じて、八百万本のゴム樹を植えたが、接木法の研究不足で失敗し、僅か二百二十万コントスの安値でブラジル政府に賣却したものであつた。ゴム園に日本移民を入れることは、伯人勞働者の生活を壓迫するものとみなし、日伯移民協定に違反するものと連邦政府農林省の横槍であつた。ここで第四次に亘つて入植した邦人移民百十余家族は、モンテ・アレグレ、グアマ、タイアーノなどに分散したが、彼はベレーン近郊コツケイロ植民地五十嵐耕地に入植した。

彼はコツケイロ植民地を振出しに、ベレーン市近郊を轉々した。そして夢の間に六年は過ぎた。同船できた北川正雄はトマテ十万本で儲け、石川道喜は二万本近い胡椒を植え、岩坂强は商業界で活躍するし、八十三家族五百人の中には、戰前移民を追越すものまで出てきた。切齒扼腕していた彼は、ここに先輩越智耕地の管理人となり、そして近隣に耕地を建設し、遅れながら再スタートを切つた。このコースは賢明であつた。そして今日まで四年間漸く前途の見通しがついた。

長男正槌は在日本、二男しようご（二十才）三男正敏等が協力、長女ちか子はコツケイロ植民地淺田邦助と、二女さえ子はコツケイロ植民地川口保とそれ／＼結婚している。さと子夫人の内助の功績を賞したい。明治四十一年八月十四日生。

SEIJI FUKUDA
Estação Santa Isabel, E.F.B.
Belem — E. de Pará

ベレーン市郊外サンタ・イザベル郡

福田清二氏

原籍　富山縣高岡市旧西條村
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

「今日わー」と玄關にはいると、應接間は整頓されている。この拓人は文化人だなあと直感した。多くの移民は農場の擴張や金儲けばかり夢中になり、住宅はお粉末である。時たま何千万円もかけた宏壮優美な住宅もあるが、ユウレイ住宅みたようで、ガランとしている。内容が空つぽで、住宅と住人の教養とが釣合ないので室内の妙味がとれていない。その點拓人福田清二は、移民社會につきものの貧乏はしても、心は常に文化人を任じているようだ。室内にはいつただけでその潤いが漂つていた。

彼は高岡商業学校卒業後に社會に巣立ち、長じて下關瓦斯會社に勤務した。昭和十五年八月の頃であつた。貞節のみさお夫人の協力で、戰後の悲慘な生活に耐え、長女洋子（ヒロ子と呼ぶベレーン市新妻常顯夫人）は高女卒業後縣廳事務員となり、職業女性として社會に活動、二女英子も廣島短大に通学していたし、三女たき子（サンパウロ市南伯産組勤務畠山岩吉夫人・住所イタケーラ植民地）長男雅男も高校一年生（十五才）であつた。だから貧乏しても、子供には立派な教育を施してきた譯である。

昭和三十年一月ぶらじる丸で渡伯した。ぶらじる丸第二回目の航海で、彼等はベルテーラ・ゴム園に就働した。約半年の後に、日本人就勞は許可しないと農林省の立退命令が出た。半年いる間に建築手傳の仕事があつたが、經驗がなく、まるでブラブラしていた譯であつた。多くの人達はモンテ・アレグレ植民地や、其の他に配耕されたが、彼はグアマ植民地に移り、伯人耕地で酷使された。自分の境遇の慘めさがつくづくいやになりすぐ退耕し、コツケイロ植地民トクトル・ブラントン耕地のピメンタ管理人になり一年を送つた。そして翌年マリツーバ驛ドツトル・アグリード・ミランダ經營の牧場管理人になり、傍ら野菜を栽培した。この場所で長女洋子は新妻常顯と結婚した。在住一年、ベンフイカ區に移り、トマテ栽培に力を注いだ。

ここに四年在住、このトマテ栽培で巨利を博した。恰度ベンフイカにはトマテ栽培で大當りした増元七太郎を先頭に競爭した時代で、ここで儲けた金で、一九六二年一月ビジア街道の現地二十五ヘクタルを購入、渡伯九年目で福田農場建設に着手した。あれから獅子奮迅の勢で、トマテ栽培に主力を注ぎ、毎年五万本ぐらいを植え、六十五、六トンの收穫をあげ傍らピメンタを三千五百本完植させた。こうして仕事が急にはかどつたのは、二男純治、三男幸男、四男芳春などが、青年になり、勞働力が増大したからであつた。長男雅男もグアマ植民地在住福島縣人坂内芳惠長女のり子と結婚した。今までは三人の娘を嫁づがせたが、これからは二人の息子の嫁を迎えねばならない。人生死ぬまで次から次へと責任のある仕事が重なつているようだ福田家晩年の幸福を祝して筆を擱く。明治三十七年七月十七日辰年生。右より芳春・幸男・操夫人・嫁のり子・主人

HIDEHIKO FUJIWARA
Estação Santa Isabel, E.F.B.
Belem — E. de Pará

ベレーン市郊外ビジア街道

藤原英彦氏

原籍　山口縣原狭郡山陽町西山
渡伯　昭和三十三年二月　ぶらじる丸

南洋でも、南米でも、アフリカでも、總体に熱帯國は氣候の關係で頭腦がボケてしまうようだ。特にアマゾンは、赤道直下であるから、赤道ボケするのが早いその証據に日本で大学卒業・高等教育の青年がアマゾン生活三年を經つと、專門書籍は云うに及ばず、雜誌「中央公論」までも讀みたがらない。だから一般移民は普通雜誌でさえ讀まず、到頭日本の事情は勿論、世界の事情にうとくなるようだ。「佐藤と云うのが總理になったが、そんな代議士がおったかしらん」「常陸宮なんて宮さんがおるものかこの莫迦野郎、終戰直後はみな臣下に降下したんだよ」てな事を、在伯邦人名士？ が堂々とまくしたてるのだから、アマゾンボケは恐ろしい。常識もなにもあつたものでない。

そのアマゾンボケが恐ろしくて、本編の藤原英彥は毎月缺かさず日本の新刊書籍に眼を通している。通俗雜誌「文藝春秋」は勿論、專門農業雜誌「園藝」を始め、懐の具合で、常識涵養のため、讀書に親しんでいる。学歷は日本で新制中学卒業だけであるが、この點珍らしい篤学の士だと著者は敬意を表したい。

父龜治、母たつゑ兩親の長男に生れた。そして兩親とも、既に故人である。ベレーン近郊篤農家の隨一北川淳治に渡伯するときに、同町に住んでいた關係で、北川福一が渡伯を薦められた。若冠二十二才、青春の血潮は高なり、人生最も夢多き時代であった。アマゾンと云えば、交通不便な處でマラリア病の發生する未開地帯と思うことより、雄大なる大密林におおわれる天國であり、千古斧鉞を入れぬ夢まぼろしの神祕境てな事を想像する年輩であったから「よし同行しましよう」と快諾、北川福一・弘之兄弟と共に同行した。

渡伯してすぐ北川福一耕地の建設に參加した。燃ゆるような情熱を湧かして、青春の鴻圖をいだき、密林開拓に挺身した。疲れを知らない頑健無双の体格で、北川兄弟のため私心を棄てて奉公した。根が淸廉潔白、少しも金錢的欲望もなく、ひたすら修養と心得え働らいた。翌年には彼の渡伯を薦めた北川淳治一家も渡伯した。その二女光子は稀にみる謙譲豊かな麗人、しかも姉靜子（和田哲自夫人）兄陽一に似て、何事をやるにも努力する性格、日本から幼馴染で胸にえがいた女性、遂に神のみちびきによって結婚にゴールイン、ここで一九六二年ビジア街道に土地を購入して獨立した。

貞節なら若い夫人を得て鬼に金棒、ぐんぐん事業も大擴張一年間にトマテ六万本を栽培して巨利を博し、二年目には胡椒六千五百本を植えて、十年組の古參移民をあっと驚ろかせた。そして今日で獨立滿三年目である。日本に殘っている一人の妹が、兄の素晴しい飛躍振りをきけば、肉親の血潮は湧きたち、欣喜雀躍するだろう。夫婦の間に長男英明が出生している。昭和十一年十二月二十日戌年生。

自動車を修理する主人と、愛児をいだく光子夫人

YASUMASA SAITO
Caixa, 689 — Belem, — Pará

ベレーン市郊外ビジア街道

齋藤安正氏

原籍　福島縣伊達郡靈山村
渡伯　昭和二十九年十一月　あめりか丸

本職は菓子製造業、一九六〇年からベレーン市で本腰を入れて、この方面に活躍したが、既にベレーン市も終戦直後と違つて、資本主義時代に移り、大資本家が自動電氣機械で菓子を製造し、勞賃に喰いこまれない賢明な工業化をはかつたので、彼の如き小資本の者は、立打ち出來ない時代となつた。それかと云つて、夫婦して生菓子などを造つていたのでは、何時になつても大金は殘らずその日〳〵を生活するのみであつた。この大資本化したベレーン市の近代的急變を検討、遂に菓子屋をやめ、再び農の生活に移つた。この方が彼にとつては賢明であろう。

彼は父佐市、母とめ兩親の四男に生れた。父は健在、母とめは既に故人である。小学校時代の先生に、トメアスー植民地ブレウ四區在住滝田操夫人がいる。「おとなしい、いい子供てした。なか〳〵おりこうでねー」と瀧田夫人は當時を追懐して著者に語つた。長じて東京に進出、ここで菓子職人となつた。だから彼の菓子製造業は年期がはいつている。

二十二才の折に、兄充央（みつなか・在タバナン植民地）がブラジル移住を決心した。彼の生地中川部落の出身者菅野宇兵衛（聖市郊外サン・ジョゼー・ド・カンポス在住）が昭和二十六年訪日して、ブラジル熱をあおつたが、當時はまだブラジル移民禁止時代であつた。そこへまた母とめと生れ部落を一緒にしている齋藤襄雄（聖市郊外モジ市コツケイロ區）が昭和二十七年訪日したので、兄齋藤充央はいよ〳〵ブラジル渡航の熱をあげた。そこへアマゾン移民の再開であつた。待機していたこの絶好の機會を逃がすはずはなく、遂に昭和二十九年十一月あめりか丸に上船したが、移民につきものの、家族構成の關係で獨身の彼は兄の家族一員として同伴した。

配耕地はベレーン市近郊コツケイロ植民地長谷川貞雄耕地、ここに十カ月いたが、漸くベレーン近郊の模様が解つてきたので、タバナン地區に移り、兄と共同で齋藤耕地建設に着手した面積は間口百米に奥行五百米の絶好の果樹園地帶、ここにピメンタ三千本を栽培した。そして三カ年兄に手傳つて後にベレーン市に進出した。日本から同村出身の女性、加藤善吉令嬢けい子を呼寄せ彼女の協力で大いに働らいた。四年間都市生活の後に、遂にタバナン時代の事が追憶され、一九六四年現地に農場を建設、既に一千四百本のピメンタを植えている。兄充英は彼が四年間都市生活をする間に巨利を博して裕福な生活に浴している。それを思えば、大農場建設に進むべきであつたと今追懐している。夫婦の間に長女美和子、長男正義二女ゆかりの三兒がおる。再建に燃ゆる彼の意氣にけい夫人の協力の意志は心強いばかりである。昭和七年五月三十日中年生。

ベレーン市郊外ビジア街道

石原市太郎氏

ICHITARO ISHIHARA
Estação Santa Isabel, E.F.B.
Belem, — Pará

原籍　山口縣岩國市川西町
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

彼は物心づいた四才の時に大東亜戦争が起きた。父は台灣台北市で會社に勤め、裕福に暮していた。台北市は明治二十八年日清戦争で日本領になつてから、日本の資本で都市計画をして美しい都になつていた。そして台灣全島に鉄道を敷き、各地を拓いて有名な台灣水田米の増産をはかつた。台灣は日本統治の五十年間に、住み易い文化植民地になつていた。この島で悠々暮していた石原一家に、一九四五年八月十五日の終戦は愕然とし涙にくれた。無條件降服、日本統治返還で、彼等も樂しかつた台湾生活を棄て、日本に歸還しなければならなかつた。八才になつた市太郎少年は幼児の妹百合江、妹きみよなどと共に、父芳夫母きくゑ両親に連れらたて父の母國に歸つた。あれから二十年經つたが、ユーカリ樹の都・台北生活の夢は段々とうすらいでいつた。

四百万人の海外出征派兵の復員、それに二百万以上の滿州、朝鮮、台灣、樺太、南洋等の在留邦人が歸還したので、終戦後の日本は未曾有の食糧難、道徳は廃頽し、殺人暗黒界にも似て戰慄を憶えた。多くの少年、幼児をかゝえて故郷に歸つた石原家は往年の台灣生活と違つて雲泥の生活、恰度十年辛抱した。幸いこのとき自由の天地ブラジル移住募集があり、一度海外生活をしていた両親はこれに應募して、昭和三十年一月アマゾンに轉住した。時に彼は岩國高校二年生で十七才、妹百合江が中学三年生、妹きみよが中学一年生であつた。

配耕地はサンタレン市郊外ベルテーラ・ゴム園、このゴム園は一九二九年自動車王ヘンリー・フォードが五百五十万ドルの巨費を投じて八百万本のゴム樹を植えたが、南洋人工栽培ゴム樹と違つて、なか〳〵むづかしく接木法の失敗で成績悪く遂にブラジル政府に二百二十万コントスで賣却したもので、世界的に有名であつた。この農場は伯人勞働者のみ雇傭していたが、ここに日本移民を入れることは、日伯移民協定に違反するものだと農務省の横槍で、遂に退耕することになつた。百家族以上の邦人は、各地に四徹したが、僅か半年で彼もベレーン市郊外に移つた。サンタ・イザベル郡に戰前から住んでいた草分開拓者米澤重男の世話で、ビジア街道に土地を求め、ここで五カ年奮斗した。トマテ栽培を主眼に野菜を植え、ピメンタも千本植えた。然しまだ彼も漸く少年期を出た頃で妹も少女時代、一家の勞働力が貧弱なので、時期の來るまで辛抱していた。

一九六〇年(昭和三十五年)妹等も成長し彼も二十三才となり成人したので、ビジア街道の奥サント・アントニオ郡に移り現農場開拓に着手、遂に五千本の胡椒を栽培した。そして自給肥料の計画で養鶏一千羽を飼育している。伯國生れの末弟ひろしを交えて一家六人、仲睦まじい家庭を營んでいる。平和に滿ちた石原家の發展を祝したい。昭和十二年七月三十日亥年生。

HIDETAKE HORIY
Estação Santa Isabel, E.F.B.
Belem — E. de Pará

ベレーン市郊外ビジア街道

堀井英武氏

原籍　山口縣原狭郡山陽町

渡伯　昭和三十五年八月　ぶらじる丸

父渡が病歿した時は、姉裕子（長島功夫人）長男の彼　弟勝彦は幼少であつた。孤潤を守り、三児の育成に全靈を注いで涙ぐましい努力をつづけている母の姿をみて、幼年から、少年になりかけた頃の彼の心にも「俺が大きくなつたら、必ず堀井家を再興さしてみてやるよ」と、歯ぎしりし、心中固い決心をした。新制中学を終え、工業高校機械科を修得すると、軈て淀川製銅所に勤務した。十九才の春で、母澄江も安緒の胸を撫で下ろした。

彼の父渡は朝鮮生れ、母澄江も朝鮮で生れた。祖父千一郎は故人、祖母てるは健在、祖父千一郎は進取氣鋭の人柄で、明治時代北米カリフオル＝アで活躍した出身は靜岡縣小笠郡掛川町で、往年の東海道五十三次で有名、明治三十九年に、北米で一緒に働らいた北川新六（北川豊逸父、北川福一・正雄等の祖父）などと一緒に「排日氣分の北米より氣分的にも朗らかな南鮮開拓の方がいい」と云つて、南朝鮮の開拓に身を躍らせた。朝鮮は當時日本の植民地でなかつた。あれから後に日韓合併に踏みきつたのでだが、南朝鮮は至る處、開拓の余地があり、人民は貧しく憐れであつた。日本の資本を投下し鉄道を敷き、港灣をつくり、道路を開いて荒漠たる痩地を水田化したから、今日の朝鮮が出來た譯である。その近代國家建設の裏面には、祖父千次郎、祖母てる等の一鍬、一鋤の力があり涙ぐましい献身さがこもつていた。そして祖父母に追隨した彼の父渡の汗と膏の結晶も注がれていた。

大東亞戰爭で日本は惨敗、遂に日本に歸還することになつて粒々辛苦四十年間の努力は水泡に歸した。戰時中朝鮮飛行隊に勤務していた父渡は、遂に戰病死した。幼児の成長を見ずして萬斛の恨をこの世に殘し、壯年でこの世を去つた父渡の心情は只々同情の他はない。未曾有の混乱を呈している日本に歸還したが、日本で育つた事のない母澄江、日本を四十年前に去つた祖父母、皆んな異國のようであつた。朝鮮大邱市で生れた幼児英武は五才で日本の土を踏み、そして成長した朝鮮時代の豊かな生活を夢みて、現狀をなげく母澄江、祖父北川豊逸などのグチを聞き　逆境の身から撥返す勇猛心が湧いてきた。

十九才の折に祖父北川豊逸の呼寄せで、遂にブラジル移住に踏みきつた。時に一九六〇年（昭和三十年）であつた。從兄北川福一耕地に一年半就勞の後に独立、北川一族の後援で直ぐピメンタ五千本を栽培した。そして生計はトマテを毎月三千本づゝ栽培して、いつも出荷のトマテ一万本が植つているので後顧の憂がない。渡伯してから姉裕子は篤農家長島功に嫁づいた。彼は二十四才になつた。弟勝彦と共に立派な農場をきづき、朝鮮大邱時代以上の豊かな生活に戻そうと粉骨砕身している。遺兒のため孤潤を守り今日に至つた澄江夫人の努力を賞し擱筆す

昭和十六年十一月二十九日已年生。

家族三人と祖父北川豊逸氏（右から三番目）

ベレーン市ビジア街道

託摩誠治氏

原籍　熊本縣熊本市西鋤身崎町
渡伯　昭和二十九年六月　あめりか丸

SEIJI TAKUMA
Rua Romas Belente, 1186
Belem, — Pará

彼のブラジル開拓十年史を繙けば、鬼神も涙をそそぐという程に悲壮だ、不運、逆境、天災の連續であつた。彼はこの災難を「神の試練」と心得え、よくこの十年間の怒濤を撥かえした。南洲翁の「幾度か辛酸を經て志始めて堅し」と云うが、辛酸が余りに長かつた。流石に九州肥後魂で鍛えただけあつて、少しも劣えをみせず益々元氣旺盛であるのは心頼もしい。

父治三郎、母まる両親の二男に生れた。父は逝去し、母は未だ日本で健在である。熊本農業高校を卒業し、二十一才のとき一つ違いの弘子夫人（菊池郡西合志村出身）と、中学を卒業したばかりの弟慶治を連れて、大南米に理想園を建設しようと青春の夢をむさぼりつつ、大平洋の楽しい旅行をつづけて、ベレーン港についた。そして伯國船にのかえ目的地アマゾン上流マナウス市對岸マナカプル植民地アグア・フリーア區に二十三家族と共に入植した。處か日本で想像したのと違つて、移民の受入態勢が整わなかつた。まだ充分荒山も焼かれず、道も拓けず、混乱を呈していた。その上に日本ではどん〳〵移民を募集して送出し、第三次・第四次・第五次と百四十五家族八百人以上の邦人が入植した。籾を蒔いた處、みな一ヘクタール一・二俵しか収穫がなかつたが、彼は僅かに半俵三十瓩しか収穫しなかつた。ゴム樹を植えたが、これは十年後でないと金にならなかつた。野菜を栽培したりしたがマナウス市民の需要がなく、なか〳〵賣れなかつた。賣れそうなトマテ栽培は、熱帯地方ですぐ病氣がでて枯れた。マンジョカ芋を植えて、漸く糊口をしのぎ奮斗すること、實に二年二カ月に及んだ。その頃は既に百家族以上のものが、脱耕しベレーン方面に移轉した。遂に最後まで頑張つた彼であつたが。ここで決心してベレーン郊外へ移轉した。大宅壮一が訪ねて「緑の地獄」と評し「中南米の裏街道を行く」の名著で酷評したのはこの頃であつた。

「移民の成功はスタートが悪いとあとまでたたる」と云われるが、不運だつた彼はコツケイロ植民地の奥に入植し、獨立して二カ年奮斗した。續てモエマ區地方に移り、ここでも二カ年頑張つたが、二十年目に流行した猛毒・風土病のマラリアに罹り、苦難をなめた。そしてこの逆境に同情した長谷川貞雄の世話で辻・長谷川等が創設した「胡椒栽培株式會社」の經營農場に入植した。創立當時から献身的に奉仕したが、時に運あらず、會社重役連中の紛争のトバッチリで、一文の報酬もなく退耕させられ、二カ年を無為に送つた。やむなく一九六二年現地に移りトマテ栽培で再建の道を邁進している。長年協力した弟慶治は歸朝したが、病のため逝去した。今日まで誠意をもつて盡した弘子夫人の協力は激賞したい。夫婦の間に裕子・文子の二児がいる。昭和七年八月二十四日申年生。

（左）逝去した弟慶治

ベレーン市郊外ビジア街道

渡邊勝身氏

原籍　福島縣双葉郡浪江町
渡伯　昭和二十九年六月　あめりか丸

KATSUMI WATANABE
a/c Yamada - Caixa 1019
Belem, — Pará

山師氣のない、正直一途の人物であり、まさい夫人がまた東北地方特有の質朴な人柄で、夫婦とも信用は絶對的である。弟思いで、今日まで協力してくれた弟健（昭和十二年一月二十三日生）にも、一九六三年度ビジア街道伯人耕地を、買収して独立さしてやつた。弟健は相馬郡の「こだか高校」農業科三年生で、彼について渡伯した。せめて高校を卒業してからと思つたが、渡伯條件につきものの家族構成の缺陥で、どうしても弟健の同行が必要であつた。それで若鮎のような十七才の年頃で高等を中退、彼に同行し、今日まで初期移民生活の苦惱辛酸に堪えてきたのであつた。人情豊かである夫妻はどうかして一日も早く弟を独立させたいと、焦つてきたが、彼等の移民生活はスタートが運悪く、そのため他人の十倍の難儀苦勞をして、遂に弟の独立が少しおくれた。それでも満十年目に弟が立派な農場を所有するようになつたので、一安心した。弟健も兄の協力に感謝し、他人眼でも感心するように孤軍奮斗し、全力をあげて耕地に胡椒を栽培している。依頼心の少ない粘着力偉大な青年健君であるから、必ずや渡伯の初志を貫徹し、立派な農場をきづくであろう。

移住熱のある浪江町から弟健や妹きみ子（ベンフィカ區富山縣人井川昇弟開運夫人）を連れて、奥アマゾン・マナオスの對岸マナカプル植民地に入植した。マナカプル第二次移民で三十八家族二一九人が一緒であつた。アグア・フリーア區に入植してみると驚ろいた。第一次の先伐隊二十三家族は、受入態勢が充分でなく、混乱を呈していた。入植地の荒山も充分燒かれず道は坂が多く雨期には泥濘で歩けなかつた。そこへ第三次七家族、第四次三〇家族、第五次二十七家族と、八百人位の邦人が入植した。ベラ・ビスタ區などは籾が一ヘクタール一・二俵しか収穫なく、瑞穂の國民を落膽させた。野菜はマナウス市民十五万人が、喰いかたを知らず、茄子、人參、大根、胡瓜などなか〳〵賣れなかつた。マンジョカを植え漸く命をつないだ。吸血ダニ・ムクインや蚊群の來襲で仕事もはかどらなかつた。大宅壯一が訪づれこの惨狀をみて「綠の地獄」と痛罵、名著「中南米の裏街道を行く」で悪評した。著者もこの頃訪づれたが實際酷いものであつた。ここに二年辛抱し、ベレーン郊外ビジア街道に移轉し、まさい夫人の涙ぐましい協力もあり、ここでトマテ栽培で儲けて、また野菜栽培の適地に移轉、ここでも巨利を拍し、一九六一年六月現地に入植し、渡邊勝身農場建設に着手、ピメンタ二千本と野菜栽培で今日に至つた。

在伯満十年、その逆境不運を征服した辛抱强さを賞し、兄弟愛に満ちる渡邊家の隆盛を祈る。長女みよ子以下、榮子、幹示洋子、弘仁、隆成等健在である。大正八年三月二十二日未年生

（下右）弟健、（下・左）長男幹示、三女洋子

ベレーン郊外ビジア街道

赤　尾　茂　氏

SHIGERU AKAO
Caixa 613
Belem, — Pará

原籍　愛媛縣越智郡瀬戸崎町
渡伯　昭和三十年五月　あめりか丸

尊大ぶらず、とてもインギンで、義理堅く人情深い人柄である。この拓人はどんな痩地でも立派な農場につくりあげる操志強靭、不退轉の努力家である。彼が八ヵ年間も奮斗したというモンテ・アレグレ植民地の耕地を視たが、こんな地勢の悪い處で、しかも交通不便さに堪え、入植當時は毎年二百俵の籾を收穫し、その後にジュータ（黄麻）の種子を、三トンも收穫販賣したと云うから、やはりモンテ・アレグレ地方随一の篤農家と評されたのは當然であつた。マンジョカ製粉工場も設備し、畑にはリモン樹なども植え、多角的農業經營をやる程、用意周到を極めた。一歩築き前進、二歩礎き前進という、健實堅固な方針で今日まできた。

長男修治は今治高校卒業後、二十二才で渡伯し、二男國彥は北高校在学中に渡伯、共に白皙童顔で大アマゾン開拓に挺身したので、暗黒な社會を知らず、純情無垢だ。働くことが人間の任務と考え、一心不乱に仕事をしているが、この二兒の成長で、赤尾家は物凄く急ピッチをあげて經済的發展をとげてきた。彼が現地を視察したのは一九六三年、藤山至の薦めで土地を購入、その八月に移轉したが八カ月後の一九六四年四月には、既に五千本のピメンタを栽培した。トメアスー植民地を始め、大方のものが一年に、最大限二三千本しか植えないのに、五千本もの胡椒を八ヵ月で植えたのだから、在留邦人は驚ろいた。大体在伯十年ぐらいの人でも所有樹總數が五・六千本が一般的なのだ。やはりこの若い二人が「眠つていたモンテ・アレグレ生活八年間を取戻せ」と云つて、粉骨碎身不眠不休の努力をもつて胡椒を栽培したからである。長男修治の嫁れい子夫人はモンテ・アレグレ植民地在住宮城縣人吉野貞雄長女で、既に（孫）長男アレキサンドル、長女眞美江、二女弘香の三兒に恵まれている。赤尾家次代を担う主婦として、頼もしい女性である。たつた一人の娘（長女まき子）は、ベレーン高女で勉学中である。

彼は日本で建築業に従事していた。彼の生地今治瀬戸崎からは、大正時代に金子順助（ソロ線ランシャリア市）が渡伯していま活躍しているが、彼も焼野ガ原の都市復興が完成して、同業の仕事が少なくなつたので、伯國に渡つて建築業で立つていこうかと思立ち、アマゾン移民に應募し、ブラジルに移住したベルテーラ・ゴム園に入植、僅か一ヵ月で同農場を退却した。一九二九年フォードが五百五十万ドルを投資し八百万本のゴム樹を栽培した農場だつたが、農林省の横槍でモンテのドイス・ガーリョ區に入植した。急な　轉で荒山は勿論焼かれもせず、道もなく、天幕生活で自分達の土地まで道をつくりそして耕地を建設した。あきえ夫人も協力した。筆舌に盡しがたい辛酸苦勞八ヵ年の後に、現地に移轉した。明治四十二年一月二十六日西年生。（左）想い出の五人渡伯記念（右）嫁れい子夫人と二兒

YOSHIJI KITAGAWA
a/c Yamada - Caixa 1019
Belem — E. de Pará

ベレーン市郊外ビジア街道

北川美次氏

原籍　山口縣原狭郡山陽町
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

頼まれると、無報酬で奉仕する義侠心がある反面、小莫迦にされるとその人にコンリンザイ頭を下げないという剛腹な肚があり、他人に依頼心をもたない獨立自立の精神が旺盛である。當年滿二十八才の少壯拓人で、日本にいたら天眞爛漫な学生上りという處であろうが、伯國ではそんな譯にゆかず、大密林開拓につきものの肉体的苦勞は勿論、猜疑、誹謗、嫉妬、嘲笑、讒言など社會の裏面におののく暗黒な精神的苦惱の數々にも接し、自から精神修養は彼の人格を鍛練させ、今日一家をなすに至つた。

父淳治、母きよ兩親の二男に生れ、童顔可憐な小学校一年生のとき、大東亞戰爭が終了した。姉靜子（和田哲自夫人）や兄陽一などと共に、子供心にも兩親の驚きがうすうすわかり胸にせまつた。そして安樂な生活であつた朝鮮大邱から、日本に歸還した。祖父新六、祖母とら二人が、明治三十九年朝鮮に渡つて、四十年間粒々辛苦してつくつた地盤が、一朝にして水泡にきしたのである。まるで映画を地でゆくような運命が北川一族の心境であつた。

故郷小野田で、工業高等機械科三年生のとき、叔父北川勳がアマゾン移民に挺身したので、同行せよとの事で、滿十七才の青春を賭けて大アマゾン開拓を承諾した。勇往邁進、既に千古斧鉞を入れぬ大密林地帶をひと呑みにする頼もしさがあつた。二十三才の從兄北川正雄も同行した。叔父勳は夫婦に子供がないので、何時も万年青年の晴々しい元氣さがあつた。根が勤儉力行の性格で、物におじない冒險性もあり、この叔父と共にトメアスー植民地岡部孝耕地に入植した。就勞すること六カ月從兄正雄を殘し、叔父と共にベレーン市郊外に移り、戰前の開拓者米澤重男の斡旋で、サンタ・イザベル地方の大密林地帶の土地を購入した。道路もなく自分達で道を拓き堀立小屋をたて、荒山を焼いてピメンタを植えた。日本で想像した理想園生活と雲泥の苦しみがあつた。

あれから數年間辛抱した。叔父夫妻は子供のないため、彼に家督を相續させたかつたが、獨立心旺盛な彼は自からの手で自からの農場を建設しようと決心、一九六一年叔父と別れ、一年間苦斗し一九六二年十月現地を購入した。幸いその前にベレーン在住熊本縣人田中初行長女祐子と結婚していたので、彼女の激勵も力強く、それに各伯父從兄弟等の聲援のもとに、一年間で六千本の胡椒を栽培した。いま二年生の幼樹であるが、本數にかけては、兄陽一の七千本、姉和田靜子耕地の四千本、從姉妹堀井澄江耕地五千本、妹藤原光子耕地六千五百本に比較して少しも遜色がない。しかもいままた増植中で、軈て大きなものが生れるだろう。在伯滿十年、彼の前途は曉の太陽の如く美しく輝いている。夫妻の間に洋子・小百合の二兒が出生した。昭和十二年二月十二日丑年生。寫眞後列は岳父田中氏

が、そのトマテを数万本植えて巨利を拍しているから偉らい。こうした篤農家ぶりであるから、今後十年もしたら、堂々たる藤山農場が完成されるだろう。

彼は山口縣宇部市にある宇部窒素株式會社に勤務していた、長男の洋二は小野田高校を卒業したばかりの青年で、渡伯當時は二十一才であつた。アマゾン移住を決心、つる夫人も子供の將來を考えて共鳴した。二男寛以下俊成・一男・るり子・やす子・みつゑの四男三女と、母ふゆのを連れて渡伯した入植地のモンテ・アレグレ植民地アサヒザール區の耕地豫定地に同船者二十家族と共に着いてみると、昨年九月あふりか丸で入植した草分先伐隊二十四家族の連中が、やれ退植する者がいたり、またその準備中の者がいたりして動揺した。永年作物の適作がなく毎年荒山を伐つて陸稲を植えても、二年目には成績悪く、また翌年別の荒山を伐採しなくてはならなかつた。同じ處に稲を栽え水田何百年の歴史に慣れた瑞穗の國民には、そんな事は不適當で、遂に退植者が多くなつた。

大密林開拓時代のモンテ・アレグレ植民地の想出

移民會社もブラジル政府も、植民者に安心感を與える適作物をまだ知らなかつた。流石に大陸的で、人間を入植させれば餓死する譯にゆかないし、荒山を開墾して何か植えるだろう位の考えであつた。彼等も玉蜀黍、ブラジル豆を栽えた。そして陸稲は成績よく、毎年二百七・八十俵も收穫した。

軈てアツセーナ區に六ロツテ（二百ヘクタール）の土地を購入、永住の地と定め、ピメンタ四千本を栽培、牧場をつくり、毎年米作やジュータ（黄麻）の種子採集などで多大の収穫をあげたが、交通不便で農作物の運賃にかかり、その上に地區に学校もなく上級学校にゆく子供等の将來を考えた。植民地を出た佐藤常彌などは、早く退散してベレーン近郊で一万羽の養鶏場を經營しているし、彼もそれに刺激されて遂に八カ年苦心した農場を賣却、現地を購入し、現在に及んだ。

祖母ふゆのは七十五才で健在、長男洋二はモンテ・アレグレ植民地在住熊本縣人波村福雄よつの夫人妹あや子を娶り、四人の孫（長女きよみ、二女惠子、長男寿、二男修）出生、二男寛は兄の片腕となり協力、三男俊成（美枝子夫人はタバナン火浦春雄長女）はタバナン區で獨立、四男一正はモンテ區で妻帯して獨立、長男るり子、二女やす子、三女みつゑ等娘も結婚適齢に近づきつつある。藤山家のブラジル移住はその目的を達した切に一家の繁榮を祈る。明治四十年一月三日未年生。

ベレーン市郊外ビジア街道

父 **藤山 至氏**

長男 **藤山洋二氏**

原籍 山口縣小野田市東高泊
渡伯 昭和二十九年七月 あふりか丸

ITARU FUJIYAMA
Caixa 613
Belem, — Pará

　ベレーン市近郊戦後派邦人移民で、物凄く飛躍して経済的地盤を固めている者と云えば、著者は無條件で北川一族・高倉一族・長島一族の三羽烏を推賞するにやぶさかでない。其等の人々は既にベレーン近郊に進出して満十年になり、そして長男、二男、三男と子供等が成長し、第一耕地、第二耕地、第三耕地と一族の耕地を増やし、南伯サンパウロ州でも一寸見うけられない彗星的な財産をつくつた。ピメンタ黄金時代の順風満帆の波にのつたのが幸したものと斷定する。

　それならこれからの新人は、誰が大いに伸びるだろうかと云えば、著者は藤山至一家に指を屈せざるを得ない。ベレーン近郊に移轉したのが一九六二年十二月で、間口二五〇米、奥行二・四〇〇米、五十ヘクタールの大密林地帯を購入して、これを開墾、一九六三年度に五千本、一九六四年度上半期に四千本、一年半に合計九千本の胡椒を栽培した。怖らく藤山家は将來四・五万本の胡椒を栽培する計画であろう。物凄く急ピッチをあげている。こんなに一年半に九千本も植えた人は稀らしく、前例をみるとトメアスー植民地随一の篤農家石川道喜ぐらいのものであろう。

胡椒樹と間作のトマテ

　しかもその傍ら生活費を稼せがねばならないので、一作に三万本、一年三回として九万本ばかりトマテを栽培している。實に天馬空を征く獨走性は、傍でみていると壮観である七・八年前ベレーン郊外で始めて邦人がトマテ栽培した頃は、ベンフィカ區の増元七太郎ビジア街道の北川福一・正雄兄弟が模範農として物凄く生産出荷した。どちらも十万本前後植えていたが、この篤農家達が胡椒が成樹となるや面倒なトマテ栽培をやらなくなつた。その後ここ四・五年間、目立つたトマテ栽培者がいなくて、皆ドングリの背くらべであつた。處が俄然新進の藤山一家が昨今頭角を現わし、旭日昇天の勢でのしてきた。熱帯地方であり、特に赤道直下のベレーン市近郊では、トマテ栽培は雨量が多く、病害虫のため栽培は不可能とされていたが、邦人が苦心惨肚して研究の結果、接木法栽培を發見し、それからトマテがベレーン市場に現われた。その接木法栽培をもつてしても、なか〳〵むづかしい作物である

KENSUKE MIYAGUE
Estação Santa Isabel, E.F.B.
Belem, — Pará

ベレーン市郊外サンタ・イザベル郡

三宅謙助氏

原籍　長崎縣南松浦郡有川町神子島
渡伯　昭和二十九年十二月　あふりか丸

五島列島の神子島で生れ、幼少の頃から、怒濤逆捲く東支那海に出て漁業に従事した。渡伯寸前は兄弥平と共に、鰯のイリコ製造をなし、海産物加工業として市井で活躍した。處が突然朝鮮の横紙破り李大統領が一人ぎめで李ラインをつくり、暴力をたくましうしたその暴力に對抗したかつたが、戦力をもたない日本の悲しさ、朝鮮のなすがままに、拱手傍観せざるを得なかつた。このため彼等の鰯イリコ製造も影響して不況をこうむつた。

彼は兄弥平より一足先きに南米アマゾン移住に踏みきり、兄弥平の長男吉次郎、二男逸男と自分の長女るみ子長男正剛を連れ、トメアスー植民地山田義一耕地に入植した。恰度トメアスー植民地は、ピメンタ栽培の黄金時代で一寸した邦人地主が二三百万円も純益をあげているし、トップ級は四・五千万円も懐にして、空路訪日と洒落れていた。ピメンタと云うものはこんなに儲かるものかと驚き、山田耕地に僅か六ヵ月就労して退耕、ベレーン市近郊の池谷藤一耕地に移つた。

ここでピメンタ樹間作のトマテ栽培で利潤をあげ、早くも獨立の準備をなした。恰度近くに絶好の土地があつたので、土地代價は月賦拂いで購入し、二十余コントの資本で入植した。考えてみると冒險な事であつたが、背水の陣をしき、野菜やトマテ栽培の純益をみな胡椒栽培に投資し、全部で三千本を植えこんだ。甥二人は勿論、彼と別れて池谷耕地で働いたので、彼は夫妻して荒山開拓に邁進した訳である。仕事のおくれている時は月夜の明りで追いかけたこともあつた。たき夫人も若かつたので、物凄く協力した。

ピメンタを満植してから、いよ〳〵養鶏事業に着手した。鶏舎をつくり、色々と設備をするのに莫大な費用がかゝつた。そして七・八年間で、それが完成された。製材機、トバタ耕耘機トラクター、水揚電力ポンプ、貨物自動車、そして總べてが自家發電機でなされた。あの細腕二人の力で、よくもこれだけの機械化を完備したものである。住宅には冷藏庫をおき、ガス・コンロで文化的生活に浴している。確に彼の渡伯は有美に飾られ、滿十年目に満足すべき地盤をつくり得た。そして長女るみ子、長男正剛は成長し、学問に一生懸命であるが、伯國で生れた二女裕子（ゆう子）二男徹郎なども健在である。

長崎縣五島列島は、山嶽地帯の島が多く、もう開拓する余地がない。北パラナ・アラボンガス驛の信愛植民地（三千ヘクタル）には五島列島出身者だけで、立派な珈琲園を建設したが、北伯アマゾンで三宅兄弟が模範農場を建設した事は、この上もない悦びである。北伯長崎縣出身篤農家代表として推賞したい。切に今後の發展を祈る。大正六年一月二十四日巳年生。

ベレーン市郊外サンタ・イザベル郡

鈴木信也氏

原籍　北海道日高郡浦河町
渡伯　昭和五年六月　さんとす丸

NOBUYA SUZUKI
Estação Santa Isabel, E.F.B.
Belem, — Pará

　長男であつた彼は十一才の少年で、父信次郎に連れられ渡伯した。長姉は逝去し、次姉いく子（トメアスー植民地近藤秀雄夫人）が十三才で、弟改造、妹こう（トメアスー植民地武田武志夫人）等幼兒と　従兄の正一（歸國）も同行した。父信次郎は青年時代北海道廳植民課に勧務し、浦河・札幌・幾春別炭鉱等に勤務、軈て台灣に轉じ台南・嘉南等でサラリーマンとして働いた。測量・製圖の技術方面に精通していた。昭和四年アマゾン開拓を目的に、アマゾン興業株式會社が創立されるや長い植民地生活をしたので、卒先して株主となり、そして昭和五年マウエス郡に入植しグワラナー栽培をやつた。同じ船で入植した人では歯科醫岡田秀臣やマナオスで花作りの本田光衛などが生殘つている。

　マウエス植民地のグワラナー栽培は結局物にならなかつた。物すごいマラリヤ病も流行した。發起人の大石小作が自から専務取締役をやめ、個人經營の農場に移つたので、植民地の指導者を失つた。入植者は漸く稲を植えたり、マンジョカを植えたりして、自給自足の体勢を整えたが、會社は資金缺乏で遂に解散した。ユウレイみたような會社の宣傳に釣られて入植した植民こそ憐れであつた。

　彼等はマウエス植民地のグワラナー栽培に見きりをつけて、ベレーン市郊外に移轉した。サンタ・イザベル地方でトメアスー組の大槌伊太郎・星井友一・米澤重男・池谷藤助などと、蔬菜を栽培した。カスタニヤ南米企業株式會社の土地に移り、カカオ・規那・ランジャ・グワラナー・カフエーなども植えた母が間もなく逝去し家族は悲歎にくれた。邦人の一人もいないモジユー河の土地に入植し、炭焼と野菜栽培で四カ年も辛抱した事があつた。世界大戰でトメアスー植民地に軟禁され、四カ年陰惨な空氣につつまれた生活を送つた。

　岸勝美妹まさのと結婚し、ベレーン市郊外の生活四年を經て一九五三年現地に入植した。まさの夫人の絶大な協力で、あれから胡椒栽培に力を入れた。まさの夫人は兩親を喪い、兄勝美と共に辛酸苦勞をなめた女性であつた。現農場はサンタ・イザベル町つづきで便利であつた。あれから既に十二年はたつた。胡椒六千本の成樹と、一千五百本の若樹があり、養鶏も兼ね自給肥料の準備中である。

　父は妹婿武田武志耕地で静かな余生を送つている。姉いく子は三男三女の子福者となり幸福な生活を送つている。弟改造はモジユー地方で健在、既に三男三女の父親になつている。彼は夫婦の間に長男エイリヨ（ベレーン市中学校）二男ジヨージ、三男エジソン、長女エリサベスの三男一女がいる。在伯三十五年、過ぎ去つてみると實に一瞬の夢のようだ。夫妻の健在を祈る。大正八年十二月六日未年生。

ベレーン市郊外サンタ・イザベル郡

安藤博則氏

HIRONORI ANDO
Estação Santa Izabel, E.F.B.
Belem, — Pará

原籍　長崎縣西彼杵郡茂木町田上
渡伯　昭和二十九年七月　あふりか丸

故嚴父敏郎は鳥取縣人で、終戰直後始めて移民が再開されたときの大阪商船會社安藤船長は親戚に當り、故人は名門鳥取一中を卒業後、支那に渡り上海の東亞同文書院を卒業した。（ブラジル移民に親しい六代目駐伯大使石射猪太郎、海外興業株式會社ブラジル支店長中野巖等は敏郎の同窓先輩）学生時代はボートの選手で、明朗濶達な人物、上海商工信託會社に勤務した拔群の出生をして昇級常務取締役寸前に大東亞戰爭は日本の慘敗に終り、遂に積年の地盤を棄てて、故郷に歸つた。支那四百余州五億の民を相手にしていた故人の、敗戰後祖國生活は實に慘めであつた再びあの廣大な自由の天地で活躍してみたいと熱望している時に、アマゾン移住の話をきき、この絶好のチャンスをとらえ遂にアマゾンに渡つた。

當時彼は鳥取大学農学部獸醫科に在学中で二十五才、白皙童顔の学生であつたが、一家の責任をもつ關係から結婚は少し早かつたが、純眞無垢な女性禮子を新妻に迎えた。妹親子は高校卒業後に鳥取地方裁判所に勤務していたし、弟博美は西高校を卒業したばかりであつた。母のぶ子を交え五人の家族であつたサラリーマン向き家庭で、裸一貫から大密林開拓に飛込む荒仕事をするには、不向の家族であつた。然し長男である彼と弟博美は、二十才前後の若武者で青春の鴻圖を胸にえがき、太平洋の波濤を征服してアマゾンに着いた。

配耕地はトメアスー植民地山田義一耕地、ここに十カ月働いて漸くアマゾンの事情が解つたので、軈てベレーン郊外サンタ・イザベル郡池谷藤一耕地に就勞し、青年二人は、胡椒栽培に從事兩親や姉妹は蔬菜栽培に精励した。この兩親達の野菜栽培は素人であつたが、案外大儲けして、少しづつ純益を貯えていつた。そして幸運にも人情家の池谷耕主の援助で、月賦拂で土地を購入して獨立、安藤耕地の建設に着手、ピメンタ三千本を植えた。不幸にして耕地の完成をみづして父敏郎は病歿した。上海時代ゼイタクの限りをした夢をもう一度と念願していたが天は彼に幸しなかつた。のぶ子母堂を始め、父の心情を察し、その死を悲しんだ、やはり精神的に焦燥の氣があつたのだろう。

耕地の方は一九六三年度から養鷄もやり、三千羽飼育、トラクターも購入、農場の機械化をはかつた。長姉明子は平木義賢と結婚してカスタニヤル在住、彼は伯國生れの娘節子に恵まれた。次妹親子は三井物產ベレーン支店勤務須藤忠と結婚したが不幸病歿した。弟博美は故須藤善作五女八重子（須藤忠妹）を娶り、長女則子が出生した。「千里の道も一歩より」の格言の通り、急いでは事を損ずる。隱忍自重して、立派な農場をきづき、地下に眠る故人の冥福に酬いたい。昭和四年十月十八日已年生。

寫眞は故父や故妹親子健在のもの、前列右から母堂、嚴父、後列右から博美、禮子夫人、故親子、博美

ベレーン市郊外サンタ・イザベル郡

山内　隆氏

TAKASHI YAMANOUCHI
Estação Santa Isabel, E.F.B.
Belem, — Pará

原籍　静岡縣磐田市下大三郷
渡伯　昭和三十五年九月　あるぜんちな丸

アマゾン地方は、邦人によつて黄麻と胡椒の二大農産物が齎らされ、その利潤は年間數億ドルに及ぶだろう。このお陰で海外から輸入していた産物が、あべこべに海外に輸出され、ドルを稼ぐようになつたから邦人の力は偉いものだ。次が養鶏と蔬菜である。これも漸く盛況にたちいたつて、一万羽の養鶏家も輩出したし、蔬菜もトマテ年間十万本の栽培者や、甘藍（レポーリヨ）一作五十トン生産という蔬菜栽培家もでてきた。そしてこの次は園藝、果樹である。熱帶地方には葡萄栽培は不可能という常例を破つて、到頭モンテ・アレグレの山岡市郎は、立派な葡萄（本著七四頁）を作りあげた。果樹・園藝の世界は今後の宿題であるがそうした邦人将來の處女地が拓けている處え、本編の山内隆は移住した。

静岡大学農学部を卒業、静岡縣農業協同組合職員として勤務していた。園藝・果樹が大学時代の專攻科目であつた青年特有の積極進取の情熱旺盛な處から、田舎の農協團体職員として一生を過ごすことは、男子の本懐にあらずと決心、大きい野望をいだいて、遂にブラジルに渡つた。海外發展熱の旺んな静岡縣に生れ、しかも斉藤寿夫現知事は、稀れに見る移住に理解ある人物であつた。出發前には特に知事に激励された。質實剛健勤倹力行の青年だから、骨をおしむことをしない。研究して躰が疲れても少しも苦にしない。

渡伯してみて、アマゾンの雄大さを、つくづく感じた。しかも自分の專門である園藝・果樹の世界は、實に幼稚で、殆んど處女地に近かつた。果樹栽培も、バナナ・パイナツプル・パパイアなどの熱帶果樹でも殆んど自然のなすがままで、人工栽培しても野放しで手を加えなかつた。温帶果樹の柿・葡萄・枇杷などは大きな将來があり、前途は遼遠であつた。園藝に到つては、丸で未熟な世界で、野生の草花を採つて市場で販賣していた。この方はもつと／＼研究すれば、アマゾンで最初の園藝家になれると思つた。彼の心は太陽の如く明るい氣持で、その日／＼を過ごしてきた。軈て呼寄せてくれた杉本昇長女佳子と、同年十二月結婚した。恰度上陸四ヵ月目であつた。翌年は長男利夫が出生し、家庭の空氣は新婚の樂しさから、一增仲睦ましさを加えた。

獨立して農場を建設ピメンタ四千本を植えた。そして自給肥料の必要から養鶏も始め、渡伯滿四年目にして立派な農場になつた。住宅もショウシャなものをつくり、文化生活に浴し、農場を電化し、自動車を購入した。彼は父鉄治、母久枝兩親の二男に生れ、父は早く逝去し、母一人の手で育つた。だから母は彼を手離したくなかつた。渡伯してから後に母久枝は血壓たかく、脳溢血の兆候があるので、彼に再三再四歸國を歎願しているが、彼は生命を賭けたブラジル生活を棄てて、永住歸國したくないと思つている。三十才にして精神的な苦勞を味つた。切に自重を祈る。昭和九年五月一日戌年生。

を統制され儲からず、精米事業も縮少せざるを得なかつた。

突擧として勃發したドイツ潜水艦のブラジル商船隊撃沈事件一九四二年八月で晴天のへきれき、溺死したブラジル人民への同情は樞軸國民への憎となり、遂に日獨伊人の住宅燒打事件がベレーン市に起きた。そこで政府はベレーン郊外在留邦人を、トメアスー植民地に護送し軟禁した。トメアスー植民地は大密林の中にある植民地で、出入口はアラカ河唯一つで、收容所にはあつらえ向の場所であつた。折角苦心して築きあげた地盤は槿花一朝の夢で元のモクアミに轉落した。そしてトメアスー植民地で時期の來るまで默々として土に親んだ。あれから十二年空白時代を送り一九五二年また懐かしいサンタ・イザベル郡に戻つてきた。そして胡椒栽培に手を染め、一万三千本を植えた。養鶏にもこの方面では須永金得に續いて一九五四年から始め五千羽を飼育している

池谷藤一氏家族

追懐すれば彼のアマゾン開拓生活も三十二年になつた。戰前父の逝去の時は悲しんだが火酒製造製糖事業時代の華やかさは忘れられない。年齢も二十代の若々しい頃で、暴虎馮河の勇猛さがあつた。母けん（明治三十年生）は静かな余生を送り、彼は大橋敏男妹はなと結婚し、長女一枝（十九才）を始め、二女雅枝、三女光枝（共に高女）長男登、二男二郎、三男三郎、四女ちとせの三男四女に恵まれている。弟義雄は伯人女性ナザレーと結婚商業界で活躍、七人の愛児がおり、妹ひとみは市原津南三長男トーマスに嫁づき、愛児十人、弟謙三は伯人女性アウレヤを娶り、愛児四人、そして次妹松江は靜岡縣人大橋行雄と結婚したが、不幸夫が早逝し、孤閨を守り通して一人娘の靜香を成人させ、新潟縣人松村朝輝に嫁づかせ、隣地で生活して愛兒四人に惠まれている。母堂はいま三十余人の孫にとりかこまれ、幸福な余生を送つている。彼は祖國愛の強い人物で、終戰直後余剰の金を、母校や母縣などに贈つたりした。サンタ・イザベル地方邦人草分開拓者として、大橋敏男と共に永久に忘れることの出來ない人物である。大正五年二月十六日辰年生。

池谷氏母堂

ベレーン市郊外サンタ・イザベル郡

池谷藤一氏

原籍　静岡縣藤枝市青木
渡伯　昭和八年八月　あらびあ丸

TOICHI IKETANI
Estação Sta. Izabel – E.F.B.
Belem, — Pará

静岡縣で創立の最も古い学校である藤枝農業高校（舊農学校）出身で、親子三代に亘つてこの学校の出身者であるのも珍らしい。祖父はこの学校を卒業後、大いに社會に盡し、縣會議員までつとめた。父藤松は同校卒業後に濱松農事試験場長を長年勤め、後に銀行にも勤務したことがあつた。三代目の彼は同校を卒業して間もなく父と一緒に渡伯した。日本一の鐘紡が大株主で經營する南米拓殖KKだから、トメアスー植民地はアマゾンの理想境と思つて入植してみると、想像とはまるで正反対であつた。マルキター農場就勞三年、その内にマラリヤ病が猖獗を極め、軈て猛毒黒水病の猛襲となり、父藤松は一九三五年一月七日四十四才の働き盛りで昇天した。それと前後して同航海の人々も故人になつているが、當時のトメアスー植民地のマラリヤ病は醒慘を極めた。

これ以上の犠牲者を家族から出すまいと決心、健康地であるベレーン市郊外サンタ・イザベル地方に移り、草分入植者の同縣人先輩大橋伊太郎に相談した處、恰度彼も他に移轉したいと云うので、其の耕地百二十五ヘクタルを譲受けた。幸いこの土地にいて四年間で大いに儲けた。當時マンヂオカ製粉工場を建て、多くの伯人を使用、大々的に製粉したので、ベレーン市商人はこぞつて彼の出荷を待ちわびる盛況ぶりだつた。大橋・池谷二家族のマンジョカ粉は當時ベレーン市で余りにも有名であつた。

莫大な純益をあげ、次に十八キロ奥に二百五十ヘクタル（現在の北川正雄農場の奥）を購入、甘蔗を栽培ピンガ（火酒）製造を始めた。そのピンガ製造で大儲けすると、次に製糖工場を始めた。續いて精米工場を建て、アマゾン地方邦人唯一の工業家となり、池谷藤一の名はブラガンサ沿線に轟いた。この頃のアマゾンは工業が發達せず、砂糖は遠くペルナンブッコ州、ピンガもマラニヨン州から船で輸送されていたもので高價についた。それで彼は輸入品より少し値引したので、その製品の販路は擴がり、注文に應じきれないぐらいであつた。このまま進めば世の中は無上の極樂、然し「月に叢雲、花には嵐」とかや、豫想もしなかつた日本の眞珠灣攻撃で世界大戰が勃發、遂に一九四二年伯國も對日宣戰布告、邦人は敵國人となつた。そこで彼には即日火酒製造に數十倍の税金をかけられた。不當な税金と思つたが敵國人で抗議の申しようもなく、遂に製造を中止した。製糖業は續けたが價格

母堂と藤一氏、令嬢近影

TOMOTERU MATSUMURA
Estação Santa Izabel, E.F.B.
Belem, — Pará

ベレーン市郊外サンタ・イザベル郡

松村朝輝氏

原籍　新潟縣北蒲原郡安田町
渡伯　昭和三十年四月　あふりか丸

　終戰の時が滿十一才、あの荒波時代に中学を經て安田高校を卒業し、伯父が經營していた昭和化学研究所に勤務していた。兄松村仁一郎（春美夫人は彼の實姉）が、アマゾンに移住するので、同行を薦めた。自由の天地に鴻翼をのばすのが、男子の本懐なりと共鳴、兄と共にトメアスー植民地細川實耕地に入植した。耕主細川實は朝鮮生れで篤農家、入植した新移民も一色壽・高倉四三次・青柳三四郎・國井・金井と言つた篤農家揃いばかり、彼等は二カ月で退耕し、ベレーン郊外に進出、池谷藤一の世話で現地に入植した。軈て兄は自動車修理の特殊技術をフルに動かして活躍、コツケイロに移轉し、現在ニツボニツカ會社の技術部主任になつているが、昭和三十一年十一月までは、一緒に開拓に從事した。

　現地開拓當初先輩の池谷藤一とは土地斡旋の事から親交をふかめた。池谷は靜岡縣人で渡伯三年目に父を喪い苦勞をなめ、血もあり涙ある拓人であつた。その妹松江は靜岡縣人大橋伊太郎弟行雄と結婚したが大橋行雄が一女靜香を殘して病歿した。松江未亡人は故人の靈を慰めつつ孤閨を守り通し、靜香を立派に成人させた。この靜香と縁談がまとかり、遂に結婚して、兄から獨立した。結婚後は壯健な躰を鞭韃、他人眼にも羨やましい位に、事業は順風滿帆に伸展してゆき、瞬く間に巨利を博して、胡椒四千五百本を完植した。そして余力を驅つて隣地に二十五ヘクタルを增購、ついでに兄の耕地を購入してピメンタ栽培に急ピツチをあげ、一九六四年二千本を植えた、兄の耕地を全責任をもつて彼が管理し、兄弟愛に生きる美談を殘した。兎角金儲けに夢中になる移民社會は、妻帯して分家すると、肉親愛が薄くなり、そこへ愛妻にそそのかされていつしか實兄と遠縁になり勝ちだが、その薄情な社會で、常に變らない兄弟愛を示しているのは、美ましい限りである。既に農場に必要なトラクターや貨物自動車なども購入し、今後は農場の擴張に專心できるようになつた。

母堂松江夫人

　靜香夫人は母堂松江夫人や祖母けん未亡人に似て、惡の世界を知らない純眞な女性、彼のよき協力者である。夫婦の間に長男アルマンド輝雄、長女エリアーナ輝美、二男フェルナンド靜雄、三男マリオ哲雄の三男一女に惠まれている。二十一才で渡伯した彼も既に三十一才の働盛りになつた。今までは基礎時代の十年で、今後の十年間は事業の飛躍である。切にこの三十代に大いに活躍し、日本にお る從兄弟などに「松村兄弟の眞價」を示してもらいたい。昭和九年四月二十二日戌年生。

SUSSUMU URAMOTO
Estação Sta. Izabel E.F.B.
Belem, — Pará

ベレーン市郊外サンタ・イザベル郡

浦本　進氏

原籍　山口縣厚狭郡厚狭町
渡伯　昭和三十年五月　あふりか丸

在伯満十年、追懐すると十年は一瞬の夢であつた。末子の廣重（ひろしげ）が成長してゆく姿をみるたびに、この子の上にいた二男時雄の姿を想い浮べる。そして「あの子が生きていたら、もうこの位に大きくなつているだろう」と瞼に露がたまつてくる。時雄の可憐ないぢらしい當時の姿を連想するのであつた。彼の耕地はベレーン市から、ブラジリア首都に連絡するB十四號幹線國道に沿い、住宅の十米前は、アスファルト舗装道路である。時雄少年が一寸横ぎろうとした時に、貨物自動車がきてアッという間に天災に遭つた。少年の死は悲しく、両親の記憶は永遠に残つた。話をきいた著者も、少年の姿を連想し同情を禁じ得なかつた。移民の生活は涙が多い。涙なき人生は、砂漠においてオアシスがないのと同じである。この苦しみに堪え精神的苦悩を胸に祕め、明朗な家庭を營んで進んでいつてもらいたい。

敬愛する彼の生地は鹿児島縣長島町であつた。有明湾に面し遠く熊本縣の山々を望んだ風光明媚な島で育つた。數奇の運命の後に二十五才で獨立した。渡伯の動機は、數回の水難で經済的逆境にたつた。日本で水害を一回こうむると、その損害を取戻すのに數年かかつた。彼は數回も蒙つたのだから、逆境にたたざるを得なかつた。ここで賢夫人の譽たかいふみ夫人と相談し、百八十度の人生轉換のコースを決行、地球の反對側にあるアマゾン移住に挺身した。幼児ばかりだつたので家族構成のため、實弟浦本春義に同行してもらつた。時に三十五才、まだ獅子奮迅の勢で自己人生を開拓してゆく旺盛な斗志もあり、肉体的にも頑健丈夫、トメアスー植民地大橋啓助耕地に入植した。在植一カ年漸くアマゾン事情が解つたので、獨立精神旺盛な彼は、ベレーン郊外で土地をさがした。

カスタニヤール附近からビジア街道とまるで足にタコが出きる位に視察し、交通不便でない條件、土地の肥沃である條件などに適している現地を漸くさがし、遂に移轉して獨立した。荒山を開墾し、三千本の胡椒を栽培したが、成樹になるまでには毎年トマテ栽培で生計を支えていつた。間もなく弟はサンパウロ市に移轉し、夫婦二人で孤軍奮斗した。幸い積年の努力の甲斐あつて、今日では三千本の胡椒も成樹となり、住宅も自家用發電機により電化し、トラクター、自動耕耘機、消毒自動機など、機械も一通り完備した。

長女のり子はサンタ・イザベル高等女学校に通学している。長男砂夫、三男廣重も健在である。弟春義もサンパウロ市から歸つていまベレーン市で農産物仲買商として健斗している。在伯十年間内助の功績をあらわしたふみ夫人も、漸く安堵の胸を撫下した。十年一昔を越へ第二期の子供の教育時代に移つた切に浦本一家の發展を祈る。大正九年八月二十日未年生。

ベレーン市郊外サンタ・イザベル郡

藤井正己氏

MASAMI FUJIY
Estação Santa Izabel, E.F.B.
Belem, — Pará

原籍　鳥取縣東伯郡三朝町
渡伯　昭和二十九年十一月　あめりか丸

謙譲の美徳たかく、座談していても、一家の空氣は文化的で話しやすい。特に海外生活が長かつたからか話題が豊富で、しかも戰後相當苦勞をした割合に明るく、話す口調も少しの陰惨味がなくて親しみやすい。金・金・金と夢中になつている家庭と違つて、精神生活を尊んで、平和な生活を營なむことを、モツトーとしているのだなあーと感じた。主人正己主婦ひさよ二人の顔を眺めながら、彼等夫妻の内的生命の麗わしさが羨やましくなつた。無慾恬淡共存共榮に生きる拓人である。

彼は故里の海成中学を經て倉吉中学を卒業、二十二才覇氣滿々の年輩で昭和二年フイリツピン島ダバオに渡り、福岡縣出身吉田某の事業經營に參加、そこで青春の希望を充分發揮し、大いに活躍した。事業主の吉田は稀にみる努力家で、皇紀二千六百年祭には比島代表として帰朝した人物、この處で粉骨砕身した事は、彼の青年時代に少しの悔を残すことなく、比島生活は有意義であつた。比島生活十四年目に大東亜戦争勃發、緒戰の折は軍司令部と連絡して畜産組合連合會を結成して食糧配給の便をよくし、また一方比島語に通じていたので、宣撫班となつて治安に盡した。こうした奉仕生活も軈て日本の惨敗となり、涙をのんで永住の地を去らねばならなかつた。苦斗十八年、一にぎりの砂、一本の草花さえ懐かしい想い出ばかりのタバオ生活に別れをつけた。ベンゲット移民が作つた道路、草分道路移民を救つてマニラ麻を開拓した太田、そして古川等の残した歴史は無残にも消えていつた。彼は十一月復員して福岡縣田川市三井鑛業株式會社勞務課に勤務した。悠々たるタバオ生活と違つて、生活難にあえぐ終戰後の日本社會、生きていく事が漸くであつた道徳は頽廃、勞資斗争は激化、第三次原爆戰におびえる日本、息づまるようなとき、アマゾン移住募集の聲をきき、これ幸いと應募した。

昭和二十九年ベレーン市郊外第二回蔬菜移民として入伯、サンタ・イザベル郡大橋敏男耕地に腰を下した。耕主大橋は當時北伯第一の胡椒成金、しかも苦勞人であつてよく指導してくれここに二年辛抱した。焦らず急がず二年辛抱したことは確かによかつた。伯國の事情が解つたので、伯人耕地を買收し、ピメンタ三千本を栽培、ついで養鶏一千五百羽を飼育している。十四才で渡伯した長女照子は長崎縣人三宅吉次郎に嫁づいた。長男正徳が成人し耕地の管理をなし、二女道子はベレーン市師範卒業、二男剛（たけし）も勉学中、二十一才で渡伯した甥林秀哉（ひさよ夫人の姉・林とよの三男）は三宅吉次郎妹律子と結婚して幹夫が出生した。秀哉は渡伯前直方鉄工所に勤務した勤倹力行の青年で、當年三十一才、唇歯補車の如く今日まで彼の事業に協力している。切に一家の發展を祈る。明治三十八年二月四日己年生。

GUI-ICHI NAKAMURA
Estação Santa Izabel, E.F.B.
Belem, — Pará

ベレーン市郊外サンタ・イザベル郡
中村儀一氏

原籍　静岡縣藤枝市
渡伯　昭和二十九年二月　あふりか丸

静岡縣藤枝市出身で、アマゾン移民の先輩池谷藤一と同郷出身である。十八才から役場で十年精勤し、ついで教員生活が長かつた。そうしてた地味な生活を長くつづけた人物であるだけ、一攫千金の夢をみらず、大地に根を生やし、悠々たる生活を續けている。あれがいい、これがいいと云つても附和雷同する人柄でない。日本移民には珍らしい型で、「荒廢になつたアマゾンの土地に今から有用材の植林をしておくことは百年の大計でありますね」と云い、無限の密林資庫の大アマゾンに植林論を説く篤農家である。考えてみると南伯サンパウロ州は五十年にして、殆んど森林がなくなつた。北パラナは三十年で日本の本州以上の大密林が丸坊主になつた。薪炭にしたり製紙原料にする雑木は、まだまだブラジルでは豊富であるが家具、建築材料にするセードロ・ペローバ・マルフィン等有用樹が殆んどなくなつてゆく。確に彼の言う植林論は理論が整然である。そして彼自身、百年の計をたてて範を示し、果樹アバカテ二百本を植えている。

アマゾン邦人移民一千數百家族のうち、人工的に果樹栽培をしている人物は、右に葡萄栽培の山岡市郎がおり、左に本編の中村儀一のアバカテ栽培をもつて、兩横綱となし、そしてあとに續く大關關脇小結がいないのが情けない。漸く最近ポンカンが邦人によつて生産されるようになつたが、まだまだ處女地であつて、ピメンタの魅力に押しまくられている。そして養鷄、トマテ培栽と單一農に傾むきやすい。彼は現在三千本のピメンタ栽培が主作である。然し主作のピメンタでも三千本にとどめているのは、單一農の冒險を愼んだからである。そして余力をアバカテに注いでいる。實に廣大な果樹園で、アバカテ樹は成樹となつている。彼の如き太つ肚の人物の心中は、葉野菜をつくつてコソコソと儲けている連中には推察できんだろう。

昭和二十九年二月ベレーン市に着いて、郊外コツケイロ植民地長谷川貞雄耕地に入植した。耕主長谷川貞雄は第一回トメアスー植民地開拓者で苦勞人、ここに一年半も辛抱している内に獨立の機運がきたので、長谷川耕主の親友大橋康男に、適地を物色してもらい、漸く現地をさがしあて、一九五六年（昭和三十一年七月）移轉して開拓の途についた。この耕地は幸に大橋一族の耕地に隣接していたので、入植當初は大橋兄弟、その親戚の池谷藤一等戰前開拓者の聲援もあつて、耕地建設は辛酸苦勞はなめたが、精神的にはいたく明るかつた。悠々自適のうちに今日の生活安定の地盤をつくつた。きみ夫人の涙ぐましい協力は書くまでもない。長男克已、二男敏彦の協力は中村家を泰山の安きにおき、長女夏繪はベレーン市高女で勉学中、三男有三等健在である。切に今後の健在を祈る。明治四十二年二月十六日酉年生。

（右）北伯一を誇るアバカテ園（左）家族一同

NOBUICHI SATO
Estação Castanhal, E.F.B.
Belem, — Pará

ベレーン郊外カスタニヤール郡

佐藤信市氏

原籍　群馬縣群馬郡榛名町
渡伯　昭和六年七月　さんとす丸

東京農業大学出身の篤学者である。上塚司がパレンチンスにアマゾニヤ産業研究所を開いたので招聘されて昭和六年高等拓殖学校第一回卒業生と一緒に入所した。乱暴な高拓生と共にビラ・アマゾニヤで熱帯作物の研究に沒頭、ワイクラッパや、アンヂラなどの密林地帯をかけずり廻つて・若い青年技師は大いに情熱を燃やした。三年後の昭和九年に「あふりか丸」で南拓アカラ植民地總支配人に赴任する高木三郎家族の一員となつて縫子夫人が渡伯した。航海中は高木三郎が移民輸送監督だつたので、縫子夫人も特別待遇をうた譯である。

ベレーン市に熱帯植物薬草研究の試験場を拓務省管轄下で創設しようとの話がおきて、一時拓務省技師吉田悟郎の下で働らいていたが、大藏省の豫算がとれず中止になり、拓務省囑託を辭めた。そしてカスタニヤール南米企業會社の南拓農事試驗場に勤務した。この試驗場は福原八郎が創意で開設した農場で、總ゆる熱帶作物を試作して、そのいいものをトメアスー植民地に移植させる方針で、內藤克俊と生馬重一が農場を管理した。內藤は鹿兒島高農出身、生島も大阪農学校出身、規那、カカオ・アンジローバ・カフエー・アバカテ・ココ椰子・肉桂・ランジヤなどが植えてあつた。二人が轉職し、手不足で荒廢していた處へ彼は赴任した。

昭和十一年頃から獨立して養鶏事業に手を染めた。アマゾン地方養鶏事業の元祖で、まだ天の岩戸時代であつた。彼が始めてから暫くしてマウエスから移轉した唐木通雄（外語大出身）などが養鶏を始めた。最初はサンパウロから白色レグホン、ニユーハンプシヤ、プリマスロック、ロードアイランなど雛をとりよせてやつた。こんな處女地の研究時代の事とて、ベレーン農事研究所でも養鶏に關する資料がなかつた。

大戰勃發で一時パレンチンスに戻つたが、間もなくカスタニヤールに歸つた。養鶏孵化場建設が目的で、ホウソウの薬を製造するため、ハトを試驗所に持つていつて、それで薬をつくつたりした。ドクトル・ジユゼー・レイテも彼の研究熱心に驚き大いに援助した。ブラジル農務省畜産課ベレーン種禽場でも大いに認め、種鶏育成所に指定した。

一時はフランキ五台（一台二百五十卵の能力）を備え、五千羽の鶏をおいたが、熱帶地方では、種鶏場經營はむづかしく、原因不明の病氣が入つて、飼育の鶏もそのため多くが死んだ。現在まで希望を棄てず研究をつづけている。北伯養鶏史を語るには缺くことの出來ない人物である。弟佐藤正敏はレシーフエ神学校に奉仕し、今は上山芳美が右腕となり協力している。明治三十五年七月二十二日辰年生。

北伯養鶏家の元祖・佐藤夫妻と上山芳美君

KICHIJIRO MIYAGUE
Estação Santa Izabel, E.F.B.
Belem, — Pará

ベレーン市郊外サンタ・イザベル郡

三宅吉次郎氏

原籍　長崎南松浦郡有川町
渡伯　昭和二十九年十二月　あふりか丸

彼はベレーン市近郊邦人胡椒栽培者一千家族の代表的篤農家で・北川一族・高倉一族・長島一族の三羽烏の経済力を、追越してトップにたつてゆこうとする、眞摯精勤な人物だ。特に感心させられる事は、長男吉次郎、二男逸雄の兩人が、兩親弟妹などより四年前に渡伯し、二人して野菜を栽培、殆んど不眠不休の努力をつづけ、その儲かつた金で五十ヘクタールの土地を購入した。池谷藤一耕地で、晝間は勤務條件で縛られているので、時間外の夜間働らいてトマテ栽培をやり、必死的精勵振りを示し、近隣の邦人をアッと驚ろかした。勤勉家揃いの邦人が、驚嘆して激賞するのだから如何にこの二青年が努力したかが解るだろう。月夜に施肥散水採集消毒したこと幾度ぞ「艱難汝を玉にす」と云うが成程格言の通りである。著者は「海外開拓はかくあらねばならぬ」と、この二青年の實例を日本の後輩拓人青年に紹介したい。

父彌平、母そよ兩親の長男に生れ、父彌平は海産物商で鰯（イリコ）の製造販賣に從事し、その關係で吉次郎は漁船にのり朝鮮済州島あたりまで出漁していた。李ラインが張られ將來の不安がつのつたので、昭和二十九年に叔父三宅謙助が渡伯する際に同行した。時に兄吉次郎は二十四才であつた。配耕地はトメアスー植民地山田義一耕地で五カ月就勞して、すぐベレーン市郊外池谷藤一耕地に移り、ここで二カ年働らいた。叔父謙助は僅か二十日で獨立したが、彼等は自立するだけの資金を貯めるまでは退耕しなかつた。ここで晝夜兼行の働き振りを發揮、遂にその貯金で現地五十ヘクタールの土地を購入した。最初三千本の胡椒を栽培し、漸く目鼻がついたので、一九五八年（昭和三十三年）兩親弟妹を呼寄せた。

あれから一家總力で農場擴張に盡したので、經濟力は急速に膨脹、ピメンタも一万一千本に增植、昨年は五十トンの收穫をあげ先輩拓人をアッと驚ろかせた。一九六三年には三百万円を投資して宏壯優美な煉瓦の二階家屋を建てた。農場を全部電化し、水道を引き、そして自給肥料のため養鷄を始め、三千羽を飼育し、トラクター、耕耘機、貨物運搬自動車、自家乗用自動車など總べての機械化を促進完備させた。獨立して七年六カ月目で、その發展のスピードな只々驚ろくばかりである。

長男である吉次郎は鳥取縣人藤井正已長女てる子と、妹（長女）律子は藤井正已甥林秀哉と夫々結婚した。弟（二男）逸雄はチンボテア在住關岡如幼兒二女百合子を娶り、正弘・小百合の二兒出生、弟（三男）禎四郎はアナニンデウア福岡縣人森十兵衛娘てつ子を娶り、良一出生、弟謙治、妹喜美子、妹邦子、弟末雄等健在である。長崎縣人戰後派移住者の龜鑑として、著者は讃辭を贈りたい。彌平氏明治四十一年十一月二十九日、吉次郎氏昭和五年四月二十五日生。（上）家族一同（下）宏壯な住宅

毅であつた。犬養は五・一五事件で「話せばる」「問答無用」の一刀で殺害されたが、伊藤博文・大隈重信・原敬と共に日本憲政史に残る人物だが、彼と交つた書簡を多く藏つている。著者も十年昔し、その藏書を讀ましてもらつたが、犬養から書簡をもらつた彼の面影が追想された。

上塚司のアマゾン開拓に共鳴し、岡山縣支部長をつとめ、長男万馬が高拓生となり（第一回の卒業生）家族と共にアマゾンに渡つたのは五十二才で、昭和八年九月もんてびでお丸であつた。フォルモーザ島で孤軍奮斗し、二男悅彥は黄麻栽培研究中に病歿した。尾山種が發見されたのは、第七回目の栽培の時であつた。試作五年目で一米四・五十しか伸びず（本論寫眞五十四頁）遂に匙を投げ、東京の上塚所長に報告した後に、二本の伸びのいい黄麻をみつけ、それを育てた。一本は流失、一本が殘つたものである。そしてこれが一九三七年には第一回の製品となり、キロ一ミル二百替えで五噸を販賣した。あれから二十五年目の今日は毎年四万トン内外の生産があるのだから、その發展はものすごい。黄麻のお陰で、日本人でも中島敏三、杉山義見の如く數十万コントス儲けている者もいる。

（上）尾山万馬夫妻（下）子供達

長男万馬ばパリンチンス地方の耕地（河に添つて六キロ）を一九五九年十二月賣却し、ベレーン近郊カスタニヤールに移轉義兄弟片岡一家と共同でカスタニヤ農場（片岡利夫一万五千本片岡成美一万本、尾山万馬一万五千本）を經營し、傍ら自己農場胡椒三万本（成樹五千本、四・五年生二万五千本）を經營した。一九六三年にカスタニヤ共營農場は三井物產に賣却した。兩親もパレンチンスから一九六四年八月移轉して、長男万馬と一緒にくらしている。毎日讀書が趣味で京子夫人と共に幸福な晩年を送つている。

長男万馬夫人はカスタニヤールの名門故片岡治養の二女惠美で、夫婦の間に（孫）長女ノエーミ、長男ネルソン、二男ウイルソン、三男ロベルト、二女マルソー、三女ロゼリー等で健在である。惠美夫人は日伯語に精通せる貞節な女性で、尾山家次代を導く主動力をもつている。三男多門はパレンチンス在住、長女芳芽は高拓生本間武三郎（サン・ルイス在）二女可能は高拓生芹澤正芳（マナオス在）にそれぞれ嫁づいている。良太氏ー明治十五年十二月一日午年生、万馬氏ー明治四十五年四月二十日子年生。

ベレーン市郊外カスタニヤール郡

尾山良太氏
尾山万馬氏

RYOTA OYAMA
KAZUMA OYAMA
Estação Castanhal, E.F.B.
Belem, — Pará

原籍　岡山縣井原市門田町
渡伯　昭和八年九月　もんてびでお丸

父尾山良太は、一九五八年（昭和三十三年）日本移民渡伯五十年祭のとき、外務省から撰ばれて黄綬褒章を贈られた。その時に一緒に黄綬を贈られたのは四人で、安田良一と鐘ガ江久之助は、水田事業の功績があり、八ツ田一藤は甘蔗栽培の功勞を認められた。あとの一人は本編の尾山良太で、彼はジュート（黄麻）栽培の種子發見者として、その功績を讃えられて褒賞された。四人の事業のうち、後世までもブラジル社會のため恩恵を殘したのは、やはり黄麻栽培の尾山良太が一番大きいだろう。

一年間三万トンも輸入していた黄麻を、アマゾンで生産するようになつて、遂に輸入をくいとめたし、その後增大してゆく需要を滿たしてくれている。兎に角、一年三千万俵の珈琲袋を始めブラジル人口七千万人が常食するフェイジョン豆、白米、それから玉蜀黍、落花生、大豆などに使用する黄麻袋は莫大なものであつた。この原料生産に着眼したアマゾニヤ産業研究所長上塚司と、現地支配人辻小太郎は偉大であつたと云う他はないが、最初四・五年間は印度から持参した種子でさえ、駄目だつたのをあきらめず、粘り強く種子採集に取組んだ尾山一家は偉らいと思わなくてはいけない。儲ける事より、どうかして印度産に劣らない黄麻を生産するようにと念願種子採集に努力した譯だ。もう五十五才を越え、情熱のさめる年輩であつたが流石に意地ぱしの強い性格は黄麻と運命を共にする決心であつた尾山種發見の苦心は、本論（五十四頁）に書いてあるから、そこを讀んでもらえば解るが、骨身をけずられるような思いで、たつた一本の黄麻を大切に育てた。我が子を育てるより、心配して育て、そして一キロ余の種子を採集した。これが今日アマゾン二大産業の一つになつているジュートの誕生であつた。

バレンチンス市長の音頭とりでバレンチンスに彼の胸像が建つそうだが、寧ろおそきに過ぎると言いたい。もしこれが伯人であつたら、とつくに胸像は建つているはずだ。市廳に豫算がなければ、市長の斡旋で黄麻で儲けている製麻會社や、中間仲買商人から寄附をあつめればすぐ建てられる譯である。どうせ建てるなら生きている時に建てて記念に贈りたい。本年は八十三才になつた翁のため、心からの贈りものだ。

八十三翁尾山良太近影

渡伯前は故里で農業新聞を發行、農業研究會を指導、三間農業組合理事などをやつていた。剛毅果斷で政治が好きで、遂に岡山縣憲政會遊説部長をやつた。若槻禮次郎首相、濱口雄幸首相とも親交があつたが、一番親しかつたのは岡山縣出身の犬養

ベレーン郊外カスタニヤール郡

岡島政夫氏

MASAO OKAJIMA
Estação Castanhal, — E.F.B.
Belem — Pará

原籍　群馬縣前橋市向町
渡伯　昭和二十九年十一月　あめりか丸

日本で生糸商人であつたから、頭がひくくて謙譲の美徳を備えている。八重子夫人も教養ある女性だし、長女泰子、長男昇等も日本で中等学校に通つたので、なか〳〵禮節を知る人達である。昭和二十八年の金融界恐慌で生糸商をさつぱりとやめ、ブラジル・サンパウロ州の養蚕移民に應募して、本職の生糸の知識を生かそうとしたが、應募の時期を失い、遂に翌年まで待てず、アマゾン移民として、北伯移住に決心した。

配耕地はベレーン郊外サンタ・イザベル郡大橋耕地・耕主大橋敏男はその頃北伯アマゾン一の胡椒成金であつた。ここで三カ年も辛抱した。同船できた移民は、一年か半年でどん〳〵獨立したが、子供もまだ少年少女だし、無理に獨立して失敗することをさけた。軈て時期がきたので、一九五七年（昭和三十二年）現地を物色して、五十ヘクタールの土地を購入、胡椒を栽培した。獨立してから滿七年目になるが、毎年〳〵少しづつ植えたピメンタも一万二千本になつた。自給肥料時代に入り、養鶏三千羽の經營、卵の販賣は直接ホテル、食堂、菓子屋、パン屋などに卸すので、中間搾取がないから、利潤は莫大である。煉瓦建てのシヨウシヤな住宅に住み、自家發電の電燈をつけ、台所にはガス・コンロ、冷藏庫を備え文化生活に浴している。長女泰子、長男昇二十五才、二男博・三男勇等みな常識にとみ讀書家である。群馬縣出身・戰後派移住者の異才である。明治四十二年六月四日酉年生。

ベレーン市郊外カスタニヤール郡

那賀利則氏

TOSHINORI NAKA
Estação Castanhal, — E.F.B.
Belem — Pará

原籍　大分縣大分郡大南町
渡伯　昭和二十九年十月　ぶらじる丸

多くの子弟を教育するために、總ゆる逆境を克服して、五十ヘクタールの那賀農場を夫婦して築きあげた勤倹力行の士である。

渡伯したのが二十五才のときで構成家族として弟勇が同行した。配耕地は奥アマゾン大流マナウス市對岸マナカプル植民地ベラ・ビスタ區痩地で籾が一ヘクタール一・二俵しかとれぬ處に一年半もいた。弟勇は三分一致司等とロンドリーナに飛び、日語学校の教師になつた。大分工業高校建築科を卒業して、九大中退で渡伯したから教師は適役、現在は移住事業團に入社してロライマ州ボア・ビスタ首都駐在員である。彼はベラ・ビスタを退植しトメアスー植民地岡部孝耕地に一カ年、ベレーン市郊外下院議員アルマンド・カルネーロ所有耕地管理人となり、次いでイタリア耕地、ブラジレイロ耕地と轉々し、カスタニヤール佐藤信市耕地に轉し一年、そして一九六〇年十月五日現地を購入して、二千本の胡椒栽培を遂行、三千羽の養鶏をやり、トマテ、野菜栽培を不眠不休で遂行している。今日まで耕地を轉々したのは、勞働力のない幼兒ばかり多かつたので、定着する土地を購入出來なかつた事にもよる。日本生れの長男元廣、二男康祐、長女けい子、二女ひろ子三女あき子、四女その子の二男四女がいる。小夜子夫人が稀にみる賢夫人なるため、この幼兒を育てながら、五十ヘクタールの土地を購入するまで、健斗したのだから、その内助の功績は大きい。同航海の三分一致司は一九六〇年僅か四十コントスの資本で農場を拓きブラジリアーの農場を建設した。「待てば海路の日より」で、大器晩成を祈る。昭和四年十月十四日巳年生

ベレーン市郊外カスタニヤール郡

井　上　勝　氏

MASARU INOUE
Estação Castanhal, E.F.B.
Belem, — Pará

原籍　高知縣須崎市土崎（舊多野郷村）
渡伯　昭和三十二年一月　ぶらじる丸

アマゾンの米作移民として有名なグアマ第三次移民で入植し、香川縣出身の日本一の米作王大川義則、高知縣大正町長（元縣會議員）林徹、鹿児島縣高城町農業委員戸川三郎などと組んで、グアマ農業協同組合を結成したその立役者である。

グアマ在植中は、三年頑張つてカカオ三千本、ゴム二千本、ウルク八千本を植えたが、湿地帯の上に、毎年浸水するので、半年は野菜も出來ず、永年作物の將來性がなく、永住を断念した。確かにグアマ植民地の造成は、監督官廳の計画誤算であつた。もう七・八年過ぎさつたが、今日になつて「ああすればよかつた、こうすればよかつた」と正しい意見が出るようだ。然し當時は全く混乱期であつた。百四十家族入植した邦人が、既に百家族以上退植したことのみでも如何にグアマ植民地の水田計画がむづかしかつたかが理解されよう。

彼は渡伯前に須崎市廳農村課長の席に就いていた。從來移民を送る立場で大いにブラジル熱を鼓舞したが、他人に海外熱を吹きこむより自分で手本を示すべきであると決心、この試金石に耐えるよう賢子夫人の協力賛同を得て・遂にアマゾンに渡つた。だから彼の渡伯は一般移民と立場が違つていた。グアマ移民として是非目的を達したい念願で、奮斗したが時に利あらずして退植のやむなきに至つた。彼の移民生活にとつて、グアマ生活は大きな試金石であつた。そして改めて日本移民政策がデタラメである事が解つた。いままで海協連のデタラメで無責任な移民宣傳にのせられ、一地方市廳の一課長である彼は、それをうのみにして、宣傳していたに過ぎなかつた。自から一介の移民となり、生命を賭して斗つた三ヵ年の悪戰苦斗で、植民地造成の眞相を掴み、自分に即した眞實の植民政策を確握した。井上勝のグアマ植民地耕地建設は失敗に終つたが、この一大眞相を把握したことだけでも、大きな收穫であつた。

かつての盟友林徹はゴヤス州で野菜栽培、戸川三郎はブラジリアで牧畜、大川義則はコシジューバ島で胡椒栽培と、各々自分のコースを進んでいつたが、彼はグアマ徹退後、一年間バカレーナ郡小川鎌一耕地で一息抜き、翌年故片岡治義が同郷の處から片岡の斡旋で現地を購入し、再興の念に燃えて入植した眞摯清廉の拓人で、義侠心の強い土佐つ兒である。一九六〇年の開拓着手で、現在で五年目五千本の胡椒を栽培、余力で三千羽の養鶏事業を經營している。課長夫人で安樂な生活だつた賢子夫人も、涙ぐましい健斗振りである。聰明な女性長女嘉代はグアマ植民地林丈一に嫁づき、理智的な二女はチンボテア關岡に嫁づいている。中学二年で渡伯した長男雅敦は今年二十三才耕地を管理し、三女小美も結婚適齢期に達した。自から移民社會に投じた彼の運命に幸あらん事を祈つて擱筆す。明治四十四年六月六日亥年生。

ベレーン郊外タバナン

千葉彦(けん)祥(よう)氏

原籍　岩手縣一ヵ關市
渡伯　昭和六年六月　さんとす丸

KENYOU CHIBA
Caixa Postal, 363
Belem, — Pará

彼は高拓生ではないが、その第一回卒業生と一緒に荒木衛門（ジュート栽培研究者）佐藤信市（東京農大卒職員）吉岡榮（アマ輿入植者）等と共にバレンチンに入植した變り者である。高拓第一回卒業生と云うと、この組はなにかにつけ豪傑が多かつた。奥アマゾン一の金満家中島敏三アウローラ號船主佐藤行夫バレンチンス事業家木村一則、プロレスの矢野武雄、製麻會社副社長の岸田好明自殺した葡語名人山本紀雄以下實に偉物ばかりだが、彼もその一人である。タバナンに入植したのは一九五〇（昭和二十五年）在住十四ヵ年、草分開拓者で戰後派邦人移民が皆彼を頼つてきた。勿論無一文裸一貫のものが多いので、これを扶けそして獨立の援助をしたお陰で、今日稀にみる立派なタバナン邦人植民地が出來上り、養鶏部落として有名になつた。タバナンの親分次郎長的存在が彼である。人情にもろく義理堅く、義俠にとんで頼まれると「いや」と云えない親分肌の人物である。

父重治、母とくよ両親の四男に生れた。宮城縣旧別棄中学校卒業生で、学生時代岩手縣出身で東北帝大教授田中館秀三の書生をしていた事もある。二十代で亞國行の理想を持つていたが上塚司夫人が仙台市出身（華族相馬氏令孃）であつた關係で、仙台市にいた彼は高拓生のいるバレンチン行に變更した。だから旅券は仙台市出身になつている。アマゾナス産業研究所では農事部長龜井満の下で農事主任として満二年半働らいた。龜井は熊本縣人で上塚周平翁の第一子分、よく働く男で上塚植民地育ての親でもあつた。軈て彼は大江でジユータ栽培數年、獨身の自由さでカラパナ、ムクインと斗い、バルゼア生活を征服した。夢多き青春の鴻圖に燃え、自由奔放の敏腕を働かせ、軈て恩師田中館秀三が渡伯してビリア河上流ミナ・デ・マカコの砂金採集が有望であると説いたので、長谷川貞雄以下伊藤勇・河内東一・正木政人・阿部・野原などと共に砂金事業に専心した然し日本軍が佛印に進駐したので、經營主の佛人は契約を解除した。マラジーヨマカツパ・シヤーべで伯國材木會社と組んで有用材木を日本に輸出をなし、ついでに奥アマゾンを山田義雄と一緒に漫遊した。一九四二年の燒打事件で、トメアスー植民地生活七ヵ年が始まり、ここで菊池藤吉長女みさおと結婚した獨身生活が實に長かつた。終戰後ベレーン市内で借地農三年、一九五〇年義弟菊池敏克と共にタバナンの草分として入植、八ヘクタールに胡椒一万本を栽培し、今日に至つた。在伯三十四年の人生は波爛重畳に富み、冒險小説を讀むようである。操志強靱、今だに三十代の青年をしのぐ若々しさがある。みさお夫人との間に男子六人、佐久馬・重彥・克之・靚彥・辰男・陸奥男等健在である。移民の少ない岩手縣人の偉才として彼の健在を祝福す。大正元年十月四日子年生。

義俠に富む千葉家の人々

ベレーン郊市外タバナン

菊池俊克氏

TOSHIKATSU KIKUCHI
Caixa Postal, 363
Belem, — Pará

原籍　北海道留崩郡舍熊村
渡伯　昭和八年八月　あらびあ丸

日本歴史を繙いてみると、どうも菊池の姓を名のる人物で悪人はいない。南朝の菊池武光を始め、田舎の庄家さんに至るまで善人だ。

ブラジルでも菊池姓の人は温厚篤實な篤農家が多い本編の菊池敏克もその通りで、涙もろい人柄で實に親切である義兄千葉彦祥と一緒に一九五〇年（昭和二十五年）タバナンに草分として入植して以來、戰後派移民が、流浪のあげく皆頼つてきたので、その人達を扶けた。今日大成功している佐藤兼吉・丹治六郎・坂井敬介等多くの人々がそうであつた。

彼ば父藤吉、母初美の二男に生れ・十一才の少年でトメアスー植民地に入植した。同船で來た腕白小僧は武田武志・岡部孝・御法円龍・池谷藤一少女で戸田子郎澄子夫人や野原丈兒みつ子夫人などがいた。父藤吉は一九五八年六月十六日、癌病で六十八才の天寿を全うして逝去し、母は健在である。マルキタ直營農場に就耕し・翌年福原社長が退陣して、直營農場が閉鎖され、南拓は事業の縮少を斷行、将來の見込がないので退植、たつた一年いたきりであつた。ベレーン市に出て蔬菜栽培生活に邁進した。その頃は野菜の需要少なく、両親も販賣に苦勞した。一九四一年日米戰爭勃發、翌年八月ドイツ潜水艦がベレーン沖で、突然ブラジル商船隊を撃沈させたので、非戰斗員の襲撃はむごたらしいと激昂、その反動が樞軸國民住宅の焼打事件となつた。平和に暮していた菊池一家もそのとばちりをうけ、遂にトメアスー植民地に護送軟禁されたトメアスー植民地は邦人戰時收容所となつた訳である。

ここに在住四カ年、終戰の聲をきき、ほとぼりのさめた翌年ー一九四六年ベレーン市に戻り、再び蔬菜栽培生活三カ年、一九五〇年兄正克などと別れて、同年タバナン地區に入植した。胡椒一万本を栽培、軈て養鶏事業に移り、現在千五百羽を飼育している。兄弟姉妹は七人、長兄正克はベレーン市在住、姉みさおは隣地千葉彦祥夫人、弟武義もベレーン市で獨立、妹みちはトメアスー産組常務理事武田武志夫人、妹ひで子はベレーン市本木健一郎夫人（福原八郎甥）末弟敏雄はアカラ郡内グマアで獨立している。彼は聖市在住柴田寛三女みち子と結婚した。みち子夫人の姉は管江幸雄・絹子夫人と澤田哲・藤江夫人、弟はトメアスー植民地柴田雄一郎である。彼はみち子夫人との間に長男正以下照子・照輝・靖志・ジューリョ・ベルナルドの五男一女に惠まれている。ベレーン近郊菊池一族は物凄く發展した。切に今後の健在を祈る。大正十一年十一月十九日戌年生。

菊池氏夫妻

ベレーン市郊外タバナン

渡邊孝吉氏

原籍　福島縣福島市山口字坂町
渡伯　昭和三十年四月　あめりか丸

KOUKICHI WATANABE
a/c Takashima Caixa 65
Belem, — Pará

大東亜戦争終了のときは若冠十六才であつた。終戦前後の食糧難の荒波にもまれ、漸く成人した。父徳則母しめ両親の七男に生れ、早くから獨立すべき運命にあつた。両親は既に死亡したので、獨身の軽装で海外に飛出そうかと思つている處え、同村人大規次男が一年早く渡伯したので、それに刺激され、遂に満二十五才のとき、愛妻とし子を迎え、長兄徳一の二男・甥・軍治を連れ、青春の斗志を燃やしてアマゾンに移住した。兄達も兄弟か多いので一人ぐらい大南米で大活躍して、渡邊家の名をあげるよう激励したので勇氣百倍した。

配耕地はベルテーラ・ゴム園、このゴム園は一九二九年自動車王フオードが五百五十万ドルの巨費を投じ八百万本のゴム樹を植えたがマレイ半島の人工ゴム栽培と違つてむづかしく、接木法の研究不足で成績不良、二百二十万コントスの安値で伯國政府に賣却したゴム園であつた。ここに入植したが伯國農林省は邦人移民をゴム園に入植させることは日伯移民協定に違反するものだと横槍を入れ、すぐ退去命令、彼等は在住僅か一カ月で、モンテ・アレグレ植民地アサヒザール区に移つた。ここも移民受入態勢が整わず、止むなく道路の修理など、橋造りなどに従事、在住三カ月で将來の見込なく退散した。

渡伯早々から流轉生活、三回目はベレーン市郊外タバナン地区同郷人丹治六郎耕地近くに、蔬菜栽培の適地を求め、ここで二カ年獅子奮迅の働きをなした。幸い甥軍治も汗みどろになつて協力、新婚間もないとし子夫人も涙ぐましい健斗振りで、少々資金をため、飛行場の近くに移り、ここで四年間頑張つたこの頃漸く邦人のトマテ栽培熱は好調に達した。昔しは熱帯地方ではトマテは出來ぬものと思つていたが、接木法栽培を邦人が發見してから漸く成績よく、病害虫にも强かつた。このトマテ栽培は邦人獨占舞台で、彼もこの栽培で大いに儲けた。そしてトラクターや耕耘機を購入し、四年間の努力の結晶をもつて現地に五ヘクタールの土地を購入、渡邊農場を建設した。現在蔬菜栽培の傍ら、鶏一千羽を飼育し、自給肥料経營に移つた。

ここまで來た満十年の辛酸苦勞は筆舌に盡し難く、流石に二十代から、三十代の若さ、即ち覇氣溢るる斗志と、疲れを知らない壮健な躰が物を云つた訳であつた、既に長男孝一、二男忠孝の二児は小学校に通学している。今日まで協力した甥軍治も成人し、軈て土地も所有し獨立したが、蔬菜販賣を好み、ベレーン市公設市場で卸販賣を始めた。その折に豪商山崎太郎が奥アマゾン大江で、船舶による物品販賣をしているのに手不足で乞われるままに、カリズモ號船員となつていま活躍している。年齢二十六才、最も活動期である。せつに彼等一家の發展を祈る。昭和四年十一月三十日巳年生。

左上甥軍治君・下は平和な孝吉氏家族

YASUTARO SAKADA
a/c Watanabe
Praça Felipe Potorini 66
Belem, — Pará

ベレーン市郊外タバナン

坂田安太郎氏

原籍　奈良縣北葛城郡王寺町
渡伯　昭和二十八年九月　あふりか丸

　奈良縣は大阪京都に近く、海外發展熱の少ない處で、全國でも下から三・四番目である。然し數は少ないが、在伯縣人の中には、セイロン島のリプトン茶を移植させたブラジル産業功勞賞の岡本寅藏（朝和村）ブラジル拓連理事長和田周一郎（大正村）日本植民学校出の傑物戸根寅太郎（五條町）ソロ線文化植民地創立者中森憲太郎、全伯相撲協會理事長松谷勝三（龍門村）ロンドリーナの豪商大平八郎（下北山）など、多士才々だ。本編の坂田安太郎なども、戰後派移民であるが、ここ十四五年もすれば、アマゾンに於ける奈良縣出身のピカ一になるだろうと、著者は確認してやまない。

　彼は日本で半農半商であつた。昭和二十八年二月ジュート移民、八月トメアスー胡椒移民につづいて、三回目のアマゾン移住者として渡伯した。八十六家族四七六人がマナカプル、モンテ・アレクレ、フワゼンチンニョ、マタピーと各植民地に分散されたがどれもこれも受入態勢の整わぬ處ばかりであつた。彼の入植したマタピー植民地は、都市マカツパーに離れること百五十粁、週一回の交通網で不便この上なし、しかも水利の便わるく、炊事の水も住宅から數百米、ひどいのは一キロも離れた谷間の泉水をくむと云う不自由さ、旱燥期が長く、野菜をつくつても市場が遠くて運賃にくわれて駄目、入植者は二十四家族、續いて翌年二十一家族と續いたが、合計四十五家族のうち、早くも三十余家族が退植し、窪田・尾形・柴山・本田・目黒・眞田・斉藤七家族を残すのみとなつた。政府が命令したゴム一万本を五十ヘクタールに植え果樹も満植し永住の決心をしたが、ゴム樹が十余年後でなければ金にならぬ事を知り、その間の生計費の捻出を考え、他に轉移した方がいいと思い、苦心慘憺して植えたゴム樹、六カ年の汗と膏の結晶を放棄し、アラゴアス州首都マセオ市から三十キロ離れたヒオラルゴ町に移り、野菜栽培をやつた。耕主の信用を得て物凄く野菜も賣れゆきよく、蔔字新聞で激賞され、彼も巨利を博したが、耕主が變り、その他事情が急變したのでやむなく退耕し、一九六二年タバナン地区に移り、臨時に借地生活二年を送つた。勤倹力行の一家で、五・六人の家族が一致協力したので、二年間にマタピー生活六カ年間の百倍も儲け、一九六四年六月十ヘクタールの土地を現金一千五百ミル・クルゼイロで購入し、ここに永住の坂田農場の建設に着手した。清廉潔白な拓人で、誰れからも信用され、その前途は光明に輝いている。

　農場も自動車は勿論全部機械化されている。長女けい子は林田正一と結婚、共同事業を行い、長男慶一は二十六才で耕地支配人、二女のり子、二男俊次、三男安弘、四男則秋で、この活動力旺盛の一家は必ずや繁榮するだろう。あさ子夫人の協力内助の功を賞したい。明治四十二年三月二十日酉年生。（左下）長男慶一と長女けい子（上）七人は家族の人々

MASAICHI NAKAHASHI
Caixa Postal, 613
Belem, — Pará

ベレーン市郊外タバナン
中橋政一氏

原籍　千葉縣君津郡昭和村
渡伯　昭和三十年四月　あめりか丸

在伯千葉縣代表と云えば北伯アマゾン地方でベレーンの親分長谷川貞雄、中伯でリオの巨星白土貫治、南伯サンパウロで豊和工業KK專務藤平正義、この三羽烏に續く者に北伯で市原津南三、南伯で境常吉などがいる。皆全伯級の事業家であるが、戰後派移民の中橋政一もここ十年もすれば全伯級と稱される事業家になれるだろう。物凄い急ピッチで好運の波にのり、同航海同僚の丹治・草刈・赤尾・永田・松本等を睥睨してトップに立ち、經濟的飛躍を遂げた。長男達雄が第一農場購入、二男貫之も第二農場購入、三男俊雄も第三農場購入しかも全農場を機械化した。ヤンマー發動機三台も所有、トバタ耕耘機、トバタ自動粉霧機、貨物自動車も達雄一台、政一一台、俊雄の分も購入交渉中である。しかも第一農場は果樹、蔬菜園の他に養鷄三千羽、第二農場も養鷄二千羽とそろえた。

しかも彼は将來この三耕地を完成し、三兒が結婚したら、訪日する計画をたてている。日本には、渡伯出來なかつた長女幸枝が結婚しているから、孫を見たい樂しみもあり、先祖の墓参もかねている。彼は大東亞戰爭中は旋盤工として活躍、軈て空襲が激化され秋元村に疎開した。戰後は自轉車工業KKに勤務、軈て獨立して自轉車屋を開業した。だから自轉車組立、自動車修理、發電機修理はお手のもので彼の自動車倉庫にはいると、まるで修理工場みたようで、一切の部具品が備つている。こんな父を持つた日本の長女幸枝も幸福である。彼はなか〳〵周到用意で、十年・二十年後のことも考え、サンパウロ市ヅツトラ街道に沿う絶好の場所に、住宅地を購入している。將來の目的を訊ねると、商賣をやりたいと云う。なるほど多才多能の人物だから、それまで發展してゆくだろう。リン夫人が彼に劣らない努力家で、蔬菜の卸販賣にも活動、三男俊雄に自動車を運轉させ、一緒に卸市場に往き、商談の相手もするし、相場の予想で出荷の増減を見計つたり、女性には珍らしい活動家である。主人が稀にみる努力家で夫人がこれ以上では鬼に金棒である。

彼は配耕地ベルテーラ・ゴム園に四十日いてモンテ・アレグレ植民地に一ヵ月在住、三ヵ月目には、早くもタバナン地区に移り、第一農場で蔬菜栽培に活躍、六ヘクタールの土地を到頭購入した。そして第二第三の農場を續々購入し今日みるような莫大な財産をつくつたが、在伯十年になるのに、まだ小作人でうろたえている人と雲泥の差で、彗星的に飛躍した。長男達雄は耕地の總支配人、三男俊雄は若冠十七才、俊雄は僅か十五才で特別運轉免許証を下附された麒麟兒である。この三兒の大成を見て、一日も早く母國訪問せん事を祈つてやまない。明治四十年五月十五日未年生。

寫真は所有自動車や耕耘機の前で

KEISUKE SAKAI
a/c Takashima Caixa 65
Belem, — Pará

ベレーン市郊外タバナン

酒井敬介氏

原籍　福岡縣鞍手郡鞍手町
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

喜怒哀楽は世のならい、喜びある反面に涙ありで、涙なき人生は、砂漠にオアシスなきと等しく、空漠でつめたい人生である。辛酸苦労のある處に、人生の試錬があり、また喜びも湧いてくる。彼は渡伯前三菱炭鉱で精勤、退職金百万円もらつて渡伯、營農資金たつぷりで植民地に入植したが、不運續きと農業に未經驗だつたので失敗し、丸裸となつた。この丸裸から再出發し、今日はヤンマー發動機で、散水機、消毒機は自動化され、貨物自動車も所有、住宅も電燈がつき、台所の冷藏庫には、何時もビール、ソーダが冷めたくひかえている。この人の開拓生活十年間は正しく七轉八起、波瀾を極めた。

配耕地はアマゾンの奥ベルテーラ・ゴム園、一九二九年自動車王フォードが五百五十万ドルを投資して八百万本のゴム樹を植えた世界一のゴム園であつた。入植六カ月目にここに日本移民が入植するのは、日伯移民協定に違反すると連邦農林省の横槍で、退去命令が出た。そこで止むなくモンテ・アレグレ植民地に移つたが、ここも入植の荒山が焼けていず農業は不可能、道路修理などをして、安賃金をもらつて暮した。在住六カ月、ブラジルに渡つて一年間、ぶらぶらしてる内に万万円は消費した。奥アマゾンは食生活が悪く、入伯早々の彼等はブラジル食に慣れず、遂に高價な罐詰などを購入して食生活、この浪費のため無一文になつた。

「しまつた」と思つても後の祭り、ここで再興の意氣に燃えベレーン市郊外に移り、タバナン地區ドットル・カテ耕地ピメンタ栽培の管理人となり三年精勤した。當時家族全部働らいて一カ月一コント五百の薄給であつた。耕主の家に盗賊が浸入して物品を盗まれた。そして管理人の責任だと訴えられ、到頭その代價支拂で血の涙が出るような生活を續けた。「殘念」と思つて切歯やく腕、千葉彦祥の世話でタバナン地區佐藤常弥の隣地で獨立、肥料は千葉の義弟菊地敏克から借りて無一文でスタートした。九州男子の意氣軒昂、勇往邁進、棄てる神あれば助ける佛ありで、あれからぐん／＼發展、物凄いスピードで巨利を博し、一九六二年十二月に現地五ヘクタールを購入して酒井農場を建設、翌年には自動車を購入した。近々五十ヘクタールの土地を購入して、椰子樹栽培に猛進する計画中である。

長女勝美は中島信雄と結婚隣地に住み、二女とも子も松本登と結婚、長男九州男は耕地管理人、三女早苗は十二・三才の頃から卸販賣に從事していたので販賣方面の責任者である。ここまでくるまで、ぬい夫人の内助の功は書くまでもない。耕地擴張には長女勝美の子供等が協力してくれるので、事業は順風滿帆の發展振りで、他人眼でも美やましい位である。二カ月遅れて渡伯した弟仁助はタバナン地區で逝去し、遺族は聖市へ移轉した。酒井家は確にアマゾンで發展した。明治三十五年七月二十四日寅年生。（寫真は樂しい一家）

ベレーン市郊外タバナン

齋藤充央氏

MITSUNAKA SAITO
Caixa Postal, 689
Belem, — Pará

原籍　福島縣伊達郡爾山町石田字高田
渡伯　昭和二十九年十一月　あめりか丸

「齋藤充央・安正兄弟は小学校兒童の頃、實に真面目な少年でした。そして学課の成績もよくできて…」と時の担任訓導瀧田余慶みさお夫人（トメアスー植民地在住）は著者に當時の面影を語つた。なるほど充央少年は當時から利巧であつた訳だ。父佐市（健在）母とめ（死亡）の三男に生れた。一緒に渡伯した安正は四男であつた。二十二・三才の時に4H青年團に加入、北米派遣難民救済移民に應募したことがあり、南米農業實習生として縣の候補にも上つたが、家族で永住したかつたので辭退した。同村人菅野宇兵衛（聖州サン・ジュゼー・ドス・カンポス在）齋藤義雄（聖州モジ在住）等の篤農家がぞく／＼訪日して、自由の天地ブラジルの好さを說くので、いよ／＼決心した。特に齋藤義雄は母の生地の近くで、彼の刺激は大きかつた。そこで愛妻もと夫人の協力を得て弟安正と三人でアマゾン移民に應募した。もと夫人は伊達郡保原町出身で、4H處女會員で、南米に多年憧れていた女性であつた。

配耕地はベレーン近郊コツケイロ植民地長谷川貞雄耕地、長谷川耕主はトメアスー植民地第一回草分開拓者で、後輩移民のよき理解者で、ここに十カ月勤勞した。漸くベレーン近郊の事情が解つたので、タバナン地区に五ヘクタールの土地を購入、弟と協力して齋藤耕地の建設に着手した。一九五五年（昭和三十年）九月であつた。まだベレーン市近郊邦人蔬菜業者も少なく、そのため三人協力して出荷した野菜は高値に賣れた。ピメンタ（胡椒）も三千本すぐ栽培しこれが三年目の一九五八年（昭和三十三年）頃から結實して、莫大な純益がころがりこんで來たので一安心した。この年に弟安正は福島縣人加藤けい子を呼寄せ結婚し、六カ月後にベレーン市に出て本職の菓子製造業に力をいれた。

一九六〇年度から養鶏を始め最初一千羽、ついで一千羽と增やし、現在四千羽を飼育している。一九六二年度にはトバタ耕耘機を購入、トラクターも揃えた。ピメンタ樹の消毒自動粉霧機、送水管、自動發電機、ヤンマー・モータ、その他數々のものを揃えた。同年福島縣庁より移住係職員が視察に訪づれ充分な体驗談を語り傳えた。八年前には、先輩齋藤義雄にブラジル事情を語つてもらつた人物が、今や母縣視察者に体驗談を語るほど、アマゾンの事情に通じてきた。一九六二年度は、二十五年振りでのマラリヤ病が流行した。氣候と風土に馴れない新移民は勿論、マラリヤ病に免疫になつている、三・四十年の古參移民も罹つた。齋藤夫妻も罹病したが、これは長年の疲勞が重なつている處へ、この病魔が襲つたのであつた。夫婦ともこの惡病を克服し、現在健康そのものである。子供は長男俊光、二男實、長女明美、三男勇、二女みゆき等である。弟安正も再び耕地經營に移つた。昭和五年六月七日午年生。

（左）一九六二年寫す（右上）二女みゆき

ROKURO TANJI
a/c Morikawa R. Dr. Assis 102
Belem, — Pará

ベレーン市郊外タバナン

丹治六郎氏

原籍　福島縣安積郡豊田村
渡伯　昭和三十年四月　あめりか丸

外見を飾らず、質實剛健で純農以外に手も出さず、コツ／＼真面目に働く拓人である。最初五ヘクタール購入した農場が、毎年儲けたら五ヘクタル歩増やし、また翌年儲けたら増やして、到頭二十五ヘクタールの丹治農場になつた。三千本のピメンタ樹は濃緑を漂えて美しく、住宅の附近には椰子樹を植え　如何にも熱帯特有の理想農場とうなづかれる。

父市（いち）は六十八才、母しのぶは六十一才未だカクシヤクとして壮者をしのぎ胡椒採集に健斗する姿は、金が出來ると若隠居する邦人新興成金戰後派移民によき教訓である。兩親がこんな努力家だから、その長男たる六郎も堅忍不抜の努力をつづける篤農家である長男市郎は日本で安積高校出身で、在学中は野球選手、渡伯後全伯野球大會にはアマゾン軍を結成して遠征、サンパウロ州の各チーム、パラナ州の各チームと激戰し美技賞のカツプを贈られた。スポーツマンだから明朗で無慾恬膽、二十七才の青年拓人である。長女俊子は父の代理をして市場に商うぐらい葡語も上手、初代夫人が手離したくない程可愛いい一家の主柱である。二女和子は熊本縣人村上太と結婚して、近隣に耕地を經營して既に孫美和が出生した。女婿村上青年は、サンタ・イザベル郡モエマ区福島定強いく子夫人の實弟で、精励刻苦をいとわぬ努力家で、丹治六郎はいい婿を得た。二男幸雄は十七才になり、将來丹治家を双肩に担う青年、現在は勉学中である。

丹治一家は日本で製菓、製パン、アイスクリーム製造などで生計をたてていたが、商賣が繁昌すればするほど税金攻勢はひどく、と云つてゴマカスことは出來ないし、到頭一家をあげてブラジル移住に踏みきつた。時に彼は四十一才であつた。

配耕地はベルテーラ・ゴム園、ゴム園は有名な自動車王フオードが一九二九年五百五十万ドルを投資し、八百万本のゴム樹を植えた世界一のゴム園であつた。楽しい氣持で入植してみるとこのゴム園は腰かけ式であつた。移民會社が間に合せに入植させたので、連邦農林省から日伯移民協定に違反すると抗議があり、退去命令が出たので止むなく四カ月目に退園した。彼等はそこからモンテ・アレグレ植民地に移つたが、ここも入植受入態勢が整わず、荒山も伐採してなく、アサヒザール区で道路の修理工事に従い、三カ月目に退植し、ベレーン郊外に移轉、タバナン地区の千葉彦祥の世話で現地を購入した。

ここに移つてからベレーン市は近距離にあつたし、栽培した野菜の販賣は順調にいくし、事業はぐん／＼伸びていつた。流轉生活と違つて永住の地と定め、一九六二年三月には貨物運搬自動車やトラクターなども購入したし、住宅も自家發電のモートルを設備し、文化生活に浴した。丹治家はかくして滿十年目に移住の目的をはたした。大正二年四月十四日子年生。

（右）兩親と長男市郎君（左上）長女俊子と二男幸雄

に入植した。入植した年は不運にも、アマゾンは五十年來の大洪水であつた。アマゾン河はアンデス連山の積雪如何で河水が增減する譯であつた。その年は五十年振りの積雪で、それが解け始めると物凄く增水し、河幅は五十粁、百粁、二百粁と擴がり、高台までも浸水し家屋も床上まで浸水、ひどい處は軒下まで水浸しになつて河下に流れた。

この年は黄麻栽培はみな大損害、牧場の牛も移轉させたが、何十万頭も溺死した。

五十米の大鶏舍で頑張る九州男子森光勝太氏

彼等は最初二月入植して腰までつかつて仕事についたが水が胸まで上り、遂に肩までつかつた。そこへもつてきて鰐や、スクリユー蛇、電氣ウナギ、猛魚ピラニヤ等が出沒するので、不馴れで恐怖の生活を送り、到頭その年は無収入であつた。椀久秀章・永村隆、猪原佐太郎、木村久則等他の多くの者はベレーン近郊へ退散した。彼は翌年バレリンニヤの伊原只郎耕地に移り、一作ジユータを栽培したが時に利あらず、奥アマゾンに袂別、ベレーン市郊外アナニンデウア木村一則耕地に入植し一年後に、無資本とは知りつつ背水の陣をしいて、山田義雄の世話で現地を斡旋してもらい開拓に邁進した。渡伯満二年目であつた。タバナン地區に移つて、野菜栽培で大いに儲け、一九五九年（昭和二十九年）から養鶏を始めた。この方は想像以外の高価で卵が賣れ、純益はボロイので、聖州スザーノ土居孵化場から、飛行機で雛も取寄せた。（サンパウロ＝アマゾン間は、東京＝シンガポールの距離がある）順風滿帆の波にのり、軈てピメンタ成樹六千本も結實するようになり、巨財がころがりこんできた。一九六〇年トラクター、一九六一年小型自動車、一九六二年大型貨物運搬自動車を購入、續いて製材機、製粉機、耕耘機、消毒自動噴霧機、自動發電機、飼料混合機など、約二千万円以上の農機具を全部揃えて、機械を完備させた。

移住事業團囑託越智榮が「森光君の農場は理想的だし、特に君の働き振りを參考にさせたい」と農業練習生、田坂澄明・永野龍男・田邊定・永野敏三以下數十人が入植して實習した。本當にここ五・六年で膨脹した彼の經濟力には、三・四十年の古參移民も只々驚嘆するばかりであつた。夫婦の間に長男勝己、長女和江、二女死亡、三女貴代香、四女芳江、五女幸江の一男五女で、二女以外は健在である。福岡縣出身の一偉才、彼の健在を祈つてやまない。大正十三年十二月二十一日子年生。

ベレーン市郊外タバナン區

森光勝太氏

KATSUTA MORIMITSU
a/c Yamada Caixa Postal, 1019
Belem, — Pará

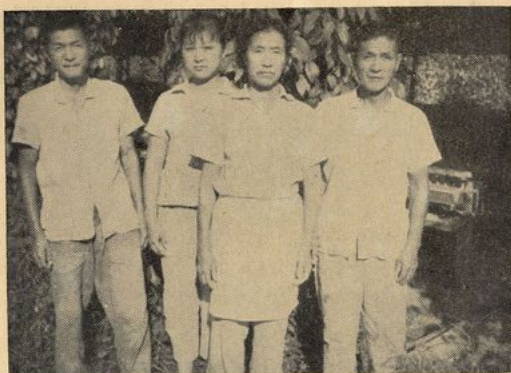
原籍　福岡縣三井郡善通寺町
渡伯　昭和二十八年二月　さんとす丸

次頁の上に揭げてある寫眞の如く、彼は每日丸裸で仕事をしている。弟武司はパライバ州に移轉したから獨力孤軍奮斗している。當年四十一才、「四十にして不惑」で思慮分別盛り、彼は七・八年前まで無資本無一文で丸裸から出發した。そして漸く基礎がきまつてやれ安心と思つた頃に、火事に遭つて住宅も鷄舍も皆燒けてしまつた。財産が燒けたばかりでなく、二女（當時幼女）がそのため死亡した。一人男で築きあげ胡椒樹一万二千本（成樹六千本、新植中六千本）、養鷄八千羽を管理してゆかねばならないので、火事は大きな損失であつた。そのため現在の住宅は、工場の一隅にあり、工場は飼料の玉蜀黍、肉粉、フスマの貯藏庫から、またそれ等を混合する機械物などもあり、住宅を別に新築するひまもない譯である。なか／＼剛腹な人物で、物におじけない態度は親しみやすい。少しもゴウマンな素振りがなく、謙讓な人柄である。それで事業にかけたら徹底的に目的を達しなければ、氣がすまない不退轉の性格をもつている。そうだから、裸一貫無一文から、何千万円も價値のある農場（機械一切を含めて）を建設出來たのである。

父繁吾（はんご）母とらゑ兩親の長男に生れた。兩親とも健在であるが、大東亞戰争の末期、昭和二十年に二十才で現役呼集、すぐ滿州に出征した處、八月十五日で終戰、そこでサーツとソ連軍が殺到してきて、武裝解除となり、シベリアに送られ、四年間の繋留生活を送つた。もう少し早く終戰だつたら滿州に出征もせず、ソ連シベリア生活も送らずにすんだがこれでは捕虜になるために出征したようなものであつた。涙をのんで辛抱すること四年、ナオトカ港から祖國に歸還した時は、嬉れしさは胸にこみあげてきて自然に涙が出た。

一九四九年（昭和廿四年）から、渡伯するまで農業に從事した。新妻惠美子はペルー生れであつたので、ペルーの話をきき、海外生活に憧がれた。漸く南米大陸ブラジルの事情を耳にすると、近隣からブラジルで成功した原田敬太（スザーノ福博植民地・元在伯福岡縣人會長）などがいて、三井郡出身者の傑物が多かつた。「俺も海外へ行こう」と思つている矢先「アマゾン移民再開」の話をきき誰れより先に應募した。そして戰後再開されたブラジル移民第一回草分移民として、奥アマゾン、パレンチンス蛭田勝雄耕地

愛兒をいだく惠美子夫人

もう小作人みたような下働きするのは御免だ。自分は獨立獨歩で進みたいため、自由の天地アマゾンに移住したのだ」と主張誰の干渉もうけずしてベレーン市郊外に進出　比島時代の經驗を生かして自分で土地をさがし、タバナン地區に十ヘクタールの農地を購入して入植した。

四人仲睦まじく胡椒樹の下で

　最初資本僅少なので野菜栽培から出發、戰後派邦人移民のベレーン進出前で、野菜もよく販賣されて大いに儲けた。そして一九六〇年から養鷄を始めた。この方も雛を遠くサンパウロ市から飛行機で取寄せ五百羽から飼い始めたが白色レグホン、ニユーハイランなどの卵はベレーン市民には珍らしく、そのためよく賣れた。ベレーン市養鷄界の黎明期で、僅々四年間の間に巨利を博して一万羽まで飼うようになつた。養鷄事業はレーヂ式設備に金がいり、しかも毎年々々廢鷄を出すため、その補給をしなくてはならず、資金もいゝまた多忙を極めたが、恰度三人の子供も成長し、心ゆくまで協力してくれたので、ベレーン市郊外養鷄事業家のトップにたつた。

　ピメンタも入植當初から栽培し、この方も五千本を植えている。勿論成樹であるが、このピメンタ栽培時代は最も苦境時代であつた。養鷄事業前で、收入は野菜とトマテで、儲かつても一文の金も殘さず、皆耕地につぎこんだ。そして五年後に漸くピメンタが成樹となり、その儲けを養鷄事業に投資した。現在は總べての設備を終わり、アマゾン移住第一期十年基礎時代を過ぎ、第二期の飛躍時代に移つた。

　アマゾンには比島で生活をした人が多いが、皆立派な農場を建設した。トメアスー植民地清水金右衛門、川邊彌男、サンタ・イザベル藤井正己、ベラ・ビスタ植民地宍戸良雄等他に多くの人がいる。どの拓人も比島時代の經驗を生かし、依頼心のない操志强靭の人達ばかりである。特に本編の火浦春雄はその感が深かい。きみ子夫人は親切で物やさしく、と云つて仕事の方は男顏負けの働き振りで、夫婦の間に一男二女、長女みゑ子はビシア街道の篤農家藤山至三男俊成と結婚、近隣に住んでいる長男春樹は父が毎日卵の卸販賣のためベレーン市場に行くので農場の總管理人として全責任を引受けている。當年二十二才の白晳童顏の青年妻帶にはまだ早いようだ。二女千代子は當年十九才・聰明な母に似て清楚純情な女性である。在伯滿十年になつた。その一人に彼のおる事は心頼もしい。尙甥長岡義春は聖市に移轉した。明治四十四年三月二十三日亥年生。

ベレーン市郊外タバナン

火浦春雄氏

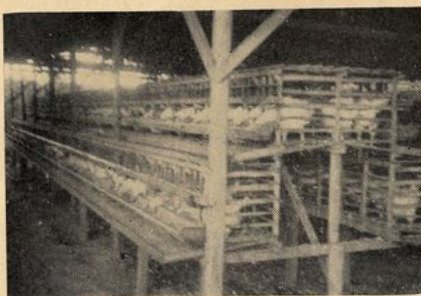
HARUO HIURA
Caixa Postal, 613
Belem, — Pará

原籍　廣島縣廣島市南観音町
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

北伯アマゾン地方の廣島縣代表と云えばまず第一にトメアスー植民地篤農家山田義一に指を屈するだろうだが、山田義一は在伯三十五年の古参者である。では戦後派代表と問われると、著者は無條件で火浦春雄を推すだろう。いやそれ程に彼は事業家であると共に、勤儉力行の努力家である。海外で儲けた成功者の中には、守錢奴と云われる位に罵倒される人が多いが、彼はそんな狭量の人物でなく、儲けたらどし〱公共事業にも寄附するし、後輩拓人の憐れな人にも恵んでやるし、太つ肚の處をしば〱見せている。

彼の海外發展はこのアマゾンに始まつたものでなく、遠く十九才の時で、昭和五年五月にフイリツピン島マニラに渡つた。最初ダバオで麻栽培と思つたが、マニラ市三井物産支店に勤務する處となつた。比島生活は青春時代で、自由奔放な敏腕を發揮した。元氣旺盛、明朗純眞だつたから、上司からも信用をうけ、大いに引立られた。昭和十六年資産凍結令で一切の事業が中止され、三井物産も日本に引揚げたので彼も歸國した。間もなく大東亜戰爭となり、呼集されて中南支方面に轉戰した。長い期間に硝煙彈雨の下をくぐつたが、幸い生命に別條なく、一九四五年八月十五日終戰と共に復員、三菱造船KKに勤務したあれから滿八カ年精勤したが、十九才から海外生活の習慣が拔けきれず、上司に縛られたような、格子なき牢獄の月給生活がいやになつた。

恰度その折にアマゾン移民の募集廣告をみて、絶好の機會だとすぐ應募した。父惣吉、母せつ兩親の四男に生れ、家督をみる責任もなく、まして兩親逝去のことで、自由の境遇、きみ子夫人の甥長岡義春を構成家族の一員に加え、長女美枝子、長男春樹、二女千代子の少年少女群を連れ奥アマゾン、サンタレン市郊外ベルテーラ・ゴム園に入植した。このゴム園は、一九二九年（昭和四年）自動車王ヘンリー・フォードが五百五十万ドルの巨費を投じて、八百万本のゴム樹を人工栽培した世界一のゴム園であつた。然しアマゾンの氣候には人工ゴム栽培は研究の余地ありで、接木法の研究不足で成績思わしくなく、伯國政府に二百二十万コントスで賣却した。このゴム園に入植した處、間もなく連邦政府農林省は、邦人移民が既成ゴム園に入植する事は、日伯移民協定に違反するものなりと、退去命令を出した。移民會社はあわてて、百數十家族の邦人を、各植民地に分散移動せしめたが、彼は「

四十米の大鶏舎

館五百軒、フェイランテ（移動朝市場の商人）五千軒、雑貨商五百軒、飲食店バール五百軒、などを筆頭に邦人が總ゆる商工業界に、夫々特技を發揮して大いに儲けている。この繁華な都市で活躍する佐藤一家の運命は大いに期待したい。

父勝直（故人）母あさえ（健在）両親の長男に生れた。彼の渡伯は四十二才の厄年の時であつた。厄を拂つて幸運なスタートを切れとばかりアマゾン移民に應募した。長女たけみは佐藤四郎と結婚して、自分の代りに本家をつぎ日本に残つた。彼があさよ夫人を激励し十三才になる勝平以下三人の児を連れ心残りなく渡伯した譯で、それ程海外發展の情熱に燃えていた。入植地モンテ・アレグレ植民地アサヒザール區に二十二家族の邦人と共に入植した。營農資金を百五十万円持參したので、すぐ大密林を伐採、米・豆・玉蜀黍などをまいた食生活になれないので、高價な罐詰類を買つて喰べたので生活費は高いものについた。結局收穫した籾は安く賣るし收支計算が缺損だらけで、遂に入植地を見かぎつて、一年目にベレーン市郊外に移轉した。タバナン地區に移つてから八ヘクタールの土地を購入、翌年からピメンタ三千本を植えた。この胡椒栽培は早く植えてよかつた。三年目から收益をあげ、莫大に儲かつた。

一九六一年度から養鶏事業に着手、現在八千羽まで増飼した同年貨物自動車も購入し、また同年ビジア街道二十七粁地點、（赤尾耕地近く）に二十五ヘクタールの土地を購入し六千五百本の胡椒を植えた。即ち第二農場である。そして二男勝之助所有の第三農場を購入し、一千五百本の胡椒を植え、合計一万一千本の胡椒樹を所有するに至つた。養鶏の方は利潤が莫大で、販賣産卵は一日三千五百個に及び、ぐん／＼この方面で儲けた純益を事業擴張に投資した譯で、八千羽を飼うために五十米の鶏舎を幾棟も建てた。ヤンマー・モートルで自家發電をおこし住宅と共に鶏舎にも電燈をつけた。飼料貯藏室・飼料混合室など新設し、飼料混合機・耕耘機・自動消毒機・散水管・自動噴霧機・トラクター・小型自動車等大体農場に必要なもの一切を揃え。ここまで恰度十年かかつた譯である。あさよ夫人もこれでヤレ／＼と思つた。長男勝平はビジア街道の篤農家藤山至長女るり子を娶つたので、あさよ夫人も安堵の胸をなで下した。嫁るり子は少女時代から聰明理智な女性である。佐藤家は第二期飛躍時代に移つた。切に一家の健在を祈つてやまない。明治四十二年十二月十七日酉年生。

佐藤農場入口で

ベレーン市郊外タバナン

佐藤常彌氏

原籍　秋田縣由利郡鳥海村小川
渡伯　昭和二十九年七月　あふりか丸

TSUNEYA SATO
a/c Morikawa R. Dr. Assis 102
Belem, — Pará

長男勝平は當年二十四才、豪放磊落、小事に拘泥しない鷹揚さがあり、實に春風駘蕩だ。青年特有のあの大野心をいだいて、金錢的慾望の醜悪さをもらさない態度は座談していても氣持がいい。移民社會は出稼根生になりがちだから、親の躾けが子に傳わると、二十才前後で金儲けの話題しかしない青年が多い。筆者など「もつとほかに話題がないかねー」と青年にハツパをかけるぐらいである。そんな醜悪な社會に浸りながら、環境の陰惨を打破し、明朗な話をもちかける青年拓入勝平の將來は、島影一つ見えない水平線上から昇る曉の陽光に似て前途有望だ。この勝平につづく二男勝之助も質實剛健だ。兄弟はこの二人きりだが、この兄弟は協力して必ずブラジルで佐藤家を立派に再興させるだろう。現状打破の熱望に燃え一九六四年遂にサンパウロ市ヅウトラ街道沿線ジャルジン・プレシデンテ・ヅウトラ地域に住宅地を購入した。これは勝平がわざ〳〵視察して購入した譯であるサンパウロ市には二女ふさの婿・今和男が、中央メルカード市場で農産物取引商人として活動しているので、サンパウロ市近郊の事情に精通している。この女婿を相談相手として土地を購入したものであろうが、到頭タバナン農場を賣却し、多年の宿望たるサンパウロ進出を決行聖市に移轉した。渡伯して滿十年が移住地生活第一期の基礎時代であつたから、アマゾンにいたのは當然だが、第二期の飛躍時代の舞台を、繁華なサンパウロ市に選んだのは面白い。

サンパウロ市は第二次世界大戦が始まつた時は、人口百万人で、邦人も三百家族ぐらいしか居なかつた。終戦の時でさえ漸く百二十万位の都會で高層建築物は二十四階のマルチネリーたつた一つであつた。處が僅か二十年間に人口五百万に膨脹し、三・四十階の高層家屋が數百も乱立し、大南米一の商工業都市になつた。しかもサンパウロ州首都では政治の都だ。政治に關しては、連邦首都ブラジリアや、リオ府などより重大な都で、政客の往來は激しい。ここ二十年もすれば人口一千万の都會になるかも知れない。ロスアンゼルスと共に、戦後彗星的に膨脹した都會として、世界の驚異であつたが、ロスを振放してトツプに立つた。邦人も戦後奥地からどん〳〵移轉し商工業界で目覺ましく活動、現在二万家族人口十万人と稱せられている。日本映画常設館四つが何時も滿員なのは當然であろう。邦人洗濯屋四千軒、パーマ・理髪美容院五百軒、寫眞

TOSHINARI FUJIYAMA
Caixa Postal, 613
Belem, — Pará

ベレーン市郊外タバナン

藤山俊成氏

原籍　山口縣小野田市東高
渡泊　伯昭和二十九年七月　あふりか丸

父至、母つる兩親の三男に生れた。故郷の宇部窯業KKに勤めていた父が、決心する處あつてブラジル移住に踏みきつたのは、四男三女の子女の將來を熟慮しての結果だつたろう。小野田高校を卒業した長兄洋二を始め、在学中の寛や、中学校卒業の俊成以下、一家こぞつて兩親と一緒にブラジルに渡つた。

この移住は結果に於いてよかつた。もし彼が兩親と共に日本にいたなら、高校程度の学校を卒業して大會社に勤め、最下級職員とし安月給に甘んじ、まだ〳〵妻帯までいつていなかつただろう。係長や課長補佐達の眼光をうかがいながら、びくびくして働かねばならぬ日本の會社制度、下級社員は特別な才能があつても、絶對部長や取締役になれない階級的差別制度があり、直接取締役とも口もきけない不文律があつた。それを考えると伯國自由の天地は、自由平等で生活は仕易い。一介の農民が用事があれば州知事だろうが、農務長官だろうが直接面談出來るし、營農資金不足で金融のときは銀行總支配人に直接談判も出來る、階級的差別はおろか、人種的偏見さえないから、樂園である。裸一貫、無一文できた邦人が、僅々十年後には大農場主になつたり、貿易商人になつたりして、數十人のブラジル人を雇傭している光景は壯観である。實力のある者は飛躍し、實力のない者は沒落してゆく社會である。青年拓人俊成は、父の移住した事に感謝しなければならない。

滿十五才で兩親と共に渡伯、モンテ・アレグレ植民地アサヒザール區に入植した。学生時代の姿に代る農民の姿、鍬・鋤・斧をもつて兩親や兄達についていつた。大密林を焼き、焼跡の整理、そして種まき、除草、收穫となるには、なみ大抵でなかつた。机にかじりついて讀書した時代と變つて、肉休的疲勞が多く、辛酸苦勞がつづいた。軈てここに三年いて、十八才のときにアツセーナ區に移り、百五十ヘクタールの土地を購入、一家はあげて藤山農場建設に邁進した。毎年籾二百五十俵内外を收穫しモンテ植民地隨一を誇る多收穫となつて皆に羨望された胡椒四千本も栽培した。最初に長兄洋二が熊本縣人波村夫人の妹あや子と結婚した。妹るり子がタバナン區佐藤常彌長男勝平と結婚した頃に、彼もタバナン區火浦春雄長女美枝子を娶り、兩親から獨立して耕地を經營した。

兩親が一九六二年十二月にベレーン市郊外ビジア街道に五十ヘクタールの土地を購入して、永住の地藤山農場を建設し、移轉したので、彼も殘される淋しさを感じ、遂に岳父のいるタバカン地區に耕地を求めて移轉した。四ヘクタールの農場で養鶏事業を始め、既に二千羽を飼つている。愛妻美枝子は岳父が比島で活躍している頃比島で生れた女性、未だ子寶に惠まれないが新星夫妻の發展を心から祈る。昭和十三年三月十九日寅年生。

TATSUO NAKAHASHI
a/c Takashima Caixa 65
Belem, — Pará

ベレーン郊外タバナン

中橋 辰雄 氏

原籍 千葉縣君津郡昭和村
渡伯 昭和三十年四月 あめりか丸

自家用自動車の前で

父政一、母りん兩親の長男に生れた。皇紀二千六百年祭の正月に「オギャア」と生れたので、兩親は無上に嬉れしかつた。辰年に生れた男の子だからと「辰雄」と名づけられた。父はその頃は自動轉車工業に從事していた。翌年十二月七日大東亜戰争が勃發した。辰雄が五才の時に終戰東京荒川區に住んでいた彼等は、秋元村に疎開して難をさけたそして終戰後に再び東京に戻り、父は自轉車屋を開いた。

終戰の混乱時代に小学校に入学、そして卒業、軈て六・三・三・制の新学校の新学規則で新制中学校の義務教育をうけた。中学校を卒業して滿十五才になつたとき、兩親はブラジルに移住する事を決心した。少年辰雄にも重苦しい東京生活より、なんとなく外國の生活が樂しいように思えた「お父さん、本當にブラジルに行くの―」辰雄の聲であつた。「そうよー、外國に行つてうんと働らこう」と父親は言葉に力をいれた。辰雄はこうして夢まぼろしの間に少年時代を日本で送つた。然し中学校時代の東京は、少年の頭に永遠に忘れられない想い出であつた小さい胸の中に「必ず成功したい」と祕めていた。あれからもう十年は過ぎた。然し生れた故郷東京の想い出は段々と薄らいでゆくが、決して腦裡を去らない何物かがあつた。やはり日本人の血が流れている江戸つ兒であり、コスモポリタンと違う東海の健兒であつた。「幸枝姉さんはどうしているかなー」と姉のことを想い出すこともあつた。渡伯當時姉幸枝は既婚し、中橋一家でたつた一人だけ、皆と別れて日本に殘つた。人情味豊かな辰雄の姉弟愛は、地球の裏側から、日本の姉に通ずるものがあつた。

昭和三十年ブラジル移住に踏切つて、中橋一家はベルテーラ・ゴム園に移つた。ゴム園は一九二九年自動車王フォードが五百五十万ドルの巨費を投じ、八百万本のゴム樹を植えた世界一のゴム園であつたが、接木法の研究不足で成績良好でなく、伯國政府に二百二十万コントスの安値で讓渡した農場である。入植した處、ゴム園に邦人就勞は日伯移住協定に違反すると農林省の横槍で立退命令が出て、四十日で退散した。ついでモンテ・アレグレ植民地に移つたが、これも人植地がまだ定まらずた つた一ヵ月で退植、流轉のあげくベレーン市郊外タバナン地區に移り、六ヘクタールの土地を購入した。この土地に入植したのが幸運の始まりで、蔬菜で巨利を博し、養鷄をやれば卵は高値で賣れるし、面白いように事業は擴張出來た。第一農場を完成し、辰雄の耕地と決定、兩親と弟達は第二農場を購入、そしてまた第三農場を買收した。これで兄弟三人の農場が完成された。あとはこれから設備と營農だ。彼は山形縣人鈴木英一妹みち子と結婚し、長男明が出生した。鷄四千羽を飼育し、事業は順風滿帆、自動車を始め農場は全部機械化されている。二十五才の青年拓人の前途は明るい。昭和十五年一月四日辰年生。

ベレーン市郊外グアマ植民地

崎山　巖　氏

原籍　宮崎縣北諸縣郡莊内町
渡伯　昭和三十五年三月　ぶらじる丸

IWAO SAKIYAMA
a/c Jamic, R. Gaspar Viana,157
Belem, — Pará

物凄くむこう意氣の荒い男で、時に暴虎馮河の勇を揮い、事業を推進してきた。冒險と皆から云われた現地を水田にし、到頭グアマ植民地で伊藤辰夫・信重時春・堺入廣之・三島雅夫・大内一男・大江牧夫・小田切興三郎等と共に水田經營者の仲間になつた。日本に歸つた移住事業團職員上村が、台灣の水田に栽培していた蓬來米の種をまかせた處、成績良好、ここで日本米が初めで北伯アマゾンで實るようになつた。大内一男は日本米で精酒を造り著者に試飲させたが、實に上出來であつた。灘の生一本をアマゾンでたしなむどは、夢にも思わなかつた。

この水田の建設に孤軍奮斗した彼は、隣地に水田候補地がある處から、一九六四年競争者の多い者を拂いのけて、遂に二十ヘクタールを購入した。現所有耕地と共に四十ヘクタールに增えた。大体グアマ植民地は、日本人三百家族を入植せしめて、アマゾンに水田を拓く計画であつた。ブラジル農政学の權威である國立農業審議會長フリスベルト・カマルゴ博士が、低濕地帯を灌漑排水溝に開墾し、ここで稲を試作した處、一ヘクタール六トンの籾を收穫した。從來二トンしか收穫しなかつたので驚いた。この試作でアルバロ・アドルフ上院議員は、グアマ河沿岸水田計画を目論み、カラパショ地區八千ヘクタールの私有地を買收し、一九五〇年から毎年二〇億クルゼイロづつの豫算で、邦人三百家族入植せしめて水田造成に着手した。アマゾン經濟開發庁も大いに乘氣になつたが、二〇億の豫算が不幸とれず、またグアマ植民地の水田計画も卓上の空論で、實地にそくせず、そのため百四十家族のうち百家族の邦人は退植した。殘つた邦人も殆んど水田造成をあきらめたが、十家族余りが根氣よく續け、遂に今日蓬來米栽培の完成を見るに至つた。伯國連邦政府が出來なかつたことを、邦人は各々個人の力で皆夫々完成させた譯である。それまでの苦心は筆舌に盡しがたいものがあつた。

彼は父七郎、母えい両親の四男に生れた。小学校を卒業した年に滿十七才で、滿州開拓青年團に志願した。時に昭和十五年であつた。昭和二十年二月現役呼寄で、大東亞戰爭に參加、終戰の時は奉天にいた。兄三人は皆戰死したが、彼一人のみが運よく生存した。長兄深志は南大平洋の藻屑と消えた。次兄茂は呉軍港で敵空爆で戰死、三兄保は眞珠灣攻擊に參加、次のミッドウエー大海戰で戰死した。だから同鄉親戚の橋村行義（莊内町關の巻）が呼寄せたとき、飛びつくようにアマゾンに移住した。グアマ植民地は在住僅かに五年である。呼寄せた橋村はグアマを見かぎつて、首都ブラジリアに轉じたが、彼は水田經營と牧牛畜産（現在乳牛三頭）、それに胡椒栽培と野菜栽培の多角營農で立派に成功すると決心して腰を落ちつけた。つぎえ夫人の絶大な協力を賞し、隆男・秀雄・英子の三兒の成長を祝す。大正十五年三月三十日寅年生。胡椒樹の前でトラクターと家族五人

KATSUNOSUKE HIRASE
a/c Jamic, R. Gaspar Viana,157
Belem, — Pará

ベレーン市郊外グアマ植民地

平瀬勝之助氏

原籍　熊本縣天草郡富岡町
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

在伯邦人成功者の大半は、金儲け以外の話は零で座談しても無味乾燥であるが、彼は實に常識に富み、話題豊富，何週間でも話の種がつきない。若い頃からなか〳〵苦勞人で、人生六十年は波らん重疊を極め，山あり、河あり，時には谷あり，瀧ありで實に變化に富んでいる。渥厚篤實、情味横溢だが，大正十二年震災後に東京に出て講道館の門をくぐり，柔道二段の免狀をとつた。六尺近い体軀頑健，祖先は長崎生れで，熊本育ち，この九州男子は頭山滿翁の門をたたいて祖國愛に生きたり，戰時中は青年学校の教師をして，心身共に國家に捧げた。戰後果樹園などを經營し，町會議員に就任，町政にも參與した。最高の趣味は讀書と云うから常識に富んでいるのは當然である。長男勝衛は名門熊本齋々校の分校天草中学を卒業，戰後食糧公團配給係をやつていた。熊本縣庁中島澄子の斡旋で，藤澤市婦人ホーム出身の女性靜江新夫人（靜岡縣島田市出身）が一九六二年八月ぶらじる丸で渡伯し，結婚にゴールインした。著者が平瀬勝之助の人柄に尊敬する點は，實にこまめに日記をつけている事である。日記をつける事は，自己人生の記錄を後世に遺すことで，この位い有意義なことはない。過去の出來ごとを彼に訊いても，すぐ詳しい返事が出來るのは日記をつけているからである。

配耕地はベルテーラ・ゴム園，入植六カ月で退植した。日伯移民協定違反で農林省の横槍があつて退去命令，すぐマザゴン植民地に入植變更で，十五家族が現地を視察，四十六日頑張つて入植を拓否した。有名なマラリア病發生の地で，増水期には浸水して農場建設には不向，到頭移民會社は折れて，造成計画中のグアマ植民地に變更した。グアマ植民地草分入植者で，六カ年間北伯水田計画に參加した。本論に掲げてあるグアマ水田の寫眞は平瀬水田農場である。グアマ農業協同組合結成のために盡し，この方も長男勝衛が書記長で多年貢献した。北伯アマゾンは熱帶だから，甘蔗（レボーリョ）は絶對に巻かないものと從來云われていたのを，彼等が試作し，到頭立派なものを作りあげた。「グアマのレボーリョ」と稱せられ，一農家で五十トン以上も收穫して儲けている。

浸水地帯の水田計画六カ年を經て高台に移り，胡椒五千本（新植二千本）柑橘・パパイア等の果樹類，牛・豚・鷄の畜產關係，野菜など多角的栽培で，全く農事試驗場のようである。グアマ植民地入植當初レボーリョ（甘蔗）栽培發見で一攫千金の夢を實現・こんなだつたら三年で一千万円儲けて錦衣歸國と思つだが，同業者が多くなつて値段も安くなり槿花一朝の夢と化した。やはり農業は賭奕ではないと悟りを開いた。貞節の譽たかい節代夫人との間に三男五女，長女恭子はコツケイロ伊藤春雄に嫁づき，長男勝衛以下二男平，三女郁子，四女環，三男欣也五女八壽江で二女都美子だけが大阪市にいる。明治三十八年四月二十四日己年生。寫眞は一九六四年八月嫁靜江着伯記念

ISAMU KAWASAKI
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

ベレーン市郊外グアマ植民地

川崎　勇　氏

原籍　宮崎縣東臼杵郡北浦村宮之浦
渡伯　昭和三十二年一月　ぶらじる丸

實に真面目で、生一本の人柄である。入植當初、底湿地帯に入植の土地がなくなり、止むなく水田計画からはづされ、高台に入植、宮本・上岡・橋村などと共に辛酸苦労をなめた。高台で水利悪く、野菜は出來ず政府はゴム樹と珈琲を命令的に栽えさせた。コーヒーは四年目ゴムは十年目でないと収入にならず。日本から持参した九万円の營農資金は一年で消費、その日／＼の生活に困つた。これではいけないとすぐ胡椒を植えた。この切替に早く目覺めたのでよかつた。三千五百本の五年生の胡椒は、莫大な収入がはいり、一九六四年二千本増植した。これから二十五ヘクタールの全農場に二万本の胡椒を植え四人の男に五千本づつ公平に分配してやるつもりでいる。なか／＼頑張り屋で、二十六家族一緒に入植した第三次グアマ移民はおおかた退植した。入植當初底湿地帯に入植し、野菜や雑作も、どうにか生計がたつた連中が、一足先きに脱耕し、入植當初政府の水田計画からはづされた彼等が、遂に最後の勝利を得たのも不思議である。「艱難汝を玉とす」と格言にある通り「千里の道も一歩より」でボツ／＼辛抱したのが、目的地に達した訳である。一日も早く全農場に二万本の胡椒を満植し成功の曉はとしえ夫人と共に訪日せん事を期待して止まない。日本には實兄重吉が待つていることであろう。

彼の生地宮之浦は海岸で延岡市から七里も離れており、父佐太郎、母おろく両親の二男に生れた。兄重吉は延岡市で湯屋を開業している。彼は若くして漁業に従事、十九才の年に日支事變に志願して従軍した。大東亞戦争になつて引つづき参戦、南太平洋で何回も激戦に参加した。マレー半島上陸前に、輸送船隊が全部撃沈せられ、眼前に沈づむ戦友の姿、續いて敵爆撃機による空爆で船腹を横にさらす姿、その惨酷凄絶の中で、漸く一命を拾つたこともあつた。終戦はインドシナのジャバ島であつた。日本に復員してまた漁業に従事した。ブラジル移住の話をきき、これ幸と飛びついて、アマゾン移住地に入植した。時に三十八才であつた。

長女花代は長崎縣人長石孝寛と結婚して、ベレーン市内に在住している。長石家は食堂を經營、女婿孝寛は農産物仲買業である。長男孝太郎は二十一才になり、農場總支人で多くの伯人雇傭人を監督している。二女松美は姉花代の手傳をして長石食堂で働いている。二男久義、三男豊榮も自宅で精勤、三女千里はベレーン市で通学、四男英満も健在である。在伯満八年目、農場も漸く設備が整いかけ、住宅、倉庫を建てた。入植してすぐ胡椒を栽えれば今日は大成功しているのであるが、入植三年目に氣づいたので、少々立直りがおくれた。それでも他の人々より早く植えでよかつた。切に今後の發展を祈る。大正八年十一月二日十未年生。

右は長女花代、左は家族一同

ベレーン市郊外グアマ植民地

上岡　一　氏

HAJIME UEOKA
a/c Morikawa R. Dr. Assis 102
Belem, — Pará

原籍　三重縣尾鷲市三木星町
渡伯　昭和三十二年一月　ぶらじる丸

雜草一本もない立派な農場を所有、塵一つない清潔な家屋に住み、潔癖性がありありと解る篤農家である。グワマ植民地胡椒栽培のトツプ級で、最初から底湿地帶の水田計画に参加せず、高台に入植、野菜は出來ず陸稲も駄目、入植三・四年は營農資金欠乏で、辛酸苦勞をなめた。そして貧乏に耐え、最初百五十本から千本三千本と胡椒を栽え、現在は合計八千五百本で、それが成樹となり胡椒成金となつた。一九六四年オリンピック訪日を計画していたが、中古貨物自動車を一千コントスで購入したのが失敗で、修理に一千五百コントスかかり、到頭修理費に喰われて訪日をフイにした。入植當時、政府の命令でゴム三千五百本珈琲二千本を植えたが成續悪く、しかもゴム樹は十年後でも、實收入があるかどうかと案じられ、ここで自から胡椒栽培に方針を變更した。この先見の明はピタリと當り、今日の榮冠を得た。モルモット移民のガラから早く脱し、自分獨特の農場經營法に切りかえたのがよかつた。胡椒が全部成樹となれば莫大な收入があるし、一九六一年に第二農場を購入し、所有農場七十五ヘクタール、軈て第三農場購入計画中である。

繁榮した上岡一家族

　父秀十郎、母きく兩親の長男に生れ、十二人の弟妹の頭となり、少年時代から、大きな責任を感じた。だから今日も責任感が強く、絶對に嘘を言わない人物となつた。先祖代々の旧家で、資産もあり、渡伯に際しては豪華な送別會が催されたので、彼のブラジル移住も、その成否は大きな責任がもたらされていた。だから入植から今日滿十年間一心不乱に斯業に邁進した。他人から「働く機械、人間機械車と」云われたしん夫人との間に五男二女、この優秀な子女の協力も、今日輝やかしい農場建設の原動力になつている。長男常祐は中学卒業後父と共に材木、薪炭業に従い二十才で渡伯した。長女豊美は上岡信吉と結婚、二男尚昭は上岡農場の自動車係、三男勝司は農場雇傭者監督、四男幸成と五男良紀は森川商會で商業研究、二女友代は商業高校在学中である。長女豊美の女婿上岡信吉は旧姓田島信吉。鳥取縣八頭郡丹ビ村出身、父政藏、母ふよの末子、兩親は早逝十六才まで京都市で育ち、終戰時の昭和二十年六月一日大阪鶴町二丁目の空襲で、漸く一命を拾い、後に土木請負業間組に入り、大阪・滋賀・岐阜・三重と工事場を廻り三重縣尾鷲市鉄道工事四年目に、愛妻とよみと結婚、渡伯後三年岳父に盡し、一九六一年獨立、二千本の胡椒園を經營、一實・善信・豊の三児に惠まれている。信吉＝昭和八年生。上岡一氏＝明治四十年十二月三十日未年生。

女婿上岡信吉君

TOSHIAKI YONEKAWA
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

ベレーン市郊外グアマ植民地

米川敏明氏

原籍　熊本縣熊本市黒髪町
渡伯　昭和三十二年六月　ぶらじる丸

彼は九州男子で春風駘蕩型、どんな苦しみでも「グチ」をこぼさないカイカツな肥後人である。妙子夫人も明朗清楚で、いつも逆境のときは、上に揭げてある寫真をみながら、夫婦して日本を出發するときの、あの前途に輝く希望の境地にかえり、少しも落膽せず、今日まで辛酸を克服した

渡伯前は米軍キャンプに八カ年勤め、生活にも困らなかつたが、その日／＼の下積生活に甘んずる事を潔とせず、「虎穴に入らずんば虎児を得ず」と一大勇猛心をおこして、ブラジルに移住した年齢三十五才、いまだ大東亜戦争で激戦した意氣は劣えず、操志强靱、踏み出したら一歩も退かない肥後魂があつた、なか／＼社交家で愛嬌があり一見柔和にみえるが、それは表面だけで心の中に焰える斗志は、阿蘇の噴煙に似て不眠不休に湧いている。第四次グアマ移民としてペルナンブコ区に入植（現高木重男耕地）六ヘクタールを拓き、米作・野菜を續けたが、トメアスー植民地の胡椒栽培者の儲け話をきいて、やはりアマゾンでは胡椒栽培がいいと直感、二カ年の生活を打きり、高台に二十五ヘクタールの土地を購入、最初二千本、次年度一千本を植え、合計三千本にした。そして生活費は野菜や米作が出來ないので、天然雨水を利用して西瓜栽培を行つた。幸い成績良好底湿地帯のレポーリョ（甘藍）と同じく、グアマ植民地生産の西瓜としてベレーン市民四十万人の食慾をそそつた。最近日本の種子なし西瓜を栽培してから、尚北伯全般に好評を博している。この地帯の西瓜は、一株に十キロの生産で、五反歩で一千株十トンの生産豫定である。五千株植えると五十トンの生産で巨利を博する譯である。

彼は父・子之八、母初枝両親の三男に生れた。三男坊主のキカン坊敏ちやんで通り、昭和十四年十二月から兵役に服した。大東亜戰に續いて參戰南洋方面で活躍、昭和二十年南方ジャバ島から復員した。復員した年に妙子夫人と結婚、農業生活一年後に、食糧加工工場に働いて一カ年、そしこ米軍キャンプに勤めて八年到頭南米移住に決心して、アマゾンに永住した。第四次グアマ移住者四十七家族の人々がおおかた植民地を退散した。殘つた小數の人達も底湿地帯で頑張つている。彼は突拍子な行動をとり、グアマ植民地の高台に移轉して今日に至つた。追懐すると水田地帯から移轉した當初は粗収入がなくて、實際逆境にたつた。「もう駄目か？」と歎げいた日が何回あつたか判らなかつた。然しその最悪の場合でも頑張り通した。一攫千金を夢みらず、自然に即して進んだから今日を摑だ譯である。

妙子夫人の弟村田義和を同伴したが、彼もグアマ植民地堺入廣之長女ふき子と結婚、獨立農場を經營している。日本生れの長男孝一、二男洋二、長女ルミ子の三兒も成人した。米川家の繁榮はもう水平線の彼方に見えている。大正十一年三月十一日成年生。寫眞は日本出發永久の記念

HEISHIRO HIRAI
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

ベレーン市郊外グアマ植民地

平井平四郎氏

原籍　福島縣耶麻郡西會津町今和泉
渡伯　昭和三十一年十二月　あめりか丸

「でわ平四郎元氣でねー。平井家の名をけさないよう、しつかりやれよー」長兄一雄の激励の言葉であつた。「はい」と返事をしたその言葉には、郷里を離れて哀愁の悲しさがあつて、自然と涙がトメドモなく出た。一九五六年（昭和三十一年）同村に未曾有の水害があり、全部落が全滅したので、協議の結果渡部三家族、阪内・平井・田崎・斉藤・三留の八家族がブラジルに移住した。田崎菊治はコッケイロ植民地、三留辰已はアカラ植民地、三齋藤市吉はブラジリアに移轉、殘りの五家族が仲よく　グアマ植民地が踏みとどまつている。「平井家の恥にならんよう」と激励されたその兄の言葉がいままでも脳裏を去らない。それだから入植して今日まで、わき目もふらず農場建設に驀進した。

みさ夫人の涙ぐましい助力も賞したいし、夫人の弟小松三八（みはち、二十七才）が不平も云わず、義兄のため全靈を捧げ、協力している美しい心構えにも感心させられる。

グアマ植民地の水田計画に参加、第三次移民として二十八番地域に入植、水田は浸水ひどく駄目、永年作物も浸水期間が長くて根が腐り、漸く發見した乾燥期の甘藍栽培（レポーリョ）で儲けた。然し毎年甘藍〳〵と儲けることもいいが、もし天災があると困ることを熟慮、三カ年間儲かつた貯金で、一九六一年高台地に二十五ヘクタールの土地を購入した。そして一九六一年から胡椒一千五百本、二年目三千五百本を植え、合計五千本となり、これが三年目實がなり始めたので、一九六四年二月に野菜作りをやめて移轉した。野菜で儲かつている時に、トラクターや耕耘機を購入したので、まず農場經營も安心、そして一九六四年度儲けた純益で、また二十五ヘクタールの土地を購入した。いずれ義弟小松三八も獨立しなければならないので、その時の候補地と豫定されている。ここまで來る辛酸苦労は筆舌に盡しがたく、本來なれば、毎年〳〵儲かる甘藍栽培（レポーリョ）をやりたかつたが、やはり農業は一年作物より、永年作物の方が危險がなく、安全だと思つた。渡伯十年目が基礎時代で、これから後の十年間が事業擴張飛躍時代である。

彼は父平次郎、母ちよ兩親の四番目に生れ、姉二人、兄一人で二男坊である。腕白少年は成長し、軈て六十五連隊に入營、三カ年兵役に復した。大東亜戰爭には中・南支方面に轉戰し、硝煙砲雨の中をくぐつた。復員して農業に精勤、遂に水害で止むなくブラジル移住、時に四十一才「四十才にて不惑」の年輩であつた。移住するには少々年齢的におくれていたが、移住後幸にして、今日の地位を得たし、今後事業は軌道にのつた。みさ夫人の間に長女千惠子（十九才）二女邦子（十六才）長男亨二男衛（共に小学校）の四兒健在である。大正五年九月十五日辰年生。

寫眞・左上は義弟小松三八君

ベレーン市郊外グアマ植民地

矢野 進 氏

原籍　宮崎縣湯兒郡川南町
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

SUSUMU YANO
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

若い頃に熊本の農聖松田農場で、農民道を訓練しただけあつて、冒險な單一農の一攫千金を夢みらず、百姓百作で多角農に生き、悠々自適の生活を營んでいる篤農家である。二宮尊德式でとても地味、派手好みな日本人には向かないかも知れない。

彼の農場は一見して農事試験場の觀がある。ピメンタ四千本（成樹三千本）を始め、蜜柑、ココ椰子樹、バナナ・パパイヤ・パイナツプル、アバカテ、コーヒー等の果樹類から、陸稲、ブラジル豆、大豆、落花生の雜穀類や、西瓜、南瓜、トマテ甘藍、玉葱、人参、茄子、大根、胡瓜等の野菜畑など、全くこうも手が行きとどいているかと思う程美しく、しかもその收穫は莫大で純益をあげている。こうなれば絕對に失敗する憂がない。不慮の天災があつてもどの作物かで純益をあげられる。用意周到この上なしである。

彼はブラジルに渡つて、ベルテーラ・ゴム園に入植した。このゴム園に一・二年はおるのかと思つたら、たつた七カ月で退去命令が出た。ゴム園は一九二九年自動車王フォードが五百五十万ドルの巨費を投じ八百万本のゴム樹を栽えた。處が天然ゴムと違つて、人工栽培は六カ敷、接木法の研究不足で成績よくなく、僅か二百二十万コントスで伯國政府に賣却した。このゴム園は伯人労働者だけ働らいていたが、ここに日本移民を入れるのは、伯人労働者を壓迫するもので、日伯移住協定に違反するものだと、連邦政府農林省の横槍で退去命令が出た。移民會社は止むなく、アマツパ直轄州マサゴン植民地に移轉させ、十五家族マサゴン市に移つた。然し視察してみると、マラリヤ病巣窟の不健康地、生浸水地帯で水田も出來ないし、マサゴンは命があぶないと氣づかわれたので、十五家族血盟して入植を拒否した。四十五日も移民収容所で頑張り通し、移民會社も到頭彼等の根氣に負け、植民地計画中のグアマ移住地に草分開拓者として入植させた。追懐するとマサゴンに入植せずによかつた彼等のあと五カ月目に日本から直接マサザンに入植した七家族は、到頭六カ年頑張通した努力を水泡にして、丸裸で退散したあの當時植民地の造成と人命の尊さを主張し、十五家族結束したその意氣は賞讃したい。

ガアマ植民地に入植し、底湿地帯で政府の命令に從つて、水田計画に参加、二カ年過ぎたが、彼の入植地は水田に向かず浸水地多く、二カ年で高台地に移り、胡椒栽培に邁進、最初八百本を栽え、そして今日に至つた。貞節の露子夫人との間に三男四女、長男雄三は當年三十一才、宮崎縣延岡の旭化成ＫＫに勤務している。二男英雄は二十九才、農場總支配人、三男重一、長女あや子（隣地谷山國靖夫人）、二女れい子（隣地篠本爲治夫人）、三女まり子、四女すい子等健在である。明治四十二年三月二十二日酉年生。寫眞は昭和三十二年一月四日底湿地帯生活の記念、後列左端主人英雄。

TAMIO WATANABE
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

ベレーン市郊外グアマ植民地

渡部富雄氏

原籍　福島縣耶摩郡西會津町今和泉
渡伯　昭和三十一年十二月　あめりか丸

福島縣々會議員大久保俊夫が團長となり縣議團が福島縣出身のブラジル移住者を訪問慰安したが、その中に鹽川町（同村出身）の縣會議員生江光喜がいて、彼の耕地を訪づれた。開拓資金も乏しく、悪戰苦斗中であつたが、高台地も開拓中で農場經營の見通しもついていた。議員は我がことのように喜こんで大いに激励したがその時に記念にとつた寫真が、上に揭げたもので長女敏子もまだ吉野秀幸に嫁づかない前であつた。

東北地方での山間僻地で育つた意氣强固な拓人である。父健次郎、母梅野両親の長男に生れたが、若くして海外に志をたて、二十三才の昭和八年に朝鮮に渡つて消防署に勤務したあれから三十一才になるまで精勤し、大東亜戰争勃發の混乱期を經て朝鮮から復員した。一度朝鮮・台灣・樺太・滿州で暮らした者は、猫額大の狭まい日本で生活出來なかつた。二十三才の純真な青年の氣持で滿州に渡り、三十一才で日本に復員するまで、自由の天地で浩然の空氣に浴したので、醜悪な日本社會が嫌になつた。嫉妬、猜疑、羨望、讒言嘘言、陰謀と全く精神苦になやんだ。朝鮮ではこんな事はあまり氣にしなかつたが、日本ではとても氣が安まれず、虚禮が多くて困つた。静江夫人は朝鮮生れの長女敏子、長男武彦（昭和十九年一月十日生）の二兒を育てながら、戰後の食糧難に泣いていた。そこえ西合津村の水害があり、今和泉部落は全滅した村員合議の結果、ブラジル移住を決議したが、その中でも朝鮮に住んだことのある彼は大いに賛成であつた。そして同郷の斎藤市吉・三留辰己・田崎菊治・平井平三郎・阪内芳恵・渡部伊兵衛・渡部德治等と共に八家族で、グアマ植民地に入植した。

朝鮮におるとき、明治四十年前後に朝鮮開拓地に入植した邦人先輩の苦心談をきいていたので、グアマ植民地の水田計画が順調にいかなくても、少しも悲感しなかつた。日本の水田ような立派なものをつくるのは、十年や二十年はかかるだろうと思つた。しかも毎年浸水する底湿地帯の増水研究、水田と施肥の研究もしないで、すぐ荒地を伐採する事が無理であつた。彼は當初發見された甘藍（レポーリョ）栽培に轉身、これに主力を注いで巨利を博した。そして儲けた金で、高台にある谷山耕地廿ヘクタールを購入した。この耕地に現在五千本胡椒が栽えてあるが、成樹は一千五百本で、既に六年生である。こうして永年作物の収穫安定をみた上で、一九六四年二月高台耕地に移轉した。實に六ヵ年底地（横山久耕地隣）で野菜栽培をしていた譯だ。長女敏子は吉野秀幸青年と結婚している。二男武彦も二十一才、二男ゆう三、二女まり子、三女よし子等健在である渡部富雄は海外移住の目的を達し、いま軌道にのり發展街道を進んでいる。目出度いことだ。大正二年三月一日丑年生。

HISASHI YOKOYAMA
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

ベレーン市郊外グアマ植民地

横 山 久 氏

原籍　宮崎縣西都市字三納
渡伯　昭和三十一年十二月　あめりか丸

なか／＼酒豪であり、豪腹剛膽、善悪併せ呑み、肚におさめて他人の悪口を云わず、自然と大衆の頭に推される器をもつている。別に雄辯でもなく、外交の腕にたけていないが、生産物販賣と金融が上手、その上紛争が起り勝ちな團体を統制する力倆があり、グアマ植民地産業組合第三次、第四次、第五次の三カ年間理事長として敏腕を振るい、グアマ植民地更生のため健斗した。百四十余家族の入植をみたグアマ植民地は、北伯唯一の水田計画植民地で、三万ヘクタールの私有地を購入して、連邦政府が毎年二〇億クルゼイロを補助金として、水田造成に踏みきつたが、入植

（上左）横山久（上右）きよ子夫人、ふき子、マリーナ（下）義弟吉野秀昭と三兒

地の地勢調査不足や、水田研究不足、補助金削減等で、事業は豫定通り行かず、産業組合を結成した第一回理事長戸川三郎、相談役林徹（高知縣大正町長・元縣會議員）井上勝（高知縣須崎市庁農林課長）大川義則（日本一の米作多收穫者）などがどん／＼退散して四十家族残つた。産業組合も入植者退植でまさに倒産に瀕したが、第三回目に彼が理事長となつて大改革、ベレーン市に出張所を設けて、事務所兼無料宿泊所としたり、伯國々立銀行農村融資の交渉もやり、漸く立派な組合となつた。グアマ植民地を退去した者は「グアマ」かと一笑に侮辱するが退耕せず孤軍奮斗した彼等は「待てば海路の日和あり」で、遂に退耕した人達よりも立派な農場を經營するに至つた。

一九六〇年（昭和三十五年）から、毎年二十トンも生産する甘藍（レポーリョ）の純益で高台に農場を建設、胡椒を毎年一千二百本づつ三カ年、最後の四年目に二千四百本植えて合計六千本となし、續いて現在も増植中で、一万本になるのも近日中である。しかも野菜の出來ない高台（水利の便悪し）で、降雨を利用して、毎年西瓜五千株を栽培している。半ヘクタール一千株、二ヘクタール半で五千株、一株に十キロ實つて五〇トンの豫定、七〇〇コントスの肥料を入れている。三カ年も理事長をやつたので農場の方が留守がちだつたが、これからは自から陣頭にたつたので、見違えるように事業は發展した。

父重雄、母さか兩親の二男に生れた。熊本六師團野砲連隊に入り、滿州に出征し、終戦の時は北滿州、ソ連繋留生活四年を經て、日本に復員した。だから軍隊生活も味わい、終戦後のソ連シベリア生活も体験し、その修養で清濁併せ呑む雅量が、自然とできた譯である。渡伯する時はきよ子夫人の弟吉野秀美青年を家族に同伴した。秀美はコシジユーバ島山口義行妹きく子と結婚し、模範胡椒園を經營している。その弟吉野秀幸も南伯コチア産業組合で活動していたが、北伯アマゾンにきて兄秀美の近くで獨立している。日本生れの彼の三兒・長男健司、二男浩昭、長女ふき子も成長、伯國生れの二女マリーナ、三女エレーナも元氣である。大正十年三月二十六日酉年生。

TOKUJI WATANABE
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

ベレーン市郊外グアマ植民地

渡部徳治氏

原籍　福島縣耶摩郡西會津村新屋敷
渡伯　昭和三十一年十二月　あめりか丸

寫眞のうち左は日本出發に寫したもので、永遠の記念として實に懐かしい。右は一九六三年十二月に寫したもので、八年頑張つた底濕地帶に袂別記念で、その翌年二月に高台に建設中の渡部徳治農場に引越した。渡伯當時主人の肩までもなかつた二男佳雄が、もう彼よりも二寸程背が伸びてきた。長男勝俊が二十一才、二男佳雄が十八才、長女惠子が十五才で、みな成人した。渡伯するときに長男勝俊が未成年で、渡伯家族の條件に適せず、鄕友阪内芳惠長女のり子を家族の一員として構成、漸く渡伯したが、のり子もビジア街道富山縣人福田精二長男雅男に嫁ついで幸福な生活に浴している。

父熊作、母とき、兩親の長男榮につづいて二男に生れた。自動車運轉手として東京都の繁華街でくらした事もあり、こと自動車運轉には自信があつた。大東亞戰爭には、補充兵役の彼も呼集され出征、海軍に編隊、テニアン島にいた。終戰後は復員して、自動車運轉の特技を發揮、會津野澤乘合自動車會社に勤務した。だから渡伯に際し、會社からも惜しまれ從業員一同から、記念の時計を贈られた。この時計が「コツ／＼」と一刻をきざむごとに、彼の精神は緊張味を増し長男勝俊や二男佳雄をみて「頑張ろうぜー」と元氣旺盛な聲をはりあげた。りつ夫人も「皆んなに負けんよう精を出しましようねー」。もう少しだから」と合打の言葉を吐いた。この時計は目覺時計でなく、なまけることの出來ない進軍ラッパ時計であつた。今になれば教訓となる時計を贈つてくれたものである。

水害のため一村全滅、そのため鄕友八家族が卒先して、アマゾン移住を決行、第二次グアマ移民として、グアマ植民地に入植した。彼等ば日本を出るとき、グアマ移民第一回入植者であつだが、ベルテーラ・ゴム園移民十五家族がマザゴン入植地に移轉させられたのを拒絶し、遂にグアマ植民地に入植しだので彼等は第二次入植者となつた譯であつた。水田計畫の地域に入植したが、まだ／＼研究不足、そこへサルテ案の二〇億クルゼイロの補助金も下附されず、水田計画は費用少なくて縮少氣味彼は甘藍（レポーリヨ）栽培で更生の道を求めた。熱帶地方では甘藍は葉が卷かないものと思われていたが、ここで試作して初めて卷き、グアマ產甘藍として珍重がられた。ここで栽培に主力を注ぎ、一作二十トンを生產巨利を博しながら、高台に胡椒園建設に進み、最初千六百本栽培、次に千本植えて、それが成樹になりかけたので、一九六四年二月遂に高台に移轉した。同鄕の平井平四郎と一緒に高台移轉を計画、胡椒を植え始めたのも一緒、移轉も同年同月であつた。日本から一緒にきた同鄕人がみな健在で、立派な農場建設に邁進しているから、彼等のブラジル移住は有意義であつた。村民に對し期待に背むかなかつた點、彼の心中は明朗である。大正二年九月十日丑年生。

ベレーン市郊外グアマ植民地

阪内芳惠氏

原籍　福島縣耶麿郡西會津村落合
渡伯　昭和三十一年十二月あめりか丸

YOSHIE BANNAI
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

　飾り氣のない朴訥な農村人で、農場經營以外に野心のない人柄である。長男芳之（二十九才）を頭に、二男芳博、二女幸子、三男芳信、四男金男の五人が健在だ。六ヘクタールの全野菜畑に、甘藍（レポーリョ）を栽培、六・七十トンを收穫するつもりで、眼まぐるしく活動している姿は實に頼もしい。この人の事であるから、いつかは一作百トンの甘藍を生産し、ベレーン市場をアッと云わすだろう。從來毎年二ヘクタールづつ栽培し、三十トン平均收穫していたがいよ／＼下の子供等も成長したので、一九六五年度から、大々的に事業を擴張した。ベレーン近郊は熱帶地方で甘藍は葉が卷かないと云われていた。處が第一次入植者の連中が營農資金が缺乏し、生活に窮したあげく、苦肉の一策として、必死になつて甘藍を栽培した。これが運よく葉が卷いて、グアマ植民地の甘藍としてベレーン市民四十万人の食卓を潤おわした。處がグアマ以外の地でも出來るかと云うと、それが大々的に出來ないのである。グアマ植民地の底濕地帶は毎年四・五カ月間は浸水し野菜は栽培出來ない。その浸水期に上流の肥沃土が濁流と共に押し流され、グアマ地帶の表土は自然の肥料地帶となつた。丸で神様が天然肥料を、毎年散布してくれるようなものであつた。そして乾水期が始まると、甘藍栽培の準備に移り、この甘藍栽培期間が約六・七カ月間である。この自然堆肥の恩惠で五ヘクタールも十ヘクタールも大々的に甘藍栽培が出來るのである。全くこれはグアマ植民地の一人舞台で、この味が忘れられず、底濕地帶に殘つて、水田もやらず、甘藍栽培專門に生きている譯である。

　彼は父久松、母しのぶ兩親の長男に生れた。青年時代に鑛山生活を体驗した。兵役に服し、軈て出征し、釜山・朝鮮・支那と各地を轉戰した。昭和二十年終戰となり、北朝鮮平壌から滿州に行つた彼は、すぐソ連兵によつて武裝解除、そしてソ連に繋留され、シベリアのハバロスクで俘虜生活を送り、一命を拾つて復員した。兵役關係は前後を通じて十余年に及んだ。「戰爭で命を棄てたと思えば、なんでも出來ますよ。皆んなが高台にきて胡椒を植えろと云いますが、バルゼア（底湿地帶）の生活も、心の持ちようで幸福の至りです。日本にいてこんなのん氣なことは出來ませんよ」と一ぱい盃を傾けた。その言葉は七八・才の天眞爛漫さがあり、ニコ／＼した面は童顔で、エビスと大黒を合わして少年にしたようであつた。西會津村の水害で再興がなか／＼むづかしい處から、一つ海外へでも行こうかということになり、八家族の村民が一緒になつて渡伯した。その一人も、その移住の使命を感じ、驚嘆すべき努力をした。その一人に彼がいる。ちよ夫人も活動しているし、長女のり子はビジア街道富山縣人福田清二長男雅男に嫁づいている。明治四十年十二月十日亥年生。

HIDEMI YOSHINO
HIDEYUKI YOSHINO

a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 57
Belem, — Pará

ベレーン市郊外グアマ植民地

吉野秀美氏
吉野秀幸氏

原籍　宮崎縣西都市三納
渡伯　昭和三十一年十二月　あめりか丸

横山久きよ子夫人の弟で、父捨松、母一子(かず子)の長男に生れ、三男が秀次、四男が秀幸であつた。弟秀幸が十カ月前にコチア産業組合呼寄青年として、南伯で活動していたので、それに刺激され、遂に義兄横山久家族の一員となつて渡伯した。三十才でまだ獨身だつたから、グアマ植民地に入植して十四日目の十二月二十五日クリスマスに結婚式をあげた。

新夫人は山口義行(現在コシユジューバ島)妹きく子であつた。水田計画の底濕地帯で野菜栽培三カ年、大いに頑張つだが、不幸長男宇一が赤痢で病歿したので、浸水地帯がいやになり義兄山口義行耕地を譲受けて移轉した。山口耕地は二千本の胡椒成樹があつたが、それを三千五百本にしゴム一千本の台木にも彼の手で接木した。十七才で大東亞戰に志願、海軍飛行隊に入り、十九才で奈良市にいた時に終戰復員して農協勤務三年、役場勤務三年の後に農業につき、そして渡伯した。夫婦の間に二男寅男、三男譲、長女テレーザ、四男マリオがいる。昭和二年七月十三日卯年生。

弟秀幸は昭和三十一年二月あめりか丸の渡伯、十八才でコチア産業組合呼寄單獨青年として、聖市郊外イビウーナ市中平耕地で三年半も辛抱した。一年後に渡伯した兄や姉の勸誘でアマゾンに轉身、トメアスー植民地ブレゥ四區宮崎縣人黒木重克耕地に一年就勞、轉て義兄横山久耕地に一年、そして渡邊富雄長女とし子と結婚し、高台の現地で獨立した。聖市郊外で蔬菜栽培三年半を送つたので、蔬菜栽培は熟練者である處から、一九六三年には北伯で出來ないメロンを作り、一キロ八〇クルゼイロで販賣大いに儲かつた。また北伯で出來ない馬鈴薯もカンピーナス地區で栽培している。農場に植えたピメンタは二千本の幼樹である。稀に見る篤農青年で、儲けた金で一九六四年には早くも、貨物運搬大型自動車を購入した。新婚早々で未だ子寶に惠まれない。昭和十一年七月十三日寅年生。

(上)吉野秀美家族(下)吉野秀幸夫妻

IHE-E WATANABE
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

ベレーン市郊外グアマ植民地

渡部伊兵衛氏

原籍　福島縣耶摩郡西會津村今和泉
渡伯　昭和三十一年十二月　あめりか丸

北伯アマゾン地方に於ける甘蔗栽培（レボーリョ）の第一人者で、甘蔗王の尊称をほしいままにしている人物である。八ヘクタールばかりの甘蔗畠は、二十日置きに間隔をおいて種まきされ、その手のゆきとどいた畠で長女たか子、長男伊一等が、父母と共に汗みどろになつて働いている。

「今年はとても馬力をかけましたねー」と著者が訊ねると

「いや少しばかりですよ。然し昨年よりは増産すると思います。なんと云つても子供相手ですからねー」

右上から伊一・たか子
左上は畠の中で一家四人
（下）は日本出發の渡伯記念

と微笑をうかべていた。一九六三年度が五四トン、一九六四年度が六五トン、そして今年は如何ん。北伯アマゾンで使用する人造肥料は、遠くサンパウロ州から、トラックで一週間かかつて輸送される。或いは二十日程かゝつて伯國船で輸送されるが運賃に喰われてとても高價である。そのため思うように使えないそれに反し毎年肥沃豊饒な天然土壤を、浸水期間の四ヵ月間たんまり上流から押しながしてくれるグアマ植民地の渡部耕地などは、人造肥料は少量の加里と燐酸を使えばいい譯である。それでも甘蔗だから、時には人造肥料なしで済ますこともある。それでも立派に巻いて一個六・七キロから十キロぐらいのが收穫できる

「高台に永年作物を植える豫定地を見つけているのですが、毎年々々こんなに收穫すると、ここを出られなくなりまして」と云つた。土地は平坦で耕耘機で地ならして、仕事は仕易い。種蒔、施肥、消毒、採集と實に簡單である。出荷は住宅前にある船着場からグアマ産業組合の船舶で積めば、それで万事終りである。長女たか子は中学校を卒業して渡伯した。学校のお友達が成人した姿を想い浮べ、やがて自分も嫁ぐべき晴やかな運命を追いながら、懸命に働く二十三才の女性である。長男伊一は今年十八才、もう父上に代つて全農場の管理をなし、伯人勞働者を使驅している。二女よし子も十三才となり、通学している實になごやかな一家である。春から秋にかけての八ヵ月連續の收益は大きいるのであろう。まさ夫人が指導よろしきを得ている

彼は父源太郎、母なつ兩親の四男に生れた。まさ夫人は東京生れ、渡伯前は農に就いていた。四十一才で鄉友と共に八家族で渡伯した。最初二十六番地區に入植し、米作、ゴム樹とカカオ樹栽培をやつたが、地勢悪く、不運つづきで、遂に現地に移り甘蔗專門栽培になつてから、一擧に軌道にのつた。地形の悪い舊耕地に見切りをつけ、轉耕したのがよかつた。故里の水害でやむなくアマゾンに移住したが、全く極樂のような安樂な生活に浴することが出來て、彼のブラジル移住は目的を達した。切に今後の飛躍を祈る。大正五年十一月九日辰年生。

ベレーン市郊外グアマ植民地

山本吉秋氏

原籍　熊本縣上益城郡益城町
渡伯　昭和三十二年一月　ぶらじる丸

YOSHIAKI YAMAMOTO
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

肥後魂に鍛えあげられた彼はなか〳〵事業度胸がいい南伯サンパウロ州でも、パラナ州でも熊本縣人は事業慾旺盛で、どの植民地でもトップ級が多い。北伯アマゾンでもそうだ。トメアスー植民地では澤田毅（合志村）中流アマゾンではパレンチンの木村一則（横島村上流アマゾンではベラ・ビスタ植民地の辻三兄弟（大津町）と續くし、しかも戦後初めて邦人二世が郡長になつたのもトメアスー郡長澤田脩（合志村）であつた。「働くばつてん、やつぱし一番じや」と豪語しているのも、當然であると思う。

（上）玉菜栽培の畑（右）上長女みち子・右下二女下さち子（下）左故ちよの夫人とみち子・さち子・よう子の三兒（渡伯記念）

糟糠のちよの夫人が、一九六四年八月十五日病歿した。昨年五月面談した時は、まだ元氣で明るい笑顔で話したが、あれから二カ月後には幽明を異にした。在伯七年目で、入伯早々には幼女三人をかかえ、随分難儀したのであつた。苦勞をいとわず自から進んで先頭にたつて働らいた。あの健氣な姿が長女みち子、二女さち子、三女よう子の面影にもうつるであろう。山本家の印象を書きたいのだが、何か寫眞がありますかと筆者の問に「これが渡伯當時の記念ですわー。本當にこの時は希望に燃えていましたので、前途は樂しかつたです―」と上に掲げてある寫眞を貸してくれた。あの柔和で語つた言葉の人はもうこの世にいない。切に故人の冥福を祈りたい。

彼は大東亞戰に出征し、軍隊生活三カ年で終戰となり復員した。そして三十三才で渡伯するまで、製菓業に從事した。コセ〳〵した都會生活、五年經つても、十年經つてもウダツの上らぬ中商工業者、三十三才の青春をもてあまし、何處か自由に鴻翼を伸ばす處がないものかと考えている時に、ブラジル國アマゾン移民募集の話しが出た。よしこれ幸いと應募し、第三次グアマ植民地移民として四十八番地區に入植した。猛猪で向う見ずの彼はこの位のことはすぐ出來ると、農業で先輩の人々にまけずに大いに活動、その地に五カ年頑張り通した、第三次できた入植者は二十六家族あつたが、その大方が脱落した。先輩の第二次入植者も六十家族だつたのが八割方尻尾を巻いて退植した。彼はグアマ植民地に入植した以上、必ずここで儲けてやろうと不退轉の決心をかため、到頭五カ年で多大の純益を残し、一九六二年菊永耕地の跡に入植した。しかも現地に入植するや益々敏腕を發揮し、毎年四・五十トンの甘藍（レポーリヨ）を生產し、甘藍栽培に山本吉秋ありの名を天下に轟かした。實際甘藍だけで四・五十トンも生産するのは至難であつた。健氣な長女みち子、二女さち子も協力している　三女よう子、長男精一、二男博輝も健在である。大正十二年八月二十日亥年生。

ベレーン市郊外グアマ植民地

中野　訓　氏

S. NAKANO
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

原籍　廣島縣廣島市本町
渡伯　昭和三十二年六月　ぶらじる丸

彼は父要（かなめ）母まさ子兩親の二男に生れた。一九四五年（昭和二十年）八月十五日の終戰のときは滿九才であつた。渡伯寸前まで学生生活を送つたから彼は戰後派と云つてよかろう。隣地の林丈一拓人と年齢は一つ違いである。中國山陽道は山口縣・廣島縣・岡山縣と三縣ともに海外發展熱の旺盛な地方であるが、その中でも特に廣島縣は一等地を抜いでいる。ブラジルでも五万ヘクタールに一万頭の牛を飼つている竹内豊次（加茂郡竹原町）や五千ヘクタールに百万本の珈琲を栽培している柞磨宗一（赤坂郡沼隈村）や、八十億円の資産がある在伯邦人ピカ一の故藤原久人（三永村）を始めどの植民地どの市町にいつても、廣島縣人がトツプ級にいる。北伯でもトメアスー植民地に篤農家山田義一、野原啓太郎、日高寅男、マナウス市に佐藤行夫、東久一、ベレーン市近郊に日高薫實がおる。こう考えみると、當年二十九才の彼も二十年後には、先輩にならつて、北伯に廣島縣人中野訓ありと名を轟かさねばなるまい。いや必ずその日が來ることを著者は確信してやまない現在グアマ植民地の特産物甘蔗を年間四回に分けて栽培、一年に五十トン内外を生産し、先輩諸氏からも、二十代の（當年二十九才）若さで、中野はやり手だと激賞されている。確に積極進取の氣性に富み、退嬰萎縮のことがきらいである。渡伯當時家長だつた谷口範行の家族一員となつて渡伯、若冠滿二十一才の青年はすぐ家長と別れて獨立、誰れにも束縛されない自由の輕裝で自己の意志の赴くままに勇往邁進。粉骨碎身の努力を續けた。二カ月目には、福岡縣人信重時春長女和江と結婚した。その結婚も超スピードで、あつと云う間であつた。岳父信重はベレーン近郊一千家族の邦人農家のうち、稀にみる質實剛健な人物、義母しづみ夫人も地味な女性その夫婦の血をうけて、和江夫人が純農に生きる質素な女性である。農家の女性が派手好みでは、いくら主人が勤倹力行しても穴からもれて駄目、その点この夫婦は主人が積極的、夫人が隱忍自重型であるから、恰度中道を往くことになり間違いがないだろう。

第四次入植者として、四十七家族の人々と入植したが、多くの者がアカラ植民地や、その他に移轉した。彼もつぎ〳〵と流轉していつたが、恰度福島縣人斉藤市吉が、戸川三郎、林徹、橋村行養などと一緒にブラジリア首都に移轉したので、その跡に移轉した。ここに移つてからは、生産物は順風滿帆の好調に惠まれて、今日の地位をきづきあげた。金が儲かつただけでなく、長女明美、二女さとみ、長男和生（かずお）の三児に惠まれている。日本にいたら、親の脛かじりであつたが、ブラジルに來たため、二十一才で結婚して一家を構え、そして三十才前に堂々たる耕主になつた。自由の天地アマゾンなればこそ、そんなに出來た譯である。昭和十一年九月十五日子年生。

寫眞は長女明美、二女さとみ、長男和生

JO-ICHI HAYASHI
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

ベレーン市郊外グアマ植民地

林　丈　一　氏

原籍　高知縣幡多郡大正町
渡伯　昭和三十二年二月　あめりか丸

明治大学法科中退二十二才で渡伯した戰後派学生上りであるが、義理堅く、放逸遊惰な事が嫌い、何事でも正確を期す性格である。父は林徹で、その三男に生れた。父は材木商で、土木業も兼ねて營業、大正町々會議員から大正町長、高知縣々會議員になつた人物、大正町がパラグワイ國へ集團移住したときの町會議長で、海外に出た家族は、町役場から五万円の餞別金を贈ることを決議し大いに海外熱を旺んにした。

高知縣で海外移住している人達は、その九割までが高岡郡出身である。コチア産業組合の創立者下元健吉、村上誠基を始め九割方がそうである。その他の郡――幡多郡、長岡郡は僅少なため、彼の父徹はこれを嘆いていた。町から海外發展奬勵餞別金を贈るようにしたのも、他の郡に負けたくなかつたからである。そして最後に自分一家も到頭ブラジル移住に踏みきつた。父徹が故人となつた母、それに長兄和夫、次兄秀三、弟皓、妹久喜など、勞働力の多い家族で、營農資金もトップ級であつた。先伐隊の第一次十五家族、第二次六〇家族、第三次廿六家族、第四次四十七家族、第五次廿一家族をもつて、グアマ農協を結成し、その顧問に父が推された。農協の主腦部を第三次組が牛耳つた。三年後の一九六〇年に父や兄は水田計画を見かぎつて、ブラジリアに移轉したが、彼は家族のうちでたつた一人残つた。死んだ母の墓の近くでくらしたかつたし、渡伯後結婚した愛妻喜代子の兩親も近くにいて、相談相手となつてくれたからである。

喜代子夫人の父は高知縣須崎市（舊多野郷村土崎）出身で、渡伯前は農林課長に就任して村民にブラジル行を奬めていた。然し感ずる處あつて、他人に薦めるより、自から率先して模範を示せと、猛勇を振いおこし、百八十度の轉向を決行した清廉潔白な土佐人であつた。坂本龍馬や武市半兵太を私淑しているだけあつて、嘘疑變節を潔しとしない性格であつた。嘉代子夫人も父に似て純情清楚、貧に處しても禮節を守る健氣な女性である。主人の丈一と好一對の夫婦で、夫婦の間には長男寛（ひろし）二男豊、三男靖、四男と男ばかり四人の愛兒に惠まれている。渡伯當時はブラジルに日本式の水田をつくり、瑞穂の國民の眞價を發揚すべく大いに頑張つたものであつた。それが地形が悪いため到頭初志貫徹が出來ず、父達は移轉したが、今もつて水田計画は惜しいことをしたと思つている。政府首腦部が日本の水田を研究し、そして入植豫定地の精密な地勢調査に二・三年かかつてから入植させたら、あんな失敗もなかつただろう。彼はいま甘蔗栽培に主力を注いで、一九六三年は二十トン一九六四年度は廿五トンの收穫をあげた。當年滿三十才の拓人で、切に今後の飛躍を祈りたい。昭和十年六月十三日亥年生

ベレーン市郊外グアマ植民地

小田切與三郎氏

YOSABURO ODAGUIRI
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

原籍　青森縣青森市新安方町
渡伯　昭和三十二年十二月　ぶらじる丸

第五次グアマ入植者二十二家族中、たつた一家族グアマ植民地に踏止どまり、逆境をあきらめ不平を言わず、默々として孤軍奮斗してきた拓人で「もう小田切さんは頑張りきれんだろう」と思われていたのが「静かに征く者は千里の涯もきわむ」の格言通り、到頭立派な農場を建設した。第五次移民が入植して間もない頃に第三、第四次の連中が動揺し、移轉の噂が出たので、多くの後輩も腰が落ちつかなかつた。彼は折角入植した以上は頑張り通そうと、最初から決心した。なにしろ二十二家族入植した人々が退植し、一番近い隣家大内一男耕地まで、その間が二十五六耕地が空地になつた。この退耕した地域にかつて佐川清・須網幸吉・岩永達海・攪上豊三郎等多くが入植していた。

青森市で鮮魚卸商であつたから、余り農業の方は技倆がなかつたが、それでも慾を追つて、転々とするのを好まなかつた。五家族移転、十家族移転と云う風に段々淋しくなり、たつた一家族になつた時は心細かつたが孤獨感に耐ていた。そして最初の四年間は血の涙が出るような筆舌に盡しがたい辛酸をなめた。節子夫人も働らくし、長男征治、二男博、長女惠子の三人も協力した。甘蔗栽培で儲けだし、馬鈴薯を植えた。メロンが高台地方に出來ぬ處から、低濕地にメロンを栽培した。この方はベレーン近郊で彼の獨占舞台、大いに儲けた。これ等の作物は年間百トンを生産しだした。この熱帯地方で玉葱が出來ない、そこでその代用品として葱を試作したが、これがよく出來て巨利を博した。

到頭頑張り抜いたその精神が天に通じ、つぎ〳〵と耕地を増やし現在は四ロッテ、百ヘクタールの大農場になつた。耕耘機トラクター、水揚ポンプなどの諸機械もそろつたので、一九六五年度から近くの大内一男、大江牧夫等と同様に水田計画に入り蓬萊米（台灣の日本米）を植えるつもりである。二十二家族の邦人がみな退植し彼が一家族殘つたので、その操志强靭な精神に、グアマ植民地所長も激賞し、どんな要件でも、出來る範囲は援助すると誓つている。水田計画が成功すれば、次に牧場だが、牧場豫定地は退植者の荒廢地が一千町歩ばかりあるから、事業の擴張には心配はない。こう考えてみると、十年後、二十年後の小田切農場の將來は、非常に面白い。儲けて自家用船舶を購入し、自由に生産物の販賣が出來るようになつたら、もうしめたものである。グアマ河畔に青森縣人小田切ありの麗名を轟かしてもらいたい。由來青森縣はカムチヤツカの鮭、マス、タラバ蟹の漁業が盛んで、中南米への海外熱が少なかつた。ブラジル移民も東北六縣のうち一番少なく、全國で下から五番目で、全伯級の人物も少ない。故前田光世六段（船澤村）が僅かにアマゾン開發の恩人として名をなし、杉山義見（二本木）がマナウスで黄麻栽培で有名なぐらいである。そうした處から篤農家小田切與三郎の飛躍を切望してやまない。明治四十五年三月二十四日子年生。

ベレーン市郊外グアマ植民地

横山　定　氏

SADAMU YOKOYAMA
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem — E. de Pará

原籍　宮崎縣西都市三納
渡伯　昭和三十一年十二月　あめりか丸

實に几帳面で、共存共榮に生きる公徳心の強い性格である。父重雄、母さか兩親の四男に生れた。次兄久はブラジルに一緒に渡伯したが、この久も大東亞戰では熊本六師團野砲兵として出征，ソ滿國境で斗つて、終戰後四年目にソ連から復員した。次の兄蔵（さい）は大東亜戰の華・特攻隊で空爆戰死した。彼は満十六才で志願少年航空兵として活躍，昭和十六年戰争勃發から，昭和二十年の終戰まで福岡大刀洗飛行場で飛行機械部隊に所屬して精勤した。この飛行隊の生活は物凄く厳格で，一寸もナマケル譯にゆかず、勤務日記を几帳面に記録していた習慣がついて、今日の天性を生んだものと思われる。

（上）横山夫妻と三女ナイル
（下）兄横山久の長男健司・二男浩昭と遊ぶ長女ロザリーナ・二女ナイル

グアマ産業組合が結成され，結成當初の幹部連中が，グアマ植民地を退植移轉したので，第三期から第五期まで兄久が組合理事長に推選された。彼はその下でやはり三期，農産物出荷輸送の船舶長を命令され，到頭この責任ある任務を遂行した。その時代に家族構成として同伴した吉野秀昭（當時十七才）も，ベレーン市に出てグアマ出荷の農産物販賣員として活動したから横山定耕地は二人の主人を失い，えみ子夫人が伯人雇傭人を激勵して甘蔗を栽培した。勿論言葉は解らず，手眞似足眞似で啞みだようなものであつた。三年間船舶長として勤務し，一九六四年度には兄久が理事長三年連續就任の後に勇退したので，その後釜に彼が理事長に推選された。他の人に就任してもらうよう辭退したが，組合員はこぞつて彼の就任を懇願し，やむなく理事長に就任した。そしてその後も理事長，また出荷船舶長と交代に就任し，耕地の管理をするひまがなかつた。義弟秀昭は到頭サンパウロに移轉した。兄久は組合の理事長をやめてから，胡椒栽培に全力を注ぎ，毎年一千二百本づつ栽培，遂に今日は八千本以上のピメンタ樹を，所有するに至つたが，彼は公共團体勤務が長くなり，今日まで底湿地帯で甘蔗栽培をしているに過ぎない。兄の近くに胡椒栽培の予定地も購入してあるがその農場建設に着手出來ないほど公職に追いまくられている。

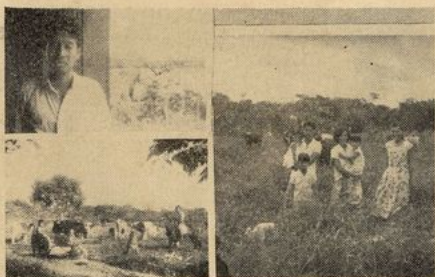
「どうせグアマ植民地は永住の地ですから，胡椒栽培は急がないです。子供もその内には成長するし，まず我々農協が順調に行く事を考えねばなりません。農協が發展し，二世にバトンを渡してからでも，私の耕地建設はおそくわありません」と彼は語つた。何處か九州人らしい太つ肚さが窺がわれ。物慾に恬膽である，惠美子夫人は，彼の留守中を守つて，多くの伯人を監督，今日をあらしめた賢夫人で，誰からでも尊敬される親切な女性である。長女喜美子，二女ロザリーナ，三女ナイル，そして八月出生の愛兒四人に惠まれている。切に今後の發展を祈る。大正十五年十二月二十四日寅年生。

MAKIO ÔE
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

ベレーン市郊外グアマ植民地

大江牧夫氏

原籍　山形縣東根市觀晉寺
渡伯　昭和三十二年六月　ぶらじる丸

牧夫とは、彼の生業によく當はまる姓名である。彼ば将來牧場を主体に、水田を副業にして農業を經營する考えである。現在の大江耕地はグアマ河に沿つて間口八百米で奥行は數粁もあつて、面積百ヘクタールだ將來は間口四百米を二つに仕切り、一年は放牛、一年は水田耕作と交互に行うつもりである。そうすると地力も褒えず、水田米はよく出來、また牧場はいつも牧草の若芽が青々として牛を滿足させ、成長するのも早い。こんな事はアマゾンのような土地廣大な處だから出來るが、日本では百ヘクタールの水田と牧場といえば、大變なことである

彼の耕地は、自然的な牧場地形で、電線針金で牧場を圍わなくてもいい。即ち河に沿つた門口八百米の右側の境界は、小川が奥行數キロに伸びて、流れており、左側も同じである。この兩川に狹まれた土地百ヘクタールが大江農場で、こんな地勢の土地は自然に手に入れた譯でわなかつた。彼は退植する人と反對に最後まで頑張つたので、その褒賞として彼の要求を植民地所長が充分かなえてくれたからである。地圖の上からすれば兩境界の川は兩隣りのものであるが、幸い兩隣りが退耕してもらつた空地であつたので、舊境界を變更小川まで境界を擴張してもらつた譯である。だから測量面積と遂つて實側面積は百二三十ヘクタールになるかも知れない。こうした自然の利益は、長年築きあげた彼の信用から得たもので、著者も同胞として彼の開拓生活の努力を讃えたい。現在雨期には水田二ヘクタール、牧穫籾二百四十俵乾燥期には甘藍二十トンを生産し、他に乳牛十五頭を飼つている將來の計画は水田三十ヘクタール、年收籾三千六百俵、牧場百ヘクタール、四百頭を目的標準として邁進している。八ヵ年の經驗で、充分その計画は達せられるであろう。

彼は山形縣立村山農高卒業後に、東京麻布獸醫大学を卒業し二十六才のとき、アマゾン移住に應募し、同郷の大内一男などと共にグアマ植民地に入植した。二十六才青春の鴻圖にもえ、野望は無限大、しかも肉体的に苦痛をいとわぬ健康美があつたとくえ夫人もうら若き麗人、常夏の國アマゾン理想郷を建設する夢多き年頃で、この夫婦は入植以來着々と自分の理想を實現してきた。そして將來に對する見通しも出來てきた。夫婦の間に長男明、二男アルマンドの可愛い子供も出生した。一緒に渡伯した弟紀夫は高校二年生で中退、十七才のときブラジルに渡つた。そして兄と苦勞を共にし、一九六〇年（昭和三十五年）日本から嫁みつ子を呼寄せて、既に長女フローラに惠まれている。兄弟とも趣味が讀書と云う處から、グアマ植民地の圖書部は彼の住宅内に備けてある。そしてグアマ植民地日本人會圖書部長と衛生部長を兼任し、公共團体親睦發展のため盡している切に將來の大成を祈る。昭和七年九月十八日申年生。

（右）弟紀夫夫妻ととくえ夫人（左）大江牧夫氏と美しい牧場全景

KAZUO OUCHI
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem,. — Pará

ベレーン市郊外グアマ植民地

大内一男氏

原籍　山形縣北村山郡東根村
渡伯　昭和三十二年六月　ぶらじる丸

「池田さん灘の生一本は」と盃を傾むけてくれた清酒は、彼が自分でたしなむ日本酒であるが、この日本酒は自分が作つた蓬來米が原料で、しかも釀造主が彼である。日本で釀造業が彼の本職であつたからだ。

政府のグアマ植民地水田計画は失敗に終つたが、その百四十家族の邦人の中でも、根氣よく頑張つて、到頭水田造成に成功した人々が十家族ばかり居る。その一人の中に大内一男も加えられる訳だが、ここまで辿つた開拓八年間は血の涙が出るような苦心であつた。今日は水田三ヘクタールを所有しているが、グアマ植民地の水田も、漸く一ヘクタール籾百二十俵（白米にして七十俵）採れるようになつた。三ヘクタールで三百六十俵の収穫がある訳である日本の水田は一ヘクタールで玄米にして百二十俵だから、ブラジルの一ヘクタールに白米七・八十俵からみれば、大變な差格がある。然しアマゾンに水田をつくり、これだけにした事のみでも歴史的な功績をあげたことと云わねばなるまい。

彼の耕地は五ロッテで百三十ヘクタール、そのうち一年に十二ヘクタールづつ、三年計画で三十六ヘクタールの水田を造成すれば、四・二二〇俵の籾の収穫がある。水田はこれ位にして殘りは牧場計画である。現在乳牛三頭を飼つているが、将來は肉牛に切替、十年後は大々的に牧場經營に移つるつもりである水田に牧場經營この二本立でゆけば、いま一生懸命やつている甘蔗栽培など、打切つてもいい訳だ。なんと言つてもグアマ植民地の特点は無肥料で農作物が出來ることだ。浸水期間が四ヵ月、その間に上流から氾濫してくる濁流にまじつて、物凄い肥沃土が流れてくる。これは窒素性分の多い肥料で、この豊饒な沃土が耕地の表土に流れ込んでくる。葉物の野菜はこのままで出來るが、稲などはこれに小量の燐酸と加里の人工肥料を散布すればいい訳で、費用は少しで濟む。南伯サンパウロ州の水田あたりの費用の半分もかゝらない。アマゾンの黄麻栽培が何十年經つても無肥料で出來るのは、毎年増水期に上流から流れてくる沃土のお陰である。十年後の大内耕地を像想すると實に頼もしい限りである。彼は成人して現役兵で満州ハルビンに駐屯した。大東亜戰爭には千葉飛行隊に編入し、同飛行場で終戰を迎えた。アマゾン移民に應募し、第四次移民として現地に入植した。入植者は四十七家族の八割までが退散したが、どうしても水田造成をあきらめきれず、營農資金の欠乏にたえ、遂に今日の榮冠を得た。長女美代子は渡伯當時構成家族の一員となつてきた大内武（舊姓石井武）と結婚し、孫エボネ・マリアが出生し、長女静子、長男かづみ、二男實などと共に農場經營に健斗している。すえの夫人も少しも若さを失わず明朗溫厚な姿で今日を過ごしている。大正六年六月二十四日己年生。

寫眞は（上左）家族一同（上右）主人（下）水田

MOTOJI MIYABARA
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

ベレーン市郊外グアマ植民地

宮原元治氏

原籍　熊本縣菊池郡菊陽村
渡伯　昭和三十二年六月　ぶらじる丸

青年時代から建築業が本職で、終戦前北満開拓團に八ヵ年いた時も、開拓の傍ら本職を生かした。職人肌があつて心も奇麗で淡白である。竹を割つたような氣性があり、清濁併せ呑む雅量がある。

彼は渡伯後、グアマ植民地に入植して、二回の不幸に遭つた。グアマ河はよく人命を喪う危險な河で有名であつた。潮流の關係で、河口より三百キロ上流のベレーン市附近でも、旱滿の差は三・四米に及んだ。そのためグアマ河も濁流が急流の如く上下に動き、その渦巻は怪氣を呈している。一度この魔水に落ちると、余程水泳の達者なものでも命を落すのだが、このグアマ河でカノアが轉覆、江越惠子（二十一才）江口このえ（十九才）の處女が溺死したのを始め、谷口忠實鰺坂青年、濱田少年、今野えみ子、有馬老人などが溺死した。そして彼の四女（末子）祥子も岸で水遊びしていたのに、足をはづして深みに轉落、三才の幼兒のこととて、泳ぎを知らず到頭溺死した。全く同情を禁じ得ない。次にグアマ植民地は底濕地帶で、マラリア病があり、この風土病に一九六〇年節子夫人が罹つた。マラリア病は最初肝臟を犯し、やがて赤血球、白血球の活動をにぶらせ、余病を併發して自然と衰弱して死んでゆくのだが、夫人もこの狀態で、空しく異郷の土で逝去した。渡伯してから僅かに三年目、入植早々で、まだ耕地は建設當初であつた。その逆境時代に、この苦境にたち、夫人はベレーン市サンタ・カーザ病院の一室で、靜かに永遠の眠りにおちいつた。

長女悦子以下多くの少年・少女・幼兒を殘し、万斛の情をこの世に殘して死んだ夫人の心境は推察するに充分であるが、また一方殘された彼の心中も同情を禁じ得ない。在伯僅か八年間に二人の墓を建てた譯で、その點氣の毒な次第である。こうした精神的苦惱の數々によつて他の家族の人々よりも、經濟的發展がおくれたのは止むを得ない。著者も心から、死んだ二人の冥福を祈つてやまない。

彼の出身地菊陽村からは、大正の末期から、昭和にかけて、多くの人がブラジルに渡つた。戰後もトメアスー植民地阿部久喜以下多くの人々が海外に進出した。彼もその海外發展に燃ゆる一人で、アマゾン移住を決心した。既に滿州開拓團で心身は鍛練していたので、少しも苦勞をいとわなかつた。第四次移民として四十七家族と共に入植、多くの人が退植するのを見送つて、彼は最後まで踏とどまつた。現在ピメンタ樹三千七百本（内四年生成樹一千三百本）が植わつているし、一九六五年から水田造成に着手した。長女悦子は隣地高本重男に嫁づき、長男千明（二十二才）以下二女順子、二男俊祐等健在である。ペルナンブツコ產業組合初代理事長に推選された程人望があつた。

大正元年十二月一日子年生。

（右上）主人（左）仲睦まじい四人の子供達

ベレーン市郊外グアマ植民地

三島邦夫氏

原籍　熊本縣菊池郡菊陽村
渡伯　昭和三十二年六月　ぶらじる丸

KUNIO MISHIMA
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

彼の農場はグアマ河に面した奥行三百米までが、水田に向く浸水地帯で、それから奥地は高台地域で、この高台の利用方法を今日まで怠つていた。と云つて別になまけていた譯ではない。水田造成に今日までかゝり、營農資金不足で三ヘクタールの水田が漸く完成された。そこで一九六四年度から高台を開拓し、いまピメンタを栽培中である。高台は胡椒栽培に好適地で、これで雨期には水田、乾燥期には胡椒採集と、二本立てで經營出來るから、實に生活は安全である。なか〳〵こんな地形の處が見つからない。カラパショ區の渡部一族の耕地附近は甘藍栽培、水田地帯にはいいが全地域胡椒栽培出來る高台は少しもない。またペルナンブツコ區一部の地勢は高台のみで胡椒栽培には向くが、水田や野菜栽培や牧畜にも適さない。これを見るとたしかに彼の土地は、一方に傾よらず理想的である。しかも高台が、僅かに五百米だから住宅を高台に建てても、河岸も遠くなく、また河岸に建てても、高台のピメンタ園まで近くて便利である。

一九六四年長男勝幸が二十六才となり、グアマ植民地の砥綿えつ子夫人の長女あつ子を娶つて、高台に住宅を建てた。そしてこれから胡椒栽培に邁進する計画であるが、とても都合がいい。父三島邦夫が水田經營のため、河岸の住宅に住み、従前通り水田と野菜栽培に専心すればいい譯である。長女秀子（二十三才）を始め、二女久子、三男勇一が大いに協力してくれるだろう。二男利幸はサンパウロ市に進出し、自動車修理工場に勤務、熟練工として既に一人前になつた。将來獨立すべく準備中である。

彼は日支事變が起きるや、呼集されて滿州に轉戰した。聽て大東亜戰に移るや引つづき從軍して南方に派遣され、終戰の時は朝鮮の濟州島にいた。幸い復員するには、濟州島にいたので誰れよりも早く引揚げてきたが、然し出征期間滿七カ年も血なまぐさい殺風景な戰場にいて、惜しい青春時代を過ごした。だが考えてみると、あの殘酷な戰争で一苦勞、また終戰の食糧難生活難で一苦勞し、都合二十年近くを、世の荒波と斗つたことはアマゾンに移住してきて、その体驗を大いに生かしてよかつた。

多くの人達が脱耕した。彼も皆が集團退耕するときは、心が浮かないでもなかつた。然し營業資金も充分でなく、浮和雷同していくのも余りに女々しいと思つて、背水の陣をしいて今日まで頑張り通した。幸い在伯八年目になつて、經濟地盤も確固なものとなつた。水田から收穫する蓬來米の純益と、甘藍で充分生活は出來て、その殘金で、どし〳〵胡椒栽培を擴張していけばいい。そうすればここ三・四年後には、理想的な三島農場が完成されるだろう。そうあらん事を期待してやまない。大正三年十一月十五日寅年生。

（右）主人と長男勝幸（左）勞働力の多い三島一家（左端嫁あつ子）

ETSUKO TOWATA
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

ベレーン市郊外グアマ植民地

砥綿えつ子氏

原籍　福岡縣筑紫郡筑紫町山家
渡伯　昭和三十二年六月　ぶらじる丸

彼女の主人は、一九六三年二月八日、悪性マラリア病に罹り、發熱後僅かに四・五日目にして病歿した。亨年五十五才、まだ／＼働き盛りで、もう十年は活動し末子の和博が成人する日まで永生してもらいたかつたその死は余りに突然で、えつ子夫人も呆然とせざるを得なかつた。

えつ子夫人は福岡縣朝倉郡出身・主人は十六カ年も福岡縣嘉穂鉱業所に勤務していた。斜陽産業石炭が、石油に押されてきた當時に、前途に不安を感じ、生活にこまらない間に、鉱業所をやめてブラジル移住に踏みきつた。いま考えると早く移住してよかつた。彼が渡伯してからあとに、世界史上有名な大牟田市の三池三川鉱の大ストライキがあり、六カ月も對陣流血の慘事まで起ぎた。あれ程まで勞働者は斗つたが、石炭の販賣はもう零に等しく、遂に三井鉱山三川鉱も倒産して解散するし、日本炭鉱史に残る有名な日鉄二瀬炭鉱も昨年閉山した。多くの炭鉱が倒産してからでは、身の振り方は間に合わなかつた。幸い八年前に炭鑛をみきり、グアマ植民地に入植してよかつた。

第四次グアマ移民として入植したが、農業の經験がないので最初は不慣れで困つた。水田一ヘクタールを造成するまでは辛酸苦勞をなめた。胡椒園を造成する前に、マンジョカ製粉に力を入れ生計を支えた。そしてベレーン市でマモンの需要が多い處から、マモン園造成、この方は今日の生活を支えてくれる。そして營農資金不足を補つて、漸く基礎時代の五年を經た翌年主人が病歿したのだから落膽した。それでも健氣な夫人は、長女あつ子が三島勝幸に嫁づいた後は、二女雪江と二人で耕地の經營に健斗した。「姉さんがお嫁にいつたから、その代り二人分働くわー」と雪江は働らいた。長男關歳（せきとし）は早くからベレーン市に出て、グランデ・ホテルの會計係となり勤務伯人女性エステリツタと結婚している。未だ子寶に恵まれないその長男が出市したので、長女あつ子が兄に代つて働き、あつ子が結婚したので、二女雪江があとをついで不眠不休の働きをつづけた。二男民生はグアマ産業組合農産物運搬船に乗つている。當年十八才で活動盛りである。三女ゆみ子は姉雪江に代つて炊事・洗濯・洋裁その他一切の家事を司どつている。三男和博は勉学中である。

海外に出た十年間はどの家庭でも不幸が多い。やはり風土氣候が變るのと食物の違いにもよる。その二つの大きな變化があるのに、また他人の二倍も無理して働らいた。この無理がたたつて、よく死亡した。それ等の不幸な家庭は必ず焦らず辛抱すれば、自然と惠まれてくるようだ。戰前に入植したトメアスー植民地六十家族がそのいい實例である。砥綿家も焦らず自然に從つて生活してゆくことだ。切にえつ子夫人の健在を祈つてやまない。大正七年十月二十日午年生。仲睦まじい砥綿家の人々

KICHIZO TAKAMOTO
SHIGEO TAKAMOTO
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

ベレーン市郊外グアマ植民地

高本吉藏氏
高本重男氏

原籍　熊本縣菊池郡御代志村
渡伯　昭和三十二年一月　ぶらじる丸

高本重男は、高本吉藏の長男である。高本一家はドミニカに移住の決心であつたが、色々の事情でアマゾンに變更し、グアマに入植した。ドミニカ移民も、悪い條件の土地に入植した者は到頭本國に歸つだり、或いはブラジルやパラグワイに再移住した。殘つた者は僅かであつたが、この殘つた組は今日いい生活を營んでいる。高本一家もドミニカに移住したら、運命はどちらにころんだか判らなかつた。

高本重男は瀬戸焼の技術をもつている。弟俊春と一緒に、その技術をもつて儲けようと渡伯したが陶器や磁器になる原料の粘土がアマゾンにない處から、途に手取り早い農業で身をたててきた譯である。聖市郊外では邦人豊田桂五（愛知縣瀬戸市出身）や土井万七・今井繁義・各務兄弟・羽瀬作良等が製陶業で儲け、岩崎實は硅粉をニカワで固めた陶器人形をつくて成功している。農場が一通り完成したら南伯を視察すると、面白いだろう。兎に角ブラジルでは陶器事業は、政府の保護があり、そのため外國品の陶器には莫大な關税をかけている。だから一度この産業が順調にゆくと、その儲けはボロイ。高本家にとつて、陶器事業は將來に對する宿題である。

ドミニカ行をやめてグアマ植民地に入植した物凄い勞働力のある家族だつたので五十五才になる父高本吉藏は、特別な許可のもとに家長となつて渡伯する事が許された。普通は五十才以上のものは、家長として認められないのであつた。高本家には六男三女があり、長男重男を頭に、二男俊之（在日本）長女藤子（在日本）二女愛子（在日本）三女たつ子（死亡）三男俊次（トメアスー植民地諸富耕地）四男俊春（死亡）五男政弘（在耕地）六男邦光（在耕地）等であつた。その内長男重男は、熊本縣人宮原元治長女悦子と結婚して一年後に獨立し、現在忠重・忠稔（ただとし）忠和の三兒が出生している。三男俊次は建築業で、既に獨立し、トメアスー植民地の請負業諸富八治方で働らいている。四男俊春が、一九五九年二十二才で、悪性マラリア病のため、あたら青春を散らしたのは惜しかつた。父吉藏も一番力として頼つていた青年であつた。五男政弘と、六男邦光が、現在ピメンタ園の經營に邁進している。ピメンタ成樹二千本で、從來甘藷栽培に力を入れていたが、一九六四年度から水田造成にも全力を注ぐことにした。

高台のピメンタ園は、別個に經營しているが、底湿地帯の甘藷と野菜栽培は、親子共同作にしている。そのお蔭げで仕事は割合順調に伸びている。もとえ夫人も健康で、若人を激励している。切に高本家の發展を祈る。吉藏氏—明治三十七年二月十日生、重男氏—昭和二年七月十五日生。

寫眞は（上）高本吉藏家族（下）高本重男家族

TATSUO ITO
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

ベレーン市郊外グアマ植民地

伊藤辰夫氏

原籍　福岡縣嘉穂郡穂波町
渡伯　昭和三十二年六月　ぶらじる丸

日本一の米作王で、農林省賞を授與された香川縣人大川義則は、グアマ植民地で米作に見切りをつけ、到頭コシジューバ島に退散したが、本編の伊藤辰夫は、日本で三カ年水田を經營、それも家族の者が小農としてやつていたに過ぎないのだが、この素人駈出しの農家が到頭グアマ植民地で北伯アマゾン初めての水田を完成し、蓬來米を市民に試食させるに至つた「やつぱり日本米は美味しいなー」とベレーン市近郊邦人一千家族からの注文は殺到している。

水田完成の苦心は筆舌に盡し難いものがあつたグアマ植民地八千ヘクタールは、連邦政府の管轄で、最初は全部水田にする計画であつた。ブラジル農政学の權威者で國立農業審議會長フリスベルト・カマルゴ博士が、グアマ河畔の低濕地帯を、灌漑排水溝を施して、一ヘクタールほど水田米を試作した處、百俵當り收穫したので、これが動機となつて、アルバロ・アドルフ上院議員が乗出し、サルテ案（保健・食糧交通保全案）の補助金二〇億クルゼイロを利用し、日本人三百家族を入植せしめる計画をたてたのが、このグアマ植民地だつたが、百四十家族のうち、百家族は退散・脱耕、殘つた者も高台に移つて胡椒栽培や甘蔗栽培を始めた。そしてたつた十家族内外が、終始一貫して水田造成に邁進したが、その水田造成の第一人者が、伊藤辰夫である。一度言い出したら後にひかない不退轉の剛腹さがあり、一般の人が言い難いことでも正しいと思つたら、ズバリ／＼と言いのける正義感があり、九州魂の權化みたようだ。長男圭輔、二男英輔は日本におり、現地では三男榮（二十七才）四男辰美（二十四才）が農場管理に當つているが、この三男榮がまた雄辯家で、機略縱横、口八丁手八丁で多才多能、しかも實行力旺盛で肉体勞働をいとわず、勇往邁進の快男子である。常に新聞雜誌に眼を通し常識にとんでいる。

日本で明治鉱業に三年、日炭高松に四年（うち坑内係一年）宮崎開拓塔で三百戸の人々と六カ年半頭張つた事もあり、兵役關係は久留米師團で長いこと滿州に駐屯し、終戰は滿州で、朝鮮に移動していたので復員も早かつた。グアマ植民地水田計画をきき、大いに贊同、十七番地區に入植、二年目に水田試作、蜜柑も一千三百本を植えた。三年目に七・八・九番地區を購入現在八十ヘクタールの耕地を所有、水田は借地四ヘクタールを合計して八ヘクタールに栽え、ヘクタール當り百二十俵生産して、一千俵の籾を收穫、胡椒は幼樹三千本、三千本が成樹になつた結果その成績如何で一万本植えるという、用意周到さがある。全農場を全部機械化し、トラクター、精米機、水揚ポンプ消毒機など完成している。すゑの夫人も健在、長女俊子（十九才）以下芳江・敬子・かおるの娘達も年頃になつた。アマゾン水田王の名こそ彼に當はまると云いたい。明治四十一年七月一日申年生。寫眞はアマゾンに水田を完成した篤農家伊藤一家

TOKIHARU SHIGENOBU
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

ベレーン市郊外グアマ植民地

信重時春氏

原籍　福岡縣飯塚市二瀬町
渡伯　昭和三十二年六月　ぶらじる丸

謹嚴實直、質實剛健な人格者である。四十七才のとき滿州から引揚げたが、それまで職業軍人として「戰時訓」を讀み、國家に一命を捧げた人物である。滿州の曠野で自分の人生より、國家の仕事ばかりしていたので案外腰輕く、物を頼むとすぐ引受けてくれる義俠心が強い。それに復員後に二瀬町役員をやつて、町政の世話をしたり、農学校に勤務したりしたので、職業軍人にあり勝な堅さもとけ円熟円滿な人柄である「灘の生一本」をつけて一杯やると、話は盡きない。とても座談が上手だし話題も豊富である。一見するとガムシャラのように見うけるが、あれでなか〳〵用意周到で單一農の冒險を好まず、營農も堅實な多角農法を採用している。水田二ヘクタール、この水田は立派で、毎年二百五・六十俵の籾を收穫している。水田も擴張すれば十ヘクタールぐらいすぐ造成できるのだが、一氣呵成をさけて焦らない。胡椒も四千本を栽培している。手入れが行とどいて、實に立派である。その他に蔬菜を栽培している。勿論グアマ植民地の名産である甘蔗が主作であるが、他に色々植えている。一九六四年煉瓦建ての住宅を新築した。この家屋も長男价克（ヨシカツ）以下行克、守克、多壽（ヒロヒサ）の四人が、農閑期を利用して、急がず焦らず、綿密に造りあげたので實に蕭洒で、間取りも農家向である。こうして住宅まで自家能力で建設する處に彼の人となりが發散しているようだ。

渡伯する前に、既に永住の決心をしたので、耕耘機、發動機脱穀機、消毒機など一揃いを持參し、現地に移つてから、精米機、撒水機、送水鉛管などを購入した。農場に必要な諸機械も一通り揃え、これからはもう機械はあまり購わなくてもいいようになつた。渡伯して滿八ヵ年で第一期の基礎時代が漸く完成された。長男が妻帶すれば、第二期の事業飛躍時代に移らなければいけない。

グアマ植民地はサンタ・イザベル市から、近路が開鑿されつつあるが、この州道路が完成されれば、ベレーン市に出るのに三時間で行ける。そしてグアマ植民地には、まだ〳〵眠つている實庫が、その未開發道路に沿うて何万ヘクタールも殘つている。二男以下三人の子供の農場も、こうした地の利を得ているからいくらでも擴張出來る譯である。グアマ植民地に信重本耕地を建設、軈て分耕地建設も、いづれ近隣に拓かれるであろう

靜美夫人は今日まで四男一女を鞭撻して來た貞節の女性である。長男价克も二男行克も、將又三男守克も、何一つ不平を云わず母堂の言葉に追隨してきたことは、この一家の明るさを証明するようだ。長女和江は中野訓と結婚している。四人の嫁を迎えるまで、この責任は重大、切に夫妻の健在を祈る。明治四十三年二月二十二日生。

寫眞は仲睦まじい一家

ベレーン市郊外グアマ植民地

大和田忠信氏

原籍　福島縣双葉郡浪江町津島
渡伯　昭和三十二年六月　ぶらじる丸

TADANOBU OWADA
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

人間には口先ばかりでものを云う人と、腹の底からものを云う人とがいる。口先ばかりでものを云う人は腹に一物を残して、口先ばかりで嘘を云う。腹の底からものを云う人は、嘘もかくしもなく、腹にあるだけの氣持を全部さらけだし、虚心膽懐に話しをする。こんな人は笑うときは、天眞爛漫で心身とみに春風がたなびいているようである。嘘の言えない性格、これが大和田忠信夫妻である。

人に迷惑をかけるのはいや、山師的誇大妄想がなく、地味に人生を渡つてゆく人柄で、農場經營の方も、その性格がよく現われている。グアマ植民地は米作植民地だからと思つて、高台の乾燥地に三カ年も米作を試みそれで旱魃にやられ失敗した。そこで始めて氣がついて、更生の意氣に燃え胡椒栽培に轉身最初八百本（六年生）を植えた。翌年から九百本（五年生）七百本、（四年生）と、毎年少しづつ植え一昨年最後に二千本を一擧に植えた。これをみても解るように彼は冒險を愼しんで、一擧に植えなかつた。營農資金が不足で毎年野菜で儲けた僅かの純益をもつて胡椒栽培に投資してきた譯である。三年間つづけて植えた胡椒が成樹となり、一昨年儲けたので、一擧に二千本を植えた。

彼の耕地は高台が小なく、もう胡椒樹を植える場所がない。現地は彼等の伯國農業修学時代で今後はこの耕地の收入を基礎にして、他に耕地を購め、飛躍時代に移らねばいけない。現地は彼の資金稼の地で長男忠臣（二十四才）二男秀雄（二十二才）等が活躍する土台をつくつてやらねばいけない譯だ。既に各地を視察し物色中であるが、大和田家も滿八年目を過ぎて、長い暗黒逆境時代が吹きけされ、漸く前途に輝く光明時代がきたようだ。一九六四年には住宅も新築した。階上は寢室と應接間にし、階下は食堂と倉庫である。グアマ河畔であるから、通風もよく窓を明け放して寢ると、夜半月光が射し、沖合を往く汽船の音に目覺め、日本にいるような氣持がする。岸邊にある住宅だが浸水もせず、庭には草花が咲いて、住み心地がいい。

彼はなかなかコリ性で、胡椒の手入れは盆栽のように綿密にする。だから普通一本で三キロ採集するものだが、彼の耕地では一本五・六キロ實る樹がざらにある。日本で云う集約農法をそのまゝ實地でいつている譯だ。彼の出生地浪江町からは、大正時代末永繁が渡伯し、大洋植民地を創設し棉作で儲けてサンパウロ州で名をあげ、その他多くの人が渡伯した。彼は最初南伯の安瀬盛次（福島縣出身、南米銀行副頭取）の耕地に行くつもりだつたが、變更してアマゾン移住に決した。日本生れの長女豊子（二十才）の下に伯國生れの二女弘子（六才）がいて、平和な家庭に浴している。大正四年十月一日卯年生。

上は家族一同、下は住宅

HIROYUKI SAKAI-IRI
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

ベレーン市郊外グアマ植民地

堺 入 廣 之 氏

原籍　福島縣郡山市富田町
渡伯　昭和三十二年六月　ぶらじる丸

五月五日、男の節句に生れた人物である。人生五十余年の過去は波らん重疊、時には身も心も飛出つ位の喜悦の絶頂にもめぐり合い、時には悲しみのどん底に陥いつた事もあり、數奇の運命を辿つてきた人である渡伯直後の建設時代に、二・三男が獨立して分散したため勞力の不足が生じそのため出足が少々おくれたのは惜しかつたそれでも近隣の伊藤・信重等水田造成の篤農家に負けん位の立派な水田を造成したから偉らい。

多くの人達がグアマ植民地から退散した。彼等と一緒にきた第四次グアマ移民四十七家族のものは、その八割までが退散した。彼はその人々を見送りながら、根强く辛抱し、遂に今日は、永住の決心をすえた。入植して八カ年追懐すると一瞬の夢のようだ。日本を出發するときは、日本式の水田をアマゾンに造成するのだと決心、日本人の誇りをもつて入植した。一・二年する内に移民を世話した海協連が、グアマ植民地は駄目だと云いだし、そのため第四次の彼等の組と、第五次の大方が移轉した。しかも海協連の後押しで移轉した譯である。多くの人々が退植して、後に殘された人々は、彼のみでなく皆んなが齒ぎしりして奮斗した。「グアマは駄目だ。あんな處に」と云われたくなかつた。著者はグアマときいただけで最初は印象が悪かつた。然し充分視察してみて、跡に殘つた人々は、これまでよく頑張り通したものだとつくづく感心した。一九五八年度からペルナンブツコ地區だけで、産業組合を結成したが、初代宮原組合長につづいて、伊藤・信重と就任し、四代目に彼が推選された。夫人も逝去し、その任にあらずと辭退したが全員一同の推選でやむなく引受けた。やはり組合を充實させ、共存共榮に生きてゆかねば、グアマ植民地の各家庭の經濟は發展しない譯である。彼は一年間組合に奉仕し、バンドを櫻井正勝に渡して重任をはたし、ホットした。

渡伯前は日本で農業に七・八年就いていた。青年時代現役兵では中野電信隊に編入され、昭和十二年日支事變勃發のときは北支に出征した。そうした關係で、野に下つても電信關係の仕事にも多くたづさわつた。ブラジルのアマゾン移住の話をききこれ幸いと海外移住を決心して、遂にグアマ植民地に入植したとみ子夫人は十年前に逝去し、長男馨は札幌にいて渡伯しなかつた。二男晴司はカスタニヤール三井農場管理人として活動している。長女ふき子はグアマ植民地村田義和（米川敏明妙子夫人實弟）と結婚し立派な農場を所有、三男誠はタバナン區河本信子と結婚している。四男廣造（二十五才）五男廣歳（ひろとし・二十二才）二女節女（十七才）の三人が、現農場を管理している譯である。切に今後の健在を祈る。明治四十一年五月五日中年生。

寫眞は水田の中で元氣な一家

TOSHIMITSU TANIGUCHI
Municipio Acara
Belem, — Pará

ベレーン市郊外アカラ植民地

谷口俊光氏

原籍　鹿児島縣薩摩郡樋脇町市比野
渡伯　昭和三十二年六月　ぶらじる丸

グアマ植民地米作計画第四次移民として、實兄明水と共に入植した。苦勞を共にした糟糠の妻愛子夫人の死はいたましかつたが、それから數年後に、山形縣人高山鉄蔵長女オデッテ宮子を娶り、一家に再び光明が射して來た。著者は在伯三十余年間に、在留邦人五万家族を訪ねたが、主婦の居ない家庭は、主人のいない家庭よりも、淋しく、陰惨で這入りにくい。よしんばシワクチャ婆さんでも、主婦のいる家庭は明るい。その明るさを取戻した彼は現在の宮子夫人との間に四男セルジオが生れ、お盆と正月が一緒にきたように樂しい家庭が盛上つてきた。

彼は最初グアマ植民地入植二年半、その後實兄と共にアカラ植民地草分開拓者として入植し、五十ヘクタールの一部を伐採した。そして長女悦子、二女千代子の可憐な乙女や、紅顔の美少年長男精一等の協力もあつて、初年度に胡椒一千二百本、三年目に五百本を漸く植えた。そして一九六五年度に二千本新植の準備中である。幾度かの逆境にたち、不幸に遭遇した時の悲哀をつくづく感じた。前妻の末子三男パウロも早逝し、渡伯五・六年間は、氣候・食物等の不馴れや、開墾地入植當初の肉体的苦痛や、精神的數々の苦惱で、心身共に疲勞の極に達した。十年したら物になるだろうかと不安に襲われたりした事があつた。特に相談相手の妻に逝かれた當初は呆然とし、前途は暗黒につつまれた。あの苦難をよく克服して、今日を礎いたものだと、自分でもつくづく思う。やはり二男二女の我兒をみれば、石にかじりついても、初志を貫徹せなければと思つて健斗した。あの辛酸を追懐すると身震いがするようだ。幸い今日は安全地帶に侵入することが出來たから幸いであつた。

彼は昭和十三年六月滿二十才で兵役に服し、そのまま驅逐艦夕凪に乘船、南太平洋から、遠く北太平洋まで警備に當つた。そして大東亞戰勃發後は、ニューギニアのソロモン海戰を始め幾多の激戰に參加、負傷したが一命を拾つて、ラバウル基地に歸還した。そして再度海防艦「エトロフ」に乘船、終戰まで約七年三ヵ月も、硝煙彈雨の下をくぐつた。考えてみると二十代の青春を、國家に捧げたようなものであつた。然し幸いにも生還したからよかつた。復員後は八幡製鉄所に勤務四ヵ年。それから故郷樋脇町市比野に歸省して、農業に從事した。この故郷の農村生活で結婚し、四人の愛兒が生れた。二人は薩州健兒の血が流れており、二人は薩摩乙女の眞心が通つている。

實兄明が一大勇猛心をおこして、アマゾン移住を決心したので、猫額大の山間僻地の生活に嫌氣がさし、兄と行動を共にする事に決心して渡伯した。悦子、千代子、純一、光志等も成長した。切に彼等の飛躍を祝したい。大正七年一月二十日午年生

宮子夫人とセルジオを交えて一家族

ベレーン市郊外グアマ植民地

櫻井正勝氏

原籍　福島縣双葉郡大能町大屋敷
渡伯　昭和三十二年六月　ぶらじる丸

MASAKATSU SAKURAI
a/c Jamic, R. Gaspar Viana, 157
Belem, — Pará

彼の耕地はグアマ河畔から、奥行五百米までが底濕地帯で、その五百米の奥が高台である。底濕地帯は水田造成中であるが、高台に昨年から三百本の胡椒を植え、そこに住宅を建て、住むようになつた。

それまでは河岸に住んでていたが、高台に移り本腰で胡椒栽培をやりだした。

雨期にはこの底濕地帯はジク／＼して水浸しになるので、道路の建設が困難である。九百米も盛土をしなくてはならず、しかも人道でなく車道となると道巾も擴くしなくてはいけないなか／＼たやすい事でない。氣短かな人は、最初から匙をなげ出すが、彼は東北出身で、なか／＼粘り強い人だから立派な道路を彼個人で完成するだろう。豫想外に儲けても、余りうれしがらない代りに、他人がボロ儲けしても、少しも羨望しない。移民根生と云われるような嫉妬心などミジンもない。自分の進む路を靜かにボツリ／＼と進んでゆく拓人である。父熊吉、母夏美兩親の長男に生れた。二男は日本にいる忠宗で、三男が一緒に渡伯した忠則である。兩親とも既に故人であるが、彼は十六才のときから桃、梨、リンゴの栽培に身を投じ、果樹園には充分自信がある。約二十年間斯道に働らいて三十五才のとき、アマゾン移住に踏みきつた。

故郷大熊町からは、戰後アマゾンには、ビジア街道の吉田かつベレーン市の新妻常顯などが活躍しているが、昔しから海外に出稼したり、移住したりすることは旺んであつた。彼も青年時代、南米移住の事を耳にしていたが、その南米移住を自から實行するときが來た譯である。

れい夫人も健實な人柄で、少々の苦勞を苦にしない性であるだから米作一ヘクタールの造成に今日まで苦勞したが、少しも難儀したような面影がない。一九六四年から一九六五年にかけ胡椒一千本を栽培したが、これも獨力でやつた。弟忠則も、兄夫婦が辛抱強い人物だから、それに追隨して、何事をやるにも根負けしない押しの太さが身についた。

一九六四年度は推されてペルナンブッコ區産業組合理事長に就いた。事務繁雜なことは不得手であつたが、どうしても出馬せよとの事で、到頭一期この任務を遂行した。幸い耕地は弟忠則、長男忠信、二男忠幸などが成長して管理してくれるので、産業組合の雜務を引受けた。長男忠信はなか／＼の活動家、二男忠幸も快活な青年、長女優子、二男康治、三男敬、二女惠子四男健二等皆健在である。

北伯トメアスー植民地は、戰前の入植者は九割まで脱耕し、殘つた一割が今日の榮冠を得た。その殘つた六十家族のうちまた九割か山形・秋田・宮城・福島の東北組である。一攫千金を夢みず「千里の道も一歩より」で堅實に進む者は、必ず最後の榮冠を得ることが出來る。東北出身である櫻井家の發展を切に祈る。大正十二年二月十日丑年生。

（上右）グアマ河畔で（左）長女優子（下）渡伯記念の一同

五男孝徳は昭徳に協力して、胡椒園擴張のため獅子奮迅の働きをなしている。四男昭徳が一九六四年八月愛妻まち子（トメアスー植民地藤橋銅三次女）と結婚したので、かなえ夫人も炊事の手がはぶけて樂になつた。

一九五七年七月（昭和三十二年）六月グァマ第四次移民として、ベルナンブツコ區八號地區に入植した。同地區は船の發着所となり便利な地區であつたが、二カ年半の後に伊藤辰夫に譲り、一九六〇年一月から、アカラ植民地に入植五十ヘクタールの大密林地の一部を伐採、入植初年度二千本、次年度二千本、三年目五百本四年目一千五百本、合計四年間に六千本のピメンタを栽培し、一九六四年度十五トンの出荷をした入植當初胡椒栽培の適地を撰定するのに苦心、實に一カ年も各地を視察した。幸い同郷の友・鎌田穰の紹介斡旋もあつてアカラ郡長も彼等の入植を歡迎してくれた。アカラ郡はトメアスー植民地が獨立郡制を布いて、アカラ郡から分離したので、郡税が大巾に減じ、郡庁は財政難に喘いだ。そこで再び勤勉な日本人の入植を歡迎していた處へ、彼等六家族が入植希望を訴えたのであるから、郡長としては「待つていました」とばかり、大いに援助した。彼等が入植したあとに、奥地に邦人が數多く入植した。將來トメアスー植民地以上に有望な地帯であると、世人に認められるに至つた。確かにアカラ郡は、トメアスーよりベレーン市に近いので便宜である。北海道移住者をこのアカラ植民地に一千家族を入植せしめようと計画しているのは、色々の條件が他所よりいいからである。永住の地であるここで大いに頑張つてもらいたい。賢明な昭徳と孝徳がいるから、農場管理は後顧の憂がない。切に今後の健在を祈る。明治三十八年四月十日巳年生。

谷口明水夫妻と昭徳夫妻の四人

新婚の昭徳夫妻

ベレーン市郊外アカラ植民地

谷口明水氏

MEISUI TANIGUCHI
Municipio Acara
Belem, — Pará

原籍　鹿児島縣薩摩郡樋脇町市比野
渡伯　昭和三十二年六月　ぶらじる丸

満六十才還暦を迎えて尚三・四十代の壯者を凌ぎ、元氣旺盛な斗志が全身に充満している。雄辯家であり共存共榮を叫び、社會民主々義に徹する農民運動の斗士である。グアマ植民地から、率先して六家族アカラ植民地に入植した當初、入植地の大原始林伐採には共同生活を營み、何處までも共榮に生きる人柄である。

そう云えば、彼は昭和初頭から、農民開放運動の斗士であつた。大正末期早大教授安部磯雄、東大教授法学博士吉野作造、京大教授法学博士河上肇等が産婆役になつて、社會大衆黨が結成されるや、富吉榮二と共に、鹿児島縣支部結成に先頭にたつて民衆結束に力を入れた。富吉榮二は戰後初めての勞働黨內閣片山哲首相の懇望で郵政相となつた人物、惜しいかな洞爺丸の慘事で、函館港外で藻屑とつた。彼は富吉とは年輩も違わんので君僕の間柄の親しさがあつた。昭和三十二年渡伯前は、社會黨國際部長佐多忠隆參議院議員や、村山喜一衆議員、赤路友藏衆議員等と交遊があつた。農地開放運動の斗士であつたから、向う意氣の荒いのは當然の事である。

いま農場の管理は四男昭德（みちのり）が責任をもつて支配している。長男巖は長兄中司の家督をついで、兵庫縣加古川市警察署に勤務している。二男昭明は東京でアルバイトをしながら学校を卒業、渡伯後出聖してトマース・デ・リーマ街で自動車修理工場に働らいている。三男忠實は一九五七年七月二十九日グアマ河で小舟轉覆のため遭難した。二十四才の青春でその死は悲しかつた

長女早百合と二女惠子

忠實と一緒に江越惠子（二十一才）江口このえ（十九才）鯵坂青年（二十四才）そして谷口昭德（忠實の弟）の五人が丸木舟で、グアマ河を横斷した時、波のため轉覆、そして四人は溺死、谷口昭德だけが必死となつて着服のものを全部ぬぎ、丸裸となり、岸に泳ぎついた。全身キズだらけで、漸く九死に一生を得たがこの遭難の悲報はグアマ植民地在留邦人を震駭させた。三男忠實は渡伯前八幡製鉄所に勤務していた青年で、弟思いの彼は溺死する寸前まで「昭德・みちのり」と叫んでこの世を去つた。四男昭德はこの遭難で命が助かつた唯一人の生存者である。彼は十七才の時に東京に出て自衛隊に入り、幹部候補学校勉学中に渡伯が決定し、父と共にアマゾンに入植した。グアマの遭難事件は、着伯して一カ月と二十日目であつた。

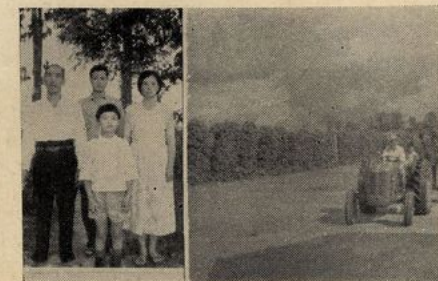
長女早百合と二女惠子はサンパウロ市で洋裁研究中であり、

TADANOBU MIYAZAKI
Municipio Acara
Belem, — Pará

ベレーン市郊外アカラ植民地

宮 崎 忠 信 氏

原籍　北海道上川郡當麻町
渡伯　昭和三十二年六月　ぶらじる丸

アカラ産業組合初代・二代・四代の理事長でしかもアカラ郡長と交渉して、北海道移民を一千家族入植せしめ、各家族に百ヘクタールづつ提供（十万ヘクタール）せしめようと同志山本繁と共に本腰に力を入れている人物である。一九六四年の北海道寒冷凶作をみて倘その真剣さが増してきた。このアカラ植民地は無限の寶庫で、我が邦人に與えられた天與である。一千家族入植したら、北伯随一を誇るトメアスー植民地以上に、繁榮する一郡部が誕生するだろう。そうだからこそ宮崎忠信はこの開拓事業に真剣なのである。

グアマ植民地に入植した時は、北海道の農地を賣却し、永住の意志で八十七才の老母よしも同伴し、營農資金も八千ドルの内、大半は農機具に代えていた。第四次移民四十七家族中、營農資金を持參したトップ級であつた。入植してゴム四千本、カカオ四千本バナナ四千本を植えた。そして河岸の船着場も金をかけて造り耕地に無駄な投資を行つた。政府の水田計画はすつかり駄目になつた上に、浸水地帯なので毎年水害で永年作物は根から腐つていつた。持参した金で二・三年は食つなぎ、そして永年作物がその内に生産されると思つていた處、全く當てがはづれた。二年目に到頭水田計画のグアマ植民地退植を決心、同志十三家族が結束し適地移轉期成同盟會を結成、總領事館や移民會社に當つた。最初は相手にされなかつたが、彼等の真實吐露に額まけして、遂に移民會社も總領事館も移轉を後押しすることになつた。

移轉地物色に困難し、一時はマラニオン州街道に適地をさかしたが、原始人が先住權を主張してたので、遂に開拓を放棄しアカラ郡長の好意で現地に適地を求めた。一家族百ヘクタールづつの土地を求め、一九六〇年六月開拓に着手した。郡長も勤倹力行の日本人が入植して、胡椒園を建設してくれるので、總ゆる援助を惜しまなかつた。彼は初年度二千七百本、二年度二千本を栽えた。このアカラ郡は面積尨大で、大いに儲けたら、五百ヘクタールや一千ヘクタールの牧場候補地も安價で購入出來るので、永住ときめ、住宅も三階建ての宏莊なものを造つた三階建ての住宅は、北伯アマゾン邦人中、彼の住宅が一軒である。梁、柱などの太いこと真に日本のお寺なみである、

三カ年徒食したので、無一文となり、アカラ植民地宮崎耕地は、丸裸から再出發した。だから筆舌に盡しがたい辛酸をなめた。今年は入植してから五年目に當る。最初からアカラに入植していたら、胡椒成金で、昨年はオリンピックに訪日出來ただろう。惜しいかな不運三年は大いに祟つた。

母は入植翌年逝去、長女きみ子は構成家族の黒畑幸助と結婚長男忠男は自動車修理の特技かあり、トメアスー植民地やベレーン市で活躍、五男節夫（二十三才）が耕地支配人、六男憲一は勉学中である。すゞえ夫人の内助は書くまでもない。明治四一年一月二十五日申年生。

（右）胡椒園と長男忠男（左）家族一同

ベレーン市郊外アカラ植民地

信政孝行氏
信政勇三氏

TAKAYUKI NOBUMASA
YUZO NOBUMASA
Municipio Acara
Belem, — Pará

原籍　廣島縣双三郡三和町上板木
渡伯　昭和三十二年六月　ぶらじる丸

実に仲睦まじい兄弟愛に満ちた二人である。父信八、母たせ両親の五男が孝行で、七男が勇三である。旅券は福岡縣山田市上山田になつているが、生地は廣島縣である。兄孝行は若冠十四才の時に（昭和十六年）満州義勇軍に志願し、昭和二十一年十一月戦地から復員した。歸國して九州の開拓地で農業もやり、炭鑛生活もやり、十ヵ年を九州で送つた。その内に二十二才で松江夫人と結婚し、やがて、弟勇三と共にアマゾン移住に踏みきつた。

十四才で満州に行くだけあつて九州でも積極進取にとみ、仕事に忠實であつた。然し就職している上山田三菱炭鑛の将來性に不安が伴つてきた。勿論斜陽産業石炭の運命は日ましに倒産に傾むきつゝあつた。この際思いきつて南米に移住しようと同じ炭鑛に働らいていた柴田政義などと一緒に、アマゾン大流グアマ植民地開拓に挺身した。第四次入植者は四十七家族、このグアマ植民地は、ブラジル農政学の権威であり國立農事審議會長カマルゴ博士がグアマ河畔の底濕地帯に灌漑排水溝を施し水田米を試作した處、一ヘクタール當り百俵の収穫を得たので上院議員アルバロ・アドルフが、この地帯二万四千ヘクタールを買收し連邦政府の補助金サルテ案の二億クルゼイロを利用し邦人三百家族を入れて、日本式水田米を生産するつもりで入植させた彼が入植する前に既に三回も邦人の入植者があつた。計画は素晴らしかつたが、實行するには、日本の水田造成の研究不足、現地の土勢や水利の調査不充分などと、補助金欠乏でこの植民地も一頓座をきたした。そして邦人百四十家族入植したのに、百家族も退耕するのやむなきに至つた。

開拓資金缺乏で、将來に不安がつのつたので、水田計画をやめ、他に移轉しようかと思つて谷口明水や柴田政義などと共に各地を視察すること一ヵ年、遂にアカラ植民地に適地を求め、一九六〇年一月同志六家族と共に、大密林の中にとびこんだ。孝行耕地五十ヘクタール、勇三耕地五十ヘクタールに分割しあれから五ヵ年、孝行耕地は胡椒を初年度千五百本、三年目一千本植えて合計二千五百本、既に昨年は十噸の収穫をあげた。入植當初建設費に悩み、松江夫人はアカラ町に出て野菜を賣つて歩いた事が多かつた。その辛酸苦勞は筆舌に盡しがたい。夫婦の間に長女京子、長男馨、二女まゆみが出生した。弟勇三は福島縣人三留辰己長女はる子と結婚し、長男日出雄、二男敏雄出生、耕地は入植二年目五百本、三年目二千五百本の胡椒を植えた。岳父三留辰己とはる子夫人の妹てる子が同居し、なにくれとなく協力し便宜である。はる子夫人の末妹すゑ子はベレーン市で働らいている。孝行（上右）三留すゑ子（上）孝行氏家族（下）勇三氏家族ー昭和二年生、勇三ー昭和十年生。

ベレーン市郊外アカラ植民地

一條忠吉氏

CHUKITI ICHIJO
Municipio Acara Via,
Belem, — Pará

原籍　北海道雨龍郡幌加内町東榮
渡伯　昭和三十二年六月　ぶらじる丸

住宅の周囲はいつも綺麗で、家の中も整頓され、倉庫も蜘蛛の巣一つないほど掃除がゆきとどいている、主人の性格がよく解るが、面會しないうちにかつゑ夫人の心の美しさが推察されるようだ。移住地にはよくあることで、顔は美しくし、そして偉張りちらしてる主婦がいるが、家の中ときたら豚小屋みたようにな不清潔な住宅に住んでいる人がおる。どうも感心させられないようだ。一條忠吉夫妻は非常に苦勞人である。と云うのは、父忠治（死亡）母たみ（八十三才で健在）両親の二男に生れたが、両親も宮城縣人で大正三年（一九一四年）彼が三才の時に、北海道に移住した。

その開拓地は、熊笹ばかり生え、しかも瘦地で、一家族二町歩ぐらい分譲された。同開拓地は全部で三百五十家族入植したが、この瘦地の熊笹畠を開墾し、實に辛酸苦勞をなめた。しかも北海道雨龍郡は、宮城縣と違つて冬期が長く、最初は馬鈴薯、玉蜀黍、ソバ以外は適作物がなく随分難儀をした。ここに四十三年も住んでいたが、彼は子供の將來を考えた。分家するにも土地はなく、と云つて農村の生活で、子供を全部大学に通わし、高等教育は出來なかつた。そこで一大勇猛心を起してアマゾン移住に踏みきつた。この海外發展の一大決心は、確に一條家をして、將來繁榮させる原因で、著者も心から共鳴したい。ブラジルは自由の天國であり、實力者の世界である。土地は擴張すれば、何万町歩でもあるし、實力さえあれば、丸裸から何万町歩の大地主でも、大實業家、大貿易業者にもなれる。將また二世、三世は州知事、上・下両院議員は勿論、實力次第では大統領にもなれる。實に自由・平等の國で、人種的偏見や、階級的差別がないからいい。

自由の樂園を目指して、アマゾンに移住、グアマ植民地の水田計画地に入植した。カラパル地區八千ヘクタールに續いて、ペルナンブコ地區二万四千ヘクタールの尨大な連邦植民地に、最初邦人三百家族、一家族二十ヘクタールづつ分譲する計画であつた。カマルゴ博士が灌漑排水溝をつくつて底湿地帯に水田米を播種し、試作の結果、一ヘクタール百俵を収穫したので、上院議員アドルホが乗氣になつて計画した北伯最初の水田植民地であつた。然し突然な計画で、水田研究も缺点だらけ、グアマ地勢の調査も不充分で、水田にならない高台や、半年も浸水する地帯ありで失敗に終つた。三カ年間徒食する内に、營農資金を消費し、無一文丸裸となり、一九六〇年六月再建の意氣に燃え、アカラ植民地に入植、百ヘクタールの大密林を伐採、現在胡椒三千本(五年生一・三五〇〇本)を栽培している。また養鶏も始め成績良好だ。長男敏志（さとし・二十七才）はトメアスー永野敬士製材所の支配人であり、二男雅博（二十四才）が一條耕地の支配をしている。長女道代（二十才）三男幸雄（十九才）、二女悦子（十四才）も壮健である。終りにかつゑ夫人の内助の功を讃えたい。明治四十五年三月三十一日子年生。

ベレーン市郊外アカラ植民地

山本繁氏

SHIGERU YAMAMOTO
Municipio Acara
Belem, — Pará

原籍　北海道空知郡北村
渡伯　昭和三十二年六月　ぶらじる丸

　頭が低くて、愛嬌もあつて社交性に富み、義侠心も強く、よく他人の世話もするが、一歩誤まると、云いだした事はテコでも動かない不退轉さがある。軍隊生活で北支から、南洋ジャバ島に轉戰、終戰はタイランジャであつた。生死の境を越え　硝煙砲雨の中で、死を覺悟したこともあり、そうした糞度胸が、最後のドタン場に出てくるのであろう。グアマ植民地の移轉組十三家族の主張が通つたのは外交の巧さと、後にもひかぬ必死の態度が功を奏した譯で、遂にアカラ植民地に移轉した。要は十三家族の結束が固かつたからであつたが、その移轉について福岡總領事や古田海協連主事に同意させるまでの彼の外交手腕は鮮であつた。特に古田は實懇の間柄で、彼の主張には根氣負けした。

　一九六三年アカラ植民地に、北海道難民一千家族を入植せしめる案を、親友宮崎忠信等とねり、これを北海道庁に提案した。一家族百ヘクタールで一千家族で十万ヘクタールであるから尨大だ。アカラ郡長も十万ヘクタールの土地を提供しようと快諾したのだから、この案は實に棚からボタ餅が落ちてきたようだが、北海道庁はこれを中止した。そしたら一九六四年度の寒冷凶作である。このアカラ植民地に入植したら、あの凶作に悩む人々は、幸福な生活が出來ると著者も信じてやまない。そしてアカラ郡も勤勉な邦人家族が一千家族も入植したら、トメアスー植民地（邦人五百家族在住）よりも繁榮する郡となり、パラー州政府は、この上もない悦こびかただと思う。一石二鳥、一擧兩得とはこのことで、他人の事ながら、著者もこの北海道移住一千家族には大賛成である。

　彼はアカラ植民地邦人集團建設の立役者で、アカラ産業組合三代理事長もやつた。父善藏、母すゑ兩親は富山縣人で、その長男として北海道で生れた。静江夫人も道産子、グアマ植民地水田計画移民として入植した。政府の水田計画は、日本式水田造成の研究不足、グアマ全地勢の調査不充分、高台も浸水地帶も一律に地區割して、邦人を入植せしめ水田造成に就かしめたのが失敗の第一原因でもあつた。日本から持参した營農資金も消費、實に三年間徒食した。無一文になつて初めてアカラ植民地に移轉し、永年作物ピメンタを植えた。この徒食三カ年の道草は物質的には損害は大きいが、精神的には偉大な教訓を得たアマゾン地方の事情にも精通し、開拓生活、殖民事業の經營についても充分自信が出來た。

　グアマ植民地を退植し、アカラ植民地に入植、一百ヘクタールの耕地に胡椒三千本（成樹二千本）を栽培して今日に至つた二男元信以下則行、十五郎、ジャミーの四人で、五男ジュリオは早逝した。一緒に同行した山本満（二十九才）は自動車係であり呼寄せた河合郭次（ひろつぐ―姉きくえの二男・二十五才）も健在である。アカラ植民地の立役者である彼の健在を祝したい大正九年二月一日申年生。（右）河合郭次（左）家族一同

八百万本のゴム樹を人工栽培した處で、接木法の研究不足や、栽培法の失敗などで、成績不良で伯國政府に二百二十万コントスの安値で賣却した。ここに邦人が入植したが、間もなく連邦農林省は日本移民がゴム園に日雇人として入植することは、日伯移民協定違反だと退去命令を出し、遂に彼は移民會社の命でマサゴン植民地に十五家族と共に移轉した。處がここに移轉して視察すると、ここは恐怖のマラリヤ病巣窟で不健康地、しかも浸水地帯で作物は水に漬るので、移民會社は勿論、福岡總領事や廣瀬領事に「人命を尊重しろ」と反駁、到頭四十五日間入植を拒否、頑張りが奏功し、建設中のグアマ植民地に入植した。

グアマ植民地は有名な水田計画植民地であつた。ブラジル農政經済学の權威者で國立農事審議會長フリスベルト・カマルゴ博士が、グアマ河畔の底湿地帯に、灌漑排水溝を施し、水田米を試作した處、一ヘクタール百俵の米を收穫した。この成績をみてアルバロ・アドルフ上院議員が、タバショス區八千ヘクタール、ベルナンブツコ區二万四千ヘクタールの土地を買收、連邦政府の補助金サルテ案二〇億クルゼイロを引出し、邦人三百家族を入植せしめ、一家族當り二十ヘクタールを分譲して水田計画をした。然しこの水田計画は、地勢の調査不充分と、水田造成研究の知識不足で、失敗におわつたが、この植民地造成中に、無理と知りつつ入植した。入植地十番地區、ここで浸水期か長いので水田は駄目、窮余の一策に植えた甘藍が成績よく、それでグアマ生産の甘藍として名をあげ、ベレーン市民四十万人の食卓を飾つた。熱帯地方では余りの酷熱で甘藍は葉が巻かなかつたのだが、このグアマだけは特別だつた。彼は野菜作りの名人となり、コルデイロ所長の信頼をとつた。多くの人は他に移轉したが、所長は彼の移轉を許さなかつた。野菜名人の爲めであつた。そこで五カ年の無駄飯をくらい、無理して退植、トメアスー植民地諸富耕地に八カ月骨を休め、一九六〇年十月アカラ植民地に入植し、二百ヘクタールを撰定購入、初年度二千六百本、三年目二千四百本。現在成樹五千本の胡椒を栽培している。トラツトール・自動車・電氣發動機・消毒自動機・耕耘機等農場は全部機械化された。

美事な胡椒園の前で

長女冷子（二十三才）は、渡伯十才の時から父母に仕えた孝行娘、長男誠也（二十一才）は耕地支配人、二女千惠子（十七才）はベレーン伊藤總領事宅で行儀見習中の美貌の女性、二男徹夫（十五才）はベレーン高校生、伯國生れの三男讓治（九才）四男秀雄（二才）等、妹すみは、タイアーノ植民地江田慶治と結婚している。大正四年一月二十三日卯年生。

ベレーン市郊外アカラ植民地

堂原明氏

原籍　宮崎縣西諸縣郡飯野町
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

AKIRA DOBARA
Municipio Acara
Belem, — Pará

戰前の「教育勅語」をそのまま實施している堅氣な拓人で、今まで多くの人を助けた事があり、義侠心の強い性格が、ときどき出るので、金錢的に損をする事が多い。グアマ植民地時代、營農資金を他人に借し倒されたことがしばしばあるし、そのため自分の事業にまで影響した。まつ夫人も夫同様な人情深さがあるが、夫人の方は幼児を育てていく責任上、やはり女性的緻密さがあり、用心深いので、最近は同情まけしないようになつた。これは堂原家にとつて、一つの進歩であると云わねばならない。

彼の祖先は、鹿兒島縣加世田市津貫の出身で、鹿兒島縣釀造界のナンバーワン本坊一家と親戚で、實兄與助は伯母の家督を嗣いで、本坊與助を名乗つている。彼の生地飯野町は、明治維新前は薩藩七十七万石下に属していた。その昔し戰國時代に薩主島津勢が、肝属勢に虚をつかれて敗走したとき、藩主は小人數で潰走、追跡する肝属勢の目から逃れるため、一部落にかくまつてもらつた事がある。そのため藩主は一命を拾うたが、それから特に飯野藩は鄭重な取扱をうけたと記錄に殘つている。鹿兒島縣境で、言葉も鹿兒島訛である。ブラジルには飯野町出身者は、戰後アマゾン移住者で、トメアスー植民地の篤農家下前原光次、グアマ植民地崎山巖、戰前の移民で南伯パラナ州マリンガ市に西山勝治、徳澄守正（共に坂元部落）などがいる。皆篤農家であり、堅實な實業家である。

ベルテーラ・ゴム園第一次移民として入植した。戰後ブラジル移民が再開されたのは一九五二年度（昭和二十八年）アマゾン移民で南伯サンパウロ州珈琲園移民はなかなか再開されなかつた。日本政府は 移民 再開と云うので有頂天になり、どんどん募集してアマゾンに送つた。南伯サンパウロ州なら一年十万人や二十万人の移民は既成コーヒ園があるから消化仕易いが、アマゾンは受入態勢が整つていなかつたので、一九五四年（昭和二十九）年二百家族も入れたので、新設の植民地はまだ密林も伐採してない處が多く、そこへ邦人を入植させようとし。

そこで彼等六一家族も入植豫定地がなかつたので、間に合せにベルテーラ・ゴム園に入植させた。ベルテーラ・ゴム園は、一九二九年自動車王フオードが五百五十万ドルの巨費を投じ。

右二男徹夫と四男秀雄、自慢の胡椒樹

SABURO KURIBAYASHI

Paredão — T.F. de Amapa

アマッパー直轄州パレドン驛

栗林三郎氏

原籍　青森縣南津輕郡大鰐町長峯
渡伯　昭和三十二年六月　ぶらじる丸

彼は南米一を誇るコチア産業組合呼寄青年二・五〇〇人の一人である。コチア青年は、その八割が農に就いている。残る二割は都會に進出し、特殊産業で随分吃驚する位に活躍をしている者がいるが、その一人に栗林三郎がおる。

出身は青森縣、父熊吉、母さくら、青森縣立弘前工業高校土木科卒業後、日大工科中退で、土木事業で有名な「熊谷組」に入社、山形縣赤川總合開發水力發電工事に參加した。青春の鴻圖に燃え、鬱勃たる向学の野心と實社會生活への熱望は、遂に滿額大の日本に住むのを潔しとせず、海外進出を狙つていた。やがて畑違いの農業移民としてコチア産組呼寄青年として、ブラジルに渡り、規定によりブラジル聖市郊外ブラガンサ市の福島縣人遠藤清耕地で、バタタ栽培六カ月を過ごした。遠藤は當方一流の農家であつたから、機械農に就き多くを学んだ。軈てゴヤス州土地開發會社專務理事鶴田秋夫の招聘で測量技師として入社した。そしてゴヤス州北部トツカンチンス河東部地方十万ヘクタール測量のため大密林や大ジャングルに猛進したこの生活數年にして、アマッパー直轄州 TECHINT 開發會社（イタリー系）に入社し、同發電所技師として精勤した。

アマッパー州フエレーラ・ゴーメス郡のパンカーダ・グランデ瀧（十万KW、またチアリー河サント・アントニオ瀧の十八万KWの發電所の大工事を引受けている會社で、ダム建設工事に投じられる資本は連邦政府六割、北米系ダム會社四割の共同投資で、第一期費用が七百億クルゼイロ、ダムの高さコンクリートの部分が二十三米、土壌とコンクリートの合併堤防一千五百米で、一九六八年完成の豫定である。最初重力發電工事に就業大起重機の操作も一手に引受けた。そして各技師連中と相談して、重要部門に移動した。彼は機械操縦、測量工作、設計製圖工事見積等なんでもござれだから、同會社の重役連中は、彼の入社をよろこんだ。

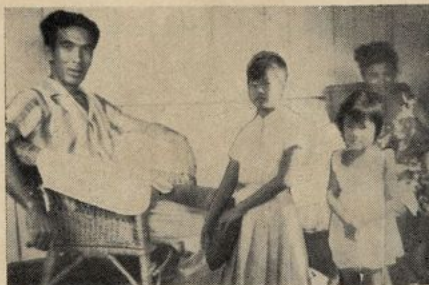
政變のため大工事が途中休んだ時は、アマッパー州庁から、マカツパ市街地の擴張豫定地測量を依頼されたり、北米資本で南米一のマンガン鑛山會社イコミからも、土木事業關係の仕事を依頼された。既にブラジル公認土木技師の免狀も下附され、第二期發電工事再開のときは、技師長の肩書で入社の豫定である。若冠三十才、彼の前途は洋々たるもので、實に明るい。

ブラガンサ遠藤農場で、邦人開拓者が各國人から尊敬されている事が解り、ゴヤス州の大測量でブラジル國の曠大さを知り自然に氣宇宏大になつた。そして五〇〇億クルゼイロの大發電所工事で、自分の實力が發揮出來る自信を得た。在伯僅かに滿八カ年。多年の修養を土台に活躍するのは、これからである。切に彼の飛躍を切望したい。昭和十年十月廿五日亥年生（右）大發電所工事の前に立つ栗林技師（左）栗林三郎技師の近影。

MATAO FUJISHIMA
Casa Oriental Mercado Central
Macapa — T.F. de Amapa

アマッパー直轄州マカッパ市

藤島又男氏

原籍　熊本縣天草郡大矢野町
渡伯　昭和二十八年九月　あふりか丸

何事をやるにも先端をきる男で、ベレーン郊外でトマテを大々的に栽培した草分拓人で、彼の後に増元七太郎・北川陽一・正雄兄弟のトマテ名人が生れた。アマツパで邦人漁業の草分でもあるし、四・四五〇ヘクタールの牧場に百八十頭の牛を放ち、アマツパ邦人牧畜界のトップを切つている。金儲がころがりこんでくるが、それを掴んで懐に仕舞い込む蓄財の術を知らず、九州肥後人特有の豪放磊落が災して、一生金滿家になれそうもないが？　よくしたもので末子夫人が商才にたけ、現在東洋商店を長男親仁と経營し、その方で巨財を残しおるので、軈て大成するだろう。林田みね子夫人を、アマツパ州私設女領事と稱するなら、彼は次郎長的存在で、アマツパ州の親分とでもいえるだろう。

渡伯の動機は實兄正徳が第一回高拓卒業生で昭和六年にアマゾニヤ産業研究所に入植していたからである。正徳兄は葡語に精通、夫人も伯人で、アマゾン移民再開に際し、移民會社アマツパ州駐在員だつたが、軈て辭職した。藤島又男はこの兄正徳がブラジルで活躍していることを、何時も意識していた。旧制宇土中から、台北一中に轉じ、後に明大を卒業した台北一中にいたので台灣人の同窓生が多く、彼のアルバムを見ると、台灣人と撮した寫真が夥しい。大東亜戰爭で呼寄され、陸軍氣象隊に編入され、陸軍少尉となつてヒーリツピンを始め南方全域に轉戰した。比島時代の戰友にマタビー植民地の目黒宗一がいる。終戰はシンガポールで、武器解除、非戰斗員の歸還を先にしたので、彼の復員は一年後であつた。

アマゾン移民再開で、すぐ應募し、フアゼンジンニヨに五家族と共に入植した。一年三カ月目に退植し、ベレーン市郊外モエマ區に入植し、ここでトマテ栽培接木法に成功して、大いにトマテで儲けた。トマテは戰後移民が入植するまで、アマゾンで大々的に栽培している者はなかつた。モエマ在住三年半、ここで耕地を邦人に譲り、實兄正徳と共同で「パウ・デ・ローザ」工場を經營、パレンチンス地方で三カ年奮斗した。三カ年後その工場を閉めて、アマツパ市に移轉したが、蔬菜栽培やら、漁業やら、次いで牧畜やら、多くの事業に手を出した。兄正徳は一九六四年度からベレーン市貿易商島川文太郎と共同で「パウ・デ・ローザ」工場を經營した。アマツパ北部州境オヤポツキ地方で十万ヘクタールの土地権利を獲得し、パレンチンス時代の敏腕を振つている譯である。

末子夫人は戰後派移民女性であるが、葡語も上手で、外交手腕があり、邦人共通の小兒病的感情にこだわるのが大嫌い、長男親仁（ちかひと）共に雜貨店を經營している。アマツパ州を訪づれる邦人が必ず尋ねていく私設領事館が、彼の店である。長女玲子、二男譲二、三男俊雄、四男ワルテル（死亡）二女ルシア、五男たけし等健在である。切に今後の健在を祈る。大正十二年九月二十六日亥年生。

右から末子夫人、二女ルシア、長女玲子、主人

SEIGORO HIRASHITA
a/c Coop. Monte Alegre
Belem — E de Pará

パラー州モンテ・アレグレ市アサヒサール區

平下青五郎氏

原籍　北海道札幌市南二條西七丁目
渡伯　昭和廿九年十一月　あふりか丸

アマゾンでアゴヒゲを生やしている三羽烏の一人である。トメアスー植民地の遠藤瀧三、ベレーン市の高山鉄蔵そして彼である。三人とも變り者で特に高山の愛國心は狂人に近い。遠藤はマラリア病の盛んな時代に、恐怖のあまり四十八家族の中で四十五家族が退散したのに居殘つた奇人、この平下青五郎も五十四才になつてブラジルに永住の決心で渡り、しかも三十年計画で平下農場を建設している變人である。もう十年過ぎたが、あと二十年もあるから、八十四才まで生きる見當、誠に悠長で、氣短かな島國日本人には稀らしい

事業の輪廓をみると、アサヒザールに入植して自己農場開拓に着手、九〇〇本の胡椒、續いて隣地曾木農場購入胡椒一千本、山田農場買收胡椒一千本、合計胡椒三千本、カカオ一千本、一農場は全部カスタニヤ三千本、牧場を設けて二十頭の牛を所有、これはいづれ幾百ヘクタールにして數百頭にする考え、毎年米は百俵を收穫して、農家が米を購入する一般邦人の弊害にいい手本を示し、有用材木セードロ（日本の杉）樹を一千本（六年生から一年生まで）植林している。そしてジュート（黄麻）の種子採集となか〳〵多角農である。セードロ有用材を植林している奇特な拓人は、實に稀有の事である。住宅の廻りに草花や熱帶植物を植え、野菜と果物は豊富、珈琲・カカオ・グワラナー・ココ椰子・蜜柑・パイナツプル・アバカテ・マンガー・マンジローバ・アサイ等の熱帶果樹が密生して農事試驗場みたようだ。所有面積百五十ヘクタール。ブラジル永住だから一、二カ月ごとに雇傭の伯人は勿論、同植民地の伯人を呼んで舞踊會を催す。著者が一泊した夜は、東天明るくるなまで無慮二百人の伯人が熱情の胸をもやし、男女とも少量の地酒に酔い、徹夜して音樂のリズムに從つて踊つていた。伯人は平下耕主を尊敬しているが、戰後派邦人で、こんなことをするのは、彼がたつた一人であつた。長男輝男は日本から愛妻みよ子を呼んだが不幸逝去した。二男榮（二十一才）三男正人、四男滿也等が耕地運營に活動しているが平下耕地は三・四百ヘクタールの大農場大牧場となるのは、そう遠いことでないだろうと思う。

彼の渡伯旅券は北海道であるが、生地は岐阜縣武儀郡東武藝村である。そして成長したのは京都で、青年時代東京に進出、新聞配達をしながら苦勞した。大正九年二十一才で岐阜六十八連隊に入營、昭和十二年上海事變勃發には呼集出征、梅津參謀長指揮下で、昭和十四年まで二カ年激戰に奉仕した。除隊後上海で陸軍省御用達として活躍、終戰後復員して宮城縣で土木請負業、轉て北海道に移住して、アマゾン開拓募集の話をきき共鳴モンテ・アレグレに永住するに至つた。今後五十年したら榮・正人・滿也の子供等はモンテ・アレグレ牧場王と云われるかも知れない。切に長壽を祈る。明治三十三年十一月二日子年生。

樂しい一家五人と（上右）二男榮君

パラー州モンテ・アレグレ市

上野浩爾氏

KOJI UENO
a/c Cooperativa, MA.
Monte Alegre, — E. de Pará

原籍　和歌山縣那賀郡粉河町
渡伯　昭和六年七月　りおでじやねいろ丸

彼をモデルにして「濁流アマゾンを拓く人々」と題して移民小説を書いてみたら面白いだろうと、著者はかねがね思つている。いや書くかも知れないね－？

彼は父泰三、母むね兩親の二男に生れた。實家は裕福で、長男茂敏は東京都在住で郵政省高級官吏である。

彼は舊制粉河中学（現在の風猛高校）卒業後、ベレーン總領事館に勤務していた五反田貴己書記生が、大阪市YMCI海外協會を設立アマゾン開發青年團を結成した。第一回募集に應じ、一カ年大阪市で實習猛訓練した。昭和六年渡伯、大阪朝日新聞も大いに後援した。渡伯直後半年にして四十七人の團員は乱れ團長排斥、軈て金持息子の事で退植となり遂に頑張つた森川春一・成瀬義治も去り、近藤秀雄・平賀練吉・長谷川と彼の四人となつた、このモンテ・アレグレ植民地も軈て閉鎖となり、五反田組の農場百ヘクタールもさびれだした。平賀練吉も去り、最後に殘つたのは彼一人になつた。

一九三六年（昭和十一年）悪性マラリア病で余病併發、重態になり、死一歩手前のとき邦人は誰一人もいず、一伯人女性の手厚い看護に感謝落涙、人種と國境の觀念を超越して、その愛情に感激、彼女と結婚にゴールインした。イザベル夫人がそれである。平賀練吉を通じて福原社長からもらつた七十五ヘクタールの土地で獨立し、バナナとタバコ栽培でスタートを切り、戰時中は南拓農場を死守する押切他男（現トメアスー産組理事長）と二人だけ殘つた。そして牧畜に力を入れ、終戰のときは六十頭に殖えた。

終戰後辻小太郎が、アマゾン移民再開の交渉を遂げゼツリオ大統領の許可が出た。辻小太郎はすぐ、彼をアマゾン經濟開發會社員に招聘した。モンテ・アレグレ植民地の建設二カ年、グアマ植民地建設プラン、第一回キナナリ植民地入植者輸送監督、アカラ植民地建設初期一カ年等の激務がたたつて、遂に病床に臥した。グアマ第四次移民退植後マラニヨンやアカラの入植當時の苦心、或いはモンテ・アレグレ草分入植の酒乱者の鎮撫、キナナリー植民がベレーンから六十日かゝつてリオ・ブランコ市に着くまでの苦心、彼にとつては總べてが命がけであつた。昭和六年頃舊制中学を卒業した純眞のままでアマゾン開拓二十五年の彼と、一命を漸く拾つて復員し、食糧難の戰後を突破した戰後派の移民との間には大きなへだたりがあつた。

海協連を辭職し野に下つてモンテ産業組合長二期をつとめている。農場は高台百ヘクタール、低地三百ヘクタール、合計四百ヘクタールに牛三百頭を放つている。イザベル夫人との間に長女ソフイア、長男ベンジヤミン、二女カルメリツタ、二男フエルナンド・三女セリーナ、四女ジユジチ、三男ハイモンドがいる。明治四十四年九月二十六日丑年生。

日伯親善を地でゆく拓人上野氏

KOTARO MURAKAMI
Coop. M. Alegre
Monte Alegre, — E. de Pará

パラー州モンテ・アレグレ市アサヒサール區

村上幸太郎氏

原籍　熊本縣阿蘇郡黒川村乙姫
渡伯　昭和二十八年九月　あふりか丸

戦前フイリツピン諸島で活躍し、戦後アマゾンに移住した人達は、總べてが篤農家であり、また人格者であつた。金・金・金と云うガリガリ妄者は一人もいなかつた。一例をあげればトメアスー植民地マルキタ區清水金右衛門・川邊彌男・サンタ・イザベルの藤井正己、タバナンの火浦春雄、ベラビスタ植民地の宍戸良雄等などがいるが、實に明るい家庭であり、そして大いに儲けてもいる。本編の村上幸太郎家も、その例にもれず實に立派な家庭で、美しい家庭愛には、傍でみてもホレボレさせられる。

父武雄は悲しいかな一九五八年（昭和三十三年）腦軟化症で五十七才で逝去した。いまだ長男の幸太郎が嫁をとらなかつたので、心残りがして万斛の涙をのんだだろうと想像される。父武雄は大正十四年二十三才の青年で、比島ダバオ市に赴任、マニラ麻で有名な古川拓殖KKに勤務した。古川義三社長はマニラ麻の神様で、戦後は再建に燃えブラジルも視察、現在エタワドルに適地を購入して、数千ヘクタールの麻農場を經營している。ここで社長の信用を得て、農場現場監督から事務所勤務に榮轉した。渡比九年目の三十二才のとき、二十三才のうら若き乙女けさ子夫人を日本から呼寄せて結婚した。夫人は隣村永貝村出身の女性であつた。終戦の十月三十日歸國し、出生地乙姫部落で農に就いた。一度海外に出て雄大な氣宇となり、自由奔放な生活に浸り、嫉妬・猜疑・羨望・嘘言・讒言・誹謗などの醜悪なことのない浩然な氣持で長年暮したので、もう日本の井戸端會議的生活が嫌になつた。けさ子夫人も同感、恰度アマゾン移民再開に際し、率先して應募、第一回モンテ・アレグレ移民として入植した。

受入態勢も充分でなく、また永年作物の適作方針もなく、植民地指導はデタラメで新入植者は困難し、そこへもつてきて、ベルテーラ・ゴム園を退去命令された後續移民が、どし／＼モンテ・アレグレに入植し、一時は百四十家族に及んだ。そして大混乱を呈し、百家族以上が退植しベレーン、サンパウロへと脱植した。村上家は最後まで踏みとどまることに決定し、今日に至つた。現在胡椒一千本、カカオ四千本、カフエー五〇〇本を栽培している。けさ子未亡人の献身は賞讃のほかはない。十八才で渡伯した長男幸太郎は成人して、一九六三年十月榮子夫人を日本から呼寄せて結婚した。愛妻榮子（昭和十六年十二月七日生）は長野縣更科郡上山田町出身で、海外發展熱旺盛な日本一の教育縣に育ち、自から海外を志望、神奈川婦人ホーム出身の操志强靭な女性である。よき協力者を得て前途は益々光明、妹笑子、妹愛子は婚期にある貞淑な女性、妹直子、妹勝枝も成人した。切に地下に眠る武雄拓人の冥福を祈り、一家の幸福を祝したい。昭和十年三月十二日亥年生。仲睦まじい姉妹

KOGANO TAKAYA
Belem, — Pará
Monte Alegre, — E. de Pará

パラー州モンテ・アレグレ市アサヒザール區

高谷古賀野氏

原籍　長崎縣長崎市松原名
渡伯　昭和三十年五月　あめりか丸

休軀頑健、六尺に近い偉丈夫で、休格と同じく肚も太く、あまり眼前の儲けにコセ〳〵しない人物である邦人百四十家族入植したモンテ・アレグレ植民地で、百家族がゾク〳〵退植したが、彼は焦らなかつた。そして最初入植の土地が低濕地帯で悪く、一年を無爲に送り二回目は奥地で地勢悪く一年在住、三回目に邦人脱耕の現地を購入し、三年目から漸く本腰で耕地の建設、續いて隣地を購入して六ヘクタールにした。永年作物は胡椒を栽培して二千本となした。短期作物は米ジユタ（黄麻）の種子採集玉蜀黍・フェイジョン・豆・落花生で牧畜に力を入れて牛を飼つている。一九六三年にドイス・ガーリョ區の榎本農場を購入し、ピメンタ成樹一千二百本を増植して現在三千本、第一農場と第二農場を合併して五千本の胡椒園を經營、所有農場面積九十ヘクタールである。牧場經營を目指してるいから今後二十年もすれば四・五百ヘクタールの高谷農場が完成、そこに五百頭の牛が放たれることであろう。

アマゾンで最初入植したのは、サンタレン市のベルテーラ・ゴム園であつた。彼等は第二次で三十九家族、三カ月前に第一次六一家族が入植していた。このゴム園は自動車王フォードが一九二九年（昭和四年）五百五十万ドルの巨費を投じて、八百万本のゴム樹を人工栽培したが、接木法の研究不足で成績不良遂に二百二十万コントスの安値でブラジル政府に賣却した。世界一のこのゴム園に入植した處、連邦農林省が横槍を入れた。勤勉な日本移民がゴム園に入植して日雇で働く事は、伯人勞働者を壓迫するから、日伯移住協定に違反すると退去命令を下し、移民會社も止むなく、百家族以上の邦人を分散させた。急激だつたので、移住地の受入れ態勢整わず、そのためモンテ・アレグレ植民地も入植地の荒山も伐採されず邦人入植者は困難を極めた

ベルテーラ・ゴム園から、モンテ・アレグレ植民地に移轉した者達は、自分で道路を開き、河に橋をかけして入植した者もいた。また何カ月も天幕生活で入植地の荒山を伐採した者もいた。然しそんな苦勞をしても當時は永年作物が發見されず、政府も移民會社も指導方針が零であつた。最初から胡椒栽培に踏みきつておれば、百家族も脱耕しなかつただろう。結局辛抱した人が、最後の勝利者となつた。

彼は大正九年から滿州大連市に住み、昭和三年大村四十六連隊入營、下士官志願、昭和九年滿州派遣、同十二年歸國、引續き昭和十四年北支出征、戰傷で歸國して鹿児島四十五連隊補充兵教育係をなし、昭和二十年終戰で復員、造園・苗木・植木職についた。百江夫人との間に長男信夫、嫁壽美、孫正信、二男利夫、三男和夫、長女洋子、四男一之、五男明、六男東夫（はるを）の六男一女が健在だ。明治四十一年五月三十一日申年生

（寫真）この睦まじい家族を見よ

TSUTOMU TOKUNAGA
Coop. M. Alegre
Monte Alegre — Est. de Pará

パラー州モンテ・アレグレ市ドイス・カーリヨ區

徳永勉氏

原籍　廣島縣佐伯郡廿日市町
渡伯　昭和三十年五月　あめりか丸

何事をやらしても、器用な男で、時計・ラジオ・寫眞機・自動車などの機械類から、洋服・靴・シャツの衣類に至るまで、なんでもござれである。しかも何事をさしても面倒くさがらず、勞苦をいとわない。非常に奇麗好きな性格で住宅の周圍に草花や熱帯植物を植え、しかも部屋は常時清潔で塵一つない。父仁作、母ちか兩親の八男に生れた。父の職業は花卉園藝であるから、少年の頃より、園藝は自然に好きになり、そのため渡伯後も他の家よりも奇麗な草花を飾つているのであろう。

胸に一物も殘さず、ズバ〱と話す清廉潔白な性格は誰からでも親しまれる。悦子夫人も似た者夫婦で、社交性に富んで明るい。「折角こられたのでスキヤキでもやりましょう」と話している間に鶏二羽を料理して食卓は珍味の御馳走、同行の前田農事試験場長を交えて四人で話は盡きなかつた。十年前に一度訪づれた事があるモンテ・アレグレ植民地の事とて、著者も話題は豊富で、三・四時間を過ごした。彼は滿州開拓で有名な農聖加藤完治を慕つて、茨城縣内原訓練所で修養し、昭和十二年日支事變には、滿二十才で滿州開拓義勇軍の幹部となつて出征した。軈て航空隊、情報無電隊に編入大いに活動、昭和二十年大東亞戰爭終了まで、軍隊生活に服していた、終戰後日本に復員し、九ヵ年の陰慘な戰爭生活に終止符をつげた。終戰の時は滿州大連のドックに勤めていた。

アマゾン移民に應募、妹すみ子を家族の一員として同伴、ベルテーラ・ゴム園に入植したが、日伯移民協定により、ゴム園に邦人が働くのは違反だと農林省の横槍で退去命令が出て、一ヵ月目にモンテ・アレグレ植民地のアサヒザール移民收容所に移つた。ゴム園は一九二九年自動車王フォードが五百五十万ドルの巨費を投じ、八百万本のゴムを人工栽培した世界一のゴム園で、ブラジル政府が二百二十万コントスの安値で譲受けたものであつた。突然の退去で止むなく百家族以上の移民は分散されたが、彼等も入植豫定地がなく、止むなく自分達で道路をつくり、橋をかけ、荒山を焼き、掘立小屋を造つて入植した。その苦心慘膽は筆舌に盡しがたかつた。

百四十家族の入植者のうち、三十家族だけが踏みとどまつているが、彼もその内の一人である。家族の勞力は彼一人であるが、この快男子、恩師加藤完治の訓練宜敷きを得たとみえて、勇往邁進、他人を頼らず孤軍奮斗多くの伯人雇傭人を指揮して大いに儲かつた。最初の耕地に胡椒二千二百本植え、舊大久保耕地、舊赤尾敏耕地、その隣地と三耕地を買收して、總面積百二十ヘクタール、マンジョカ製粉、陸稲、黄麻種子採集など多角農で巨利を博している。長女久美子（十七才）二女あき子、三女梢の娘も健在、妹すみ子はベレーン市ビジア街道草刈幸藏と結婚まゆみ、美枝子の母親となつた。大正六年三月十日巳年生。寫眞は大陸に生きる快男子の家庭

HARUICHI OKUBO
Coop. M. Alegre
Monte Alegre, — E. de Pará

パラー州モンテ・アレグレ市ドイス・ガーリヨ區

大久保春一氏

原籍　高知縣吾川郡吾北村
渡伯　昭和三十年五月　あめりか丸

在伯高知縣人は、その九割までが高岡郡出身者で、しかも聖市郊外に住んでいる。これは明治四十三年から大正二・三年に移住した高知縣人が聖市郊外のコチア街道で馬鈴薯を栽培し、その連中が案外馬鈴薯で儲けたので大正末期になつて殆んど全部が集團し、昭和四年には六十五家族でコチア産業組合を結成した。下元健吉・村上誠基・矢野桝喜・森鶴吉等の發起人がみな高岡郡出身者、他縣人は廣島縣の山下龜一ただ一人であつた。それが三十五年後の今日一万三千家族を有する、南米一の農協になつたが、この創立前後に高岡郡出身者が百家族位いコチアに集團した。殆んど高岡郡出身者で、幡多郡、長岡郡吾川郡の出身者は僅かであつた。こうした先輩の關係で戰後の移民も、高岡郡の出身者はみな聖市郊外に移住していくようだ。

土佐犬のように粘りの強いのが高知縣人の性格で、一般に質實剛健だ。地味な徳島縣人。派手好みの香川縣人、商才にたけた愛媛縣人に比ぶれば、各縣人の氣風は、徳川三百年間の藩風がよく現われている。本編の大久保春一の胡椒樹は一本の樹で八キロも實つたのがあつた。豊作のときは、平均五キロも實つたから驚嘆に値する。普通胡椒樹は一本平均三キロで、一千本で三トン、一万本で三十トン、それ以上收穫すれば篤農家である。一本八キロ採集は稀有のことである。こんなに實つたので現地を引拂う考えで、二・三万本も栽培できる平坦なベレーン市郊外を視察した。一九六四年度である。處がトメアスー植民地を始め、ベレーン近郊は砂地で稀にみる痩地、肥料がなければ實がつかない地帶であつた。いくら平坦で仕事が出來ても、あんな痩地では、肥料代に喰われてしまうと痛感、到頭二カ月視察して適地を求め得ず歸村し、始めてモンテ・アレグレ區の豊饒肥沃地を再認識した。そして地勢に起伏が多く、傾斜地で胡椒栽培に不便だが、地味肥でなので辛抱し、ここで二万本栽培に邁進することに決心した。一本五キロ平均で二万本で百トン生産すれば、北伯一の胡椒王となれる。現在百トンに近い者はいるが百トン越をした邦人は一人もいない。是非頑張つてもらいたい。

父林馬、母よしは故人、父は日本で神官だつた。彼の渡伯後弟龜壽・安政も渡伯、今朝子夫人の兄光秀も渡伯した。ベルテーラ・ゴム園に在住一カ月後に現植民地に移轉、道路工事に從事筆舌に盡しがたい辛酸苦心をなめた。豊饒肥沃な土地で、最初から米作一點張り、一町歩陸稲七十俵を收穫、五町歩やつて三五〇俵をとつた。然し短期作物は危險、恰度原田勝馬がブラジリア首都に移轉したので、その耕地を購入、胡椒を栽培した處立派な成育振りに吃驚、瞬く間に三千本を植えた。長男省三（二十才）二男富直、長女智恵子、二女愛惠、三女靜香、三男啓助等が成長し、鬼に金棒である。大正十二年三月三十一日亥年生。（右）胡椒と主人（左）羨やましい一家

KINJI IKEGAMI
Rua Lauro Sodré
Alenquer, — E. de Pará

パラー州アレケール市

池上欣一氏

原籍　熊本縣熊本市大江町
渡伯　昭和八年四月　もんてびでお丸

高拓第三回生であるが、高拓三回渡伯者では上森六園・小谷裕次・小海牛次・前山魏・谷正一の事務屋型中井憲明・本間武四郎・芹澤正男・小野三郎などの獨立異端の猛者型がいるが、彼はその中道組で堅實な歩調をとつて今日の地位をきづきあげた。その點三回生のうちで財を殘した者として右翼トップ・クラスである。非常な愛妻家であるが、いや夫人も心根を傾むけて夫を愛している。そう云えば九州熊本中学（舊制）時代から教育勅語式謹嚴實直な教育を受けてきた眞面目な青年で高拓を卒業してすぐ渡伯したから、遊蕩の巷を知らない天眞爛漫さがあり、昭和十年滿二十二才で彼女を呼寄せるまで、女性の肌にさわつた事がない。純情可憐な麗わしい乙女であつた夫人と結婚したので愛妻家になるのも當然であり、童貞の夫と結婚した夫人が、誇りをもつて愛情を捧げるのも當然で、この夫妻をみていると羨やましい限りである。死ぬ寸前まで新婚當時の氣持で暮していくのではないだろうか？

熊本縣出身の上塚司のアマゾン開拓の話しをきき、高拓に入学して渡伯、アンヂラ植民地に入植して一年後、第一回の猛者御園福衛、佐藤行夫等が組長になり、二十余名が揃つてワイクラツパ植民地開拓に、獅子奮迅の勢いで邁進した。二十代の青年ばかりの集團生活、無味乾燥を慰めてくれるものは「日本精神を高揚し、大アマゾンを日本人青年が拓く」という名譽だけであつた。金を儲けようという戰後青年と雲泥の差があつた。

三年頑張つてテルオ夫人と妹を呼寄せた。そして低濕地帯に一年黄麻栽培の後に、パラー州政府の呼聘でブレーベス農事試驗所創設に身を躍らした。越智榮所長、所員は彼と妹婿の石原義雄(夫人はタツミ)石原義人(夫人は幸代)の三人で、マラリア病のため生死の境を彷徨するような危險な生活二ヵ年、不健康のため止むなく、サンタレン試驗所に移り、ここで再び越智榮や飯田義平（一回生）などと共に健斗した。一九四二年世界大戰で公職を退き、ジュート栽培で獨立した。サンタレン市郊外のバルゼア地帯、ここでジュート農場經營のコツを覺え、終戰後にアレンケールに移轉、伯人アマラルと共同で農産物仲買業を十年間やり、アマラルがリオ市進出のとき、共同權利を安價に讓り受けた。豪壯な住宅、廣大な倉庫はタナからボタ餅式にころがりこんできた。牧場も五千と、千三百ヘクタールの二ヵ所で、牛四百頭、黄麻栽培農場は八十トン生産、農産物仲買業として遂に名をなした。テルオ夫人との間に四男三女、長女ひとみは移住事業團辻村一馬と結婚、長男志伸（サンパウロ工大四年生）二女みさ（マナオス病院看護婦）二男ショーナス（宗教学校パライーバ州）三女レーア、三男イーボ、四田ルイー等健在だ。大正二年八月十九日丑年生。寫眞は後列右端二人は姪

KOHEI TUJI
Rua Poão Pessôa, 260
Santarem, — E. de Pará

パラー州サンタレン市

辻　小　平　氏

原籍　滋賀縣彦根市甘呂町
渡伯　昭和八年三月　さんとす丸

学窓を巣立つや、滿二十一才で第三回生乗船のもんてびでお丸より一足先きに、さんとす丸で渡伯した。アマゾン大江の島でジュート栽培大戦勃發でサンタレーンに移りボンジャルジン耕地（兄はイツキ島）そしてアレンケール耕地（現大西耕地）と轉じ終戦後サンタレン市に進出し、辻兄弟商會を創立す。兄の自由奔放と違つて、周到綿密，石橋を叩いて渡る堅實さがある。商人肌であるが，若い頃は情熱の湧く詩人でもあつた。一九三八年二十六才のとき，滋賀縣人田中長兵衛（ビラ・アマゾニヤ入植者現在聖市在住）の姉松子（十九才）と結婚した長男峰雄はベレーン工科五年，長女サンタレン高等商業就学中，二女さとみは師範，二男アルマンドは中學校に通学している。一九五五年頃より，ジュート取引で莫大に儲け、百貨店・薬局・ゴム液濃化工場・精米工場等、使用人は百數十名である。サンタレン市の三大商社の一つで、サンタレン市に彼がおることは、邦人として誇りである。サンタレン辻商會には飯田義平（高拓一回生）瀬古興平の両氏が社員として協力している。大正元年一月三日子年生

尚彼の印象記を長々しく書くよりは、二十二才で渡伯した頃の彼の作詞「アマゾン健兒の歌」を掲ぐれば、彼の性格はよく解ると思う。あえて本詩を掲載する由縁である。

寫眞は右から、さとみ、アルマンド、松子夫人、主人、峯雄あさみ

アマゾン健兒の歌

辻　小　平　作詞
（一九三四年・昭和八年）

一、母國を出でて　新日本建設に
萬苦何か　捧げん犠牲
見よや　アマゾン健兒の意氣を
これぞ　パイオニアの眞髄か
限りなき沃土　絶えざる流れ
その名ぞアマゾン　我が郷土

二、小鳥は歌い　大魚は跳る
椰子の葉蔭に　光りが奔る
築かん　平和と正義の樂土
これぞ　神代に映えて香ふ
限りなき沃土　絶えざる流れ
その名ぞアマゾン　我等が郷土

三、赤銅の鉄腕（うで）　たゆまぬ意思（こころ）
我等の向う　理想は一つ
強く正しく　所信に進め
これぞ　第二の新日本
限りなき沃土　絶えざる流れ
その名アマゾン　我等が郷土

KENMEI NAKAI
Parentins
Est. de Amazonas

アマゾナス州パレンチンス市

中井憲明氏

原籍　香川縣坂出市梅園町
渡伯　昭和九年五月　ぶえのすあいれす丸

昭和の初頭マラソン王國と云われた香川縣坂出市の出身である。坂出市からオリンピック入賞の山田、國際級のイアク以下數多くが輩出した。彼が勉学した坂出商業時代は野球王國香川縣と云われ、高松商業（後の慶大投手の宮武、現在の東映監督の水原）高松中学（大洋監督の三原）等の全盛時代であつた。彼の出身校坂出商業は惜しいかな野球界の華、甲子園の全國中等学校野球大會の四國代表校になれなかつた。その當時は四國は一校出場で、名門松山商業（名投手藤本定義現阪神監督）などが高松商業と覇を爭つた。名内野手と謳われた中井憲明選手は遂に甲子園の花形となれず涙をのんで坂出商業を卒業した。實兄は新興滿州國新京市長（長春）になつたので、滿州に行き大連倶樂部（名投手谷口五郎主將）に加入しようかと思つたが、道をあやまつて高拓に入学・遂にアマゾンに移住した。

渡伯して後に彼がもし南伯に移轉したら、ブラジル野球界の元祖進藤投手（秋田中学甲子園出場）弓場勇投手（神戸中学）等と共に今日は球界の元老となり、ブラジル野球連盟の顧問に推され、金儲けどころでなく、伯製飛田穂州みたようになつていただろうと確信する。野球の面白味が解らないアマゾンに永住したから、ジュータ栽培に傾頭、金儲けの面白味が解つて今日の金滿家中井になつたが、南伯聖州にいたら球團一千チームもあることとて、そうはいかなかつただろう。その証據に全伯廣しと言えど、戰前派の野球マンで、スポーツ野球週刊誌を缺かさず愛讀しているのは、彼一人ぐらいのものであろうし、目まぐるしく新陳代謝するプロ野球について、彼位い知識の豊富な人はない。著者は戰後訪日五回、行けば後樂園球場は缺さないのだが、その著者が顔まけする位にプロ野球通である。彼の野球知識はまるで毎日東京と京阪を駈づり廻つているように豊富だ。アマゾンに於いて第一人者のみならず、野球通として全伯一流人物であることを推賞したい。

弊衣破帽のバンカラで、國粹主義の強い彼がアマゾンに來たため、愛妻ジュゼーフィナと國際結婚しても、コスモポリタンにならなかつた。夫人も日本語を解し、日本料理を好み、日本人を好いて好遇する。妻を日本人式にした彼は偉らいと思う。世にありふれた伯妻に頭が上らん徒輩と趣を異にする。實家は坂出市の名家で中井家を辱めない態度を、今日まで保つたのは賞して可なりだ。黄麻農場を經營、そして數百町歩の牧場に牛三百頭を所有、黄麻類の農産物熱帶動物鰐以下の皮等の取引商人となつて大成した。著者訪問中五千ヘクタールの牧場を購入し、高拓生の意氣軒昂を示した。長男エリアスが農場兼商業の總支配人、長女ビオレツタも既婚、以下は勉学中で、三男六女の子福者、パレンチンスに豪荘な住宅を建て晩年は安樂に暮している。大正二年十一月二十六日丑年生。

令嬢結婚式のスナツプ、右端中井氏、次が令嬢

パラー州アレンケール市

TAMOTSU IWASAKA
Rua Lauro Sodré
Alenquer, — E. de Pará

岩坂　保氏

原籍　福岡縣大牟田市京町
渡伯　昭和三十年一月　ぶらじる丸

　生地は熊本縣玉名郡大原村、現在の南關町東豊永で終戰後復員して、大牟田市で海産物問屋を營業、大牟田市から渡伯旅券を申請したので、福岡縣出身者となつている。一般に商才に乏しい肥後人に似合わず、敏腕な商才にたけ、生き馬の眼を抜く阪神の商人に負けない敏感さがあり、大陸的ノロマなアマゾン商人など、すぐに追越されて、到頭十年間で、三四十年も先輩の邦人商人は勿論、生え抜きのブラジル人も征服、アレンケール市一流仲買商人にのしあがつた。滿四十八才、この四十代の不惑の年齢で今が一番油の乘きり盛り精極性も旺盛だが、一方思慮分別もあり、冒險を愼む節度も充分でぐん／＼飛躍している。著者の見た處、アマゾン戰後派移民商人として、マナオスの井上正五・羽田重吉、ベレーン市鳥川文次郎に彼を交えて、これが四天王であろう。

　大東亞戰爭に出征し、航空軍令部附で五カ年兵役の義務をはたし、終戰は東京の吉祥寺であつた。歸鄉して軈て海産物卸問屋を始め、關西から九州、四國に販路を求め、軈て北海道方面の海産物を仕入れ、電話一本で取引、購入・支拂は銀行の手形一つで賄うまで信用をとつた。アマゾン移住の話をきき、恰度問屋業も、限界にきており、一度海外で海産物の卸問屋をやつたらと考え、遂にアマゾンに移住した。だから最初から彼は農業をやるつもりでなかつた。ベルテーラ・ゴム園に入植してもベレーン市郊外や、コツケイロ植民地、トメアスー植民地などを視察した。そして商取引の研究を怠たらなかつた。

　八カ月の後に、人に薦められてアレンケール市郊外の農場に移つたが、これもすぐ退植し、熊本縣人先輩池上欣二商會に入社して商取引見習半年、漸く伯語も片言交りに出來たので、自信を得て獨立した。日本の商取引から見れば、小兒を扱うようなもので、晝寢をしている氣持で安樂に取引が出來、別に値段の猛烈なセリ合もなく、ぐん／＼發展、本當に彗星的に飛躍した。著者が感心するのは、每朝午前五時には、必ず自轉車を驅つて港に行き、船着場に横づけしてある貨物商船にその日の相場、或いは取引商人との交渉などをする事である。伯人はこれを絶對せず、池上先輩ですら「それほどまでしなくても」と云つて朝寢である。この日本式勤勉、しかも敏感な商才は遂に市内一流の商人になり、遠く一千粁離れにマナウス、パレンチンス、ベレーン市までも取引範圍を擴張した。農産物仲買業からいまや魚粉肥料の加工々場經營まで目論んでいる。カスタニヤ農場、牧場、住宅、貸家等彼の不動産成金は物凄い。母かと八十才も渡伯健在（明治十七年生）田鶴子夫人は、彼に勝る商魂たくましい女性で、ニコッと笑えば商談ＯＫという愛嬌万福は鬼に金棒である。長男義之、二男万里、長女エレーナ、三女ルリーも健在である大正六年十一月十八日巳年生。

　寫眞は取引の豹皮を背景に一家七人仲よく

アマゾナス州パレンチンス市

川上顕二氏

原籍　東京都世田谷町
渡伯　昭和十一年四月　らぷらた丸

KENJI KAWAKAMI
Parentins – E. de Amazonas

高拓第六回生でベレーン市貿易商の高島将元や、牧牛一千頭の大農場主佐脇忠などと一緒に渡伯した。同級生は十一人であつた。第六回生は四十五・六人いたが、上塚所長が、結婚しなければ渡航は許さないという処から、妻帯難で皆中止した。彼は父が軍人で社會的信用もあり、裕富であつたから、滿十九才の学生（東京小山台高校）上りであつたが、美貌明眸の賞子夫人を娶り、船上の人となつた。今から考えるとお雛さん夫婦で、アマゾンに行つて今後どうして生活してゆくかと云う事も考えず、船中は洋行氣分、晴れやかな初旅であつた。

その初旅氣分が、アンジラ植民地に入植しても續いた。ご飯の炊方も料理の方もママゴト式であつた。全く夢のようで、あの密林伐採の焼跡で、百姓の經驗のないこの十代夫婦が、汗みどろになつて健斗したのだから偉かつた。二回・三回の先輩若夫婦組の中には、もう辛抱出來なくて兩親に船賃を送金してもらつて歸國した者もいた。彼は勤儉實直の父をもつていたので、そんな女々しい事は云えなかつた。到頭二年半頑張つて、アマゾニヤ産業ＫＫアンジア營業部に職員として勤務した。軈てマウエス出張所勤務に轉じ、一九四一年日米戦争前はビラアマゾニア本部詰であつた。几帳面な性格で計算などは一寸でも違うとそれが氣になるので、事務家としては最適任者であつた。

大戦勃發でビラ・アマゾニアから退散、同級生佐脇忠と一緒にアレンケール市郊外で共同農場經營三カ年、そして獨立して七カ年、合計十カ年、ジュート栽培に邁進した。辻合資會社が戦後復活再建したので、先輩辻小太郎の招聘で、大獄一等と共にサンタレーン市で二カ年、軈てパレチンス市に移り、辻經營のジュート壓搾工場に三カ年勤務した。この當時北パラナ在住邦人珈琲園の大物等が、南米銀行とタイアツプしてパラナグワ港にプロツトール倉庫會社を創立し、その支配人に高拓出身の九十九利雄が招聘されたので、彼も九十九利雄に大いに勸誘されたが、辻先輩に義理たてして、その榮轉を拒つた。もし赴任していたら、今頃は九十九專務理事の片腕となり、パラナグワ支店長か、サンパウロ支店長に榮轉していただろう。

一九六一年辻合資會社を辭職、伯人カルゾード經營のジュー購買人として活躍、間もなくカツサパーバ製麻會社に入社、パレンチン支店長に推選された。同會社專務は高拓出身の岸田好明、彼を推選したのは高拓生の故御園福衛であつたので、仕事は案外スムースに行つた。賞子夫人は明朗聰明な女性、日曜日ともなれば訪問客夥しいが、多忙の間に歡待する度量さがある夫婦とも讀書家で、麻雀も趣味の一つ、長男隆志（ベレーン市マルチン・メーロ商會勤務）二男和志（ベレーン市銀行員）長女修子（みち子・ベレーン市經濟大学在学）も健在である。大正六年十月二十九日己年生。

寫真は仲睦まじい川上家

アマゾナス州パレンチンス市

SOC. SÃO JOAQUIM
Parentins
Est. de Amazonas

山崎太郎氏
原籍　東京都向島寺島町

戸口恒治氏
原籍　埼玉縣比企郡都幾川村

安井宇宙氏
原籍　東京都千代田區本郷淺嘉町
渡伯　三人とも昭和九年四月　ぶえのす丸

戦時中イーリャ・オンサで黄麻栽培していた高拓生平石定吉・藤島正徳・宮地茂・山崎太郎・薬師寺光雄・石黒粂吉・安井宇宙・戸口政治のうち、高拓第四回生の山崎・薬師寺・宇宙・戸口の四人が、大戦勃發後にサン・ジョアキンに移つてここで大々的にジュート栽培を始めた。その内に儲けたので、山崎太郎が小舟を購入し、船で行商を始めた。初めこの連中のことを通稱「サン・ジョアキン組」と稱している。共に第四回生の異才である人達だ。

安井宇宙は日本女子大学教授安井哲女史の甥である。父は海軍々人で、彼が千葉縣長生中学（舊制）時代は、学校の教師をしていた。高拓に入りパレンチンスに入植、三カ年荒山生活、ウリクリツーバを振り出しにジュート栽培數年、サン・ジョアキンの同級生と意氣投合して商賣を始めた。一九五八年十一月、新潟縣出身庭山信子を呼寄せ、現在アオパ・ウミエ・アユミの三女が出生した。大正六年一月二十五日生。

戸口恒治は埼玉縣の山嶽地帯に生れ小学校時代から通学に辛抱した猛者で、その質實剛健が今日の地位をきづいた。松山中学校（舊制）を卒業後、高拓に入り渡伯、ワイクラツパ植民地の農業生活三年、ビラの本部に戻つて會社の會計係三年そして大戦勃發でジュート栽培に挺身した。流轉の獨身生活は長く、安井・山崎と同じく晩婚、モンテ・アレグレ植民地宮崎縣人恒松芳雄長女久子と結婚、長男信之、二男ソニー健在、長女恒子は三才で河に落ちて逝去した。大正三年七月五日生。

山崎太郎の父は高知縣中村の出身、彼は東京で生れた、舊制中学卒業後高拓に入学、すぐアマゾンに移住、ワイクラツパ一年、マナウス市一年庭園師（中島敏三と隣）イリヤオンサ黄麻栽培三年、サン・ジョアキンに移轉して四人共營事業、小舟で行商十年、一九六二年カリズモ號（百二十トン）を購入して大々的に農産物の仲買を始めた。上流まで片道四十五日、年五回の往復しか出來ない。三人で三〇〇頭の牛も所有している。一九五七年武富テル子と結婚した。共營者戸口恒大正五年二月十一日生。

上左カリズモ號、下は戸口恒治夫婦

ZEN-NOSUKE SHOJI

Parentins – E. de Amazonas

アマゾナス州パンレチンス市

東海林 善之助 氏

原籍　宮城縣仙台市一通町

渡伯　昭和十二年五月　もんてびでお丸

彼が高等拓殖学校を卒業した昭和十二年度は、滿州の風雲は急をつげた。錦州省を越え北支那に越境した日本軍隊と、支那軍閥との衝突がたえまなかつた。上海でも同じで駐屯軍の増援をはかつた、こうした折でブラジルに渡航する者はいなくなり、高拓生アマゾン移住者第七回は僅かに四夫婦しかなかつた。これが高拓生アマゾニヤ産業研究所に入植した最後で、この次に昭和十四年一月のりおでじやねいろ丸で多くの花嫁連中が呼寄せられたに過ぎなかつた。

彼の同航者四夫婦のなかで、村上一郎は故人となりことめ夫人は再婚して石黒条吉夫人におさまり、九岡東はジュルチーに在住、なか子夫人は死亡、今井正彦はとみ夫人と共に夫婦とも逝去した。佛教で榮枯盛衰、生者必滅、會者定離と云うが同航海の四夫婦のなか、三家族の劇的不幸は余りに早かつた。夫婦して健在なのは彼等の家庭のみであるが、著者は東海林家の幸福を祈つて止まない。

父久三郎、母ちよの両親の末子に生れ、いづれ獨立分家しなければならない運命にあつた。宮城縣センダン中学校（旧制）を卒業して高拓に入学した。中学校は佛教の学校で、同校の卒業生先輩に神宮良範が聖市サン・ジョアキン街に住んでいる。彼はこの学校から高拓に移り、卒業してともよ夫人と結婚、すぐアマゾンに渡航、アンヂラ植民地に入植した。彼が入植した年に始めてジュートが商品となり、同年四月十四日六十俵（二・二七七〇瓩）をベレーン市のマルチン・チオルジ商會に賣却し、全植民は多年苦心の收穫をよろこび、凱歌をあげていた。そして高台に頑張つていた連中も同年六月ジュートに轉向する者二十九家族に及びアマゾン大江の島と、對岸のエステーボ、サン・ビセンテ、サン・マノエス、サンタ・ローザに分散し耕地を開墾した。彼も渡伯最初から、アンジラ植民地のラーモスでジュート栽培を始めた。彼は高台でグワラナやカスタニヤ、カカオの永年作物の栽培の經驗を知らなかつた。爾來今日まで二十八年間、黄麻栽培に從事してきた。現在はパレリンニヤ地方に耕地を經營し、子供の教育のため、パレンチンス市に住宅を構え、とも子夫人と子供はそこで起居している。

長女みち子は青森縣人森明雄と結婚した。森青年は多年黄麻栽培に協力したが、一九六四年度ベレーン市に進出した。夫婦の間に孫一人が出生した。長男義和（よしかず）は早逝、二女よし子は自宅、二男善之はサンパウロ州プ・プルデンテ市にめる農業高校に在学している。日系二世の秀才溝口校長は滿州開拓の加藤完治校長や、安城農林学校農聖山崎延吉校長などと同じく得がだき教師である。この下で訓練する事はよろこばしい三女メリー、四女ナイジー、三男フエルナンドも健在である。大正三年十二月十日寅年生。

アマゾナス州パレンチンス市

小野三郎氏

原籍　福岡縣福岡市古門町
渡伯　昭和八年四月　もんてびでお丸

SABURO ONO
Parentins – E. de Amazonas

十一月三日生と云えば、明治天皇と誕生日は同じで戦前の明治節、今日の「文化の日」である。彼の生れた日は親爺は大いに悦こんだそうだ。高拓生随一のバンカラで、満五十才を過ぎた今日でも、二十代の学生時代の氣風を失わず、無欲舌淡、義侠に富み、友情厚く、血もあり、涙ある情味横溢の拓人である。もうブラジルでも彼のようなタイプの人物が少なくなつた。アマゾンでも、彼が最後の人物ではないかと思う。

母校（修猷館）の先輩頭山満（黒竜會總裁）廣田弘毅（首相）緒方竹虎（民主黨總裁）中野正剛（東方會總裁）等を私淑しているがそれ等の流れをくんで、清廉潔白、嘘をつかない。アマゾンを訪づれ、パレンチンに立寄つた名士ば泉靖一（東大教授）牧画伯、内田重雄（熱帯植物学の權威）を始め数十人の世話をやいた。特にインヂオ研究に趣味があり、邦人の案内役をつとめた事が多い

高拓生出身の黄麻栽培者や、農産物仲買業者は、主としてアマゾン大江沿岸に住んでいるので、子供の教育は小学校一年生から都會パレンチンスに下宿させている。五・六人も多勢の子供のおる人は費用が重むので、高拓生が主唱して、パレンチンス市に日伯會館を建て、それに附属して寄宿舎を建てた。この舎監を八年間無報酬で奉仕したのが保代夫人であつた。彼は昭和八年の渡伯、夫人は四年おくれて昭和十二年の呼寄せ、七回生と一緒に渡伯した。夫人はこの舎監八年間の激務で遂に健康を害した。炊事を始め掃除、洗濯等一切の監督で、心身とみに疲れた。夫人がこうした犠牲的精神に富んだのも、社會奉仕の彼の精神主義に追随したからである。

彼は實にパレンチンスを愛している。アマゾニヤ産業研究所出身者（高拓生）は、個人として中島敏三・木村一則・佐脇忠中井憲明・池上欣二・九十九利雄・岸田好明等以下大成功者がいるが、その出身地パレンチンスの故郷が他人の手に渡つてしまつた。南拓KKはカカオ事業で失敗したが胡椒栽培によつてトメアスー植民地が残り、世界一の胡椒栽培の模範植民地が誕生した。處が高拓生の方は苦心して發見したジュータは、アマゾンの特産物として繁榮したが、その發祥の地パレンチンスは悲しいかな他人の手中になつた。彼は曰く「苦斗した發祥の地を失つたのは、ユダヤ人が二千年間祖國を失つたのと同じで悲しいですよ。なんとかしてパレンチンスを取戻したいですね—」と郷愁をもらしている。二千年間祖國を失つたユダヤ人の悲哀と同じ氣持をいだいているのが彼である。物質主義にこらず死ぬまで精神主義に生きる拓人であろう。

従姉妹に歌手淡谷のり子がいる。長男重善（ジュゼン）は移住事業團に勤務、長女エレーナは高村正壽家を嗣ぎ、二女エルバ（師範在学）二男亜保（つぎやす）三女エロイーザ等健在である。大正二年十一月三日丑年生。

寫真はアマゾンの異才小野夫妻

HIDEOMI OKADA

Parentins - Amazonas

アマゾナス州パレンチンス市

岡田秀臣氏

原籍　山口縣玖珂郡由宇町

渡伯　昭和五年六月　さんとす丸

パレンチンス市から、マウエス方面で、歯科醫岡田の名を知らぬ伯人は少いだろう。それ程中流アマゾン地域で有名である。それも同地方に三十五年も在住しているからである。

父斉（いつき）、母えい両親の長男に生れた。父は醫師であつたが、父業を嗣ぐのがいやでならなかつたそれではせめて歯科醫でもと、中学時代からスパルタ教育をうけるべく、伯父の宅から愛知一中に通つた。校長日比野寛はマラソンで有名、また當時野球でも全國で名聲があつた。大正八年東京歯科専門学校（今日の東京歯科醫大）を卒業した。當時歯科の学校は日本歯科と二のあるきりであつた。最初横濱市で開業し、大いに評判をとつて儲けたので東京に進出し、淀橋で開業した。當時の淀橋は町はづれで貧乏人ばかり、月給袋がはいると、皆銀座や日本橋の歯醫者に通うものばかりで金のない者が診察にきた。これで開業場所を誤つたので思案している處え、アマゾン開拓の話が出た。

アマゾン興業株式會社の株主となれば、無償で土地十五ヘクタール分譲、開墾は土人にやらせ、グワラナーの特産物は他の地方に育成せずマウエス郡の獨舞台だときかされた。そのうえもし彼が入植すれば歯科醫として會社専属醫となり、數百家族の人は全部お客さん、それにマウエス町に歯科醫はいないと聞かされ、二十株購入して株主となつた。愛子夫人（京都女学校卒業、東京聖路加病院看護婦学校第一回卒業生）もよろこんで勇躍入植した。一千家族位入植する豫算の植民地は、入植早々發起人の常務取締役大石小作が辭職、そのため植民地の運營は混乱、會社は資本が缺乏し、軈て澤柳猛雄専務は視察の上歸朝し遂に會社は倒産した。移民は頼る人もなく、四散し、無一文の人々は土人化したり、まるで棄民に等しいように憐れであつた

アマゾンに理想郷をと樂しんで渡伯した彼も、槿花一朝の夢と化した。農場に入植したが農業の經驗がないので、附近の患者を診察して治療している内に、郡長より特別の許可が出てマウエス町に出て開業した。爾來二十有余年開業し、一九五八年神田雷藏博士が歸國したので、その住宅を購入し、パレンチンスに出て開業している。彼は趣味として繪画の特技を有し、キリスト教の聖画は素人ばなれがしている。不幸愛子夫人に逝かれたが、一九六〇年名古屋市出身の現すみ子夫人と結婚した。長女カナルはマウナオ市で学校教師、長男天村（アマゾン）は聖州で稅關勤務、二女滿壽江はベレーン歯大卒業後自宅開業、三女文子も技巧士で自宅で助手、二男フランシスコ、三男オダシ（高校）四男オルランド（高校）現夫人との間に生れた五男ウイルソン、六男マリオ等實に岡田家は繁榮した。マウエス入植者のうちで農業で岩間敬造、文化人で岡田秀臣この両人が名を成した。切に彼の長壽を祈る。明治二十九年五月十三日申年生

右は馬上の岡田氏、右は夫妻と二令嬢と二幼兒

ISSOKU KIMURA

Parentins – E. de Amazonas

アマゾナス州パレンチンス市

木村一則氏

原籍　熊本縣玉名郡横島村
渡伯　昭和六年六月　さんとす丸

彼の生地横島村からは、二人の鬼才をブラジルに送つた。南伯ではサンパウロ日本文化協會長中尾熊喜がその一人である。中尾は十六才で渡伯、二カ年後には獨学で葡語の教師をやり、間もなく「葡文手紙の書方」の名著を著し、昭和四年若冠二十六才で下元健吉等高知縣組と語い、コチア産業組合を創立し、斯界の第一人者になつた。山本農学博士の死後推されて、文化協會長になつた實力ナンバーワンである。北伯ではアマゾンに木村一則がその一人である。中学卒業後熊本醫大志望を變更して、上塚司の校長のもとでアマゾン学を研究、昭和六年第一回卒業生としてパレンチンスに入植、その草分開拓の苦心は筆舌に盡しがたつた。

間もなく獨立して学友と別れ、サン・ジユーゼー、カブリツト牧場に入り、ジユート栽培に挺身早くも當地方の有力者伯人耕主の令嬢アデライルと結婚した。高拓生國際結婚のトツプであつた。その後數奇の運命を辿つたが、肥後人に似合わない商才があるのと、働くことが無上の趣味と言う努力が實り、戰時中にジユート栽培の地盤をきづき、しかも巨利を博した金で牧場經營に進み、彼特獨な人生方針をとつた。終戰後の平和産業の波にのり、戰後十年目には、ジユート年産四百屯、五千ヘクタールの土地に四百頭の放牛、カカオ三千本を植えた。そして製氷會社を創設し、パレンチンス市唯一の業者なので、利潤は多きかつた。

今度十年目に面會したが、あれからグワラナー飲料水製造工場を建設、飲料水で儲け、パレンチンス市で、州政府統制下の唯一の珈琲配給問屋の權利を獲得。獨歩の巨利を拍している。武富一家と共同で、雜貨卸小賣を開業、砂糖・鹽・米等の雜穀から石油等に至るまで、相場の變動で物凄く儲けた。一九六五年度から、パレンチンス市に映画館を建て、この方面でも市民をアツト言わしめた。

長男アルベルトは学校卒業後に、農場管理をなしていたが、地方選擧の時に市會議員に當選し、政界にも進出した。アマゾニア州で最初の日系市會議員であつた。長男が政界に足を踏み入れたので、彼の事業も各方面に信用を增した。高拓生で奥アマゾンでは中島敏三（第一回）がナンバーワンであるが、中部アマゾンでは彼がトツプにたつている。共に高拓第一回卒業生であるのも面白い。昭和廿八年呼寄せた弟久則も、ベレーン郊外コツケイロ植民地で堂々たる農場主になつた。

彼は將來ベレーン市郊外で事業をやりたいと念願している。ベレーンはアマゾン大江の都であるし、この都で大成すれば思い殘すことはないだろう。切に勉年の事業として、もう一奮發せん事を著者も期待する。三男四女の子女も成長して幸福にくらしている。明治四十三年一月一日戌年生。

寫眞は對岸の農場を見る木村氏

アマゾナス州ウリクリツーバ郡

内藤菊次郎氏

原籍　新潟縣三島郡越路町飯塚
渡伯　昭和十年五月　りおでじやねいろ丸

KIKUJIRO NAITO
Rua Joaquim Sarmento, 406
Manaus — E. de Amazonas

高拓第五回生の快男子で、十年前は第一回生の佐藤行夫と共同で、黄麻仲買に大活躍していた。現在は共同事業をやめて、専ら獨立事業に邁進しているが、最近ウリクリツーバ町に、黄麻壓搾工場が設立されるときいている。この工場が完成されれば、ウリクリツーバ附近の黄麻栽培者は、非常に便利となり、その附近で商取引していた彼の境遇も、一段と飛躍するだろう。

十年前に面會した時から既に子供の教育に熱心で、わざ〲マナウス市に妻子全部を住まわせ、学校に通わしていたが、到頭長男は高校卒業後、サンパウロ法大に轉じ、齋藤博志經濟学博士のよき指導によつて、立派な社會人となるだろう。二男は海軍兵学校に入学した。海軍兵学校は戰前日本の江田島でもそうだつたが、秀才中の秀才でなくては入学出來ない学校で、その上に家柄を尊んだ。外國移民の二世など入学不可能と云う不文律があつたが、不思議に彼の子供は入学した。成績がズバ抜けて成良なのに、驚ろいてパスさせたのだろう。長女、二女以下多くの子女が立派に成長し高等教育をうけている。これは彼の教育方針がよかつたばかりでなく、キヨ夫人の家庭教育がよかつたためであろう。渡伯した時は若冠滿十九才の冒險青年であつた。金儲の氣持など微塵もなく、大アマゾンに我が理想郷をつくる事のみで、彼の希望は實にロマンチックであつた。

入植してみると、肉体的艱難がつづき、軈て長男、二男が生れると生活と云うことを考え出した。それでも高台に頑張り、同志五家族で高台エスペランサ區に立籠つていた。軈て第五回生の高橋亥年生（二回生で五回生と同航）内藤要造・小田弘紀（死亡）と共に、四人協同でパレンチンス郡で二カ年奮斗し、のち現地に定着した。ウリクリツーバ町近郊で、イタリー人經營の農場と商店を一年廿四コントで借りうけ、後に二百四十コントスで買收した。カスタニヤ・カカオ・ゴムを栽培し、農場として永年作物を栽培した点、彼の長期戰を賞したい。現地に定着して既に二十余年、しかも昔しの同志高橋・内藤・小田未亡人も頑張つているのは偉らい。十年前もアウローラ號で尋ねたが、今回もアウローラ號で現地を訪づれた。往年の事業より物凄くのび、そして日本から呼寄せた甥が全農場を管理してくれ、その上取引上のコツもおぼえ、彼は孤軍奮斗の重荷がおりた。

讀書、酒、麻雀と多趣味だが、そのうちで本當の趣味は、黄麻事業であろう。高拓生は實に仲睦まじい。この間彼を中心に佐藤行夫・中井憲明・小野三郎・尾山多門・森進一郎・森源吾川上顯二等十余名と二週間飲み明したが、やはり十八・九才の中学時代に還つたような氣がした。永遠の若人彼の健康を祝したい。大正六年十一月十四日巳年生。

上農場、下は佐藤・小野・中井・高橋諸氏を圍み住宅前で。

アマゾニヤ州パレンチンス市

南　政　氏

MASASHI MINAMI
Parentins - Amazonas

原籍　熊本縣上益城郡三船町
渡伯　昭和七年四月　りおでじやねいろ丸

謹厳居士の彼が、ジュート黄麻仲買商人となり、その他アマゾン奥地にとれる農産物や、鰐、蛇、豹などの皮の賣買をやつているのだから、アマゾンは大陸的だし、天國である。と云うのは、彼は旧制三船中学を卒業後、二カ年教壇にたつた。教員タイプの人物でこれは天職でわなかつたかと思う。とみ子夫人も、やや彼と同じタイプである。彼は高拓第二回生で昭和七年渡伯、夫人は彼におくれること四年後の、昭和十一年七月らぷらた丸で、上塚司所長や神戸商大学長田崎博士などと、一緒に渡航した。

彼の同窓二回生は一般に温厚な人が多く　三十余年後も事業家として名をなした人が少ない。第一回生は向意氣の荒い人物ばかりであつたから成功者が多い。例えば剣道二段の中島敏三、佐藤行夫を始め木村一則・飯田義平・岸田好明・熊谷忠、御園福衛・秋山桃水・矢野武雄など多士才々だ。それから後の第三回生は本間武四郎・中井憲明・山口昌・池上欣二・佐々木一哲・西村武藏・佐藤四郎・小野三郎など一國一城の主となつて社會で活躍している。それに比較して二回生は獨立し大事業をやつている者がなく、皆温厚でサラリーマン型が多い。尾崎竜夫・東久一・宮島靖彦・吉田泰正等以下似たりよつたりだ。第二回生は七十八名の就学者中、渡伯したのは五十三名、アマゾン大江で獨立して事業をしているのは、小林増美・西榮健二郎・加藤清勝・瀧田吉一・田邊博と彼の六人で、そのトップが彼である。

高拓を卒業して、アンジラ模範植民地に入植した。各區班に別れて開拓し、彼も區長に推選され、軈て小学校の開設により國語・算術の教師をした事もあつた。アマゾニア産業KKに改組され、ビラ・アマゾナスの本部會計は九十九利雄、アンチラ植民地の會計が南政であつた。軈て本部の會計係一年、轉じて商事部に勤務イタコチアラ支店開設のとき、支店長となり助手に玉井豊幸（現ペルナンブッコ州）が登用された。アマゾニヤ産業KK創立で、日本から製麻會社建築の準備（詳しくは本編参照）もされていたが、惜しくも大戰勃發で中止、彼はサラクラに入植し、二回生の星原貞治（溺死）と共同事業一年の後にパウラ區に移り三年、そして現地に移つた。現地（現在は山口夫人在住）の近くで佐藤行夫一回生も頑張つた。彼は現地に十八カ年在住遂に奈良の大佛のように不動の姿勢をとつたお陰で大成した。第一回戰後移民がアマゾンにきたときは、移住者を引受けた一人で、そのうち成功者羽田重吉が輩出した。

家庭は美貌の娘さんばかり四人で内一人死亡、長女セミーラ光子は学窓を巣立つて現在自宅、二女マリーザ明子はマナウス市で勉学中、三女ミルテス美子は十才で早逝、四女カルマレツタ理惠子はマナウス市高商在学、一九六二年呼寄せた甥南和利も健在である。明治四十年十一月三日未年生。

南夫妻と甥、和利君

流、支流と云つても延長三千二百四十粁（根室・鹿兒島間二千五百粁）もあり、ここの産物が河口の彼の港に全部集中される資本のない間は指を啣えて眺めていたが、大資本が出來たら「鬼に金棒」思う存分に買占めて巨利を博した。第三條件は私生活が放逸でなかつた。在伯同胞で大金持になると、氣のゆるみも出るし、建設當時の苦心惨たんが長かつたので、その慰安と言う意味で、儲けた金を慰安の方に投資するのが一般の習わしである。高級自動車や高級住宅はまあこれは高尚な娯樂趣味でいいが、次に別莊・別莊も空家でこまるから、女留守番をおく即ちお妾さん、そうなると飛行機で國際見物、やれ料亭遊びとなつて、事業は本腰を入れられないこうした成上り的氣分が二人にないのが彼等の家庭的美点である。そう言えば中島ゆき子夫人は年も若くて稀にみる美人である。（ゆき子夫人は杉山義見長女である）杉山菊江夫人は物故した先夫人の實妹で、わざわざ日本から呼寄せた女性で、實に賢夫人の譽がたかい。それに驚ろいた事に杉山義見も若々しいが、菊江夫人がまた十五・六才以上若く見える美貌の女性である。若々しい上に賢夫人、しかも内助の功多く、この祕訣があれば、両人とも浮氣をしないのは當然である。

中島敏三氏家族

　事業に對する両人の眞劍な態度には新移住者が驚ろくし、また敬服している。私生活も嚴格で、毎朝起床五時、熱帶のこととて午睡をして健康に留意している。十年前に約二週間も彼の宅に起居したが、その眞摯な私生活、あくなき事業への努力に感心させられた。大成功した現在も、第一線に起ち商取引の監督に當つている。中島敏三は父百之助、母ゑい子その二男で兄周作は川崎市會議員も就任した。彼は橋本農学校卒業後、劍道三段で將來劍道師範（高野茂義範士・齋村五郎範士の弟子）を志したが、高拓に入り遂にアマゾンに移住した。パレンチンに入植、三年後に泰子夫人を日本から呼寄せ、マナオス市で庭園師として獨立、漸く伯國事情に通じたので、シボレーナ島で野菜栽培（ソロモン河で現在飯野・田中在住）マラリヤで夫人逝去、前記クルマ島で儲けて一九三九年四十ヘクタールの黄麻栽培をやつて、一擧にのしあがつた。長男はベレーン農大出のインテリ、二男も同じ、長女エスパーナ、二女エリーナ、三男シエウソンで健在だ。明治四十四年三月八日生。

　杉山義見は三木本農学校卒業、釧路軍馬養成所勤務四年、札幌市相馬農場に轉勤、そこで八重野松男の薦めで南拓會社の土地に移住、モンテ・アレグレを經て、マナオスの對岸で野菜栽培四年、これで資本二コントスを貯め、クルマー島で黄麻栽培盟友中島敏三と共同事業を始め、遂に奥アマゾン一の大事業家になつた。二女みゑ子、長男武美、三女エウーザ、四女カルーミ二男レオナルド、四女ルシーラ年健在である。

杉山義見ー明治三十六年一月三日生。

アマゾナス州マナオス市

中島敏三氏

原籍　神奈川縣川崎市垣生
渡伯　昭和六年六月　さんとす丸

杉山義見氏

原籍　青森縣三本木市赤沼
渡伯　昭和五年十二月　さんとす丸

TOSHIZO NAKAJIMA
YOSHIMI SUGUIYAMA
Rua Lima Bacry, 255
Manaus E. de Amazonas

アマゾナス黄麻事業界の王者中島敏三が、三十三年振りで訪日すると云うので、マナウス飛行場で見送つたが、十年前に面會したときと少しも變らず、三十代の壯健さがあり、事業慾旺盛な斗志が、全身に溢れていた。衰えを知らないこの拓人は、大学出身の長男エドワルド、二男ロベルトの協力によつて、益々事業は大飛躍し、しかも相談役の杉山義見が、これまた四十代の壯者を凌ぐ元氣横溢さがあるから、中島・杉山両氏經營の「日の出商會」は泰山の安きにあるようだ。

三十年前の中島敏三はマナオスで庭園師の貧乏世帯、杉山義見は南拓のモンテ・アレグレ植民地で棉花試作時代でどん底時代、二十年前はタルマ島で十一ヘクタールのジュート栽培で十六屯を收穫しその勢で四十ヘクタールに擴張して儲けた金で、アデイラ河口に一軒六百米の場所を購入して「日の出商會」を開いた。もうこの頃は中島・杉山共營に挺身していた。十年前はアマゾン大江で、ジュート仲買人の仲間入りが出來て信用がつき、取引量年間一万屯、商取引金額一万コントス、資産八千コントスと稱されていた。十年目ごとに事業は順風滿帆で伸びてきたが、最近の事業膨張は物凄く、商取引金額は數百万コントス、資産も數十万コントスになつた。正確な數字を書けないのは、毎月〱に資産が余りに増大してゆくし商取引額も相場が昂騰していくから評價はむづかしい。兎に角、全アマゾン在留邦人中ナンバーワンであろう。

両人とも成功した鍵はチャンスを生かした事、商取引の場所の撰定がよかつた事、最後に事業熱心で、私生活が放逸でなかつたこと、この三点につきる。ブラジル有數の豪商伯人が、始めて邦人のジユートを買占るのに中島敏三と芦澤正芳にその買付を頼んだ始めての事で二人とも儲けたし、豪商は尚さらボロかつた。

杉山義見氏家族

當時二百コントス前後の利潤が二人にあつたが、中島はその金を有利に動かし、商賣を伸した。二度とこない絶好のチャンスを逃さず、鯉が瀧を昇るように、ぐん〱と飛躍した。同じ高拓生の芦澤は、中島以上に葡語も精通、しかも商才にたけていたが中島・杉山商會以上に飛躍しなかつた。最初のあのチャンスを思切つて生かした彼はやはり偉大なる商人になれる資格があつた。第二條件は場所の選定であつた。現在の「日の出商會」のあるマデイラ河口は、アマゾン本流、マデイラ支流の交流点で、交通の頻繁な絶好の場所であつた。特にマデイラ支流は鰐やその他の動物の棲息地帶として、アマゾン大流中第一の支

JUKICHI HADA
Praça Chilo, 497
Manaus E. de Amazonas

アマゾナス州マナウス市

羽田重吉氏

原籍　新潟縣北蒲原郡水原村
渡伯　昭和二十八年二月　さんとす丸

戰後派アマゾン移民一千家族の中で、商人として名を成したトツプクラスは、ベレーン市島川文太郎、アレンケールの岩坂強、マナオス市の井上正五、羽田重吉これが四天王である。彼は事業が堅實であり、なか〳〵社交家で、敵をつくらない。恭子夫人がまた夫以上に愛嬌があり親切で、しかも義理堅いから、先輩仲間に評判がよくなり、そのため事業が有利に轉廻していく。いまカスタニヤ（パラー栗）製油工場を經營しているが、脱皮はピメンタや野菜に必要缺くべからざるもの、油は石鹼製造に必要その上血粉飼料にも使い、食料油混合油などその用途は廣い。この製油工場經營で得た彼の知識は、アマゾナス州で肥料工場を經營することに着眼した。

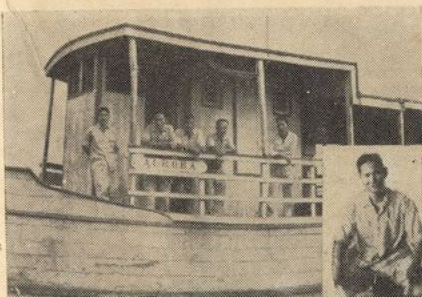
アマゾナス州の肥料は遠くサンパウロ州製造のものを輸送してくるので實に遠距離なため運賃にくわれて、高價なものとなる。處がアマゾン大流には肥料の原料になる魚類は豊富である。乾燥期など、琵琶湖より大きい湖が乾いて、そこに何万屯の魚が干乾にされて腐つている。これを死しないうちに採つて、搾つたら。油も賣れるし、糟は肥料になる。原料の魚は無料、ただ工賃だけで濟む。彼はソロモンエス河（アマゾン本流マウエスから上流の名）のブルスー河支流交流点にあるコワリー町に工場計画中である。いまだ誰も手をつけていないこの肥料工場完成の曉は、その商品の販路はアマゾナス州、パラー州　マラニオン州以下北伯六・七州に及び、躍進また前進で大事業になるだろう。

彼は昭和十三年、若冠二十才で日支事變に呼寄され出征、滿州の曠野に轉戰、ノモンハンの激戰で、硝煙彈雨の下をくぐつた。大東亞戰に引つづき參加、機械部隊に編入され佛印から、ジャバ島に渡り、終戰はビルマ戰線であつた。實に滿十年慘酷な血なまぐさい生活をつづけ、殺漠な空氣にとざされた。實兄は戰死、この遺族を復員後十年間面倒を見てやつた。三男坊のため、日本にいても分家するつもりでいたので、ブラジル移民募集には、第一回に應募、ジユート移民として草分移民十八家族と共に、アマゾンに移住した。愛妻恭子と構成家族に羽田恭平（權田倉吉女婿）を連れ、家族は三人で、南政耕地の黄麻栽培に從事した。同年は三十年來のアマゾン大洪水で、胸まで河に漬かつて黄麻洗滌作業をし、鰐、水蛇、ピランヤ猛魚、電氣ウナギに怯えながら奮斗した。耕主南政は稀に見る人格者、二カ年就勞後に彼とも相談し、マナウス市對岸シボレーナで野菜栽培二カ年、次にマナウス市公設卸市場で、野菜卸小賣三年、マナウスの事情が解つたので雜貨店を開き、一九六三年カスタニヤ工場を試驗的に一年經營、自信を得たので工場を買收した。伯國生れの信幸・定・孝の三兒も通学している。大正七年十一月二十三日午年生。

YUKIO SATO
Av. Joaquim Nabuco, 2320
Manaus E. de Amazonas

アマゾナス州マナウス市

佐藤行夫氏

原籍　廣島縣福山市東深津町
渡伯　昭和六年六月　さんとす丸

正しいと思つた事は、ボン〳〵と云うし、毒舌にきこえるような寸鉄人をさす敏感さも見うけられるが、性格は至つて生一本である。二十余年商賣をやつているが、やはり同級生（高拓第一回）の木村一則のような商才とシッコさがない。

彼の兄弟は皆剣道の達人であるが、そのうちで彼が一番下手だつたと云うが、それでいて福山中学時代（旧制）昭和四・五年頃京都武徳殿や東京高師主催の全國中等学校剣道大會で、優勝しているし、個人戰でも優勝した。学生時代三段の免許狀をとり、斉村師範を慕つて、國士館に入学した。將來剣道でたつ考えでいたが、國士館内にある拓植部に入り、遂に創立した高拓の第一回卒業生となり、アマゾンに移住した。人間の運命なんというものは、一寸先は闇で、剣道師範を望んでいた彼が、アマゾン大江で、アウローラ號に乗つて商業界で大成するとは、人生の妙味に感動せざるを得ない。

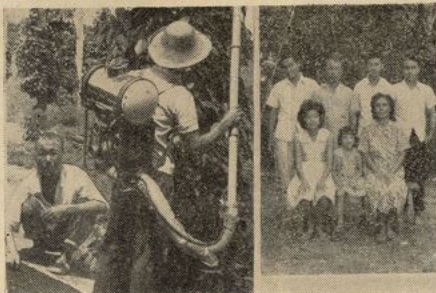
「高拓生史――アマゾニヤ研究所月報」を繙いて讀むと、彼は第一回の御園福衛（死亡）泉桂治、日高正治（死亡）第二回生の南政、第三回の本間武四郎等と共に、ウイクラッパ植民地の建設、アンチラ模範植民地の開墾に敏腕を振つている。第一回生でも木村一則や、中島敏三等が早く退植したので、一回生で大密林開拓に指導的役割をはたしたのは彼と泉桂治、御園福衛であつた。金儲けに走る現代の学生上りと違つて、當時の青年は日本民族として、精神的誇りをもつていたし、アマゾンに日本人の手で、立派な集團移住地が出來上ることのみ念願していた。この氣分が約五年ばかり續いていたのり、高台開拓で無駄飯をくつた。

渡伯三年後にます子夫人が渡伯した。福山高女（旧制）出身で御園良子、山口敏子・越知恒子・等多くの花嫁と一緒で、第四回生と同航で、夫人は腹の底から明け放して物を言う明朗清楚な女性で、彼の清廉潔白とは似た者夫婦であつた。サンタ・ルジアやタッエラ直營農場などで、一文にならん仕事に全霊全身を捧げた。ジュータ栽培の勃興で、底湿地帯に移轉、そして最後にのし上つた場所は現山口論未亡人（敏子）がいる現農場で、絶好の場所に十余年頑張つた。ここで黄麻栽培で儲けて、遂に戰後産業組合の創立に参加、高村正壽、御園福衛などと協力したが、時に利めちず解散、アウローラ號を買收して、内藤菊次郎と共同で黄麻仲買業に十年健斗、軈て共同經營を解散してアウローラ號でガゾリンの各地販賣業に轉身、晩年は悠々自適の内に、巨利が懷にはいつてくるような身分になつた。若い頃から讀書好きな夫婦で毎月新刊書に接し、この方はアマゾンボケしない知識人であり、著者も尊敬している。お利好だつた少年少女のルーチ優子、エンリッケ剛、ヴイトリア雅子、ギレルメ毅、カタリーナ典子、ウルテール仁、リオネール智、バチールス等すつかり成人した。明治四十二年十一月十四日酉年生

RIKITA KANEKO
R. Monsenhor Coutinho, 762
Manaus E. de Amazonas

アマゾナス州マナウス市ベラ・ビスタ植民地

金子力太氏

原籍　福岡縣浮羽郡吉井町江南
渡伯　昭和二十九年八月　あめりか丸

でつぷり太つて、丸味をおびた笑顔、一ぱい盃を傾けると話好きで好々爺に見えるタイプ、根が正直で豪放磊落、明日金がなくてもクヨ／＼しない九州人である。みつ子夫人は終戦から今日まで、二十年間一家を引しめた賢夫人貧乏な台所は彼女のヤリクリで漸く光明がみえ、前途は洋々としてきた。永住の決心で、一九六二年から胡椒も千五百本を栽培した

　彼は日本で本職は指物師、田川郡三菱炭鉱KKや各炭鉱會社に十年勤務し、昭和十八年退職した終戰四日前の八月十一日米軍の大空爆で一家全焼着のみ着のままで終戰を迎えた。腕に職があつたので進駐軍の仕事を請負い、長男肇と二男恒雄も飛行場で働らいた。

　長姉熊谷チシはハワイで働らいて儲げていたし妹婿大森倉太は南伯聖州ドラセーナ町で活躍していた。（現在北パラナ・サン・ペードロ・デ・イバイ町でバール經營）そんなに姉妹が海外の自由な天地で活躍していたので、それに刺激されブラジル渡航を決心した。最初同縣人の成功者鐘ヵ江久之助農場に志願したが、呼寄狀がなか／＼手遲していたので、手取り早いアマゾン移民に應募して、ベラ・ビスタ植民地に入植した。入植してみると、彼の耕地アグア・フリアはまだ山焼も終つたばかりで、山坂の多い道路も、人間の通れる位で完全でなく、雨期に入ると泥沼で交通途絶、そして政府命令のゴム樹も十年先でないと金にならぬとの事であつた。ベラ・ビスタ區入植者は、一ヘクタール籾二・三俵しか收穫せず、瑞穗の國民を落膽させ、そして百家族以上の者が、脱耕して續々ベレーン市郊外へ移住した。大宅壮一が訪づれ、入植當初の混乱をみて「緑の地獄」と稱し、名著「中南米の裏街道を征く」で悪評した。

　二ヵ年辛酸苦勞をなめ、大江沿岸に便利のいヽカカオ地區に移轉し、野菜專門に農場を經營した。野菜專門では彼が元祖である。最初はマナウス市二十万人の住民は、人參、茄子、大根トマテなどを作つても、料理の方法も知らないので需要がなく賣に困つた。軈て料理の方法を知るとトマテの如きは、作つて作つても不足勝ちになつた。熱帶地で甘藍は巻かなかつたが、これも日本人の研究で巻き出し、野菜栽培は邦人の獨占舞台となつた。ここで彼等も一年／＼基礎がきまり、トラクター、耕耘機、自動噴水機、消毒噴霧機などを購入、從來不便を感じていた船舶も買入した。アマゾン河を横斷して對岸マナオス市に野菜を運搬するには、是非船舶は必要である。在伯満十年目にして、第一期基礎時代は完成した。これから十年間が子供等の飛躍時代である。長男肇は聖市で電氣事業の技術工として活動二男恒雄、三男政雄、四男安雄が農場經營、長女和江は聖市で洋裁学校、伯國生れの友子も壮健だ。明治三十七年七月十一日辰年生。

　右は家族（在宅の人々）左は胡椒消毒中の主人と安雄

CHOGO INOUE
R. Monsenhor Coutinho, 762
Manaus E. de Amazonas

アマゾナス州マナウス市
井上正五氏

原籍　熊本縣菊池郡瀬田村
渡伯　昭和二十八年九月　あふりか丸

両親は新潟縣人で、明治三十八年朝鮮に渡り（父勇吉、母ぎん）彼は朝鮮全羅北道金堤郡白鷗亭で生れた。復員後は熊本縣で辛酸をなめた。吉田一憲、辻一家は朝鮮時代の親戚である。生馬の眼を抜く彼の商才は新潟縣人の血をうけ、なんでも儲かる仕事に手をつけるのは、朝鮮生れのコスモポリタンの血が流れ剛情で言いだしたら一歩も退ぞかない不動の魂は、辛酸苦勞をなめた熊本縣氣分を多分にうけている。彼は戰後派移民のトップ級の成功者である。

大正五年に生れたので正五、伯人間でも彼の呼名は井上でなく「正五」で通る。大東亞戰爭には山西省に出兵、轉て滿鉄資源調査團員の先遣隊として、朝鮮白頭山の七合目で終戰、日本に歸還して横濱市で古着屋、蔬菜販賣、儲けて大衆食堂「中木戸」を經營した。その後熊本に轉住、土本建築會社「三共」を經營五ヵ年、辻、吉田一族と共に渡伯した。マナカプル植民地の草分第一回移民、受入態勢がまだ整わず入植者は混乱に陥ちいつた。カカオとマナカプル間道路工事の測量助手となつて大活躍そのうち植民が百家族以上も脱植する始末、彼は入植地の産物は成績悪く、工事請負は駄目、遂に丸裸となつてリオネ・グロの上流コスタ・ペロビア（モートルで六時間）に移轉、土人の中で耕作、黄麻、野菜、バナナ、落花生、玉蜀黍など植えて二ヵ年頑張り、乾燥期の凶作に遭遇して、また裸一貫となり、ラーゴ・デ・レモン地方に入植した。ここは一般人は入植できず、酋長の許可を得て入植し、トマテ三千本を植えた。このトマテが莫大に儲かり、續いて乘るか反るか一万六千本を栽培して、大賭博をやつたのが大當り、巨利を懐にし、この時に子女の教育を考慮、マナオス市に移轉した

野菜卸販賣に手をつけた處、恰度ペトロブラス（國營石油會社）野菜納入者をきめる權利競賣があり、その競争に矢部以下三人の相手を軍門に降し、彼が到頭その權利を獲得し、ここで信用がつき、エビサバ貿易會社の納入權利もころがりこんだ。一九五九年四月出市して河の中の浮屋に住んでいたが、一九六〇年には船着場付の住宅を購入、一九六一年六月には支那人經營の食堂を購入（前田弘治支配人）、一九六三年には公設市場バンカ二つ購入（前田勇男支配人）、一九六四年六月には、アマゾナス劇場前に宏荘華麗な住宅を二万コントスの現金で購入し、同年郊外二十一粁の地点に農場を購入チラピア養魚（武田達視管理人）の試驗中で、出市して五年目であつた。將來純日本式食堂や、スペル・メルカードや、農産物大取引と七面八ピの大活躍で、衰えを知らない飛龍である。俊子夫人は口八丁手八丁の賢夫人、聖母マリアの純情さがある篤学女性の克子、潤子、学問好きで腕白少年の充（みつる）等壮健である。大正五年十一月五日辰年生。

（右）井上氏（左）夫人と三人の子供

TOKIO TOMODA
R. Monsenhor Coutinho, 762
Manaus E. de Amazonas

アマゾナス州マナウス市 ベラ・ビスタ植民地

友田時雄氏

原籍　熊本縣熊本市中島町（舊飽託郡）
渡伯　昭和二十九年八月　あめりか丸

　小事に拘泥しない豪放磊落、春風駘蕩の人物である熊本縣人通弊の酒豪で「飲まんな仕事が出來ぬばつてん」と云つて、悠々と人生を過ごす異色ある拓人だ。長男時廣は滿十五才で渡伯した少年で、日本の学歴は新制中学に学んだだけであるが、渡伯後の向学心と讀書熱とで日本語も上手になりベラ・ビスタ植民地青年會發行の機關誌「緑拓」の編集人である。しかも明朗濶達なスポーツ人で、ベラ・ビスタ野球軍の名選手である。アマゾナス州に初めて地方野球大會を開催、その野球團からチップアップして、マナウス軍を結成、一九六四年には初めて北伯野球大會に出場したが、球團遠征の主唱者でもあつた

　父の勞力を當にせず、農場管理の全責任を引受ける快青年で、母靜野もこの立派な青年を唯一の樂しみにして生活している長女博子（時廣妹）は十七才の輩で、樂しい青春の夢をみずして、マラリア病のため逝去した。末兒の睦子は成人して、近隣の橋口智と一九六四年末に結婚した。結婚前まで母に代つて炊事をしたり、洋裁をしたり、實によく加勢してくれた睦子であつた。婿の橋口智も十七才で父と死別、多くの弟妹をかかえて涙ぐむ母を慰め、今日まで健斗した青年、この若夫婦の結婚は美しい實を結んだと云われ、羨望の限りである。三人の子供のうち、二人の娘は去り、いまは長男時廣の一人息子だけが殘つている。近日良緣を得る。この事で、著者も早く賢夫人を迎える事を期待したい。渡伯の動機は姉西村朝雄夫人（聖州プロミッソン在住）が亞國を經て歸朝し、大南米自由の天地の樂しさを説明し、その將來性ある處で活躍することを奬めたので、遂にアマゾン移民募集に應じ、第一回草分移民としてベラ・ビスタ植民地第二アリアウ區に入植した。

　入植當初、道も小路で河には橋もなく、大雨には遠廻りし、大密林も半焼であり、受入態勢も整わず、二・三日滯在の後に現在の伯人耕地を購入して入植した。入植當初五年間は辛酸苦勞で、野菜を作つて生きていくのみ、一九五九年頃から漸くマナウス市民二十万人の野菜需要が出てきたので、栽培に急ピッチ、雨期の栽培困難なトマテを一万五千本栽培して、毎年巨利を博した。伯人は眞似出來ず、邦人も栽培者少なくて大儲けしそして胡椒二千五百本を植え、永住の決心をした。將來牧場を目論んで四百ヘクタールの土地を購入した。

　彼は舊制中学卒業後、昭和十六年四月出征、二十年終戰まで參戰、觀測無電隊員として壹岐やエイで勤務し、後村役場に勤務した。靜野夫人の弟政太郎も成人し、同農場の隣地で獨立した。大正二年二月二十一日丑年生。（右）友田夫婦と（左）長男時雄、二女睦子、（下）友田政太郎近影

SATORU HASHIGUCHI
R. Monsenhor Coutinho, 762
Manaus E. de Amazonas

アマゾナス州マナウス市ベラ・ビスタ植民地

橋口智氏

原籍　熊本縣荒尾市野原
渡伯　昭和二十九年八月　あめりか丸

ベラ・ビスタ植民地野菜栽培トップ・クラスの三羽烏が、九州組なのも九州男子の意氣を示して偉らいが、また日本で野菜作りをした經驗がない人達ばかりなのも面白い。隣地の金子力太は指物師上りであるが、彼の父安兵衛は石工であつた。戰前は松の實から搾油する製油工場の主任をしていたので、あの大東亞戰爭にも、軍需品製造關係工場勤務で出征しなくてもすんだ。長いこと國家に奉仕する仕事ばかりやつたので、無慾恬淡となり、誰れからも親しまれ、人望はたかまつた父は渡伯後惜しいかな二年目の一九五六年十月十四日胃癌で逝去した。時に年齡四十四才（明治四十五年三月十八日生）の働き盛りであつた。ベラ・ビスタ植民地に入植早々で、將來の見通しはつかず、貧苦にあえいでいた時代で、父の死は悲壯悲慘であつた。もう十年生きて今日まで長生きしてくれたら、どの位幸福な晩年を送ることがで出來ただろうかと、今にして追憶し、父の冥福を祈りながら暮した。

彼は終戰直後は聰明な小学生で野原小学校を卒業、六・三・三制の荒尾第四中学校に通い、渡伯したときは滿十五才であつた。姉和代、弟和正、幸生、幸司の五人で、皆少女、少年、幼年だつたので、兩親は苦勞した。ブラジルに行くときかされ、夢心地でアマゾン大流を遡航ベラ・ビスタ植民地に入植した。草分入植者は熊本組が多く全部で廿九家族一八三人であつた。アグア・フリーア區に入植して、政府が命令したゴム栽培に、一生懸命になつて奉仕した。ここで働いてみている内に、雜收入が少なかつた。フエイジョンも少し、米は一ヘクタール五・六俵、マンジョカ製粉は安價であつた。玉蜀黍も瘦地で、原始林を伐採した年だけで、翌年は實らなかつた。野菜を植えて、對岸ベレーン市で販賣したが、アマゾン大流沿岸でないアグア・フリーア區は、交通不便で、當時は河岸まで週に一回しか貨物自動車が、出荷物を輸送してくれなかつた。ここで河岸に近い處へと思い、一年後に現在の場所に移つた。二年目に父が逝去し、十七才で一家の柱石となり、母あさえを相談相手に獅子奮迅の働きをなした。可弱い少年の軀で、弟達も涙ぐましい程に協力した。母あさえが女の身で、父の死後、二人分の働きをしている健氣な姿をみて、一日も早く母を安心させようと、十代の兄弟四人は美やましい位に仲睦まじく働らいた。あの勞力の乏しい家族が、父の死後八年目に、堂々たる農場に胡椒一千本を植え、貨物運搬自動車・乗用ジープ・生産物運搬船舶・動力ポンプ・發電機・送水管・耕耘機・トラクター等農場を機械化した。大和西瓜栽培の名人で、この方で儲けた。姉和代は伯人アントニオと結婚、日伯親善を地でゆき、彼は貞淑な女性友田時雄二女睦子を娶つた。伯國生れの幸代・ジョージも健在である。昭和十三年十二月十五日寅年生。

寫眞は

TAKESHI FUJITA
R. Monsenhor Coutinho, 762
Manaus E. de Amazonas

アマゾナス州マナウス市 ベラ・ビスタ植民地

藤 田 猛 氏

原籍　富山縣下新川郡宇奈川村
渡伯　昭和七年四月　もんてびでお丸

　著者が常に高拓出身者を尊敬するのは、高拓生に悪人がいない。一般移民だと、他人の仕事を邪魔したり或いは悪口を云つて信用を落させたり、實に怪奇醜悪だ。處が高拓生にはそれがない。しかも先輩・後輩の偏見がなく五・六十才を過ぎても、仲睦まじく、まだ十八・九才の高拓生時代の学生氣分を失なわない。この點トメアスー植民地の空氣と趣を異にしている。敬愛する彼は魚津中学（舊制）を卒業後に高拓に入学、翌年若冠滿十八才で、新妻キクノ夫人と共にビラ・アマゾニアに入植した。

　藤田家は黒部溪谷にある宇奈月村の名家で、農業に就いた事のない坊ちやんで蜜月旅行の夫婦はすぐワイクラツパ植民地に入植荒山の大密林に挑んだ。ここで約七年働らいた。現在森進一郎が住んでいる奥地であつた。ジユート栽培の好景氣で、高台におるのが莫迦々しくなり、イタコチアラの附近で二カ年黄麻栽培、續いてシリア人と共同でソリモンエス河で一寸腰かけ式農業、大戦勃發で、プルスー河口で同級生の本間武四郎・鈴木五郎、ビラ建設の寺田克己・三輪勇、また井川誠・諏訪敏男などと共同で七カ年奮斗した。軈て共同事業を解散し、彼はマナカプル植民地に技術指導員として入植した。當時連邦政府の技師であつた。その後永く奉職している時に一九五三年（昭年二十八年）第一回ジユート移民に續いて、マナカプル植民地移民が渡伯したので、移民會社々長辻小太郎の懇願に從い、マナオス駐在員の高村正壽の勧誘もあつたので入社した。開拓當初地區の割當測量、大密林伐採、山焼、道路開鑿等の困難に當面した。受入準備の悪い處へ入植者殺到で、移民は塗炭の苦をなめた。この慘状を見るに忍びず。正直一途、良心的な彼は一年で辭職した。その混乱期に不幸キクノ夫人が三十七才の若さで逝去した。一九五三年十一月三十日であつた。著者が訪づれたのは、その直後であつたと思う。

　あれから公職を辭して、自己農場經營に專心した。一時はアリアウ區は全部退植し、彼一人だけ殘つたが、よく孤軍奮斗し五十ヘクタールの農場を完成した。長男賢治は聖市アルノ會社に勤務、二男洋太郎は兵役終了後にモートル會社に勤務、三男マリオは不幸一昨年病歿した。長女玲子は東京農大卒の中村彌壽平（名古屋市出身）と結婚し、二女純子は豊田政治夫人、三女マリアは教師、四女グロリア、五女オリンピアも健在、彼も昨年藤本未亡人と再婚した。大正三年七月二十四日寅年生。

　寫真は（右）農場と住宅（左）十年昔しの想い出、女婿中村彌壽平夫妻

TAKEJI NOJI
R. Monsenhor Coutinho, 762
Manaus E. de Amazonas

アマゾナス州マナウス市ベラ・ビスタ植民地

野地竹治氏

原籍　福島縣信夫郡大森村
渡伯　昭和二十八年九月　あふりか丸

人生滿六十五年、その過去は波らん重疊で怪奇に富み、悦びあれば、悲しみあり、怒れる時もあれば、哄笑する時もありで、人間としては円熟し、温厚篤實、生佛みたようで、何事も千代子夫人まかせである。千代子夫人は長男忠雄（二十五才）が家督をついで、家主になるまでは、大責任があると頑張り、一家の財布を握り、耕主の管理もなし、農事研究會など主人の代理として出席する積極進取の女性である。この夫人の采配で野地耕地は繁榮したものと著者は推察する。堅實なる主人と苦勞人の千代子夫人のコンビだから耕地經營はどこまでも地味である。グワラナー二千本、ゴム三千本、コーヒー三千本、胡椒一千五百本の永年作物を主体に野菜栽培で巨利を博し、肥料は自給の養鶏という譯で、奥アマゾン篤農家の一人として推賞したい。

邦人入植者のうち百家族以上が「ベラ・ビスタは駄目だ」と極印して脱耕、大宅壮一も訪づれて「緑の地獄」と叫び、名著「中南米の裏街道を往く」で悪評しているが、その緑の地獄を天國にしたのが、この野地夫婦である。彼こそは外務省から黄授褒章を贈られる資格があると思う。

彼は父甚太郎、母よね両親の二男に生れ、大正九年十九才のとき安洋丸でペルーに渡つた。山嶽地帯のカンナ園パラモンガ耕地に入植、半年で退耕してリマ市に進出、金物商を始め總ゆる商業に従い、二十年の間に堂々たる店舗を構え、千代子夫人と樂しい人生を過ごしていた。處が突然不幸の嵐が吹いてきた一九四一年日米戰爭勃發、翌年二月ペルー國はメキシコ、ブラジルと共に對日宣戰布告、それからペルー政府は在留邦人を彈壓した。在留邦人成功者を全部逮捕し北米に護送した。その一人に彼もいた。四年間の戰時中に加州シヤパク收容所、カナダ國境ミゾナモンタナ州收容所、ケネビー收容所、テキサス州キリスタス收容所と轉々し、ここで家族をペルーから呼寄せた。二（男末子）秀雄はこの收容所で生れた。終戰で日本に還り七年目にアマゾン移住の話が出たので、大南米の地が懐かしくなり、特にペルーの國境アンデス山の東側のアマゾンときいて、すぐ應募ベラ・ビスタ植民地に入植した。入植地のアリアウ區に着いたが、未だ道路も完成されていなかつたので、アグア・フリアの現地に入植して、今日まで血の涙の出るような辛酸苦勞に堪えた。その奮斗振りには著者も感激した。十年前に大宅壯一が訪づれた、著者も訪問した事があつた。今日は昔の面影なく、あの陰慘な開拓地は美麗な花園と急變し、滿十年間の苦勞に惠みが現われた。長女久子は同航の渡邊進と結婚、隣地に住み、二女節子は結婚して不幸一九六一年逝去、三女光子は渡邊正雄と結婚し野地農場建設に協力している。長男忠雄がペルー生れの最後であるが、二男秀雄も健在だ。切に野地家の發展を祈る。明治三十三年一月七日子年生。

アマゾナス州マナウス市ベラ・ビスタ植民地

矢野健一氏

KEN-ICHI YANO
R. Monsenhor Coutinho, 762
Manaus E. de Amazonas

原籍　熊本縣菊池郡大津町
渡伯　昭和廿九年九月　ぶらじる丸

　彼はマナカプル植民地第三次入植者で同航者は三〇家族であつたが、その中で二十九家族は脱耕し、最後まで踏みとどまつたのは、彼一家族であつた。最初入植したアリアウ區は、彼が入植した時は、まだ河も車の通れる橋もなく、歩いて遠廻りし、河を渡つた。荒山も充分焼けず、交通不便、どん〳〵脱耕していくので、彼も心細くなつた。大密林に一軒ぽつりでは心淋しく、それに不要心でもあつた。そこで敏感な彼は、營農資金を投下しない間に、クワルテロン區の伯人オリベーラの耕地を購入して移轉した。幸いこの近隣に、奥アマゾン切つての篤農家辻一族と、吉田一族がいたので、大いに刺激となり遂に最後の勝利を得た。あれから滿十年は過ぎだ。「静かに行く者は千里の道もきわむ」と格言にある通り、一攫千金を夢みらず、他人の成功を羨望せず、專ら自己能力の限界でコツ〳〵と進んでいつた。その堅實の結果は、胡椒二千本、コーヒー三千本、ゴム樹千七百本、グワラナー一千五百本に及んだ。單一農の危險を愼み、多角農に生きたのがよかつた。特にグワラナーは舊地帶のマウエスが衰微したので、全アマゾン地域で、彼等の住むマナカプルの特産物になつた。そしてコーヒーもアマゾナス州では栽培者が少ない。熱帶地方で栽培がむづかしく誰も植えたがらない。そのため巨利を博した。ゴムも軈て生産期に移つた。

　彼は父たけし、母さえ兩親の長男に生れた。農林学校を卒業昭和十一年に朝鮮鉄道（後に滿鉄合併）に勤務した。大東亞戰爭には國家の義務として奉公、フイリツピン島激戰に參加、ルソン島の山嶽地帶で九死に一生を得て終戰となつた。大体海外に進出の意氣軒昂な人物だつたので、終戰の混乱社會を見て、一日も早く廣々した自由の天地で活躍したいものだと思つている處へ、ブラジル移民再開の聲をきき、これ幸いと、卒先して應募、マナカプル植民地に入植した。入植早々連邦政府も植民地開拓の設備が整わず、しかも移民會社も終戰後で建設の知識に乏しかつた。最も不幸だつたことは、適作物の撰定が不確實で營農の順序を誤まつたので、入植者は皆生活に困り、ベレーン近郊に退散した。十年後の今日、アリアウ區に入植した長崎縣移民は、入植二年目から安心して生計が保たているが、これに比較すれば當時は、雲泥の差であつた。當時大宅壯一が訪づれ「緑の地獄」と罵倒したが、それに近かつたと云える。

　彼は今日住宅も新築、ガス・フオゴン、冷藏庫、自家發電の電力、貨物自動車、トラクター等農場の設備も完了し。第二農場も完成した。長男信幸（陸子夫人死亡）は孫信一郎・廣美・裕次が生れ、長女靖子は日本から父の薦めで渡伯した大岩邦夫と結婚し、孫惠子が生れた。葉子夫人は謙譲美德たかき賢夫人で才色兼備とはこの夫人の事か。この夫人によつて矢野家は發發してゆく。大正三年三月二十五日寅年生。三夫婦揃つた記念

KAZUNORI YOSHIDA
R. Monsenhor Coutinho, 762
Manaus E. de Amazonas

アマゾナス州マナウス市 ベラ・ビスタ植民地

吉田一憲氏

原籍　熊本縣阿蘇郡阿蘇町赤水
渡伯　昭和廿八年九月　あふりか丸

親戚の井上正五が、ぐん／＼事業を擴張しているのに對抗、決して遜色のない事業家である。井上は才氣に走り、強引に事業を引張つて行くきらいがあるが、彼は順風について後から從い自然の理に逆らわない。事業の完成は遅れるかも知れないが、安全であり金城湯池である。父喜一母繁代兩親の長男で朝鮮生れであつた。父は兵役終了後東京警視廳警察官吏だつたが、朝鮮に廻され、朝鮮駐在中官を辭して大正九年三菱砂金鑛山ＫＫに入社した。彼は朝鮮農林学校（舊制）卒業後に原蠶種製造所に勤務し、大戰終了で、父喜一時代からの地位と財産一切を棒にふり、涙を呑んで着のみ着のままで日本に引揚げた。幸い熊本縣農事改良普及員に採用され勤務した。アマゾン移住の話をきき、率先して渡伯した。猫額大の日本山間生活がいやで、戰後の思想惡化、道徳の廢頽にあきあきした。一度溝外に出た者は日本に住めないのが當然だつた

マナカプル植民地クワルテロン區に入植し、到頭この地から一歩も退かず、今日まで健在である。頑張る事に於いては、父喜一、母繁代は彼以上で「マナカプルにに住めない」と云う退耕者の言葉を馬耳東風に吹き流し、默々と莫迦になつたつもりで營農にはげんだ。今日は三耕地（一憲・眞悟・克毅三人）を所有、ゴム五千本、グワラナー四千本、胡椒千二百本を栽培している。特にグワラナーは當地方の特産物で、四十年昔の特產地マウエスが衰微したので新興グワラナーの產地として有名になり、吉田父子のその功績は大きい。一九五八年、卽ち渡伯五年目には、農耕地を全部弟等に譲つて、自からソリモンエス大河に進出、沿岸に間口百米の農場を購入、ここで蔬菜栽培を始め、ぐん／＼儲けたので、對岸パシエエンシア島にも最良の耕地を購入した。軈て農產物仲買業にも挺身、發動汽船を操縱して大江を走り、この方面で巨利を拍し、一九六三年度マナカルプル湖（琵琶湖の十倍）沿岸に幅二粁、大面積數千ヘクタールを購入した。將來畜產と果樹を目的に、また有用材植林と魚粉肥料工場の經營など、その目的は大きい。二十七才で渡伯した彼も滿三十九才、最近男子出生で世嗣が出來て、勇氣百倍だ。兩親健在、弟憲二（在東京）弟英三（在熊本）弟眞悟（二十七才）妹育代、弟克毅、妹宏子等壯健である。百香夫人は廣量廣潤の教養ある婦人である。彼の今日あるは夫人内助の賜だと賞したい。大正十五年二月十七日寅年生。（右）一憲夫妻と子供（左）男子出生によろこぶ百香夫人（下）父母を中心に弟妹

両親や弟達は、日本の生活がいやになつた。勿論海外から派遣兵や、在留同胞が五百万人も歸還復員したのであるから、食糧難は當然であつた。道徳も廢頽、思想は悪化、その時にブラジル移民の再開となり、これ幸とばかり應募、アマゾン移民の草分としてベラ・ビスタ植民地に入植した。この時は兄福重は公職を手離せず、両親、弟達全部が渡伯した。入植地はクワテロン入口のカカオ・ペレーラやアグア・フリーア區からみれば交通不便な山奥であつた。山坂が外く、それが又屈折仕過ぎて、その上雨期には泥沼がひどく、交通は途絶した。短期作物を植えても、マンジョカ以外は駄目、米も二年度から収穫は少なかつた。永住の決心だつたので、バナナ、パイナブル、パパイヤなど植え金になる物はなんでも栽えた。

兄福重氏家庭

百四十家族入植して、百家族が退植して逃亡した。ベラ・ビスタ區では一ヘクタール籾一二俵しか収穫がなかつた。ゴムは十年先でないと金にならなかつた。この非常時の混乱時代に二年おくれて兄福重が渡伯して入した。兄福重は東拓時代に農場經營や、集團植民地を手かけていたので、渡伯早々すぐベレーン近郊を視察した本心はベレーン近郊に移轉したかつたからだ。然し視察後感ずる處あつて移動を中止し、その翌年長男一夫を胡椒栽培研究のためトメアスーに赴任させ、苗八百本を持參して來た。この苗木が奥アマゾン胡椒栽培の嚆矢であつた。幸に早く胡椒培裁に目覺めたので彼は巨利を博し、ここで弟達も胡椒を栽えた。ゴム三千本、コーヒー一千本の他胡椒二千二百本栽え、既にトラクターもあり農場主になつた。貞節のせき子夫人の間に二男二女、長男一夫は熊本工業高校機械科出身で、聖市オックスワーゲン自動車會社技術職員で、いく夫人は南銀頭取安瀬盛次媒酌の女性である。二男竹彥は農場支配人、長女陸子は矢野健一長男信一郎と結婚したが、不幸急逝、二女敬子は聖市南米銀行に勤務している。

弟正義はベラ・ビスタ植民地更生幹部の一人で農場にはゴム四千本、グワラナ二千本、胡椒千八百本を植え内助の功多い澄子夫人との間に佳治、斗子（ヨリ子）閑登（シズト）美鈴（ミスス）が健在、末弟信義も一九五七年獨立、辻一族の繁榮を祈る。福重氏—明治四十三年十一月三日生。正義氏—大正十三年十月一日生。信義氏—昭和四年生。

福重氏長男一夫君家庭

アマゾナス州マナウス市ベラ・ビスタ植民地

辻　福重氏
辻　正義氏

FUKUSHIGE TSUJI
MASAYOSHI TSUJI
R. Monsenhor Coutinho, 762
Manaus E. de Amazonas

原籍　熊本縣菊池郡大津村
渡伯　福重氏昭和三十年十月　あめりか丸
　　　正義氏昭和二十八年九月あふりか丸

辻兄弟の両親は、夫婦揃つて八十才以上だが、未だ畠に出て胡椒の實をちぎるし、時には艶ぽい話しにも耳を傾ける若々しさがあり、全アマゾン長壽者として、總領事館は表彰すべできある。父円次は明治十二年六月十二日、母みつえは明治十六年六月九日で、夫婦の年を合算すると百六十八才になり、お目出度い両親である。

両親が朝鮮に渡つたのは明治四十四年で彼が満一才の時であつた。水田專門の目的で全羅北道金堤郡であつた。當時朝鮮は水田に乏しく、全農民は粗食に甘じていた。彼等はここで成長した。兄福重は官立裡里農林学校創立に際し、第一回の入学生で、弟正義も同校卒業生であつた。彼は同校を卒業するや水原高等農林学校（旧制）に入学し、軈て卒業した。水原高農は日本の盛岡高農（旧制）鹿児島高農（旧制）と等しく、朝鮮農業關係学校の最高府で、ここを卒業すると各地の農林学校教諭となり軈て校長となつた。彼は型の如く同校卒業後に、母校裡里農林学校の教諭となつたが、昭和十二年九月東洋拓殖KKに招聘され入社した。東拓は日韓合併で、李王所有の土地全部を接收し、全鮮の開拓を引受け、水田經營に乗出し、全朝鮮の二割の土地を所有していた。ここで出世して高級社員となつた。當時の東拓社員の羽振は物凄いものであつた。大東亜戰勃發で朝鮮から出征、比島上陸作戰、佛印侵入、ジャバ島、ニユ一・ギニア島、チモ一ル島の各激戰に參加した。特にゼラム島では二万八千の守備隊が、食糧缺乏し椰子樹の葉で露命をつなぎ、体重三十九瓩まで痩せ、營養失調になつた。最後にアンモン島に渡航中敵潜水艦にやられ九死に一生を得てアンモン島で終戰を迎えた。

両親や弟達は、日本に歸還して農に就いたが、彼は一年後に漸く日本に復員した。南太平洋は各地に非戰斗員が多かつたのでおくれた。歸鄕した處、大津町外十一ヵ町村の共有財産林業技術員となり、その方の收入役をつとめた。

朝鮮で豪勢な生活をし三十五年間の汗と膏の結晶を失つた。

両親と弟正義家庭

ロンドニア直轄州ポルト・ベーリヨ市
トレーゼ・デ・セツテンブロ植民地

田邊信造氏

NOBUZO TANABE
Caixa 154 — Porto Velho
T.F. de Rondonia

原籍　鹿児島肝付郡内之浦町
渡伯　昭和二十九年七月　あふりか丸

著者と同郷で、胸襟を開いて鹿児島辯で語る開拓者である。彼は郷里の小学校卒業後、長崎造船所に勤務、軈て滿鉄に轉勤、そして現役兵として服役中に、大東亞戰爭勃發、そのまま出征し、南太平洋で活躍、南方チモール島で終戰、一命を拾つて復員した。大アマゾン開發の美名に魅惑され、アマゾン奥地連邦植民地の草分開拓者として、日本人の誇をもつて三〇家族が入植した。處が政府命令のゴム栽培一家族五千本の内、初年度二千五百本植えて二年度早くも銀行融資がなく植付中止、初年度植えたゴムも接木が不良で駄目、毎年秋になると枯野に野火が入りその火か植民地を襲いパイナツプル・珈琲・バナナも焼けそのうち酷い者は住宅までも焼けた。到頭營農資金が政府から出なくなり、金のある者は退植、ない者は自給自足の態勢で、貧乏のどん底に立入つた。野菜を擔いでその悪路を片道四時間もかかつて賣りに出た事業を擴張したくも資金がなく申込んだ。移住金融邦人團体からは「本社は救済事業團体でないから」と丸で棄民扱いだし總領事館も知らぬ平兵衛でいた。その無責任な態度に「人權問題」だと憤慨したのが大藏省相澤事務官、すぐ貨物自動車一台と精米所を設置せよと進言、ここで移民會社海協連も漸く救済の手をのべた。海協連の無責任さもひどいが、もし相澤の進言が一年遅れたら、この植民者は流浪の旅に四散するところであつた。一九六一年運搬自動車が手に入つて植民者は悦び、ここで野菜栽培に力を入れた。邦人以外に野菜を作りきれないので、これからが邦人の獨舞台、物凄く儲けて、同年養鶏を始めた。彼も同植民地随一の篤農家到頭夫婦して頑張りゴム樹六千本・胡椒一千本・コーヒー二千本、パイナツプル三千株、そして養鶏一千羽、その間に米作と野菜に力を注いでいる。發動機耕耘機トラクターなど機械も揃つた。農事試驗場のように農場は奇麗で模範的である。働くことのみが趣味で、理想は多角農の大農場建設だとの事であるが第一期十年目でそれが完成された。基礎が出來今後十年間が造作の飛躍時代である。日本生れの俊介・由紀子・えり子、伯國生れのマルガリーダ・信治・リカの二男四女も健在だ。涙ぐましい程盡したみち子夫人の努力を賞したい。大正九年三月二十七日申年生。寫眞は（上）珈琲園（下）ゴム園

TOSHIJI TOYODA
R. Monsenhor Coutinho, 762
Manaus — Amazonas

アマゾナス州マナウス市ソロモンエス大江

豊田敏次氏

原籍　熊本縣下益城郡豊野村
渡伯　昭和二十九年七月　あふりか丸

いまマナウス近郊トマテ作りで何時も當てこんでいるのは、リオ・ネグロ（黒河）の生田務（熊本縣人）かソロモンエス河の豊田敏次かと云われる。毎回敏次耕地五千本、弟正治耕地五千本、對岸の借地五千本、合計一万五千本が定時出荷されるので、實收に於いては、他の追隨を許さないしかもその上に甘藍を毎回二万株植えているのでこれも莫迦に出來ない。マナウス市から奥一千五百粁のマディラ支流にある邦人集團地「トレーゼー・デ・セッテンブロ植民地から、僅かの資金を持參して、マナウス市に出てきたのは一九六一年であつた。そして吉田一憲耕地の近くで借地生活二年、栽えたトマテが高値に當り、奥地生活八年間の收入の二倍も儲け、そこで土地を購入して、豊田耕埋を建設、それから一作づつ儲ける度に、耕耘機・電力發動機・送水管・住宅新築とマナウス市郊外の邦人先輩が嫉妬する位に、目茶苦茶に大金を懐に入れ、一九六三年九月には到頭生產物運搬の船舶まで購入した

「もつと早くマナウス市に出てくればよかつたと彼は思つたが、どつこいそうは問屋が許さないマナウス市民が「野菜は美味しい」といつてトマテを始め、甘藍、茄子、人參、胡瓜、大根、白ネギ等を好むようになつたのは、ここ五・六年前からである。この遅れて入植したのが反つて刺激になり、先輩入植者への對抗發奮劑となつてよかつた。そして吉田一憲がソリモンエス河畔で儲けていたので、その附近に農場を借地したのもよかつた。弟正治も既に獨立し農場を經營ベラ・ビスタ植民地の先輩藤田猛二女政子を娶つた。人間の運命なんて云うものは金がころがりこんでくる時は、勞せずして儲かると大成功者が云つたが、どうもこれが本當のような氣がした。旧入植地では今の五倍も十倍も辛酸苦勞をなめて、尙かつ儲からなかつた。野菜を擔いで植民地から十三キロの道を步るいた。雨の降る日は悪路が泥沼と化し、片路四時間もかかつた。だから早朝午前一時家を出ないとボルト・ベーリョ市の野菜市場に着くのが遅れた。噫々あの當時の事を追懷すると涙が出てくる。資金欠乏で移住振興KKに申込んだら「棄民には貸されない。本社は救濟事業團ではないから」と拒絶された。今は本當に幸福で長女和子、長男敬徳、二男アルイズ、長女エレーナも成長した。惠美子夫人の健斗を賞したい。父源藏母わき（兩親故人）の二男である。昭和三年五月三十日辰年生

（上）兄敏次家族、（下）弟正治家族

JUGORO HATTORI
Caixa 154 — Porto Velho
T.F. de Rondonia

ロンドニア直轄州ポルト・ベーリヨ市
トレーゼ・デ・セツテンブロ植民地

服部重五郎氏

原籍　東京都足立區大谷田町
渡伯　昭和二十九年七月　あふりか丸

あの山奥の植民地で閑があれば新刊雜誌や書籍に眼を通し、ラジオに耳を傾けて、世界政治經濟の事情をききとるという熱心さ、彼の生活から文化を切り離すことは出來ないだろう。貧に處して常に理想だけは棄てない精神生活は明るい。

ブラジルに渡航するときあふりか丸にアマゾン移民が六十八家族いた。トレーゼー植民地組三十家族・モンテ植民地二十家族、マナカプル植民地七家族ベレーン近郊一家族であつた。このアマゾン組だけで、アマゾン移住者連合會を結成しその時に事務長を引受けたのが彼であつた。植民地に入植して産業組合が組織された。初代栗山、次代須藤につづいて三代目が彼で、そして四代、五代と三年間連續に理事長に就任した。たね夫人も婦人會長に、三カ年就任し、インテリ家庭として知られている。

農場の方はゴム二千本、胡椒三百五十本、養鶏三百羽であるが主力はトマテ栽培と野菜である。毎回かかさずトマテ栽培で實收入をあげている、長男英生が伯國農学校を修学したから、農場管理は殆んど彼にまかしきりである。二男元も兄に協力しているからもう後顧の憂がない。然し今日まで滿十年間をよく耐えてきたものだと思う。立派な植民地を築こうと血盟した同志三十家族のうち高木正敏・畑原勝・畑原健夫・武田要一・木田一男・豊田敏次・橋本一男等はベレーン市に移轉、北川利一吉野嘉一は聖市、大泉、池田は麻州ドラードそして田中・高橋光雄・須藤正・笹原管夫の諸君がベレーン市に移轉した。一九六〇年海協連から貨物運搬自動車や精米所設備がなされなかつたら、彼等は殆んど四散し、トレーゼ植民地は廢墟となつていただろう。一九五四年入植し、一九五九年までの最初の五ヵ年間の辛酸苦勞は筆舌に盡しがたく、あの大密林伐採、やがて開拓資金欠乏、自給自足の悲境、悪道路を押して生産品運搬、永年作物見通の不安、毎年山火事の災難等總ゆる悲惨な悪條件ばかりであつた。滿鉄で我世の春を謳歌した彼が、よくこれに耐えて踏みとどまつた事は激賞したい。

彼は昭和二年学窓を巣立つや、運輸省に勤め、官吏のスタートを切り、昭和十年任官、翌昭和十一年滿鉄鉄道輸送局に入社した。滿州國の誕生で、滿鉄は産業の實權を握つて權力は絶對的、しかも滿鉄出身の山本條太郎・松岡洋右は政界・財界の大御所となり活躍、彼も全盛時代であつた。二十年敗戰で日本に歸還、參議院運輸委員會事務局に勤務した。そして百八十度の轉廻を試み、アマゾン移住に決心した。長女喜興美は近隣の黒田重人夫人、二女悠子は 葡文タイプライター学校 卒業生、英生、元、容人も健在、たね夫人の弟村山惟元も、移住事業團を退き、マナウス植民地で獨立した。切に今後の發展を祈る。明治四十二年六月十五日酉年生。

寫真はインテリ服部家の人々

MASSAO NAGAOKA
TOSHIO SASAHARA
Caixa 123 — Porto Velho
T.F. de Rondonia

ロンドニア直轄州ポルト・ベリヨ市
トレーゼ・デ・セツテンブロ植民地

兄 長岡正雄氏
弟 笹原俊雄氏

原籍 山形縣山形市香澄町横町南
渡伯 昭和二十九年七月 あふりか丸

兄正雄は温厚篤實、質實剛健、弟俊雄は豪放磊落、春風駘蕩の型で大事業を經營するには恰度釣合がとれていい。大型トラクター一台、中型トラクター二台を驅つて、三十ヘクタールの米作地を耕作し、一ヘクタールから八十俵の米を收穫毎年一千八百俵内外の生産をあげている。トマテは一作五千本二回連續に栽培、柑橘はタンジリーナ種で、成樹二百本を植えて既に生産期になつた。トレゼー植民地で、短期作物栽培のナンバーーワンである。米作の機械が全部揃つたので、將來米作適地を求むれば五十、百ククタールと増やしてゆくし現在の農場を全部永年作物の果樹植林の大農場に變貌していくつもりであると云う。トメアスー植民地でも山形縣人がトツプを切り、農協理事長、專務、常務、それに日本人會長と、四つの重席を占めているが、この植民地でも事業の規模に於いて、彼等兄弟が斷然トツプにたつているのは頼もしい。

こんな大きな事業をしているのだが、五・六年前は逆境であつた。昭和二十九年の草分開拓者であるが、不遇だつたのは、ゴム栽培の試驗移民モルモツトであつたからだ。入植した時に一家族五千本を義務として、初年度二千五百本植えた。翌年はもう政府の金が缺乏し、融資は駄目になり、資金難で中止、植えたゴム樹も接木が駄目で廢樹、植民地計画が駄目になり、自給自足と變り、野菜栽培かマンジョカ粉製造で露命をつながなくてはならず、これからが眞剣、本當に命がけの開拓生活であつた。海協連も移民を入れ放して知らぬ顔、移住金融團も「救濟事業團でないから、回収の見込がない植民者には金は貸されない」と無情の態度、そこえ毎年野火が植民地を襲い、栽培したゴム樹、カカオ、バナナ等を焼きつくし、中には家屋まで焼かれた者もいた。悲惨この上なく、大成功者の彼でさえ當時は十五キロの遠路を、胡瓜を擔いで首都に賣りに行つた。大藏省相澤事務官の視察によつて人道問題だと救濟の手がのべられ、一九六〇年漸く貨物運搬自動車や精米所の設備をしてくれた。それで植民地は更生されたが、彼は二年目からゴム樹栽培を止め、獨特な方針で、米作に力を入れたので、他の家族と違つて急速な發展をとげ、一九六〇年、一九六二年と二度大型トラクターを購入農閑期に道路修理や電柱運搬までやり、政府の仕事を請負つたのが當つた。物凄く儲つて獨占舞台に入り今日を礎いた。兄正雄は百合子夫人の間に静子、マリ、清、早百合、博、弟俊雄は京子夫人との間に啓以、オリンピオ、かおる、まゆみ、すみえ等で、母かね、弟文雄も健在、妹ふくは聖市で美容師、弟管夫（すなお）はベレーン總領事館に勤務している。兄正雄ー昭和二年十二月七日生。弟俊雄ー昭和五年七月二十四日生。（右）トラクターと俊雄氏（左）蜜柑園と正雄氏

アクレ州リオ・ブランコ市キナリー植民地

西澤正司氏

SHOJI NISHIZAWA
Caixa 14 — Rio Branco
E. de Acre

原籍　長崎縣北松浦郡生月町
渡伯　昭和三十四年五月　あふりか丸

彼はいつも日本人として決して辱かしくない態度をとり、また故郷長崎縣人として、縣民の恥になるようにしたくないと念願している。立石耕主と常に行動を共にしている郷土愛の強い拓人である。渡伯六年目に、自己の耕地一つ、長男正一耕地一つ、二男廣耕地一つと、既に全耕地五十ヘクタールを所有している。即ち正一所有は岩中耕地を買收、廣耕地は大水耕地を購入したもので、將來は牧場經營に移るつもりである。儲けては耕地を増やし儲けては土地を擴張と云う風に、ぐん〱伸びている。既に珈琲四千本（精撰コーヒー一俵六十コントス）ゴム樹五千本（内四千本は成樹）の永年作物の他に短期作物は、米百五十俵（一俵十五コントス）マンジョカ粉二百俵、パイナップル二千株（一個三〇クルゼイロス）落花生二千瓩（一瓩千クルゼイロス）であるが、ゴム樹が成木となり、一本で二瓩出産すると（一瓩千クルゼイロ）一万コントス、珈琲は成樹になり精選百俵出ると、六千コントスとなり、それだけでも年收一万六千コントスとなり、米、マンジョカ粉、落花生、パイナップルなど雜作をあげて二万五千コントスの增收となる。ここ五・六年したら堂々たる大農場主になれる譯だ。

農業で一番危險なのは、野菜栽培、それから短期作物の穀類その次が永年作物の果樹、一番安全なのは牧畜と有用植林、しかし植林は日本も同じで、三十年かからねば成木にならん。牧畜の牛など三・四年で賣却できる。邦人で五・六千頭も持つている者も、ここ二十年前は二・三十頭しか持つていなかつた者ばかりである。彼も是非牧畜方面に進出し、ボリビアとの國境アクレ州に長崎縣人西澤ありの名聲を全伯にあげてもらいたい

隣地の立石忠治と共に彼の健在なのは、同胞として悦れしい。第一次入植者、第二次入植者の多くが移轉したが、同郷人立石忠治と共に彼等は最後まで頑張り通している。父三男は健在母は彼が二十五才のとき逝去した。いち夫人が炊事一切の他、耕地の管理まで手助するので、彼も大助りである。妹しみよも協力している。長男正一、二男廣、長女光代、三男ルイス・アフオンソ、一家皆健在である。マナオス市の對岸ベラ・ビスタ植民地に一九六二年長崎縣炭鉱離職者が入植したが、皆順調に儲かつている。ベレーン市郊外には長崎縣人三宅一族、永田一族が發展し、大アマゾ各地で長崎縣人ば肩身が擴い。今後大きく飛躍してもらいたい。大正十五年二月二日寅年生。

（右）妹（左）正司氏一家（下）父上

アクレ州リオ・ブランコ市チナリ植民地

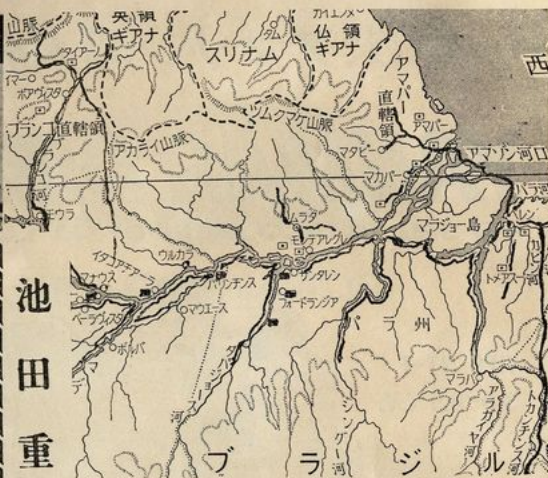
立石忠治氏

CHUJI TATEISHI
Caixa 14 — Rio Branco
E. de Acre

原籍　長崎縣北松浦郡生月町堺目
渡伯　昭和三十四年六月　あふりか丸

アクレ州はアマゾン河の涯で、ボリビアの國境に位しているので、在伯邦人の總べてがアクレ州と云うと身震がする。彼等も入植するとき、ベレーン市からマナウス市まで二十日マナウスからガイオーラ船に乘換、プルスー河の中流ラブレア市で河蒸汽船に乘換、ボッカ・デ・アクレまで三十日そしてまた小舟にのりかえ、リオ・ブランコ市まで三日かかつたと云うから大變だ。この連邦植民地は稀にみる豐饒肥沃な土地で、入植早々豐作と高値で毎年巨利を拍し、在伯六年目に珈琲五千本（一延一〇〇〇クルゼイロ）ゴム樹五千本の永年作物を植え、米百五十俵（一俵十五コントス）マンジョカ粉二百俵、パイナップル二千株（一個三〇〇クルゼイロ）落花生二千キロ（一瓩千クルゼイロ）等の營農振りである。コーヒーが全部成樹になると五百俵ぐらい生産しゴムが生産期に入ると一年に何百万円も懐に入り、物凄い財産家になる。あんな交通不便な處と、皆に恐れられたが、農産物は飛行機で、ボリビヤ國や、ペルー國に販賣されるから高値を呼び、南部サンパウロ州の人々が想像も出來ないほど、案外純益は多い。ただ子供の教育が少し不便であつただけだ。然しもうその心配もなくなつた。農場内にある自然成木カスタニア（パラー栗）も、自然と收入になり、ボタモチ式に儲かるし、軈て牧場を作り乳牛飼育に進もうとしている。奥アマゾンの伯人は農業は未熟高級野菜は獨舞台、然し彼は野菜の方は全然見向もせず、珈琲・米・玉蜀黍・落花生・フェジョン豆、パイナップル、マンジョカ粉等に力を注いで收益莫大だ。みや子夫人の協力も賞したいが、長男敬治（二十一才）が、既に父に代つて耕地の經營をなしているので彼は安心だ。伯語も流暢である。長女秀子、二女一子も農事に加勢している。

彼は十六才のとき父が五十二才で逝去し、姉三人、妹三人の間で苦斗した。島で生れて山岳地帯の畠七・八段を耕作し、青年時代から辛酸をなめたので、この平坦地で仕事の仕安い農地では樂である。新住宅には冷藤庫とガス・コンロもあり、文化生活に浴している。在伯六年でこの立派な農場をつくつた事を激賞したい。明治四十一年八月二十一日申年生。

（上）珈琲園とパイナップル（下）一九五九年渡伯記念

これこそ赤裸々なアマゾンの姿だ

在伯三十余年の著者が、裏から覗いたアマゾン生活祕話の數々を、包み隱さず紙上に

…目次の一部…

読み始めたら面白くて読み終るまで一氣だ

池田重二著

エログロ・怪奇・金儲・歡喜・悲哀

裏から覗いた 大アマゾン放浪記

日本で近刊

⦿**アマゾン關係の邦文書**（註ブラジル紹介書でアマゾンを一部分として紹介したものは多いが専門書は少ない）

野田良治著	『大アマゾニア』	博文館
野田良治著	『南米の核心に奮斗する同胞を訪ねて』	博文館
多田文男編	『アマゾンの自然と社會』	東大出版會
泉・齋藤著	『アマゾン』	古今書院
藤井卓治著	『世界の寶庫アマゾン』	日地出版KK
杉山吉良著	『裸族ガビオン』	光文社
小林太二著	『祕境インジオ王國』	三笠書房
山田義雄著	『アマゾン暮し三十年』	東都書房
神屋信一著	『百姓の書いたブラジル動物記』	文藝春秋新社
高橋有現著	『大アマゾンとその開發策』	北海道庁
田原春次著	『アマゾン移住と開發』	アマゾン會
生島重一著	『アマゾン叢書全五卷』	
産業組合編	『トメアスー産業組合三十年史』	産業組合
神田錬藏著	『アマゾン河』	中央公論社
實吉達郎著	『アマゾン動物記』	双葉新書

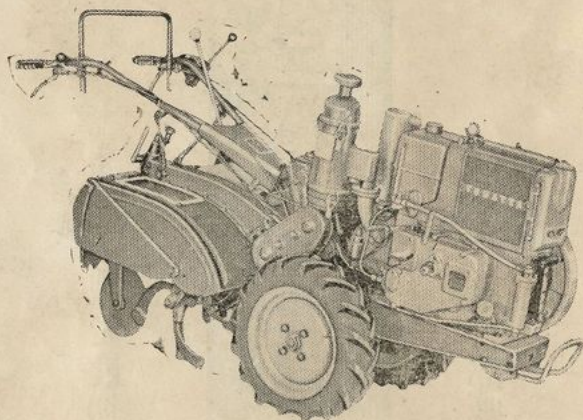
⦿**アマゾン關係の葡文參考書籍**

葡文原書は約二百冊位あるうちから二十七冊を抜いてみた。最後の書籍二十七番目はベレーン市パラー大学編纂（一九六三年度版）でアマゾン研究者必讀の好書であるから一讀をすすめる

1) **ARTUR VIANA** — As epidemias no Pará. O Pará em 1900.
2) **ARTUR CEZAR PEREIRA REIS** — Síntese da História do Pará, História do Amazonas.
3) **ALFRED R. WALLAGE** — Viagens pelo Amazonas e Rio Negro.
4) **ANTÔNIO R. DE ALMEIDA** — O Bispado do Pará
5) **ALBERTO G. RAMOS** (Dom) — Cronologia eclesiática da Amazônia.
6) **ANTÔNIO DE A. LUSTOSA** — (Dom) — Dom Macedo Costa — Bispo do Pará.
7) **ANTONIO JOSÉ DE LEMOS** — O município de Belém
8) **ARAUJO LIMA** — Amazônia, a terra e o homem.
9) **BARÃO DE MARAJÓ** — As regiões Amazônicas.
10) **DOMINGOS ANTONIO RAIOL** — História colonial do Pará. Motins políticos.
11) **ERNESTO CRUZ** — O Pará dos séculos 17 e 18. Procissão dos séculos.
12) **HENRIQUE SANTA ROSA** — História do Rio Amazonas.
13) **H. W. BATES** — O naturalista no rio Amazonas.
14) **J. LUCIO D'AZEVEDO** — Os jesuitas no Grão Pará.
15) **MALHEIROS DIAS** — A Colonização — História da colonização portuguêsa no Brasil 3.º volume.
16) **PALMA MUNIZ** — O Estado do Grão — Imigração e colonização — História e Estatística — 1616–1916.
17) **PENA DE CARVALHO** — Evolução da medicina no Pará.
18) **RAIMUNDO C. ALVES DA CUNHA** — Pequena coreografia da Provincia do Pará. Paraenses ilustres.
19) **RICARDO ROCHA** — (padre) — Jesuitas e a civilização no no Brasil.
20) **SANTA NERY** — (Barão) — Biblioteca cientifica sôbre o Amazonas — O Estado do Pará em 1900.
21) **TEODORO BRAGA** — História do Pará — Resumo didático.
22) **WILSON DE CARVALHO** — flashes de Amazônia.
23) **LEANDRE TOCANTINS** — Amazonia — Natureza, homem e tempo.
24) **LEANDRE TOCANTINS** — Formação história de Acrê.
25) **COSME FERREIRA FILHO** — Amazônia em Nova Dimensões
26) **DIONISIO JOÃO HAGE** — História do Pará:
27) **ERNESTO CRUZ** — História do Pará (Coleção Amazonia)

「アマゾン邦人發展史」
一九六五年五月二十日印刷
一九六五年五月三十日發行
著者　池田重二
印刷所　サンパウロ新聞社
サンパウロ市トマース・デ・リーマ街二六三
電話　三三・六〇七五　郵函二一七六

祝　大アマゾン邦人発展

MICRO TRATOR

トバタで農業の機械化

日本の農業が機械化と頭を使つた新しい農法で大きい進歩と發展を示したようにブラジルの農業も今大きな轉換期に來ております。

あなたも、時代遲れしないように、そして豊かな暮しを築くために、思いきつてトバタ耕うん機で機械化しましよう。

トバタ耕うん機は今正に時代の脚光をあびて農業近代化の重要なる一翼を擔い急速な普及を見つつあります

マルキユウ農業機械有限會社

久保田鉄工株式會社の伯國會社

Rua Itapura de Miranda, 71 — Fones: 34-2122 e 35-6947 — São Paulo